

林中原Ⅱ遺跡(3)

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第63集

2019

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

林中原Ⅱ遺跡(3)

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第63集

2019

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

八ッ場ダムは、首都圏の利水および治水を目的として計画され、吾妻郡長野原町を中心に工事が進められています。

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、当事業団が平成6年から実施し、四半世紀を迎えようとしています。本報告書に掲載しております林中原Ⅱ遺跡は平成20年度と21年度に発掘調査を行った遺跡です。ダム建設に伴う生活再建事業の一環として、水没する国道145号の代替道路としての八ッ場バイパス建設と町道建設に先立ち調査されました。

調査の結果、縄文時代から弥生時代、中世・近世に至る良好な埋蔵文化財包蔵地であることが解りました。特に、縄文時代中期～後期にかけての集落跡として住居跡100軒以上が発見され、縄文時代の大型集落跡として位置付けられました。既に、これら縄文時代の遺構・遺物は事業団報告書第617集・第643集『林中原Ⅱ遺跡(1)・(2)』として2冊の報告書にして刊行して参りました。

本書は、検出された縄文時代の遺構・遺物を除く、弥生時代や中世・近世を中心とした資料を掲載しました。特に、弥生時代の資料は、当地域に集まる前半期の資料であり、群馬県内の弥生時代研究に良好な資料を提供することになるでしょう。また、本書をもって、林中原Ⅱ遺跡の報告書の完了となります。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、及び長野原町教育委員会、東吾妻町教育員会をはじめとする関係機関や地元関係者のみなさまには、多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり衷心より感謝申し上げます。

本書が、吾妻郡内、ひいては群馬県の歴史を解明する上で未永く活用されることを願い序といたします。

平成31年1月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野 三智男

例 言

- 1 本書は、八ッ場ダム建設工事に伴う事前調査として、平成20年度と21年度に発掘調査された『林中原Ⅱ遺跡』の発掘調査報告書である。本書は林中原Ⅱ遺跡で検出された、弥生時代以降の遺構と遺物及び遺構外出土遺物を掲載しており林中原Ⅱ遺跡の発掘調査報告書の第3冊目である。
- 2 林中原Ⅱ遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字林984・985-1・985-2・986・988～993・1002-1～1002-3・1003・1004-2・1005-1・1006-1・1007・1008・乙1009・1009-1・1011・1012・1018-1・1023・1024に所在し、長野原町教育委員会と協議の結果、本遺跡名が決定された。
- 3 本発掘調査は、群馬県教育委員会の調整に基づき、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省関東地方整備局(平成13年1月までは建設省)の委託を受けて実施した。平成14年度からは、八ッ場ダム地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団八ッ場ダム調査事務所が担当している。
- 4 発掘調査は、平成20年10月14日から平成20年12月26日・平成21年3月1日から平成21年10月31日まで実施しており、今回報告する遺構・遺物は、検出された遺構・遺物のうち縄文時代を除く弥生時代以降の遺構・遺物を対象にしている。なお、縄文時代の遺構・遺物は『林中原Ⅱ遺跡(1)』、『林中原Ⅱ遺跡(2)』として既に2冊を報告している。
- 5 発掘調査体制は以下のとおりである。

調査担当 平成20年度：飯田陽一、飯森康広、宮下寛

平成21年度：飯田陽一、坂口 一、麻生敏隆、飯森康広、須田正久、宮下 寛、平井 敦

遺跡掘削工事 平成20年度：吉澤建設株式会社

平成21年度：株式会社歴史の杜

- 6 整理期間は平成25年4月1日から平成30年7月31日である。
- 7 整理体制は以下のとおりである。

編集 山口逸弘

執筆 梶崎修一郎(第4章)

山口逸弘(上記以外)

石材同定 飯島静男(群馬県地質研究会)・松村和男

遺構写真撮影 各調査担当者

遺物写真撮影 板垣泰之(一部の銭貨)・山口逸弘

遺物観察表 板垣泰之(金属製品)・山口逸弘

委託 遺構測量及び遺構図デジタル編集 株式会社測研

石器実測及びトレース 株式会社測研

株式会社シン技術コンサル

有限会社毛野考古学研究所

人骨鑑定 梶崎修一郎(生物考古学研究所)

平成25年度と30年度は事業団本部で、平成26年度から平成29年度は八ッ場ダム調査事務所では整理作業を実施した。

- 8 出土遺物および調査記録図、写真などの記録類はすべて群馬県埋蔵文化財センターで保管している。
- 9 発掘調査及び調査報告書作成には、次の関係機関にご協力、ご助言をいただいた。記して感謝いたします。
国土交通省関東地方整備局八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、長野原町教育委員会、東吾妻町教育委員会

凡 例

- 1 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。本書で使用する測量図の座標はすべて、2002年4月改正以前の日本測地系を用いている。
- 2 調査範囲には4×4mのグリッド方眼を設定し、各グリッド呼称は南東隅の交点を充てている。
- 3 遺構図の縮尺は各挿図に示している。
- 4 遺構番号は、基本的に調査時の番号を用いた。しかしながら、整理段階で各遺構の再検討を行っており、遺構名、遺構番号の変更も一部ある。変更した場合、その都度本文中に記した。
- 5 遺構図面中における遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。また●は土器、○は石器を表し、図示した遺物でこの表示のない遺物、遺構図中に番号の無い遺物は出土位置を記録しなかったものである。
- 6 遺物図の縮尺は各挿図に示している。
- 7 写真図版中の遺物縮尺は、概ね遺物実測図と同縮尺とした。
- 8 遺物観察表及び計測表の計測値単位はcmである。石器等の重量はすべて残存値である。色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の『新版標準土色帖』に基づいている。
- 9 遺構図・遺物図中の網掛け部分は図中に説明を記している。
- 10 遺構名称で竪穴建物(竪穴住居、住居)一般に関しては、住居跡あるいは号住、住と記す。土坑跡は土坑あるいは号坑、坑、焼土遺構は焼土、集石遺構は集石と記している。これは前冊、前々冊から遺構名は踏襲し、遺構番号が連続しており、遺構名称変更による齟齬をきたすため混乱を避けさせていただいた。
- 11 写真図版中遺跡全景写真は前2冊とほぼ同一のため割愛した。

目次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

写真図版目次

第1章 調査経過と調査の方法

- 第1節 調査に至る経過…………… 1
- 第2節 発掘調査の経過…………… 1
- 第3節 発掘調査の方法…………… 2
- 第4節 整理業務の経過…………… 4

第2章 周辺の環境

- 第1節 遺跡の位置と地形…………… 5
- 第2節 周辺の遺跡…………… 5
- 第3節 林地区の弥生時代～中世・近世遺跡…… 10

第3章 発見された遺構と遺物

- 第1節 遺跡の概要…………… 14
- 第2節 基本土層…………… 15
- 第3節 弥生時代の遺構と遺物…………… 23
- 第4節 中世～近世(近代)の遺構と遺物…………… 52
- 第5節 補遺編…………… 128

第4章 分析

- 第1節 林中原Ⅱ遺跡51区出土の中世～近世人骨と
獣骨について…………… 136

第5章 総括

- 第1節 弥生時代の遺構と遺物について…………… 140
- 第2節 まとめにかえて…………… 155

遺構計測表・遺物観察表

写真図版

報告書抄録

奥付

挿 図 目 次

第1図	林中原Ⅱ遺跡 位置図(国土地理院2万5千分の1地形図「長野原」使用)……………	1
第2図	林中原Ⅱ遺跡調査区区分割り……………	2
第3図	調査区の設定……………	3
第4図	周辺の遺跡及び段丘面(国土地理院2万5千分の1地形図「長野原」使用)……………	7
第5図	林中原Ⅱ遺跡周辺遺跡及び地形図……………	9
第6図	基本土層図……………	16
第7図	林中原Ⅱ遺跡全体図(51・52・61・62区)……………	折り込み
第8図	林中原Ⅱ遺跡弥生時代以降全体図(51・52・61区/国道部分)……………	折り込み
第9図	林中原Ⅱ遺跡弥生時代以降全体図(61・62区/町道部分)……………	折り込み
第10図	61区40号住居跡(1)……………	23
第11図	61区40号住居跡(2)……………	24
第12図	61区40号住居跡出土遺物(1)……………	25
第13図	61区40号住居跡出土遺物(2)……………	26
第14図	61区40号住居跡出土遺物(3)……………	27
第15図	62区1号住居跡(1)……………	28
第16図	62区1号住居跡(2)……………	29
第17図	62区1号住居跡出土遺物……………	30
第18図	61区1号竪穴状遺構及び出土遺物(1)……………	31
第19図	61区1号竪穴状遺構出土遺物(2)……………	32
第20図	61区1号竪穴状遺構出土遺物(3)……………	33
第21図	61区2号竪穴状遺構(1)……………	34
第22図	61区2号竪穴状遺構(2)及び出土遺物(1)……………	35
第23図	61区2号竪穴状遺構出土遺物(2)……………	36
第24図	61区2号竪穴状遺構出土遺物(3)……………	37
第25図	61区1・2号埋設土器(弥生時代)……………	38
第26図	62区土坑(弥生時代)……………	39
第27図	62区土坑(弥生時代)出土遺物……………	40
第28図	61区1・2号ベンガラ集中遺構及び出土遺物……………	41
第29図	62区1号弥生時代遺物集中遺構及び出土遺物……………	43
第30図	62区2号弥生時代遺物集中遺構及び出土遺物(1)……………	44
第31図	62区2号弥生時代遺物集中遺構出土遺物(2)……………	45
第32図	62区2号弥生時代遺物集中遺構出土遺物(3)……………	46
第33図	51区遺構外出土遺物(弥生時代)……………	47
第34図	52区遺構外出土遺物(弥生時代)……………	47
第35図	61区遺構外出土遺物(弥生時代)(1)……………	48
第36図	61区遺構外出土遺物(弥生時代)(2)……………	49
第37図	62区遺構外出土遺物(弥生時代)……………	50
第38図	52区1～3号掘立柱建物……………	52
第39図	52区1号掘立柱建物(1)……………	53
第40図	52区1号掘立柱建物(2)及び出土遺物……………	54
第41図	52区2号掘立柱建物……………	55
第42図	52区3号掘立柱建物……………	56
第43図	51区1号礎石建物(1号掘立柱建物)及び出土遺物……………	57
第44図	51区1号掘立柱建物……………	58
第45図	51区2号礎石建物及び出土遺物……………	59
第46図	51区3号礎石建物……………	60
第47図	51区・52区1・2号石垣及び出土遺物、1号道跡、52区1号井戸……………	折り込み
第48図	51区1号井戸……………	64
第49図	51区1号溝・2号溝……………	65
第50図	51区1号土坑墓及び出土遺物……………	66
第51図	51区7号・10号集石遺構及び出土遺物……………	67
第52図	焼土遺構(1)……………	69
第53図	焼土遺構(2)……………	70
第54図	焼土遺構(3)及び出土遺物(1)(51区48号焼土)……………	73
第55図	焼土遺構出土遺物(2)(51区48号焼土)……………	74
第56図	焼土遺構出土遺物(3)(51区48号焼土・52号焼土)……………	75
第57図	焼土遺構出土遺物(4)(52区18号焼土・19号焼土)……………	76
第58図	土坑 51区(1)……………	79
第59図	土坑 51区(2)……………	81

第60図	土坑 51区(3)……………	83
第61図	土坑 51区(4)……………	85
第62図	土坑 51区(5)……………	86
第63図	土坑 51区(6)……………	89
第64図	土坑 52区(1)……………	92
第65図	土坑 52区(2)……………	94
第66図	土坑 52区(3)……………	96
第67図	土坑 52区(4)……………	98
第68図	土坑 52区(5)……………	101
第69図	土坑 52区(6)……………	103
第70図	土坑 52区(7)……………	106
第71図	土坑 61区(1)……………	107
第72図	土坑 61区(2)……………	108
第73図	土坑 61区(3)……………	111
第74図	土坑 62区……………	114
第75図	土坑出土遺物(1) 51区……………	116
第76図	土坑出土遺物(2) 51区……………	117
第77図	土坑出土遺物(3) 52区……………	118
第78図	土坑出土遺物(4) 61区……………	119
第79図	遺構外出土遺物(1) 51区……………	121
第80図	遺構外出土遺物(2) 51区……………	122
第81図	遺構外出土遺物(3) 51区……………	123
第82図	遺構外出土遺物(4) 51区……………	124
第83図	遺構外出土遺物(5) 51区・52区……………	125
第84図	遺構外出土遺物(6) 52区……………	126
第85図	遺構外出土遺物(7) 61区・62区……………	127
第86図	51区・52区遺構出土遺物追加資料……………	129
第87図	51区・52区遺構外出土遺物追加資料(1)……………	130
第88図	51区・52区遺構外出土遺物追加資料(2)……………	131
第89図	51区・52区遺構外出土遺物追加資料(3)……………	132
第90図	51区・52区遺構外出土遺物追加資料(4)……………	133
第91図	51区・52区遺構外出土遺物追加資料(5)……………	134
第92図	51区・52区遺構外出土遺物追加資料(6)……………	135
第93図	180号土坑出土土器出土部位図……………	138
第94図	48号焼土土器出土部位図……………	139
第95図	周辺遺跡の弥生時代資料(1)……………	143
第96図	周辺遺跡の弥生時代資料(2)……………	145
第97図	周辺遺跡の弥生時代資料(3)……………	146
第98図	周辺遺跡の弥生時代資料(4)……………	147
第99図	周辺遺跡の弥生時代資料(5)……………	149
第100図	周辺遺跡の弥生時代資料(6)……………	150
第101図	周辺遺跡の弥生時代資料(7)……………	151
第102図	周辺遺跡の弥生時代資料(8)……………	152
第103図	周辺遺跡の弥生時代資料(9)……………	153

表 目 次

表1	周辺の主な遺跡一覧……………	8
表2	林中原Ⅱ遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表……………	137
表3	180号土坑出土土タ・イノシシ上顎歯計測値……………	139
表4	遺構計測表……………	158
	住居跡……………	158
	竪穴状遺構……………	158
	埋設土器……………	158
	ベンガラ集中遺構……………	158
	掘立柱建物……………	158
	礎石建物……………	159
	石垣遺構……………	159
	道状遺構……………	159
	井戸遺構……………	159
	溝状遺構……………	159
	土坑墓……………	159
	集石遺構……………	159
	焼土遺構……………	159
	土坑……………	160

表5	遺物観察表	161
	61区40号住居跡	161
	62区1号住居跡	161
	61区1号竪穴状遺構	162
	61区2号竪穴状遺構	162
	埋設土器 61区	164
	土坑(弥生時代) 62区	164
	61区1号ベンガラ集中遺構	164
	62区1号弥生時代遺物集中遺構	164
	62区2号弥生時代遺物集中遺構	164
	遺構外出土弥生遺物 51区	165
	遺構外出土弥生遺物 52区	165
	遺構外出土弥生遺物 61区	166
	遺構外出土弥生遺物 62区	167
	52区1号掘立柱建物	168
	51区礎石建物	168
	石垣遺構	169
	51区1号土坑墓	169
	集石遺構	169
	焼土遺構	169
	土坑 51区	170
	土坑 52区	171
	土坑 61区	172
	遺構外出土遺物 51区	172
	遺構外出土遺物 52区	174
	遺構外出土遺物 61区・62区	176
	補遺編 遺構出土遺物	176
	補遺編 遺構外出土遺物	177

	2	52区1号掘立柱建物全景(東から)
	3	51区1号掘立柱建物全景(北から)
	4	51区1号礎石建物全景(北から)
	5	51区2号礎石建物全景(西から)
PL. 8	1	51区3号礎石建物全景(北から)
	2	51区3号礎石建物全景(西から)
	3	51・52区1・2号石垣 1号道跡 52区1号井戸全景(南東から)
	4	51区1号井戸全景(南から)
	5	52区1号井戸全景(南から)
PL. 9	1	51区1号溝全景(南西から)
	2	51区2号溝土層(北東から)
	3	51区1号土坑墓全景(南から)
	4	51区1号土坑墓土層(南から)
	5	51区7号集石遺構全景(北から)
	6	51区7号集石遺構炭化材出土状態(南から)
	7	51区10号集石遺構全景(北から)
	8	51区10号集石遺構遺物出土状態(北から)
PL.10	1	51区35号焼土遺構全景(南から)
	2	51区48号焼土遺構遺物出土状態(東から)
	3	51区48号焼土遺構全景(東から)
	4	51区48号焼土遺構遺物出土状態(東から)
	5	51区49号焼土遺構全景(南から)
PL.11	1	51区52号焼土遺構土層(東から)
	2	51区52号焼土遺構遺物出土状態(北から)
	3	51区52号焼土遺構全景(東から)
	4	51区52号焼土遺構全景(北から)
	5	51区53号焼土遺構全景(南西から)
	6	51区67号焼土遺構全景(東から)
	7	51区84号焼土遺構全景(南から)
	8	51区85号焼土遺構全景(南東から)
PL.12	1	52区1号焼土遺構全景(北東から)
	2	52区18号焼土遺構土層(南から)
	3	52区18号焼土遺構全景(南から)
	4	52区19号焼土遺構全景(東から)
	5	61区1号焼土遺構全景(西から)
	6	61区2号焼土遺構全景(西から)
	7	61区8号焼土遺構全景(南から)
	8	62区3号焼土遺構土層(東から)
PL.13	1	51区3号土坑全景(南東から)
	2	51区9号土坑全景(南西から)
	3	51区12号土坑全景(東から)
	4	51区14号土坑全景(北東から)
	5	51区15号土坑全景(北東から)
	6	51区16号土坑全景(東から)
	7	51区17号土坑全景(北東から)
	8	51区19号土坑全景(東から)
PL.14	1	51区20号土坑全景(北から)
	2	51区23号土坑遺物出土状態(南東から)
	3	51区23号土坑(左)・24号土坑(右)全景(南東から)
	4	51区24号土坑土層(南東から)
	5	51区25号土坑遺物出土状態(西から)
	6	51区25~28号土坑全景(南から)
	7	51区26号土坑全景(南西から)
	8	51区27号土坑全景(南から)
PL.15	1	51区28号土坑土層(東から)
	2	51区46号土坑全景(南西から)
	3	51区47号土坑土層(西から)
	4	51区48号土坑全景(南から)
	5	51区103号土坑土層(南から)
	6	51区106号土坑全景(東から)
	7	51区150号土坑全景(東から)
	8	51区150号土坑遺物出土状態(南から)
PL.16	1	51区170号土坑全景(南から)
	2	51区178号土坑(右)・179号土坑(左)全景(東から)
	3	51区180号土坑検出面(南西から)
	4	51区180号土坑獣骨出土状態(南西から)
	5	51区180号土坑全景(南西から)

写真図版目次

PL. 1	1	51区遠景 調査着手時(東から)
	2	51区基本土層(南から)
	3	62区基本土層(南から)
PL. 2	1	61区40号住居跡全景(南から)
	2	61区40号住居跡炉跡1、炉跡2(南から)
	3	61区40号住居跡遺物出土状態(南から)
	4	61区40号住居跡遺物出土状態(南から)
	5	61区40号住居跡遺物出土状態(南から)
PL. 3	1	62区1号住居跡全景(南から)
	2	62区1号住居跡炉跡土層(東から)
	3	62区1号住居跡遺物出土状態(南から)
	4	62区1号住居跡遺物出土状態(南から)
	5	62区1号住居跡遺物出土状態(南から)
PL. 4	1	61区1号竪穴状遺構全景(南から)
	2	61区1号竪穴状遺構炉跡(6号焼土)土層(西から)
	3	61区1号竪穴状遺構遺物出土状態(南から)
	4	61区1号竪穴状遺構遺物出土状態(南から)
	5	61区2号竪穴状遺構全景(南から)
	6	61区2号竪穴状遺構炉跡土層(南から)
	7	61区2号竪穴状遺構遺物出土状態(南から)
	8	61区2号竪穴状遺構遺物出土状態(南から)
PL. 5	1	61区1・2号弥生土器埋設遺構全景(南から)
	2	61区1号弥生土器埋設遺構遺物出土状態(南から)
	3	62区3号土坑全景(東から)
	4	62区3号土坑土層(東から)
	5	62区3号土坑遺物出土状態(南から)
PL. 6	1	62区1号土坑全景(東から)
	2	62区36号土坑全景(西から)
	3	61区1号ベンガラ集中遺構全景(南東から)
	4	61区1号ベンガラ集中遺構土層(南西から)
	5	62区1号弥生時代遺物集中遺構出土状態(南東から)
	6	62区2号弥生時代遺物集中遺構全景(北から)
	7	弥生時代遺物遺構外出土状態(61-X07グリッド)(南から)
	8	弥生時代遺物遺構外出土状態(61-X07グリッド)(南から)
PL. 7	1	52区1~3号掘立柱建物全景(南西から)

	6	51区180号土坑掘方全景（南西から）		2	61区32号土坑全景（南から）
	7	51区183号土坑掘方土層（南から）		3	61区34号土坑土層（南東から）
	8	51区184号土坑検出面（南から）		4	61区35号土坑土層（南東から）
PL.17	1	51区190号土坑遺物出土状態（西から）		5	61区36号土坑土層（南から）
	2	51区253号土坑全景（南から）		6	61区67号土坑全景（南から）
	3	51区257号土坑全景（南から）		7	61区71号土坑全景（西から）
	4	51区269号土坑全景（西から）		8	61区72号土坑全景（南から）
	5	51区313号土坑全景（南から）	PL.26	1	62区7号土坑全景（南東から）
	6	52区1号土坑全景（南から）		2	62区12号土坑全景（南東から）
	7	52区2号土坑全景（西から）		3	62区3号土坑調査風景（西から）
	8	52区6号土坑全景（東から）		4	62区調査風景（北から）
PL.18	1	52区7号土坑全景（東から）		5	52区調査風景（西から）
	2	52区11号土坑土層（東から）	PL.27		61区40号住居跡出土遺物
	3	52区12号土坑全景（北から）	PL.28		62区1号住居跡 61区1号竪穴状遺構出土遺物
	4	52区12～15号土坑土層（北から）	PL.29		61区2号竪穴状遺構出土遺物
	5	52区13号土坑全景（西から）	PL.30		61区1・2号埋設土器 62区土坑 1号弥生時代遺物集中遺構出土遺物
	6	52区13号土坑遺物出土状態（西から）	PL.31		62区2号弥生時代遺物集中遺構 61区1号ベンガラ集中遺構出土遺物
	7	52区15号土坑土層（東から）	PL.32		51区遺構外 52区遺構外 61区遺構外（1）出土弥生遺物
	8	52区16号土坑全景（南から）	PL.33		61区遺構外出土弥生遺物（2）
PL.19	1	52区17号土坑土層（西から）	PL.34		62区遺構外出土弥生遺物
	2	52区17号土坑全景（南から）	PL.35		52区1号掘立柱建物 1・2号石垣 1・2号礎石建物 51区1号土坑墓 7・10号集石 48号焼土（1）出土遺物
	3	52区18号土坑土層（南から）	PL.36		51区48号焼土（2）・52号焼土 52区18・19号焼土出土遺物
	4	52区18号土坑全景（南から）	PL.37		51区土坑出土遺物（1）
	5	52区19号土坑（左）・20号土坑（右）全景（南から）	PL.38		51区土坑出土遺物（2） 52区土坑出土遺物
	6	52区21号土坑全景（南から）	PL.39		61区土坑出土遺物 51区遺構外出土遺物（1）
	7	52区24号土坑土層（南西から）	PL.40		51区遺構外出土遺物（2）
	8	52区27・34・35号土坑全景（南東から）	PL.41		51区遺構外出土遺物（3） 52区遺構外出土遺物（1）
PL.20	1	52区28号土坑全景（北から）	PL.42		52区遺構外出土遺物（2） 61区・62区遺構外出土遺物
	2	52区28号土坑土層（北から）	PL.43		51区・52区遺構出土遺物追加資料 51区・52区遺構外出土遺物追加資料（1）
	3	52区29号土坑土層（北から）	PL.44		51区・52区遺構外出土遺物追加資料（2）
	4	52区29・32・33号土坑全景（北から）	PL.45		51区・52区遺構外出土遺物追加資料（3）
	5	52区32号土坑土層（北から）	PL.46		51区・52区遺構外出土遺物追加資料（4）
	6	52区33号土坑土層（北から）			
	7	52区34号土坑全景（南東から）			
	8	52区36号土坑全景（南から）			
PL.21	1	52区37号土坑全景（東から）			
	2	52区38号土坑全景（南から）			
	3	52区40号土坑土層（北から）			
	4	52区41号土坑全景（南から）			
	5	52区41号土坑遺物出土状態（東から）			
	6	52区42号土坑土層（東から）			
	7	52区43号土坑全景（北から）			
	8	52区44号土坑全景（東から）			
PL.22	1	52区45号土坑全景（西から）			
	2	52区46号土坑全景（南東から）			
	3	52区47号土坑全景（南から）			
	4	52区51号土坑全景（東から）			
	5	52区52号土坑全景（東から）			
	6	52区88号土坑全景（南から）			
	7	52区89号土坑全景（南から）			
	8	52区91号土坑全景（北から）			
PL.23	1	61区2号土坑土層（西から）			
	2	61区5号土坑全景（南から）			
	3	61区8号土坑全景（南から）			
	4	61区9号土坑全景（南西から）			
	5	61区11号土坑全景（南から）			
	6	61区12号土坑全景（南から）			
	7	61区13号土坑土層（南東から）			
	8	61区14号土坑全景（南から）			
PL.24	1	61区15号土坑全景（南から）			
	2	61区22号土坑全景（北から）			
	3	61区23号土坑全景（西から）			
	4	61区26号土坑全景（南西から）			
	5	61区27号土坑全景（南西から）			
	6	61区28号土坑全景（南東から）			
	7	61区29号土坑全景（北西から）			
	8	61区30号土坑全景（南から）			
PL.25	1	61区31号土坑全景（南から）			

第1章 調査経過と調査の方法

八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局(現 国土交通省関東地方整備局)と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町(現 東吾妻町)が協議し、平成6年3月18日「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定書」を建設省関東地方建設局と群馬県教育委員会の両者で締結し、発掘調査事業の実実施計画が決定された。同年4月1日、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で調査受託契約を締結し、同日同教育長と(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の両者で発掘調査委託契約が締結され、調査が開始された。

第1節 調査に至る経過

林中原Ⅱ遺跡の発掘調査は、国道145号バイパス(八ッ場バイパス)と町道建設に伴い実施された。既に、周知の遺跡として周辺は長野原町教育委員会が発掘調査を行っており、縄文時代中～後期の遺構・遺物を検出していた遺跡として知られていた。国土交通省より当遺跡内の国道及び町道建設に伴う埋蔵文化財調査の照会があり、平成20年3月、群馬県教育委員会文化財保護課が試掘調査を行った。その結果、縄文時代中期の住居跡の存在が明らかになり、林中原Ⅱ遺跡事業対象地の殆どに、本調査が必要と判断された。平成20年4月、国土交通省

関東地方整備局と平成20年度の発掘調査受託契約を締結し、平成20年10月より本調査に着手した。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は平成20年10月、調査対象地の南西部である52区より着手した。表土はバックホウにより、遺構検出面まで掘り下げ、その後人力による遺構確認、掘削、精査を重ねた。遺構確認面は、遺跡全体に黒色土の堆積が厚く、中世建物跡や縄文時代の敷石住居跡など掘り込みの浅い遺構の存在が予想されたため、黒色土～黒褐色土中と、ローム漸移層、ローム層を各々確認面として遺構検出に努めた。文化層としては、2面調査であるが、確認面は複数枚が存在した調査である。平成20年度の調査は10月～12月及び3月である。本来ならば、当地域の発掘調査は、凍結や積雪のため、1～3月間の冬季は行わない方針であるが、当該年度に限り、国道建設が急がれており、埋蔵文化財調査も急遽、冬季凍結の心配が若干ながら少なくなる3月の1ヶ月間に調査を行った。

平成21年度は、調査区内未買地の問題も片付き、徐々に調査を本格化した。調査は国道部分の51区・52区・61区南、町道部分である61区北と62区が対象となり、調査班を2班体制として順次進めていった。4月は近隣住民に本遺跡の重要性を理解してもらうために、現地説明会



第1図 林中原Ⅱ遺跡 位置図(国土地理院2万5千分の1地形図「長野原」使用)

第1章 調査経過と調査の方法

調査日誌抄

平成20年度

10月14日 調査班1班(担当者3名)で調査着手。国道部分(52区)中世面調査。掘立柱建物跡、土坑群を調査。

11月10日 51区調査着手。2面調査で第1面黒褐色土を調査面とする。中世～近世土坑などを調査。

12月19日 町道部分用地杭の確認。

12月24日 52区1・2面調査終了。

12月26日 町道部分一部の表土掘削。12月の調査終了。

3月1日 国道部分北の機能保証道路部分調査区を優先して調査を着手。

平成21年度

4月8日 当該年度調査着手。前年度調査の継続。調査班2班5名体制。

4月13日 61区遺構調査着手。

4月25日 林地区住民対象の現地説明会を開催(国道部分中心)。

5月8日 51区東調査着手。近世土坑などを調査。

7月1日 調査担当者2名増員。

7月2日 61区空撮。

7月7日 62区調査着手。

7月14日 国道部分51区東側調査終了。

7月22日 豪雨が続き、雨対策に追われる。

7月31日 51区高所作業車による写真撮影。

8月24日 62区2面目の調査へ。

9月4日 62区弥生時代遺構を中心に調査。

9月8日 町道部分を中心に空撮。

9月16日 61区だめ押し調査。

9月29日 51・52区現道下の調査着手。

10月1日 61区調査終了。

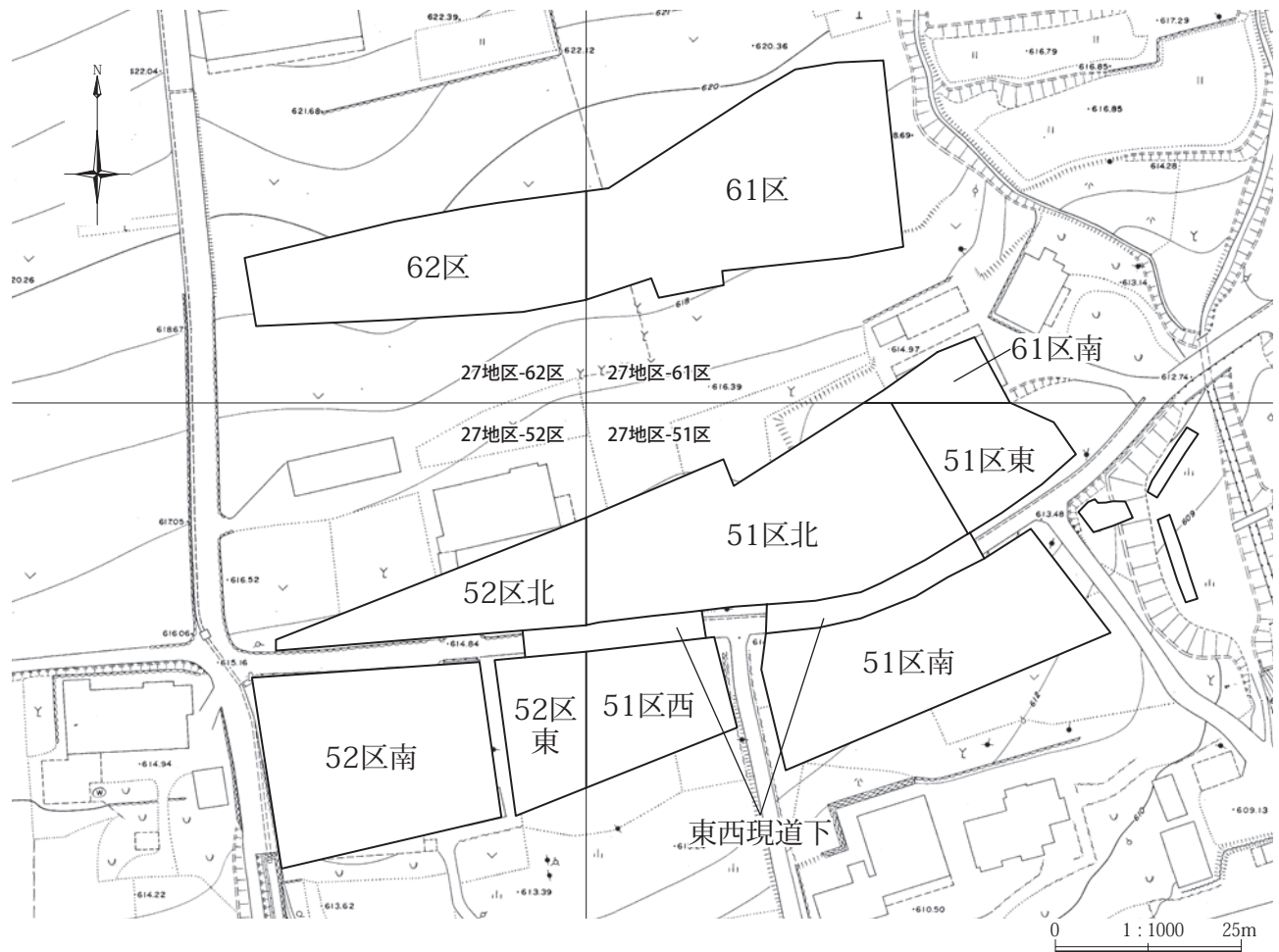
10月31日 全地区の調査終了。

を行っている。

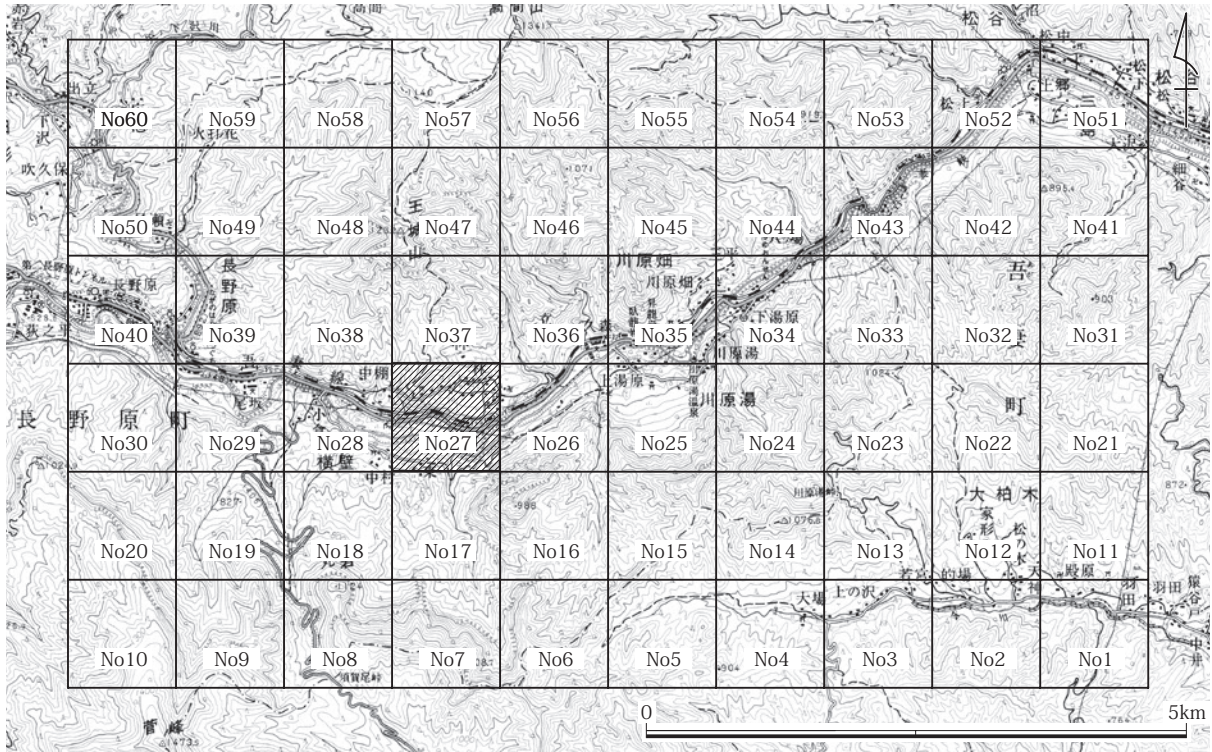
なお、51区南西部に南北に、52区東部に東西に未調査区を残す。これは地域住民の現道保護の要望が強く、やむなく調査が及ばなかった箇所である。

第3節 発掘調査の方法

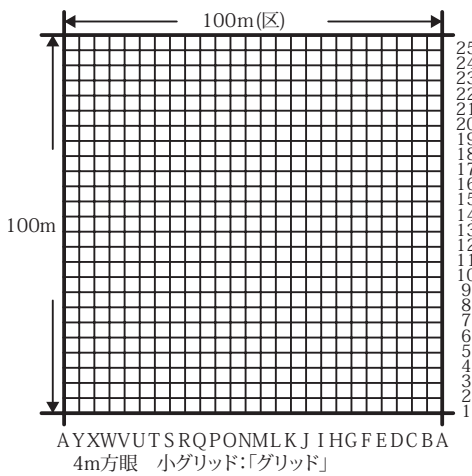
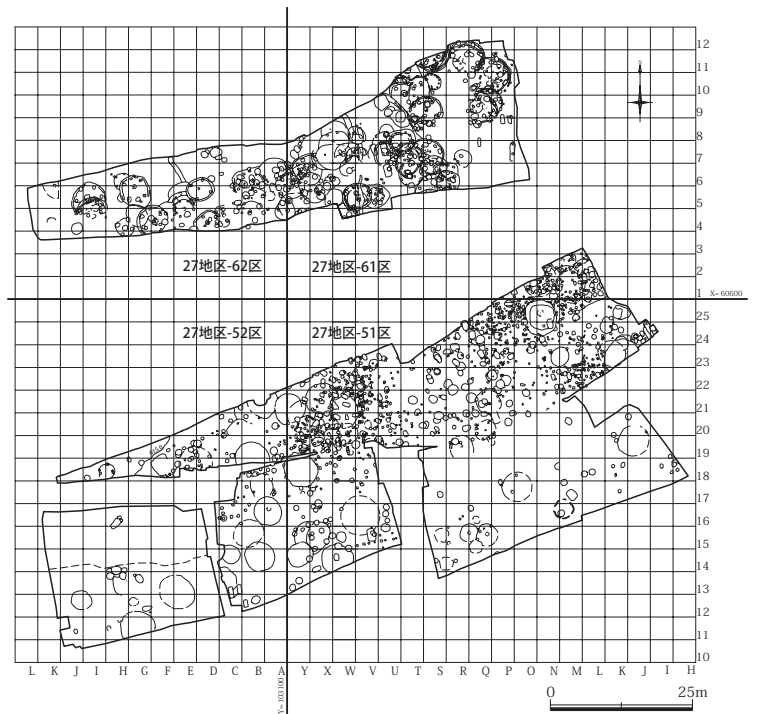
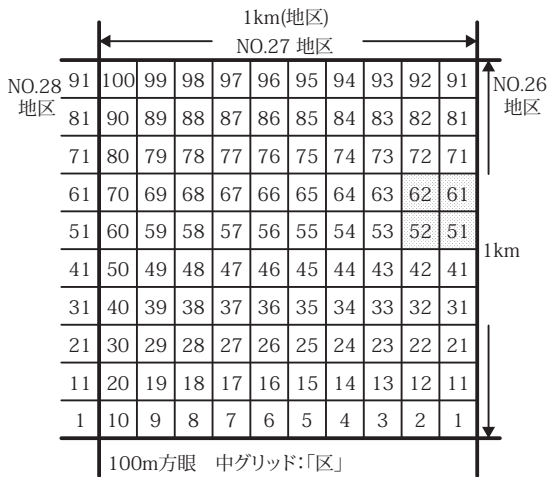
本報告は、平成20・21年度における林中原Ⅱ遺跡発掘調査で得られた調査資料のうち、弥生時代以降の遺構・遺物を扱っている。調査区は国道部分と町道部分に分かれ、調査班2班が各々を担当した。国道部分が平成20年度より1班が先行し、21年度より2班体制となっている。各調査区とも、工事工程の都合と調査による排土置場の確保のため、調査区内を幾つかに分割して調査を進めた経緯がある(第2図)。この分割調査により、発掘調査は円滑に進んだが、同時に幾つかの遺構も分割されることになった。また、国道部分、町道部分ともに、部分写真に止まり、全景写真としての記録化は果たせなかった。



第2図 林中原Ⅱ遺跡調査区区割り(長野原町都市計画図を使用)



(国土地理院5万分の1地形図「草津」使用)



第3図 調査区の設定

1 調査の手順

遺跡の現況は宅地・畑・道路であった。発掘調査はバックホウによる表土掘削を行い、順次作業員による遺構確認、遺構調査へと進んでいった。

遺構から出土した遺物は、その遺構番号を付し、さらに平面図面上に出土位置を記録したものについては個別番号を付し、標高を測定して取り上げた。遺構外から出土した遺物については、後述するグリッド単位で取りあげた。さらに平面図に出土位置を記録した遺物は、遺構出土のものと同様に個別番号を付し取りあげた。遺構測量は、主に測量会社に委託してデジタル化して記録をとった。縮尺については、住居跡・土坑・配石などは1/20、炉・埋甕・埋設土器は1/10、その他の遺構も1/20を原則としたが、溝・石垣・列石など規模の大きい遺構については1/40とした。全体図は1/100、1/200で作成した。

遺構の個別写真は、各調査担当者によるもので、主にデジタルカメラ35mmと6×7判モノクロームフィルムを用いた。

2 調査区の設定(第3図)

調査区の設定については、平成6(1994)年度から始まった八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査における「八ッ場ダム関係埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき、その方法に準拠した。この方法については、事業団報告書第287集『長野原一本松遺跡(1)』(群埋文2002)に詳しいので、詳細はそちらを参照していただきたい。ここでは概略を記す。

調査区については、八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査地内を国家座標(2002年4月改正以前の日本測地系)で使用し、吾妻郡吾妻町(現東吾妻町)大柏木の東部付近を基点(X=58000.00, Y=-97000.00)とした。そして、まずこの基点から1km四方の「地区」(大グリッド)を西に10区画、北に6区画の60地区を設定した。次に各地区を100m四方の「区」(中グリッド)に区分し、東南隅から西に1～10区、次の列を11～20区のように100区に区分した。さらに、各区を4m四方のグリッドに細分した。グリッドは東南を基点に西へA～Y、北へ1～25までの番号を付し、組み合わせてグリッド名としている(例20区A-1グリッド)。

林中原Ⅱ遺跡の調査区は「地区」では「27地区」に相

当し、「区」では「51・52・61・62区」にあたる。

遺構名称は区毎に連続する番号を付し、区を跨ぐ遺構の場合は遺構の主体となる区の番号を優先した。

第4節 整理業務の経過

本遺跡の整理作業は平成25年度4月に着手された。検出された遺構・遺物は膨大な量である、縄文時代を中心とする住居跡も127軒を数えた。このような大型遺跡の整理にあたり、整理期間も数年次にわたり、平成25年～平成29年の5年間を予定した。報告書は、縄文時代国道部分を第1分冊(既刊)、縄文時代町道部分を第2分冊(既刊)とし、弥生時代以降編を第3分冊(本報告)として、3冊に分けた刊行を予定した。

第1分冊の整理作業にあたり、平成25年度は(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団本部で行った。平成26年度に整理作業を(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団八ッ場ダム調査事務所に移し、平成27年度に事業団報告書第617集『林中原Ⅱ遺跡(1)』を刊行している。その後平成28年度、平成29年度と整理を継続し、平成29年度に事業団報告書第643集『林中原Ⅱ遺跡(2)』を刊行した。なお、長野原町林地区にあった八ッ場ダム調査事務所は、ダム水没地区にあたるため、平成28年12月に東吾妻町地域振興センター4階に移転して、整理作業を継続した。

第3分冊に係る整理作業は、平成29年度に着手され、平成30年度に再び(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団本部に移動して、本報告書として刊行に至っている。



長野原町林字久森にあった旧八ッ場ダム調査事務所

(2015年9月撮影)

第2章 周辺の環境

第1節 遺跡の位置と地形

林中原Ⅱ遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町林に所在する。林地区からは、直接的には目視できないが、南西に浅間山(2,568m)、北西に草津白根山(2,171m)という活火山を中心とした山脈が連なり、上信国境の分水嶺を構成している。分水嶺の一つであり、上信国境をなす鳥井峠(1,362m)付近に源を発する吾妻川は嬭恋村を経て、長野原町、東吾妻町を東流して、渋川市白井で利根川と合流する。

本遺跡が所在する長野原町林地区は、長野原町北部で東流する吾妻川左岸にあたる。周辺は吾妻川を挟み、北に高間山(1,342m)、王城山(1,123m)、南に丸岩山(1,124m)、管峰(1,473.5m)などが聳える峡谷地形が連続する。特に下流にある吾妻峡は国の名勝に指定されている。また、王城山と丸岩山は当地域の示標でもあり、地元に着した山々である。このような山々と分水嶺より流れ下る吾妻川とその支流によって、峡谷を地勢とするとう地域の地理的特徴が景観となっている。

長野原町域に分布する遺跡の多くは、吾妻川が形成した河岸段丘面に立地しており、近年の調査によって丘陵、山麓斜面にその分布域を広げている。吾妻川が形成した段丘面としては、最上位段丘面、上位段丘面、中位段丘面、下位段丘面が挙げられている(第4図)。八ッ場ダム建設地域に存在する埋蔵文化財包蔵地もこれら段丘面に位置しており、その対象地は広く、各段丘面を包括した面的な発掘調査が及ぶ地域である。一連の発掘調査によって、各段丘面の遺跡相が複雑に絡み合う様相が明らかになるものと期待されよう。また当地域は、川原畑、川原湯、林、横壁、長野原という5箇所の大字が存在する。各大字は河川・段丘・道路などで区分されており、それぞれが特徴ある遺跡を包蔵する地区となっている。段丘様相と併せて、各大字が包括する小地域様相が把握される地域である。

林中原Ⅱ遺跡は、大字林に所在し、最上位段丘面に占地する集落遺跡である。周辺段丘面の中では最も広い段丘面であり、緩やかな南への斜面地形が広がり、居住地形としては最適の環境を示す。この斜面地形の上位は大城山南斜面に繋がり、斜面端部より扇状地地形に近い広

がりを見せる。林地区の遺跡の多くは最上位段丘面に立地しているが、東側の山地斜面上には立馬Ⅰ～Ⅲ遺跡や西側には楡木Ⅰ・Ⅱ遺跡などがあり、時代・時期によって占地状況の差が窺われる。なお、林地区は最上位段丘面以下の上位段丘面を持たず、南側の段丘崖以下は中位段丘面、低位段丘面が広がる。

このように、長野原町林地区の主要部は吾妻川最上位段丘面にあり、南側への緩斜面地形を広く展開し、多くの包蔵地を有しながらも、東側や西側の山地斜面地形にも遺跡が点在する様相を示す。八ッ場ダム調査対象地域の中でも、濃密な遺跡分布地域といえよう。

本遺跡は、林地区南緩斜面地形にあり、東を埋没谷、北側と西側を町道、南側を段丘崖に画された範囲を遺跡地としている。標高は612m～619mである。

第2節 周辺の遺跡

本節では、八ッ場ダム建設に伴う調査対象地域の周辺の主な遺跡分布図と一覧表を掲載し、当地域の遺跡を概観したい。

旧石器時代：長野原町内では、現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されていない。吾妻川流域は大桑泥流や浅間一板鼻褐色軽石群(As-BPG)、浅間草津黄色軽石(As-YPk)によって厚く覆われており、各層序を示標とする調査は安全上の問題などから、極めて困難な状況である。また、後述するが本遺跡のように、二次堆積ロームの存在から、旧石器を対象とした確認を行っても、文化層の把握に至らない場合が多い。ただし、柳沢城(39)から遺構外出土ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが出土している。より山間部の遺跡などで、これらの堆積物下位の調査が実施できれば、当該期の遺跡が確認される可能性があるだろう。

縄文時代：長野原町内の遺跡地の約半数に縄文時代の遺構・遺物が確認されているように、濃密な分布を示す。

草創期の遺跡としては、石畑Ⅰ岩陰が挙げられる。奥行4m以上、幅40mの大規模な岩陰遺跡であり、草創期の表裏縄文などの出土が知られる。平成29年度より一部調査が着手されており、今後の本格的な調査に期待が集まる。

早期の遺跡は吾妻川左岸に多く見られ、特に山間地の急傾斜地形中の狭小な平坦地や緩傾斜地に占地する傾向が見られる。林地区に良好な遺跡が集まる。楡木Ⅱ遺跡(30)、立馬Ⅰ遺跡(10)、立馬Ⅱ遺跡(12)、中棚Ⅱ遺跡(26)が知られる。川原畑地区では三平Ⅰ遺跡(1)、三平Ⅱ遺跡(2)が報告されている。また、長野原地区では、長野原一本松遺跡(33)、幸神遺跡(32)、尾坂遺跡(34)、で出土が報告されている。

また、ハッ場ダム建設関連ではなく、地図上に図示出来なかったが、長野原町貝瀬地区で調査が継続する居家以岩陰遺跡も良好な早期人骨がまとまって出土しており、こちらも重要な資料を提供する。

前期の遺跡は平野部に比して少ないが、漸増の傾向は示す。その中で、前期初頭の集落跡が調査されている。上原Ⅰ遺跡は花積下層式期の住居跡15軒が調査されており、該期の遺跡として、屈指の規模である。長野原町教育委員会と事業団が隣接した地点を調査・報告している。

前期前葉～中葉段階では、大規模な集落跡は調査されていないが、上ノ平Ⅰ遺跡(3)で黒浜式期の住居跡が報告されている。石畑遺跡や二社平遺跡で関山Ⅱ式や黒浜式が出土しているが遺構は確認されていない。一方、本遺跡に西接する林中原Ⅰ遺跡(21)では、黒浜式期の住居跡1軒が検出されており周辺への広がりが見込まれている。

前期後葉段階でも、平野部の例と比して、当地域の集落規模は小規模に止まるようだ。諸磯式期の集落跡としては、三平Ⅰ遺跡、楡木Ⅱ遺跡、川原湯勝沼遺跡(9)などで数軒単位の住居跡・土坑が調査されている。林中原Ⅱ遺跡でも土坑が調査され、包含層からの出土も多い。また楡木Ⅲ遺跡(31)では、包含層出土ながら諸磯b式土器がまとまる。

中期初頭段階の遺跡としては、上原Ⅱ遺跡(18)が挙げられる。五領ヶ台Ⅱ式の遺構・遺物の良好な出土が報告されている。また、同じ林地区の立馬Ⅱ遺跡、楡木Ⅱ遺跡でも該期土器資料が充実するが、急傾斜地形の影響から遺構としての把握が困難であり、遺構一括資料として確定できない。林中原Ⅱ遺跡でも土坑出土資料を報告しているように、林地区には該期資料が集中する傾向が見られる。

中期前葉段階のまとまった資料は少ない。前述の立馬

Ⅱ遺跡、楡木Ⅱ遺跡で良好な土器の出土が見られるが、遺構に伴っておらず、両遺跡の初頭段階の土器群と同様に、一括資料としての確定性に乏しい。その他では楡木Ⅰ遺跡や本遺跡では、1・2個体の土器が土坑から出土している。

中期中葉段階では阿玉台Ⅰb式～Ⅱ式段階の住居跡として、林中原Ⅰ遺跡に住居跡、本遺跡で土坑が検出されている。幸神遺跡では、「焼町類型」を炉体土器とする住居跡が報告されている。中葉後半段階の資料としては、上ノ平Ⅰ遺跡が充実する。31号住居跡等に良好に土器群がまとまる。同様な段階では、横壁中村遺跡(45)で土坑出土の土器群が好資料である。

中期後葉段階は、当地域で大型集落跡が展示する様相を示す。長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡は環状集落の好例として知られる。同時に本遺跡もおそらく環状集落の一部の調査と位置付けられ、さらに尾坂遺跡や石川原遺跡(8)、東宮遺跡(5)なども大型集落跡と捉えられよう。このように、近接した地点で環状集落や大型集落が群在する様相は、中期集落群の在り方として検討を重ねなければならないだろう。また、中期後葉後半段階から中期末葉段階の集落は確実に敷石住居跡を伴い、前述の後葉段階の集落から継続する様相を示す。中期末葉段階の敷石住居跡としては、長野原地区の久々戸遺跡で良好な全面敷石住居跡が調査されている。

後期も中期集落から継続する様相が見られるが、各段丘面に広がる傾向も予想される。敷石住居跡は長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡の他に本遺跡、林中原Ⅰ遺跡、石川原遺跡や東宮遺跡などで良好な例が調査されている。いずれも後期初頭から後期前葉の段階の集落跡であり、称名寺式土器や堀之内式土器の出土が充実し、三十稲場式土器や「茂沢類型」など新潟県や長野県域を中心とする土器群も見られる。

後期中葉～後葉段階になると遺跡数は少ないが、近年水没地区を対象とした中位段丘の調査が増え、その数はやや増えている。上原Ⅳ遺跡(20)や横壁中村遺跡、石川原遺跡、東宮遺跡で加曾利B式期の住居跡や掘立柱建物跡が調査されている。後葉段階でも同様の遺跡で遺構数は減りながらも、継続する傾向を見せる。特に石川原遺跡では、後期後葉段階の住居跡と共に様々な遺構が調査されており、当地域の拠点集落としての位置付けが予想

されている。調査と整理作業が併行しており、今後の進展が待たれよう。

晩期の資料も最近見られるようになった。かつては横壁中村遺跡の土坑や包含層の例があるのみだったが、石川原遺跡で、晩期前半の住居跡など集落跡が調査されている。後期後半からの継続的な集落なのかは不明だが、今後の調査成果に期待が高まる。

晩期末葉の資料としては、立馬Ⅰ遺跡、横壁中村遺跡、で住居跡が、川原湯勝沼遺跡で再葬墓の要素を持つ土坑が調査されている。出土土器の多くが氷Ⅱ式あるいは弥生時代前期に比定される可能性もあり、慎重な研究が必要とされる。

弥生時代：遺跡数は希薄だが、好資料が集まる地域である。前期～中期の住居跡としては横壁中村遺跡と立馬Ⅰ遺跡で住居跡を調査している。立馬Ⅰ遺跡では土器棺墓も併せて検出されており、長野原町教委が調査した上原Ⅰ遺跡では土坑から短頸壺が出土している。尾坂遺跡では墓壙あるいは再葬墓と位置付けられる土坑や包含層が調査されている。その中で、中期前半に比定されるが本遺跡では住居跡や土坑が調査されており、良好な資料を

提供している。

弥生時代後期になると、遺跡数は減る。立馬Ⅰ遺跡で住居跡が、石畑遺跡では土坑、二社平遺跡で弥生後期～古墳時代前期とされる樽式土器片が出土している。

古墳時代：現状では、吾妻溪谷上流において古墳そのものの存在は疑われている。墳丘状の高まりを数地点で見ると、古墳としての確定性に乏しい。集落遺跡では、上原Ⅰ遺跡で前期と考えられる住居跡からS字状口縁台付甕や埴形土器が出土している。また、後期の住居跡としては上原Ⅳ遺跡で2軒、林宮原遺跡で1軒、下原遺跡で1軒が調査されているように、古墳時代における居住は果たされているようだ。

奈良・平安時代：奈良時代に比定される遺跡は希薄で、現状では調査遺跡は無い。長野原町教委が行った分布調査では羽根尾Ⅱ遺跡が相当するが詳細には至っていない。

平安時代：特に9世紀後半になると当地域でも遺跡数は増える。長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡、尾坂遺跡、中棚Ⅰ遺跡、上原Ⅰ遺跡、上原Ⅲ遺跡(19)、上原Ⅳ遺跡、林宮原遺跡、楡木Ⅰ遺跡、楡木Ⅱ遺跡、下湯原遺跡、上



第4図 周辺の遺跡及び段丘面(国土地理院2万5千分の1地形図「長野原」使用)(段丘図に関しては「長野原町の自然」(1993 長野原町)及び「林地区遺跡群」(2015)から引用し、一部を改変した)

表1 周辺の主な遺跡一覧

No.	遺跡名	所在大字	段丘面	概要	文献など
1	三平Ⅰ遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文時代早期～前期集落跡。弥生時代前期～中期土坑。平安時代以降の掘立柱建物跡や焼土遺構	17・22・39
2	三平Ⅱ遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文時代包含層(草創期～前期)。掘立柱建物跡7棟などの中世屋敷跡	39
3	上ノ平Ⅰ遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文時代中期中葉集落跡。平安時代集落跡	49・76・82
4	上ノ平Ⅱ遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文・平安の散布地とされる	
5	東宮遺跡	川原畑	中位段丘面	天明泥流下屋敷群、建物の構造と性格が把握できる良好な遺存状態であり、礎石と共に束・土台・大引・床板が出土している。酒蔵、槽跡も検出されている	28・62・64・78・80
6	西宮遺跡 西宮岩陰	川原畑	中位段丘面	天明泥流下の屋敷群・小屋・畑跡。畑跡には復旧溝を含む近世石造物などを安置した岩陰と岩の上の祭祀遺構	81
7	西ノ上遺跡	川原湯	中位段丘面	天明泥流下畑跡	22・30
8	石川原遺跡	川原湯	中位段丘面	縄文時代中期～晩期集落跡、後期の配石遺構、水場遺構。天明泥流下の被災村落の調査。良好な屋敷群・寺院跡・畑跡、豊富な出土遺物	85
9	川原湯勝沼遺跡	川原湯	中位段丘面	縄文晩期埋甕。平安時代集落跡。天明泥流下畑跡	28・32
10	立馬Ⅰ遺跡	林	山地斜面 上位段丘面	小規模な縄文時代早期集落跡、晩期集落跡、弥生時代中期集落跡・甕棺墓、平安時代集落跡、陥穴状土坑	10・37
11	立馬Ⅱ遺跡	林	山地斜面	縄文時代早期包含層、中期前葉～後葉集落跡。古代～中世の陥穴状土坑、掘立柱建物	34
12	立馬Ⅲ遺跡	林	山地斜面	縄文時代早期集落跡、良好な早期包含層。陥穴状土坑	52
13	花畑遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代中期初頭包含層。平安時代集落跡、陥穴状土坑	28
14	東原Ⅰ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代土坑。平安時代以降の陥穴状土坑、中・近世の掘立柱建物跡	7・8・18・22・61
15	東原Ⅱ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代包含層。古代～中・近世の陥穴状土坑・掘立柱建物跡	61
16	東原Ⅲ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代早期～後期包含層。中・近世の掘立柱建物跡・礎石建物跡	61
17	上原Ⅰ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代前期初頭集落跡。弥生時代前期短頸壺の土坑出土。平安時代集落跡、陥穴状土坑	8・16・21・73
18	上原Ⅱ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代中期初頭の集落跡	8・21
19	上原Ⅲ遺跡	林	最上位段丘面	平安時代集落跡。鍛冶工房跡	8・21・73・77
20	上原Ⅳ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代包含層、古墳時代住居跡2軒。平安時代集落跡。中・近世土坑	8・10・21・43・65
21	林中原Ⅰ遺跡	林	最上位段丘面	町教委調査では縄文時代後期前葉集落跡。注口土器の良好な出土遺物を見る。事業団調査では縄文時代前期～中期集落跡。林城、中・近世掘立柱建物群	4・7～11・21・70
22	林中原Ⅱ遺跡	林	最上位段丘面	本遺跡。縄文時代中期～後期の大規模集落跡。弥生中期墓壇、住居跡。中・近世掘立柱建物群を調査している	4・7・8・12・13・21・74・87
23	林宮原遺跡	林	最上位段丘面	西吾妻地域で初出の古墳時代後期住居跡。平安時代集落跡、芋引金具の出土	5・6・8・10・14・73
24	下田遺跡	林	中位段丘面	平安時代の集落跡。天明泥流下の屋敷跡	28・79
25	下原遺跡	林	下位段丘面	古墳時代中期・平安時代集落跡。中世屋敷跡、中～近世畑跡	29・38
26	中棚Ⅰ遺跡	林	上位段丘面	縄文時代早期包含層、平安時代集落跡	8・21・24
27	中棚Ⅱ遺跡	林	下位段丘面	天明泥流下の畑跡及び安永9年埋没と推定される畑跡	29・30
28	二反沢遺跡	林	山地斜面	石垣を付設する中世土坑。鍛冶関連遺物出土。近世畑跡	24・35
29	楡木Ⅰ遺跡	林	上位段丘面	縄文時代中期土坑、平安時代集落跡、近世屋敷跡	65
30	楡木Ⅱ遺跡	林	山地斜面	縄文時代早期～中期前葉集落跡。平安時代集落跡。中世掘立柱建物群	44・53
31	楡木Ⅲ遺跡	林	上位段丘面	縄文時代前期～後期包含層。弥生時代前期～中期包含層	28
32	幸神遺跡	長野原	上位段丘面	縄文時代中期の小規模集落跡。早期～後期包含層。近世以前の畑跡	43
33	長野原一本松遺跡	長野原	上位段丘面	縄文時代中期～後期の大型環状集落。左岸拠点集落の一つ。その他に平安時代集落、陥穴状土坑	13・27・41・45・50・54・67・69
34	尾坂遺跡	長野原	中位段丘面	縄文時代中期集落跡、早期～後期包含層。弥生時代前期～中期再葬墓。平安時代集落跡。中世掘立柱建物跡。天明泥流下の畑跡	28・66・75・83
35	西久保Ⅰ遺跡	横壁	中位段丘面	縄文時代中期末葉の小規模集落跡、水場遺構	28
36	西久保Ⅱ遺跡	横壁	山地斜面	平安時代の散布地とされる	24
37	西久保Ⅲ遺跡	横壁	山地斜面	散布地	
38	西久保Ⅳ遺跡	横壁	中位段丘面	縄文時代建物跡、平安時代住居跡・焼土、近世畑	22・65
39	柳沢城跡	横壁	山地斜面	中世城郭。堀切・土居・礎石・腰曲輪・石組遺構。陶磁器・鉄製品・銅製品・石臼などを出土	3
40	山根Ⅰ遺跡	横壁	中位段丘面	平安時代散布地とされる	23
41	山根Ⅱ遺跡	横壁	中位段丘面	散布地	
42	山根Ⅲ遺跡	横壁	中位段丘面	縄文時代中期後葉集落跡。中・近世溝など	28・43
43	山根Ⅳ遺跡	横壁	中位段丘面	縄文・平安の散布地とされる	
44	横壁勝沼遺跡	横壁	中位段丘面	槍先形尖頭器の出土(表採)。縄文時代土坑。平安時代住居跡1軒	28
45	横壁中村遺跡	横壁	中位段丘面	縄文時代中期～後期の大型集落跡。平安時代集落跡。中・近世の掘立柱建物群、礎石建物跡・土坑墓など	29・31・33・36・40・46・48・55・56・59・60・63・68・71
46	西久保Ⅴ遺跡	横壁	中位段丘面	縄文時代後～晩期包含層。弥生時代前期包含層	88
47	川原湯中原Ⅲ遺跡	川原湯	最上位段丘面	縄文時代中期包含層。古代～中・近世の陥穴状土坑、土坑	84



第5図 林中原 II 遺跡周辺遺跡及び地形図 (番号は長野原町遺跡台帳番号)

ノ平Ⅰ遺跡、石川原遺跡など、各地区で集落跡が調査されている。横壁中村遺跡、石川原遺跡、下湯原遺跡以外は吾妻川左岸に偏る傾向が見られ、注意を要しよう。これらの集落遺跡の出土遺物としては、土師器・須恵器以外に、羽口、鉄滓、鎌、刀子、砥石など鍛冶関連遺物や鉄製品の出土が目を引く。生産遺構としての鍛冶関連施設が各地区に点在していたようだ。併せて、林宮原遺跡や楡木Ⅰ遺跡で出土した小型鎌や苧引き状金具の出土は麻、苧などの生産・加工に関わる製品として位置づけられよう。当地域の特徴的な該期遺構として、「陥穴状土坑」が挙げられよう。イノシシ・シカなどを捕獲する罟猟遺構として推定されているが、縄文時代の所産として位置付けられていた例から、一転して平安時代～中世に比定されている。花畑遺跡(13)の調査では、落とし穴状土坑掘削に伴う工具痕を検出している。この陥穴状土坑も該期集落遺跡と同様に、吾妻川左岸側で発見される傾向が知られていたが、右岸にあたる東吾妻町上郷A・B遺跡や川原湯地区の石川原遺跡でも調査されている。

中世: 吾妻川流域には中世館跡が点在する。金花山砦跡、柳沢城跡、長野原城跡、丸岩城跡、羽根尾城跡が挙げられよう。林地区では最近の調査、報告でその存在が明らかになった林城跡がある。これらは、当時の道と関連した交通の要衝に設けられたようである。城館跡以外には、三平Ⅰ遺跡、三平Ⅱ遺跡、東原Ⅰ遺跡(14)、東原Ⅱ遺跡(15)、東原Ⅲ遺跡(16)、林中原Ⅰ遺跡、林宮原遺跡、下原遺跡、二反沢遺跡、楡木Ⅱ遺跡、尾坂遺跡などで掘立柱建物跡や土坑、畑跡が調査されている。

近世: 当地域の江戸時代遺跡の多くが天明三年(1783)における浅間山噴火に伴う泥流堆積物下の遺構群と位置付けられよう。当時の屋敷跡を検出した遺跡として、東宮遺跡、西宮遺跡(6)、石川原遺跡、下田遺跡、楡木Ⅰ遺跡、尾坂遺跡、町遺跡などが挙げられよう。また、小林家住宅跡も長野原町教委が調査した良好な民家跡で、東宮遺跡と並び民家の規模のみならず、生業や性格までを窺わせる資料が出土しており、極めて重要な在り方を示している。さらに、石川原遺跡でも、民家跡以外に当時の寺院の調査に至っており注目を集めよう。この他に、当地域の天明泥流下の遺構としては、畑跡が各遺跡で調査されている。特に中位段丘面と下位段丘面に集中しており生産遺構として、当時の生業の一つである畑跡研究に欠

かせない遺跡群となっている。近世の墓墳も多い。林地区では林中原Ⅰ遺跡や本遺跡があるが、他の地区でも上湯原遺跡や上ノ平Ⅰ遺跡、横壁中村遺跡などで、まとまった墓墳群が調査されている。当時の埋葬事例を窺う資料群である。

天明三年以前の遺構・遺物も当地域の近世史研究では重要な資料である。例えば中棚Ⅱ遺跡(27)では安永期とされる畑跡、町遺跡では泥流下畑跡下位層から近世に比定される製鉄関連遺構が調査されている。また、時期は確定できないが、横壁中村遺跡における一字一石経の出土も近世社会における宗教様相の一端を知る資料である。

第3節 林地区の弥生時代～中世・近世遺跡

前節では、周辺遺跡として八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財対象地域を中心に、各時代の分布を紹介した。ここでは、本遺跡が位置する長野原町林地区における調査遺跡、特に弥生時代及び中世～近世の遺跡を中心に述べていきたい。

《弥生時代》

先述したように、林地区は吾妻川左岸にあり、河岸段丘面のうち、最上位段丘面を主とする。林地区中央部は緩やかな南側への斜面地形が広く展開し、その間を押手沢など南流する小河川が開析する。周辺は山地斜面が迫る吾妻川流域にあって、平坦地形に近い緩斜面地形を広く保つ地区ともいえよう。このように、平坦地形が広がる林地区中央部の景観だが、東側は折の沢を挟み急勾配の山地斜面となる。

この山地斜面には立馬Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡が位置し、また西側は、楡木沢右岸にあたる山地斜面及び上位段丘面に楡木Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡がある。各遺跡は、この山地斜面の中に狭小な緩斜面地形を呈する地点に立地しており、東側山地斜面にある立馬Ⅰ遺跡は、中期前半代の住居跡1軒と後期の住居跡1軒、及び土器墓墓4基を検出している。さらに、立馬Ⅲ遺跡では包含層出土ながら、前期に比定される土器片や中期土器資料を報告している。

林地区最上位段丘面である中央部標高上位に位置する上原Ⅳ遺跡では、包含層出土ながら良好な弥生時代前期に比定される土器群を見ることができよう。近接する上原Ⅰ遺跡では、短頸壺1個体が土坑より出土している。

西側の上位段丘端で調査された楡木Ⅲ遺跡でも、包含層出土で量的には少ないが、前期後半～中期前半段階に比定される。

その他では、低位段丘にあたる下原遺跡も包含層の出土を見ている。出土土器数点は前期に比定されよう。

このように、林地区の弥生時代遺跡を概観すると、本遺跡の遺構・遺物内容が充実する。山地斜面や高標高部に位置する立馬Ⅰ・Ⅲ遺跡や上原Ⅰ・Ⅳ遺跡が前期からの継続要素を保有しつつ中期に至るが、林中原Ⅱ遺跡の場合、前期資料は乏しく、おそらく中期前半段階で平坦地形を選んだ居住を開始したものと思われる。ただし、その期間はごく短く断続的に途絶える様相を示し、弥生時代後期資料は林地区のみならず、八ッ場ダム調査地域で極端に少なくなり、立馬Ⅰ遺跡や二社平遺跡で古墳時代前期にかかる樽式系土器破片出土が報告されるのみである。

《古墳時代～古代》

前節で述べたように、当地域は古墳の造営を見ない。しかしながら、集落遺跡は小規模な例が点在するようだ。特に林地区では古墳時代集落が確認されており、前期住居跡が調査された上原Ⅰ遺跡は、S字状口縁台付甕や埴形土器を出土した住居跡1軒が調査されており、当地域でも初出例として注目されよう。後期住居跡を検出した遺跡としては、林宮原遺跡、下原遺跡、上原Ⅳ遺跡が挙げられる。

奈良時代に比定される遺跡は現状では確認されていないが、おそらく林地区は古代集落の選地に適する地理的条件を備えており、今後の詳細な調査でその存在は明らかになると期待されよう。

平安時代、特に9世紀後半代になると集落遺跡が増加する。9世紀後半代から10世紀代の住居跡を調査した遺跡を列挙すると、前述した山地斜面に位置する立馬Ⅰ遺跡では4軒、本遺跡に東接する東原Ⅰ遺跡では1軒、林地区北側の山地斜面に展開する花畑遺跡では3軒、北西側の斜面地形に選地する上原Ⅲ遺跡では13軒、上原Ⅰ遺跡では15軒、王城山神社前の林宮原遺跡は14軒、楡木沢右岸の山地斜面に選地する楡木Ⅱ遺跡は38軒、楡木Ⅰ遺跡は4軒、上位段丘に占地する中棚Ⅰ遺跡では4軒と少数だが、軸長6mを超える大型住居からなり、他の該期集落と様相を異にする。最近の事業団調査では4軒の住

居跡が追加されている。

林地区唯一の中位段丘に立地する下田遺跡では4軒の住居跡が調査されている。低位段丘の遺跡としては、中棚Ⅱ遺跡と下原遺跡があるが、中棚Ⅱ遺跡でも、近年の水没地区調査で平安時代の住居跡を数軒調査している。下原遺跡では先に述べた古墳時代住居跡と共に2軒の平安時代の住居跡が検出されている。さらに近年の水没地区の調査でも1軒を追加している。

出土遺物を概観すると、墨書土器の出土が各遺跡で見られる。特に楡木Ⅱ遺跡と中棚Ⅰ遺跡に顕著で、「三家」・「赤」と書かれた墨書がまとまる。また、楡木Ⅰ遺跡や楡木Ⅱ遺跡、林宮原遺跡などで苧引き状鉄製品や小型鎌の出土が見られる。麻、苧などの植物繊維を加工する生業が想定されよう。同様な例では立馬Ⅰ遺跡で、鉄製紡錘車を出土した土坑が検出されている。その他では、各遺跡で羽口や鉄滓などの出土が見られ、また上原Ⅲ遺跡では鍛冶工房跡と見られる遺構があることから、集落内の生業の一つとして鍛冶関連施設が存在していたようだ。

さて、八ッ場ダム調査地域では、陥穴状土坑の調査が顕著である。従来、縄文時代の所産とされてきたが、平安時代の住居跡との重複や埋土で観察された粕川テフラの存在から、古代から中世の遺構として位置付けられている。ただし、各遺跡とも、詳細な時期特定にまでは至っておらず、今後の検討課題の一つとなっている。ここでも、陥穴状土坑を調査した遺跡を概観しておきたい。

東側山地斜面に立地する、立馬Ⅰ遺跡では88基、立馬Ⅱ遺跡では22基、立馬Ⅲ遺跡で34基を調査している。林地区北側にある林花畑遺跡で51基、東原Ⅰ遺跡で48基、東原Ⅱ遺跡では21基、東原Ⅲ遺跡では32基が確認されており、まとまった調査例を示す。また、やや西側になるが、上原Ⅰ遺跡では事業団11基、町教委59基が調査され、上原Ⅱ遺跡では3基、上原Ⅲ遺跡も29基の陥穴状土坑を検出している。

林地区中央部にある林宮原遺跡と林中原Ⅰ遺跡、及び本遺跡でも少量ながら陥穴状土坑を調査している。林宮原遺跡では2基、林中原Ⅰ遺跡では13基、本遺跡でも5基を調査した。斜面部に比して量的に乏しい傾向は、生活領域との接近を避けたためであろう。一方、林地区西側の山地斜面周辺の検出数は多い。楡木Ⅰ遺跡で9基、

楡木Ⅱ遺跡で41基の調査例を見る。最近の調査では、近接する中棚Ⅰ遺跡でも、陥穴状土坑が調査されている。同様に最近の水没地区の調査例で、中位段丘でも陥穴状土坑が検出された事例として下田遺跡が挙げられる。4基を調査している。

《中世～近世》

当地域の低位段丘や中位段丘は、天明三年における浅間山噴火に伴う泥流堆積物に厚く覆われており、泥流直下の遺跡として、江戸時代の屋敷跡や畑跡が良好な状態で調査されている。林地区の、低位段丘である下原遺跡及び中位段丘である下田遺跡と中棚Ⅱ遺跡でも、天明泥流下で屋敷跡や畑跡が調査されている。3遺跡とも、近年の水没地区で新たに調査が加わり、新知見も増えてきているため、詳細は刊行される報告書に譲りたい。ここでは林地区における、天明泥流の堆積が認められない、上位段丘や最上位段丘の調査で得られた、中世～近世の遺構・遺物の概略を述べる。

本遺跡の西に接する林中原Ⅰ遺跡の主体は林城を含む中・近世遺構とあって良いだろう。林城は南側の最上位段丘面を画する段丘崖を利用した中世崖端城である。ただし、内部の第3区画とされる掘立柱建物などの遺構群の変遷から、区画内建物は江戸時代前期～中期に比定されている。同時に、西に距離をおいた52区と53区で検出された掘立柱建物の検討から、15世紀から17世紀の間に變遷が迫れる屋敷群と位置付けられている。出土遺物も特徴的で1号竪穴状遺構炉内から出土した内耳土器など豊富な中世～近世遺物を誇る。特に本遺跡で調査した52区1～3号掘立柱建物跡とは、同様な東西棟であり、関連性が窺われよう。

林城跡はその後、長野原町教委が第5・6区画の南側及び第7区画の北側を調査し、その延長を検出している。

林地区東側の斜面地形にある立馬Ⅰ遺跡では、近世の掘立柱建物跡2棟が調査され、立馬Ⅲ遺跡では近世に比定された溝状遺構より火打ち金1点の出土が報告されている。東原Ⅰ遺跡では掘立柱建物2棟、東原Ⅱ遺跡では、掘立柱建物1棟、東原Ⅲ遺跡は掘立柱建物3棟、礎石建物1棟が調査されている。この東原Ⅲ遺跡の西側に隣接して長野原町教委が、林中原Ⅱ遺跡1・2区の調査を行っており、掘立柱建物1棟と礎石建物1棟を検出している。東原Ⅲ遺跡の掘立柱建物や礎石建物と同時期の集落と指

摘されている。

林宮原遺跡では、中世と位置付けた掘立柱建物を、14棟調査している。段丘崖に沿った東西棟を主としており、林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡の該期建物跡と主軸を同じにする。地形上の制約を主要な要因とするが、段丘崖に沿った東西の動線が共通していた可能性もある。

林地区西部の楡木Ⅰ遺跡では中世～近世とされる掘立柱建物跡1棟を調査している。楡木Ⅱ遺跡では、中世とされる掘立柱建物跡20棟が検出され、その他に近世とされた墓壇1基や土坑、石垣、溝などがまとまる。

楡木沢の最上流部にあたる二反沢遺跡では、中世に比定される造成跡が検出され、天明三年以降の近世畑跡などが調査されている。何等かの宗教的な中世遺構を想起させよう。

上原Ⅳ遺跡では中世と目される溝を検出した他、中世遺物も古瀬戸御目付大皿や白磁小杯、丸皿、天目茶碗などが出土しており充実する。近世も河道跡や溝などから下駄などの木製品が出土している。また、地元に伝わる朝林寺の範囲が重なるが、その痕跡は見出せなかった。同様に本遺跡でも51区に近接する近世寺院とされた大乘院が伝承されるが、こちらも特定できなかった。

中位段丘面に位置する下田遺跡は天明泥流下の礎石建物群、掘立柱建物群、畑跡を調査している。また、中世～近世とされる掘立柱建物跡11棟、土坑墓などを調査した。また、下位段丘面の下原遺跡や中棚Ⅱ遺跡も天明泥流下の畑跡を主体とし、石垣や井戸跡も検出している。

下田遺跡、下原遺跡、中棚Ⅱ遺跡ともに水没地区で発掘調査が進んでいる。今後の調査成果に期待したい。

主な参考文献

- 1 長野原町教育委員会(以下長野原町教委) 1990『長野原町の遺跡一町内遺跡詳細分布調査一』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集(以下長野原町○集)
- 2 ハッ場ダム地域自然調査会 1993『長野原町の自然』長野原町
- 3 長野原町教委 1995『柳沢城』長野原町4集
- 4 長野原町教委 2004『町内遺跡Ⅳ』長野原町13集 林宮原遺跡Ⅱ・林中原Ⅰ遺跡Ⅳ・外輪原Ⅰ遺跡・長畝Ⅰ遺跡Ⅱなど
- 5 長野原町教委 2002『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町14集
- 6 長野原町教委 2005『町内遺跡Ⅴ』長野原町15集 嶋木Ⅰ遺跡・立石遺跡・林宮原遺跡など
- 7 長野原町教委 2006『町内遺跡Ⅵ』長野原町16集 林中原Ⅱ遺跡Ⅵ・東原Ⅰ遺跡・林中原Ⅰ遺跡Ⅶなど
- 8 長野原町教委 2007『町内遺跡Ⅶ』長野原町17集 林中原Ⅰ遺跡Ⅷ・林宮原遺跡Ⅵ・東原Ⅰ遺跡Ⅱ・上原Ⅰ遺跡Ⅱ・上原Ⅳ遺跡・林中原遺跡ⅩⅠ・林中原Ⅱ遺跡Ⅹ・中棚Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・上原Ⅱ遺跡など
- 9 長野原町教委 2009『町内遺跡Ⅷ』長野原町18集 林中原Ⅰ遺跡Ⅶ・久々戸遺跡など
- 10 長野原町教委 2010『町内遺跡Ⅸ』長野原町19集 草木原遺跡Ⅱ・三平Ⅰ遺跡・古屋敷遺跡・林宮原遺跡Ⅷ・林中原Ⅰ遺跡ⅩⅤ・上原Ⅳ遺跡Ⅲなど
- 11 長野原町教委 2010『林中原Ⅰ遺跡Ⅳ』長野原町20集
- 12 長野原町教委 2010『町内遺跡Ⅹ』長野原町21集 林中原Ⅱ遺跡ⅩⅡ
- 13 長野原町教委 2012『町内遺跡ⅩⅠ』長野原町22集 嶋木Ⅰ遺跡Ⅱ・田通Ⅱ遺跡・長野原一本松遺跡Ⅱ・林中原Ⅱ遺跡
- 14 長野原町教委 2011『林宮原遺跡Ⅷ』長野原町23集
- 15 長野原町教委 2013『山岸Ⅱ遺跡』長野原町24集
- 16 長野原町教委 2013『町内遺跡ⅩⅡ』長野原町25集 坪井遺跡Ⅷ・小滝Ⅱ遺跡・上原Ⅰ遺跡Ⅱなど
- 17 長野原町教委 2013『三平Ⅰ遺跡』長野原町26集
- 18 長野原町教委 2013『町内遺跡ⅩⅢ』長野原町27集 上ノ平遺跡・山岸Ⅱ遺跡・東原Ⅰ遺跡Ⅲ・坪井遺跡Ⅹなど
- 19 長野原町教委 2014『町内遺跡ⅩⅣ』長野原町28集 滝原Ⅳ遺跡・羽根尾宮原遺跡Ⅱなど
- 20 長野原町教委 2014『滝原Ⅳ遺跡』長野原町29集
- 21 長野原町教委 2015『林地区遺跡群』長野原町30集 上原Ⅱ遺跡・上原Ⅲ遺跡・中棚Ⅰ遺跡・上原Ⅰ遺跡Ⅱ・上原Ⅳ遺跡Ⅳ・林中原Ⅰ遺跡ⅩⅠ・林中原Ⅱ遺跡Ⅹ
- 22 長野原町教委 2016『町内遺跡ⅩⅤ』長野原町31集 町遺跡Ⅱ・坪井遺跡Ⅹ・滝原Ⅳ遺跡Ⅱ・三平Ⅰ遺跡Ⅱ・東原Ⅰ遺跡Ⅳ・西久保Ⅳ遺跡Ⅱ・西ノ上遺跡Ⅱなど
- 23 長野原町教委 2017『町内遺跡ⅩⅥ』長野原町32集 赤羽根遺跡・西久保Ⅴ遺跡・山根Ⅰ遺跡・長畝Ⅱ遺跡Ⅲなど
- 24 長野原町教委 2018『町内遺跡ⅩⅦ』長野原町33集 中棚Ⅰ遺跡Ⅱ・赤羽根遺跡・観奈遺跡・滝沢観音岩陰・二反沢遺跡・西久保Ⅱ遺跡など
- 25 長野原町教委 2018『観奈遺跡』長野原町34集
- 26 財団法人群馬埋蔵文化財調査事業団(以下群埋文) 1998『長野原久々戸遺跡』
- 27 群埋文 2002『長野原一本松遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告第1集(以下ハッ場○集)
- 28 群埋文 2002『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』ハッ場2集 東宮遺跡・石畑遺跡・川原湯勝沼遺跡・横壁勝沼遺跡・西久保Ⅰ遺跡・山根Ⅲ遺跡・下田遺跡・花畑遺跡・嶋木Ⅲ遺跡・尾坂遺跡など
- 29 群埋文 2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』ハッ場3集
- 30 群埋文 2004『久々戸遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』ハッ場4集
- 31 群埋文 2005『横壁中村遺跡(2)』ハッ場5集
- 32 群埋文 2005『川原湯勝沼遺跡』ハッ場6集
- 33 群埋文 2006『横壁中村遺跡(3)』ハッ場7集
- 34 群埋文 2006『立馬Ⅱ遺跡』ハッ場8集
- 35 群埋文 2006『上郷B遺跡・廣石A遺跡・二反沢遺跡』ハッ場9集
- 36 群埋文 2006『横壁中村遺跡(4)』ハッ場10集
- 37 群埋文 2006『立馬Ⅰ遺跡』ハッ場11集
- 38 群埋文 2007『下原遺跡Ⅱ』ハッ場12集
- 39 群埋文 2007『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』ハッ場13集
- 40 群埋文 2007『横壁中村遺跡(5)』ハッ場14集
- 41 群埋文 2007『長野原一本松遺跡(2)』ハッ場15集
- 42 群埋文 2007『上郷岡原遺跡(1)』ハッ場16集
- 43 群埋文 2008『山根Ⅲ遺跡(2)・上原Ⅳ遺跡・幸神遺跡』ハッ場17集
- 44 群埋文 2008『嶋木Ⅱ遺跡(1)』ハッ場18集
- 45 群埋文 2008『長野原一本松遺跡(3)』ハッ場19集
- 46 群埋文 2008『横壁中村遺跡(6)』ハッ場20集
- 47 群埋文 2008『上郷岡原遺跡(2)』ハッ場21集
- 48 群埋文 2008『横壁中村遺跡(7)』ハッ場22集
- 49 群埋文 2008『上ノ平Ⅰ遺跡(1)』ハッ場23集
- 50 群埋文 2008『長野原一本松遺跡(4)』ハッ場24集
- 51 群埋文 2008『上郷西遺跡』ハッ場25集
- 52 群埋文 2009『立馬Ⅲ遺跡』ハッ場26集
- 53 群埋文 2009『嶋木Ⅱ遺跡(2)』ハッ場27集
- 54 群埋文 2009『長野原一本松遺跡(5)』ハッ場28集
- 55 群埋文 2009『横壁中村遺跡(8)』ハッ場29集
- 56 群埋文 2009『横壁中村遺跡(9)』ハッ場30集
- 57 群埋文 2009『上郷岡原遺跡(3)』ハッ場31集
- 58 群埋文 2009『上郷A遺跡(2)』ハッ場32集
- 59 群埋文 2010『横壁中村遺跡(10)』ハッ場33集
- 60 群埋文 2010『横壁中村遺跡(11)』ハッ場34集
- 61 群埋文 2010『東原Ⅰ遺跡・東原Ⅱ遺跡・東原Ⅲ遺跡』ハッ場35集
- 62 群埋文 2011『東宮遺跡(1)』ハッ場36集
- 63 群埋文 2012『横壁中村遺跡(12)』ハッ場37集
- 64 群埋文 2012『東宮遺跡(2)』ハッ場38集
- 65 群埋文 2012『嶋木Ⅰ遺跡・上原Ⅳ遺跡(2)・西久保Ⅳ遺跡』ハッ場39集
- 66 群埋文 2012『尾坂遺跡』駅舎整備 群埋文546集
- 67 群埋文 2013『長野原一本松遺跡(6)』ハッ場40集
- 68 群埋文 2013『横壁中村遺跡(13)』ハッ場41集
- 69 群埋文 2014『長野原一本松遺跡(7)』ハッ場42集
- 70 群埋文 2014『長野原城跡・林中原Ⅰ遺跡』ハッ場43集
- 71 群埋文 2014『横壁中村遺跡(14)』ハッ場44集
- 72 群埋文 2015『町遺跡』ハッ場45集
- 73 群埋文 2015『上原Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・林宮原遺跡』ハッ場46集
- 74 群埋文 2016『林中原Ⅱ遺跡(1)』ハッ場47集
- 75 群埋文 2016『尾坂遺跡(2)』ハッ場48集
- 76 群埋文 2017『上ノ平Ⅰ遺跡(2)』ハッ場49集
- 77 群埋文 2017『上原Ⅲ遺跡(2)・久々戸遺跡(3)』ハッ場50集
- 78 群埋文 2017『東宮遺跡(3)』ハッ場51集
- 79 群埋文 2017『下田遺跡(2)』ハッ場52集
- 80 群埋文 2018『東宮遺跡(4)』ハッ場53集
- 81 群埋文 2018『西宮遺跡(1)・西宮岩陰』ハッ場54集
- 82 群埋文 2018『上ノ平遺跡(3)』ハッ場55集
- 83 群埋文 2018『尾坂遺跡(3)』ハッ場56集
- 84 群埋文 2018『川原湯中原Ⅲ遺跡』ハッ場57集
- 85 群埋文 2018『石川原遺跡(1)』ハッ場58集
- 86 群埋文 2018『下湯原遺跡(1)』ハッ場59集
- 87 群埋文 2018『林中原遺跡Ⅱ(2)』ハッ場60集
- 88 群埋文 2018・2019『年報36』・『年報37』

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

吾妻郡長野原町林中原Ⅱ遺跡は、吾妻川左岸最上位段丘面に位置する。周辺は南側への緩斜面地形が広がり、南端部は急峻な段丘崖が東西に連続する。本遺跡は、このような南緩斜面上に占地された集落遺跡の一つである。隣接する遺跡として、林中原Ⅰ遺跡や東原Ⅰ～Ⅲ遺跡、上原Ⅰ遺跡などがあるが、その中でも傑出した遺構量と内容を誇る。

主な遺構としては、縄文時代中期～後期の住居跡、土坑、列石などである。林地区の縄文時代中～後期の大型集落と位置付けられている。その他には、弥生時代の住居跡や土坑、中世～近世の掘立柱建物跡や礎石建物跡、土坑墓、焼土遺構、集石土坑などが調査されている。特に縄文時代の遺構と遺物は、大型集落の資料だけあって、量も多く、内容も豊富である。整理作業、報告書刊行に際しては、この縄文時代の資料に関して2冊の報告書にまとめ、国道部分(51区・52区・61区南)を第1分冊、町道部分(61区・62区)を第2分冊として刊行してきた。弥生時代以降の資料については、本書―第3分冊に掲載する予定で、整理作業を進めてきた。

これまでの報告書の概要としては、第1分冊では、縄文時代前期資料として2軒の住居跡と3基の土坑を掲載している。小規模で量も少ないが、周辺に存在が予想される前期集落跡を推定するに良好な資料を提示している。

中期は、環状集落跡の南側一部を報告した。初頭～中葉の遺構は土坑が主となり、住居跡の大半が後葉に比定され40軒を数える。石囲い炉と出入口埋甕を備えた例も多く見られ、典型的な中期集落を具体化する。また出土土器も加曽利EⅡ式・EⅢ式土器に加え、「郷土式」や「唐草文系土器」、大木8a式、大木9式が共伴するように、周辺地域の土器群が混在する様相を示していた。さらに、残存状態は良くないが、中期後葉～末葉段階では敷石住居跡が加わる。また、中葉末～後葉段階の土坑に焼骨を伴う例も複数見られた。焼骨は人骨であり、墓壙としての位置付けあるいは焼骨を伴う葬送儀礼の側面が捉えられた。後期の住居跡は中期末からの継続で敷石住

居を主とする。大規模な集落ではないが、点在する様相が把握され、小規模な列石遺構が接続する様相が捉えられた。後期土坑の中では、逆位の完形土器を出土する例もあり、墓壙として位置付けている。

第2分冊では、北側の調査区である町道部分の縄文時代資料を扱った。前期資料としては住居跡1軒、土坑1基が報告できたが、極めて稀少な例である。この傾向は中期初頭・前葉段階の資料にも当てはまり、国道部分である台地縁辺に、前期～中期前葉の遺構・遺物が集まる傾向が把握された。中期は中葉末から後葉の住居跡が中心となる。これは前冊の国道部分と同様の傾向を示し、第2分冊では中期住居跡56軒を報告した。石囲い炉と埋甕を設けた不整形円形を平面形とする典型的な住居跡を中心に、国道部分と併せて径80m以上の環状集落が予想された。大規模集落であり、当地区の拠点集落の一つといえよう。また51区でも見られたが、中期後葉後半段階において既に敷石住居跡が出現している。後期の敷石住居跡も数軒が調査区東側にまとまる。これらの住居跡群を東西に走行する列石遺構が接続しており、これも国道部分の51区で同様な例が検出されている。標高差もあり、幾つかの住居群が複数の列石で繋がる様相は、後期集落の景観であろうか。中期後葉～後期と時間幅を設けた遺構で掘立柱建物跡4棟が調査されている。国道部分では確認されておらず、列石や敷石住居跡との関連も興味深い在り方である。国道部分で特徴的な在り方を示した、中期あるいは後期の土坑であるが、墓壙を示唆する出土状態を示す土坑は、町道部分では検出されておらず、環状集落内の墓壙、墓域の地点的な在り方も偏在傾向が看取された。

以上のように、縄文時代を扱った既報告である第1分冊と第2分冊の概要を述べたが、第3分冊である本書は弥生時代以降の遺構と遺物を扱う。

弥生時代では住居跡2軒、竪穴状遺構2基、埋設土器1基、土坑4基、ベンガラ集中遺構2基、弥生時代遺物集中遺構2基及び遺構外出土遺物を掲載した。すべて、町道部分―61区や62区で調査された遺構で、段丘縁辺ではなく、やや中央部にまとまる傾向が見られた。出土土器を概観すると、中期前半段階の土器群を主としている。

住居跡は2軒とも、地床炉を設けていたが、明瞭な柱穴は確認できなかつた。これは、床面の検出面が黒褐色土のため、柱穴の検出が果たせなかつたためである。また、竪穴状遺構2基も炉跡が確認されている。同様に柱穴は検出されていないが、平面規模や床面の様相から、住居跡として位置付けて差し支えないと考える。ここでは、発掘調査時の遺構名を優先したため、竪穴状遺構としたが、おそらく居住を伴う住居として考えて良いだろう。

埋設土器遺構は、40号住の北東隅上層で検出された。40号住とはほぼ同時期の所産と思われ、住居に付帯する施設の可能性が高い。

弥生時代とした土坑4基のうち、62区3号土坑は大型礫が集中し、口縁部と体部下半を欠いた逆位壺が、底面に置かれていた。意図的な埋置と思われ、ここでは再葬墓あるいは墓壙として位置付けた。

ベンガラ集中遺構は2箇所を確認したが、大型土器片を出土する例と、扁平な大型垂角礫を出土した例がある。前者は、出土状態から廃棄を伴う例で、後者は作業場所の可能性を示唆した。

弥生時代遺物集中遺構と遺構外出土遺物であるが、遺構確認調査中に大量の縄文資料が出土したが、弥生土器が集中して出土した箇所が幾つか見られた。遺構は検出されず、おそらく流入や包含層出土を要因とするが、ある程度の同時性を想定して、出土土器と石器も併せて掲載した。

中世～近世(近代)として調査された遺構としては、52区で確認された掘立柱建物跡群や51区と52区で調査された礎石建物跡がある。掘立柱建物跡3基は、東西棟で重複した状態で調査された。礎石建物のうち1号建物跡は、柱穴4基が重なり、掘立柱建物→礎石建物の変遷が想定されたが、ここでは同時期の所産として一括して報告している。いずれも、中世末～近世の所産とした。

その他に石垣遺構や道状遺構、井戸遺構、溝状遺構、土坑墓、集石遺構、焼土遺構、土坑などが調査区全体で散見される。

石垣遺構2条や道状遺構は51区と52区に跨がって調査され、東西の走行を基準とし、現道にも沿う形態である。調査の手順から全貌を明らかに出来なかつたが、近世～現代に至る地域の中心部を走る継続的な動線に沿う遺構

である。

井戸遺構2基は石組み井戸と素掘りの井戸を見るが、石垣遺構や道状遺構に沿う位置に選地されており、おそらく同時期の所産であろう。当地区の生活道沿いの景観を彷彿させる遺構群である。

溝状遺構2条とも51区の検出で、浅く、小規模な例である。東西方向に走行を見る事から、水利ではなく地境などの性格が想定された。

土坑墓は51区1号土坑墓1基のみの検出である。横臥屈葬の人骨1体と貨銭が出土しているが、時期は不明である。土坑墓に関しては、他の遺跡に比して少ない感がある。ただ、その他の土坑出土の貨銭の数量からも、人骨が遺存していない墓壙を想定するべきであろう。

集石遺構は51区で2基を見る。詳細な時期、性格は判然としませんが、土坑形状や出土遺物から、墓壙ないしは宗教的な施設としての位置付けが可能とした。

焼土遺構は15基を報告した。基盤層が焼土化した簡素な例もあるが、51区48号焼土や52号焼土、52区18号焼土のように、遺物を出土した例も見られた。遺物に貨銭が見られることから、墓壙などの性格も想定されるが、検討を要しよう。

土坑は、51区で37基、52区48基、61区26基、62区は2基を掲載した。このうち、陥穴状土坑6基は中世に比定される。その他の土坑は近世～近代に時期を求めた。特に桶付帯土坑とした円形土坑の性格は便槽とする例と、墓壙とする考えがあるが、本書に掲載する桶付帯土坑の多くを墓壙として位置付けた。

さて、中世～近世の遺構分布を見ると51区・52区の段丘縁辺の集中が顕著である。おそらく、東西に走行する道路などの動線から分布が偏ったものと考えられる。

第2節 基本土層

林中原Ⅱ遺跡が位置する吾妻川左岸最上位段丘は、段丘面が安定しており、南側への緩斜面地形が大きく広がる。洪積台地であり、基本層序としては、基盤層に応桑泥流があり、その上に黄褐色ローム層と上位に堆積する黒褐色土が基準となる。しかしながら、当地区は南流する小河川に画された洪積台地が東西に横列する景観であり、各台地の基本層序は若干ながら様相を異にする。これは斜面地形に伴う地滑りなどの二次堆積土が複雑に重

なるため、各遺跡で得られた層序は、安定した単純な層位を示していない。

本遺跡においても、調査区内の各地点で観察された層位は異なる。ここでは、代表的な層位を示す51区南壁の土層を基本土層としたい。

I層、表土は地点によって、層厚が著しく異なるが概ね20～30cmの堆積である。

II層は比較的厚く堆積し、黒褐色～黒色を呈す。比較的軟質で白色粒を含む。本書で掲載した中世～近世遺構の多くは、II層下位で平面形を確認できる。

III層は地点によって層厚が異なり、複数層に細分できる。しかし、細分層位が出土土器の細分時期とは対応できない。おそらく、自然及び人為的な土壌の移動が頻繁に行われた証左と考えられよう。やや硬質となり、黄色粒(As-YPk)を含む。また、本遺跡では確認できなかったが、林宮原遺跡や三平I遺跡などにおいて、III層中に浅間粕川テフラ(As-Kk)の可能性がある青灰色粒子を見ている。平安時代(9世紀)の竪穴住居跡埋土上層に堆積する例が知られる。

本遺跡においては、下層で縄文時代後期以降の遺構確認面及び遺物包含層である。本書に掲載した弥生時代遺構も中層から下層にかけて検出している。

IV層はいわゆるローム漸移層に対応する。暗褐色～黄褐色を呈し、硬質で黄色粒を顕著に含む。縄文時代前期以降の遺構が確認でき、本遺跡の中期遺構の大半はこの層位で検出している。

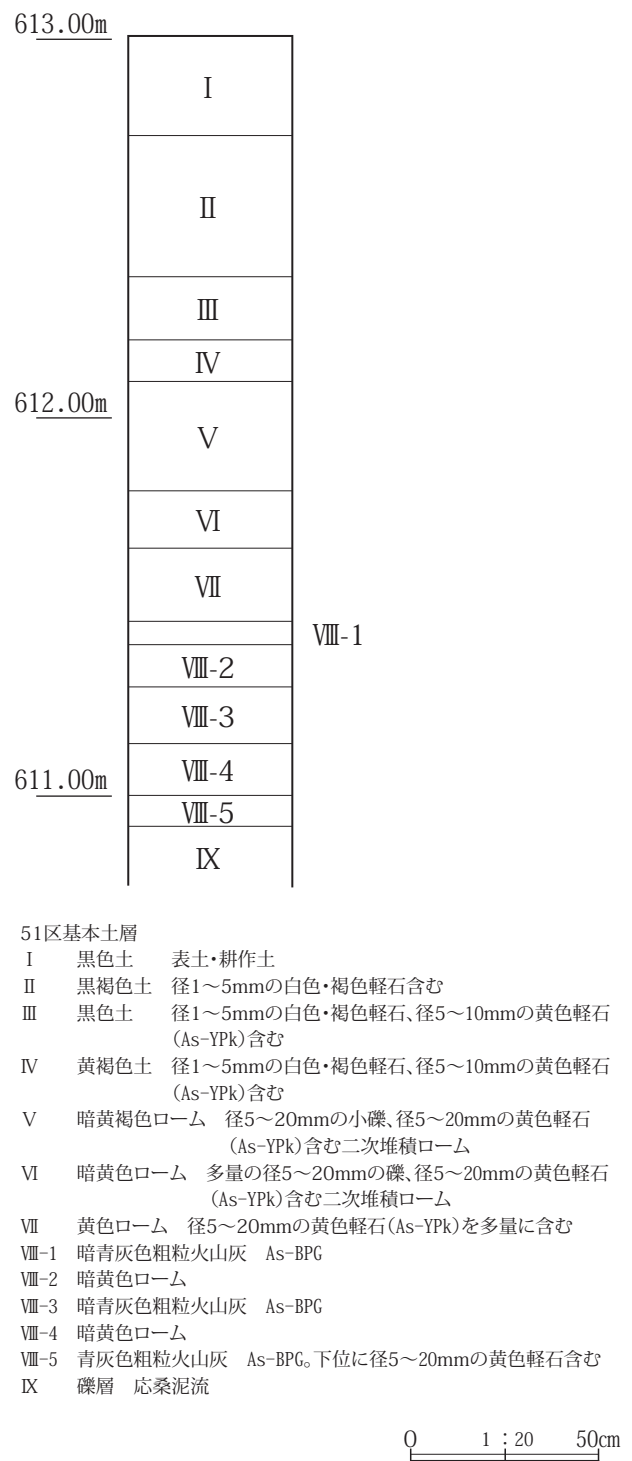
V層は二次堆積ロームないしは軟質ローム層である。黄褐色を呈し礫を含む。二次堆積ロームは傾斜や谷地形に伴う崩落土とされるが、検討を要する。なお、本書では軟質ロームあるいは黄褐色ロームとして一括した。最終的な遺構確認面である。

VI層も二次堆積ロームである。V層に比して礫の保有量が多い。軟質ロームである。

VII層は黄色ロームや黄色粒を多く含む。硬質ロームに相当する。陥穴状土坑など深度の大きな遺構は、この層位を掘り抜き、VIII層まで達していた。

VIII層は浅間板鼻褐色軽石(As-BP)を主体とした幾つかの層位をまとめた。

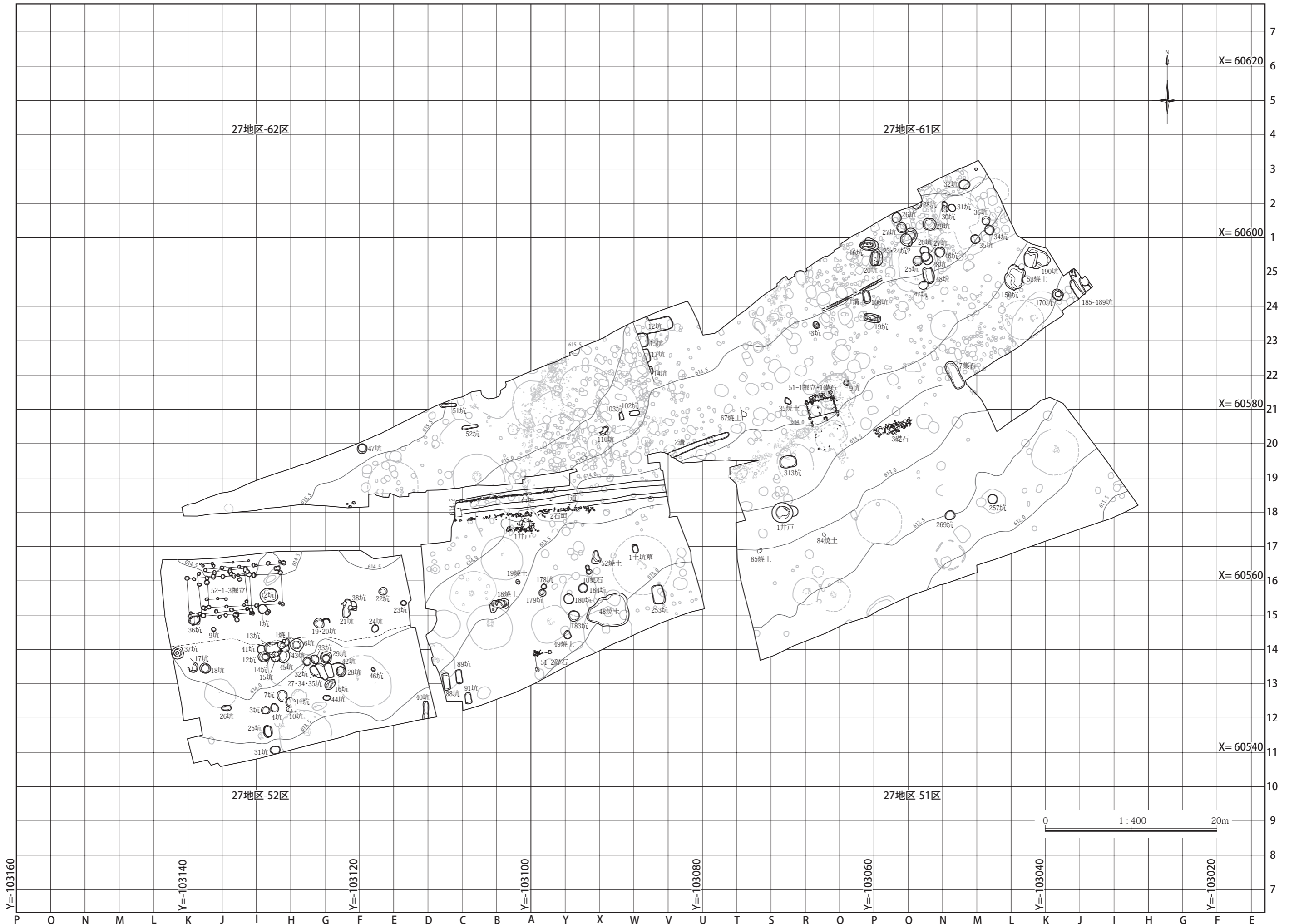
IX層、応桑泥流である。



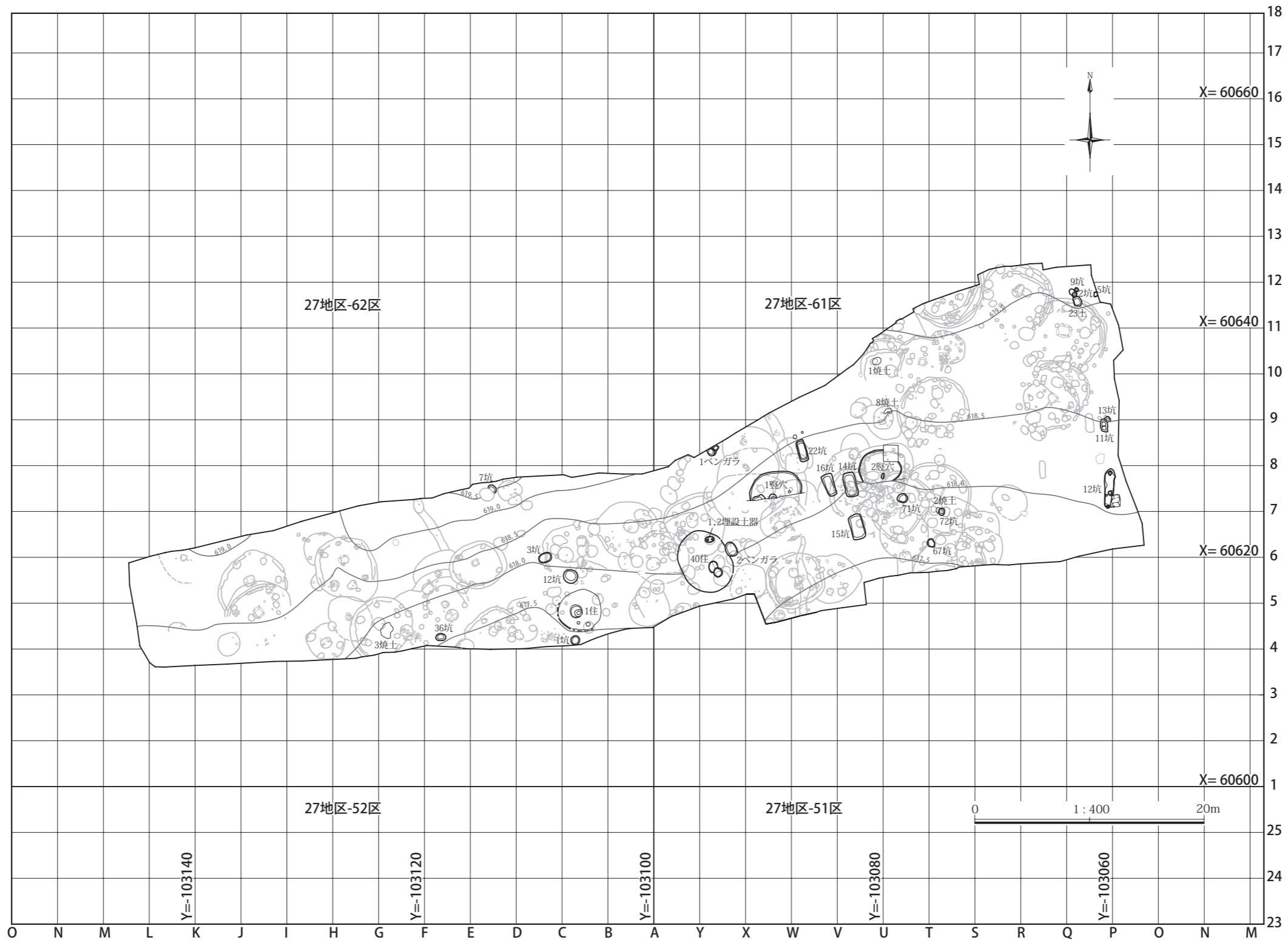
第6図 基本土層図



第7図 林中原Ⅱ遺跡全体図(51・52・61・62区)(長野原町都市計画図使用)



第8図 林中平原Ⅱ遺跡 弥生時代以降全体図(51・52・61区/国道部分)



第9図 林中原II遺跡 弥生時代以降全体図 (61・62区 / 町道部分)

第3節 弥生時代の遺構と遺物

本遺跡で調査された弥生時代の遺構は、縄文時代遺構に比して多くはなく、客体的な存在である。本節で報告する遺構は、竪穴住居2軒、竪穴状遺構2基、埋設土器、再葬墓と目される土坑1基、ベンガラ集中地点2箇所、遺物集中地点2箇所などである。いずれも、弥生時代前期終末～中期前半に比定される例で、群馬県内での調査例は極めて少ない。しかしながら前章でも若干触れたが、吾妻川流域においては少量といえども確実に分布県内の中心といえる地域である。本遺跡の弥生時代遺構、遺物も吾妻川流域の良好な出土例の一つとして評価され得る資料であるため、頁数を割いて報告したい。

本遺跡の弥生時代遺構は、北側の61区・62区に集まる傾向がある。台地縁辺にあたる51区や52区には土坑も見られない。該期の生活領域を類推する上でも重要な遺構立地を示していた。

1. 竪穴建物(以下住居・住居跡)

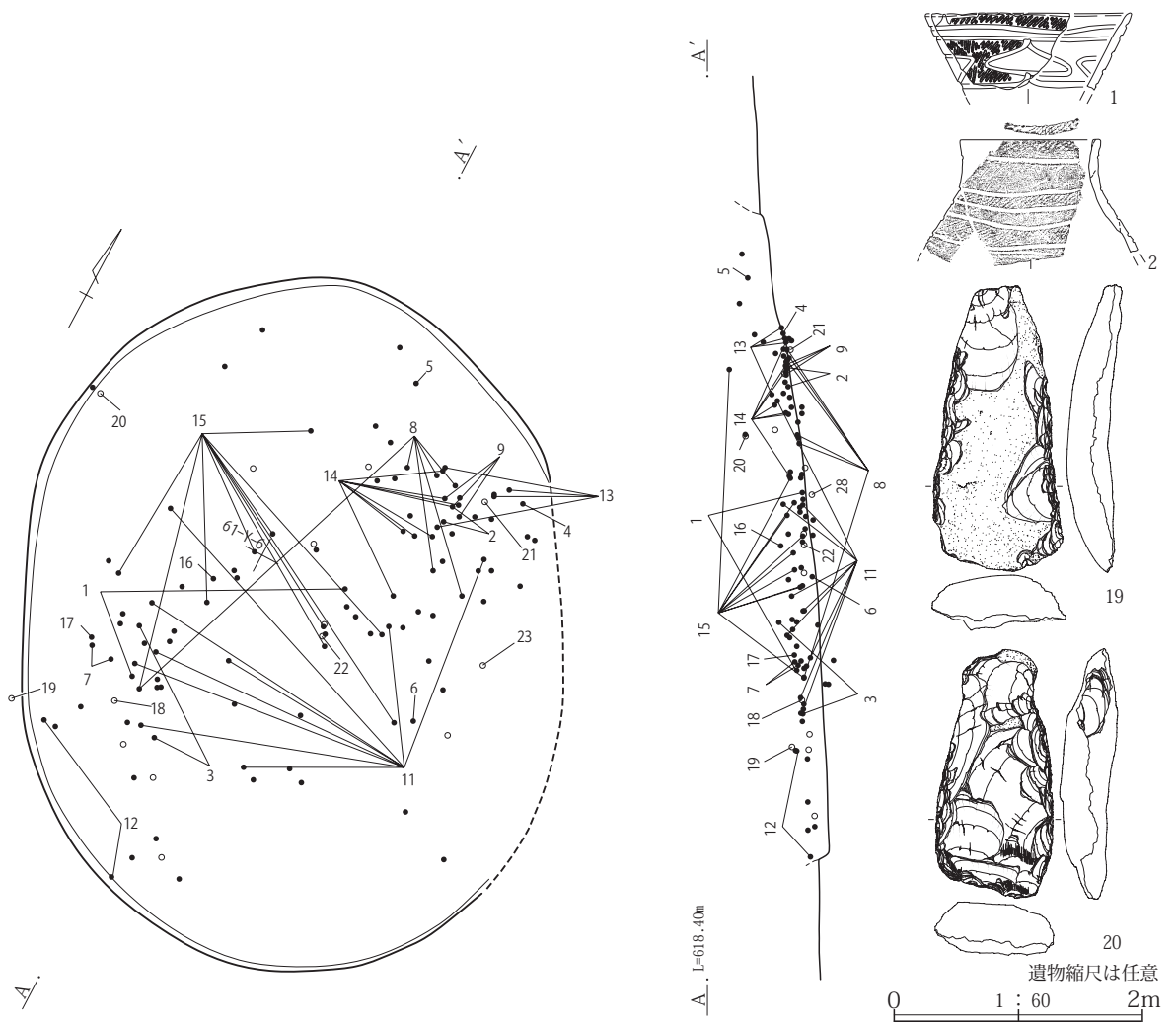
2軒の住居を報告する。本遺跡で調査された竪穴住居跡の多くは縄文時代の所産であり、調査の主眼も縄文時代遺構の検出に主体を置いていた。その中で、同時に弥生時代に比定される2軒の住居跡が検出されており、縄文時代の住居とは分けて、本冊で報告する。

2軒の住居とも町道を対象とした調査区である61区、62区に位置する。

61区40号住居跡(第10～14図 PL.2・27)

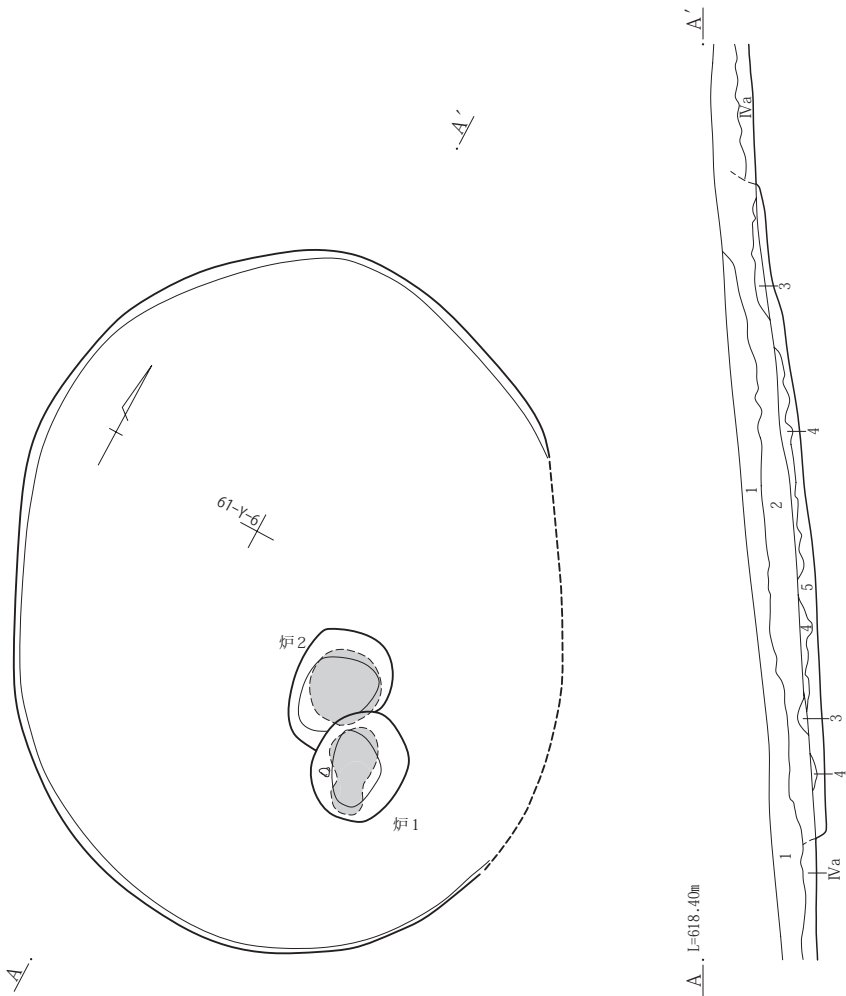
位置：61区西側の62区との境界付近で調査された。61区X・Y-5・6グリッドに位置する。周辺は南側への緩傾斜地形が広がり、ほぼ平坦地形での調査となった。住居内に1・2号埋設土器、東側に2号ベンガラ集中地点が重複・近接するように、比較的弥生時代遺構が集まる箇所である。

遺物分布

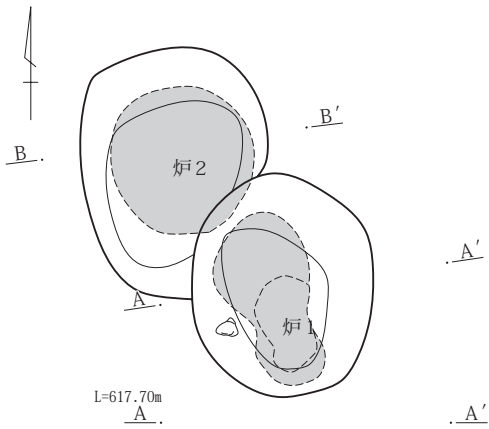


第10図 61区40号住居跡(1)

使用面

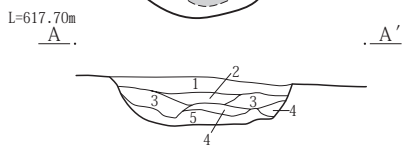
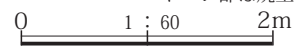


炉



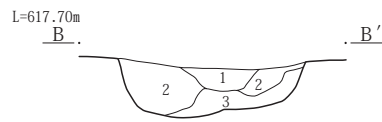
40号住土層

- 1 暗褐色土 ややシルト質。白色粒を少量含む
 - 2 黒褐色土 ややシルト質。ベンガラ粒を微量含む
 - 3 黒褐色土 褐色土塊、炭化物を微量含む
 - 4 黒褐色土 小礫を極微量含む
 - 5 暗褐色土 白色粒を少量含む
- トーン部は焼土



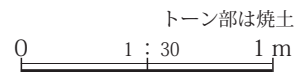
炉跡1土層

- 1 暗褐色土 焼土大塊を少量含む
- 2 赤褐色土 焼土塊を主体とする
- 3 黒褐色土 焼土小塊を少量含む
- 4 黒褐色土 焼土小塊を微量含む
- 5 黒褐色土 焼土粒を微量含む

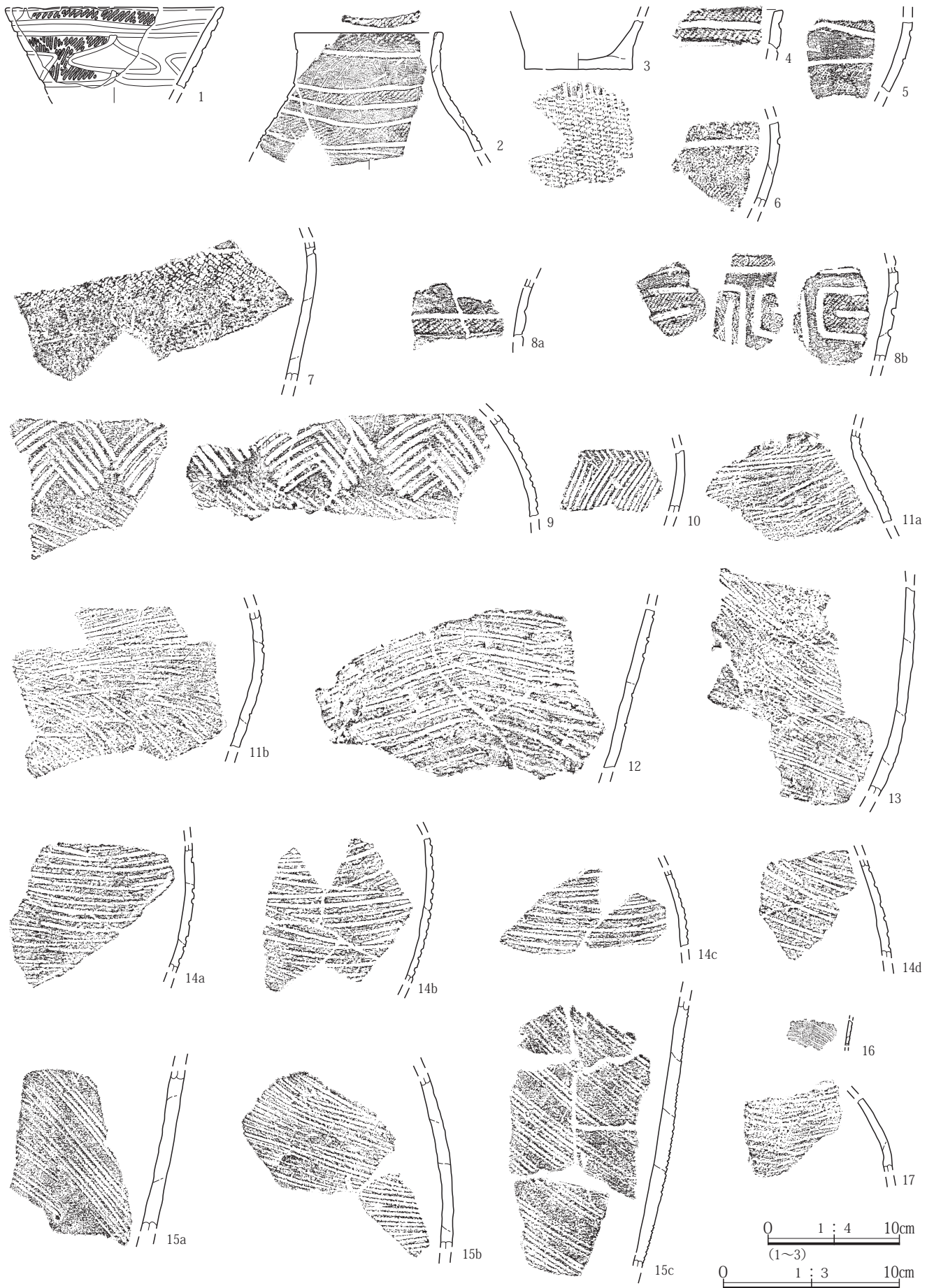


炉跡2土層

- 1 赤褐色土 焼土塊を主とする。
ベンガラ粒を微量含む
- 2 極暗褐色土 焼土粒を少量含む
- 3 暗褐色土 焼土粒を微量含む



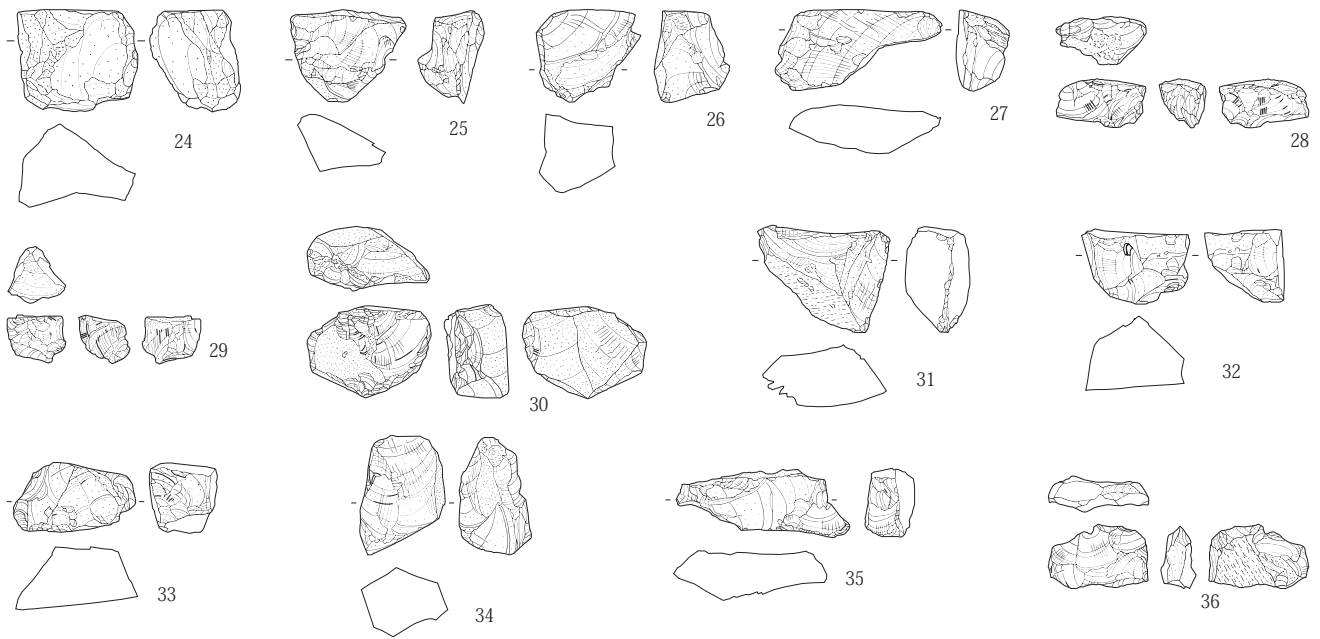
第11図 61区40号住居跡(2)



第12図 61区40号住居跡出土遺物(1)



第13図 61区40号住居跡出土遺物(2)



24～36は事業団643集『林中原Ⅱ(2)』第351・352図より転載

第14図 61区40号住居跡出土遺物(3)

経過：ローム漸移層上層の暗褐色土中で確認できた。上層は黒褐色土の堆積が厚く、縄文時代遺物と混在して弥生土器の出土が見られたが、弥生時代遺物のみが集中するようになり、同時に炉跡が床面南で確認されたため、住居跡として確定した。その段階では既に壁は薄く10cm程度の深さでの調査となった。

規模：長軸を北北西に向けた楕円形状の平面形を呈し、平面規模は、560×410cm、深さは15cmを測る。前述のように浅く残存度は良くない。尚、南東側の壁は傾斜のため判然とせず推定線を施した。

重複：弥生時代の遺構としては、床面北東壁際に1・2号埋設土器が重なる。また東側壁に2号ベンガラ集中遺構が接する。重複遺構との新旧は土層の把握が果たせなかったため、不明であるが、1・2号埋設土器との時間差は大きくない。あるいは、住居内施設としても考えておく必要がある。縄文時代の重複遺構としては、43号住が北側の床面下で、47号住が南側に近接して調査されている。いずれも遺存度は良くなく、調査による新旧は把握できなかった。

床面：炉跡を確認した面を床面とした。漸移層である暗褐色土を基調とする地床である。ほぼ平坦面を築くが、中央部分が若干ながら凹む傾向が見られた。貼り床や硬化面は見られなかった。

施設：床面上に、柱穴や壁周溝は検出されず、炉跡の

みを見る。北東壁際に調査された1・2号埋設土器については後述したい。

炉跡：床面南東よりで2基が重複した状態で検出された。おそらく、床面上での炉移動による重複であろう。新旧は不明である。炉1・2はともに北に主軸に向けた不整楕円状を呈し、炉1は平面規模が88.0×72.0cm、深さ23.0cm、炉2は100.0×75.0×24.0cmを測る。両炉跡埋土とも、焼土塊が堆積しており、北側の炉2内部にはベンガラ粒も見られた。おそらく東側壁に近接するベンガラ集中遺構の影響と思われる。

遺物：床面中央に広がりを持って出土している。断面分布からは平坦な堆積が伺われ、おそらく床面及び床面上に廃棄された状況が看取された。出土層位から、住居廃棄時の所産と捉えられよう。主な出土遺物としては、浅鉢(1)、壺(2)は床直及び床直上より出土している。さらに石鍬(19・20)は埋土上層からの出土で、廃棄あるいは流入の所産と捉えられるが、いずれも該期の特徴的な石器である。また、床面北側で床直及び床下に相当する層位より、黒曜石原石がまとまって出土している。出土層位及び黒曜石の様相、周辺遺構の在り方から、本住居の所産とせず、縄文時代の所産(遺構外出土資料)として、前冊において黒曜石産地同定分析の試料とした経緯がある。その後、弥生時代前期～中期にも同様な黒曜石の出土例があると聞き、今回の報告にも再掲載させてい

ただ、縄文時代の所産とするか、弥生時代の本住居に帰属させるかは、判断に迷うところであるが、後述する2号竪穴状遺構でも少量ながら黒曜石の出土が見られ、様々な可能性を模索したい。

所見：壁の遺存度は悪いが、整った楕円状を呈する住居である。柱穴を見ないため、上屋構造の把握が果たせないが、炉跡の存在及びまとまった遺物の出土状況から住居としての位置付けは妥当と思われる。時期は出土遺物の様相から弥生時代中期前葉と捉えられ、該期の住居遺構として希有な存在として高い評価を与えたい。

62区1号住居跡(第15~17図 PL.3・28)

位置：62区東側で調査された。61区境に近く、先に述べた61区40号住居とは東へ8m程の距離にある。62区B・C-4・5グリッドに位置する。61区40号住居と同様に、南側の緩傾斜地形にありほぼ平坦面に築かれる占地状況を示す。同時期の遺構としては、1号土坑が南に近接する。

経過：縄文遺構との重複が比較的少なく、出土遺物は弥生時代を中心としたため、単独の弥生時代住居占地として位置付けられた。出土遺物は黒褐色土中より見られ、遺構確認面はローム漸移層上位の暗褐色土で行われた。少量ながら、遺物の集中が見られ、炉跡の検出が果たせたため住居として位置付けることができた。61区40号住

と同様に壁の確認は浅く、深さは約10~25cmに止まったように、遺存度は悪い。

規模：径約370~390cmの不整円形を平面形とする。やや小型の住居である。深さは壁の遺存が良好な北側から東側にかけて約25cmを測り、緩やかな立ち上がりを示していた。尚、南側壁は傾斜地形のため、西側壁はグリッド調査区との接点のため確認が果たせず、推定線を施している。

重複：弥生時代遺構との重複は無く、1号坑との近接が見られるのみである。縄文時代遺構としても住居とは重複せず、45坑や46坑と重なる。いずれも本住居調査後の検出である。

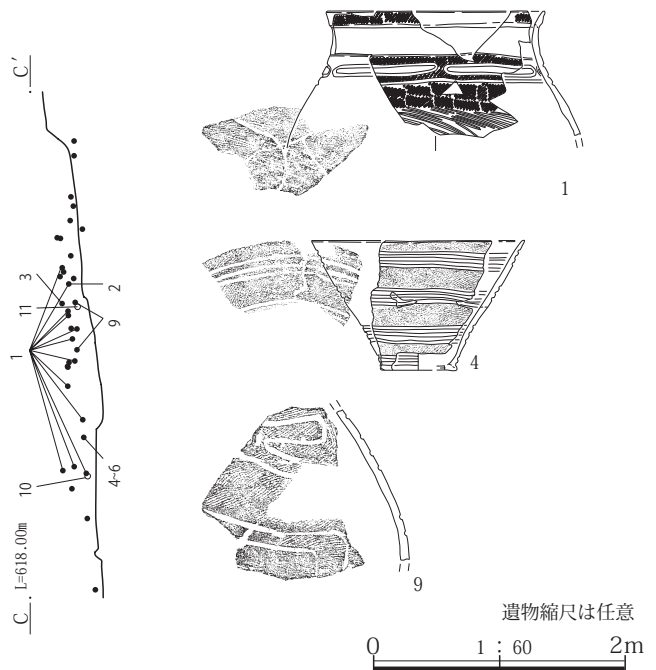
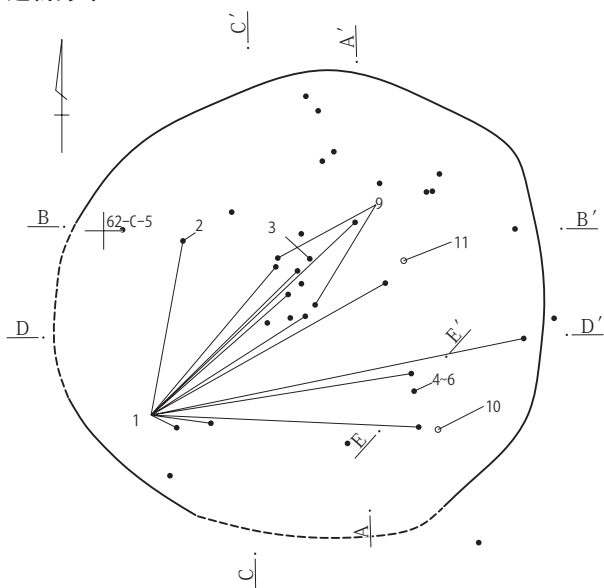
床面：焼土を伴う炉跡の確認面を床面とした。ローム漸移層のやや明るい色調の暗褐色土を地床とする。貼り床や顕著な硬化面は認められなかったが、炉跡東側の小範囲が、若干ながら硬い印象を得た。

施設：床面上では小ピット2基を得た。規模・配置から柱穴としての位置付けは困難である。

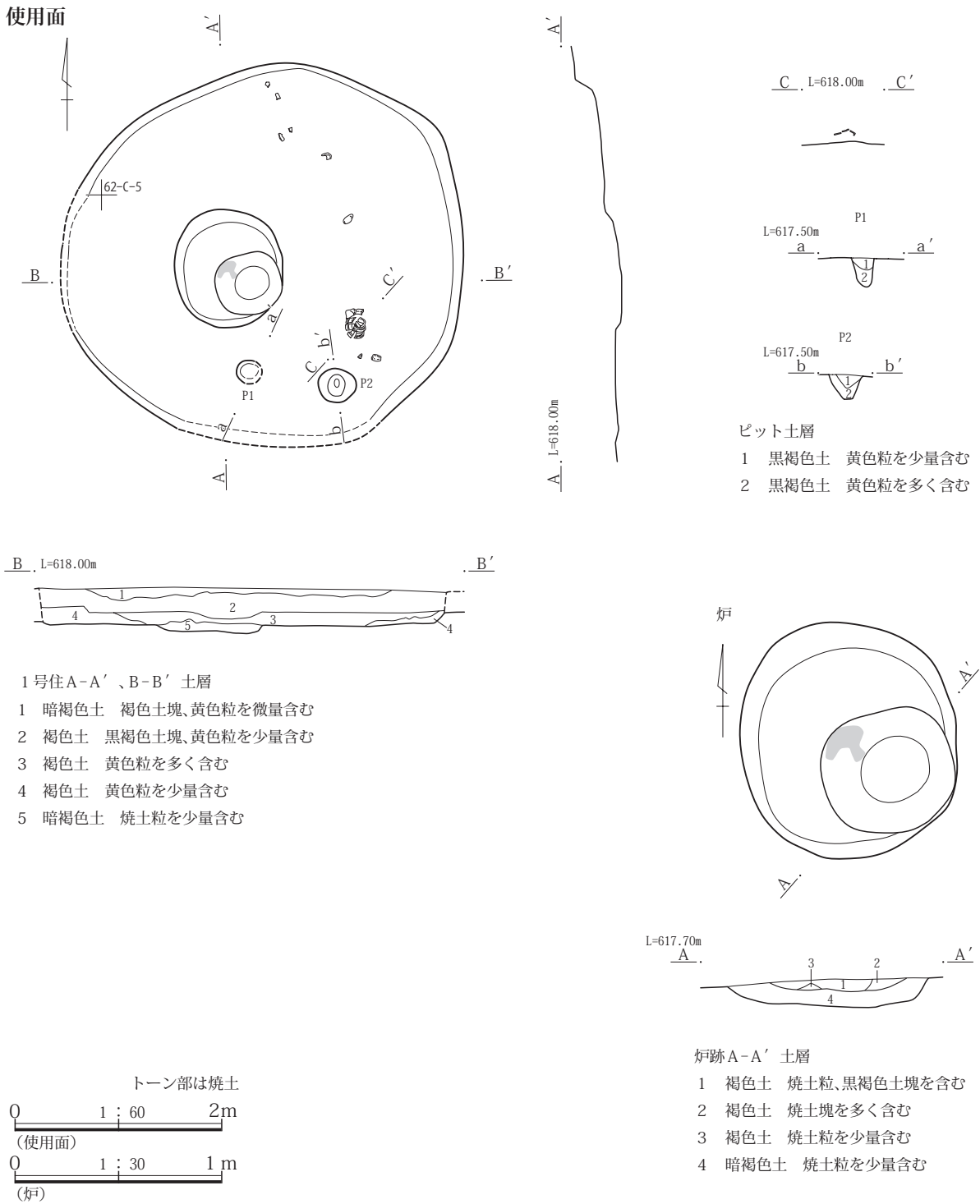
炉跡：床面中央やや西寄りに径約110cmの不整円形を呈する地床炉を検出した。浅く深さは10cmに満たないが、焼土粒、焼土塊を含む褐色土が堆積しており、底面も若干ながら焼土化していた。底面が有段化しているが、特に顕著ではなく、有機的な所産ではないようだ。

遺物：住居中央部分で、床直あるいは床直上に相当す

遺物分布



第15図 62区1号住居跡(1)

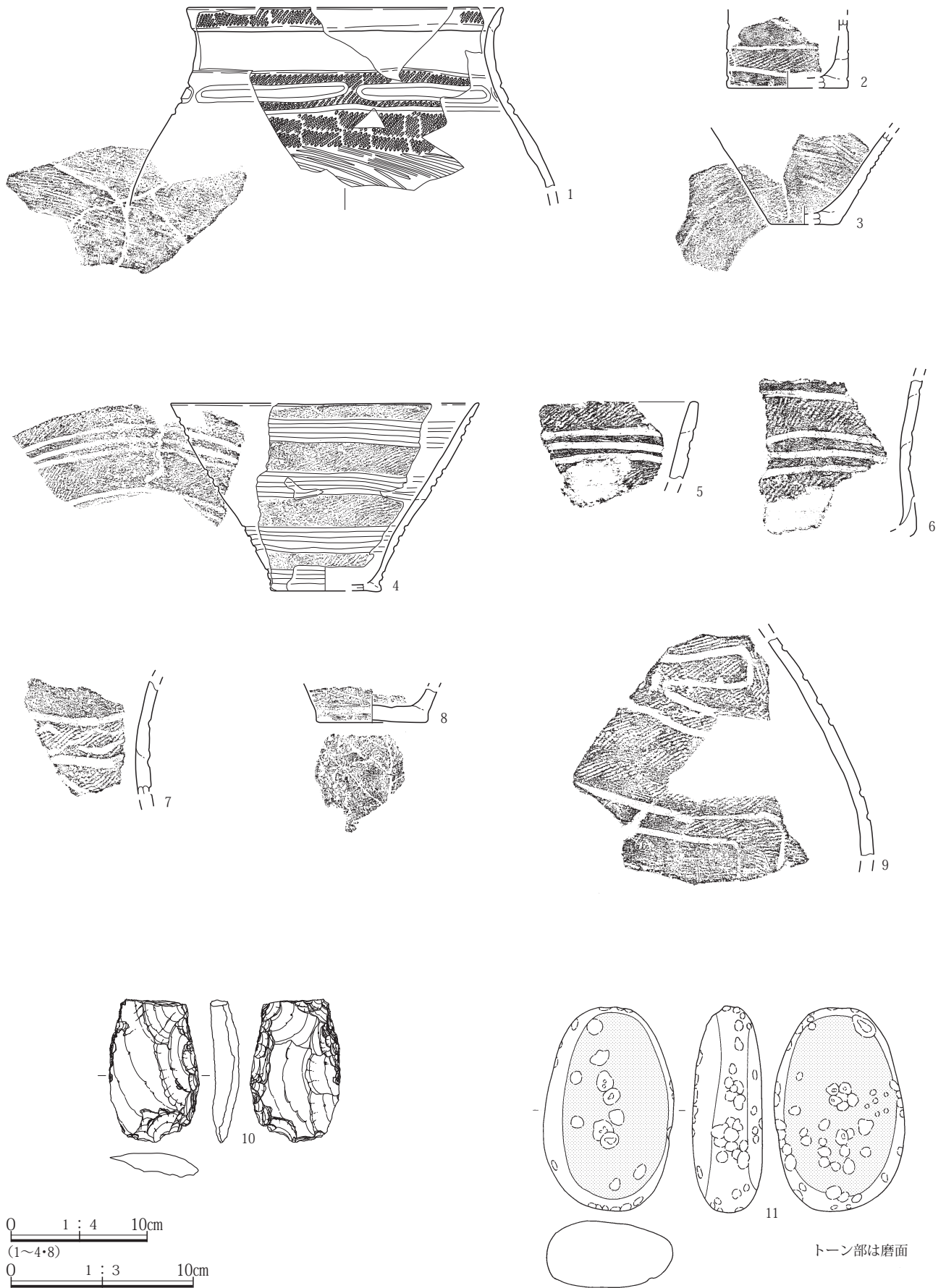


第16図 62区1号住居跡(2)

る水平に近い高さで出土が見られた。出土量も多くないが、時期的にまとまっていることから、短期間の流入・廃棄の所産と捉えられた。出土土器の多くが有文の甕、壺、浅鉢で横位沈線と磨消文を多く見る。4～6は床直の出土と捉えられ、他の出土土器と同様に住居時期を具体化する。

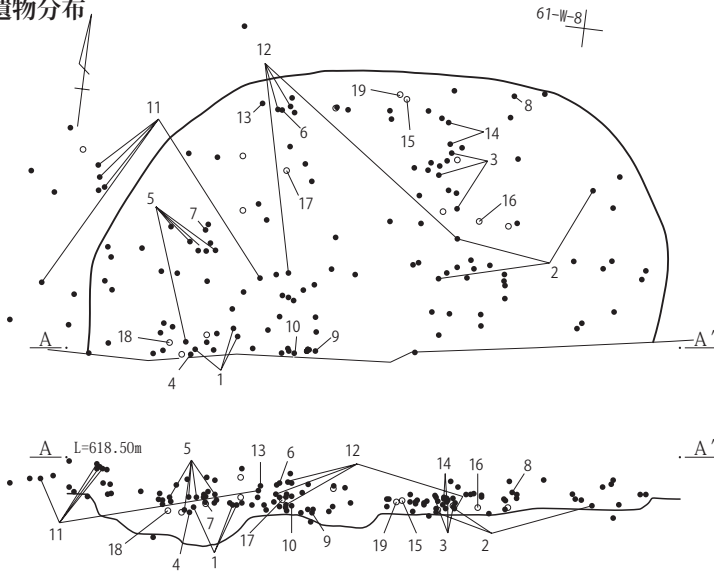
所見：径3.8m程の小型円形住居である。炉跡の存在から住居としたが、2基の小ピットは柱穴とは位置付け

られなかった。出土遺物は少量ながら、有文土器がまとまる特徴を見せる。時期は出土土器から弥生時代中期前葉と判断した。

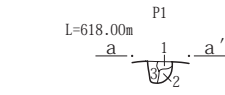
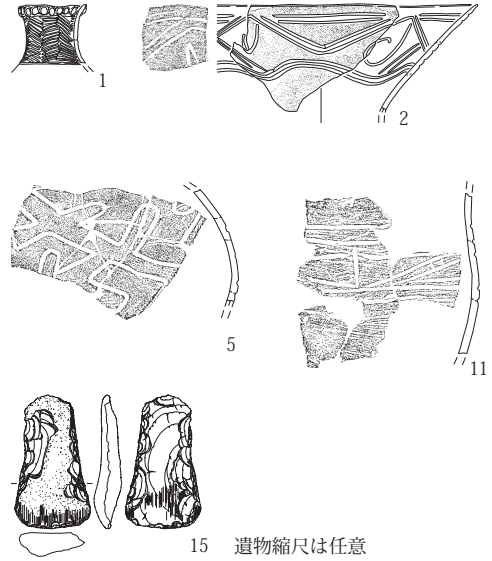
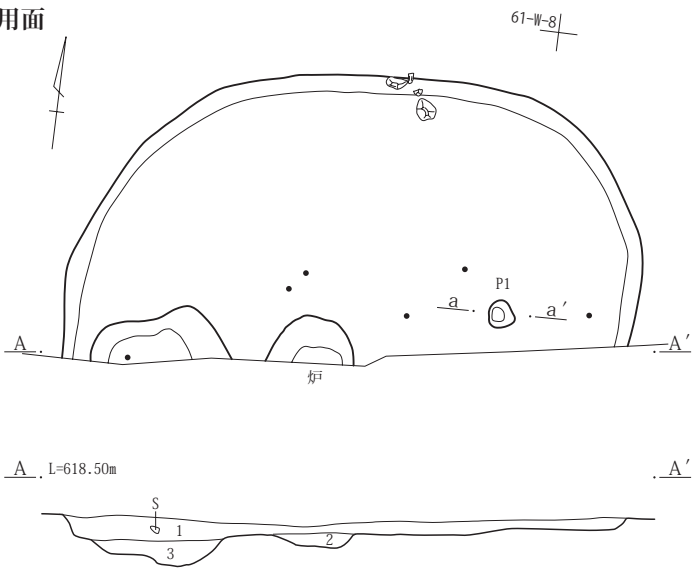


第17図 62区1号住居跡出土遺物

遺物分布



使用面



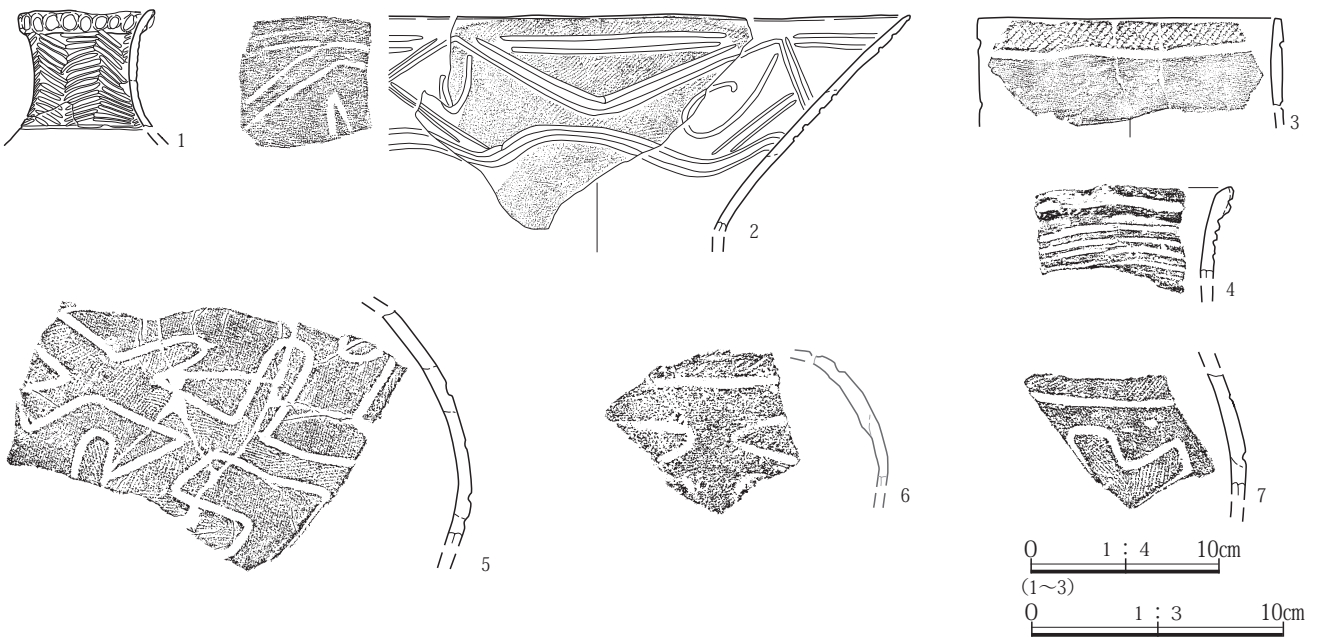
ピット土層

- 1 黒褐色
- 2 黒褐色土 中礫を微量含む
- 3 黒褐色土 褐色粒微量含む

1号竪穴状遺構土層

- 1 黒褐色土 白色粒を少量含む
- 2 明赤褐色土 焼土塊主体。しまり弱い
- 3 灰褐色土 黄色粒を多く、炭化物を微量含む

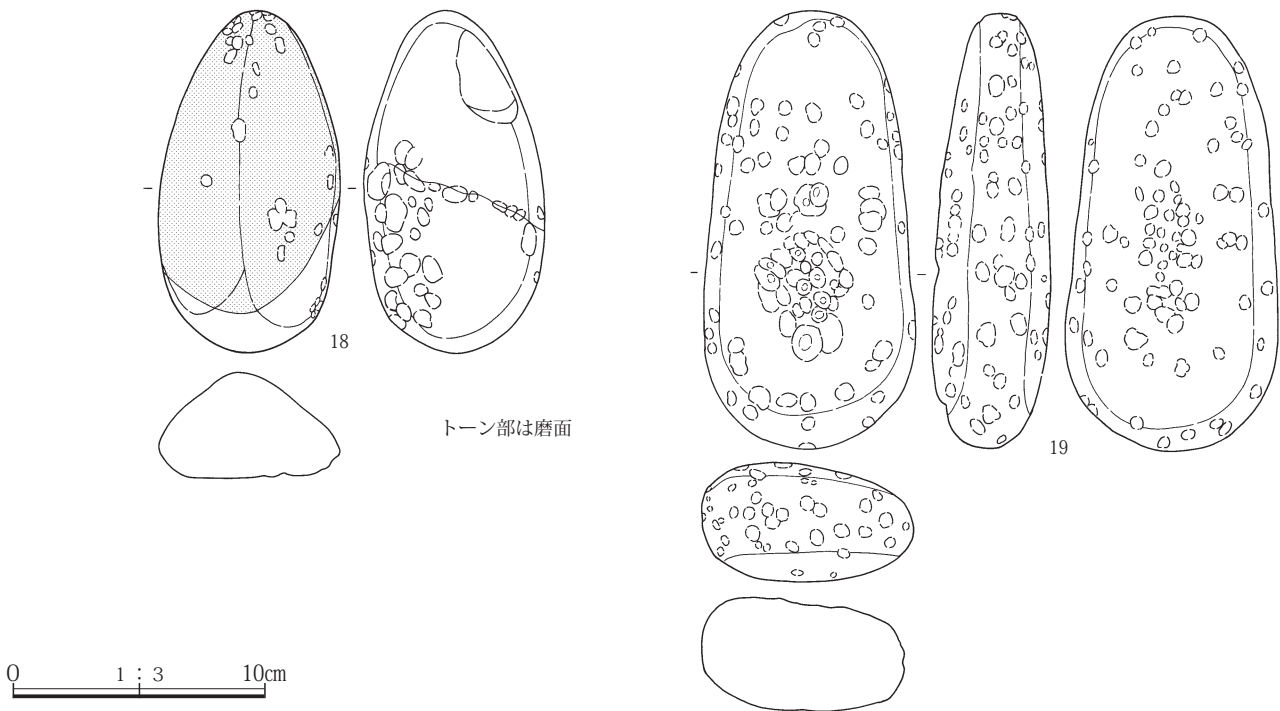
0 1 : 60 2m



第18図 61区1号竪穴状遺構及び出土遺物(1)



第19図 61区1号竖穴状遺構出土遺物(2)



第20図 61区1号竪穴状遺構出土遺物(3)

2. 竪穴状遺構

本遺跡では縄文時代遺構を含めると4基の竪穴状遺構が調査されている。本来、竪穴状遺構は、住居跡としての規模や施設を持たないものの、有機的な住居状の地込み落ち込み一遺構として位置付けられ、継続的な居住を伴わない一時的な施設として、集落内に存在する例として考えられてきた。故に、柱穴や炉跡を有さない、径2～3m程度の遺構を竪穴状遺構として位置付けるべきである。

しかしながら、本遺跡の調査で得た竪穴状遺構は柱穴や炉跡を付帯する例、柱穴は見ないものの炉跡を検出した例など、住居とほぼ同義の遺構として位置付けられている。ここでも、弥生時代に比定される2基の竪穴状遺構を報告するが、住居跡として位置付けられるべき遺構である。整理作業においては、住居跡として遺構名を変える考えもあったが、遺物帰属などの混乱が予想されたため、調査時の遺構番号をそのまま踏襲して、報告する。

61区1号竪穴状遺構(第18～20図 PL.4・28)

位置：調査区61区中央やや西寄りで調査された。前述した61区40号住は南西約6.5mに、後述する61区2号竪穴状遺構は東約9mの61区V・W-7グリッドに位置する。近接した位置では無いが、弥生時代の遺構群としてまとまりをみる。周辺は南南東への緩傾斜地形で平坦地

に近く、縄文時代の23号住や39号住などが密集する地点である。

経過：調査の手順が災いし、北半分のみ調査となっている。工事工程の都合で調査区の一部南側が先行調査された結果である。北半の調査では、黒褐色土中より遺物の出土が見られ、南半の調査区境断面で、住居状の土層が観察されたため、竪穴状遺構として位置付けた。

規模：東西軸長約4.5mを残存規模とする。おそらく不整形円形～楕円形を平面形とする。深さは15cm程で浅く、壁の立ち上がりも弱い印象を受ける。

重複：弥生時代の遺構とは重複しない。本遺構調査後に縄文時代住居である23号住や28号住、41号住が下位で検出されている。

底面：ローム漸移層上層である暗褐色土を底面とするが、やや暗い色調を呈し検出に手間取った。凹凸のある底面で、床面のような硬化面や貼り床は見られなかった。施設：小ピット1基(P1)と調査区境断面に土坑2基を確認した。P1は浅く、柱穴としたが妥当性を持たない。土坑2基のうち1基からは焼土の堆積が確認されたため、ここでは炉跡として位置付けたい。

炉跡：南半を逸するが、底面中央やや西よりに径約70cmの不整形円形土坑を炉跡として位置付けたい。焼土塊を主体とする埋土であり、底面中央に近い位置からも炉跡として捉えられよう。西側に近接してさらに土坑1基を

見るが、焼土や炭化物の堆積は無く、炉跡としての性格は求められない。

遺物：埋土中より底面より浮いた状態で、破片状態の土器片が集まる。完形土器の出土は見られず、廃棄あるいは短期間の流入と捉えられた。壺(1・4~9)、浅鉢(2)、甕(3・10~14)が見られる。なお、打製石斧(15・16)、磨石(18)、敲石(19)は底面北側でまとまることから、本遺構に伴う石器と判断したが、周辺には縄文時代の遺構も集中することから確定的ではない。

所見：適確な柱穴を見ないが、炉跡の存在と平面規模からも住居跡として位置付けて良いだろう。南半の調査が及ばなかったのは残念だが、出土遺物の時期的なまとまりもあり、良好な資料を提供する。時期は出土土器から弥生時代中期前半であろう。

61区2号竪穴状遺構(第21~24図 PL.4・29)

位置：調査区61区中央部で調査された。61区T・U-7・8グリッドに位置する。前述の61区1号竪穴状遺構は西に占地するが、弥生時代の遺構は少なくなる。周辺は南への緩傾斜地形が広がり、ほぼ平坦地形と言えよう。縄文時代の遺構も多数が重複密集する地点である。

経過：1号竪穴状遺構と同様に調査手順の都合で、南端の一部が検出出来なかった。また、北東隅は試掘坑が

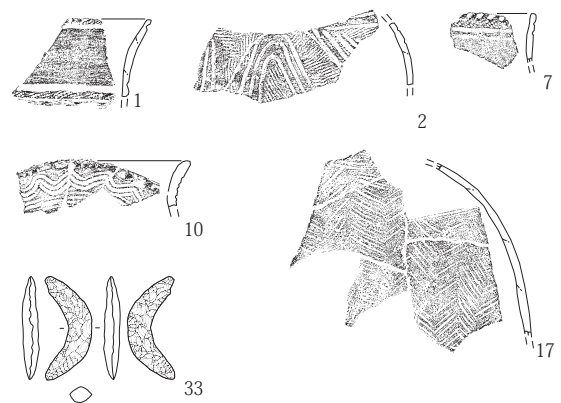
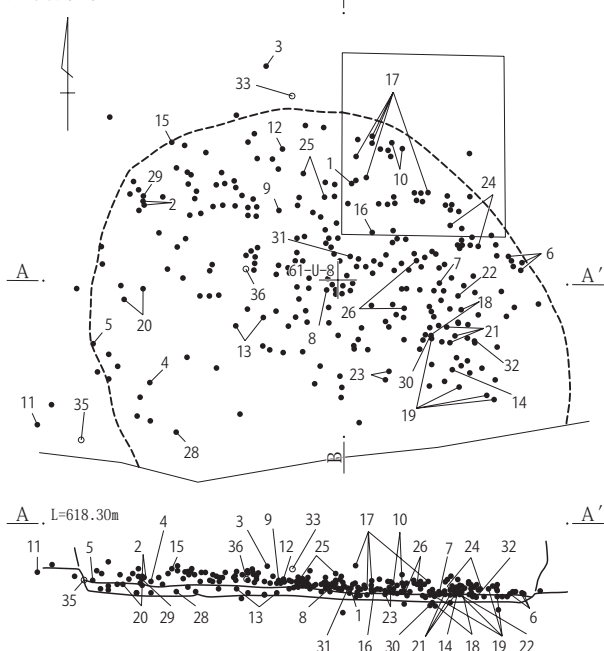
設けられ、遺構密集地点の下層を探っており、ここも遺構平面形の把握が果たせなかった。しかしながら、遺物分布は記録化している。遺構確認面は上層の黒褐色土中であるが、明瞭な平面形を把握できたのは下位層のローム漸移層上層の暗褐色土である。そのため断面形では壁の立ち上がりを確認したが、平面形における壁の把握は緩やかな立ち上がりで判断した。また、調査では底面南側に焼土と自然石の散布を見たため炉跡として位置付けたが、住居跡ではなく竪穴状遺構として調査を進めている。

規模：径約3.7mの不整円形を平面形とする、やや小型の竪穴状遺構である。深さは約20cmを測り、壁の立ち上がりもやや弱い。土層観察による把握では壁高は50cmを超え、良好な竪穴状遺構として位置付けられよう。

重複：弥生時代の遺構との重複は見られない。下面より縄文時代後期初頭に比定される敷石住居跡24号住が検出されている。本住居跡が直上に重なる状態であり、あるいは24号住の埋没が完了せず凹地の段階で本住居が構築された可能性もある。

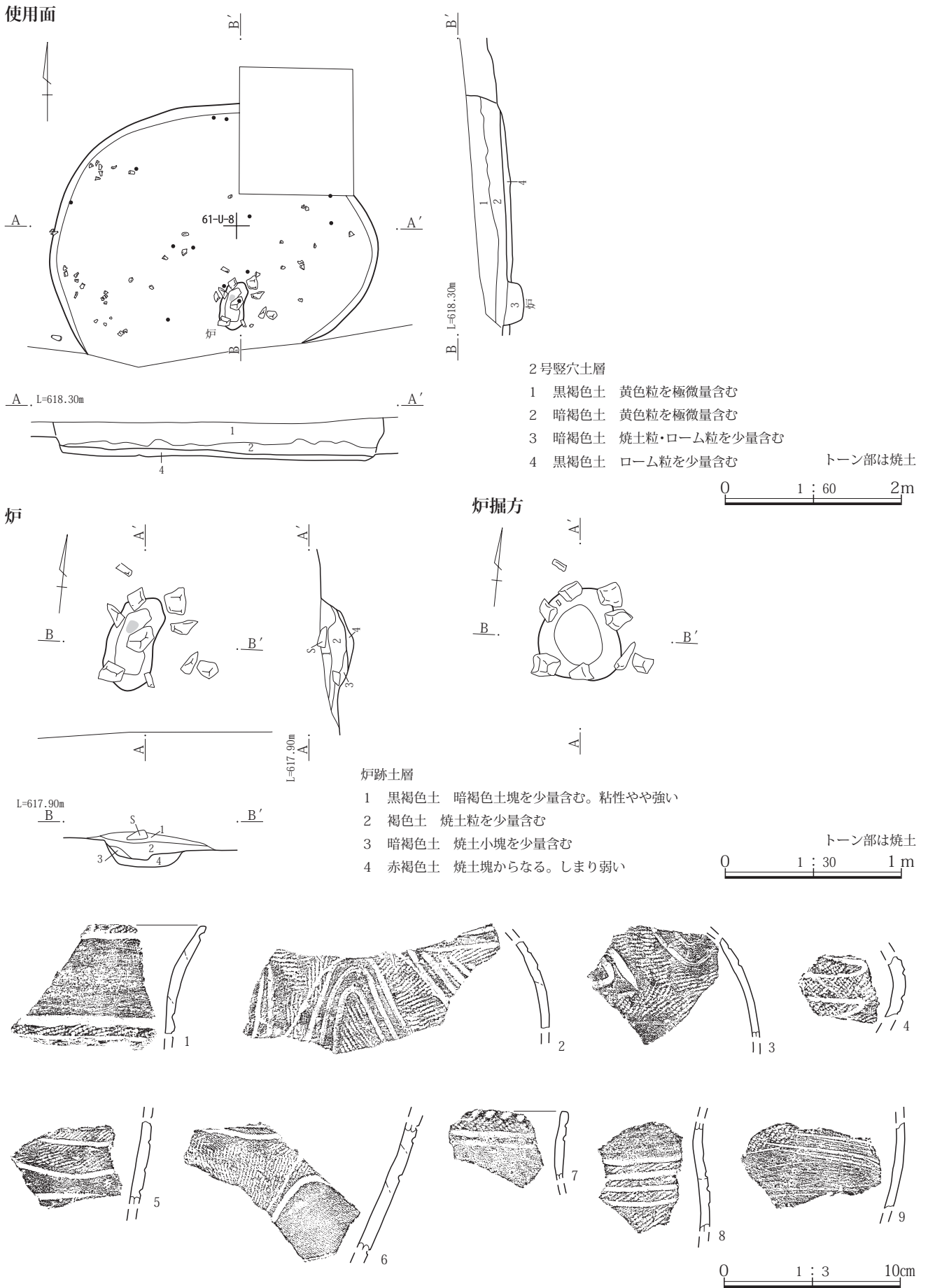
底面：ローム漸移層上層である暗褐色土を底面とするが、やや暗い色調を呈す。僅かながら南東への傾斜を見るが、ほぼ平坦面が築かれる。硬化面は見られないが、黒褐色土を貼り床構成土としていた。床面としての位置

遺物分布

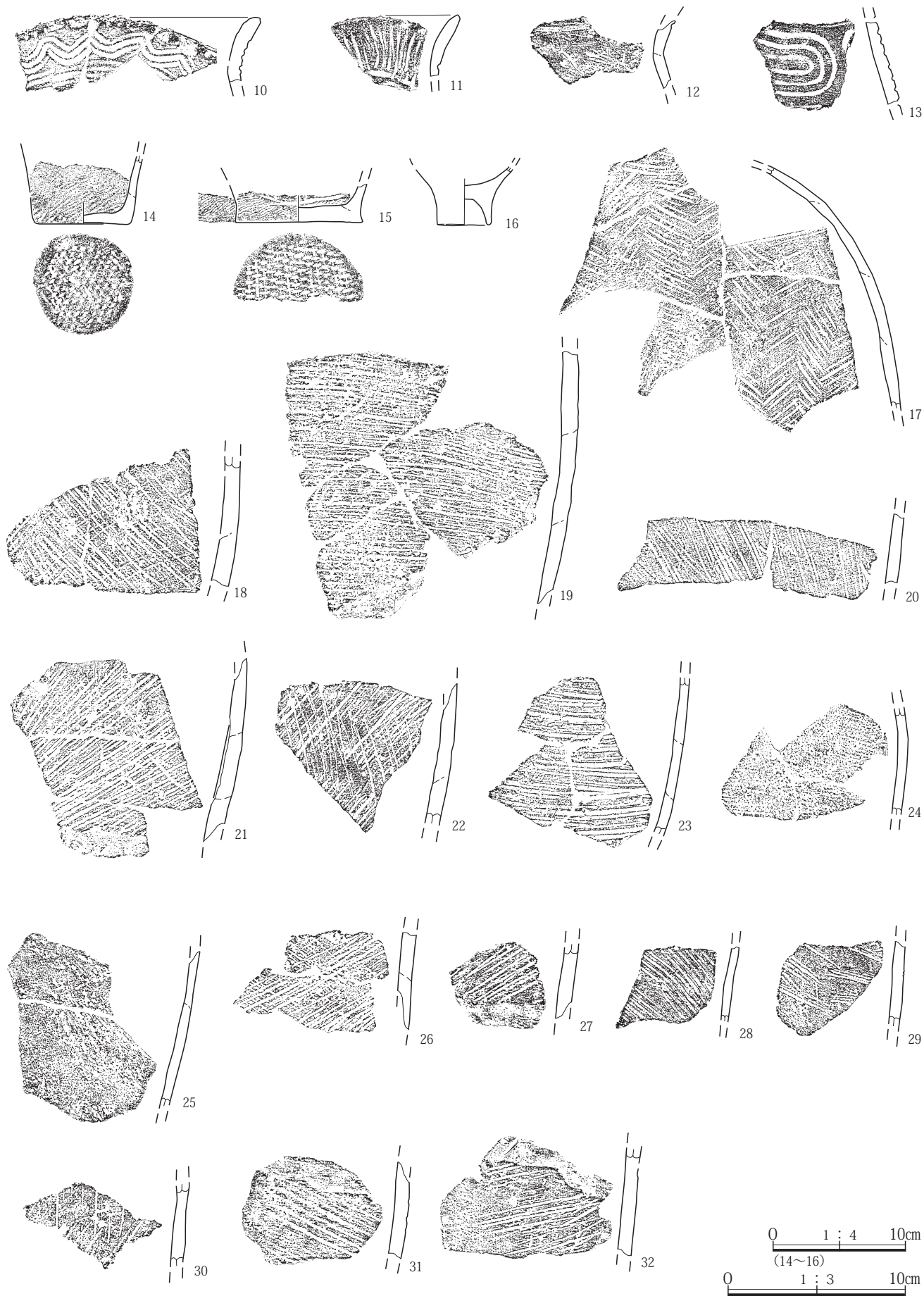


遺物縮尺は任意
0 1 : 60 2m

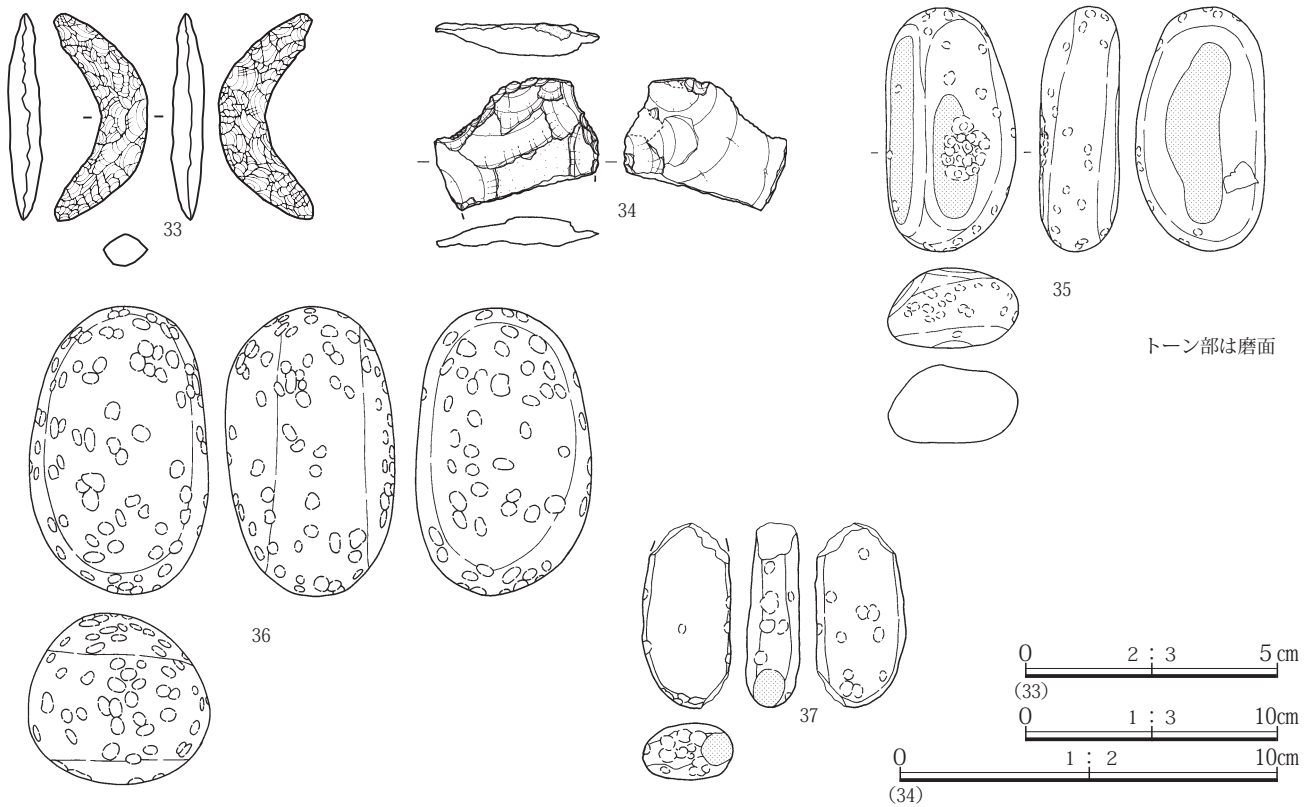
第21図 61区2号竪穴状遺構(1)



第22図 61区2号竖穴状遺構(2)及び出土遺物(1)



第23図 61区2号竖穴状遺構出土遺物(2)



第24図 61区2号竪穴状遺構出土遺物(3)

付けが妥当であろう。

施設：底面中央南寄りに炉跡を調査したが、それ以外の柱穴などは検出できなかった。

炉跡：底面中央南寄りに不整楕円状の炉石を伴う炉を検出した。平面規模は52.5×25.8cm、深さは17cmを測る。埋土に焼土塊を含み、基盤層も焼土化していた。周辺に角礫が散乱するが、炉石が破壊されたものと判断できた。

遺物：出土遺物は多く、遺構範囲全域より広く出土している。垂直分布も上層から床下にかけて満遍なく見られ、居住に伴う床直出土例は見られなかった。土器も個体の出土は無く、破片出土を主にすることから、短時間の流入が示唆されよう。なお、33の黒曜石製異形石器は北壁外の出土であり、共伴遺物としては除外すべきであろう。

所見：黒褐色土中の確認のため、遺構の詳細な全容は把握できなかったが、61区1号竪穴状遺構と同様に住居跡としての位置付けが妥当であろう。柱穴を見ないため、上屋の復元には至らないが、炉跡の検出が果たせたため、居住痕跡と判断できよう。時期は弥生時代中期前半と捉えたが、他の住居跡や竪穴状遺構に比して、やや新しい様相を示している。

3. 埋設土器(弥生)

前冊、前々冊において、縄文時代の屋外埋甕として調査された遺構を、埋設土器遺構として報告した。埋甕を住居内出入口施設に伴う一施設として判断したため、屋外埋甕を敢えて埋設土器として呼称を変えた。今回の報告では、調査時の名称どおり埋設土器として報告するが、前冊・前々冊で扱った埋設土器と番号を同一にしてしまう危険性がある。そのため、本冊では埋設土器(弥生)として差を設けた。

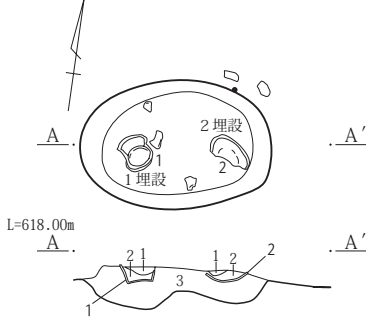
61区1・2号埋設土器(弥生)(第25図 PL. 5・30)

位置：前に述べた61区40号住北側で調査された。61区X-6グリッドに位置する。

経過：40号住調査に伴い、本遺構周辺でも多くの弥生時代土器片が集中しており、その中で1号埋設土器とした体部下半～底部の個体(1)と2号埋設土器とした大型の体部中位破片(2)が並列して出土した。いずれも40号住上層の黒褐色土中の同一レベルでの出土であり、周辺土色に比して若干暗い色調を呈したため、何等かの遺構の可能性を求め、埋設土器として位置付けて記録化した経緯がある。

規模：東西に長軸を設けた楕円状の平面形で、規模は

61区1・2号埋設土器

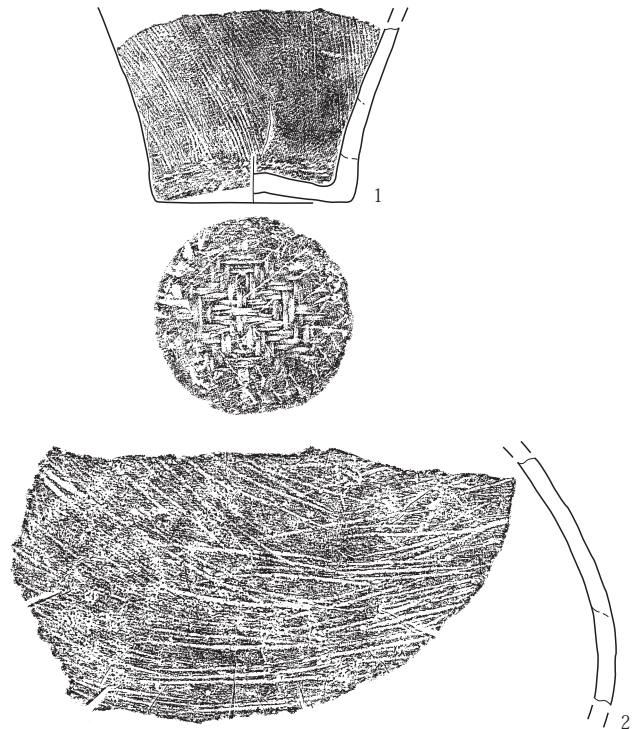


61区1・2号埋設土器土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 黒褐色土 均質
- 3 黒褐色土 白色粒を微量含む

0 1 : 30 1 m

0 1 : 4 10cm
(1)
0 1 : 3 10cm



第25図 61区1・2号埋設土器(弥生時代)

76.0×51.0cmを呈す。深さは、底面の凹凸が著しいが、概ね10cm前後で浅く不連続な印象を得る。

重複：61区40号住の埋土中での検出である。40号住を切る新旧関係を示すが、検討を要する。

遺物：1号埋設土器(1)と2号埋設土器(2)がある。いずれも壺あるいは甕の破片と思われるが、胎土及び調整工具の差が顕著であり別個体である。

所見：楕円状の掘り込みを有する埋設土器として調査、報告するが、埋土とする黒褐色土は、遺物包含層との差が無く、あるいは40号住埋土出土遺物としての可能性もある。別種遺構とするよりも、同一遺構としての位置付けが妥当と思われる。

4. 土坑

弥生時代に比定される土坑として3基を報告する。該期の土坑は特筆すべき埋土や形態の特徴はなく、出土遺物に弥生土器が見られた例のみを挙げた。故に、前冊などで報告済みの土坑が弥生時代に比定される例もあるかもしれないが、不明点が多いため、出土遺物を根拠とした。ご容赦願いたい。また報告する3基の土坑にしても3号土坑以外の出土遺物は細片であり、有機的な出土状態とはいえない。あるいは後世の所産としても可能性は

否定できない。

また、報告する土坑は3基とも62区で調査された例である。

62区1号土坑(第26・27図 PL.6・30)

位置：調査区62区の南東壁際で調査された。62区B-4グリッドに位置し、前述した62区1号住が北約1mに近接する。緩やかな南への緩斜面地形にあり単独の検出である。

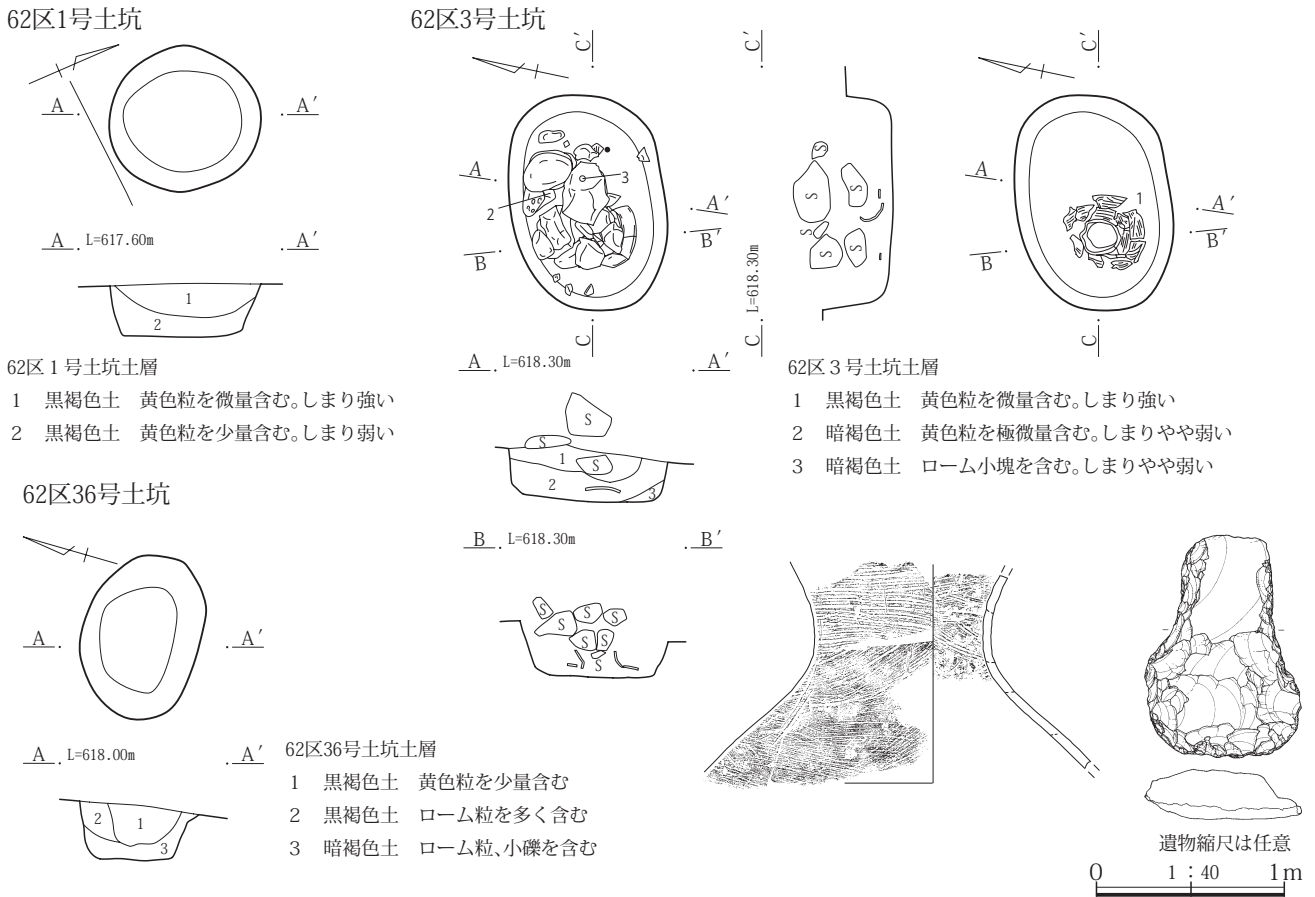
経過：黒褐色土中で確認された。壁及び底面も黒褐色土中に止まり、黄色粒を含む埋土との差が把握し辛かった。

規模：平面形は径80cm程の円形を呈し、深さは約27cmを測る。箱形の断面形を呈し、しっかりした掘り込みである。

重複：重複遺構はなく、単独の占地である。

遺物：数点の土器細片の出土を見るが、1点の図示に止まる。

所見：時期は出土土器から弥生時代中期前半と見られるが、細片の出土であり、確定性に乏しい。



第26図 62区土坑(弥生時代)

62区3号土坑(第26・27図 PL. 5・30)

位置：62区C-5・6グリッドに位置する。調査区62区中央やや東寄りで調査された。周辺は南側への緩傾斜地形が広がり、下層では縄文時代の住居跡など遺構群が密集した地点である。

経過：縄文時代中期に比定される62区5号住調査中に検出された土坑である。確認面はローム漸移層の暗褐色土で、大型の円礫の露出と楕円形の平面形が検出されたため、土坑として調査された。その後、大型円礫下より弥生土器壺の頸部～体部上半の出土により、時期を弥生時代に求めることができた。

規模：長軸を東北東に向けた小型の楕円状を平面形とする。規模は約114×82×37cmを測り、直立気味の壁と平坦な底面で箱状の断面形を示す。しっかりした掘り込みみである。

重複：周辺には弥生時代の遺構は無く、単独の検出といえよう。下層で5号住周溝が重複するが、本土坑が新しい。

遺物：土坑南西隅の坑底面より大型壺頸部(1)が正位で出土している。意図的な埋置と判断できよう。口縁部

及び体部上半は意図的な欠損が認められる。壺上位には大型自然石や多孔石(4)、磨石(5)が、直上には完形の石鍬(3)が出土した。おそらく壺と同様に埋置したものと捉えられよう。

所見：小型楕円状土坑であること、土器の正位埋置、石器埋置など、極めて有機的な所産と捉えられる土坑である。おそらく再葬墓あるいは墓壙などの宗教的・儀礼的な性格が想定されよう。時期は出土土器から弥生時代前期終末～中期前半とした。

62区36号土坑(第26・27図 PL. 6・30)

位置：調査区62区の中央部南端で調査された。62区E-4グリッドに位置する。周辺は緩やかな南東への緩斜面地形を呈し、ほぼ平坦面に立地する。

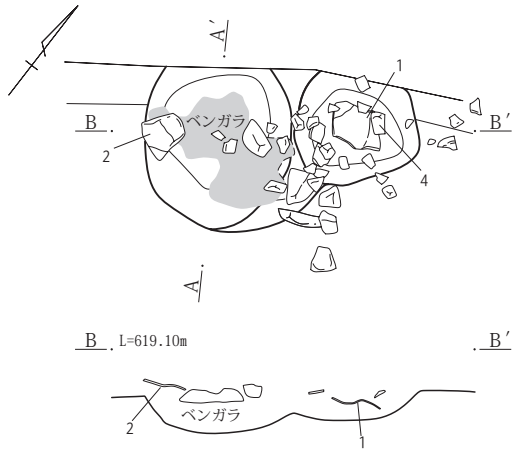
経過：ローム漸移層上層の暗褐色土を確認面とする。埋土は黒褐色土で、壁は基盤礫が露出するため検出は容易だった。

規模：平面形は長軸を東北東に向けた楕円状を呈し、規模は、87.0×62.0cmを測り小型である。深さは30cmで、しっかりとした掘り込みみで、箱形の断面形を示す。



第27図 62区土坑(弥生時代) 出土遺物

1号ベンガラ集中遺構

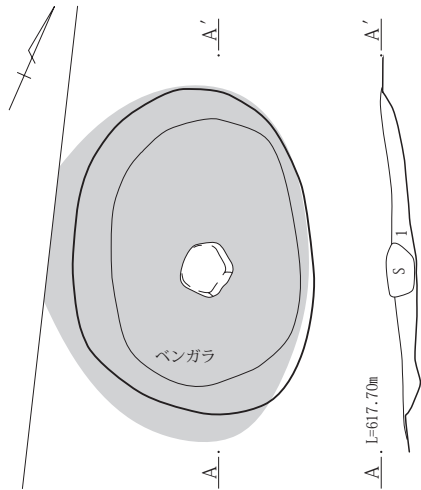


1号ベンガラ集中遺構土層

- 1 黒褐色土 ベンガラ粒を少量含む。粘性やや強い
- 2 黒褐色土 ベンガラ大塊を多く含む
- 3 明赤褐色土 ベンガラ塊を主体とする
- 4 暗褐色土 ベンガラ粒を多く含む
- 5 灰褐色土 黒褐色土塊を少量含む

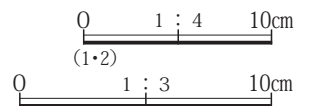
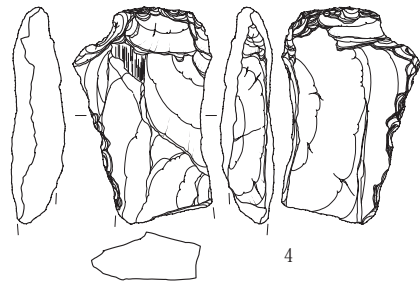
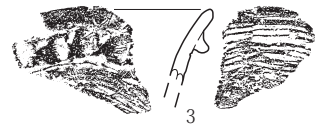
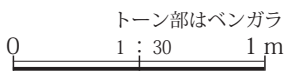


2号ベンガラ集中遺構



2号ベンガラ集中遺構土層

- 1 黒褐色土 ベンガラ粒を少量含む。粘性やや強い



第28図 61区1・2号ベンガラ集中遺構及び出土遺物

重複：縄文時代、弥生時代の遺構との重複もなく、単独の検出である。

遺物：埋土中より甕体部上半の小破片が出土しているが、おそらく流入であろう。

所見：出土土器片から弥生時代中期前半と考えたが、小破片であり、流入の可能性が高く確定的ではない。また土坑の性格も平面形などに3号土坑との共通性を見るが、これも出土遺物の乏しさから判断はできない。

5. ベンガラ集中遺構

本遺跡の調査では、竪穴遺構以外に特定の要素が集中する遺構や地点が各所で見られた。顕著な遺構としては焼土遺構であり、強い掘り込みを持たず、焼土が平面的に集中する例である。他にも黒曜石集中地点や弥生土器集中地点などがあるが、いずれも強い掘り込みを持たないため、遺構として位置付けられなかった経緯がある。ここで扱うベンガラ集中遺構も、浅い掘り込みに赤色堆積物が見られた遺構である。赤色堆積物は焼土や鉄錆ではなく、おそらくベンガラであるが、化学分析を経ていないため確定的な性格は与えられない。ご容赦願いたい。

61区1号ベンガラ集中遺構(第28図 PL. 6・31)

位置：調査区61区北西側の調査区際で検出された。61区X-8グリッドに位置する。南側への緩斜面地形に立地する。

経過：黒褐色土を確認面としており、掘り込みも黒褐色土中に止まった。確認時より焼土とは異質の赤色堆積物がまとなり、様相からベンガラの集中と判断した。

規模：東西に接続する2基の土坑からなる。東側の土坑は64.5×63.0cm程の不整形を平面形とし、深さは18cmを測る。西側は径50cm前後の小型の不整形を呈し、浅く12cm程度の土坑である。

遺物：東側土坑上層にベンガラがまとまる。また、甕口縁部破片(2)がやはり上層より出土している。西側土坑にはベンガラの出土は見られないが、甕口縁部破片(1)の出土が東側と同様な様相を示すことから、両土坑はほぼ同一時代の所産で一体化した遺構として位置付けられる。

所見：ベンガラと土器が伴出した良好な例である。土器の用途など詳細は不明であるが、ベンガラと伴に浮い

た状態で出土したことから、浅い土坑への一括廃棄とも捉えられよう。周辺にベンガラを扱う工房址が予想されよう。時期は出土土器から弥生時代中期前半であろう。

61区2号ベンガラ集中遺構(第28図)

位置：61区西側で調査された。61区X-6グリッドに位置する。周辺は南側への緩傾斜地形が広がり、ほぼ平坦地形での調査となった。西側に61区40号住が接する。経過：40号住検出前の黒褐色土中での確認・検出である。掘り込みは浅く黒褐色土中に底面が止まる。上面で大型亜円礫と少量のベンガラの散布が見られたため、ベンガラ集中遺構として調査をした。

規模：北北東に長軸を持つ楕円状の浅い土坑を有する。平面規模は141.0×103.0cm、深さは約3.0cmを測る。

重複：西側で弥生時代住居跡の40号住と接するが、新旧は不明である。また下位層では縄文時代の土坑である102坑や105坑が調査されている。

遺物：土器を出土していないが、土坑中央の底面に接して大型亜角礫が出土している。上面は平坦であり、あるいは作業台、台石としての機能を有する可能性を持つ。所見：出土土器を持たないが、縄文時代の遺構上層より検出されていることなどから、弥生時代の所産と考えたい。

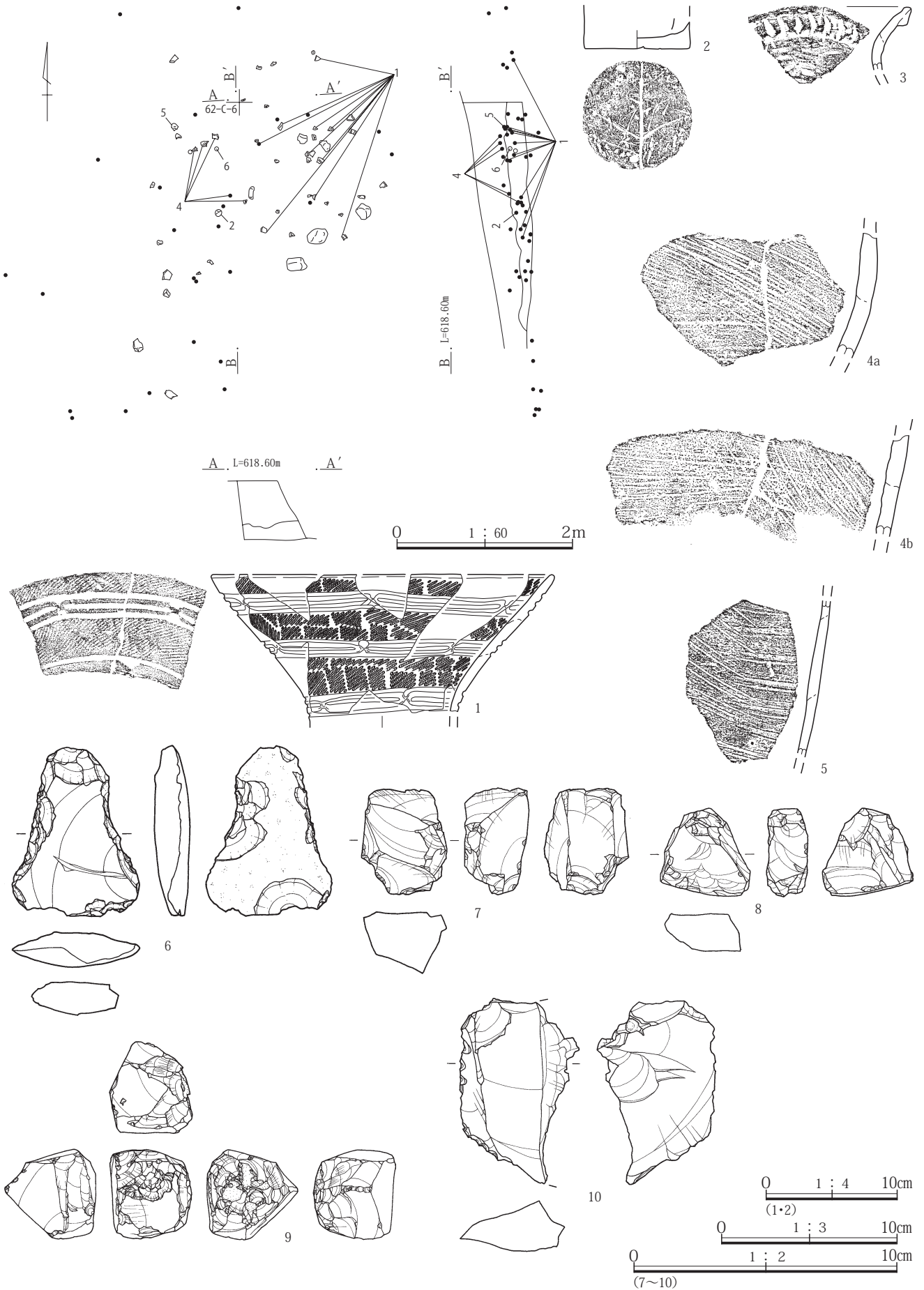
6. 弥生時代遺物集中遺構

掘り込みを持たず、限られた時期—弥生時代の遺物が集中する地点として、弥生時代遺物集中遺構として報告する。包含層出土遺物あるいは遺構外出土遺物と同等の性格であり、またこの他にも、61区X-7グリッドのように弥生時代遺物が集まる箇所もあるが、平面図と断面図が揃う62区の2箇所を選んだ。

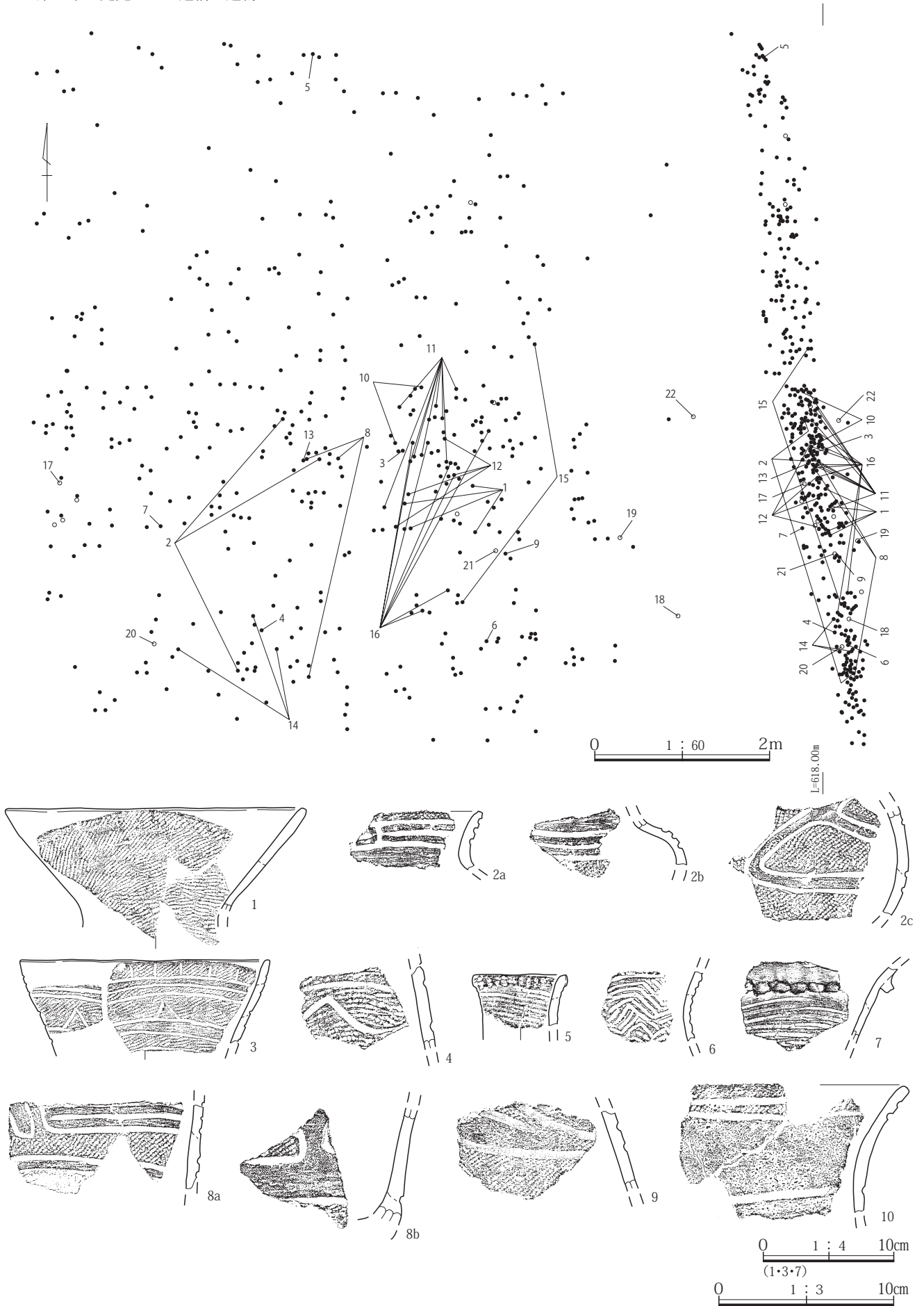
62区1号弥生時代遺物集中遺構(第29図 PL. 6・31)

位置：調査区62区中央東寄りで検出された。62区B・C-5・6グリッドに位置する。周辺は南側への緩傾斜地形が広がり、下層では縄文時代住居跡の62区5号住など遺構群が密集する地点である。

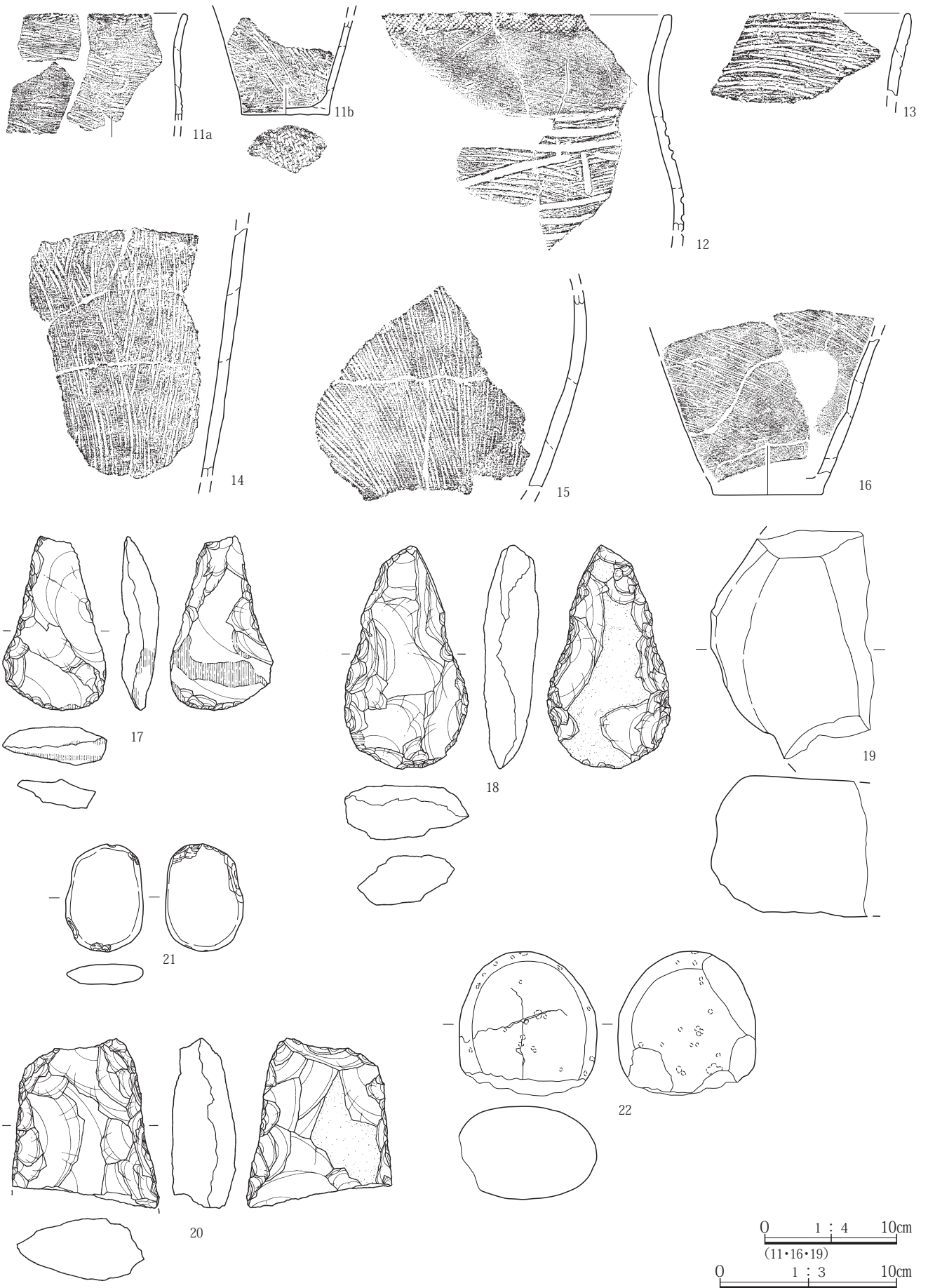
経過：黒褐色土中の遺構確認中に、弥生時代に比定される土器が集中して出土した。さらに62区3号土坑など該期遺構も検出されたため、さらに精査を重ねたが、竪



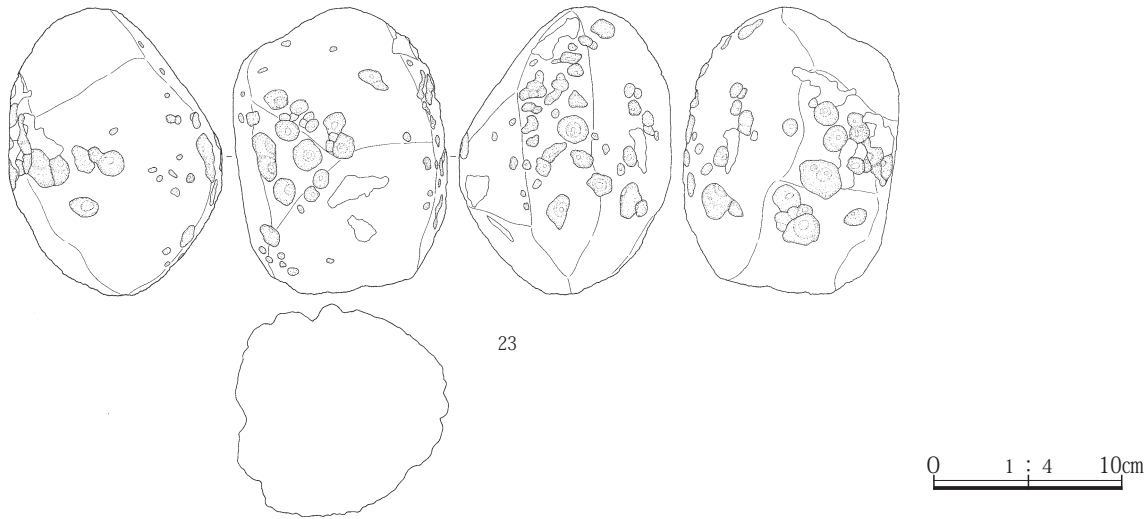
第29図 62区1号弥生時代遺物集中遺構及び出土遺物



第30図 62区2号弥生時代遺物集中遺構及び出土遺物(1)



第31図 62区2号弥生時代遺物集中遺構出土遺物(2)



第32図 62区2号弥生時代遺物集中遺構出土遺物(3)

穴遺構の検出は果たせず、遺物の分布を見るのみとなった。

規模：径約3.5mの範囲で該期遺物がまとまって出土している。

重複：範囲内には前述の62区3号土坑が含まれるが、土坑の性格上から遺物を集中する様相ではないため、本集中遺構と3号土坑との関連性は低い。

遺物：土器小破片や石器破片を主体とした出土であるが、低位レベルに大型の円礫を見る。しかしながら、生活痕跡としての遺物の在り方ではなく、流入などを要因とする包含層遺物として位置付けられよう。浅鉢口縁部破片(1)壺底部(2)、口縁部破片(3)、甕体部破片(4・5)、打製石斧(6)を図示した。

所見：黒褐色土中よりまとまった出土を示しているため、流入といえども、ほぼ同時期の所産と判断している。時期は弥生時代中期前半に求めておきたい。

62区2号弥生時代遺物集中遺構(第30～32図 PL. 6・31)

位置：調査区62区中央南寄りで広い範囲で確認した。62区D～F-4～6グリッドに位置する。緩やかな南東への斜面地形ながらほぼ平坦地形が広がる。

経過：黒褐色土中の遺構確認中に、弥生時代に比定される土器が集中して出土し、当該期の遺構検出を試みたが、竪穴遺構は確認できず、遺物集中遺構としての位置付けに止まった。遺物は傾斜に沿った自然流入による集中と判断した。

規模：出土量の比較的多い62区D・E 5グリッドを中心に南北約7.5m東西約6.5mの範囲に該期遺物がまとま

る。また、断面分布では北から南への傾斜に沿った遺物分布状況を示している。

重複：集中範囲内に、弥生時代の目立った遺構分布は見られない。僅かに範囲内南西端に62区36坑が含まれるが、遺物を多出する遺構ではなく、生活痕跡を具体化した遺構でもない。

遺物：分布範囲を更に詳しく観察すると、個体として図示し得る資料が分布範囲の南半に集まる傾向が見られる。東西6m、南北4.6mの範囲に、多くの個体資料が集まっていた。これは遺構の存在を示唆するのではなく、流入時の遺物移動において、大型遺物が下位に集まる様相が影響したと考えられた。図示し得た資料として、浅鉢(1)壺(2・4、6～10)、甕(3・11～16)、打製石斧(17・18・20)等が挙げられる。

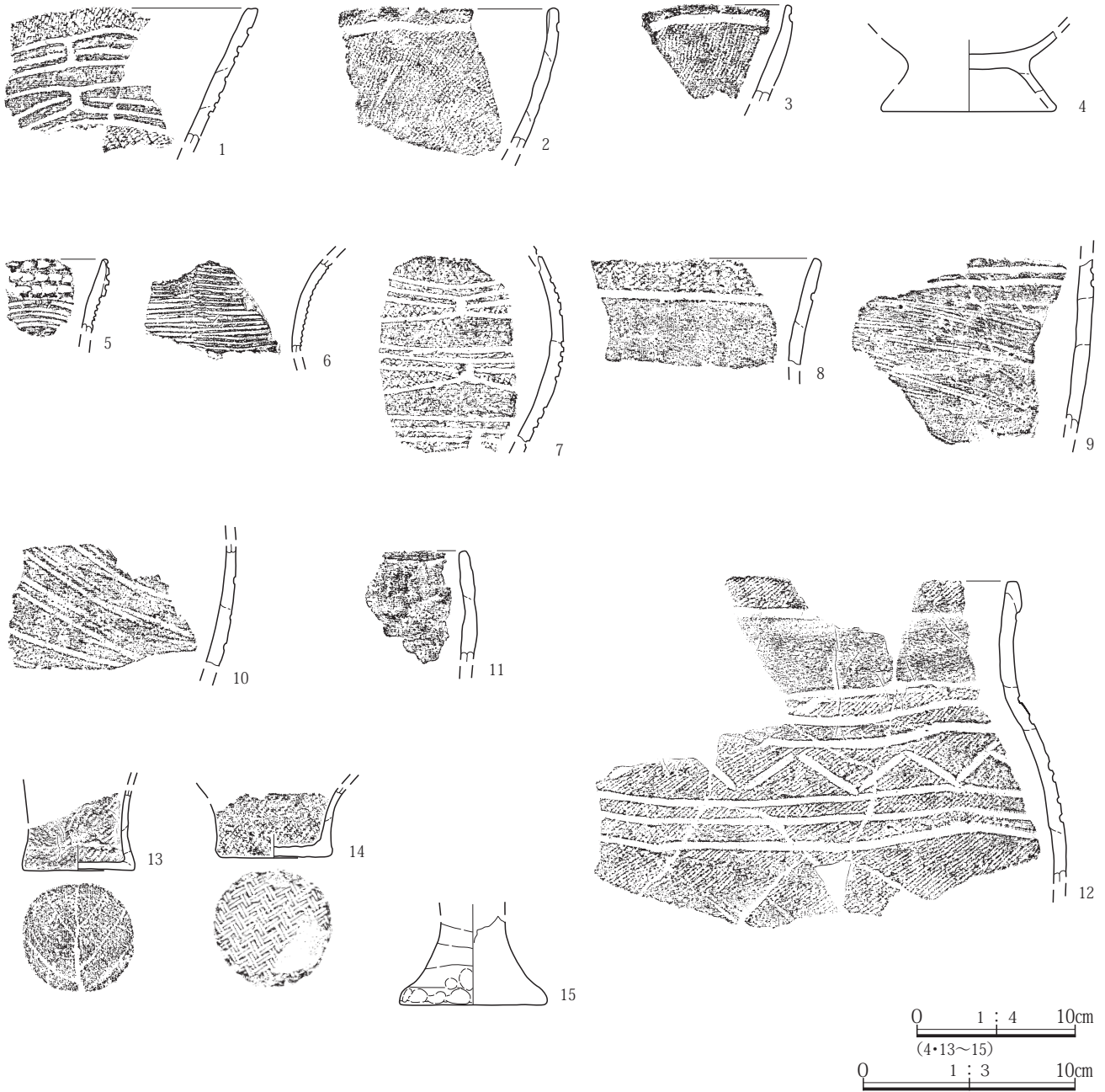
所見：地形に沿った流入による遺物集中と把握されよう。竪穴遺構に伴う例では無いため、一括性などは極めて乏しい。しかしながら、出土土器の様相を見ると、比較的短時間による流入が想定され、時期としても弥生時代中期前半に求めて良いと思われる。

7. 遺構外出土遺物(弥生時代)(第33～37図 PL. 6・32～34)

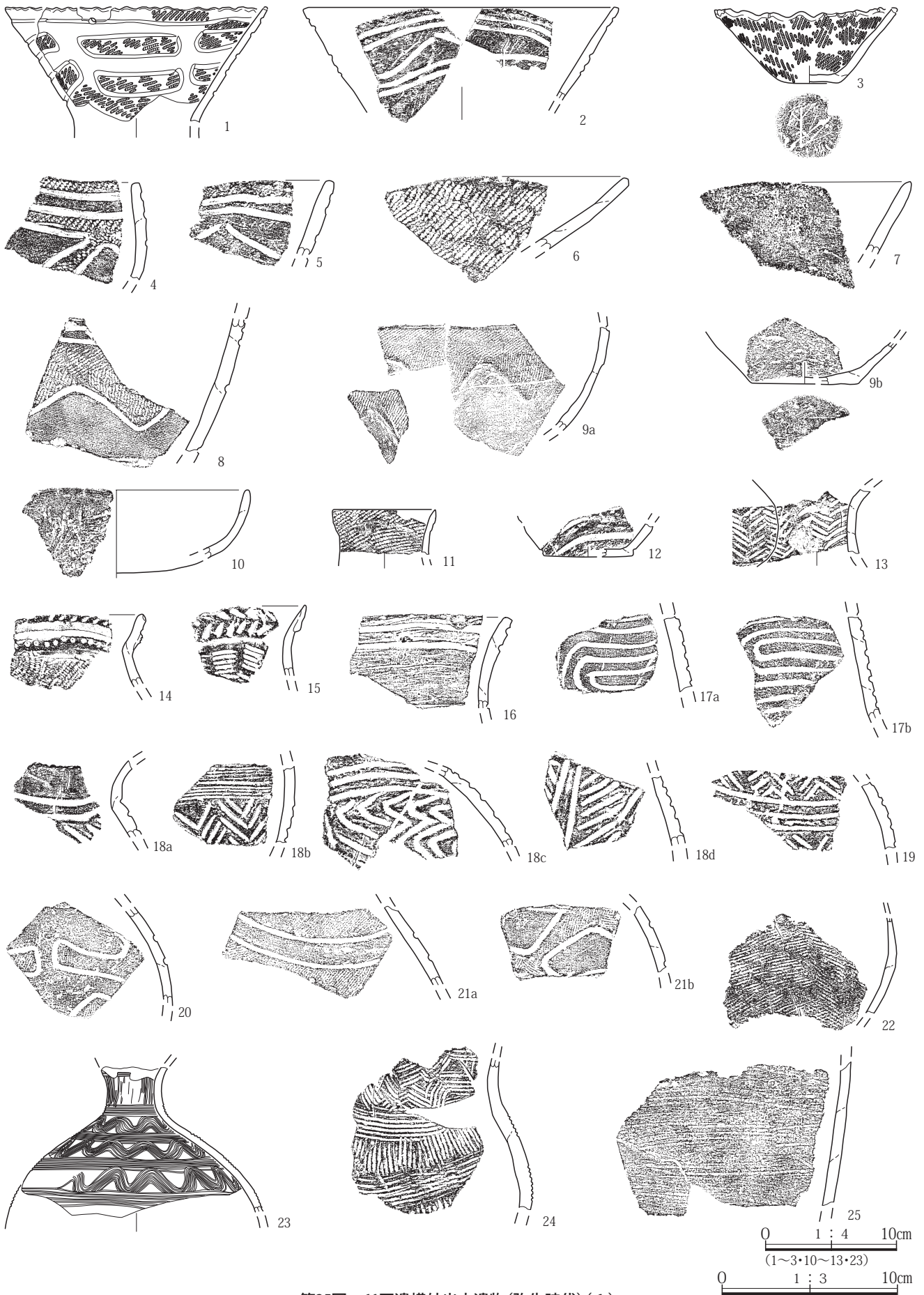
ここで扱う遺構外出土弥生時代遺物は、多くが遺構確認時に出土し、遺構に帰属し得なかった遺物である。その他に、縄文時代遺構や中世～近世遺構に混入していた遺物も同時に扱うが、縄文時代遺構より出土した弥生時代の遺物は重複遺構などの存在も考慮しなければなら



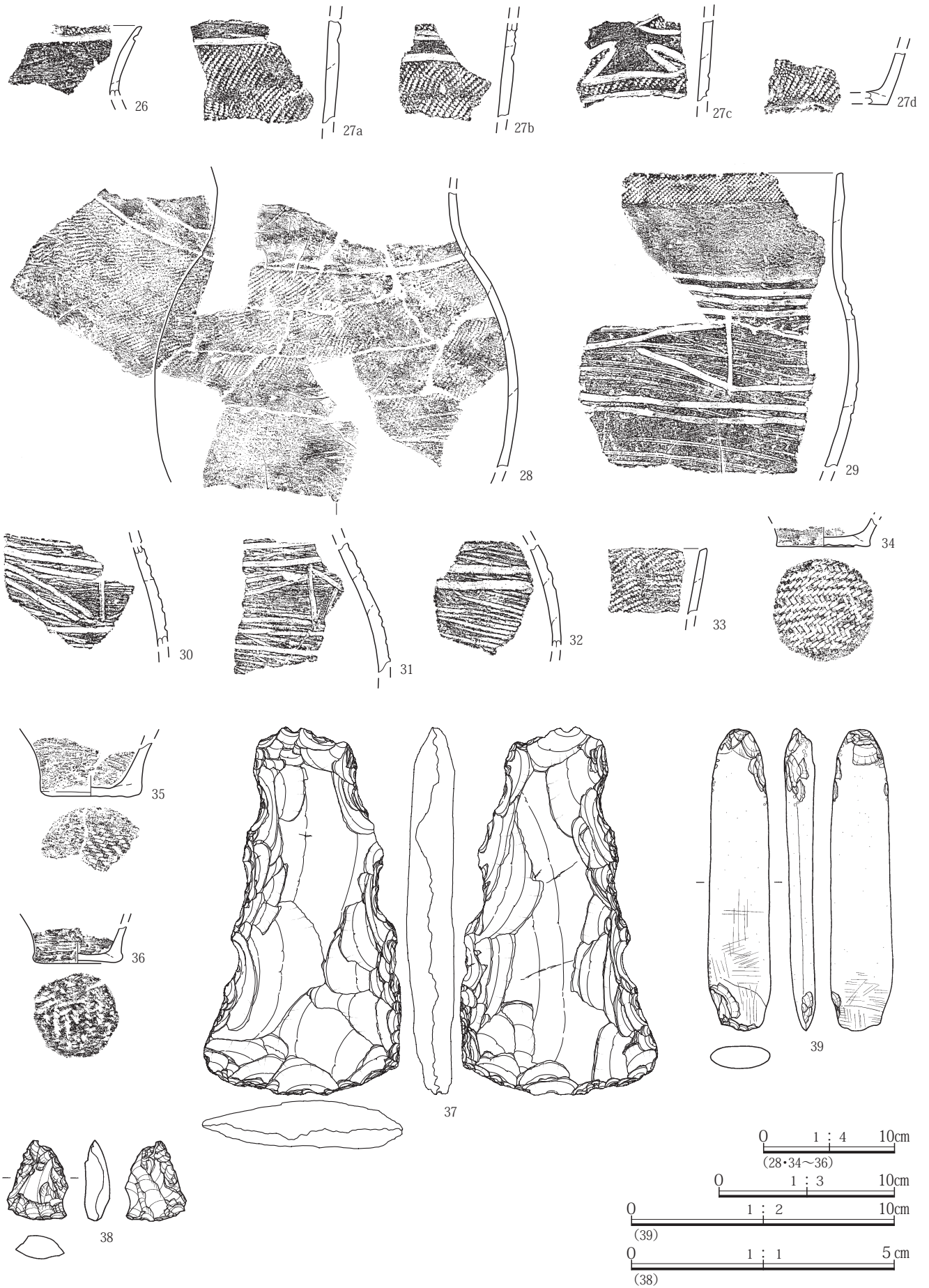
第33図 51区遺構外出土遺物(弥生時代)



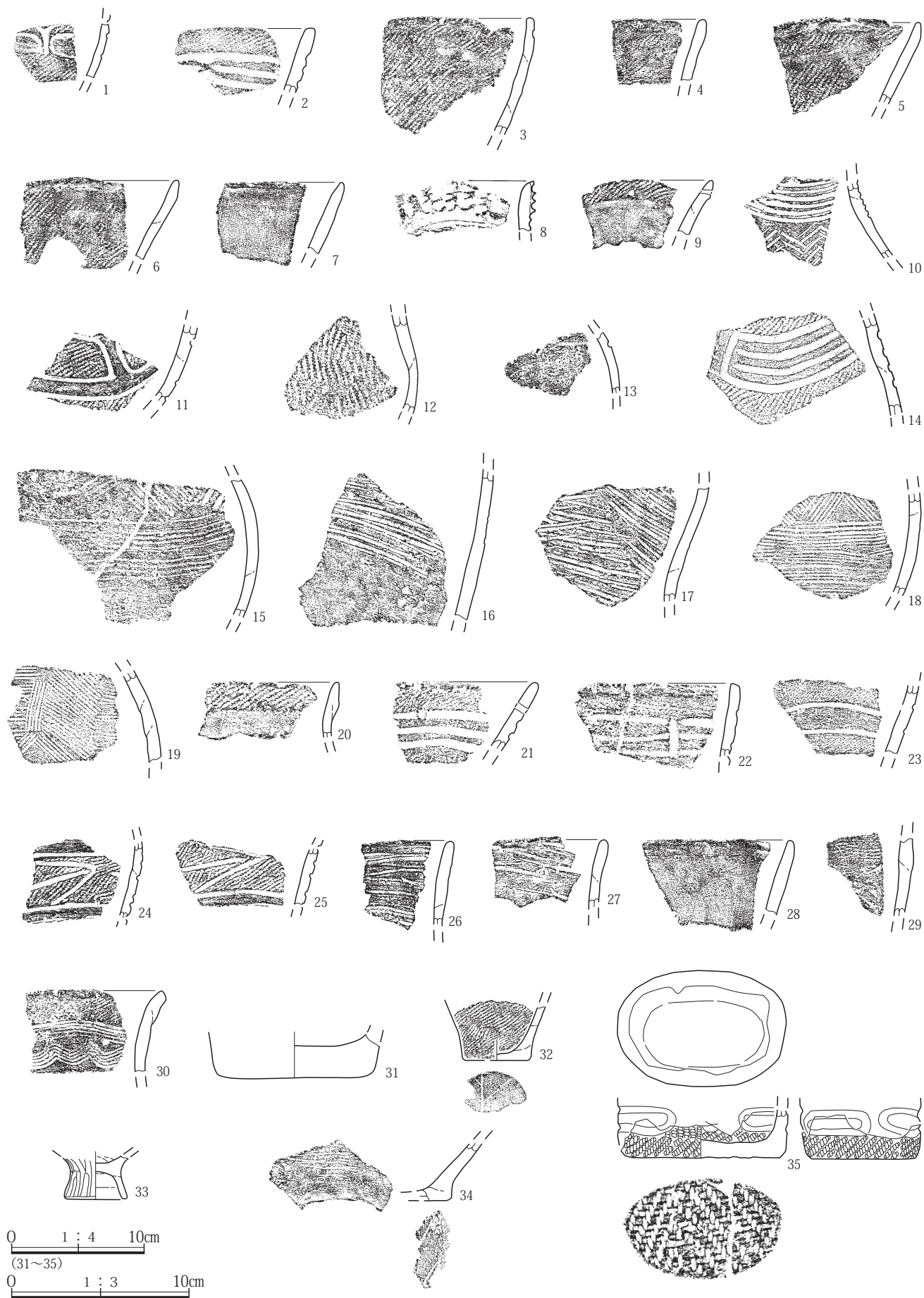
第34図 52区遺構外出土遺物(弥生時代)



第35図 61区遺構外出土遺物(弥生時代)(1)



第36図 61区遺構外出土遺物(弥生時代)(2)



第37図 62区遺構外出土遺物(弥生時代)

いが、その痕跡が見出せなかった例である。

51区：該期遺構も検出されていないため、出土遺物量は極めて少ない。4点を図示したのみである。第33図1～3はT-20・21グリッドより出土するが、該当する遺構は無い。4は無文の口縁部破片で、あるいは縄文時代の深鉢の可能性もある。

52区：弥生時代の遺構は検出されていない。しかしながら、52区北西にあたるC～E-18～20グリッドに集中する傾向が見られた。該当する地点には円形土坑が群在しており、既に縄文時代中期遺構の所産として前々冊で報告済みである。しかしながら、時期を特定する出土遺物の様相ではなく、検討を要しよう。この中で、第34図1の浅鉢破片や7の壺体部破片などに見る変形工字文は特徴的な文様様相である。さらに、甕破片(8～10・13)はE-19グリッドにまとまって出土しており、前述の土坑群との関連も窺わせよう。

61区：40号住、1号・2号竪穴状遺構など該期遺構が散在する。出土遺物も多い。第35図1の浅鉢は横位長楕円状文を連続した例で、1号ベンガラ集中遺構上層より出土している。南のX-7グリッドも比較的遺物が集中した

が、細片が多く、壺口縁部破片(14・15)を図示した。多くの遺物が集中した地点はR・S-7・8グリッドで浅鉢(3・6・8～10)、壺(18・24)、甕小破片(27・30～33・36)、細身の磨斧(39)が出土している。調査区南東部にあたり、該当する遺構もなく流入の所産と考えられよう。28の甕体部は国道部分の北東端で、29の甕口縁部破片は62区との境界北側で出土している。石鍬(37)も、国道部分北側で検出された15号住(縄文後期)から出土している。傾斜の強い地点で重複も激しい個所でもあり、遺構外出土遺物として扱った。

62区：61区と同様に弥生時代の遺構が存在する地区である。また、弥生遺物集中遺構として、竪穴遺構出土ではない例として1号・2号弥生遺物集中遺構もあるため、出土量は61区を凌駕する。この中で、縄文時代の住居跡である10・13・17号住より出土した破片が多い(第37図3～5・8・10・15～17・26・27・34)。3軒とも調査区中央北のやや傾斜の強い個所で重複した状態で調査された住居跡で、縄文時代の遺構出土といえども傾斜流入による、混在と考えることができよう。また特異な例として35に土偶型容器脚部と思われる破片が出土している。



林地区遠景。○＝遺跡位置

吾妻川右岸上空からの撮影。林地区の段丘崖と最上位段丘面が一望できる。

第4節 中世～近世(近代)の遺構と遺物

本遺跡で調査された中世～近世遺構は、弥生時代遺構と同様に、縄文時代遺構に比して多くはなく客体的な存在である。本節で報告する遺構は、調査着手時に黒褐色土中で検出された遺構を主とするが、その他にローム漸移層やローム面で確認された遺構も含み、縄文時代遺構と分別が果たせず、本書に掲載した遺構もある。ここでは、掘立柱建物3棟、礎石建物跡3基、石垣遺構2基、道状遺構1条、井戸遺構2基、溝状遺構2条、集石遺構2基、焼土遺構15基、土坑120基あまりを報告する。

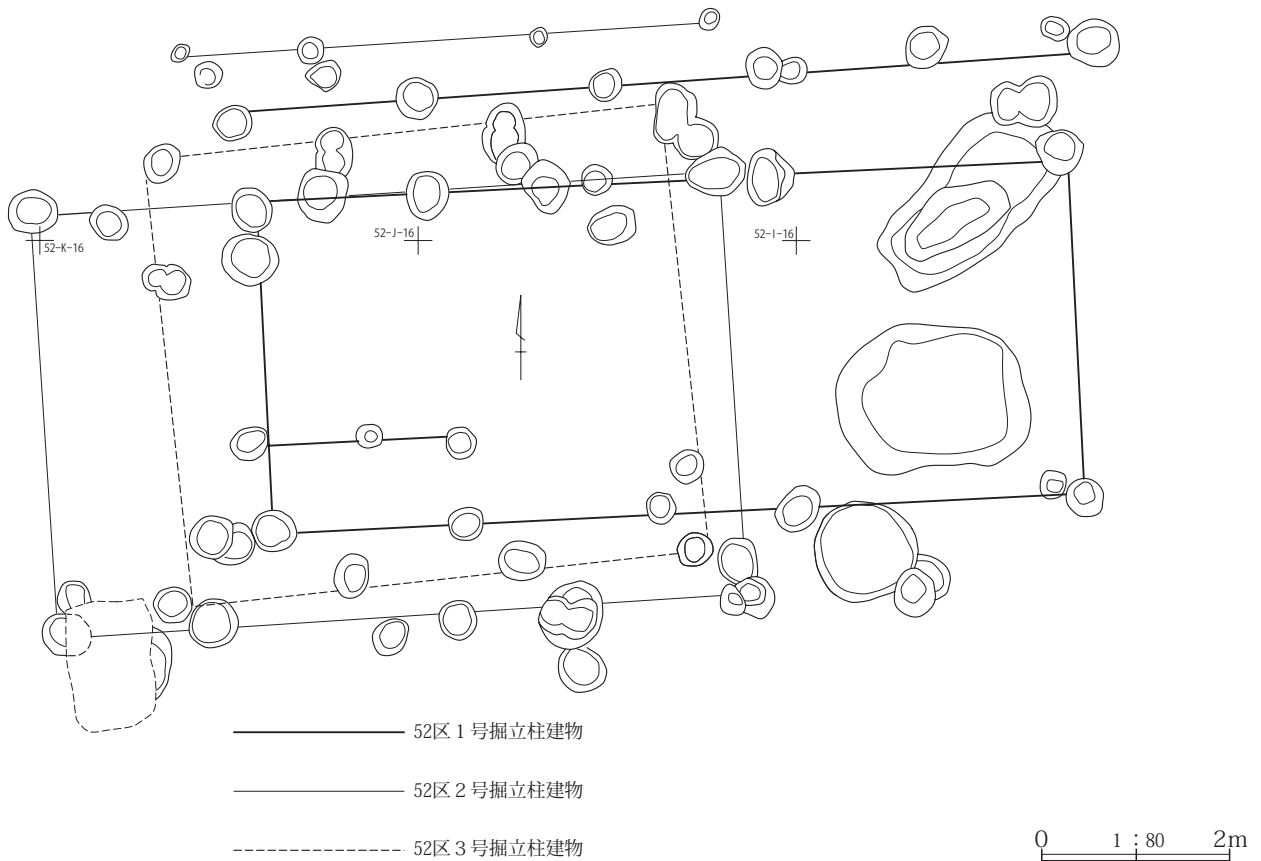
八ッ場ダム調査地域においては、近年低位段丘面、中位段丘面における、天明三年に相当する「天明泥流」下の遺構・遺物が注目されている。1783年の浅間山噴火に伴う泥流被害による被災集落や畑跡が良好な状態で調査・報告されている。しかしながら、本遺跡は最上位段丘面に位置しており、天明泥流による堆積は見られない。そのため、検出された遺構はある程度の時間幅を想定して扱うことになり、中世から近・現代まで多様性を含む結果となっている。その中で、中世及び近世の遺構・遺

物は優先的に扱い報告するが、近代～現代の遺構・遺物の多くは数基の例外を除き割愛した。ピットに関しては時期の判別ができず、また木根の類もピットとして調査されていたため、掘立柱建物に帰属する柱穴や遺物を出土したピット以外は資料化を控えた。

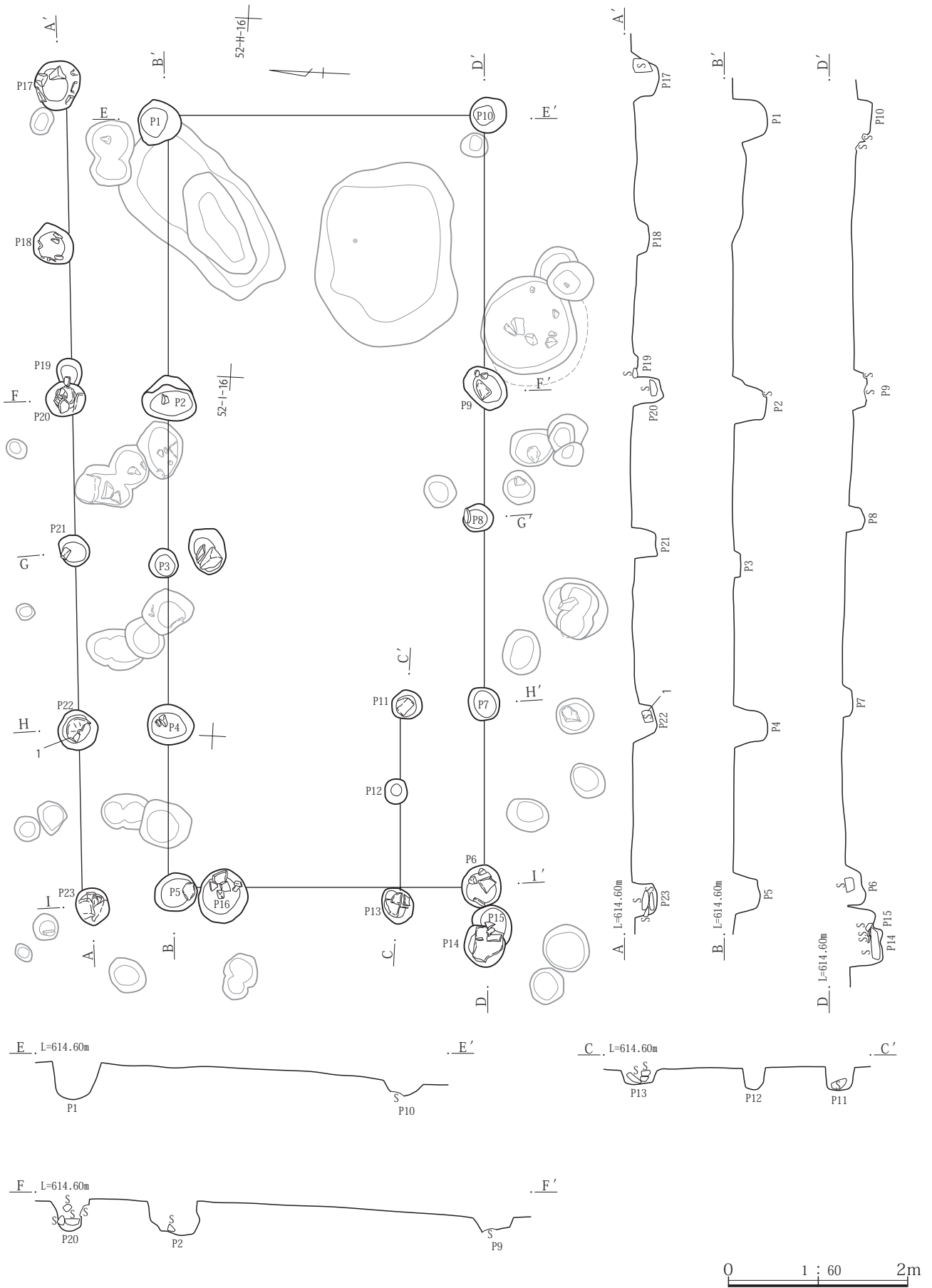
1. 掘立柱建物(第38～44図 PL. 7・35)

3棟の掘立柱建物を調査区52区東側で調査している。3棟とも東西棟で重複した状態で検出された。各々の新旧は相互の柱穴新旧が確定的ではなく不明である。52区1～3号掘立柱建物は、H～K-14～16グリッドに位置する。1坑・2坑・36坑などが重なる。また南側はさらに円形土坑などが群在し、居住区を中心とした生活領域と位置付けられた。縄文時代の遺構も多く52区1～3号住なども下層で調査されている。

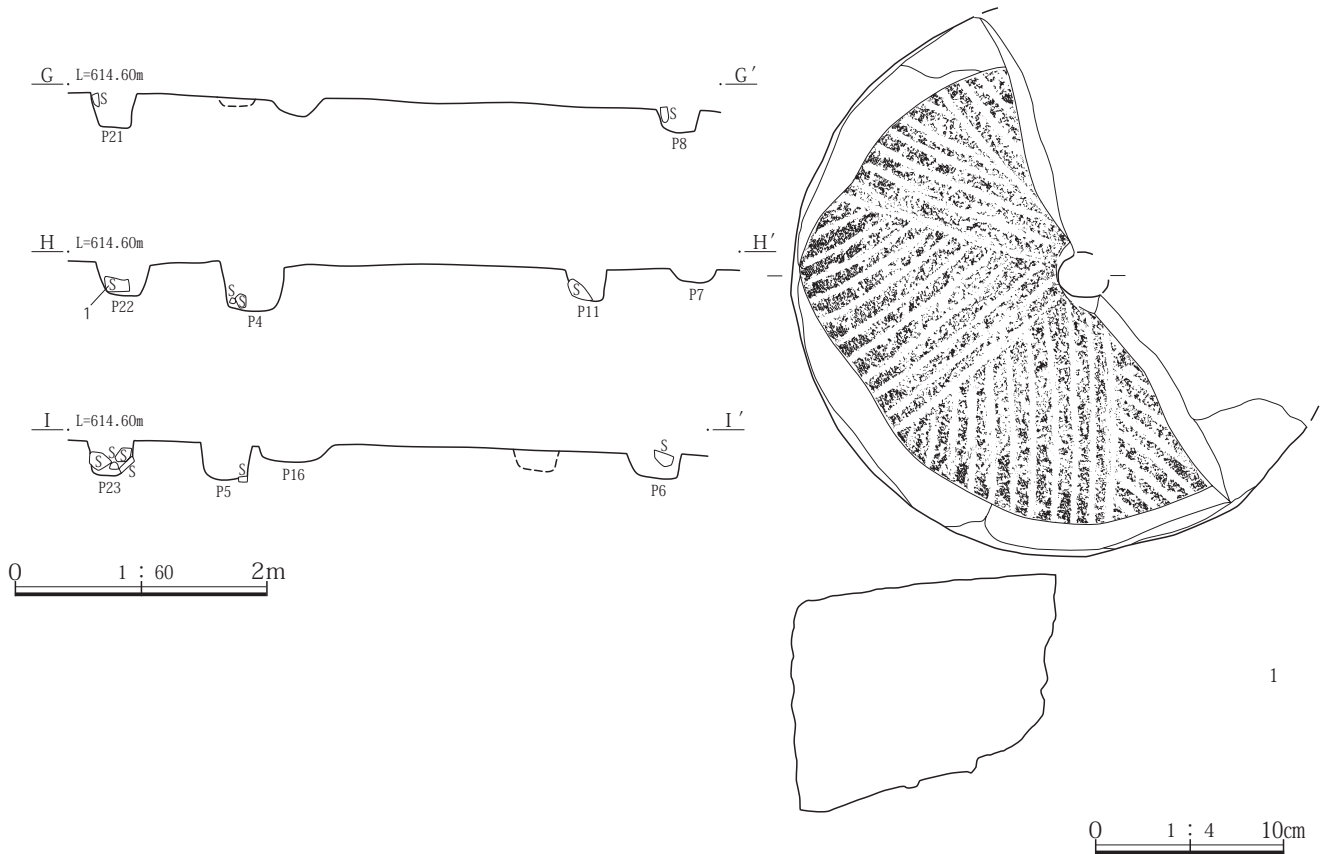
本遺跡調査着手箇所でもある。縄文時代住居跡の存在は試掘によって判明していたため、確認面であるローム漸移層上層までは下げずに、さらに上層の黒褐色土中で中世～近世に比定される遺構群を調査した。その結果、調査区の北側で本建物跡を構成するピット群が、南側で



第38図 52区1～3号掘立柱建物



第39図 52区1号掘立柱建物(1)



第40図 52区1号掘立柱建物(2)及び出土遺物

土坑群が検出された。ピット群は配列、各ピットの規模などを考慮し、3棟の建物跡を抽出した。

以下、順次概略を述べるが、詳細な柱穴計測値や各柱穴間の距離は巻末の遺構計測表を参照してほしい。

52区1号掘立柱建物

規模：23基のピットからなる。3棟の掘立柱建物で最東端に位置する。主軸を東西に向けた、1間×4間の長方形の東西棟(N-86°-E)で、主屋は東西長約8.6m、南北長約3.6mを測る。

施設：主屋から約1.0～1.1mの距離を置いた、北辺の柱穴列として6基のピットを検出した(P17～P23)。距離は主屋長辺より長く約9.1mを測る。軒・庇あるいは下屋などの張出施設か。また、P11～P13は南西隅で東西に並ぶ。小区画施設などの間仕切か。

重複：南東側1坑と2坑が重複するが新旧は不明である。また下層で36坑が調査されている。

遺物：北辺の柱穴列のP22より石白下白(第40図1)が出土している。柱穴内の礎石としての転用であろう。

所見：1～3号掘立柱建物の中で、規模が最も大きく、柱穴間の規則性も整う。3棟の建物では最も新しい様相

を示す。詳細な時期は不明だが、柱穴配置や出土した下白の様相から、中世～近世と考えておきたい。

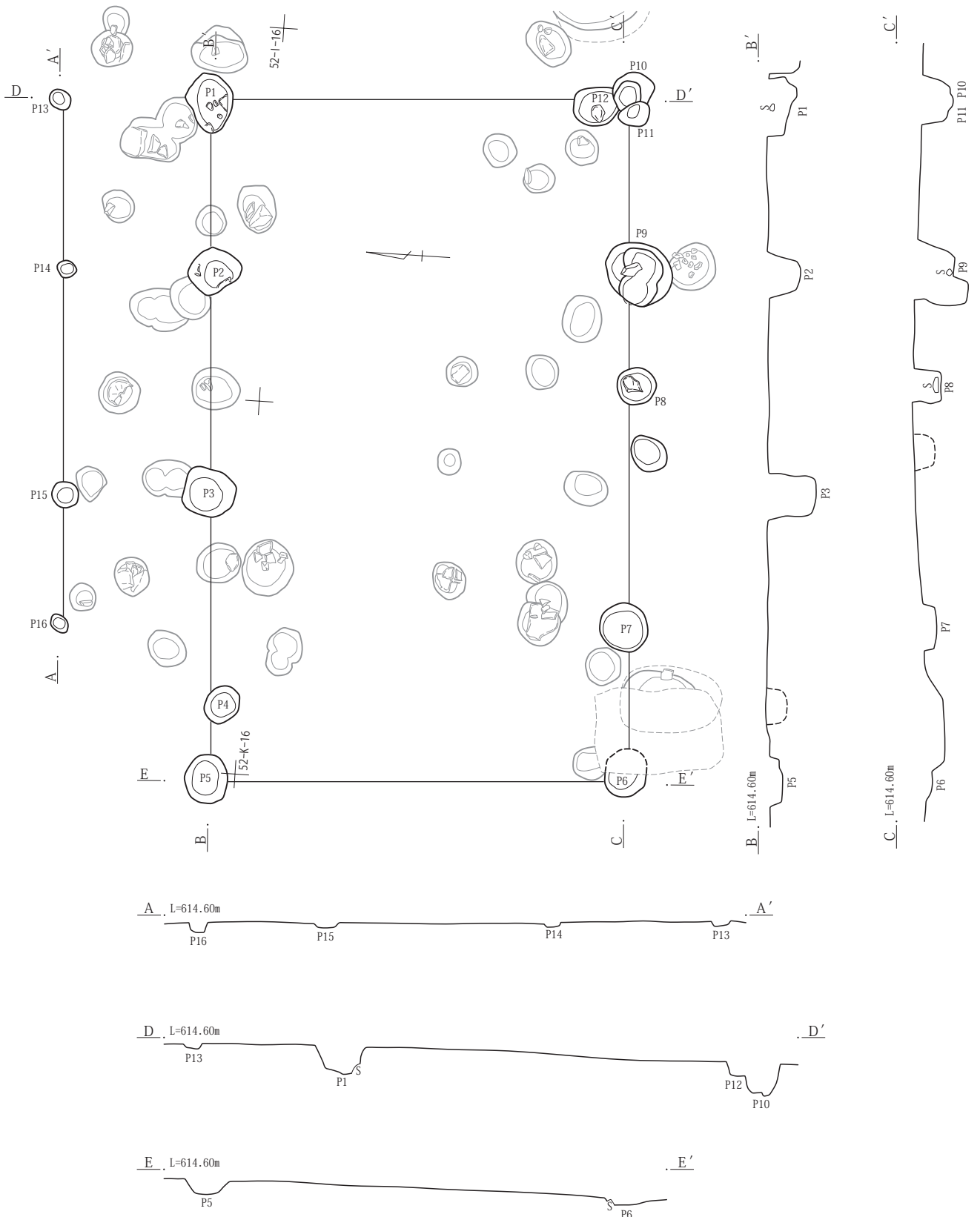
52区2号掘立柱建物

規模：16基のピットからなる。西に位置する立地である。主屋は東西長約7.3m、南北長約4.5mを測り、主軸を東西に向けた1間×4間の東西棟(N-87°-E)である。ピット配列は南北辺の配列がやや不規則であり、P3とP4がP7とP8の配置にずれが生じている。

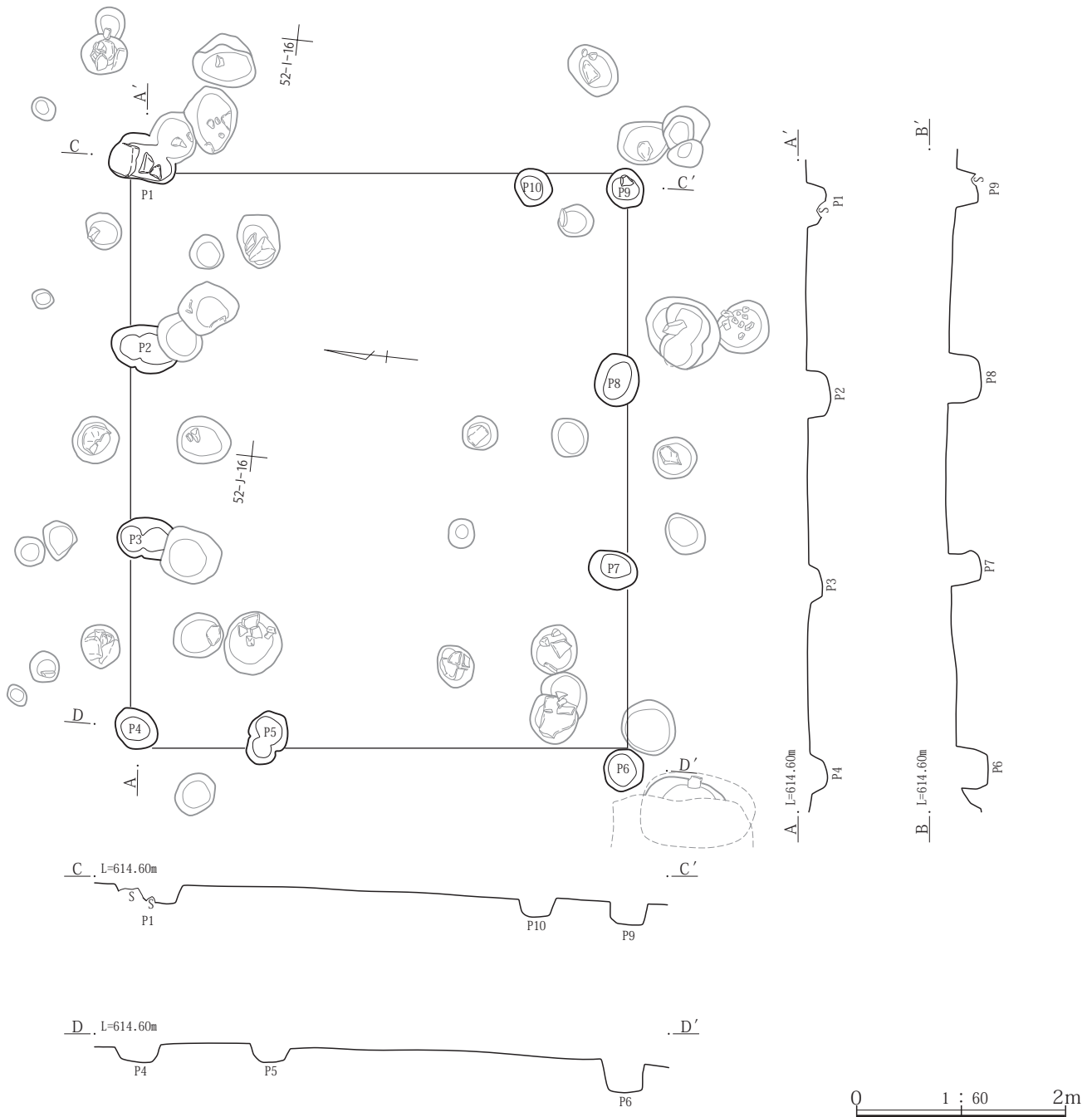
施設：主屋から約1.5～1.6mの距離を置き、主屋に並列する4基のピットを検出した(P13～P16)。いずれも主屋を構成する柱穴よりやや小型で、南北の長さも約5.6mと短い。1号掘立柱建物と同様に、軒・庇あるいは下屋などの張出施設と思われる。

重複：P6に重複して、攪乱坑や36坑が重なる。36坑との新旧は不明である。

所見：南北長辺の柱穴配置に不規則性が見られるが、全体に整った東西棟を示す。1号掘立柱建物と比して、やや小型であること、北辺の柱穴列一下屋施設が小規模であることを踏まえると、1号掘立柱建物の前駆形態の可能性はある。



第41図 52区2号掘立柱建物



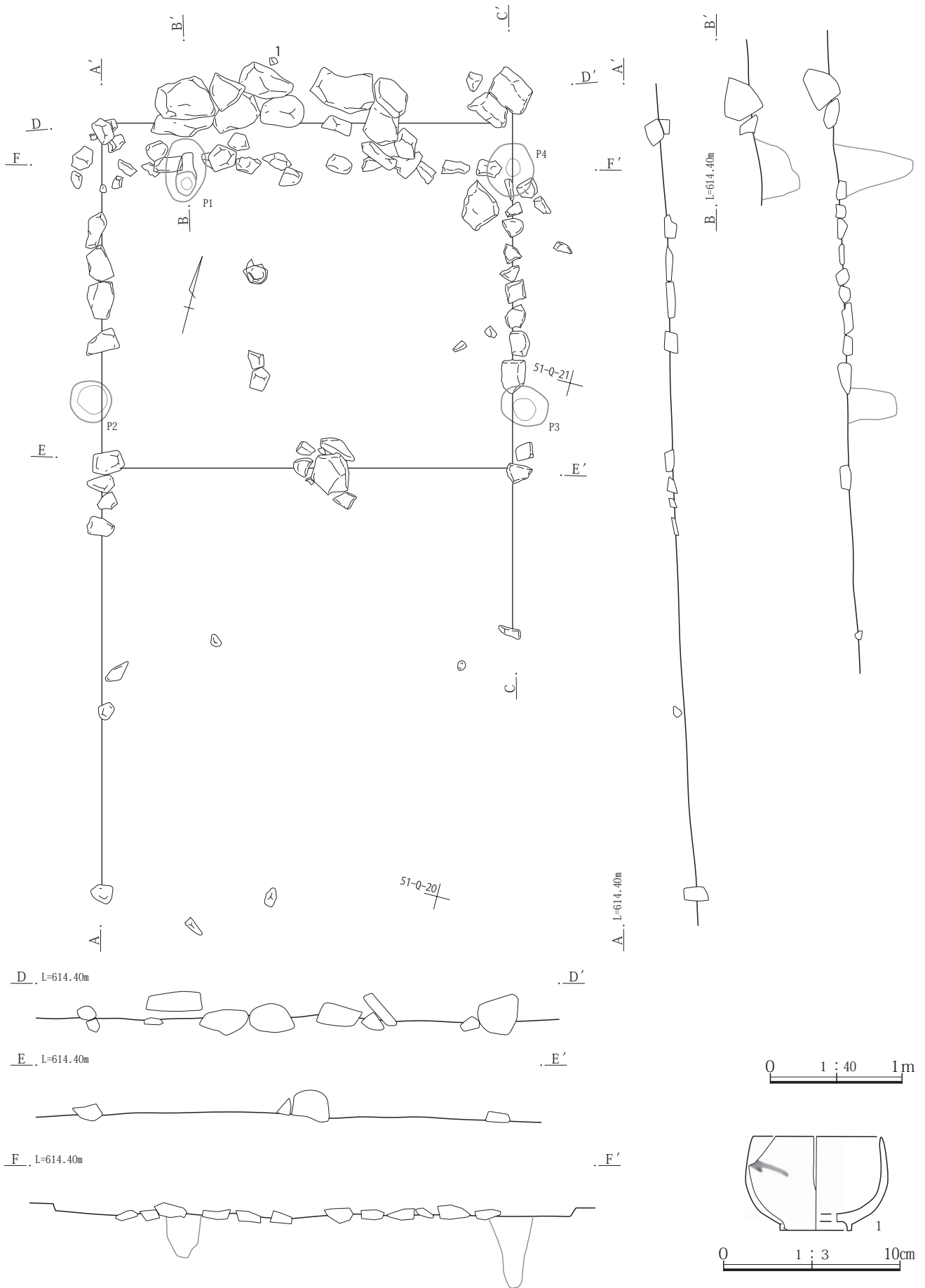
第42図 52区3号掘立柱建物

52区3号掘立柱建物

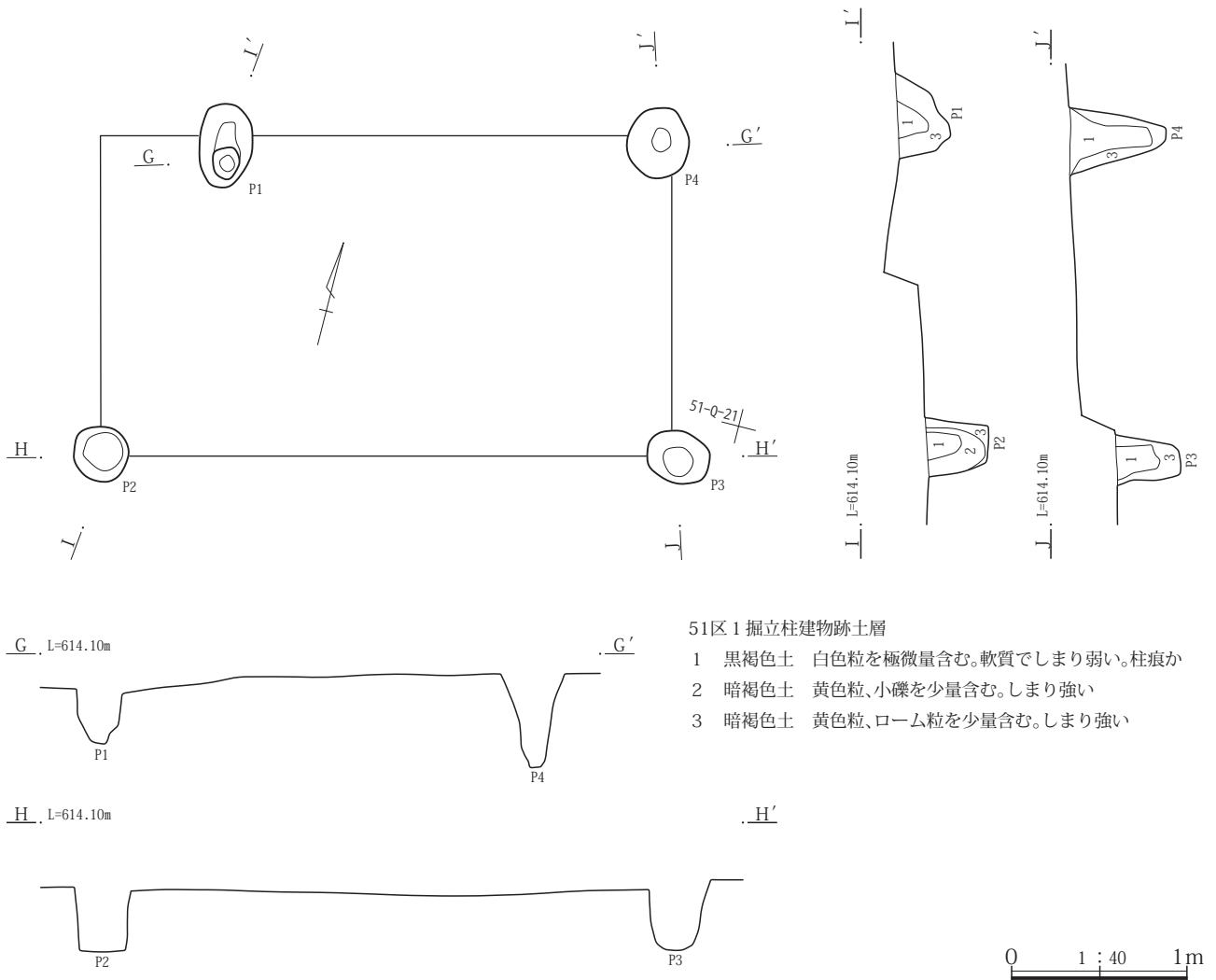
規模：10基のピットからなる。1・2号掘立柱建物の中間に位置する。東西長約5.5m、南北長約4.6mを測り、主軸を東西に向けた変則的な2間×3間の東西棟(N-84°-E)である。南北辺の柱穴配列は相互に整った配置だが東西辺は等間隔ではなく、不規則な配置である。所見：3棟の掘立柱建物で最も小規模な建物跡である。あるいは、下屋などの施設を持たず、初現的な形態と捉えられることから、中世段階の最も古い段階の居住痕跡とも捉えられよう。

以上のように、林中原Ⅱ遺跡52区で検出された1～3号掘立柱建物を述べた。長軸を同じにして1箇所を重複する3棟は、おそらく継続的な建物として位置付けられよう。詳細な時期までは特定できないが、礎石を伴わない2号・3号掘立柱建物から、一部の柱穴に礎石を伴う1号掘立柱建物への変遷を考えると、中世末～近世初頭に時期を求めておきたい。

付け加えると、本遺跡西側に林中原Ⅰ遺跡が接しており、同じ52区で中世～近世の屋敷跡が調査されている



第43図 51区1号礎石建物・1号掘立柱建物及び出土遺物



第44図 51区1号掘立柱建物

(2013 群埋文)。52区西端に位置しており、掘立柱建物33棟をはじめ内耳鍋を出土した竪穴状遺構や該期の溝、土坑が群在する地点である。本遺跡52区1～3号掘立柱建物との関係性は不明だが、東西棟を中心とした重複状態は近似しており、同様の屋敷掘立柱建物群と捉えられよう。

2. 礎石建物跡

礎石建物跡は3基が検出された。すべて51区での調査によるものである。51区は林地区に作られた、近世寺院の一つである大乘院に近接するとされ、3棟の礎石建物跡との関連が注意されよう。

51区1号礎石建物跡(51区1号掘立柱建物)(第43・44図 PL.7・35)

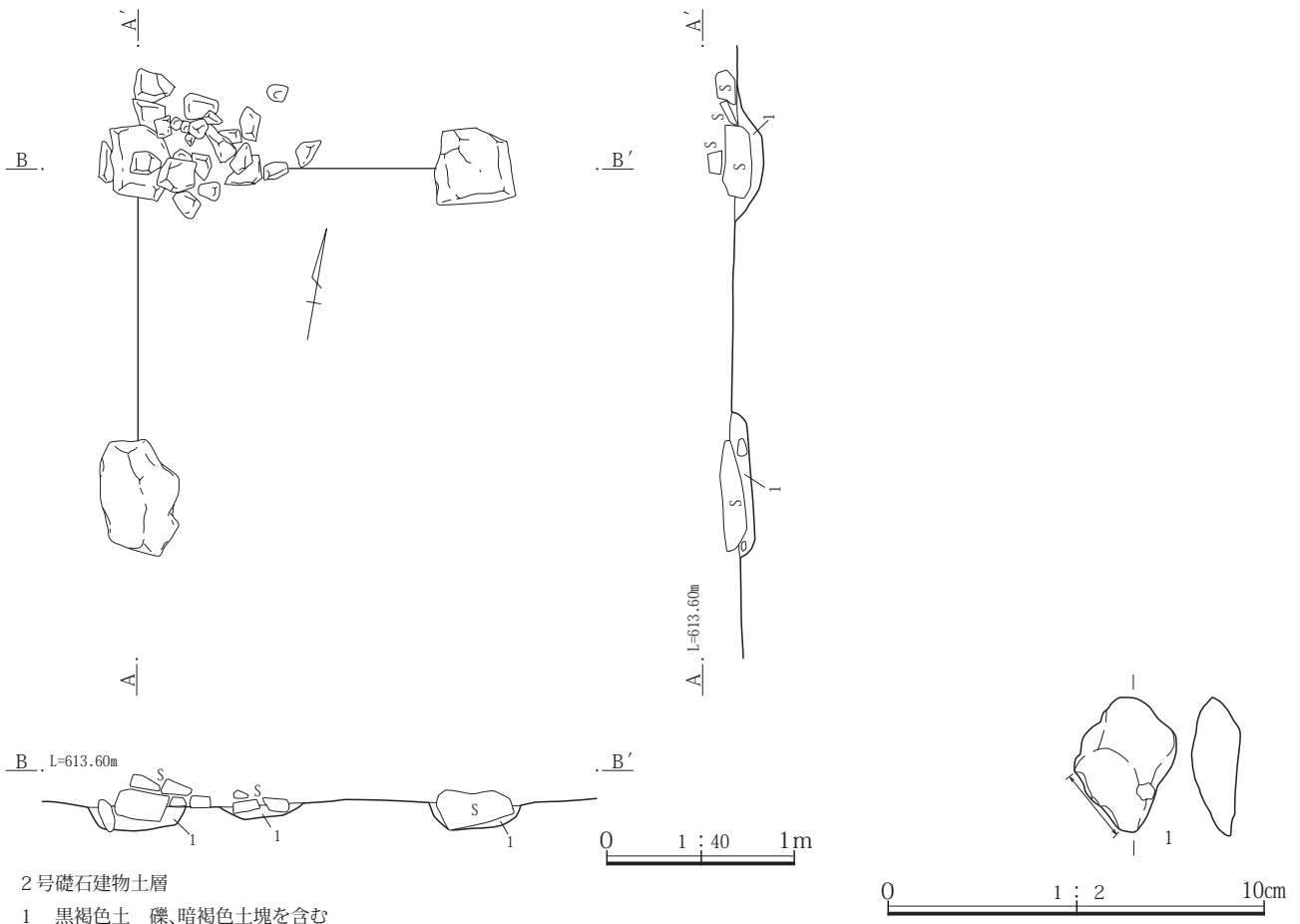
位置：調査区51区ほぼ中央のO～Q-19～21グリッド

に位置する。周辺は南側への緩傾斜地形でほぼ平坦といえる。南東約6.6mに3号礎石建物跡が近接する他、35号焼土や9号坑など中世～近世遺構が点在する。

経過：第1面調査である黒褐色土中で確認された。大型の角礫が東西に並び、その後やや小型の礫が南北に並列する様相を見せたため、1号礎石建物跡として調査をした。さらに、2面調査に至る途中で、新たにピット4基が不規則ながら、方形を意図した形態で検出され、51区1号掘立柱建物として調査された。1号礎石建物跡と1号掘立柱建物は、同地点での検出であり、主軸も一致することから、調査段階より掘立柱建物は礎石建物跡の前身として位置付けられていた。

規模・様相：礎石建物跡は東西長が約4.7m、南北長が約4.0m、さらに南北の延長上にある礫までが、約4.6mを測る。南北軸方位はN-15°-Wである。

礎石建物跡北辺は、大型角礫による石列と内側に小型



第45図 51区2号礎石建物及び出土遺物

角礫による石列が並列するが、内側の石列は下層で検出されている。東西辺はやや扁平な小型角礫による石列で構成されている。南辺は中間地点(2.5m-2.2m)に大型礫1石を囲む形態で小型礫数個が置かれていた。礎石配置としては良好な例である。なお、各礫面には柱の痕跡は見出せなかった。掘立柱建物は北辺長が約3.7m、南辺長が約4.8m、東西辺長が約2.7mを測る。東西棟で長軸方位はN-74°-Eである。掘立柱建物としては歪な方形を呈するが、礎石建物跡平面図と合成すると、軸が一致し、柱穴配置も妥当性を帯びる。さらに、柱穴位置は礎石建物の礫が無い箇所にあたり、礎石建物と掘立柱建物の関連性は極めて高い。

重複：中世～近世遺構相互の重複は見られない。下層では、縄文時代中期末～後期初頭の敷石住居跡である13号住や18号住が調査されている。

施設：炉、焼土などは検出されていない。また、周辺に溝も見られず地境施設は不明である。

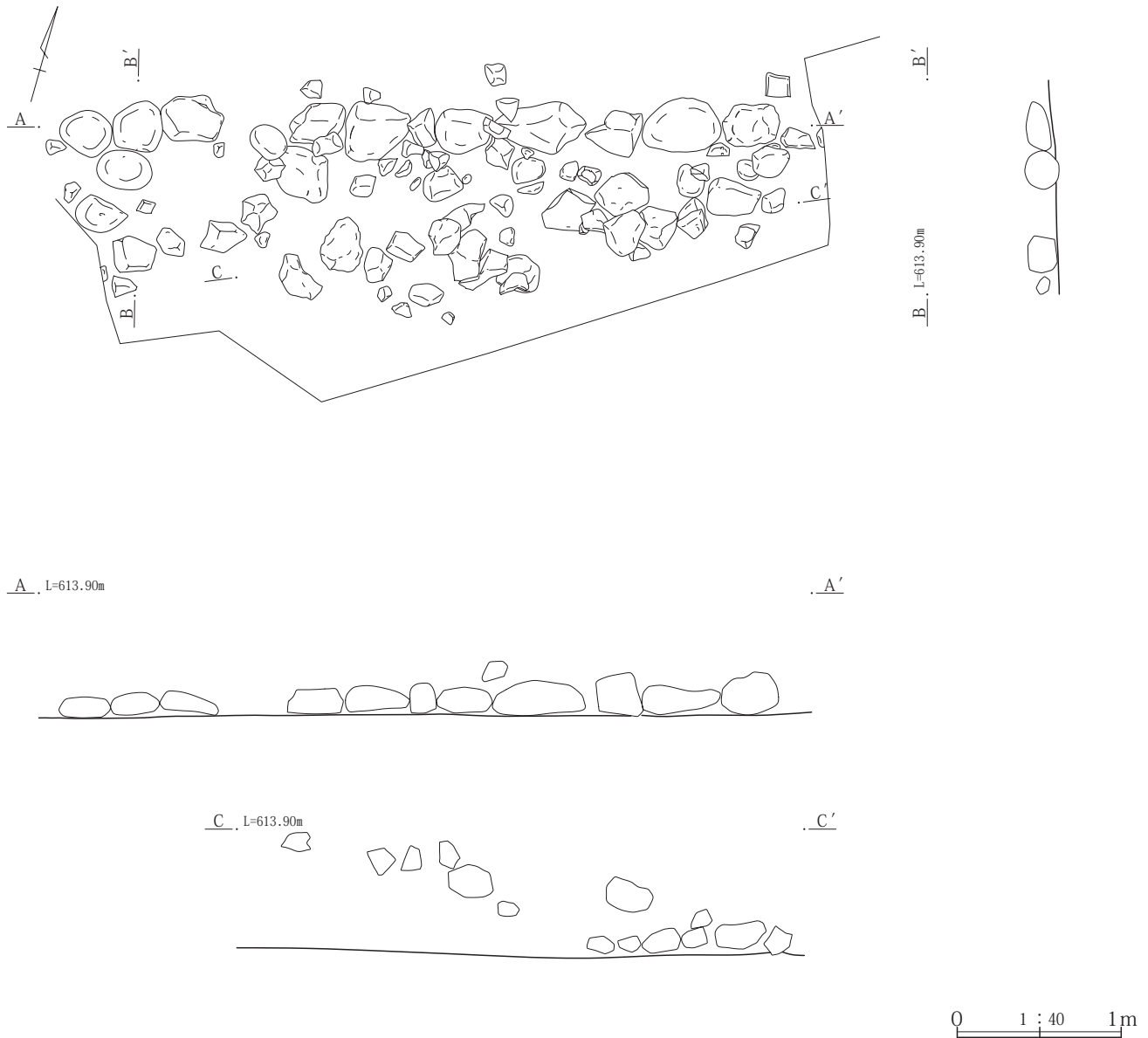
遺物：北辺の礎石際より、染付碗破片が出土している。近世の所産であろう。

所見：発掘調査における所見に1号掘立柱建物を1号礎石建物の前身とする見解があるように、礎石建物跡の下層より掘立柱建物が調査され、軸線、規模に強い関連性が窺われた。おそらく掘立柱建物→礎石建物という変遷が想起されるが、あるいは、両者が併存していた可能性もある。掘立柱建物の各柱穴が礎石間の礫が置かれていない箇所と合致する様相から、礎石建物建築時に掘立柱建物の柱が存在していたと考えられる。

礎石建物跡南側は礫も少なく、簡素な印象を受けるが、北側は大型角礫が並ぶ景観を示しており、装飾効果も具備していたようだ。内側のやや小型の石列が礎石としての性格を持ち、外側の大型礫は装飾効果を持つ石垣あるいは補強などを備えた石列とも捉えられよう。時期は良好な出土遺物を持たず、判然としないが、礎石であることと出土した染付碗から近世と判断したい。

51区2号礎石建物跡(第45図 PL. 7・35)

位置：調査区51区南西端の52区との境界付近で調査した。周辺はほぼ平坦面が広がり、本遺構周辺には近接・



第46図 51区3号礎石建物

重複する同時期の遺構が見られないことから、大型の建物が継続的に存在していた可能性がある。

経過：調査1面目の黒褐色土中で検出した。大型の自然石が3箇所にわたり確認され、直交する配置を見せたことから、礎石建物跡の北西隅と判断した。礎石建物南半は調査区域外に延長するが、未調査である。

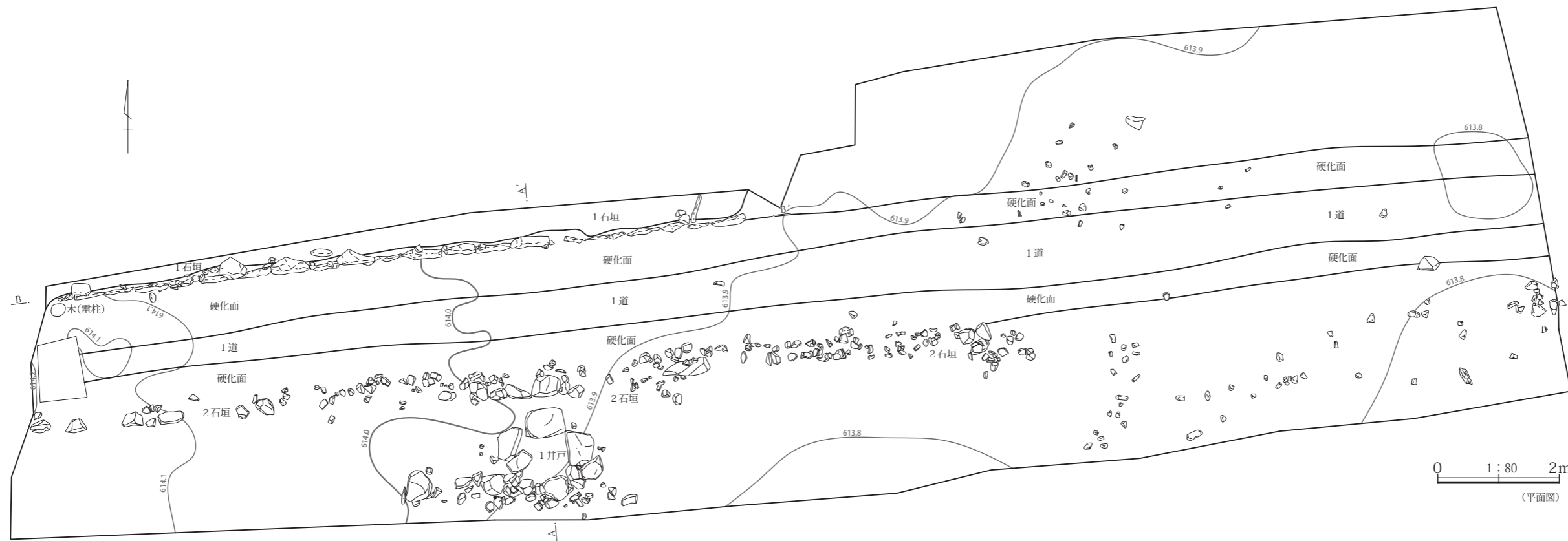
規模・様相：北辺の礎石間は約2.6m、西辺の礎石間は約2.8mを測る。礎石は浅い掘り込みに置かれており、3石とも大型で東端の礎石が辺長約57cm、北西の礎石が辺長約50cmを測る方形の角礫を充て、南端の礎石が不整形の礎石で約60×90cmを測る。各礎石上端に加工痕等は見られなかったが、平坦面が選ばれ、ほぼ水平面が保たれていた。北西隅の礎石はその周辺に中型の角礫・亜角

礫が集まっており礎石上端を覆っていた。中型・小型礫は割栗石状で柱材補強などの用途が考えられる。

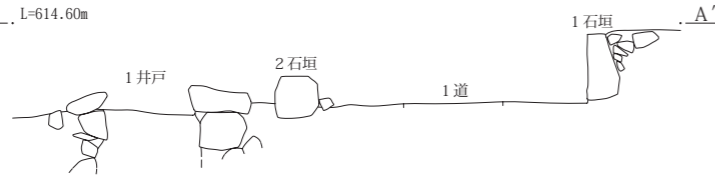
重複：中世～近世遺構の重複は見られなかった。下層より縄文時代の270坑、271坑が調査されている。

遺物：火打ち石1点が出土している(第45図1)。遺構の性格や時期を特定するには至らない。

所見：南側の調査区域外に延びる礎石建物跡である。礎石の様相や礎石間から大型でしっかりした造りが想定される。冒頭で述べた大乘院などに関連する施設の可能性もあるだろう。時期は判然としないが、礎石建物という要素で、近世以降に求めておきたい。

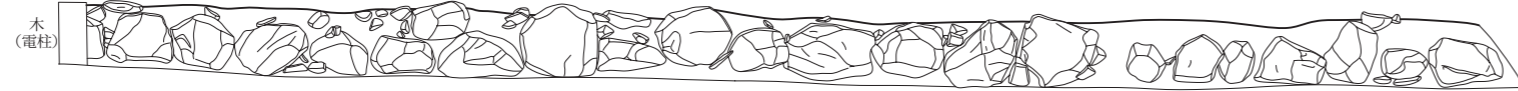


A, L=614.60m

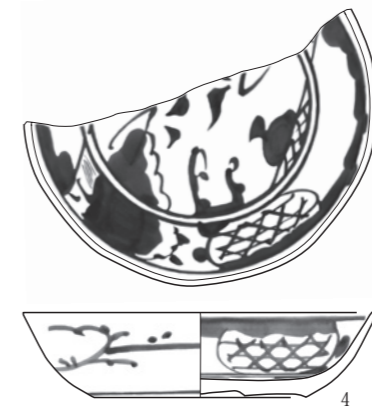
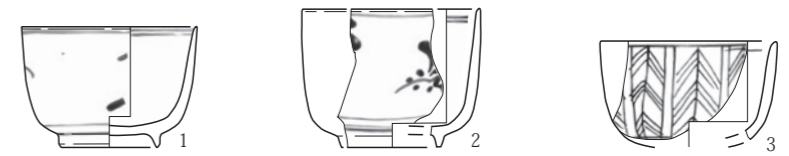


1号石垣立面图

B, L=614.70m



0 1:60 2m
(断面图)



0 1:3 10cm

第47图 51区・52区1・2号石垣及び出土遺物、1号道跡、52区1号井戸

51区3号礎石建物跡(第46図 PL.8)

位置：調査区51区のほぼ中央で確認された。N・O-20グリッドに位置する。周辺は南側への緩傾斜地形でほぼ平坦といえる。約6.6m北西に前述の1号礎石建物跡と1号掘立柱建物が立地するが、周辺の中世～近世の遺構は希薄といえよう。

経過：第1面調査で検出されている。大型の角礫が東西に並び、北西隅で南に屈曲する傾向が見られたため、礎石建物跡として位置付けた。ただし51区は、工事と調査工程により分割調査がされており、南側部分は後の調査となった。南側は、大型礫の出土をみたものの、多くが礎石建物を構成する礫ではなく、浮いた状態で出土していた。さらに南側は傾斜地形のため、礎石建物南半は逸失していたため、確認できなかった。

規模・様相：北辺の石列のみの調査となった。約4.3mの距離に10個程の大型自然礫が並ぶ。概ね40～80cmの大きさで、垂角礫や垂円礫を主としていた。上端は平坦面を選び水平を保つ傾向は見られたが、1号や2号礎石建物のように整然としておらず凹凸が目立つ。

重複：中世～近世遺構との重複は無い。

所見：南半が傾斜地形や調査工程で把握できなかった反省が残る遺構である。南の道路下の調査を取り込んだが、礎石建物に伴う石列は検出できなかった。北辺の石列のみの調査となり、全体像は判然としないが、東西軸に石列を施す様相は1号礎石建物跡に近似しており、6m以上離れた距離ではあるが、両者の関連も想定しておきたい。時期は出土遺物もないため判然としないが、礎石建物という要素で近世以降の所産としたい。

3. 石垣遺構・道状遺構・井戸遺構(第47図 PL.8・35)

調査区中央やや西よりの51区と52区に跨がって石垣遺構2基と道状遺構、52区井戸遺構を調査した。なお51区井戸遺構も本項で併せて報告したい。

石垣遺構(以下石垣)

位置：石垣は2基が検出された。いずれも、51区と52区を跨がって東西に平行する走行を見せている。1号石垣が51区Y～52区A～C-18グリッド、2号石垣が51区X・Y～52区A～C-17グリッドに位置する。

経過：51区と52区を跨がり東西に走る現道下の調査で検出した。現道には現在の石垣が現存しており、1・2号石垣はその基礎部分でもある。

規模・様相：1号石垣の長さは約11.0m、2号石垣は約16.4mの距離を測り、両者とも東西(N-84°-E)の走行を示す。1号石垣は大型角礫を主体としており、60～80cmの高さに積まれていた。表土に露出していた石垣は円礫を主体としており、現存する石垣とは様相を異にする。基礎部分のみの検出となったが、おそらく乱石積みであろう。2号石垣は、1号石垣の南側約2.1mを平行する。1号石垣より長く検出されたが、基礎部分のみが確認された。数箇所、石列の途切れが見られるが、おそらく連続した石垣が走行していたのだろう。

重複：中世～近世遺構の重複は無いが、1号石垣と2号石垣の間に道状遺構が平行する。また2号石垣南に52区井戸遺構が近接する。

遺物：1号石垣、2号石垣から染付碗、皿(第47図1～5)が出土している。いずれも近世の所産であろう。

所見：現道下位より検出された石垣である。出土した染付碗などから時期は近世～近・現代に充てたい。

道状遺構

位置：1号石垣と2号石垣の間で並行して確認された。

51区V～Y～52区A～C-17・18グリッドに位置する。経過：1・2号石垣と同時に調査した。両石垣の間に平坦面と硬化面が確認されたため、道状遺構とした。

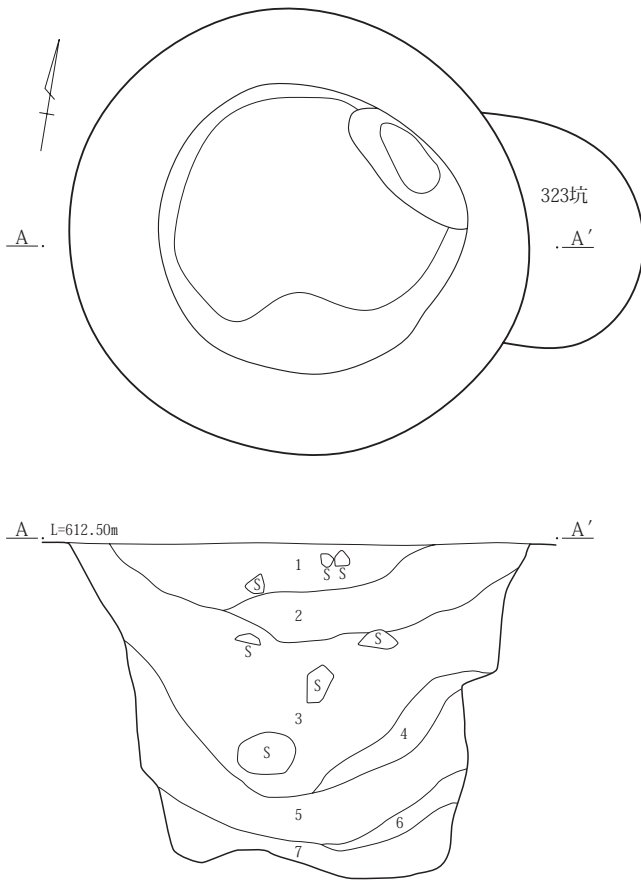
規模・様相：2号石垣の北を約24mにわたって、東西に並行する。幅は約2.1mを測り、これは1号石垣と2号石垣の間と一致する。両石垣際を約40～110cmの幅で硬化面が確認されている。北側の硬化面は1号石垣の延長を更に延長しており、東西の強い動線を示唆する。

重複遺構、出土遺物は見られなかった。

所見：おそらく1号石垣と2号石垣と同時期の道跡であろう。動線は東西に延びるが51区東側では表土、攪乱が厚く、壊されていたようだ。しかしながら現道は延びており、おそらく近世段階より、東西の道状遺構は設けられていたであろう。

井戸遺構(以下井戸)

52区1号井戸と51区1号井戸が調査されているが、52



- 51-1号井戸土層
- 1 黒色土 軟質。表土近似
 - 2 褐色土 軟質。ローム塊を多く含む
 - 3 黒色土 軟質。ローム塊を少量含む
 - 4 黒褐色土 ローム塊を含む
 - 5 黒色土 ローム塊を少量含む
 - 6 黒褐色土 ローム塊を多く含む
 - 7 黒色土 大型のローム塊を含む

0 1:40 1m

第48図 51区1号井戸

区1号井戸は石垣や道と近接して調査されており、51区1号井戸より先に概要を述べておきたい。

52区1号井戸

位置：2号石垣南に近接して確認された。52区A-17グリッドに位置する。

経過：1・2号石垣や道状遺構と共に調査された。石組み井戸であり、深さは2m以上が見込まれ、調査を進めるには危険なため、上面の記録化に止めた。

規模：径約1.5m以上を測る堀方に大型の角礫を石組みした井戸である。上位2段の石組を外した段階で、石組みの崩れが認められ、深さの計測は断念した。

重複遺構、出土遺物は無かった。

所見：おそらく1号石垣や2号石垣と同様に近世～近現代に比定される。道や石垣際に設けられた井戸として、当時の生活施設の在り方を示唆する資料である。

51区1号井戸

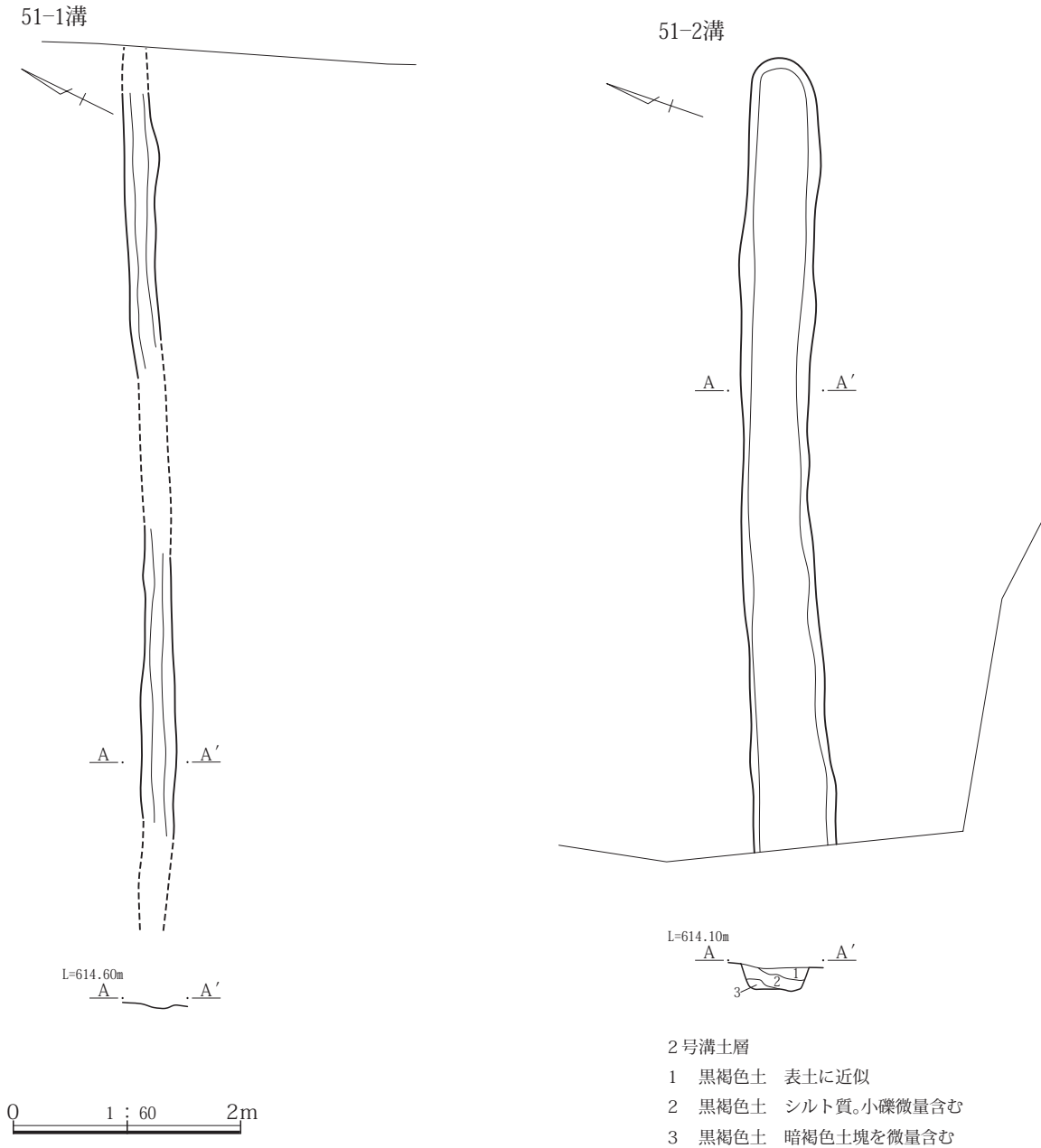
位置：51区中央やや南寄りで調査された。ほぼ平坦地形が広がるが、遺構密度はやや希薄な地点である。51区R-17・18グリッドに位置する。

経過：黒褐色土中より15号集石や18号集石があったが、最終的には本遺構に含まれ、埋土中の集石として位置付けた。井戸として確認し得たのはローム漸移層上層の暗褐色土中である。

規模・様相：径約240cm、深さ約175cmの素掘りの井戸である。下面は応桑泥流層にまで達し、僅かに湧水を見た。湧水は下面に設けられた小ピットから認められた。

重複遺構・出土遺物は見られなかった。

所見：前述した51区と52区を東走する道状遺構の延長に位置する。検出されなかったが、本井戸遺構北側に道状遺構が東西に設けられていたのなら、52区1号井戸と同様の様相となる。52区1号井戸は石組み井戸であるが、本井戸遺構は素掘りである。あるいは上層で確認された集石遺構は井戸廃棄に伴う石組等に使用された礫の流入であろうか。時期は近世～近・現代である。



第49図 51区1号溝・2号溝

4. 溝状遺構(以下溝)(第49図 PL.9)

2条の溝を調査している。2条とも51区での検出である。その他に、61区や62区でも溝や自然流路を調査しているが、縄文時代の所産として前冊に掲載した。

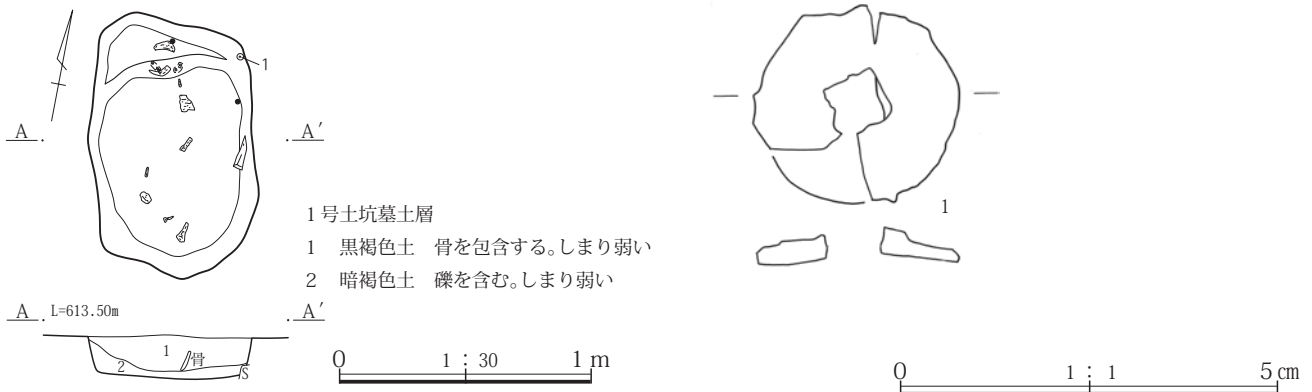
1号溝

位置：51区北東部の61区境界近くで調査された。南側への緩斜面地形で等高線に沿う形状で確認された。51区O～Q-23・24グリッドに位置する。南東に106坑が近接するが、確認面にも差があり関連性は弱い。

経過：第1面目の調査における黒褐色土中で確認した。

浅い凹みにしまりの乏しい褐色土とAs-Aの堆積を見た。規模・様相：長さ約80cm、幅約25cmを測る小規模な溝である。掘り込みも浅く10cm未満で、平面形の把握も困難でそのため断続的な平面形把握となっている。走行は東北東を向く(N-62°-E)。傾斜も顕著では無く、凹凸が強いながらも若干南西方向が低い。

所見：東西方向の走行のため、水利としての機能は想定できない。地境などの用途や、畑サクの一部として位置付けも考えられよう。また、As-Aの堆積も見るが、浅く、良好な堆積とは判断できない。それ故、時期も近世から近・現代と時間幅を持たせたい。



第50図 51区1号土坑墓及び出土遺物

2号溝

位置：調査区51区中央東寄りで調査された。本溝も51区1号溝と同様に等高線に沿う東西の走行で確認された。周辺に中世～近世の遺構は見られないが、東南に近接して、1号道などが東西の走行を示している。

経過：表土直下の黒褐色土中で確認した。第1面調査による検出である。黒褐色土を埋土としていたが、しまりが著しく乏しく、検出は容易だった。

規模・様相：長さ約7m、幅60～70cmを測り、西側で途切れる。深さは東側が25cm程で深く、西側で徐々に浅くなる。壁は直立し、箱形の断面形を示す。

所見：1号溝と同様に東西方向の走行を示す。南西方向に同様の走行を示す1号道があることから、地境など地割りの痕跡か。時期は近世～近・現代であろう。

5. 土坑墓

林中原Ⅱ遺跡では、中世～近世に比定される土坑墓が1基調査されている。ハツ場ダム調査地域では、多くの土坑墓が調査されており、その殆どが中世～近世に時期が求められている。本遺跡の西に近接する林中原Ⅰ遺跡でも6基の土坑墓が報告されている。おそらく、各遺跡で検出された該期集落内の墓域が反映した結果と思われる。なお、本遺跡ではその他に土坑墓の可能性としては180号坑などが挙げられるが人骨の出土が見られず、確定性に乏しいため、ここでは1号土坑墓の報告に止める。

51区1号土坑墓(第50図 PL.9)

位置：調査区51区南東部で単独で調査された。周辺は緩やかな南側への斜面地形が広がり、ほぼ平坦面に占地する。51区V・W-16・17グリッドに位置する。近接遺

構としては、48号焼土や52号焼土など中世～近世遺構が点在するが、濃密な遺構分布ではない。

経過：第1面目の調査の黒褐色土中で確認された。遺構平面形の確認中、頭部骨が露出したため、墓壇の可能性を踏まえて精査を重ねた。その結果、頭部を北に向けた成人人骨が出土したため、1号土坑墓として位置付けた。出土遺物は希薄で、古銭1枚が頭部より出土したのみである。出土人骨は、整理段階で分析鑑定委託し、本書第4章に掲載している。

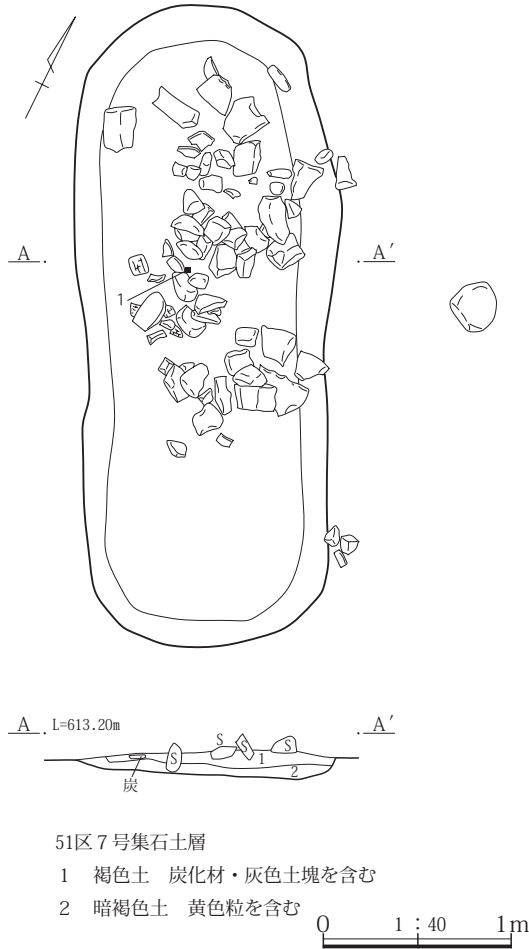
規模・様相：主軸を北北西(N-11°-W)に向けた不整楕円状の平面形を呈する。長軸長約101.0cm、短軸長約65.0cm、深さ約17cmを測り、壁もしっかりと掘り込まれた、箱形の断面形を示す。人骨は遺構確認時より出土しており、詳細な検出作業を試みたが頭骨以外は、大腿骨などの出土に止まり。人骨の残存状態は極めて悪かった。頭骨などの在り方から、人骨は1体分と判断した。

重複：単独の検出であり、重複する中世～近世遺構は無い。下層で縄文時代住居跡である51区16号住が調査されている。

遺物：土坑墓北西隅の壁際で、古銭が1枚出土している。副葬品として位置付けるが、錆化が著しく詳細は不明である。

所見：埋葬姿勢は、頭部を北北西に向けた横臥屈葬と思われる。分析により出土人骨は20～30歳代の女性と推定された。土坑墓は、周辺には見られず、単独の検出である。ただ、南西にかけて48号焼土や180坑、184坑が見られることから、墓域などの宗教的な空間としての位置付けも可能であろう。1号土坑墓の時期としては、出土古銭が判然としないため確定できない。中世以降の土坑墓と考えておきたい。

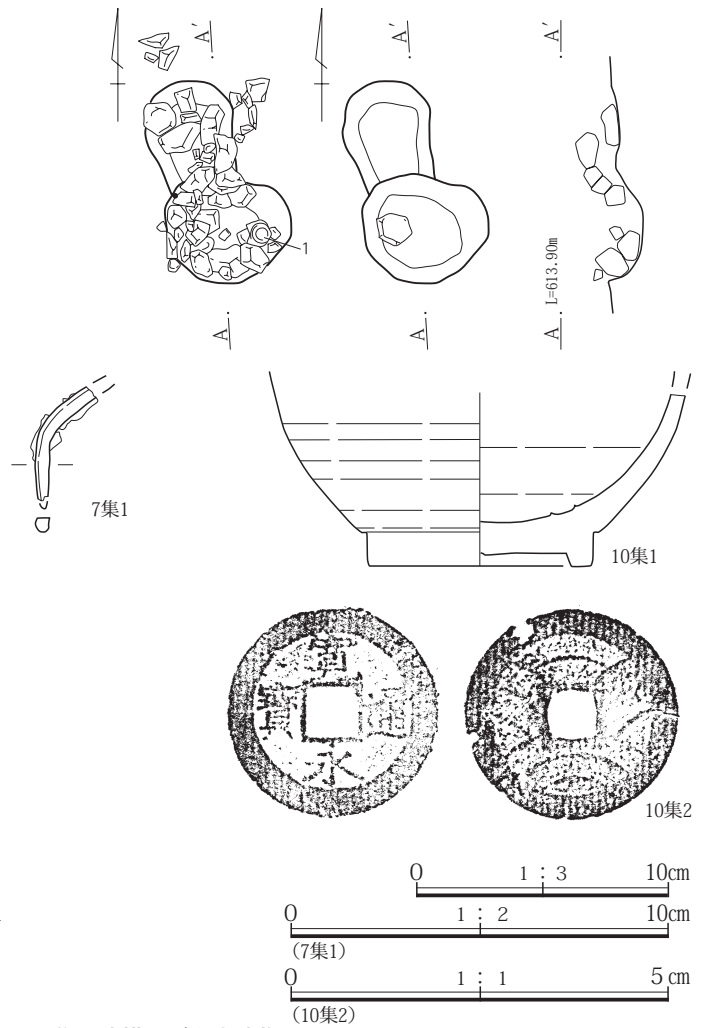
51区7号集石遺構



51区7号集石土層

- 1 褐色土 炭化材・灰色土塊を含む
- 2 暗褐色土 黄色粒を含む

51区10号集石遺構



第51図 51区7号・10号集石遺構及び出土遺物

6. 集石遺構(以下集石)

本遺跡では、多くの集石遺構、集石土坑を調査している。その多くが縄文時代の所産であり、前冊や前々冊に掲載しており、ここで報告する中世～近世の集石遺構は2基のみである。2基とも51区で検出されており、この他に15号集石と18号集石があるが、51区1号井戸の項で述べたように、15号集石と18号集石は1号井戸上層に廃棄された礫の可能性が高く、遺構としては自立できないため除外した。

51区7号集石(第51図 PL. 9・35)

位置：51区M-21・22に位置する。調査区51区東端の緩やかな南への斜面地形に占地する。周辺には中世～近世遺構は近接せず、単独の検出となった。

経過：黒褐色土下位層での検出である。第1面調査では遺構が少ないため、2面目の調査面に至り、ローム漸

移層に至る前に確認された。大型角礫の露出が著しく、浅い土坑に礫が集中する集石遺構として位置付けた。

規模・様相：平面形は長軸を北北西(N-26°-W)に向けた不整楕円形を示す。平面規模は約340×140cm、深さは約6cmと浅く皿状の断面形を示す。壁の立ち上がりも弱い。集石は土坑北側から東側に集まる傾向が見られた。大型角礫や亜角礫、また板石状の安山岩などからなり、特に大きな偏りは見られない。顕著な被熱痕跡も見られなかった。また土坑南西側上層で板状の炭化材の出土を見る。埋土でも、灰色土塊を見るが灰・焼土による例と思われる。

遺物：板状の炭化材と伴に鉄釘破片が出土している。所見：集石土坑であり、また板状の炭化材や鉄釘の出土から木棺を焼成した遺構あるいは墓廬の可能性を考えたが、人骨の出土も見られず確定的ではないため、性格は不明としたい。時期も埋土の様相から近世～近・現代

と時間幅を広く設けたい。

51区10号集石(第51図 PL.9・35)

位置：調査区51区南東部で単独で調査された。周辺は緩やかな南側への斜面地形が広がり、ほぼ平坦面に占地する。51区X-16グリッドに位置する。近接する中世～近世遺構としては、52号焼土や184坑などが見られる。

経過：第1面調査である黒褐色土中で調査された。遺構平面形の確認作業中に中・大型の角礫が集中し、染付陶器碗や古銭の出土が見られたため集石として位置付けた。さらに、小規模ながら下位より掘り込みが確認され、集石土坑として判断できた。

規模・様相：径約66.0cmの小型円形土坑を主とし、不整形楕円状の浅い掘り込みが北側に付帯する。深さは約20cmで皿状の断面形ながら掘り込みはしっかりしていた。集石は土坑全体から出土しているが、円形土坑中央部分には礫が見られなかった。また、礫には被熱痕跡は無かった。

遺物：集石と混在して片口鉢底部(1)と銭貨(寛永通宝)(2)が出土している。片口鉢底部は逆位で埋土中位から出土しており、意図的な埋置ではない。

所見：小型の集石土坑ながら、銭貨の出土を見る。前述した1号土坑墓と同様の地点にあり、周辺にも焼土や円形土坑が近接することから、宗教的な性格が想定されよう。あるいは小型の墓壇の可能性もある。時期は出土遺物から、近世に位置付けたい。

7. 焼土遺構(以下焼土)

焼土遺構も本遺跡では数多く調査された。その殆どが縄文時代に比定されたため、既報告済みであるが、調査工程上、住居跡炉跡周辺の焼土を焼土遺構とし、後に住居跡に帰属した例も多く、遺構ではなく欠番となった例も多い。ここでは、第1面調査で確認し遺構として判断された焼土や中世～近世遺物を出土した焼土を中心に報告する。

51区35号焼土(第52図 PL.10)

位置：調査区51区のほぼ中央で調査された。R-21グリッドに位置する。周辺は南側への緩傾斜地形でほぼ平坦といえる。周辺遺構として、東約2.2mに1号礎石建

物跡が近接するが、中～近世遺構は点在する程度の密度である。

経過：第2面調査で検出した。周辺の遺構検出面は高く、ローム漸移層上層の暗褐色土で確認した。

規模・様相：浅い不整形土坑を掘り込みとする。規模は95.0×66.0×3.0cmで平坦に近い掘り込みに焼土が塊状に堆積する。

遺物：出土遺物は見られない。

所見：性格・時期不詳の焼土である。周辺遺構の様相から、近世以降の所産か。

51区48号焼土(第53～56図 PL.10・35・36)

位置：調査区51区南西端で調査した。南東への緩斜面地形が広がり、平坦地形に占地するといえよう。49号焼土や180坑や183坑、184坑が近接するように中世・近世遺構が集まる地点である。51区W・X-14・15グリッドに位置する。

経過：ローム漸移層上位の暗褐色土中で確認した。小型の焼土塊が広く見られ、炭化物以外に陶器片口鉢や銭貨等の遺物が出土したため、近世の焼土遺構として位置付けた。

規模・様相：東西に長軸を持つ不整形の浅い土坑に焼土が点在する。平面規模は約490×380cm、深さは17cmを測る。皿状の断面形で壁も不明瞭で浅い。坑底面は凹凸が顕著で、焼土化したローム小塊と炭化物が下層に堆積していた。

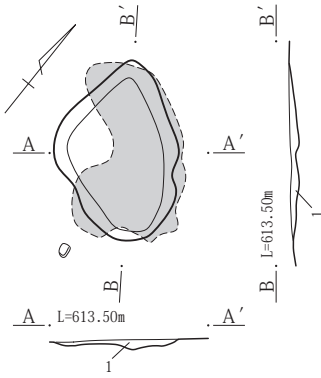
遺物：陶器片口鉢(1)。染付碗・皿(3・4)、砥石(7)や銭貨(17～30)が底面付近で出土している。その他に煙管吸口(8・9)や刀子(11)、獣骨などの出土を見る。

所見：周辺遺構の様相や銭貨の出土から墓壇あるいは宗教的な施設としての位置付けを想定したが、砥石や刀子などの金属製品の出土も見ることから、何等かの工房としての位置付けも妥当性を持つ。なお、獣骨は比熱していないウサギ下顎骨とした分析結果を得ている。

51区49号焼土(第52図 PL.10)

位置：調査区51区南西端の52区との境界付近で調査した。51区X・Y-14グリッドに位置する。周辺はほぼ平坦面が広がり、南西に51区2号礎石建物、北東に48号焼土や183号土坑など中世～近世の遺構群が近接する。

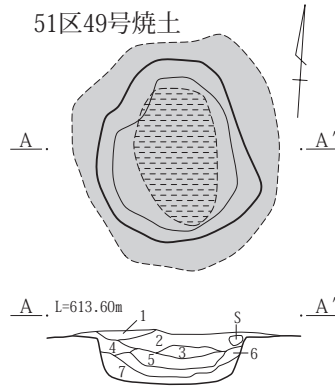
51区35号焼土



51区35号焼土土層

- 1 黒褐色土 焼土塊を含む

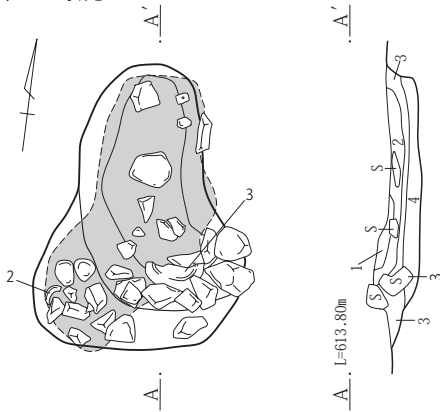
51区49号焼土



51区49号焼土土層

- 1 暗褐色土 炭化物を多く含む
- 2 褐色土 焼土粒、炭化物を多く含む
- 3 褐灰色土 白色灰、炭化物を多く含む
- 4 暗褐色土 白色灰粒、焼土粒を含む
- 5 にぶい黄橙色土 白色灰を主体とする
- 6 褐色土 焼土粒、炭化物を含む
- 7 明赤褐色土 焼土塊を多く含む

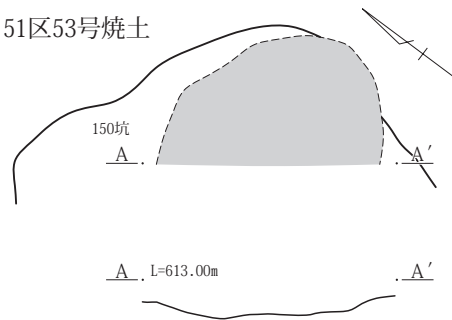
51区52号焼土



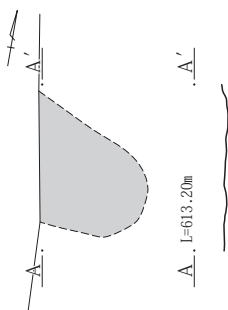
51区52号焼土土層

- 1 明褐色土 ローム小塊、焼土塊、炭化物を多く含む
- 2 褐色土 焼土大塊、礫を含む
- 3 褐色土 焼土粒を少量含む
- 4 暗褐色土 焼土粒少量含む。しまりやや弱い

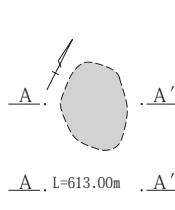
51区53号焼土



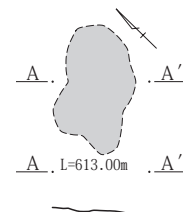
51区67号焼土



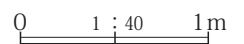
51区84号焼土



51区85号焼土

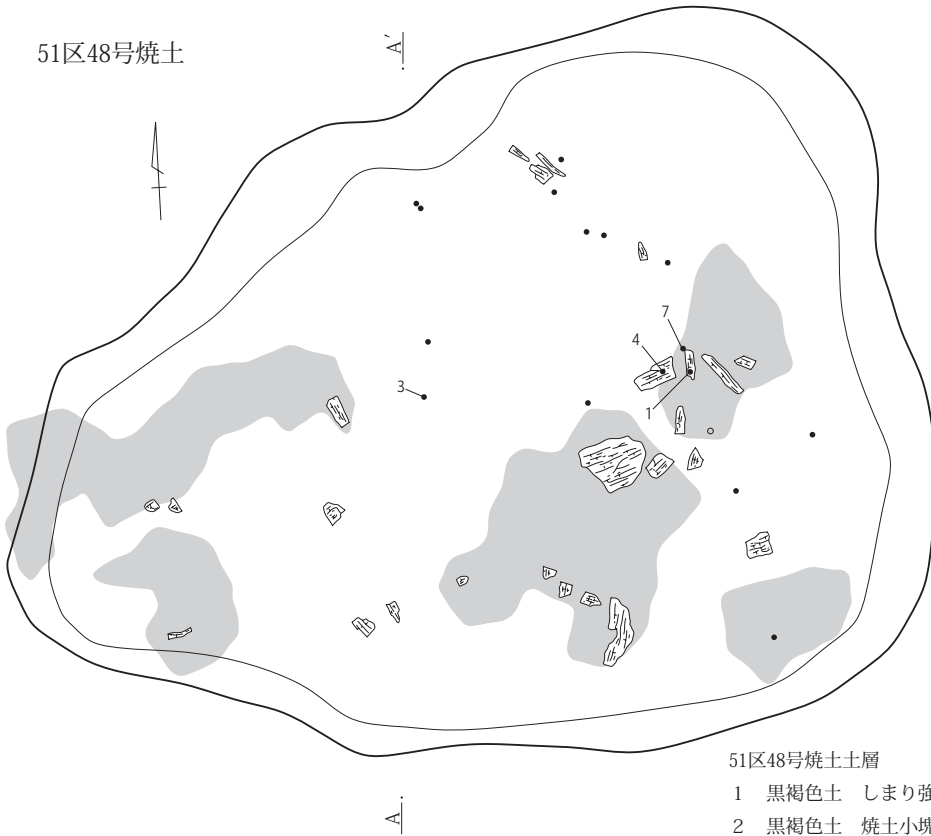


トーン部は焼土



第52図 焼土遺構(1)

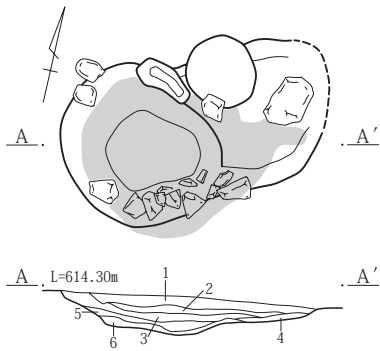
51区48号焼土



51区48号焼土土層

- 1 黒褐色土 しまり強い
- 2 黒褐色土 焼土小塊、炭化物を多く含む
- 3 黒褐色土 焼土小塊を少量含む
- 4 にぶい黄褐色土 焼土小塊を多く含む
- 5 にぶい黄褐色土 焼土塊、炭化物を多く含む
- 6 褐色土 焼土塊を主体とする。硬質

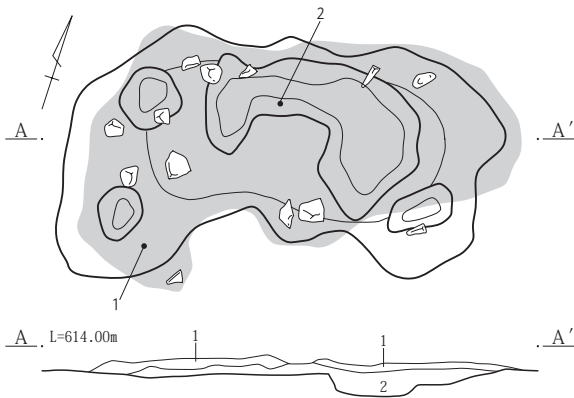
52区1号焼土



52区1号焼土土層

- 1 暗褐色土 焼土小塊、炭化物を微量含む
- 2 灰黄色土 灰層。シルト質で炭化物を微量含む
- 3 灰白色土 灰層。シルト質で炭化物を微量含む
- 4 暗褐色土 焼土塊を多く含む
- 5 赤褐色土 焼土主体、灰、炭化物を含む
- 6 暗褐色土 灰、焼土塊を含む

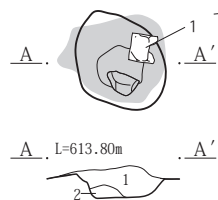
52区18号焼土



52区18号焼土土層

- 1 黒褐色土 焼土大塊、炭化物を多く含む
- 2 黒褐色土 焼土粒、ローム粒を少量含む

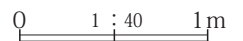
52区19号焼土



52区19号焼土土層

- 1 褐色土 焼土塊、ローム小塊を含む
- 2 暗褐色土 ローム大塊を含む

トーン部は焼土



第53図 焼土遺構(2)

経過：ローム漸移層上位の暗褐色土中で確認した。上層で焼土粒の散布が見られ、まとまった焼土塊が検出されたため、焼土遺構として調査した。

規模・様相：長軸を南北に向けた、96.0×78.0×12.0cmを測る不整形土坑に焼土・炭化物、灰が堆積する。掘り込みはしっかりしており、壁は直立し箱形の断面形を示す。埋土中位に約15cmの厚さでレンズ状に白色灰が堆積していた。伴出する小礫も比熱しており、土坑内で焼成が行われていたようだ。

遺物：出土遺物は見られない。

所見：主体的な遺物の出土を見ないため、詳細な時期・性格は不明であるが、周辺には48号焼土や180坑、183坑などの中世～近世遺構が近接すること、焼土、灰の堆積の様相や埋土の特徴から同時期の所産と考えておきたい。

51区52号焼土(第52・56図 PL.11・36)

位置：調査区51区南東部で調査された。周辺は緩やかな南側への斜面地形が広がり、ほぼ平坦面に占地する。51区W・X-16グリッドに位置する。近接する中世～近世遺構としては、南西に10号集石や東に1号土坑墓などが見られる。

経過：ローム漸移層上層の暗褐色土で確認した。遺構平面形の確認中に小型の焼土塊や炭化物と大型角礫がまとまることから、焼土遺構として調査した。

規模・様相：長軸を南北に持つ不整形円状を平面形とし、平面規模は約150×107cm、深さは15.0cmを測る。堀方の断面形状は皿状を呈し、壁の立ち上がりも弱い。南側上層に大型礫が集中する。中心部分に石臼上臼の半欠品を見ることから、意図的な礫集中と判断したい。焼土は土坑中心部分に堆積しており、周辺の出土礫にも比熱痕跡が見られることから、土坑内で焼成が行われた可能性は高い。

遺物：南側の大型角礫集中部分より内耳鍋破片や染付皿破片の出土を見る。また前述の上臼はやや斜位に傾いて出土しており、意図的な埋置と判断したい。

所見：集石を伴う焼土遺構である。集石の様相からおそらく墓壇と思われるが、焼土の様相から焼成を伴う墓壇と判断したい。ただし、人骨や銭貨の出土もなく確定性に乏しい。

51区53号焼土(第52図 PL.11)

位置：調査区51区北東端にある51区150号坑上層で調査された。51区K-24・25グリッドに位置する。周辺は南東への緩傾斜地形が広がり、中世～近世遺構としては150坑以外に、170坑や185～189坑、190坑が近接する。

経過：ローム漸移層下位の黄褐色土で確認した。150坑も同時に調査されており、150坑上層で焼土の広がりを確認したため、別の遺構として判断して記録化した。規模・様相：南側を150坑の調査により逸失している。径120cm程の範囲で、10cm程の浅い皿状の凹みに焼土が堆積していた。

遺物：出土遺物は見られない。

所見：あるいは、150坑とは重複ではなく、同時期の可能性も考えておきたい。焼土遺構としての性格は不明だが、150坑は完形の火鉢や石臼片が出土しており、近世遺構として位置付けられている。本焼土も近世として考えておきたい。

51区67号焼土(第52図 PL.11)

位置：調査区51区中央付近で調査された。51区S-20グリッドに位置する。周辺は南側への緩斜面地形でほぼ平坦面が広がる。近接する中世～近世遺構はなく、南西に距離をおいて2号溝があり、東に35号焼土や1号礎石建物跡が見られる。

経過：調査工程で東半のみの調査となった。確認面はローム漸移層の暗褐色土である。

規模・様相：径60cm前後の不整形か。確認面に焼土が散布する状況で掘り込みも顕著ではなかった。

遺物：出土遺物は無い。

所見：東半のみの調査で、掘り込みも無く、遺物の出土も見られないため、性格や時期は不明である。

51区84号焼土(第52図 PL.11)

位置：調査区中央部南寄りで見出された。51区Q-17グリッドに位置する。南側への緩斜面地形が連続し、距離をおいて北に51区1号井戸を見るが、近接遺構は無く、遺構密度も低い地点である。

経過：ローム漸移層上層ながら黒褐色土上層で確認された。遺構平面形確認作業中、焼土塊がまとめて検出されたため、焼土遺構として調査した。

規模・様相：48.0×34.0cmの小型楕円形の範囲に焼土塊がまとまる。掘り込みは持たない。

遺物：出土遺物は無い。

所見：掘り込みも無く、遺物の出土も見られないため、時期、性格とも不明である。

51区85号焼土(第52図 PL.11)

位置：調査区中央部南西寄りで検出された。51区S-16グリッドに位置する。南側への緩斜面地形が連続し、51区1号井戸が距離をおいて北にあるが、周辺に近接遺構は無く、遺構密度も低い地点である。

経過：ローム漸移層上層ながら黒褐色土上層で調査した。遺構平面形確認作業中、焼土塊がまとまって検出されたため、焼土遺構として調査した。周辺は木根が著しく繁茂し、確認作業に手間取った。

規模・様相：約69×40cmの不整形の範囲に、焼土がまとまる。掘り込みを持たない。

遺物：遺物の出土は見られなかった。

所見：掘り込みも無く、遺物の出土も見られないため、時期、性格などは不明である。

52区1号焼土(第53図 PL.12)

位置：52区H-14グリッドに位置する。調査区東側にあたり、周辺はほぼ平坦地形が広がる。北西約5mに52区1～3号掘立柱建物跡が近接し、南には43坑や12・13坑が重複する。

経過：第1面の調査面で確認された。遺構平面形確認作業中に、焼土塊や中・小型の礫が集中したため、焼土遺構として位置付けた。同時に43坑も調査したが、新旧関係は不明である。

規模・様相：2基の浅い土坑に焼土が堆積する。円形の土坑がやや深く、焼土の堆積も厚い。径約90cmで深さは20cmを超える。皿状の断面形ながら掘り込みはしっかりしていた。焼土は全体に堆積・散布しており、白色灰が中層に明瞭に堆積していた。伴出する中・小型礫は角礫を主体としており、被熱痕跡が認められた。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：礫を伴う焼土遺構である。51区52号焼土と同様に、焼成を伴う墓壙とした位置付けを考えたい。遺物の出土は無いが、周辺土坑との関係から、おそらく近世の

所産であろう。

52区18号焼土(第53・57図 PL.12・36)

位置：調査区52区の西側の51区境界近くで調査した。52区A・B-15グリッドに位置する。周辺は南東への緩斜面地形にあり、ほぼ平坦面が広がる。中世～近世遺構が点在する地点であり、19号焼土や178坑や179坑が東に近接する。

経過：第1面目の調査である黒褐色土中で確認した。比較的広い範囲より、焼土塊や炭化物、染付破片が出土したため、焼土遺構として位置付けた。

規模・様相：東西に長軸を持つ不整形の平面形を呈す。平面規模は約231.0×109.0cm、深さは最深部で15cmを測る。掘り込みは不連続で、壁の立ち上がりも弱い。焼土は小塊状に広く分布していた。

遺物：底面付近から第57図1・2の染付破片、火鉢破片(3)、銭貨(4)が出土している。一銭銅貨(5)も図示したが、出土記録が判然としない。検討を要する。

所見：51区48号焼土と同様に、浅く広い範囲に焼土塊と炭化物、遺物が出土する様相を示す。墓壙あるいは何らかの工房の可能性もあるが、性格は不明である。時期は一銭銅貨の出土があるが、その他の出土遺物が近世を示すため、近世以降と判断したい。

52区19号焼土(第53・57図 PL.12・36)

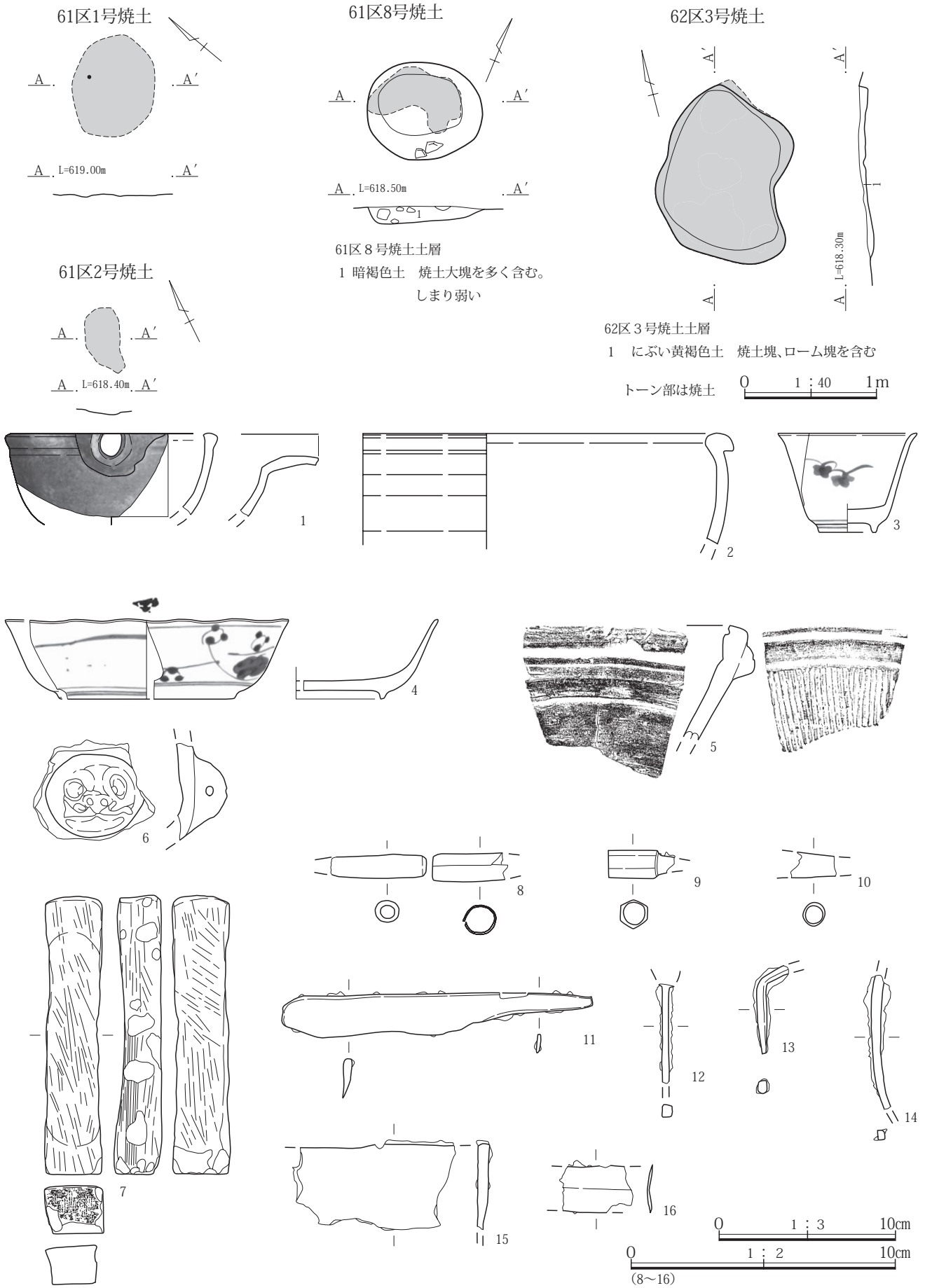
位置：52区A-15・16グリッドに位置する。52区西側の51区境界近くで調査した。周辺は南東への緩斜面地形にあり、ほぼ平坦面が広がる。中世～近世遺構が点在する地点であり、西に18号焼土、東に178坑や179坑が近接する。

経過：第1面目の調査である黒褐色土中で確認した。遺構平面確認中に焼土塊とともに中型の角礫などが出土したため、焼土遺構として位置付けた。

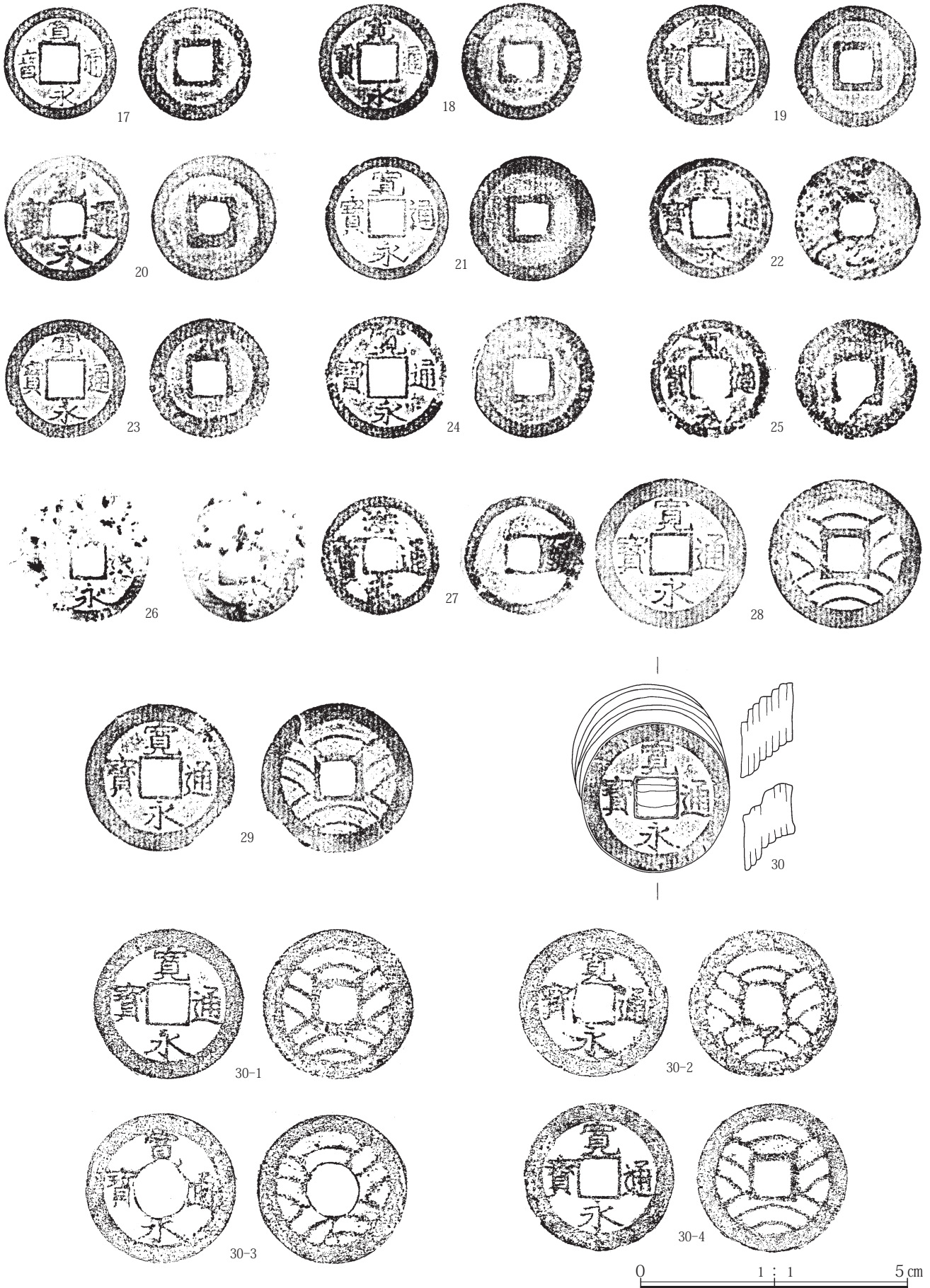
規模・様相：平面形は小型の不整形円形を呈す。規模は約57.0×46.0×10.0cmを測り、やや浅い土坑ながら掘り込みはしっかりしていた。壁の立ち上がりも明瞭だった。焼土は上層にまとまる様相を示していた。

遺物：角礫と混在して、搗き杵の重りと思われる石製品(第57図1)が出土している。

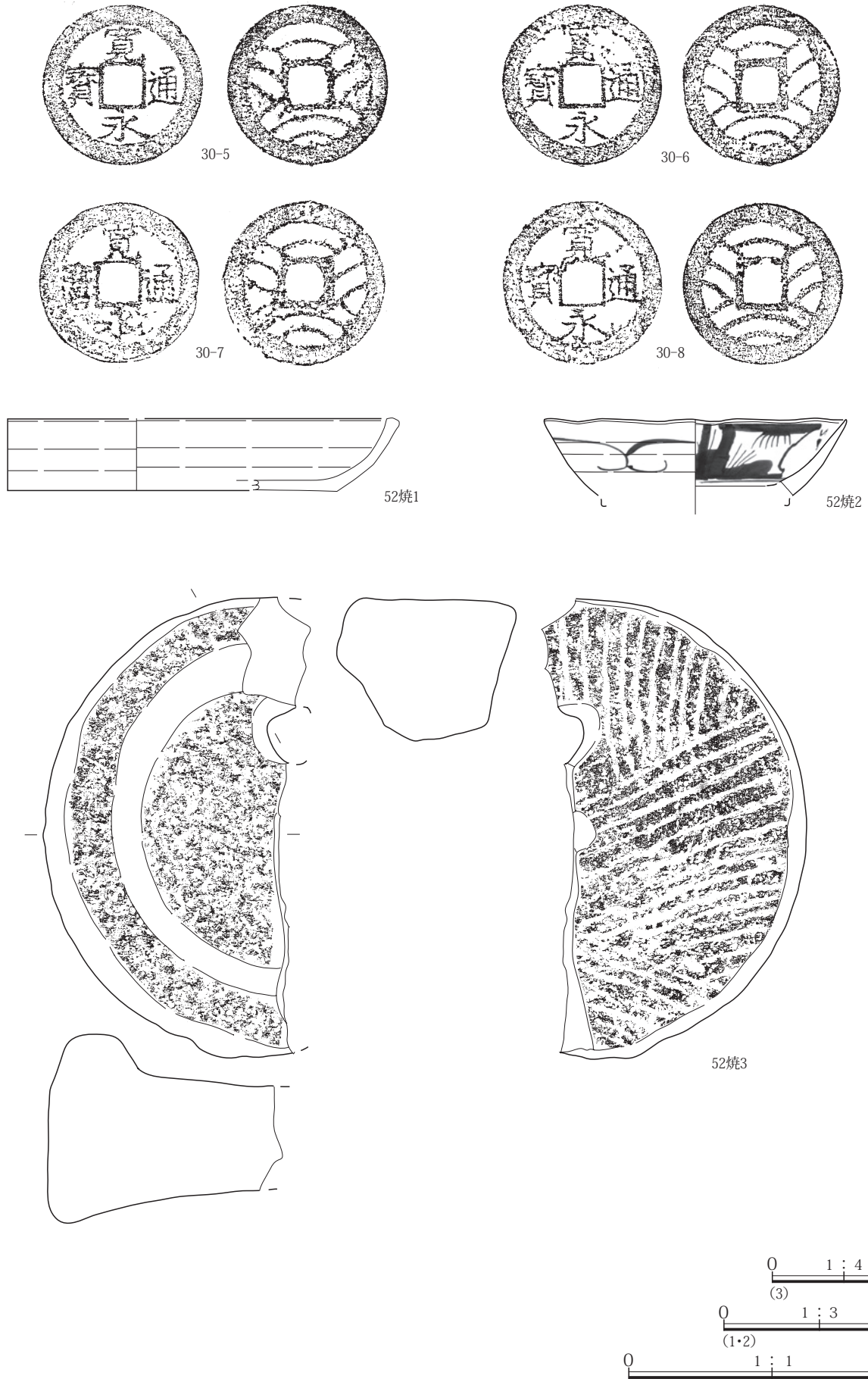
所見：焼土遺構として性格は不明である。搗き杵の重



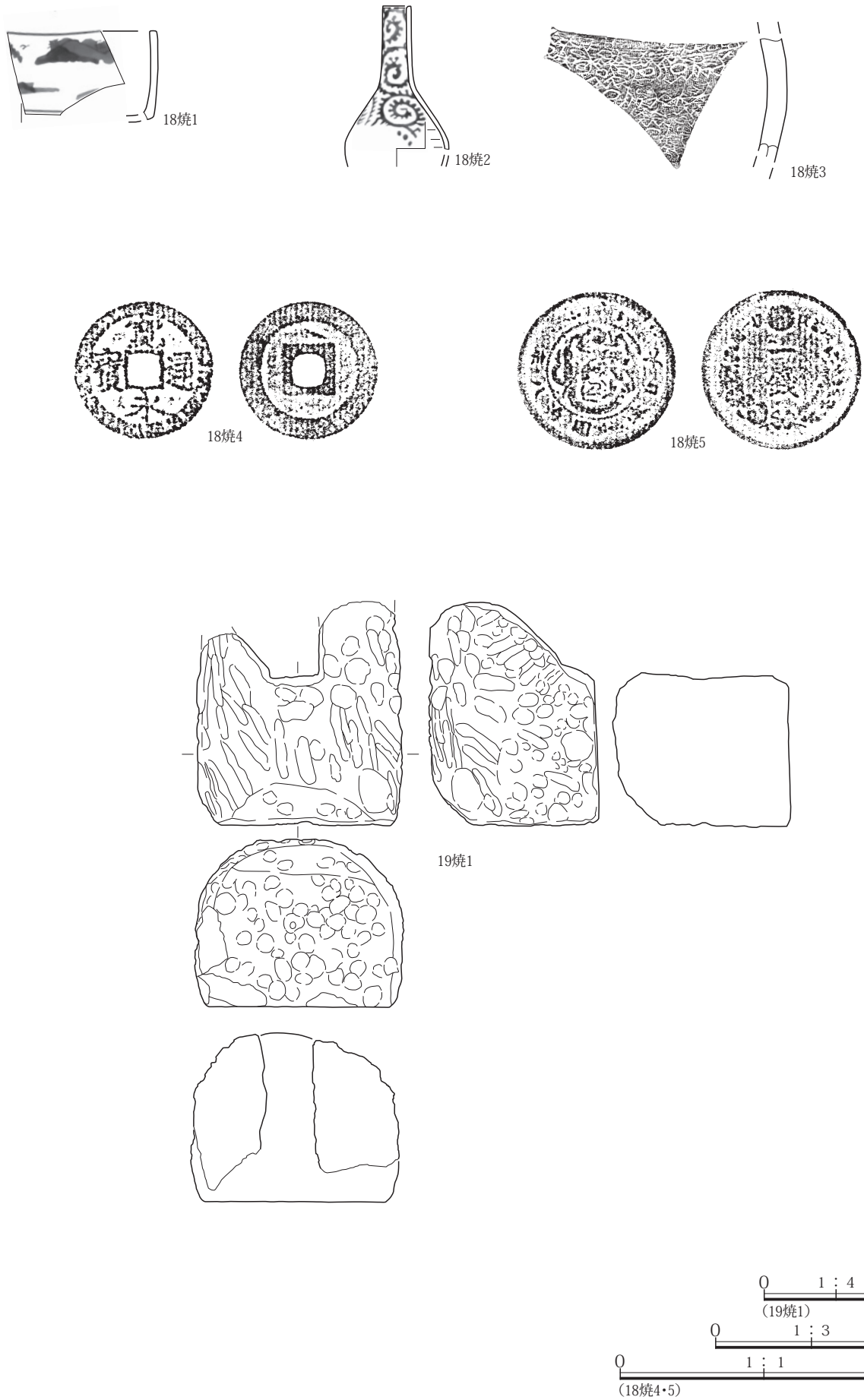
第54図 焼土遺構(3)及び出土遺物(1)(51区48号焼土)



第55図 焼土遺構出土遺物(2) (51区48号焼土)



第56図 焼土遺構出土遺物(3) (51区48号焼土・52号焼土)



第57図 焼土遺構出土遺物(4) (52区18号焼土・19号焼土)

りは本遺構の性格に伴う例なのか判然としない。時期は出土遺物から近世以降としたい。

61区1号焼土(第54図 PL.12)

位置：調査区61区北東部で調査された。周辺は南側への緩傾斜地形が広がり、平坦地形に近い様相を示す。61区U-10グリッドに位置する。周辺には近接する中世～近世遺構は見られず、南約4.0mに8号焼土が占地する。縄文時代の遺構としては、下層で61区12号住などが調査されている。

経過：第1面目の調査の黒褐色土中で確認した。遺構平面形確認作業で、大型の焼土塊が広がったため、焼土遺構として位置付けた。

規模・様相：小型楕円状の範囲で焼土がまとまる。平面規模は約77.0×62.0cmで、掘り込みを持たない。薄い堆積状況を示していた。

遺物：無文の土器細片の出土を見た。在地系の土器だが、図化に耐える例では無かった。

所見：出土遺物も細片のため、時期・性格とも判然としない。時期としては、出土土器が内耳鍋体部破片と思われる、中世以降の所産としたい。

61区2号焼土(第54図 PL.12)

位置：調査区61区中央やや南東寄りで調査された。61区S-7・8グリッドに位置する。周辺は南側への緩斜面地形だがほぼ平坦面といえよう。中世～近世遺構として72坑が東に接する重複状態を示すが、新旧関係は不明である。調査面からは本焼土が新しい。

経過：第1調査面で確認された。遺構平面確認中に黒褐色土中で焼土塊がまとまったため、焼土遺構として位置付けた。

規模・様相：小型不整形の平面範囲で焼土がまとまる。平面規模は約50.0×26.0cmで、掘り込みを持たない。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：小規模の焼土遺構である。遺物の出土も見られず、時期、性格は不明である。

61区8号焼土(第54図 PL.12)

位置：調査区61区北東部で調査された。61区T-9グリッドに位置する。周辺は南側への緩傾斜地形でほぼ平

坦面といえよう。

経過：第1面目で確認された。遺構平面確認中に大型の焼土塊がまとまったため、焼土遺構として位置付けた。
規模・様相：不整形の土坑上層に焼土を堆積する。平面規模は約88.0×73.0cmで、深さは約12cmを測る。底面は不連続で、壁は不明瞭だった。焼土は大型の焼土塊が全体に堆積していた。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：遺物の出土も無く、時期、性格は不明である。

62区3号焼土(第54図 PL.12)

位置：調査区62区の中央部やや南寄りで調査された。62区F-4グリッドに位置し、62区の中世～近世遺構ではもっとも西に位置する。近接する中世～近世遺構は無く、東約4.5mに36坑が占地する。周辺は南東への緩斜面地形が広がりほぼ平坦面といえる。

経過：第1面調査で確認した。黒褐色土中の検出で、大型の焼土塊がまとまったため、焼土遺構として位置付けた。

規模・様相：不整形の平面形を呈す。規模は約138.0×90.0cmを測り、掘り込みを持たない。焼土塊は全面に広がる様相を示していた。

遺物：出土遺物は無かった。

所見：遺物の出土も無く、時期、性格は不明である。

8. 土坑

林中原Ⅱ遺跡では、多量の土坑を調査している。その多くは縄文時代に比定される土坑であり、第1分冊と第2分冊では、焼骨を出土した例や逆位土器を出土した例など特徴的な土坑を数多く報告した。ここでは、既に報告した土坑を除外し、中世～近世に比定される土坑を抽出し、掲載する。

中世～近世の土坑としては、まず、陥穴状土坑が挙げられよう。楕円状の平面形を呈し、1 m以上の深さで調査されている。平安時代から中世にかけての罌獵の陥穴と位置付けられている。次に、円形土坑で桶を埋置した例や桶の圧痕が観察された例が目立つ。これは2種類の性格が考えられる。ひとつがいわゆる便槽としての位置付けで、屋敷跡などに近接して検出される傾向があるようだ。もう一方が墓壇としての用途が想起される。いわゆる座棺としての桶利用で、墓域などに供されている。ここでは、桶付帯土坑として述べておきたい。その他では、方形土坑で「室」など貯蔵に供された土坑も見られるように、調査された中世～近世土坑も多くの性格が想定される。

ここでは、個々の土坑の説明を加え、その都度性格や位置付けに言及したい。

51区3号土坑(第58・75図 PL.13・37)

位置：51区Q-23に位置する。調査区中央やや北側に位置し、単独で検出された。

経過・重複：第1面目の調査において、黒褐色土中で検出された。礫を伴出していた。

規模・様相：小型の不整楕円形を呈し、規模は85.0×69.0×20.0cmを測る。皿状の断面形だが、掘り込みはしっかりしていた。上層から中層にかけて中型の角礫や亜角礫が出土した。

遺物：南側上層で貨銭の出土を見た。総計5枚だが、3枚が凝着し、錆のため判読が不可能だった。

所見：小型の土坑だが、貨銭のまとまった出土から、墓壇の可能性が高い。しかしながら人骨の出土がない要素は検討課題である。時期は近世であろう。

51区9号土坑(第58図 PL.13)

位置：51区中央で調査された。51区P-21に位置する。

西側に1号礎石建物が近接する。

経過・重複：第1面の調査で確認された。黒褐色土中の検出で、ローム塊を含む暗褐色土の埋土のため平面形の把握は容易だった。

規模・様相：平面形は不整円形を呈す。規模は約72.0×62.0×22.0cmを測り、掘り込みもしっかりしていた。また、土坑外縁を環状にローム塊が巡っていた。

遺物：出土遺物は見られない。

所見：性格は不明だが、環状に巡るローム塊から、あるいは桶付帯土坑と同等の性格も考えられよう。時期は不明だが、近世以降の所産であろう。

51区12号土坑(第58図 PL.13)

位置：51区U・V-23グリッドに位置する。51区北西端にあたる。

経過・重複：第1面の調査の黒褐色土中で確認した。調査工程の都合で西側が未調査となり、そのため全容は把握できない。南側で15坑と重複するが本土坑が古い。

規模・様相：方形を基調とした不整形で東西の長軸方向に延長するが、不明である。規模は長軸4 mを超え、短軸は1.5m程である。深さは11.0cmを測る。底面は平坦面を築く。

遺物：出土遺物は見られない。

所見：15坑や17坑といった方形を基調とした土坑と群在する。室状の土坑の底面であろうか。時期は近世以降である。

51区14号土坑(第58図 PL.13)

位置：51区北西部で調査した。51区V-22グリッドに位置する。北側に17坑や15坑が近接する。

経過・重複：第1面調査の黒褐色土中で確認した。黒色土を埋土とし、確認・検出は難しかった。

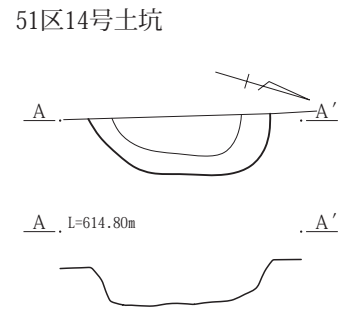
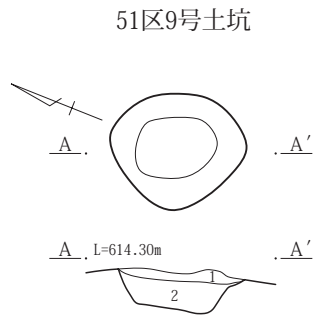
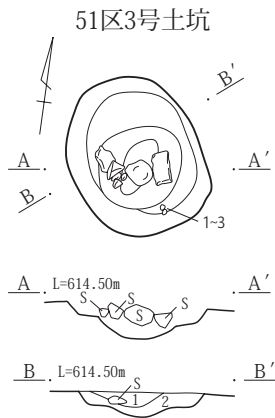
規模・様相：径約95.0cm前後の不整円形か。深さは約22.0cmを測る。

遺物：出土遺物はない。

所見：15坑や17坑との近接状態から近世以降の所産と考えておきたい。性格は不明である。

51区15・17号土坑(第58図 PL.13)

位置：51区北西部で12坑や14坑の間で調査された。西



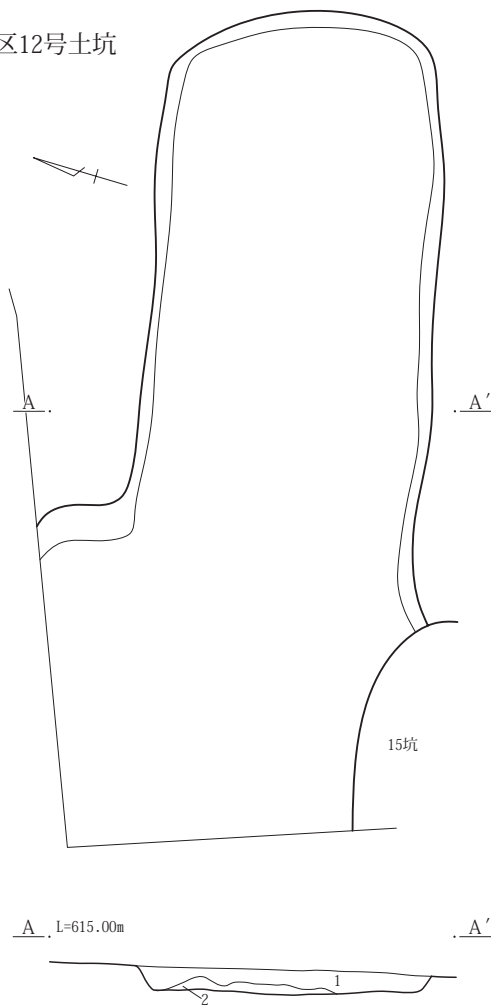
51区9号土坑土層

- 1 暗褐色粘土 硬質。ローム小塊を多く含む
- 2 黄褐色土 ローム塊を主とし暗褐色土塊を含む

51区3号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム小塊を微量含む
- 2 黒褐色土 ローム大塊を多く含む

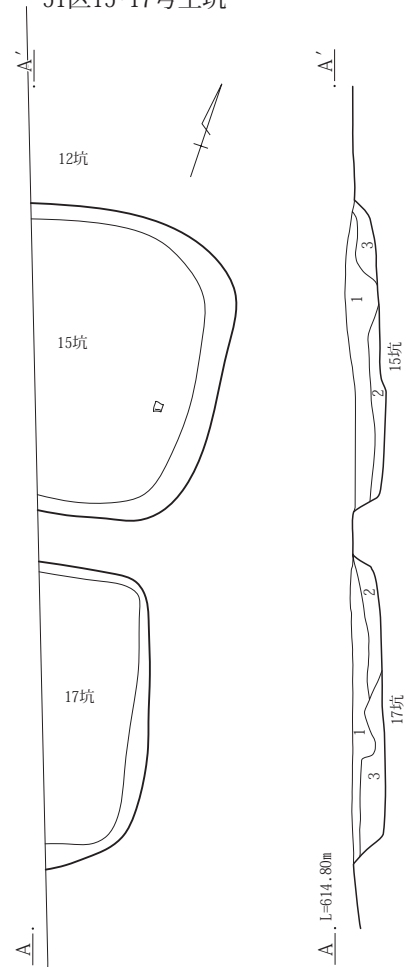
51区12号土坑



51区12号土坑土層

- 1 黒褐色土 やや粘質。褐色土小塊を少量含む
- 2 黒褐色土 やや粘質

51区15・17号土坑

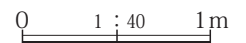


51区15号土坑土層

- 1 黒褐色土 白色粒を少量含む。しまり弱い
- 2 黒褐色土 炭化物を微量含む
- 3 黒褐色土 暗褐色土塊を微量含む

51区17号土坑土層

- 1 黒褐色土 炭化物を微量含む
- 2 黒褐色土 白色粒を微量含む。しまり強い
- 3 黒褐色土 暗褐色土塊を微量含む



第58図 土坑 51区(1)

側が調査の工程上未調査となっている。51区V-22・23グリッドに位置する。

経過・重複：第1面の調査で確認した。黒褐色土中の検出である。黒褐色土の埋土であり、白色粒の有無で埋土の判断をした。

規模・様相：両土坑とも不整形を平面形とする。規模は、15坑が短軸長約163.0cm、深さ約17.0cm。17坑は短軸長約163.0cm、深さ約14.0cmを測り、同様な規模を呈する。底面は平坦面を築く。

遺物：出土遺物は無い。

所見：おそらく12坑と同様に方形の室状の性格が想起されよう。時期は近世以降としたい。

51区16号土坑(第59図 PL.13)

位置：調査区51区の北端で、61区との境界付近で調査された。51区O・P-25グリッドに位置する。周辺は南西側への斜面地形が連続する地点であるが、中世～近世の遺構密度は比較的高く、19坑や20坑、23・24坑が近接しており、51区北東部～61区南東部に中世～近世遺構の土坑群が集中する分布傾向が見られる。また、縄文時代遺構もこの地点で多く調査されている。

経過・重複：斜面地形のため、平面形は上層での検出が果たせず、サブトレンチを併用し下層のローム漸移層で確認した。しかしながら断面形は上層の黒褐色土中までの掘り込みを確認している。重複遺構は無いが、20坑が南に近接する。陥穴状土坑である。深く、平面形の崩れなどもあったが、下層までの検出を果たした。

規模・様相：長軸を東西に持つ不整楕円状の平面形を呈す。規模は外形の219.0×148.0cmだが、上層の崩れがあり中層での長軸長は183.5cmを測る。深さは、約146.0cmで、強く開き気味の立ち上がりを示す。坑底面の大きさは約135.5×30.0cmと狭く、径10cm前後の小ピットが6基設けられていた。5cm程の深さで浅いが、底面での平面形は明瞭に確認されている。

遺物：出土遺物は見られない。

所見：陥穴状土坑である。出土遺物は見られず、重複遺構も無いため、詳細な時期を判断できないが、周辺遺跡の様相から中世に時期を求めておきたい。

51区19号土坑(第59図 PL.13)

位置：調査区51区北東部～61区南東部の中世～近世土坑群の南西端に位置する。51区106坑や1号溝の南に近接する。51区O・P-24グリッドに位置する。周辺は南への斜面地形が連続する。下層では縄文時代に比定される142坑や143坑が調査されている。

経過・重複：ローム漸移層上層の暗褐色土を確認面とする。同一層では重複遺構は無く、単独の検出となったため、平面形確認と特有の土層堆積を示す断面観察により陥穴状土坑として位置付けた。

規模・様相：長軸を西北西に持つ不整長方形を平面形とする。平面規模は約198.0×97.0cmを測り、深さは約103.0cmで、黄褐色ローム上層にまで掘り込まれていた。底面の広さは160.5×38.5cmで16坑に比して広い。底面には小ピットではないが、浅い落ち込みが3箇所見られた。逆茂木や杭の痕跡の可能性もある。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：陥穴状土坑である。出土遺物が無いため、詳細な時期は判断できないが、同様の土坑である16坑と長軸を同じにする共通性から、中世の所産としたい。

51区20号土坑(第60図 PL.14)

位置：51区O・P-25グリッドに位置する。調査区51区の北端で、61区との境界付近で16坑南に近接して調査された。周辺は南西側への斜面地形が連続する地点で、中世～近世の土坑群の中にある。

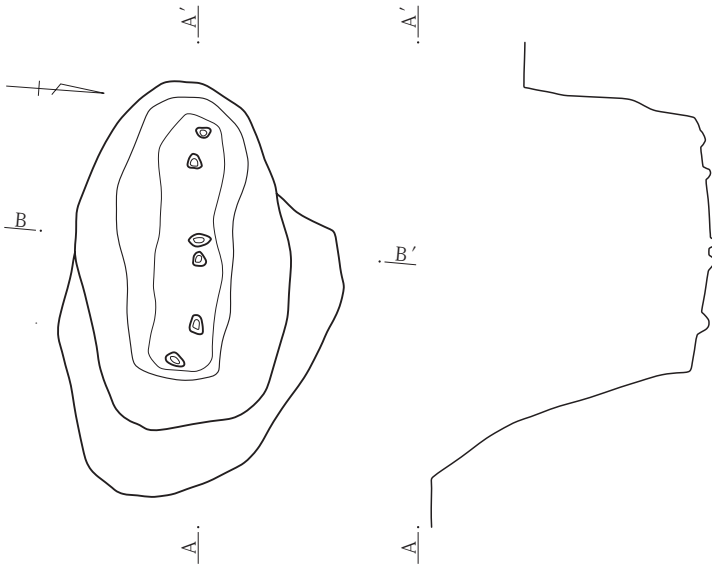
経過・重複：16坑調査で併用したサブトレンチ内で、土坑西側をローム漸移層上層の暗褐色土中で確認し、東側を黒褐色土中で検出した。

規模・様相：平面形は、長軸を南北に向けた不整楕円状を呈す。上端の規模は約199.0×147.0cmだが、中層～中端の整った形状では約175.0×104.0cmを測る。深さは169.0cmで、直立気味に壁が掘り込まれる。底面は広く143.0×53.5cmで、小ピット5基が確認された。底面からの深さは15cmを超え、逆茂木や杭の存在が想定される。

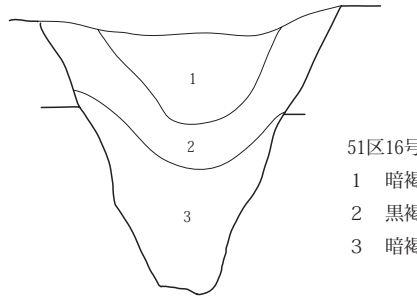
遺物：遺物の出土は見られなかった。

所見：中世に比定される陥穴状土坑としたい。16坑や19坑と同様な立地を示すが、長軸が南北を向いており、前2者との差が窺われる。

51区16号土坑



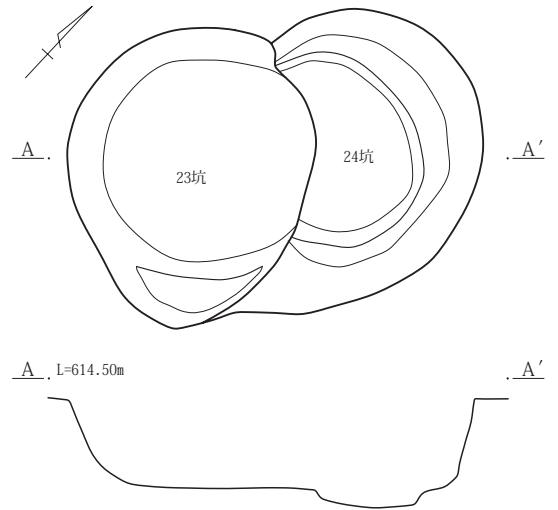
B, L=614.50m



51区16号土坑土層

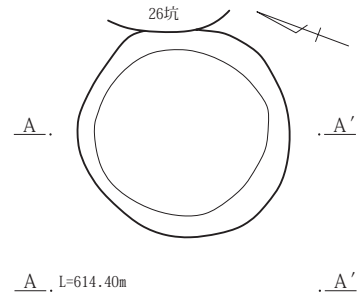
- 1 暗褐色土 黄色粒を極微量含む
- 2 黒褐色土 暗褐色土塊を多く含む
- 3 暗褐色土 黒褐色土大塊を多く含む

51区23・24号土坑



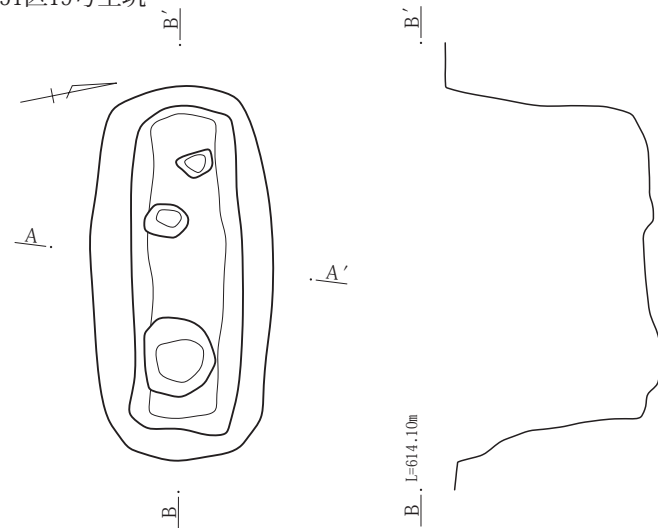
A, L=614.50m

51区25号土坑

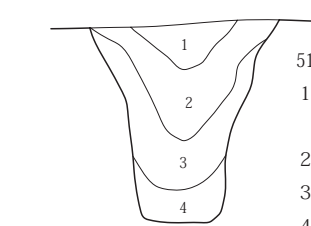


A, L=614.40m

51区19号土坑



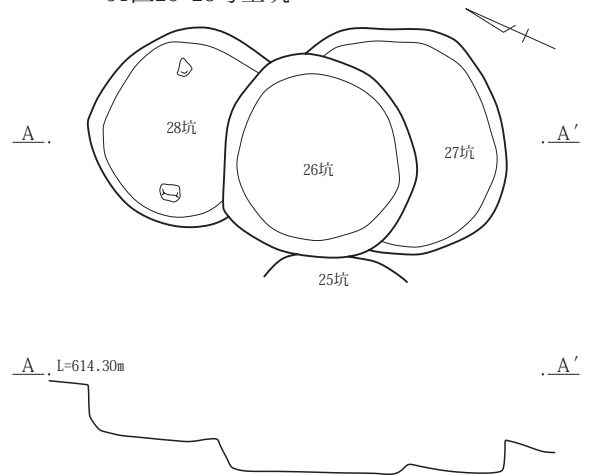
A, L=614.10m



51区19号土坑土層

- 1 暗褐色土 黄色粒を極微量、
ローム小塊を少量含む
- 2 黒褐色土 暗褐色土塊を多く含む
- 3 黒褐色土 ローム小塊を多く含む
- 4 暗褐色土 黄色粒を極微量含む

51区26-28号土坑



A, L=614.30m

0 1:40 1m

第59図 土坑 51区(2)

51区23・24号土坑(第59図 PL.14)

位置:調査区51区北東部で61区に跨がって調査された。51区～61区N・O-1グリッドに位置する。周辺は南東への緩斜面地形でほぼ平坦面が広がる。51区北東部から61区南東部の中世～近世土坑群内にある。

経過・重複:第1面調査である黒褐色土中で検出された。黒色土中における遺構平面確認中に西側に大量の中～大型角礫が集中した。礫を除去し土坑の検出を進めた結果、東西に並ぶ不整形円形土坑2基の重複と判明した。相互の重複は層位的には把握できなかったが、23坑の集石が広がる様相から、23坑が新しいと判断した。

規模・様相:23坑は不整形円形を呈し約161.0×150.0cmを平面規模とする。深さは46.0cmで、黒褐色土をしっかりと掘り込む壁である。

24坑もおそらく径125.0cm前後の不整形円形を呈し、深さは約29.0cmを測る。23坑上層に大量の角礫が出土しており、そのため両土坑の土層観察が良好に果たせなかった。しかし、新旧は前述のように23坑を新しく捉え、さらに24坑外縁を環状に粘土小塊が確認された。あるいは桶付帯土坑の可能性も高い。

遺物:角礫以外の出土遺物は無い。

所見:角礫の集中は墓壇の可能性を示唆する。また桶付帯土坑も墓壇あるいは便槽の可能性を持つ。しかしながら土層の観察も十分ではなく、ここでは性格は言及できない。時期は近世以降の所産としたい。

51区25号土坑(第59図 PL.14)

位置:調査区51区北東部～61区南東部の中世～近世土坑群の南側に位置する。東に近接する26～28坑と一群をなす。51区N-25グリッドに位置する。周辺は南東への緩斜面地形でほぼ平坦面が広がる。下層では縄文中期に比定される11号住などが密集する。

経過・重複:第1面の調査面で検出した。遺構平面形確認時に、中～大型の角礫が大量に出土し、同時に平面形外縁に粘土塊が環状に確認されたため、円形土坑として調査を進めた。東壁が26坑と僅かに重なるが、新旧関係は不明である。

規模・様相:平面形はやや小型の不整形円形を呈す。平面規模は約88.0×78.0cmを測り、深さは約24.0cmで壁は黒褐色土をしっかりと掘り込んでいた。底面は平坦面を築

く。集石の状況は先に述べた23坑と近似し、上層より出土している。また、外縁を環状に確認した粘土帯は桶などの周辺を補強する用途と思われる、桶付帯土坑の可能性が高い。

遺物:角礫以外の出土は見られなかった。

所見:小型の桶付帯土坑としたい。上層の角礫出土は23坑と同様で、外縁の粘土帯の存在と併せて、墓壇あるいは便槽としての性格を想定しておきたい。時期は近世以降であろう。

51区26～28号土坑(第59図 PL.14・15)

位置:25坑東に密集して調査された3基の円形土坑である。51区N-25グリッドに位置する。51区北東部～61区南東部の中世～近世土坑群にある。

経過・重複:25坑と同様に第1面の調査面である黒褐色土中で確認した。角礫の出土は無いが、外縁に粘土帯が環状に確認され、3基の円形土坑の重複と捉えられた。

規模・様相:3基とも不整形円形を平面形とする。

26坑は径約82.0×78.0cmで深さ約19.0cm。27坑は径約103.0cm、深さ約15.0cm。28坑は径約67.0×60.0cm、深さ約24.0cmである。いずれも掘り込みが浅く、底面は平坦面を築く。土層の観察では、26坑の外縁に粘土帯が環状に認められ、他の2基を切る新旧関係を示していた。

遺物:出土遺物は見られなかった。

所見:25坑と併せて近接・重複する4基の桶付帯土坑と位置付けたい。墓壇、便槽など性格は特定できず、後の分析に譲りたい。時期は近世以降であろう。

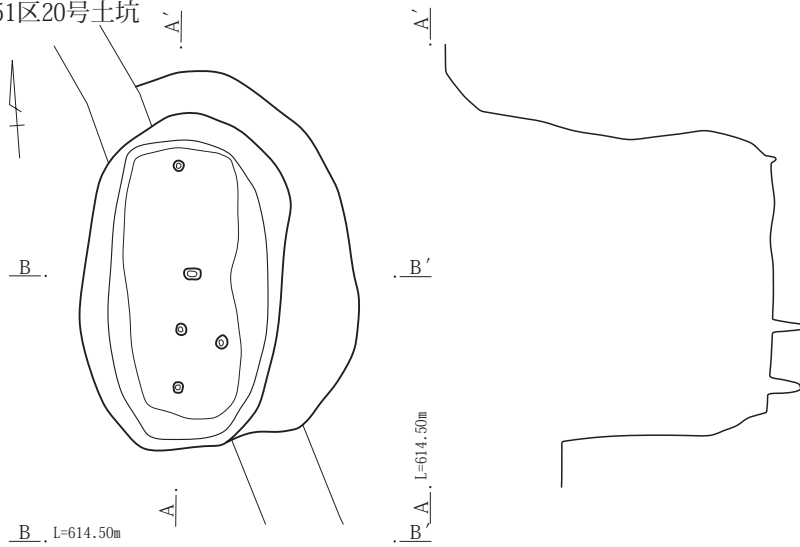
51区46号土坑(第60図 PL.15)

位置:25坑、26～28坑東に近接して調査された。南への緩斜面地形に占地する。51区北東部～61区南東部の中世～近世土坑群内にある、51区M・N-25グリッドに位置する。

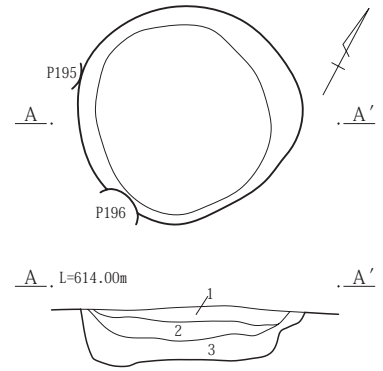
経過・重複:第2面の確認面である、ローム漸移層上位の暗褐色土中で調査した。円形の平面形の検出と伴に外縁の一部に弧状の粘土帯が確認され桶付帯土坑として位置付けられた。中世～近世に比定される重複遺構はなく、単独の検出である。

規模・様相:径約116.0×111.0cmの不整形円形を平面形とする。深さは約27.0cmでほぼ良好な立ち上がりを示す。

51区20号土坑



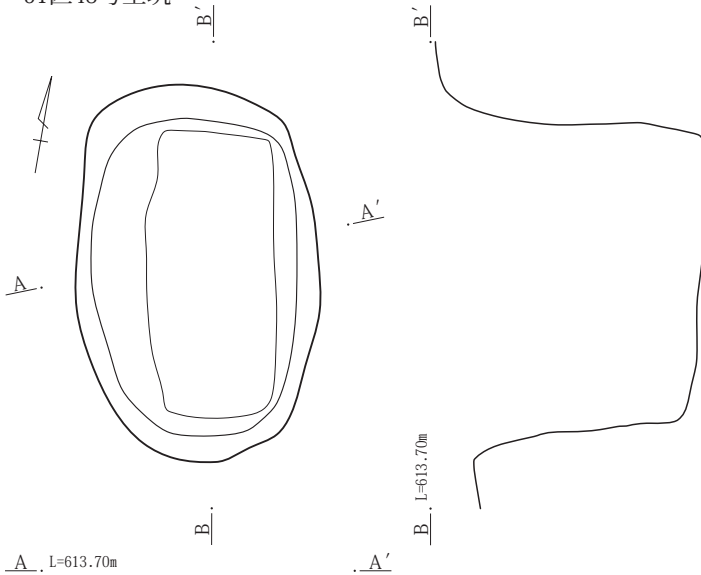
51区46号土坑



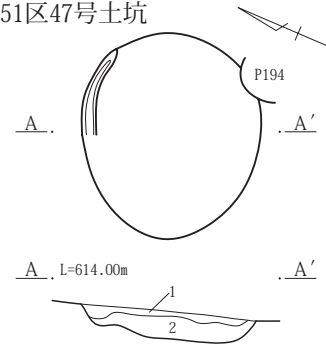
51区46号土坑土層

- 1 黒褐色土 表土に近似。しまりは強い
- 2 黄褐色土 ローム塊を主体とする。黒色土塊を不均質に含む
- 3 黒褐色土 粘性強い。ローム小塊を少量含む

51区48号土坑



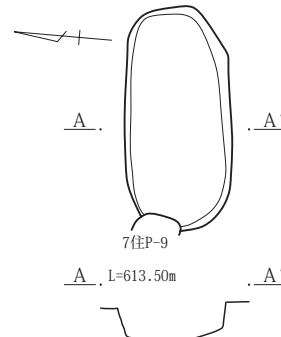
51区47号土坑



51区47号土坑土層

- 1 黒褐色土 やや明るく、粘性弱い
- 2 黒褐色土 粘性強い

51区102号土坑



51区48号土坑土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む。しまり弱い
- 2 黒褐色土 暗褐色土塊を少量含む
- 3 暗褐色土 黄色粒を微量含む。しまり強い
- 4 暗褐色土 黄色粒を多く含む。しまり弱い
- 5 暗褐色土 ローム粒を多く含む。しまり弱い



第60図 土坑 51区(3)

底面は僅かな凹凸を見る。

遺物：出土遺物は無い。

所見：円形の桶付帯土坑と思われる。おそらく堀方の一部の調査であろう。時期は近世以降としたい。

51区47号土坑(第60図 PL.15)

位置：調査区51区北東部で調査した。51区N-25グリッドに位置し、南側への緩斜面地形が広がる地形である。北側には中世～近世土坑である48坑や25坑、26～28坑が近接し、51区北東部～61区南東部の一連の中世～近世土坑群内にある。

経過・重複：ローム漸移層上位の暗褐色土で確認した。周溝状に桶底部の圧痕が弧状に検出され、下位に堀方を確認し、これを土坑として位置付けた。

規模・様相：平面規模は約109.0×94.0cmで不整形円形を呈す。深さは浅く、底面まで約3.0cmで、堀方底面までは10cm程度である。堀方は地形に沿って南への傾斜が顕著だった。

遺物：出土遺物は無い。

所見：桶付帯土坑下端の痕跡であろう。堀方として、浅い掘り込みを検出したが、確定的ではない。時期は近世以降とした。

51区48号土坑(第60図 PL.15)

位置：調査区51区北東部で25坑～28坑の南、47坑の北に近接して調査された。51区N-24・25グリッドに位置し、51区北東部～61区南東部の中世～近世土坑群にある。

経過・重複：ローム漸移層上位の暗褐色土中で確認した。黒褐色土による楕円状の平面形に加え、中型礫が上層にまとまる。平面形から陥穴状土坑とはんだんして調査を進めた。南西部で47坑が僅かに接するが、新旧関係は不明である。

規模・様相：規模は約200.0×130.0×125.0cmを測り、長軸を南北に向けた不整形長方形を平面形とし、壁の立ち上がりもしっかりとし掘り込まれ、黄褐色硬質ローム下位にまで達していた。おそらく上層で開く断面形と思われる、そのため規模も大型の陥穴状土坑が想定されよう。底面の大きさは約171.0×68.0cmで比較的広い。底面に逆茂木などの痕跡を見出したが、いずれも浅く、確定できなかった。

遺物：出土遺物は無い。

所見：南北に長軸を持つ陥穴状土坑である。これは前述の20坑に近い様相で同一の意識下の設営が窺われよう。この他では西に106坑が同様な様相で選地されており、群在する陥穴状土坑の一傾向を具体化している。時期は中世に求めておきたい。

51区102号土坑(第60図)

位置：調査区51区の北西部で調査した。51区V・W-20グリッドに位置する。周辺は南東への緩斜面地形でほぼ平坦面が広がる。前述の12坑、14坑、15坑、17坑が北東に距離を置き、また103坑などが西に点在する。中世～近世遺構の密度は高くはない。

経過・重複：黄褐色ローム面で調査した。周辺の縄文時代遺構を切る重複関係を示していた。

規模・様相：平面形は不整形長方形を呈し、平面規模は約118.0×56.0cm、深さ約17.0cmを測る。断面形は箱形で黄褐色ロームを壁とし、底面はやや凹む。埋土は暗褐色軟質土でローム粒を多く含む単層である。

遺物：出土遺物は無い。

所見：陥穴状土坑に類似するが、おそらく方形の室状の土坑であろう。時期は埋土の様相から近世以降とした。

51区103号土坑(第61図 PL.15)

位置：調査区51区の北西部で102坑と共に調査した。51区W-20グリッドに位置し、東に102坑が、西南西に110坑が近接する。周辺は南への緩斜面地形が広がりほぼ平坦面といえよう。

経過・重複：黄褐色ローム面で確認した。51区7号住など他の縄文時代遺構を切る重複状態である。

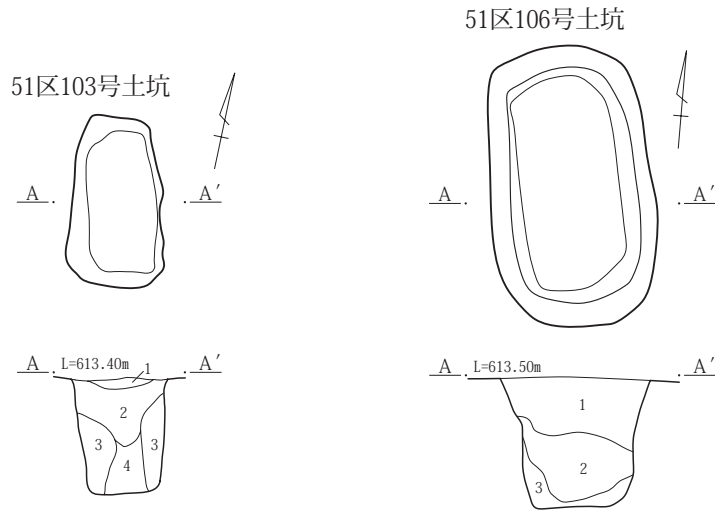
規模・様相：不整形長方形を平面形とし、規模は約90.0×47.0×60.0cmを測る。断面形は箱形を示すように、直立気味の壁で掘り込まれる。底面はほぼ平坦面を築く。

遺物：遺物の出土は見られなかった。埋土は単層で大型のローム塊を含む暗褐色軟質土である。

所見：102坑と同様に近世以降の室状の土坑であろう。

51区106号土坑(第61図 PL.15)

位置：51区19坑北で調査した。51区1号溝南に接し、調査区51区北東部～61区南東部の中世～近世土坑群の南

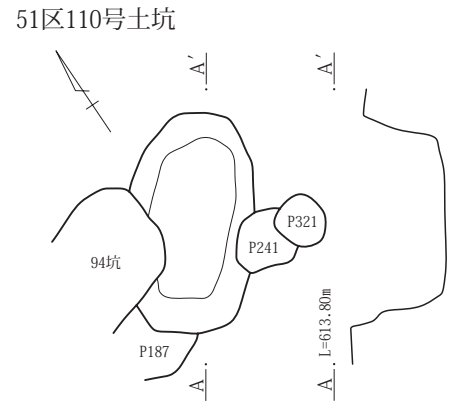


51区103号土坑土層

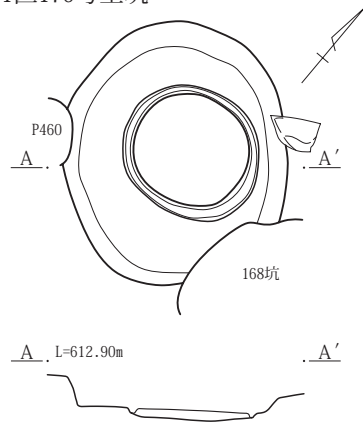
- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 暗褐色土 褐色土塊を多く含む
- 3 黒褐色土 ローム小塊を多く含む
- 4 暗褐色土 ローム大塊を多く含む

51区106号土坑土層

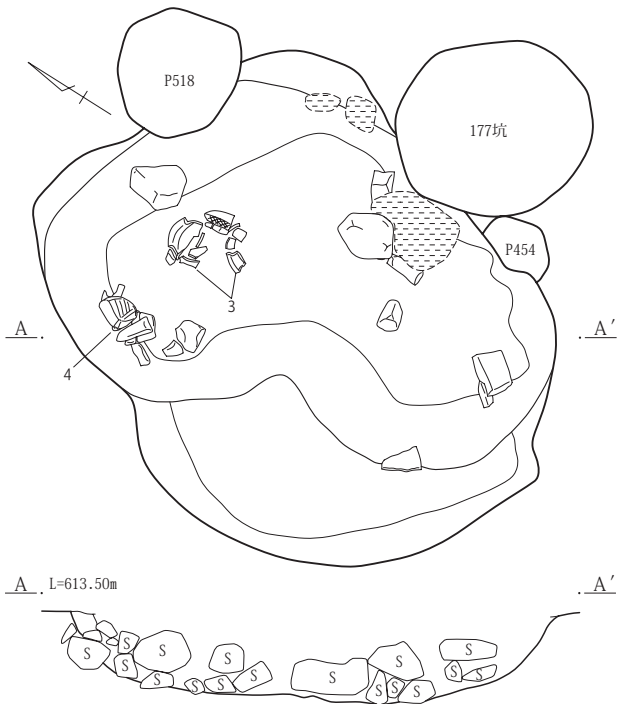
- 1 暗褐色土 やや暗い。黄色粒を多く含む
- 2 暗褐色土 ローム塊を少量含む
- 3 暗黄褐色土 ローム塊、黒色土塊を少量含む



51区170号土坑



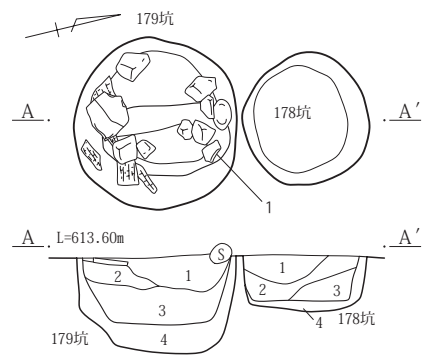
51区150号土坑



トーン部は炭化物

0 1 : 40 1m

51区178・179号土坑



51区178号土坑土層

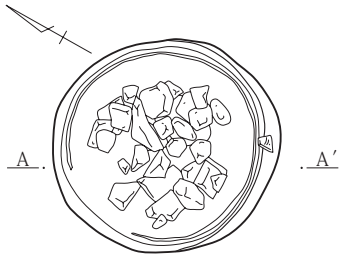
- 1 暗褐色土 ローム小塊を含む。しまり弱い
- 2 暗褐色土 黄色粒を含む。しまり弱い
- 3 黒褐色土 しまり弱い
- 4 黒褐色土 黒色土塊とローム塊からなる

51区179号土坑土層

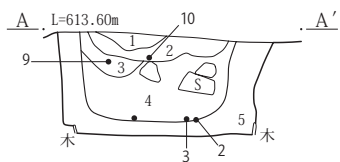
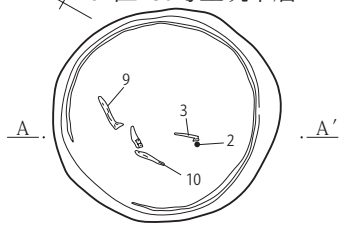
- 1 暗褐色土 焼土粒を少量含む。しまりやや強い
- 2 褐色土 炭化物を多く含む。しまり弱い
- 3 褐色土 焼土小塊を多く含む
- 4 黒褐色土 黒色土塊とローム塊からなる

第61図 土坑 51区(4)

51区180号土坑上層



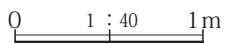
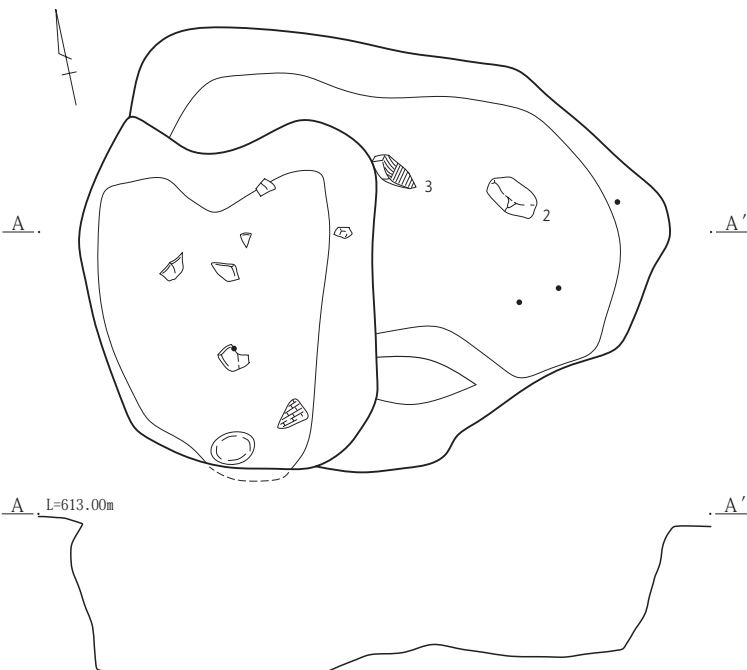
51区180号土坑下層



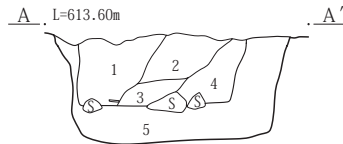
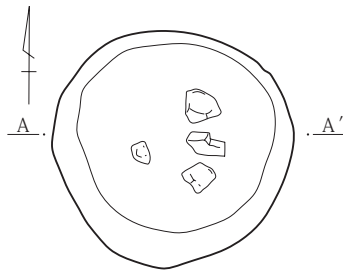
51区180号土坑土層

- 1 にぶい褐色土 ローム塊含む。しまり強い
- 2 にぶい褐色土 ローム大塊、炭化物含む。しまり強い
- 3 にぶい黄褐色土 ローム塊を多く含む。しまりやや弱い
- 4 にぶい黄褐色土 ローム粒、礫を含む。しまりやや弱い
- 5 黄褐色土 褐色粘土主体。ローム塊、黄色粒を含む

51区190号土坑



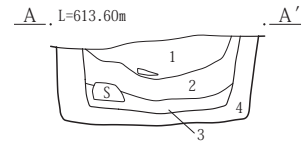
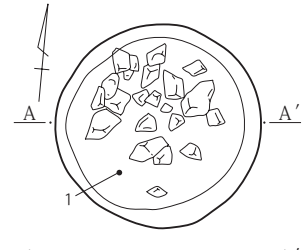
51区183号土坑



51区183号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム小塊を多く含む
- 2 暗褐色土 ローム大塊を多く含む
- 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 4 黒褐色土 ローム小塊を多く含む
- 5 にぶい黄褐色土 ローム大塊を主体とする

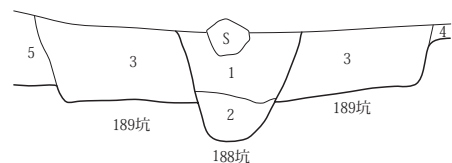
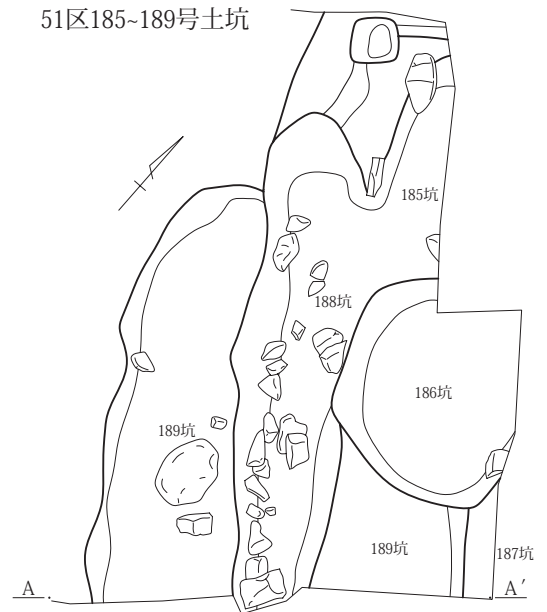
51区184号土坑



51区184号土坑土層

- 1 にぶい褐色土 しまり弱い。礫、炭化物含む
- 2 にぶい黄褐色土 ローム塊を多く含む。縞状に含む。小礫、炭化物含む
- 3 暗褐色土 ローム粒含む。しまり弱い
- 4 ロームと黒色土の混土。貼壁、貼床

51区185~189号土坑



51区187~189号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム粒、炭化物を微量含む(188坑埋土)
- 2 黒褐色土 ローム小塊を少量含む(188坑埋土)
- 3 暗褐色土 ローム粒を多く含む(189坑埋土)
- 4 暗褐色土 やや暗い。ローム粒を少量含む(187坑埋土)
- 5 黒褐色土 しまり弱い

第62図 土坑 51区(5)

西端の51区P-20グリッドに位置する。周辺は南への斜
面地形が連続する。

経過・重複：ローム漸移層の暗褐色土中で単独で確認し
た。長軸を南北に持つ、長方形の平面形及び陥穴状土
坑特有の埋土堆積が見られたため、陥穴状土坑として位
置付けた。

規模・様相：平面形は比較的整った隅丸長方形を呈し、
平面規模は約149.0×88.0cm、深さは約68.0cmを測り、
黄褐色ロームを深く掘り込む。底面は約115×52cmで、
逆茂木などの痕跡を見なかった。

遺物：出土遺物はない。

所見：陥穴状土坑である。周辺では長軸を南北に持つ
20坑や48坑が陥穴状土坑として位置付けられ、また同じ
陥穴状土坑である16坑と19坑は東西方向に長軸が設けら
れていたように、2種類の陥穴状土坑の配置が見られた。
対象動物の差か時期差なのかは特定できず、詳細は控え
たい。時期は、他の陥穴状土坑と同様に、中世に比定し
たい。

51区110号土坑(第61図)

位置：調査区51区の北西部で、東に近接する102坑や
103坑と共に調査した。周辺は南への緩斜面地形が広が
りほぼ平坦面である。51区W-20グリッドに位置する。

経過・重複：黄褐色ローム上面で調査された。重複する
縄文時代土坑94坑と共に検出されたが、94坑が深く、平
面図新旧表現が逆になっている。土層観察では110坑が
94坑を切る重複関係を示す。

規模・様相：不整長方形を呈し、規模は約117.0×66.0
×43.0cmを測る。深く壁の立ち上がりは良好である。底
面はほぼ平坦面を築く。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：形状や立地から、近接する102坑や103坑と同様
に室状の土坑と判断した。時期も近世以降であろう。

51区150号土坑(第61・75図 PL.15・37)

位置：調査区51区北東端で調査された。51区K-
24・25グリッドに位置する。周辺は南東への緩斜面地形
が広がり、中世～近世遺構としては53号焼土の他、170
坑や185～189坑、190坑が近接する。

経過・重複：ローム漸移層下位の黄褐色土で確認した。

53号焼土が上層で調査されている。新旧は53号焼土を新しく
捉えたいが、同時期の所産とする可能性もある。

規模・様相：大型の不整形土坑である。規模は約298.0
×216.0×56.0cmで、断面形状は皿状ながら、ローム層
をしっかりと掘り込んでいた。埋土下層より底面にかけて
中～大型の角礫を主体に大量の自然石が出土した。中
には巨礫に相当する巨大な角礫も見られた。埋土中より
炭化物が数箇所までまとまるが、上層の53号焼土との関係
は不明である。底面は凹凸が顕著だった。

遺物：東壁際で角礫に混在して、石臼下白破片(第75
図4)が、底面中央北寄り火鉢1個体分(3)が出土し
た。その他に灯火皿(1)や環状鉄製品(2)が埋土中より
伴出している。

所見：後述するが同様の土坑(190坑)が東に近接して
いる。性格は不明だが、両者とも多量の礫を出土しており、
角礫の廃棄土坑としての位置付けが想起される。時期
は出土遺物から近世～近代におきたい。

51区170号土坑(第61図 PL.16)

位置：調査区51区東端で調査された。周辺は南東への
緩斜面地形が広がり、ほぼ平坦面といえよう。中世～近
世遺構としては53号焼土や150坑、185～189坑、190坑が
近接する。51区J-24グリッドに位置する。

経過・重複：ローム漸移層下位の黄褐色土で確認した。
既報告の縄文時代とした168坑が東に深く重複するが、
埋土の特徴のみで縄文時代に比定されているため、確定
的ではない。

規模・様相：外形は不整楕円形を呈する大型土坑である。
規模は約139.0×119.0×22.0cmを測るが、平坦な底面に
径68～76cm程の桶の痕跡が見出せた。おそらく桶付帯土
坑で大型の堀方を有するのであろう。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：桶付帯土坑の堀方であろう。上半が攪乱された
ため、下半のみの検出となった。時期は近世以降とした
い。

51区178・179号土坑(第61・75図 PL.16・37)

位置：調査区51区南西側で、52区との境界付近で調査
された。周辺は南東への緩斜面地形にあり、ほぼ平坦面
が広がる。中世～近世遺構が点在する地点であり、西に

18号焼土や19号焼土、東に180坑や184坑が近接する。51区Y-15グリッドに位置する。

経過・重複：ローム漸移層上層の暗褐色土で確認した。遺構平面確認時に礫や炭化物と共に黄褐色粘質土塊が環状に連なる平面形を確認し、2基とも桶付帯土坑として位置付けられた。両土坑の新旧は不明である。

規模・様相：北側が178坑である。不整円形を呈し、規模は約62.0×59.0×28.0cmを測る。小型の土坑である。南側の179坑は円形を呈し、規模は約80.0×78.0×37.0cmを測る。両土坑とも外縁に黄褐色粘質土塊が環状に巡るため、桶付帯土坑と思われる。掘り込みはしっかりしており、178坑底面は平坦に、179坑掘方底面は凹凸が見られた。

遺物：179坑に礫の集中が見られ、炭化物や播り鉢体部破片(第75図)が出土している。

所見：小型の桶付帯土坑として考えられる。出土遺物からは時期を特定できず、ここでは中世以降としたい。

51区180号土坑(第62・75・76図 PL.16・37)

位置：調査区51区南西側で、52区との境界付近で調査された。周辺は南東への緩斜面地形にあり、ほぼ平坦面が広がる。中世～近世遺構が点在する地点であり、西に178坑や179坑、東に48号焼土、184坑、南に183坑が近接する。51区X-15グリッドに位置する。

経過・重複：ローム漸移層上位の暗褐色土で確認した。大型の角礫の集中と共に土坑外縁を環状に粘土帯が巡る様相が把握され、桶付帯土坑として位置付けられた。重複する中世～近世遺構は無く単独の検出である。下層では縄文時代の22号住や20号住が調査されている。

規模・様相：径約89.0～83.0cmの比較的整った円形を呈する。深さは約44.0cmで、壁の立ち上がりもしっかりしており箱形の断面形状を示す。

おそらく桶は土層4層下面に埋置されていたと推定できる。しかしながら5層下端の堀方面壁際で木質が確認されたため、土坑補強の木材の可能性も考えておきたい。遺物：上層の大型礫に混在して大型釘(9・10)が出土し、底面から銭貨(1・2)、煙管(3)などが出土する。さらに獣骨も底面から出土している。分析では若いイノシシあるいはブタの上顎右臼歯部と判断された。

所見：銭貨の出土から墓塚の可能性が高い。釘などの

出土は座棺の存在も想定できよう。時期は出土遺物から近世以降としたい。

51区183号土坑(第62図 PL.16)

位置：51区X-14・15グリッドに位置する。調査区51区南西部の52区との境界付近で調査された。周辺は南東への緩斜面地形で、ほぼ平坦面が広がる。中世～近世遺構が点在する地点であり、北に180坑、東に48号焼土、西に49号焼土が近接する。

経過・重複：ローム漸移層上位の暗褐色土中で確認した。ローム塊を主体とする環状の粘土帯を土坑外縁に検出し、桶付帯土坑と判断して調査を進めた。

規模・様相：径約94.0×87.0cmの不整円形を呈する。深さは約40.0cmで箱形の断面形を示す。中層で角礫を出土するが下端を使用面と判断した。使用面及び底面ともほぼ平坦面を築く。

遺物：出土遺物は無かった。

所見：桶付帯土坑である。周辺には同様な180坑や184坑があり、180坑などの貨銭の出土例から、墓塚群の可能性もある。時期は、周辺土坑の在り方から近世以降と判断したい。

51区184号土坑(第62・76図 PL.16・37)

位置：調査区51区南西側で、52区との境界付近で180坑や183坑と共に調査された。周辺は南東への緩斜面地形にあり、ほぼ平坦面が広がる。中世～近世遺構が点在する地点であり、北に10号集石、南東に48号焼土などが近接する。51区X-15グリッドに位置する。

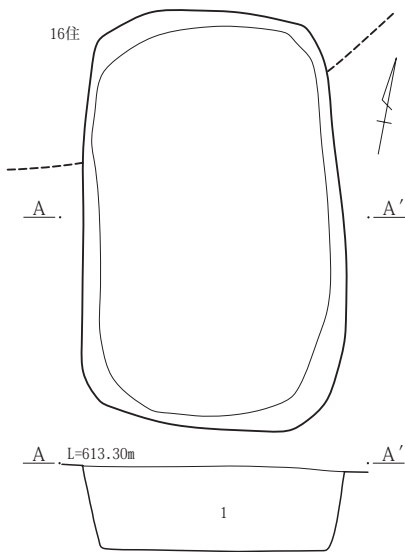
経過・重複：ローム漸移層上位の暗褐色土中で確認した。中型の角礫の集中が見られ、土坑外縁にローム塊が環状に検出されたため桶付帯土坑として位置付けた。中世～近世の重複遺構は無く単独の検出である。

規模・様相：径90cm前後の不整円形を平面形とする。深さは約36cmを測り、箱形の断面形を示す。使用面及び底面とも平坦面を築く。

遺物：南壁際埋土中位で播り鉢体部破片(1)、貨銭(2)が出土している。

所見：墓塚の可能性が求められる180坑や183坑と類似する桶付帯土坑である。出土遺物にも貨銭が認められており、時期も近世以降と判断できよう。

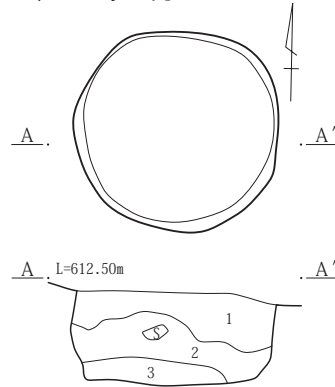
51区253号土坑



51区253号土坑土層

1 黒色土 ローム粒を微量含む。しまり弱い

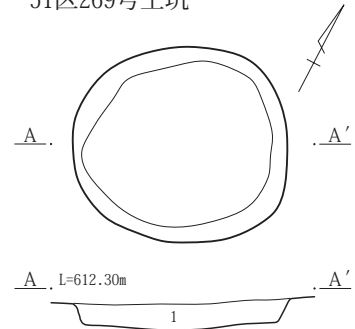
51区257号土坑



51区257号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム粒を多く含む。しまり弱い
- 2 暗黄褐色土 ローム塊を多く含む。しまり強い
- 3 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性強い

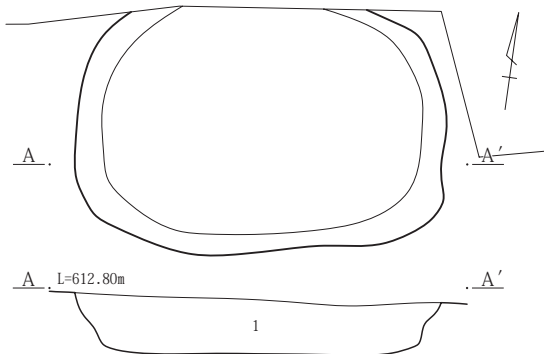
51区269号土坑



51区269号土坑土層

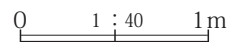
1 暗褐色土 炭化物を微量含む。均質で粘性強い

51区313号土坑



51区313号土坑土層

1 黒褐色土 黄色粒、ローム粒を少量含む



第63図 土坑 51区(6)

51区185～189号土坑(第62図)

位置：調査区51区東端で調査された。51区 I・J-24 グリッドに位置する。周辺は南東への緩傾斜地形が広がり、ほぼ平坦面といえよう。中世～近世遺構としては西に170坑、北西に53号焼土や150坑、190坑が近接する。
経過・重複：黄褐色ローム層で確認した。5基の土坑が重複状態で検出され、東側と南側の調査区域外に延びていた。南壁での土層観察では、188坑が189坑を切る新旧が明瞭に観察されたが、それ以外判然としない。
規模・様相：186坑以外は溝状の土坑であろう。あるいは

は長方形・楕円状を示すか。186坑は径100～110cm程の不整形円形を平面形とし、深さは約100cmを測る。掘り込みのしっかりした箱形の断面形を示す。その他の土坑も深く、底面も平坦な土坑だが、全容の把握までは至らなかった。
遺物：出土遺物は無かった。
所見：おそらく室状の土坑などの集積と考えられる。重複状態や埋土の様相から、近世～近代の所産と考えた

51区190号土坑(第62・76図 PL.17・38)

位置：調査区51区北東端で調査された。51区J・K-25グリッドに位置する。周辺は南東への緩傾斜地形が広がり、中世～近世遺構としては150坑・53号焼土が北西に、170坑や185～189坑が南に近接する。

経過・重複：黄褐色ローム層上層で確認した。平面形確認時より大量の大型角礫が集中し、大型不整形土坑として調査した。また土坑北側の線形は調査区に沿っており、あるいは調査区域外に延びるのかもしれない。

規模・様相：大型不整形土坑である。長軸は約300.0cmを超え、深さは75.0cmを測る。深くしっかりした掘り込みである。

遺物：角礫に混じり、下白破片(2・3)が出土している。その他では埋土中より陶器碗破片が出土している。

所見：近接する150坑と極めて類似する様相を示す。おそらく、150坑と同様に角礫の廃棄土坑としての位置付けが想起される。時期は出土遺物から近世～近代におきたい。

51区253号土坑(第63図 PL.17)

位置：調査区51区南西端で調査した。51区V-15グリッドに位置する。南東への緩斜面地形が広がり、平坦地形に占地するといえよう。やや距離を置いて西に49号焼土、北に1号土坑墓が見られる。180坑や183坑、184坑も北西にあり中世・近世遺構が集まる一群の東端にあたる。

経過・重複：ローム漸移層上位の暗褐色土中で確認した。周辺は斜面地形のためか黒褐色土～暗褐色土の堆積が厚く、底面も暗褐色土に止まった。中世・近世遺構の重複は無く、縄文時代住居跡である16号住を切って調査されている。

規模・様相：大型の不整形長方形を平面形とする。規模は約221.0×138.0cmで深さは約43.0cmを測る。壁もしっかりと掘り込まれ、底面も平坦で箱形の断面形を示す。

遺物：出土遺物は無い。

所見：中世～近世の遺構群内にあり、埋土の状態から近世以降の所産であろう。形状から室状の土坑であり周辺の遺構とは性格を異にするとと思われる。

51区257号土坑(第63図 PL.17)

位置：調査区51区南東部で調査された。51区L-18グ

リッドに位置する。周辺は南側への緩斜面地形が広がり、ほぼ平坦面での検出となった。

経過・重複：ローム漸移層上層の暗褐色土で確認された。周辺は黒褐色土～暗褐色土の堆積が厚く、底面も暗褐色土に止まった。中世・近世遺構の重複は無い。

規模・様相：平面形は径約110.0×107.0cmの不整形円形を呈する。深さは約44.0cmを測り、やや袋状の断面形を示す。埋土中より拳大の角礫が多量に出土した。埋土がローム塊を多く含む軟質土で構成される特徴を持つ。

遺物：角礫以外に出土遺物は無い。

所見：調査中より中世～近世土坑として位置付けられていた。埋土の特徴からも、近世以降に時期を求めたい。形状は桶付帯土坑に近似するが、桶圧痕や外縁の環状粘土もない。角礫の出土から墓壇の可能性もあるが、判然とせず、性格は不明としたい。

51区269号土坑(第63図 PL.17)

位置：調査区51区南東部で調査された。51区M-17・18グリッドに位置する。距離を置いて東に257坑を見る。周辺は南側への緩斜面地形が広がり、ほぼ平坦面での検出となった。

経過・重複：ローム漸移層上位の暗褐色土で確認した。中世～近世の重複遺構は無く、単独の検出となった。

規模・様相：径約113.0×103.0cmの不整形円形を平面形とする。浅く約16.0cmの深さだが、壁は明瞭に検出できた。底面はやや凹凸を見るが、ほぼ平坦面を築く。

遺物：遺物の出土は見られなかった。

所見：特徴も少なく、時期、性格とも判然としない。埋土の様相もあるいは縄文時代の所産としての可能性がある。

51区313号土坑(第63図 PL.17)

位置：調査区51区中央部で調査された。51区R-19グリッドに位置する。周辺は南側への緩斜面地形が広がり、平坦面での調査となった。南に距離をおいて1号井戸を見る。

経過・重複：現道下での調査でローム漸移層上位の暗褐色土で確認された。中世～近世の重複遺構はない。

規模・様相：平面形は不整形長方形を呈する。規模は約195.0×(131.0)×34.0cmで、掘り込みもしっかりしてい

た。底面は細かな凹凸が顕著だった。

遺物：遺物の出土は見られなかった。

所見：51区中央部に1号礎石建物など中世～近世の遺構が散在する。本土坑も、何等かの関連を想定したいが、大きな特徴を有さないため、性格など不明点が多い。また時期も埋土の様相から近世以降としたい。

52区1号土坑(第64図 PL.17)

位置：調査区52区東側で調査した。52区H-15グリッドに位置し、周辺はほぼ平坦地形であり、1～3号掘立柱建物や2坑が近接する。

経過・重複：第1面目の黒褐色土中で確認した。掘立柱建物柱穴と同時に検出されている。確認時は円形土坑外縁に環状の粘土帯が見られ、粘土は土坑底面にまで貼られていた。

規模・様相：径約114.0×106.0cmの不整円形を平面形とし、深さは21.0cmを測る。立ち上がりは直立気味でしっかりと掘り込まれていた。粘土による使用面は平坦で、堀方底面は基盤礫が露出し凹凸が見られた。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：桶付帯土坑と思われる。桶底面の圧痕は見られなかったが、底面に貼られた粘土などから、便槽の可能性もある。時期は周辺の掘立柱建物との関連から中世～近世と考えた。

52区2号土坑(第64・77図 PL.17・38)

位置：調査区52区東側で調査された。52区H-15グリッドに位置する。1～3号掘立柱建物の東、1坑の北にある。

経過・重複：第1面目の黒褐色土中で確認したが、黒褐色土の厚みは薄く、基盤礫やロームが露出していた。1号掘立柱建物内に重複する位置だが、新旧は不明である。

規模・様相：平面形は不整長方形で、規模は約204.0×150.0cm、深さは約33.0cmを測る。やや大型の土坑である。掘り込みも黄褐色ロームにまで達しており、壁もしっかりした立ち上がりを示す。底面は基盤礫の影響で凹凸が顕著だった。また、埋土中層より中～大型の角礫が出土している。

遺物：埋土中より貨銭(1)が出土している。

所見：角礫や貨銭の出土、土坑規模から墓塚として考

えておきたい。時期は出土貨銭から近世以降としたい。

52区3号土坑(第64図)

位置：52区H-12グリッドに位置する。調査区52区南西部にあたり、4坑が東に接し25坑が南に近接する。周辺は南への緩斜面地形でほぼ平坦面が広がる。

経過・重複：第1面目の黒褐色土中で確認した。軟質の暗褐色土を埋土とし、単独の検出である。

規模・様相：規模は約101.8×86.3×28.2cmを測り、小型の不整円形を平面形とし皿状の断面形を示す。底面は基盤礫の影響で凹凸が顕著だった。

遺物：出土遺物はない。

所見：時期、性格共に判然としないが、埋土の特徴から近世以降の所産としたい。

52区4号土坑(第64図)

位置：調査区52区南西部にあたり、3坑が西に、25坑が南に近接する。周辺は南への緩斜面地形でほぼ平坦面が広がる。52区H-12グリッドに位置する。

経過・重複：第1面の調査の黒褐色土中で確認した。暗褐色軟質土を埋土としており、重複遺構はない。

規模・様相：平面形は不整円形を呈し、径は約99.4×90.7cmを測る。深さは約21.8cmで底面はやや凹凸が強い。壁の立ち上がりは良好だった。

遺物：出土遺物は無かった。

所見：3坑と同様、詳細な時期、性格の特定は至らない。埋土から近世以降の所産としたい。

52区6号土坑(第64・77図 PL.17・38)

位置：調査区52区中央部の52区G-14グリッドで調査した。周辺はほぼ平坦面が広がり、12～15坑や43坑、33坑など中世～近世土坑が群在する箇所である。

経過・重複：第1面目の黒褐色土中で確認した。土坑外縁の一部を粘土帯が巡ることから、桶付帯土坑として位置付けられた。1号焼土や43坑、45坑が近接するが、重複遺構はない。

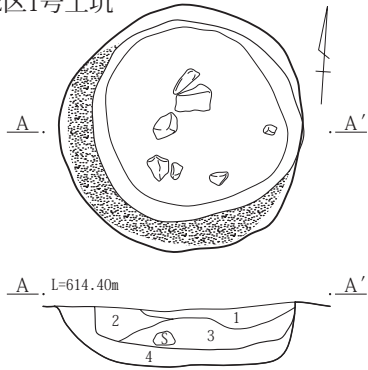
規模・様相：約96.0×91.0cmを平面規模とする不整円形を呈す。深さは約18cmである。浅く底面は凹凸がある。

遺物：埋土中より刀子(1)、貨銭(2)が出土する。

所見：桶付帯土坑で出土遺物から、墓塚の可能性が高

第3章 発見された遺構と遺物

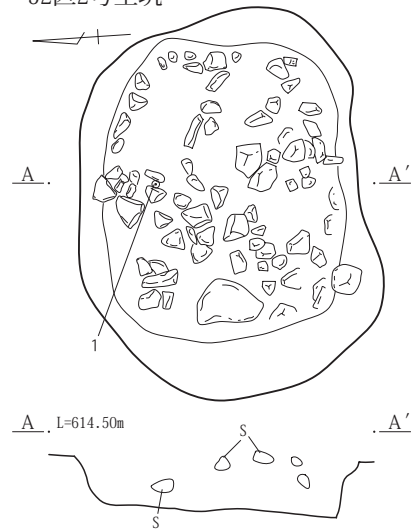
52区1号土坑



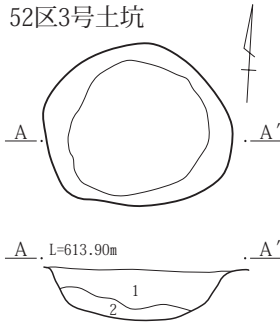
52区1号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム小塊、炭化物を少量含む
- 2 黒褐色土 ローム小塊を多く含む
- 3 黒褐色土 ローム大塊を少量含む
- 4 灰黄褐色粘土 黒色土塊、小礫を含む

52区2号土坑



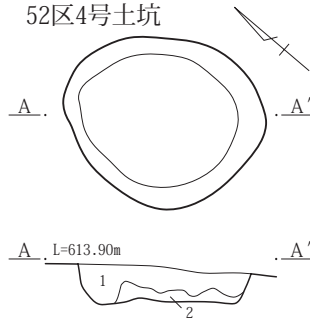
52区3号土坑



52区3号土坑土層

- 1 暗褐色土 しまり弱い
- 2 黒褐色土 黄色粒を微量含む

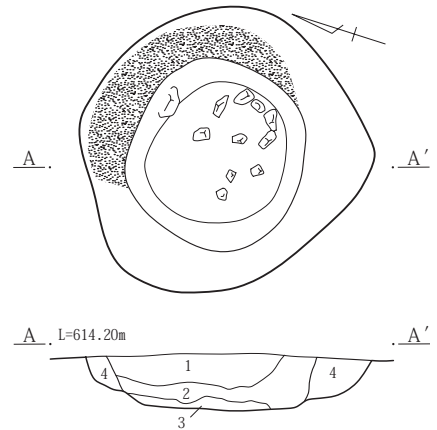
52区4号土坑



52区4号土坑土層

- 1 暗褐色土 しまり弱い
- 2 黒褐色土 黄色粒を微量含む

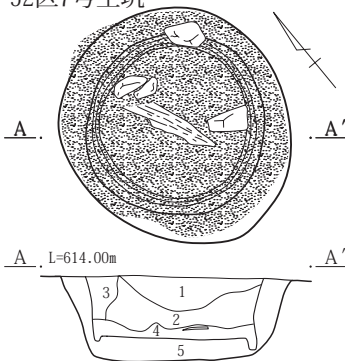
52区6号土坑



52区6号土坑土層

- 1 黒褐色土 炭化物を微量含む
- 2 黒褐色土 ローム小塊、炭化物を少量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 4 黒褐色土 ローム大塊、黄白色粘土を含む

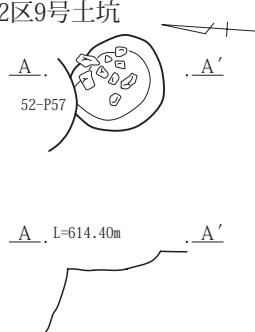
52区7号土坑



52区7号土坑土層

- 1 黒褐色土 炭化物を微量含む
- 2 黒褐色土 ローム小塊、炭化物を少量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒・ローム粒を少量含む
- 4 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 5 黒褐色土 ローム大塊、黄白色粘土を含む

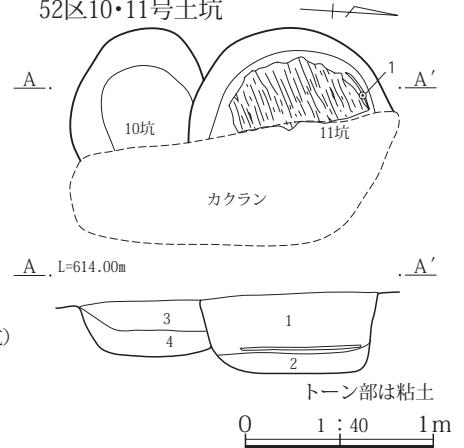
52区9号土坑



52区10・11号土坑土層

- 1 灰褐色土 小礫、焼土粒を微量含む。下面板敷き(11坑)
- 2 褐色土 ローム塊・粘土塊を含む(11坑)
- 3 暗褐色土 黄色粒を少量含む(10坑)
- 4 黒褐色土 黄色粒を微量含む(10坑)

52区10・11号土坑



第64図 土坑 52区(1)

い。時期は近世以降であろう。

52区7号土坑(第64図 PL.18)

位置：調査区52区南西部で調査した。52区H-12グリッドに位置する。周辺は南への緩斜面地形でほぼ平坦面が広がる。南西に3坑、4坑、南に10・11坑が近接する。

経過・重複：第1面目の黒褐色土中で確認した。円形土坑外縁にローム塊を主体とした黒褐色粘質土が環状に検出されたことから桶付帯土坑として位置付けた。

規模・様相：径約96.0×93.0cmの円形を呈し、深さは32.0cmを測る。堀方掘り込みはしっかりとしていた。埋土中に桶底面のが観察された。また板状の炭化材も角礫と伴に出土している。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：桶付帯土坑であること、占地状況から墓壙として位置付けたい。時期も他の土坑と同様に、近世以降としたい。

52区9号土坑(第64図)

位置：調査区52区東側で調査した。52区J-14グリッドに位置する。周辺はほぼ平坦地形が広がり、1～3号掘立柱建物や52区36坑が北に近接する。

経過・重複：第1面目調査の黒褐色土中で確認した。褐色土を埋土とし、小型の角礫が集中していた。小ピットのP57が北側に重なるが、詳細な新旧は不明である。

規模・様相：小型の不整円形土坑である。規模は約50.2×46.8×10.2cmを測り、浅く皿状の断面形をしめす。集石土坑の可能性を求めたが、意図的な埋置と判断できず、角礫は流入として捉えた。

遺物：出土遺物は無い。

所見：性格、時期の特定はできない。遺構確認面が第1面であることと、埋土の特徴から近世以降の所産であろう。

52区10・11号土坑(第64・77図 PL.18・38)

位置：調査区52区南西部の中世～近世の遺構群の中で調査した。52区G・H-12グリッドに位置する。北に7坑、西に3坑や4坑が近接する。

経過・重複：第1面目の黒褐色土中で、東側が攪乱坑により壊された状態で、両土坑が重複した様相で確認した。

11坑を新しく捉えた。11坑は確認時より、土坑外縁を粘土帯が環状に巡り、底面に板が出土し、さらに土坑壁に桶箍の圧痕を見たことから、桶付帯土坑と判断した。

規模・様相：10坑は径約77cmの不整円形を呈す。深さは約27.5cmで、壁の立ち上がりはしっかりとしていた。

11坑は前述のように桶付帯土坑で、径約80.0cmを超える円形を呈する。深さは約33.0cmを測り、箱形の断面形を示す。

遺物：11坑桶底板上に貨銭(1)の出土を見る。10坑の出土遺物は無い。

所見：11坑は貨銭の出土から、墓壙の可能性はある。時期は近世以降と考える。10坑は11坑に切られるが土層の様相は中世～近世土坑の特徴を有する。性格は不明である。

52区12号土坑(第65図 PL.18)

位置：調査区52区中央部の52区H-13グリッドで調査した。周辺はほぼ平坦面が広がり、6坑、13～15坑や41坑、43坑、45坑など中世～近世土坑が重複、近接して群在する地点である。

経過・重複：上記の土坑群と共に第1面目調査の黒褐色土中で確認した。確認時の上層においては、大型の角礫が集中しており、さらに土坑外縁を環状に粘土帯が巡って検出された。14坑と41坑との重複状態で調査されたが、新旧関係は不明である。

規模・様相：堀方平面形は約137.0×117.0cmの不整楕円形を呈す。深さは約50.0cmで深い。底面に桶底の圧痕が認められ、径約72cmを測る。埋土の状態は不明だが、底面及び外縁に黄褐色粘土が貼られていた。

遺物：遺物の出土は見られなかった。

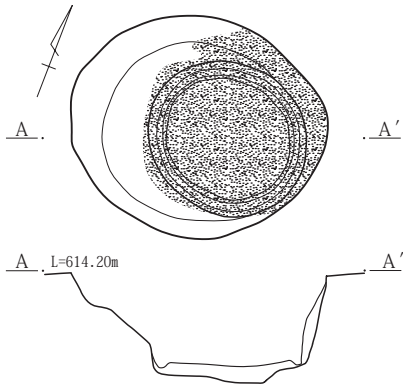
所見：出土遺物がないため、詳細は不明である。重複、近接する土坑の多くが桶付帯土坑であり、上層の角礫の集中から墓壙の可能性もある。時期は近世以降であろう。

52区13～15号土坑(第65・77図 PL.18・38)

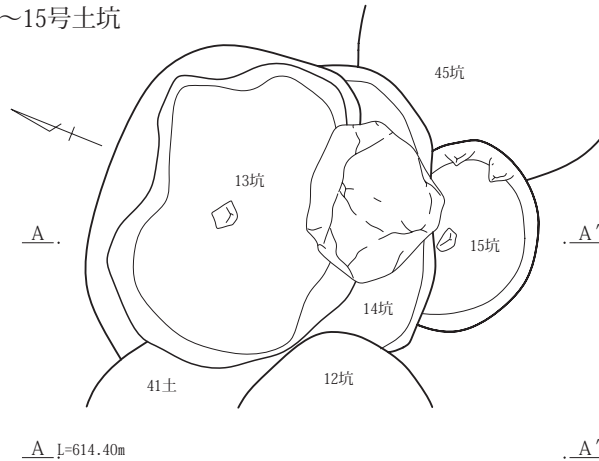
位置：調査区52区中央部の52区H-13・14グリッドで調査した。周辺はほぼ平坦面が広がり、1号焼土や6坑、12坑、41坑、43坑、45坑など中世～近世遺構が重複、近接して群在する地点である。

経過・重複：12坑と同様に第1面目調査の黒褐色土中で

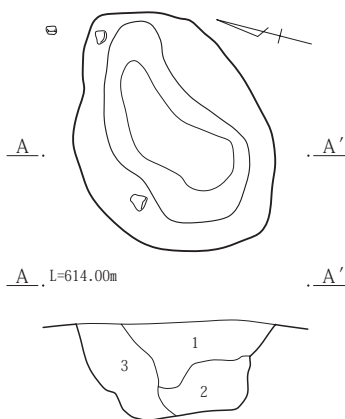
52区12号土坑



52区13~15号土坑



52区16号土坑



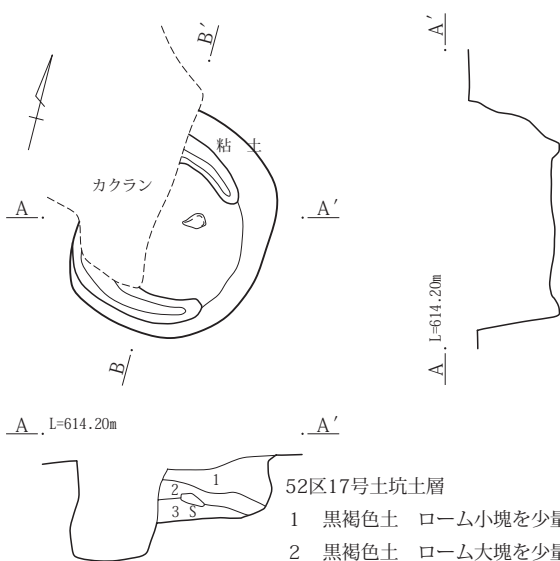
52区16号土坑土層

- 1 暗褐色土 やや暗い。しまり弱い
- 2 黒褐色土 ローム小塊を少量含む。しまり弱い
- 3 黒褐色土 黄色粒を微量含む

52区13~15号土坑土層

- 1 黒褐色土 炭化物を微量含む(13坑)
- 2 黒褐色土 礫・ローム大塊を多く含む(13坑)
- 3 暗褐色土 ローム小塊を少量含む(13坑)
- 4 黒褐色土 黄色粒、ローム粒を少量含む(13坑)
- 5 黄褐色土 黄褐色粘土を主体にしローム小塊を少量含む(13坑)
- 6 黒褐色土 ローム小塊を多く含む(13坑)
- 7 褐色土 黄褐色粘土塊と黒褐色土塊からなる(13坑)
- 8 黒褐色土 黄色粒、炭化物を少量含む(15坑)
- 9 黒褐色土 暗褐色土塊を少量含む(15坑)
- 10 黒褐色土 ローム大塊を多く含む(14坑)
- 11 黒褐色土 黄色粒を少量含む(14坑)

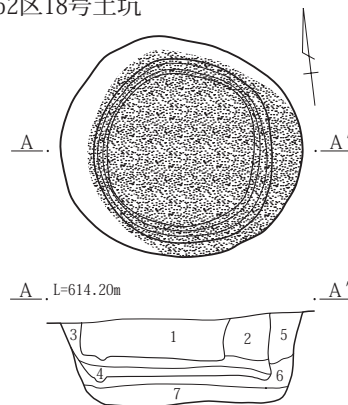
52区17号土坑



52区17号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム小塊を少量含む
- 2 黒褐色土 ローム大塊を少量含む

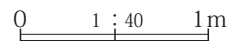
52区18号土坑



52区18号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム小塊、炭化物を少量含む
- 2 黄褐色土 黄白色粘土、小礫を含む
- 3 灰褐色土 黄白色粘土、ローム塊を主体とする
- 4 黒褐色土 黄色粒、ローム粒を少量含む
- 5 黄褐色土 黄褐色粘土とローム小塊を含む
- 6 灰褐色土 ローム小塊を多く含む
- 7 黒色土 粘性強い。褐色土塊とローム塊を含む

トーン部は粘土



第65図 土坑 52区(2)

確認された。重複状態で検出されており、新旧は土層観察によれば、13坑が新しく、14坑が最も古い。

規模・様相：13坑は不整円形の堀方に、下層で径75cm程の桶底圧痕を確認した。黄褐色粘土を貼っていた。堀方規模は約183.0×147.0×55.0cmを測る。

14坑は13坑に大きく壊され、全体は把握できない。また中央の巨岩が基盤礫として存在しており、そのため詳細の把握ができなかった。おそらく、径1.5m程の堀方平面規模で、桶底圧痕を底面に見る桶付帯土坑である。黄色粒を含む黒褐色土を貼っていた。深さは50cmを超える。15坑は南側にかかる土坑である。14坑にかかる巨岩のため、全体像が把握できないが土層の観察では14坑を切る新旧である。径100cm前後の不整円形を呈しており、浅く22cmの深さを測る。壁の立ち上がりはしっかりしていた。

遺物：13坑からは砥石破片(1)、播り鉢破片(2)がまとまった出土状態を示す。14坑からは石鉢破片が出土するが、破片のため詳細は不明である。

所見：おそらく13坑と14坑は桶付帯土坑であろう。周辺土坑の様相から、墓壙と考えられるが、確定性に乏しい。時期は13坑出土遺物から、中世～近世としておきたい。

52区16号土坑(第65図 PL.18)

位置：調査区52区中央部で調査した。52区F-12・13グリッドに位置する。周辺はほぼ平坦面が広がり、中世～近世遺構が集まる箇所である。

経過・重複：調査第1面目の黒褐色土中で確認したが、周辺は黒褐色土の堆積が薄く、基盤礫の露出が見られた。重複する遺構は無いが、27坑、34・35坑が北に接する。

規模・様相：不整形の平面形を呈し、規模は約142.0×101.0cmを測る。深さは約49.0cmで底面は凹凸が強く不連続な印象を受ける。壁の立ち上がりも弱い。

遺物：出土遺物は無い。

所見：不整形土坑で、遺物の出土も見ないため、時期・性格など詳細は不明である。おそらく近世以降の所産と思われるが、判断を控えたい。

52区17号土坑(第65図 PL.19)

位置：調査区52区東端で調査された。52区J-13グリッ

ドに位置し、周辺には、東に18坑、北西に37坑が近接する。ほぼ平坦地形が広がる地点である。

経過・重複：調査第1面目の黒褐色土中で確認した。北東部が攪乱坑により大きく壊されているが、土坑外縁に黄褐色粘土帯が環状に巡り、底面においても桶底圧痕が検出されたため、桶付帯土坑として位置付けた。

規模・様相：おそらく径90cm前後の不整円形を平面形とする。深さは約33.0cmを測る。

遺物：出土遺物は無い。

所見：桶付帯土坑ながら、時期、性格などの特定に至らない。18坑と連携し、便槽などの液体貯蔵の可能性もある。

52区18号土坑(第65・77図 PL.19・38)

位置：17坑の東で調査されている。52区J-13グリッドに位置する。平坦面が広がる周辺地形である。

経過・重複：黒褐色土中で確認された。黄白色粘土帯が土坑外縁に環状に検出され、底面に桶底圧痕を見ることから、桶付帯土坑として位置付けた。単独の検出である。

規模・様相：平面形は不整円形を呈し径約83.0cmを測る。堀方の深さは46cmである。桶底圧痕は2面にわたって確認された。約21cmと約28cmの深さで観察された。上層が小型で径約65cm程、下層が大きく径約86.0cmを測る。新規桶が小型化する傾向が把握された。

遺物：出土遺物として、ガラス製品(レンズ)を図示した(1)。

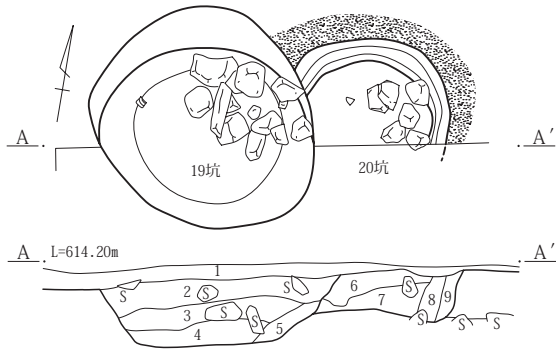
所見：桶付帯土坑ながら、時期、性格などの特定に至らない。桶底圧痕が2面にわたり確認されたことは、墓壙とは考えられず、また17坑との関連から、便槽などの液体貯蔵の可能性もある。時期は出土遺物から近代以降と考えた。

52区19・20号土坑(第66図 PL.19)

位置：調査区52区中央部やや北寄り調査した。52区F・G-14グリッドに位置する。ほぼ平坦面が広がり、中世～近世遺構群が集まる中に選地する。南西に6坑、北東に21・38坑、南に29坑が近接する。

経過・重複：第1面目の調査で黒褐色土中に確認された。2基の土坑が重複状態で検出され、土層の観察では19坑が新しい新旧関係を得ている。また20坑はやや浅いため、

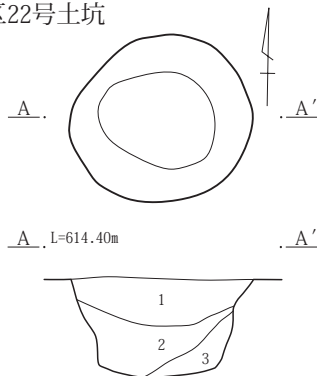
52区19・20号土坑



52区19・20号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム大塊を少量含む(19坑)
- 2 黒褐色土 ローム小塊、焼土小塊を少量含む(19坑)
- 3 灰褐色土 ローム小塊を少量含む(19坑)
- 4 黒褐色土 ローム小塊を多く含む(19坑)
- 5 暗褐色土 ローム小塊を多く含む(19坑)
- 6 灰褐色土 ローム小塊を少量含む(20坑)
- 7 褐色土 やや砂質。焼土塊、ローム塊を含む(20坑)
- 8 黄褐色土 ローム塊を主体とする(20坑)
- 9 黄褐色土 粘質土。ローム粒、黄色粒を含む(20坑)

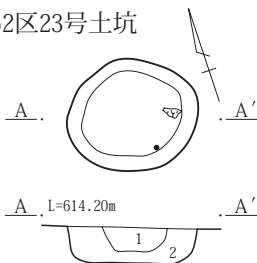
52区22号土坑



52区22号土坑土層

- 1 灰褐色土 砂質。黒色土塊、ローム小塊を含む
- 2 黒褐色土 ローム小塊を少量含む。しまり弱い
- 3 黒褐色土 ローム小塊を微量含む。しまり弱い

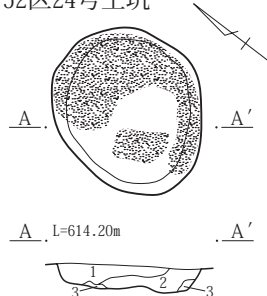
52区23号土坑



52区23号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム小塊、炭化物を少量含む
- 2 暗褐色土 黄褐色粒を少量含む

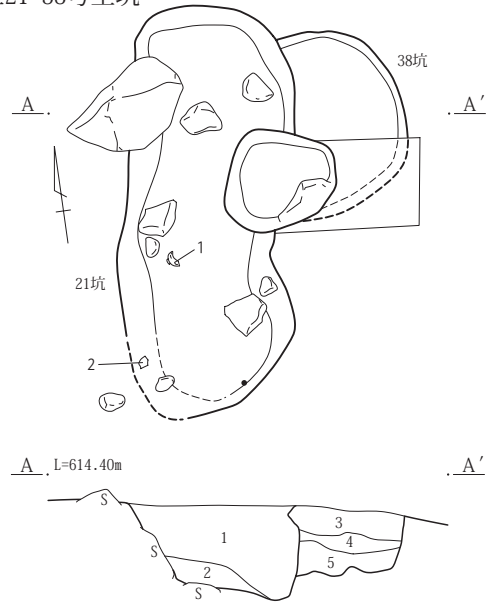
52区24号土坑



52区24号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む
- 2 暗褐色土 ローム小塊を少量含む
- 3 黄褐色粘土 礫を微量含む

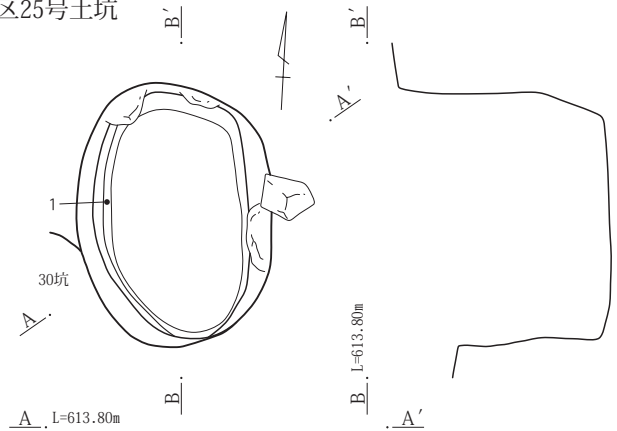
52区21・38号土坑



52区21・38号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム小塊を少量含む(21坑)
- 2 黒褐色土 ローム小塊を微量含む(21坑)
- 3 暗褐色土 焼土小塊を少量含む(38坑)
- 4 にぶい黄褐色土 粘質土。中礫を少量含む(38坑)
- 5 黒褐色土 黄色粒を少量含む(38坑)

52区25号土坑



52区25号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム小塊、小礫を含む
- 2 黒褐色土 ローム大塊を少量含む
- 3 暗褐色土 ローム大塊を微量含む。粘性強い
- 4 暗褐色土 小礫を微量含む。粘性強い
- 5 黒褐色土 ローム小塊を少量含む トーン部は粘土

0 1 : 40 1m

第66図 土坑 52区(3)

遺構確認用のサブトレンチで南半を逸失している。両土坑とも、上層～中層に角礫を集める。

規模・様相：両土坑とも不整形円形を平面形とする。19坑の平面規模は、約123.0×107.0cmで深さは約45.0cmを測る。やや開き気味の壁だが、黄褐色ロームをしっかりと掘り込む。20坑の平面規模は径70cm前後で深さは約26.0cmを測る。黄褐色ローム塊を主体とした粘土帯を環状に巡らせる様相を示し、桶付帯土坑として位置付けた。

遺物：両土坑とも出土していない。

所見：不整形円形土坑の重複である。遺物を出土しておらず、時期、性格の特定はできない。両土坑とも角礫を出土することから、あるいは墓壇の可能性もある。時期は近世以降としたい。

52区21・38号土坑(第66・77図 PL.19・21・38)

位置：52区F-15グリッドに位置する。19・20坑の北東で調査区52区中央部やや北寄りで調査した。中世～近世遺構群にあるが、周辺の遺構密度はやや希薄で、22～24坑が東に距離を置く。

経過・重複：第1面目の黒褐色土中で確認した。2基の土坑の重複状態で土層の観察では、21坑が38坑を切る新旧関係を示す。

規模・様相：21坑は不整楕円形の平面形を呈し、約215.0×111.0×30.0cmを測る。黄褐色ロームまで掘り込み、基盤礫を壁に兼ねた箇所もあるが、概ねしっかりと掘り込みを示す。

38坑の平面形は不整形円形で、径約60.0cmを測る。深さはやや浅く22.0cmだが、掘り込みは良好である。また土坑外縁及び底面に黄褐色粘土が貼られており、桶付帯土坑の可能性もある。

遺物：21坑埋土より、染付碗破片2点(1・2)が出土している。38坑の出土遺物は見ない。

所見：21坑は不定形土坑ながら、あるいは墓壇の可能性もある。38坑も円形土坑であり、桶付帯土坑としたら、墓壇として位置付けられる可能性がある。時期は21坑は近代、38坑は近世～近代としたい。

52区22号土坑(第66図)

位置：調査区52区中央やや東寄りで調査された。52区E-15グリッドに位置する。周辺は平坦面が広がり、中

世～近世遺構は23坑や24坑などが距離をおいて散在する。

経過・重複：第1面調査の黒褐色土中で確認した。単独の検出である。

規模・様相：平面形は不整形円形を呈し、規模は約97.8×88.8×52.6cmを測る。深い、壁の立ち上がりや底面の様相など不連続である。

遺物：出土遺物は無い。

所見：時期、性格などは判然とせず不明である。時期は埋土の様相から中世以降の所産である。

52区23号土坑(第66図)

位置：調査区52区中央やや東寄りで調査された。52区D-15グリッドに位置する。周辺は平坦面が広がり、中世～近世遺構は22坑や24坑などが距離をおいて散在する。

経過・重複：第1面調査の黒褐色土中で確認した。単独の検出である。

規模・様相：小型の不整形円形を平面形とする。平面規模は約70.0×58.4cmで深さは20.0cmを測る。浅いが掘り込みはしっかりとしていた。

遺物：出土遺物は無い。

所見：時期、性格ともに確定できない。埋土から、おそらく中世以降の所産であろう。

52区24号土坑(第66・77図 PL.19・38)

位置：調査区52区中央やや東寄りで調査された。52区E-14グリッドに位置する。周辺は平坦面が広がり、中世～近世遺構は22坑や23坑などが距離をおいて散在する。

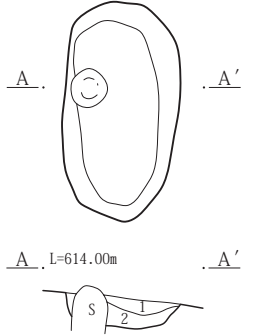
経過・重複：第1面調査の黒褐色土中で確認した。単独の検出である。黄褐色粘土を確認面から検出した。

規模・様相：南北に長軸を向けた不整楕円形を平面形とし、規模は約81.0×73.0×14.0cmである。浅く、底面及び壁も不連続である。黄褐色粘土の存在から、桶付帯土坑の可能性を求めたが、確定性に乏しい。

遺物：一銭アルミ貨の出土を見る。

所見：粘土を検出するが、環状ではなく廃棄の可能性もある。性格は不明である。時期は現代であろうか。

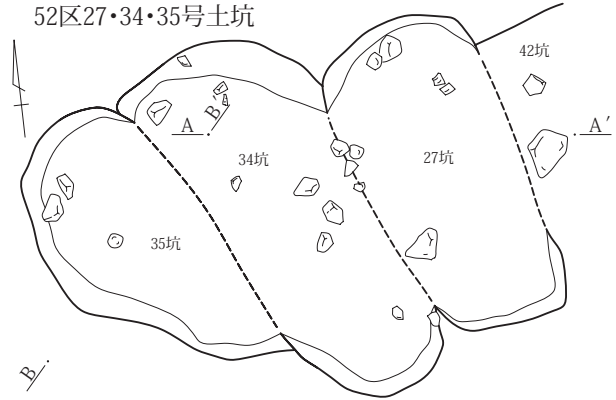
52区26号土坑



52区26号土坑土層

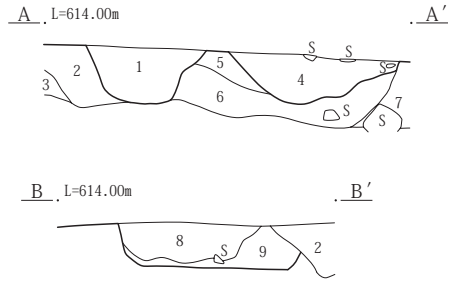
- 1 灰褐色土 木片混在。しまり弱い
- 2 灰褐色土 黒褐色土塊を少量含む

52区27・34・35号土坑

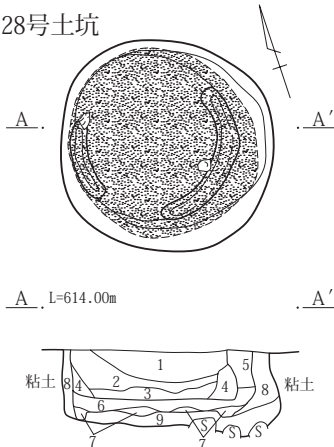


52区27・34・35・42号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム小塊を少量含む(34坑)
- 2 暗褐色土 黄色粒を微量含む(34坑)
- 3 暗褐色土 黄色粒を極微量含む(34坑)
- 4 灰褐色土 ローム粒を少量含む(27坑)
- 5 灰褐色土 ローム小塊を少量含む(27坑)
- 6 暗褐色土 ローム小塊を多く含む(27坑)
- 7 暗褐色土 ローム小塊を微量含む(42坑)
- 8 暗褐色土 ローム小塊を少量含む(35坑)
- 9 黒褐色土 黄色粒を微量含む(35坑)



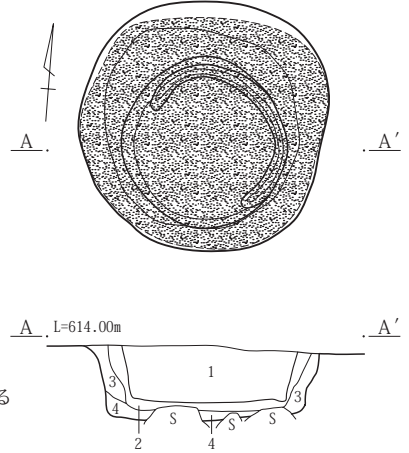
52区28号土坑



52区28号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム小塊、黄色粒を微量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒、炭化物を少量含む
- 3 暗褐色土 黄色粒を微量含む。粘性強い
- 4 褐色土 やや砂質
- 5 黄褐色土 粘土塊を主体とする。小礫含む
- 6 暗褐色土 褐色粘土塊を多く含む
- 7 黒褐色土 ローム粒、黄色粒を少量含む
- 8 黄褐色土 粘土塊、ローム小塊を主体とする
- 9 にぶい黄褐色土 粘土塊、ローム大塊を主体とする

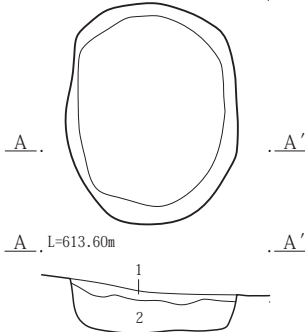
52区29号土坑



52区29号土坑土層

- 1 黒褐色土 黄色粒・炭化物を微量含む
- 2 褐色土 粘土塊を主体とし小礫を含む
- 3 暗褐色土 黄色粒を少量含む
- 4 暗褐色土 黄色粒を多く含む

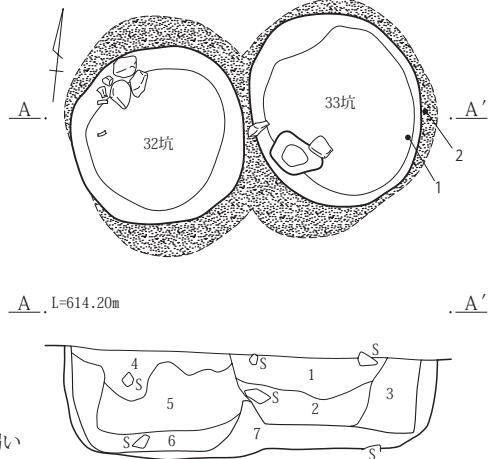
52区31号土坑



52区31号土坑土層

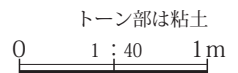
- 1 暗褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 暗褐色土 黄色粒を少量含む。しまり弱い

52区32・33号土坑



52区32・33号土坑土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を極微量含む(33坑)
- 2 暗褐色土 黄色粒を少量含む(33坑)
- 3 黒褐色土 ローム塊を少量含む(33坑)
- 4 暗褐色土 黄色粒・ローム小塊を含む(32坑)
- 5 暗褐色土 ローム小塊を少量含む(32坑)
- 6 暗褐色土 ローム大塊を少量含む(32坑)
- 7 黄褐色土 黄白色粘土塊・ローム大塊からなる



第67図 土坑 52区(4)

52区25号土坑(第66・77図 PL.38)

位置：調査区52区南西部で調査された。52区H-11グリッドに位置する。周辺は南への緩斜面地形が広がり、ほぼ平坦面を築く。周辺は中世～近世遺構が点在しており、北に3坑、4坑、南に31坑が近接する。

経過・重複：第1面の調査で黒褐色土中において確認した。陥穴状土坑特有の埋土状況をしめしていた。縄文時代土坑の30坑を切って調査されている。

規模・様相：平面形は不整楕円状を呈す。規模は約139.0×103.5×115.5cmで、深く黄褐色ローム下位まで達していた。底面は平坦で、逆茂木や杭などの痕跡は見られなかった。

遺物：埋土中より砥石片が出土した。

所見：小型の陥穴状土坑と判断した。周辺に同様の土坑がないがおそらく、調査区域外に範囲を延ばすのであろう。時期は中世としたい。

52区26号土坑(第67図)

位置：調査区52区南西部で調査した。52区I・J-12グリッドに位置する。南西への緩斜面地形で、ほぼ平坦面が広がる。東に3坑、4坑、北西に18坑が距離を置く。

経過・重複：黒褐色土中で確認した。単独の検出で木片混じりの灰褐色軟質土を埋土としていた。

規模・様相：小型の楕円状を呈す。平面規模は約115.0×61.5cmを測り、深さは約20.5cmである。断面形は浅い皿状を呈す。北壁際に立石状の円礫を見る。当初は縄文時代の土坑と考えたが、埋土の状況及び円礫が基盤にまで達しているため、自然石として判断した。

遺物：出土していない。

所見：小型の楕円状土坑だが、時期、性格とも不明である。埋土の様相から近世～近代と判断した。

52区27・34・35号土坑(第67・77図 PL.19・38)

位置：調査区52区中央部で調査した。52区F・G-13グリッドに位置する。周辺はほぼ平坦面が広がり、中世～近世遺構が集まる箇所、北に29坑、32・33坑、南に16坑、東に28坑や42坑が近接・重複する。

経過・重複：第1面調査の黒褐色土中で確認した。多くの遺構が群在する中で、東西に連続する不整形の土坑を調査した。4基の土坑の重複で、土層の観察では、34坑

が最も新しく、35坑と27坑を切る。27坑は42坑を切る新旧関係である。

規模・様相：長軸を北北西に向けた不整長方形や不整楕円状の土坑が東西に連続する。いずれも底面は黄褐色ローム上面に達するが凹凸があり、壁の立ち上がりも不連続である。27坑は不整長方形を平面形とし、規模は約173.0×87.0×35.0cmを測る。34坑の平面形は不整楕円状で、規模は約213.0×(77.0)×32.0cmである。35坑は不整形を平面形とする。規模は約162.0×(93.0)×25.0cmを測る。

遺物：34坑より、鉄釘体部破片が出土している。

所見：不整長方形～楕円状の土坑が南北に長軸を向けて連なる。全体の様相も不連続な印象が強く、出土遺物も少ないため墓壙とは判断できない。また、陥穴状土坑や室状の土坑とは形状に差がある。時期、性格は不明としたい。27坑が42坑を切ることから、近世以降の所産としたい。

52区28号土坑(第67図 PL.20)

位置：調査区52区中央部のF-13グリッドで調査した。周辺はほぼ平坦面が広がり、27・34・35坑や42坑、29坑など中世～近世遺構が近接、重複する一群の東端に位置する。

経過・重複：第1面調査面である黒褐色土で確認した。平面形確認時に、土坑外縁の黄褐色粘土帯が環状に巡り、桶付帯土坑として位置付けて調査を進めた。北側で42坑と重複するが、土層による新旧関係は不明である。本土坑外縁を環状に巡る粘土帯が、42坑周辺で途切れることから、あるいは42坑に切られる新旧も想定できよう。

規模・様相：径約108.0×91.0cmの不整円形を平面形とする。深さは約26.0cmでローム漸移層上層までしっかりと掘り込まれていた。黄褐色粘土で壁及び底面を貼り、底面は平坦面を保ち、径約85.0cmの桶底の圧痕が残っていた。堀方底面は小型の基盤礫が露出しており、底面も凹凸を見る。

遺物：出土遺物は無かった。

所見：桶付帯土坑である。出土遺物は無いが、周辺遺構の様相から墓壙としての位置付けを考えておきたい。時期は近世以降と判断した。

52区29号土坑(第67図 PL.20)

位置：調査区52区中央部のF・G-13グリッドで調査した。周辺はほぼ平坦面が広がり、27・34・35坑や42坑が南に、32・33坑が東に接しており、中世～近世遺構群の中に位置する。

経過・重複：第1面目の調査で確認した。黒褐色土中で検出で、28坑と同様に黄褐色粘土帯を土坑外縁に環状に巡る様相が把握されたため、桶付帯土坑として位置付けた。なお、西に接する32・33坑も桶付帯土坑であり、同時に調査を進めた。

規模・様相：堀方平面形は不整形円形を呈し、平面規模は約91.0×88.0cmを測る。深さは約34.0cmでローム漸移層にまで達していた。大型の基盤礫があり、この上面で掘削を止めた様相も看取された。底面には粘土が貼られ、平坦面を保ち桶底圧痕が確認された。径は約81.5cmである。

遺物：出土遺物は無い。

所見：28坑と同様に桶付帯土坑である。出土遺物も無く確定できないが、周辺遺構の様相から墓壙として考えたい。時期も近世以降であろう。

52区31号土坑(第67図)

位置：調査区52区南西端で調査した。本土坑南は調査区域外で、52区H-11グリッドに位置する。周辺は南への緩斜面地形が広がり、ほぼ平坦面を築く。北側は中世～近世遺構が点在しており、北に陥穴状土坑である25坑が近接する。

経過・重複：第1面調査面である黒褐色土中で確認した。埋土は暗褐色軟質土を主体としており、平面形は容易に把握できた。単独の検出である。

規模・様相：平面形は不整形円形を呈す。平面規模は約117.0×85.0cmで、深さは約24.0cmを測る。壁は直立気味だが、底面は黒褐色土中に止まった。

遺物：出土遺物は無い。

所見：埋土の様相から、近世以降の所産と判断した。性格は不明だが、あるいは室状の土坑としての位置付けも可能である。

52区32・33号土坑(第67・77図 PL.20・38)

位置：調査区52区中央部のG-13グリッドで調査した。

周辺はほぼ平坦面が広がり、東に29坑、南に27・34・35坑が接している。中世～近世遺構群の中に位置する。

経過・重複：第1面目黒褐色土中の調査で、2基が重複した状態で確認された。28坑や29坑と同様に黄褐色粘土帯を土坑外縁に環状に巡る様相が把握されたため、桶付帯土坑として位置付けた。東西に同規模の桶付帯土坑が連なる様相であり、29坑まで併せると何等かの関連性が想起されよう。なお、重複関係は33坑が32坑を切る新旧を示す。

規模・様相：両土坑とも平面形は不整形円形を呈する。

西側の32坑の平面規模は約98.0×95.0cmで、深さは55.0cmを測る。深くしっかりした掘り込みで、堀方は黄褐色ローム上面にまで達する。

33坑の規模は、約105.0×90.0×33.0cmで、堀方掘り込みは黄褐色ローム上面にまで及ぶ。両土坑とも、下面及び土坑外縁に黄褐色粘土が貼られていたが、桶底の圧痕は明瞭には見られなかった。また、堀方埋土内では両土坑の新旧は確認できなかった。これは両土坑が同時期という新旧ではなく、土層差が見られなかったからである。遺物：33坑東壁上層で煙管雁首(1)と銭貨(2)、釘頭部(3)が出土している。

所見：33坑の銭貨の出土から、墓壙の可能性を高めた。時期は出土遺物から近世遺構である。32坑は33坑より古く、性格も同様に墓壙と考えられよう。

52区36号土坑(第68図 PL.20)

位置：調査区52区東側で調査された。52区J-14グリッドに位置する。2号掘立柱建物の南西隅に重なる。周辺はほぼ平坦地形が広がる。

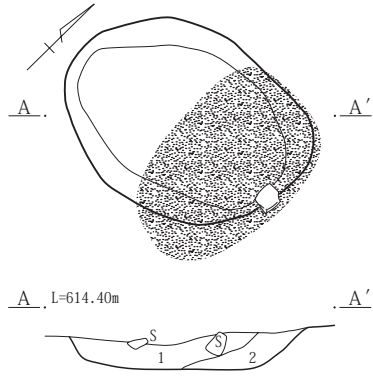
経過・重複：2号掘立柱建物南西隅を壊す攪乱坑下位で確認された。東側に粘土の広がりを見たが、形状が整っておらず桶付帯土坑ではなかった。

規模・様相：攪乱坑との高低差は大きくないため、形状など判然としない。不整形円状の平面形を推定している。規模は約76.0×23.0cmで、深さは約14.0cmを測る。浅く皿状の断面形で、壁の立ち上がりも弱い。

遺物：出土遺物は無い。

所見：粘土はおそらく廃棄に伴う例で、桶付帯土坑の所産ではない。攪乱坑に切られることから、近・現代以前でおそらく近世～近代に時期を求めたい。性格は不明

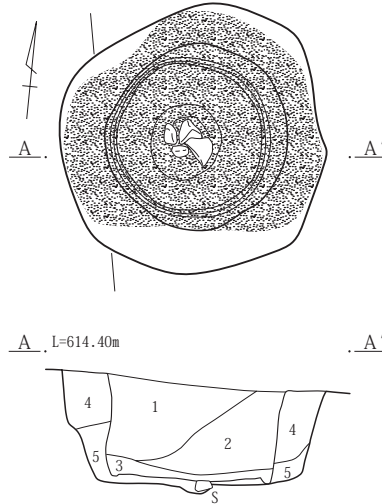
52区36号土坑



52区36号土坑土層

- 1 暗褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 黄褐色土 粘土塊、ローム塊を含む

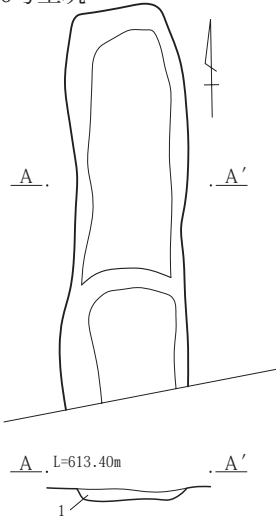
52区37号土坑



52区37号土坑土層

- 1 暗褐色土 黄色粒を少量含む
- 2 暗褐色土 ローム大塊、小礫を少量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 4 黄褐色土 粘土塊主体。中礫を含む
- 5 黄褐色土 粘土塊主体。小礫を含む

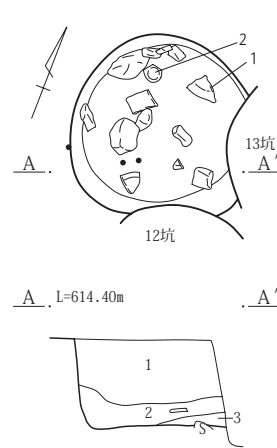
52区40号土坑



52区40号土坑土層

- 1 黒褐色土 シルト質。しまり弱い

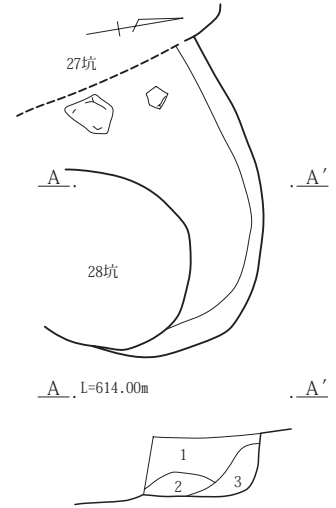
52区41号土坑



52区41号土坑土層

- 1 褐色土 白色粒を極微量含む
- 2 黒褐色土 ローム小塊を微量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を少量含む

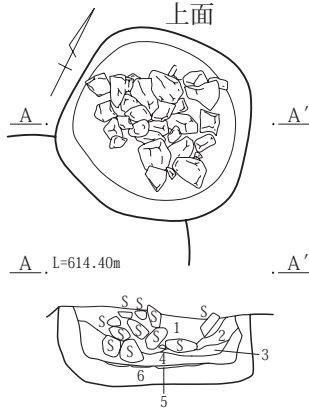
52区42号土坑



52区42号土坑土層

- 1 暗褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 暗褐色土 ローム小塊を少量含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を極微量含む。しまり弱い

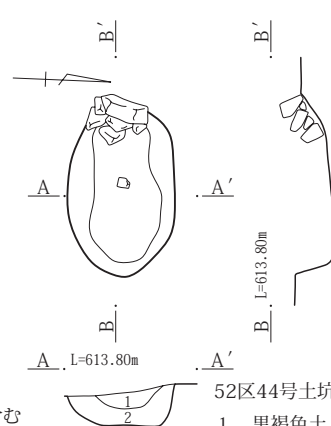
52区43号土坑



52区43号土坑土層

- 1 黒褐色土 礫・黄色粒を微量含む
- 2 暗褐色土 焼土粒を少量含む
- 3 暗褐色土 焼土粒、灰を少量含む
- 4 暗褐色土 焼土小塊、暗褐色土塊を含む
- 5 炭化木質部分。板状をなす
- 6 黒褐色土 炭化物を含む。粘性強い

52区44号土坑



52区44号土坑土層

- 1 黒褐色土 焼土小塊、炭化物を少量含む
- 2 黒褐色土 焼土小塊を微量含む

トーン部は粘土 0 1:40 1m

第68図 土坑 52区(5)

である。

52区37号土坑(第68図 PL.21)

位置：52区K-13グリッドに位置する。52区東端にあたり東側は調査区域外になる。周辺はほぼ平坦面が広がり、17坑や18坑が南東に近接する。

経過・重複：調査第1面目の黒褐色土中で確認した。土坑外縁に粘土帯が環状に巡って検出されたため、桶付帯土坑として位置付けた。単独の検出である。

規模・様相：桶に相当する円形土坑は径100cm前後、深さ54cmを測る。堀方は大きく不整円形の平面形を呈し、146.0×140.5×60.0cmを測る。粘土は底面と壁に貼られており、壁には2条の籐の圧痕が認められた。また底面中央には径約40cm、深さ約6.0cmの浅い不整円形土坑が設けられ、垂角礫が数個まとまって出土している。

遺物：遺物の出土は見ない。

所見：整った円形の桶付帯土坑である。出土遺物もないため、時期、性格は特定できないが、底面で検出された浅い土坑は52区34坑にも僅かな痕跡を見出すことができた。用途など不明だが、桶付帯土坑の性格を具体化する要素かもしれない。今後、注意が必要であろう。時期は近世以降と判断している。

52区40号土坑(第68図 PL.21)

位置：52区D-12グリッドに位置する。52区南東部の区域外に南端を延長して調査された。南東への緩斜面地形にあり、周辺には東に88坑、89坑、91坑が近接する。

経過・重複：第1面目の調査で確認した。黒褐色土中での検出で、底面も黒褐色土中に止まる。おそらく単独の検出である。

規模・様相：平面形は不整長方形を呈し、規模は長軸約(207.0)cm、短軸長は68.0cm、深さは約15.0cmで浅く、底面も凹凸が顕著で、壁も不明瞭だった。

遺物：出土遺物は見られない。

所見：溝状の土坑である。掘り込みも弱く、あるいは調査区域外で溝になるのかもしれない。性格、時期共に不明だがおそらく近世以降の所産であろう。

52区41号土坑(第68・77図 PL.21・38)

位置：調査区52区中央部の52区H-13・14グリッドで

調査した。周辺はほぼ平坦面が広がり、12坑、13~15坑や43坑、45坑など中世~近世土坑が重複、近接して群在する地点である。

経過・重複：第1面目調査の黒褐色土中で確認した。褐色軟質土を埋土とし、小型の角礫と共に少量の陶磁器破片が出土したため、中世~近世遺構として位置付けた。

規模・様相：平面形は径100cm前後の円形を呈する。深さは約55cmを測り、ローム漸移層を掘り込み箱形の断面形を示していた。底面はほぼ平坦である。東壁は13坑、南側は12坑が重複するが、土層の観察が果たせなかったため、新旧は把握できなかったが、12坑、13坑共に桶付帯土坑で、外縁に粘土帯が観察されたことから、41坑を切る新旧関係と推定できるが、重複範囲が狭いため、確定的ではない。

遺物：数点の陶磁器類破片が埋土上層から中層にかけて出土しているが、おそらく埋土時の流入であろう。

所見：円形土坑である。土層や出土遺物の特徴も無く、性格は不明だが、周辺で確認されている桶付帯土坑との関係を考慮にいれたい。時期は近世以降としたい。

52区42号土坑(第68・77図 PL.21・38)

位置：調査区52区中央部のF-13グリッドで調査した。周辺はほぼ平坦面が広がり、中世~近世遺構が近接、重複する一群の東端に位置し、27坑や28坑と重複した状態で検出された。

経過・重複：第1面調査面である黒褐色土で確認した。暗褐色軟質土を埋土として検出された。西に27坑、東に28坑と重複するが、両土坑調査後の検出のため、新旧は不明である。

規模・様相：平面規模は約(148.0)×(115.0)cmで、長軸を東西に持つ不整楕円状の平面形か。南側の壁は28坑と27坑に挟まれ確認されていない。深さは約40.0cmを測り、壁の立ち上がりは比較的良好だった。

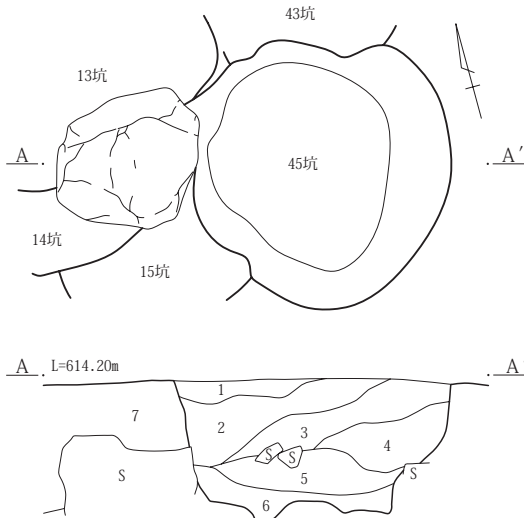
遺物：不明鉄製品2点を出土する。

所見：時期、性格とも不明である。出土遺物からも時期は特定できない。埋土の様相から中世以降と考える。

52区43号土坑(第68図 PL.21)

位置：調査区52区H-13・14グリッドに位置する。52区中央部にあたり周辺はほぼ平坦面が広がり、1号焼土

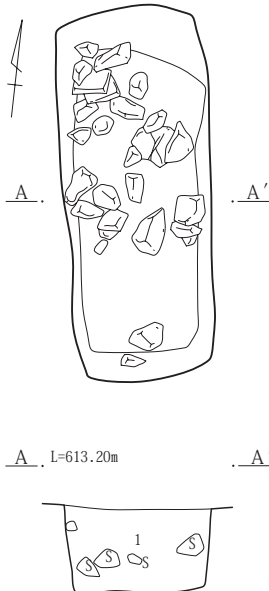
52区45号土坑



52区45号土坑土層

- 1 灰褐色土 暗褐色土塊を微量含む
- 2 灰褐色土 焼土小塊、炭化物を微量含む
- 3 灰褐色土 焼土小塊を微量、ローム小塊を多く含む
- 4 灰褐色土 焼土小塊、ローム小塊を少量含む
- 5 灰褐色土 焼土大塊を少量含む
- 6 灰褐色土 焼土小塊を少量含む
- 7 暗褐色土 基盤層。角礫を多く含む

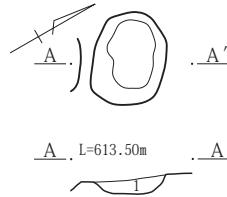
52区88号土坑



52区88号土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム小塊を少量含む。しまり弱い

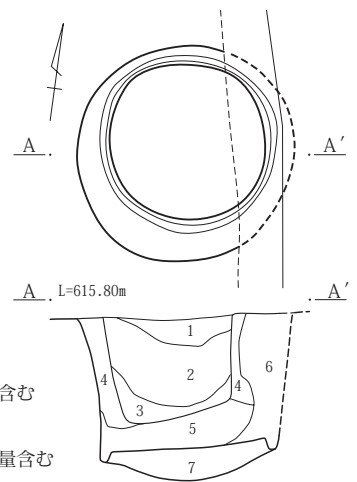
52区46号土坑



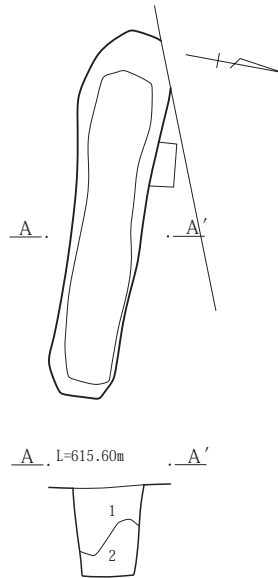
52区46号土坑土層

- 1 黒褐色土 褐色土塊を多く含む

52区47号土坑



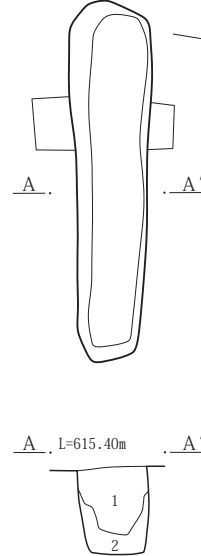
52区51号土坑



52区51号土坑土層

- 1 黒色土 小礫を含む。しまり弱い
- 2 暗褐色土 黒色土塊含む。しまり弱い

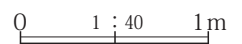
52区52号土坑



52区52号土坑土層

- 1 黒色土 小礫を含む。しまり弱い
- 2 暗褐色土 黒色土塊含む。しまり弱い

トーン部は粘土



第69図 土坑 52区(6)

や6坑、12坑、13～15坑、41坑、45坑など中世～近世遺構が重複、近接して群在する地点である。

経過・重複：1号焼土調査後、焼土底面である黒褐色土中で確認された。中～大型角礫が集中し、土坑外縁に黒褐色粘土帯が環状に検出されたため、桶付帯土坑として調査を進めた。その後底面に炭化した桶板が出土し、下位に黒褐色粘土が貼られていたが、桶底の圧痕は見出せなかった。

規模・様相：平面形は径約86.0×79.0cmの不整形円形を呈す。深さは約31.0cmを測り、箱形の断面形を示す。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：底面に底板が残存していた桶付帯土坑である。出土遺物に恵まれないが、大型礫の出土や周辺の桶付帯土坑との関係から、墓壇の可能性が高い。時期も確定性に乏しいが近世以降と考えている。

52区44号土坑(第68図 PL.21)

位置：52区中央部で調査した。52区F・G-12グリッドに位置する。周辺はほぼ平坦面が広がり、北側と東側には中世～近世遺構が近接する。

経過・重複：調査第1面目の黒褐色土中で確認したが、周辺は黒褐色土の堆積が薄く、基盤礫の露出が見られた。重複する遺構は無いが、北に16坑が近接する。

経過・重複：第1面目の黒褐色土中で調査した。軟質で焼土を含む黒褐色土を埋土とする。基盤の黒褐色土の堆積が厚い地点で、底面も黒褐色土中に止まる。

規模・様相：平面形は長軸を東西に向けた不整形円状を呈す。規模は約88.0×57.0×14.0cmで小型で掘り込みの浅い土坑である。断面形は皿状で、壁の立ち上がりもやや弱い印象を受ける。土坑西側の土層から底面にかけて、円礫や亜角礫が重なって出土した。おそらく意図的な埋置と思われる。

遺物：出土遺物は縄文時代の土器片を見るが、中世～近世に該当する遺物は見られなかった。

所見：埋土の在り方や西壁際の自然石の出土など、墓壇の要素を含む。しかしながら、土坑規模は小型であり、墓壇としての確定は控えたい。時期は埋土の様相から中世以降と考えた。

52区45号土坑(第69図 PL.22)

位置：調査区52区H-13グリッドに位置する。52区中央部にあたり周辺はほぼ平坦面が広がり、1号焼土や6坑、12坑、13～15坑、43坑など中世～近世遺構が重複、近接して群在する地点である。

経過・重複：黒褐色土中での確認である。西に重複する13・14坑などの調査終了後の検出で、43坑と同時に調査された。土層の観察では14坑を切る新旧関係を示す。また、43坑外縁の粘土帯が巡ることから、43坑を新しく捉える事も可能である。

規模・様相：径145.0cm前後の不整形円形を平面形とし、深さは約70cmを測る。底面は黄褐色ローム上面に達し凹凸が顕著だった。壁はしっかり掘り込まれていた。

遺物：出土遺物は無い。

所見：13坑・14坑を切り、43坑に切られることから、同様に近世以降の所産と思われる。ただし詳細は不明であり、性格、時期は不明としたい。

52区46号土坑(第69図 PL.22)

位置：調査区52区中央部のE-13グリッドで調査した。周辺はほぼ平坦面が広がるが、遺構密度はやや希薄で、西の28坑や42坑などの土坑群から距離を置く。

経過・重複：ローム漸移層土層の暗褐色土で確認した。褐色土塊を含む埋土で、P72と近接して調査された。

規模・様相：平面形は小型の不整形形で、規模は約50.0×38.0×11.0cmである。浅く皿状の断面を示し、壁の立ち上がりも弱い。

遺物：出土遺物は無い。

所見：時期、性格は不明である。埋土の様相から中世以降と判断した。

52区47号土坑(第69図 PL.22)

位置：調査区52区北側の調査区壁際で調査された。52区E・F-19グリッドに位置する。周辺は南東への緩斜面地形でほぼ平坦面が広がる。重複、近接する中世～近世遺構は無く、遺構密度は極めて低い。

経過・重複：調査第1面目の黒褐色土で確認した。平面形確認時に土坑外縁にローム塊や粘土塊からなる粘土帯が環状に検出されたことから、桶付帯土坑として位置付けて調査を進めた。重複遺構はなく、北調査区域境に現代の側溝壁が重なる。

規模・様相：径約110.0cmの不整円形を平面形とし、深さは約68.0cmを測る。おそらく2回にわたる設営と思われる、上下の粘土層が確認でき、それぞれに桶底圧痕を見た。2層の黄褐色粘土を底面に貼り、壁は黒褐色粘質土を桶補強材としていた。

遺物：出土遺物は無かった。

所見：整った桶付帯土坑である。周辺遺構も見られないため、関連性を捉えられない。埋土中に角礫や貨銭の出土も無く、墓壙としての性格付けはできない。時期は桶付帯土坑という要素で、近世遺構と考えている。

52区51号土坑(第69図 PL.22)

位置：調査区52区北東部のC-21グリッドに位置する。北側は調査区壁に接しており、土坑北西隅部が調査区域外にかかる。周辺は南東への緩斜面地形が広がり、ほぼ平坦面といえよう。

経過・重複：調査第1面の黒褐色土中で確認した。黒色軟質土を埋土とし、重複もなく単独の検出となった。

規模・様相：長軸を東西に持つ不整長方形を平面形とする。規模は約196.0×46.0×48.0cmで、底面はローム漸移層上層の暗褐色土に達する。壁は直立気味で箱形の断面形を示す。

遺物：遺物の出土は見られなかった。

所見：方形の室状土坑と思われる。周辺に建物跡などが存在しないため、確定的ではないが、長軸が建物軸や畑軸に沿うものと考えられる。時期は、埋土の様相から近世～近・現代と考えた。

52区52号土坑(第69図 PL.22)

位置：調査区52区北東部のB-20グリッドに位置する。周辺は南東への緩斜面地形が広がり、ほぼ平坦面といえよう。周辺遺構は希薄で、先に述べた51坑が北西約3mに位置する。

経過・重複：黒褐色土中の確認である。黒色軟質土を埋土とし、単独の検出となった。

規模・様相：51坑と同様に東西に長軸を持たせた不整長方形を平面形とする。平面規模は約191.0×44.0cm、深さは約51.0cmを測る。底面はローム漸移層上位の暗褐色土にまで達しており、断面形は箱形を呈す。

遺物：出土遺物は無い。

所見：51坑と同様に室状土坑であろう。長軸も同様であり、東西の軸方位が周辺施設の軸方位に影響されているものとする。北側の調査区域外に近世施設などの存在が想定されよう。時期は、埋土の様相から近世～近・現代と考えた。

52区88号土坑(第69図 PL.22)

位置：52区C-12・13グリッドに位置する。52区南東部にあたり周辺は、南東への緩斜面地形にあり、東に89坑、91坑、西に40坑が近接する。

経過・重複：ローム漸移層の黄褐色土で確認した。埋土は黒褐色軟質土で極めて明瞭に平面形が判断できた。単独の検出である。

規模・様相：平面形は長軸を南北に持つ不整長方形である。規模は約198.0×79.0×45.0cmを測り、底面は水平で壁も直立し、箱形の断面形を示す。土坑北側の埋土中位から底面にかけて、大型の角礫を中心とした自然石が集まる。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：室状土坑と判断した。土坑の平面形状や大型角礫の出土から墓壙の可能性もあるが、出土遺物に恵まれず、土坑断面形状から室状の土坑としての位置付けが妥当と考えた。時期は埋土の様相から近世～近・現代と考えた。

52区89号土坑(第70図 PL.22)

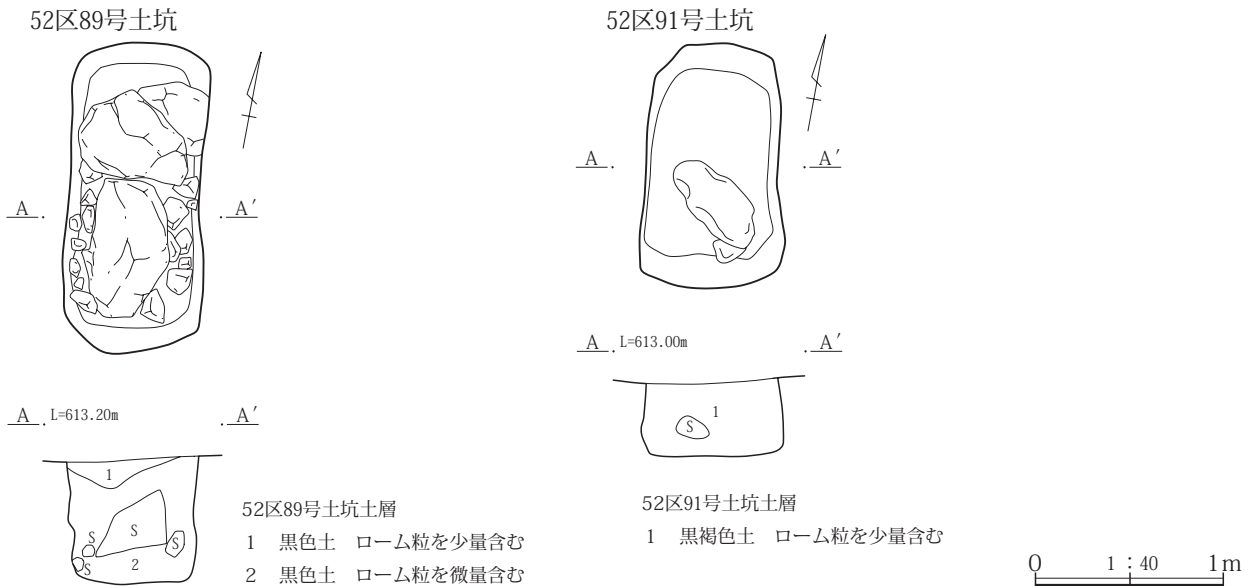
位置：52区南東部で調査された。C-13グリッドに位置する。周辺は、南東への緩斜面地形にあり、40坑、88坑、91坑が近接する。

経過・重複：ローム漸移層の暗褐色土で確認した。埋土はローム塊を含む黒色土で、明瞭に平面形が判断できた。単独の検出である。

規模・様相：平面形は南北に長軸を持つ不整長方形を呈し、規模は約165.0×75.0cmである。深さは約68.0cmで黄褐色ローム層を深く掘り込み、箱形の断面形を示す。底面も平坦面を築く。埋土中位より大型の巨岩が2石出土した。巨石周辺からも中～大型の角礫が出土している。

遺物：出土遺物は無い。

所見：巨石の出土という要素で、墓壙としての位置付けを想定したが、88坑や40坑の様相から室状の土坑とし



第70図 土坑 52区(7)

て位置付けたい。時期は埋土の様相から近世～近・現代と考えた。

52区91号土坑(第70図 PL.22)

位置：52区B-12グリッドに位置する。52区南東部にあたり周辺は、南東への緩斜面地形が広がる。40坑、88坑、89坑が近接する。

経過・重複：ローム漸移層の黄褐色土で確認した。黒褐色軟質土を埋土とし、検出は容易に果たせた。

規模・様相：規模は約130.0×71.0×43.0cmを測る。長軸を南北においた不整形長方形を平面形とし、ローム層まで掘り込み、断面形は箱形を呈す。底面も平坦面を築く。土坑底面に接して、巨石が1石出土している。

遺物：出土遺物は無かった。

所見：88坑、89坑と同様に、方形の平面形を呈し、土坑内部より角礫や巨石を出土する。あるいは墓壙としての位置付けが想定されるが、ここでは室状の土坑として位置付けておきたい。時期は近世～近・現代と考えた。

61区2号土坑(第71図 PL.23)

位置：調査区61区北東部で調査した。61区P-11グリッドに位置する。周辺は南への斜面地形が顕著で、中世～近世遺構では、5坑、9坑、23坑が近接する。

経過・重複：ローム漸移層上位で確認した。暗褐色軟質土を埋土としていた。縄文時代に比定した1号坑を切る。

規模・様相：ピット状の小型土坑である。平面形は不整形

楕円形を呈し、規模は約50.0×37.0×29.0cmを測る。底面も不連続で壁の立ち上がりも弱い。

遺物：遺物の出土は見ない。

所見：ピット状の土坑であるが、柱穴としての位置付けも出来ない。性格は不明である。時期も埋土の様相から近世～近・現代と考える。

61区5号土坑(第71図 PL.23)

位置：調査区61区北東部で東側を調査区域外に延ばして調査された。61区P-11グリッドに位置する。周辺は南への斜面地形が顕著で、中世～近世遺構では、2坑、9坑、23坑が近接する。

経過・重複：ローム漸移層の黄褐色土を確認面とする。黒色軟質土を埋土としていた。重複遺構は無く単独の検出である。

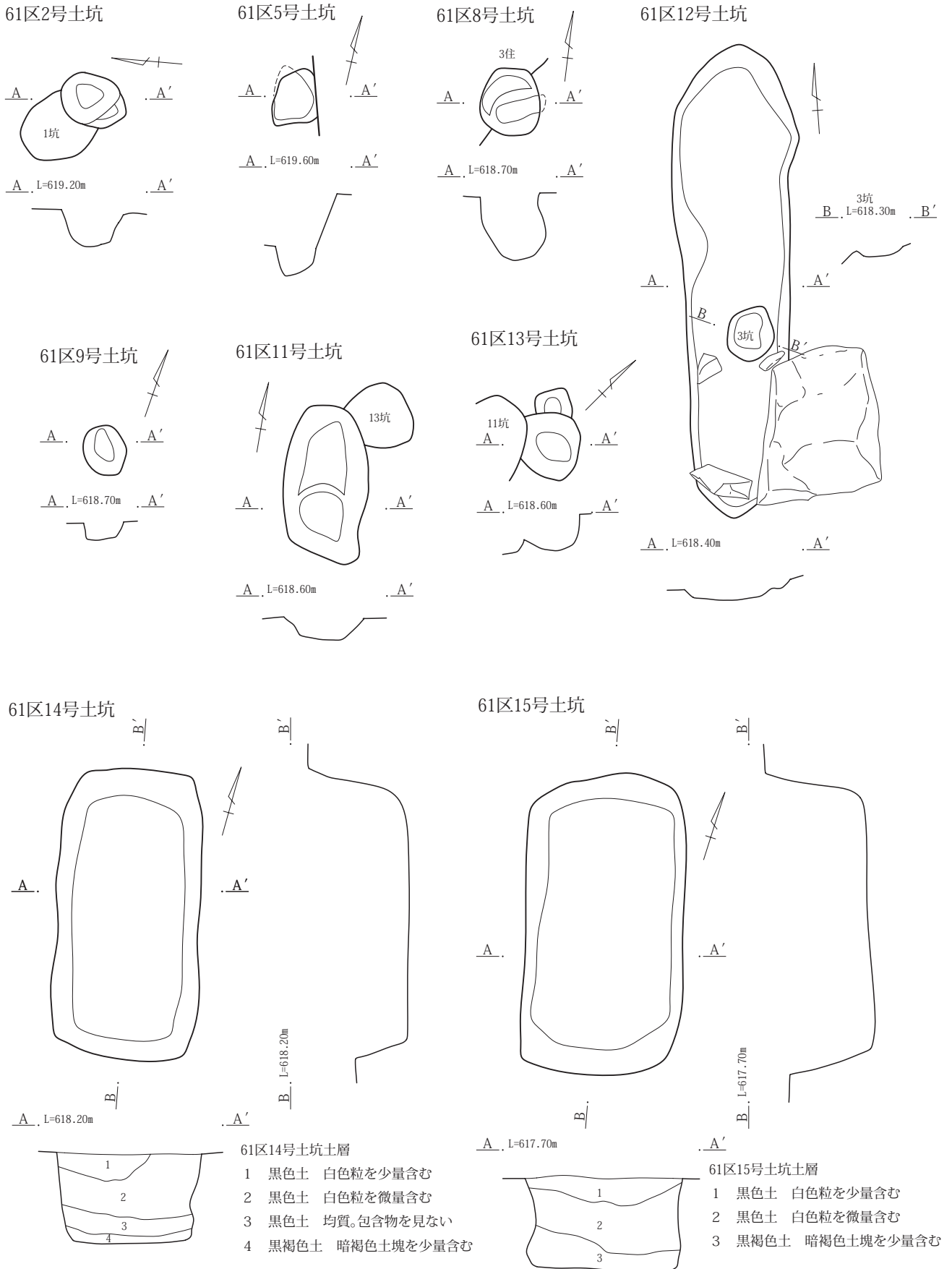
規模・様相：小型の不整形土坑である。規模は約38.0×(32.0)×25.0cmを測るが、平面形及び断面形ともに不安定な印象が強い。

遺物：出土遺物は無い。

所見：2号坑と同様にピット状の土坑である。性格や時期は不明であり、時期も近・現代の可能性はある。

61区8号土坑(第71図 PL.23)

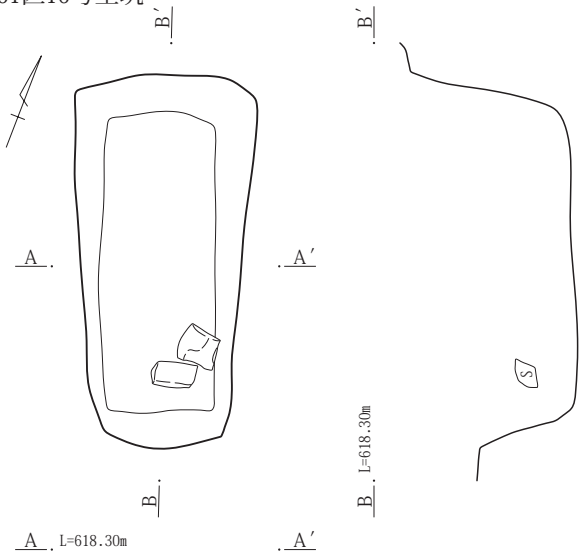
位置：調査区61区東側で調査された。61区P-9グリッドに位置する。周辺は南への緩斜面地形が広がり、南東には11・13坑が近接する。



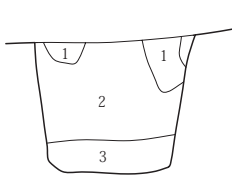
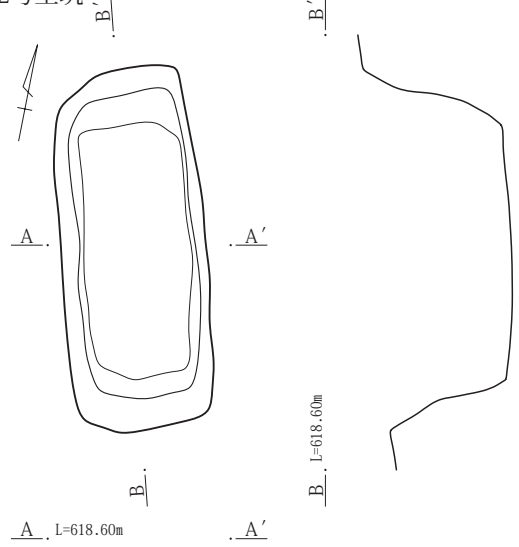
0 1 : 40 1m

第71図 土坑 61区(1)

61区16号土坑

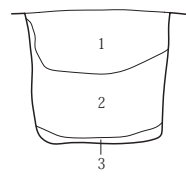


61区22号土坑



61区16号土坑土層

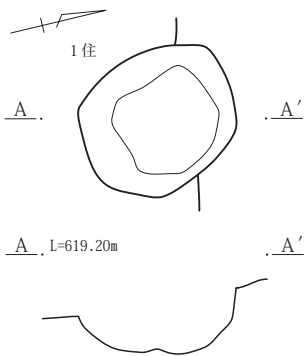
- 1 黒色土 均質。しまり弱い
- 2 暗褐色土 褐色土塊を多く含む
- 3 黒褐色土 褐色大塊を含む



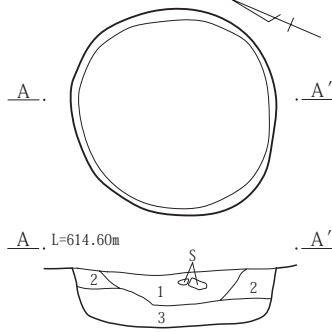
61区22号土坑土層

- 1 黒褐色土 白色粒を微量含む
- 2 灰褐色土 白色粒を極微量含む
- 3 黒褐色土 褐色粒を含む

61区23号土坑



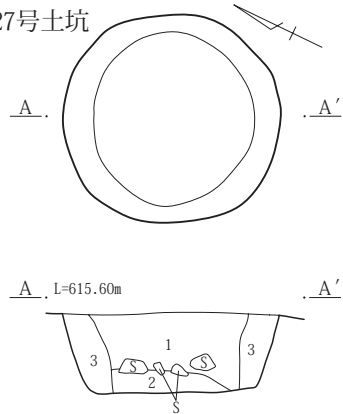
61区26号土坑



61区26号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム大塊、角礫を多く含む
- 2 暗褐色土 ローム小塊を多く含む
- 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む

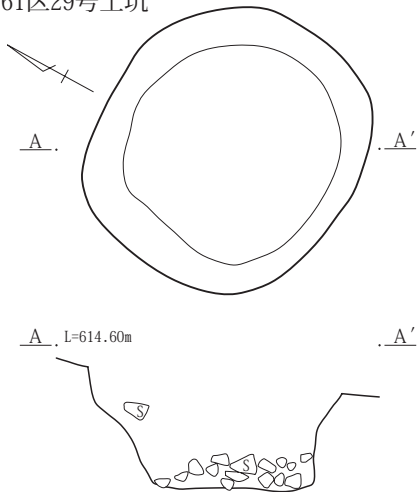
61区27号土坑



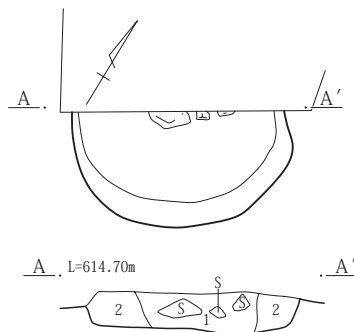
61区27号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム大塊、角礫を多く含む
- 2 暗褐色土 ローム小塊、角礫を少量含む
- 3 暗褐色土 ローム小塊を多く含む

61区29号土坑

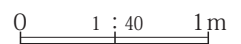


61区28号土坑



61区28号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム大塊、角礫を多く含む
- 2 暗褐色土 ローム小塊を多く含む



第72図 土坑 61区(2)

経過・重複：ローム漸移層の黄褐色土を確認面とする。ローム塊を含む褐色軟質土を埋土とする。中世～近世遺構の重複は無いが、縄文時代に比定される3号住を切る。
 規模・様相：小型の不整形円形を平面形とする。規模は約49.0×44.0×53.0cmを測り、深くローム層下位のAs-YPk層にまで達するが、壁及び底面は不安定な様相を示す。
 遺物：出土遺物は無い。
 所見：2坑、8坑と同様にピット状の土坑で、時期、性格とも不明である。埋土は近世～近・現代の特徴を示していた。

61区9号土坑(第71図 PL.23)

位置：調査区61区北東部であるP-11グリッドに位置する。先に述べた2坑が南に近接する。
 経過・重複：ローム漸移層の黄褐色土で確認した。暗褐色軟質土を埋土としていた。
 規模・様相：平面形は不整形円形を呈し、規模は約37.0×31.0×20.0cmを測る。底面、壁とも凹凸があり不安定な印象が強い。
 遺物：出土遺物は無い。
 所見：2坑と同様にピット状の土坑であり、柱穴としても位置付けられない。時期、性格とも不明である。埋土の特徴は近・現代に比定されよう。

61区11号土坑(第71図 PL.23)

位置：61区P-8・9グリッドに位置する。61区東端で13坑とともに調査された。周辺は南への斜面地形が広がる。8号坑の南西に近接する。
 経過・重複：斜面地形が原因して、ローム漸移層が流出した地点である。確認面はローム層下位のAs-YPk層が露出していた。そのため、遺構残存度は極めて悪かった。
 規模・様相：平面形は不整形円形を呈す。平面規模は約109.0×62.0cmで、長軸は南北を向く。深さ約14.0cmで浅く皿状の断面形を示す。13坑との重複が北東壁で観察されたが、新旧は不明である。
 遺物：出土遺物は無い。
 所見：時期、性格とも不明である。平面形状からあるいは室状土坑下端の可能性はあるが、判然としない。埋土の様相から近・現代の可能性もある。

61区12号土坑(第71図 PL.23)

位置：調査区61区南東部で調査した。61区O・P-7グリッドに位置する。周辺は緩やかな南斜面が広がる。遺構密度は低い箇所である。
 経過・重複：黄褐色ローム上層で確認された。褐色軟質土を埋土とする。底面で3坑との重複が観察されたが、新旧は不明である。
 規模・様相：平面形は長軸を南北に向けた溝状の不整形円形を呈する。平面規模は約347.0×78.0cmで深さは浅く約11.0cmを測る。底面で検出された3坑も径35～40cm、深さ10cm程度のピット状土坑で浅く皿状の断面形である。
 遺物：遺物の出土は見られない。
 所見：あるいは室状土坑の残骸の可能性もある。時期は埋土の特徴から近世～近・現代としたい。

61区13号土坑(第71図 PL.23)

位置：前述の11坑と重複して調査された。61区P-8・9グリッドに位置する。
 経過・重複：11坑同様にAs-YPk層で確認された。11坑との新旧は不明である。
 規模・様相：小型の不整形土坑である。規模は68.0×(42.0)×20.0cmを測るが平面形、断面形ともに不安定な印象が強い。
 遺物：出土していない。
 所見：小型のピット状土坑である。柱穴ではない。時期、性格共に不明であり、あるいは近・現代の所産の可能性もある。

61区14号土坑(第71図 PL.23)

位置：調査区61区中央部で調査された。U-7グリッドに位置する。周辺は南への緩傾斜地形が広がり、ほぼ平坦地形と言えよう。縄文～弥生時代の遺構も多数が重複密集する地点である。中世～近世遺構も15坑・16坑・22坑といった方形の室状土坑が周辺に集まる。
 経過・重複：第1面目の調査面で確認されている。黒褐色土中の検出で、埋土は黒色土だった。重複遺構は無く、単独の検出である。
 規模・様相：平面形は長軸を北北東に設けた不整形長方形を呈す。平面規模は213.0×106.0cmで、深さは約66.0cm

を測る。ローム漸移層中層にまで達し、底面は平坦で箱形の断面形を示していた。

遺物：出土遺物は無い。

所見：室状土坑であろう。その他の15坑や16坑と同様に群をなすものと思われる。時期は土層の特徴から、近世～近代としたい。

61区15号土坑(第71図 PL.24)

位置：調査区61区中央部で調査された。U-6グリッドに位置する。周辺は南への緩傾斜地形が広がり、ほぼ平坦地形で、縄文～弥生時代の遺構も多数が集まる地点である。中世～近世遺構も室状土坑である14坑・16坑・22坑が近接する。

経過・重複：第1面目の調査面で確認した。黒褐色土中の検出で、黒色土を埋土としていた。重複遺構は無く、単独の検出である。

規模・様相：平面規模は約221.0×116.0cmで幅広の不整長方形を平面形とする。長軸は北北東を向く。深さは約67.0cmを測り底面は平坦面を築き、直立気味の良好な壁だった。

遺物：出土遺物は無い。

所見：4坑・16坑・22坑と共に室状土坑群にある。時期も同様に近世～近代としたい。

61区16号土坑(第72図)

位置：調査区61区中央部の61区V-7グリッドに位置する。周辺は南への緩傾斜地形が広がり、ほぼ平坦地であり、縄文～弥生時代の遺構も多数が重複密集する地点である。中世～近世遺構も室状土坑である、14坑、15坑、22坑が周辺に集まる。

経過・重複：調査第1面目の黒褐色土中で確認された。暗褐色軟質土を埋土とする。下層では縄文時代遺構が重複するが、第1面目では単独の検出である。

規模・様相：平面形は長軸を北北東に向けた不整長方形を呈す。規模は約199.0×86.0×75.0cmを測り、底面は平坦で箱形の断面形を示す。底面はローム漸移層中層にまで達し、しっかりとした掘り込みだった。

遺物：遺物は出土していない。

所見：14坑、15坑、22坑と共に室状の方形土坑群の一隅に位置する。おそらく時期も他の土坑と同様に近世～

近代と位置付けられよう。

61区22号土坑(第72図 PL.24)

位置：調査区61区中央部やや北寄りで調査された。61区V-8グリッドに位置する。周辺は南への緩傾斜地形が広がり、ほぼ平坦地である。中世～近世遺構としては、南東に室状土坑である14～16坑が近接する。

経過・重複：第1面目の調査面で確認した。黒褐色土中の検出で、埋土は黒褐色軟質土や灰褐色軟質土である。単独の検出である。

規模・様相：長軸を北北東に設けた不整長方形を平面形とする。平面規模は約190.0×77.0cmで、深さは約70.0cmでローム漸移層中層の暗褐色土にまで達する。断面形は箱形でしっかりとした掘り込みである。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：14～16坑と同様に室状土坑である。一群をなすが本土坑が北端にあたる位置を占める。時期は埋土の特徴から、他の土坑同様に近世～近代に比定する。

61区23号土坑(第72・78図 PL.24・39)

位置：調査区61区北東部であるP-11グリッドに位置する。周辺は南への傾斜地形が顕著で、先に述べた2坑や9坑が北に、5坑が東に近接する。

経過・重複：ローム漸移層の黄褐色土で確認した。褐色軟質土を埋土としていた。縄文時代の遺構と同時に調査しており、61区1号住を切って調査されている。

規模・様相：平面形は約86.0×71.0cmの不整形を呈す。深さは約34.0cmを測り、底面は凹凸が強く、断面形も皿状を呈す。

遺物：埋土中より在地土器内耳土器底部破片(78図1)を出土するが、有機的な出土ではなく、流入と思われる。

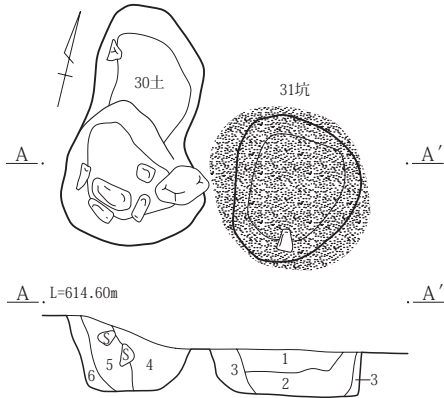
所見：周辺の小土坑と同様に、時期、性格共に不明である。埋土の様相から近・現代の可能性もある。

61区26号土坑(第72図 PL.24)

位置：国道部分での調査である。調査区51区北東部～61区南東部の中世～近世土坑群の北端に位置する。南に近接する61区27坑や51区23坑・24坑と一群をなす。

61区O-1グリッドに位置する。周辺は南東への緩斜地形でほぼ平坦面が広がる。下層では縄文時代の遺構群

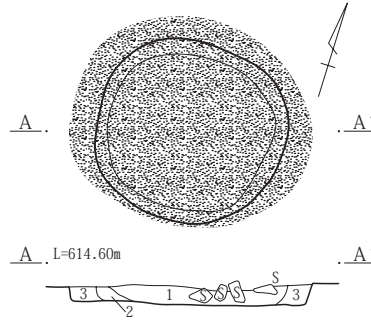
61区30・31号土坑



61区30・31号土坑土層

- 1 明黄褐色土 粘質土。黄色粒を含む
- 2 褐色土 黄色粒、ローム粒を含む
- 3 褐色土 粘質土。ローム粒を多く含む
- 4 黒褐色土 角礫を含む。しまり弱い
- 5 暗褐色土 ローム粒、礫を含む
- 6 褐色土 ローム小塊を含む

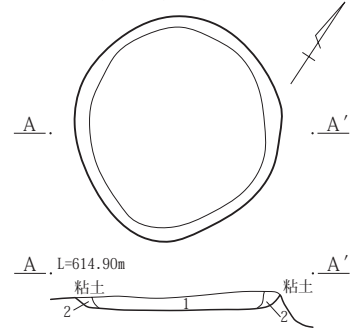
61区32号土坑



61区32号土坑土層

- 1 明黄褐色土 粘質土。ローム塊主体
- 2 暗褐色土 粘質土。ローム粒を含む
- 3 黄褐色土 粘質土。ローム塊

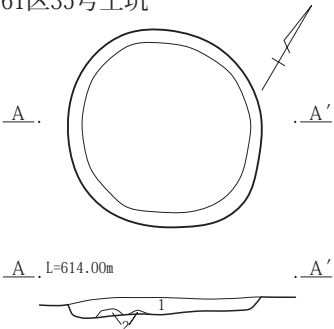
61区34号土坑



61区34号土坑土層

- 1 明黄褐色土 粘質土。ローム塊主体
- 2 黄褐色土 粘質土。ローム塊

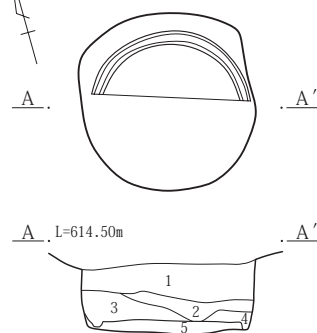
61区35号土坑



61区34号土坑土層

- 1 明黄褐色土 粘質土。ローム塊主体
- 2 黄褐色土 ローム塊

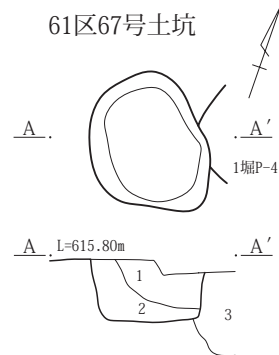
61区36号土坑



61区36号土坑土層

- 1 黒褐色土 白色粒を微量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒を少量含む
- 3 黒褐色土 ローム粒を多く含む
- 4 暗褐色土 ローム小塊を少量含む
- 5 黒褐色土 上位に黄褐色粘土が覆う。小礫を含む

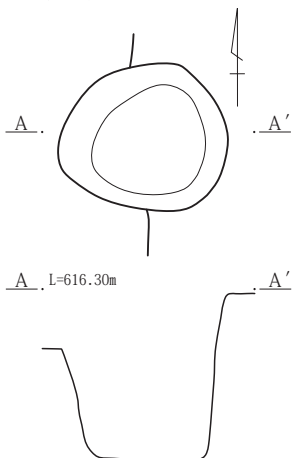
61区67号土坑



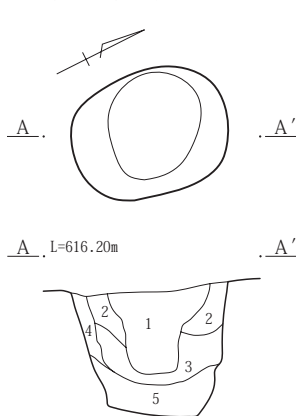
61区67号土坑土層

- 1 暗褐色土 黒色土塊、ローム塊を含む
- 2 にぶい褐色土 ローム粒を多く含む
- 3 黒褐色土 黄色粒を含む。ピット土層

61区71号土坑



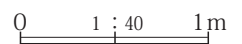
61区72号土坑



61区72号土坑土層

- 1 黒褐色土 小型のローム塊を多く含む。柱痕か
- 2 黒褐色土 黄色粒を少量含む。しまり強い
- 3 暗褐色土 ローム粒を少量含む。しまり強い
- 4 黒褐色土 均質。黄色粒を極微量含む
- 5 黄褐色土 ローム塊と褐色土塊を主体とする

トーン部は粘土



第73図 土坑 61区(3)

が密集して調査されている。

経過・重複：第1面目の調査である黒褐色土中で確認されている。土坑外縁にローム塊を含む暗褐色粘質土が巡るため、桶付帯土坑として位置付けた。

規模・様相：径80cm前後の不整円形を平面形としている。深さは約30.0cmを測り、浅いが箱形の断面形を示していた。また、上層よりローム塊と角礫が集中しており、底面は黒褐色粘質土が貼られていた。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：底面に桶底の痕跡は無かったが、桶付帯土坑として位置付けたい。周囲の同様の土坑を墓壙と位置付けており、本土坑もその一群に含めたい。出土遺物に恵まれないが、周辺土坑と同様に近世～近代に時期を求めたい。

61区27号土坑(第72・78図 PL.24・39)

位置：国道部分での調査である。61区O-1グリッドで、調査区51区北東部～61区南東部の中世～近世土坑群の北側に占地する。周辺は南東への緩斜面地形でほぼ平坦面が広がり、北に近接する61区26坑や南に51区23坑・24坑と一群をなす。

経過・重複：第1面目の調査である黒褐色土中で確認されている。土坑外縁にローム塊を含む暗褐色粘質土が巡るため、桶底の圧痕は検出出来なかったが、桶付帯土坑として位置付けた。

規模・様相：径約82.0×75.0cmの不整円形を平面形とし、深さは約41.0cmである。底面は平坦で、堀方壁もしっかりと掘り込む。壁粘土も直立気味に貼られており、底面もローム塊を含む暗褐色土が貼られる。埋土下層には中型の角礫が集中して出土している。

遺物：埋土中より土師器甕口縁部破片が出土しているが、これは流入である。また銅製品のおろし金も出土している。

所見：周辺の桶付帯土坑と同様に近世～近代に比定される墓壙として位置付けておきたい。

61区28号土坑(第72図 PL.24)

位置：国道部分での調査である。調査区51区北東部～61区南東部の中世～近世土坑群の北端に位置し、北半を調査区域外に延長する。周辺は南東への緩斜面地形でほ

ぼ平坦面が広がり、南西に近接する61区26坑、27坑や51区23坑・24坑などと一群をなす。61区N-1・2グリッドに位置する。

経過・重複：第1面目の調査である黒褐色土中で確認されている。土坑外縁にローム塊を含む暗褐色粘質土を環状に検出されたことから、桶付帯土坑と捉えた。また大型の角礫が埋土上層より土坑中央に集まっていた。

規模・様相：平面形は、おそらく径65cm程の不整円形を呈す。深さは約19.0cmでローム漸移層まで掘り込む。なお、桶底の圧痕は見られなかった。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：桶付帯土坑群の北端にあたる。時期も他の土坑と同様に近世～近代に比定したい。

61区29号土坑(第72・78図 PL.24・39)

位置：国道部分での調査である。61区N-1グリッドで、調査区51区北東部～61区南東部の中世～近世土坑群の東側に接する。周辺は南東への緩斜面地形でほぼ平坦面が広がる。西に51区23坑・24坑が、北に28坑が近接する。

経過・重複：第1面目の調査である黒褐色土中で確認されている。ローム塊を多く含む暗褐色粘質土を埋土とするが、明瞭な環状には把握できず、桶付帯土坑とは判断できなかった。

規模・様相：平面形は不整円形を呈し、規模は径約149.0×135.0cmを測る。深さは約62.0cmで、底面はローム漸移層にまで達していた。また、埋土下位より底面にかけて中・小型の角礫が多数集中して出土している。

遺物：角礫に混じり染付碗(1)が出土している。また、不明鉄製品(3)も見られるが、土坑の時期、性格を反映する例では無い。

所見：底面にかけての集石は墓壙の一樣相を示し、土坑形状も桶付帯土坑に近似するが確定できない。時期は出土遺物から、近世～近代の所産としたい。

61区30・31号土坑(第73・78図 PL.24・25・39)

位置：国道部分での調査である。調査区51区北東部～61区南東部の中世～近世土坑群の東端に占地し、西に30坑、東に31坑が連なって検出された。周辺は南東への緩斜面地形でほぼ平坦面が広がる。61区M-1・2グリッドに位置する。

経過・重複：調査第1面である黒褐色土中で確認した。30坑は小型の角礫や染付碗が上層で出土し、31坑は土坑外縁に褐色粘質土が環状に見られたため、桶付帯土坑として位置付けた。

規模・様相：30坑の平面形は不整形で、規模は約127.0×65.0×28.0cmを測る。北側が浅く、南側に土坑の主体を設ける。掘り込みはしっかりしているが、断面形状は椀状を示す。

31坑は径約77.0×67.0cmの不整形円形を呈し、深さは24.0cmを測る。箱形の断面形を示し、掘り込みもしっかりしていた。なお、桶底の圧痕は見られなかった。

遺物：30坑上層に染付椀が逆位で出土している。意図的な埋置とは捉え難い。また、不明鉄製品の出土も見る。

所見：30坑は上層に見る集石の様相から、墓壇の可能性もあるが確定的ではない。また31坑は桶付帯土坑であり、墓壇の可能性を求めておきたい。時期は、出土遺物と埋土の様相から、両土坑とも近世～近代と考えた。

61区32号土坑(第73図 PL.25)

位置：国道部分での調査である。調査区61区北東端で調査した。61区M-2グリッドに位置する。比較的傾斜の強い南斜面に選地していた。調査区51区北東部～61区南東部の中世～近世土坑群からは、東南へやや距離を置く。

経過・重複：調査第1面目の調査であるが、斜面地形のため既にローム漸移層が露出しており黄褐色ローム面を確認面とした。土坑外縁を黄褐色粘質土が巡り、大型の角礫の出土が見られたため、桶付帯土坑として位置付けられた。中世～近世遺構との重複は無いが、縄文時代に比定される6号住などを切る。

規模・様相：径約103.0×101.0cmの不整形円形を平面形とする。深さは約11.0cmで浅い。底面も黄褐色粘土が貼られ、桶底圧痕も一部で観察されたが、資料化、図化には至っていない。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：桶付帯土坑として位置付けられ、おそらく上層が大きく攪乱され、下端部だけの検出と捉えられる。角礫を集中し、周辺の土坑の様相から墓壇としての位置付けも可能である。時期も、周辺土坑の様相と埋土の特徴から近世～近代としたい。

61区34号土坑(第73図 PL.25)

位置：国道部分の調査である。61区L-1グリッドで、調査区51区北東部～61区南東部の中世～近世土坑群とは東に距離を置き、35坑や36坑と近接する。

経過・重複：ローム漸移層が露出する箇所であり暗褐色土を確認面とした。単独の検出である。

規模・様相：平面形は不整形円形を呈し、平面規模は径約119.0×109.0cmである。深さは12.0cmを測り浅い。土坑外縁を黄褐色粘質土が環状に巡ることから、桶付帯土坑として位置付けられた。おそらく下端部の検出であろう。桶底の圧痕は検出できなかった。

遺物：遺物の出土は見られなかった。

所見：桶付帯土坑と思われるが、周辺の35坑や36坑との関連からも墓壇としての位置付けも可能である。時期は同様に近世～近代としたい。

61区35号土坑(第73図 PL.25)

位置：国道部分での調査である。51区と61区に跨がり確認された。51区L・M-25～61区L・M-1に位置する。51区北東部～61区南東部の中世～近世土坑群からは東に距離を置き、北東の36坑と近接する。周辺は南への斜面地形がやや強く、遺構の遺存度が悪い地点である。経過・重複：ローム漸移層が露出し、暗褐色土を確認面とした。中世～近世遺構との重複は無く、縄文時代に比定される61区14住などを切る。

規模・様相：平面形は径約111.0×104.0cmの不整形円形を呈す。深さは約6.0cmを測り、浅い。埋土に粘質土を堆積することから、桶付帯土坑の下端部の可能性が高い。

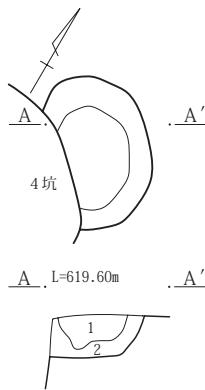
遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：底面の様相や土坑平面規模から、桶付帯土坑の可能性が高い。墓壇としては確定性に乏しいが、周辺土坑との関連から一群の土坑として考えておきたい。時期も同様に近世～近代と考えた。

61区36号土坑(第73図 PL.25)

位置：国道部分での調査である。北東部分にあたり、61区L-1に位置する。周辺は南東への緩斜面地形でほぼ平坦面が広がり、51区北東部～61区南東部の中世～近世土坑群からは東に距離を置き、南の34坑や南西の35坑と近接する。

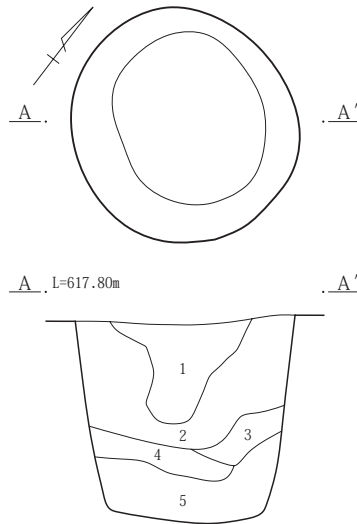
62区7号土坑



62区7号土坑土層

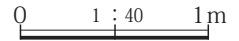
- 1 黒褐色土 ローム粒、黄色粒を含む
- 2 暗褐色土 ローム粒、黄色粒を少量含む

62区12号土坑



62区12号土坑土層

- 1 黒褐色土 黄色粒を微量含む
- 2 黒褐色土 黄色粒、炭化物を少量含む
- 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む
- 4 黒褐色土 ローム塊を少量含む
- 5 黒褐色土 ローム粒を微量含む



第74図 土坑 62区

経過・重複：北半は黒褐色土中で確認したが、南半は傾斜地形が強く暗褐色土での確認になった。遺存度は悪く、全容は北半の調査に止まっている。土坑外縁の環状粘土帯は確認できなかったが、底面に黄褐色粘土を貼る。重複遺構は無く単独の検出である。

規模・様相：平面形は不整形円形を呈す。平面規模は径約94.0×90.0cm、深さは約34.0cmを測る。箱形の断面形を示し、底面に桶底圧痕を検出した。

遺物：出土遺物は無い。

所見：桶付帯土坑である。出土遺物も無く、時期、性格を特定できないが、時期は埋土の様相から、近世～近代と考えた。

所見：出土遺物も無く、形状からも詳細な時期、性格を特定できない。縄文時代遺構を切る新旧関係と埋土の特徴から、中世以降の所産と考えた。

61区67号土坑(第73図 PL.25)

位置：町道部分の調査である。61区中央南寄りの61区S-6グリッドに位置する。周辺は南への緩斜面地形が広がり、ほぼ平坦地形といえる。近接する中世・近世遺構は無く、縄文時代遺構である61区21住や22住などが密集する地点である。

経過・重複：ローム漸移層上位の暗褐色土で確認した。縄文時代遺構である61区1号掘立柱建物跡のP4を切って調査されている。

規模・様相：長軸を北西にむけた不整形円形を呈す。平面規模は約77.0×60.0cmで、深さは約48.0cmを測る。

遺物：遺物の出土は見られなかった。

61区71号土坑(第73図 PL.25)

位置：町道部分の調査区61区中央部分で調査された。61区T-7グリッドに位置する。周辺は南への緩斜面地形でほぼ平坦面が広がる。縄文時代遺構が密集する地点である。

経過・重複：ローム漸移層上位の暗褐色土を確認面とする。縄文時代住居跡である34号住床面を切る状態で検出されている。

規模・様相：平面形は径約90.0×79.0cmの不整形円形を呈す。深さは約62.0cmで、黄褐色ロームをしっかりと掘り込み箱形の断面形を示す。

遺物：出土遺物は見られない。

所見：ここでは時期不明の土坑として位置付けておくと、柱穴状の土坑である。周辺には縄文時代の掘立柱建物跡があるため、あるいは縄文時代の所産かもしれない。

61区72号土坑(第73図 PL.25)

位置：町道部分の調査区61区中央部やや南西寄りで調査された。61区S-6・7グリッドに位置する。周辺は南への緩斜面地形でほぼ平坦面が広がる。中世～近世遺構としては、61区2号焼土が上層で検出されている。ま

た、縄文時代遺構が密集する地点である。

経過・重複：ローム漸移層上位の暗褐色土で確認された。層位的には2号焼土が上層の遺構となる。また縄文時代住居跡である33号住床面を切る状態で調査されている。

規模・様相：小型の不整楕円形を呈す。平面規模は約84.0×65.0cmで、深さは約67.0cmを測る。黄褐色ロームを掘り込み、良好な箱形の断面形を示す。

遺物：出土遺物は無い。

所見：時期、性格を不明とするが、71坑と同様に柱穴状の土坑である。土層に柱痕が確認され、さらに周辺には縄文時代の61区2号掘立柱建物跡が立地する。関連する柱穴の可能性もある。

62区7号土坑(第74図 PL.26)

位置：調査区62区中央北端の62区D-7グリッドに位置する。4坑と重複して調査されたが、新旧は不明である。周辺は南東への斜面地形で、遺構密度は低い。

経過・重複：ローム漸移層の暗褐色土で確認した。重複する4坑は既報告済みであるが、深く、本土坑を切るような様相となっているが、新旧は逆である。

相互の時期は不明であり、確定性に乏しい。

規模・様相：平面形は長軸を北西に向けた小型不整楕円形を呈す。平面規模は軸長約81.0cmで、深さは約22.0cmを測る。底面はAs-YPk層に達しており、そのため不安定な印象が強い。

遺物：出土遺物は見られない。

所見：不整形で遺物の出土も見られないため、時期、性格などは不明である。4坑に切られる表現だが、新旧は逆である。埋土の様相からは近世以降と考えた。

62区12号土坑(第74図 PL.26)

位置：調査区62区東側で調査された。62区B-5グリッドに位置する。周辺は南への緩斜面地形でほぼ平坦面が広がる。近接する中世～近世遺構は見られず、弥生時代中期に比定した52区1号住が南に見られる。また、縄文時代の遺構が密集する地域で5号住などが同時に調査されている。

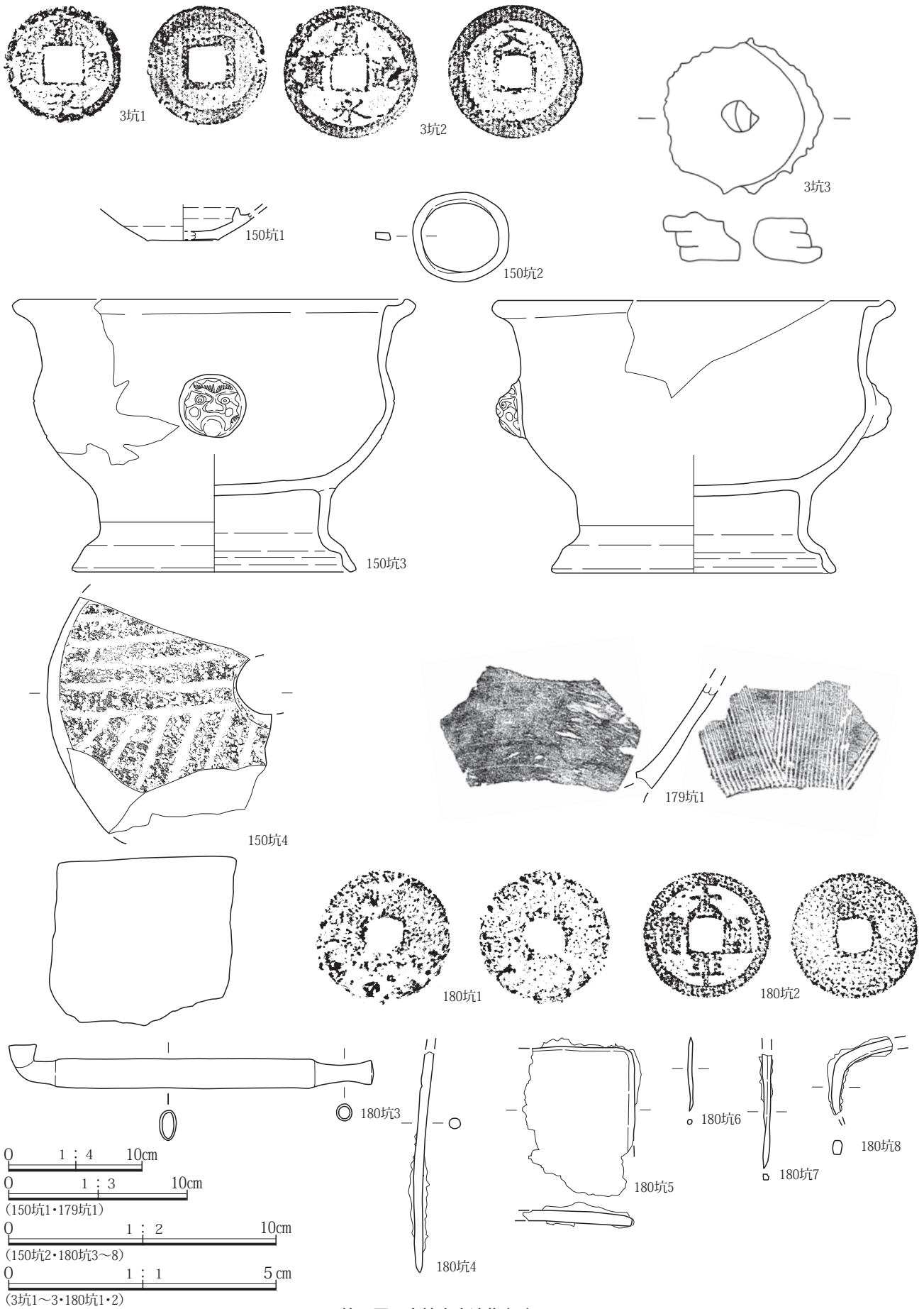
経過・重複：ローム漸移層上位の暗褐色土中で確認した。黒褐色土を埋土とし、柱痕状の土層を観察している。縄文時代住居跡である62区5住P1を切る。また、62区1号

掘立柱建物跡に近接している。

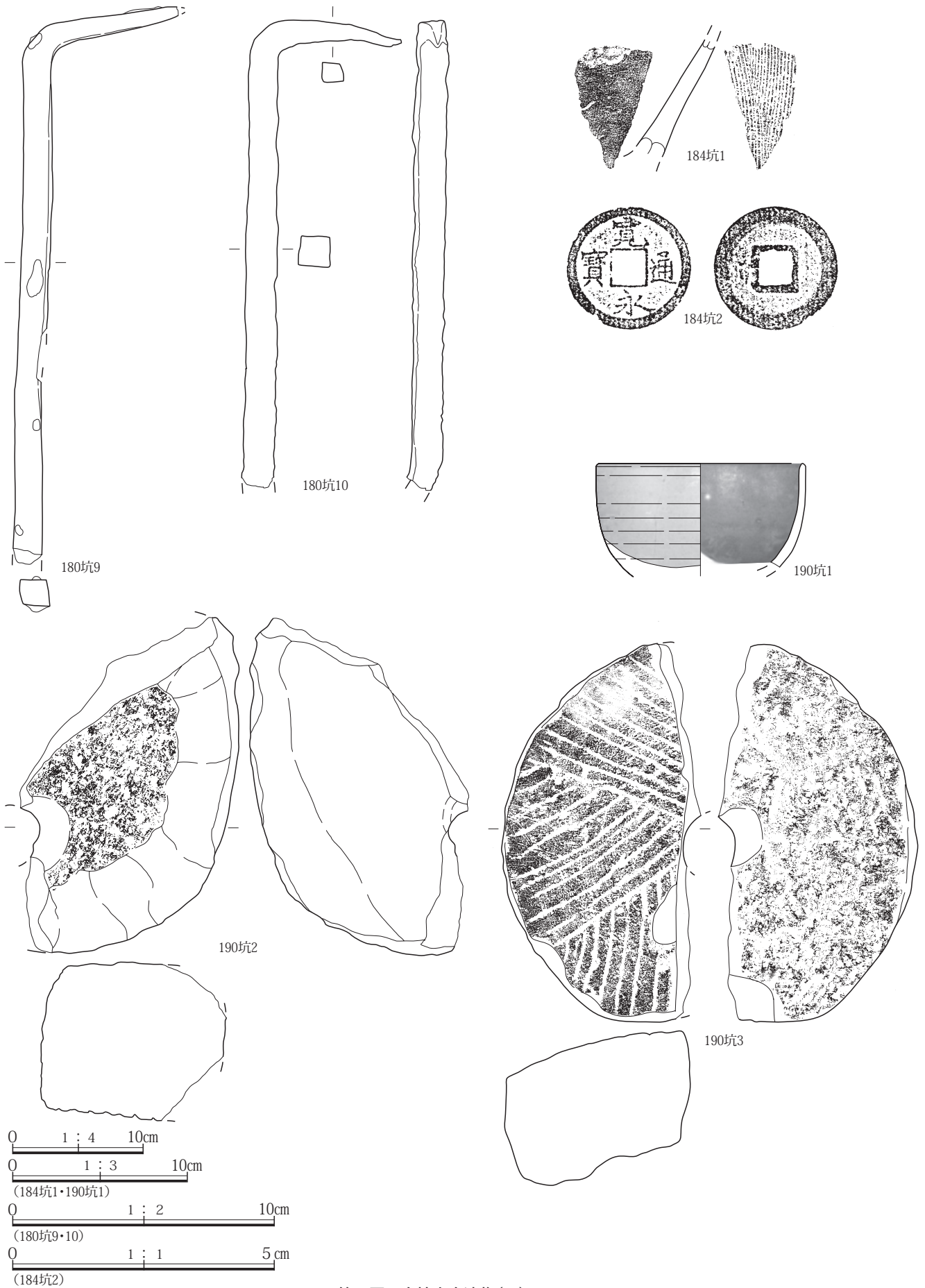
規模・様相：平面形は不整円形を呈す。平面規模は約125.0×118.0cmで、深さは107.0cmを測る。黄褐色ロームを大きく掘り込み、箱形の良好な断面形を示す。

遺物：出土遺物は無い。

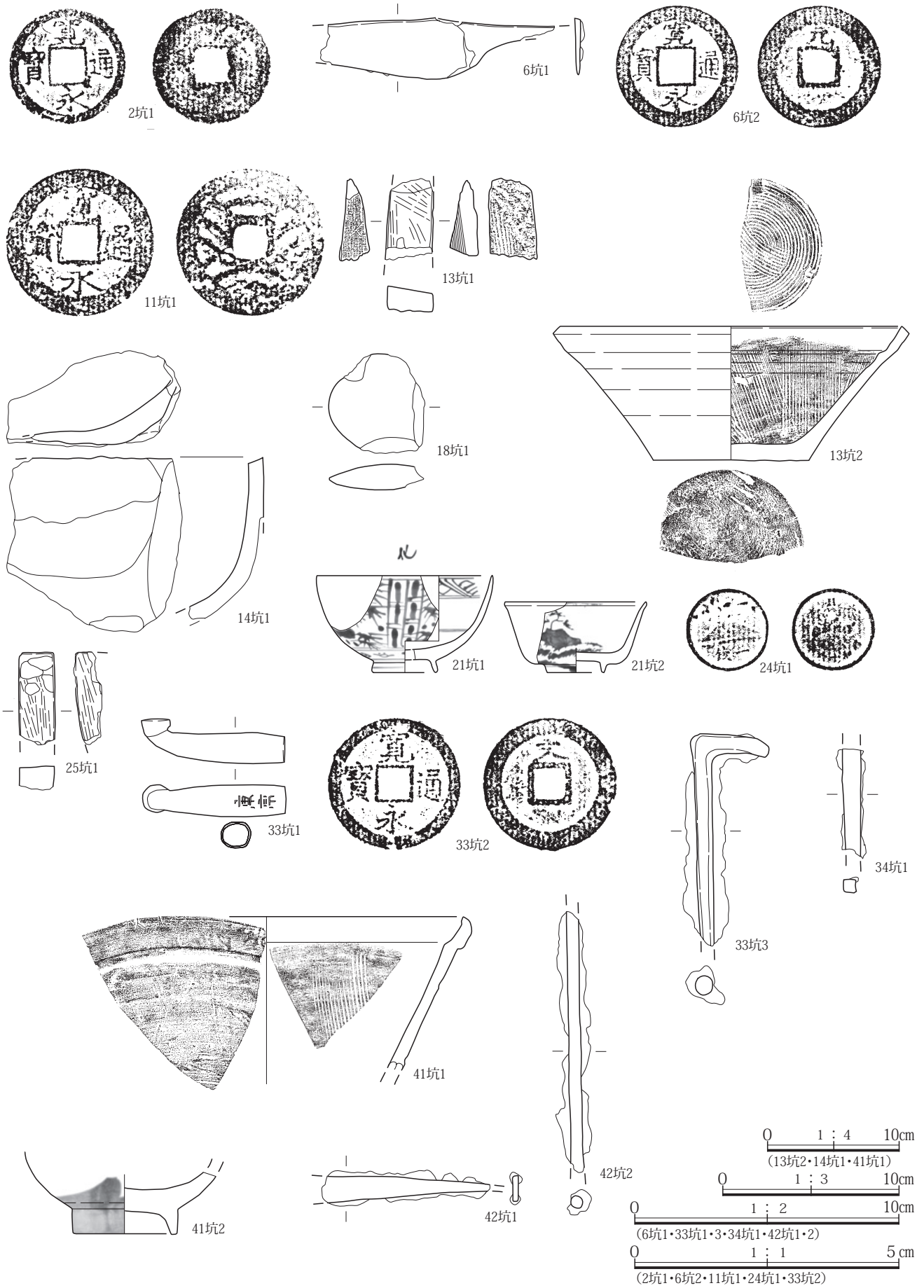
所見：時期、性格を不明とするが、土層の観察から柱穴状の土坑である。土層に柱痕が確認され、さらに周辺には縄文時代の62区1号掘立柱建物跡があるため、あるいは縄文時代の可能性もある。



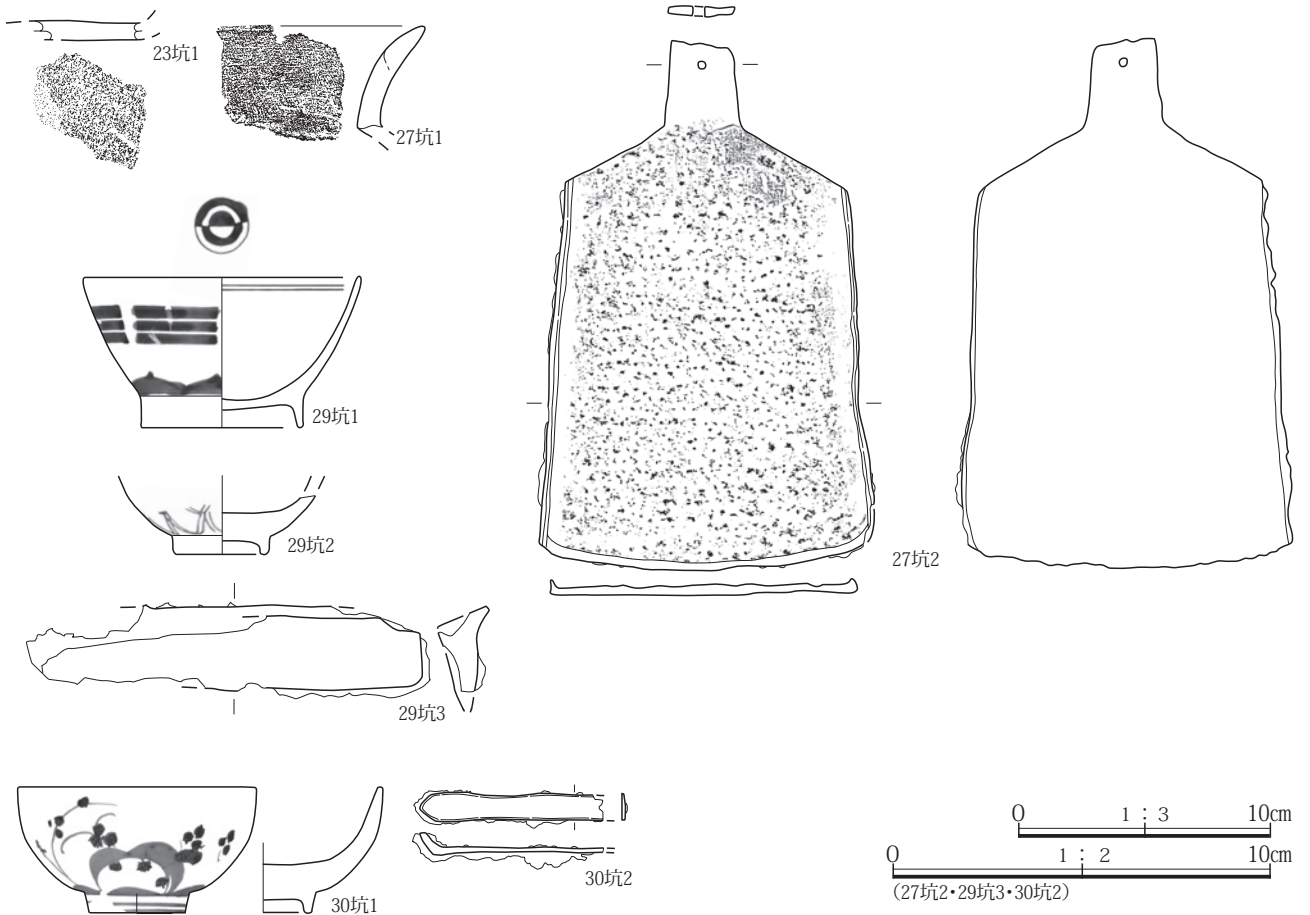
第75図 土坑出土遺物(1) 51区



第76図 土坑出土遺物(2) 51区



第77図 土坑出土遺物(3) 52区



第78図 土坑出土遺物(4) 61区



52区1～3号掘立柱建物跡周辺の調査風景(平成20年10月、調査着手時)

9. 遺構外出土遺物(中世以降)(第79～85図 PL.39～42)

本項で扱う中世～近世(近代)以降に比定される遺構外出土遺物は、多くが遺構確認時に出土した例である。その他に、稀に縄文時代の遺構から出土した遺物もあるが、これは遺構番号の誤認などの調査の手違いから生じた事例である。ご容赦願いたい。記載順としては、各区の概略を述べ、全体観を把握していきたい。

51区(79～83図)：調査区としては最も広い区画で、南東への傾斜も緩やかなため、縄文時代の遺構・遺物も数多く集中する。中世～近世遺構としては、中央部分に1号礎石建物(1号掘立柱建物)があり、北東部に土坑群、52区と跨がって石垣遺構や道状遺構などが調査されている。遺構外出土遺物も、比較的豊富に出土している。陶器として甕肩部破片(1)、すり鉢(2～4)や連鉢口縁部破片(5)、灯火皿(6)などを見る。在地土器では内耳破片や鉢、手捏ね土器片(7～10)、火鉢(11)が出土する。染付肥前皿(12)は南東部で出土している。特に近接する遺構は無いが、2号石垣や51区18号焼土、52号焼土などでも出土例があり、当地区に浸透した器種と位置付けられよう。また、時代は下るが染付段皿蓋(15)も肥前系である。近代の所産であろうか。

石製品として、砥石とした16は硯の転用品か。砥石は砥沢石製の17・18と珪質準片岩の19・20、流紋岩製の21が挙げられる。19は仕上げ砥であろうか。硯は破片資料で22と23が挙げられるが全容は判然としない。不明石製品としての24は多孔質で体部に横位溝が走る。ヒデ鉢の再利用品か。また25は扁平な円礫中央部に炭化物が付着する例である。隣接する林中原Ⅰ遺跡や石川原遺跡でも類例が出土している。詳細な性格は特定されていないが、灯火台とする見解もあり、検討を要する。石臼は3点を図示した。いずれも粉ひき臼で上白片1点(28)、下白片2点(26・27)である。

鉄製品としては、刀子と思われる2点(29・30)、釘3点(33～35)、口金(36)、座金(37)、不明鉄製品(31・32)が挙げられる。銅製品は煙管雁首(38～40)、吸口(41～43)、切羽(45)、かんざし(44)が出土している。44のかんざしは上端が耳搔きになっている。

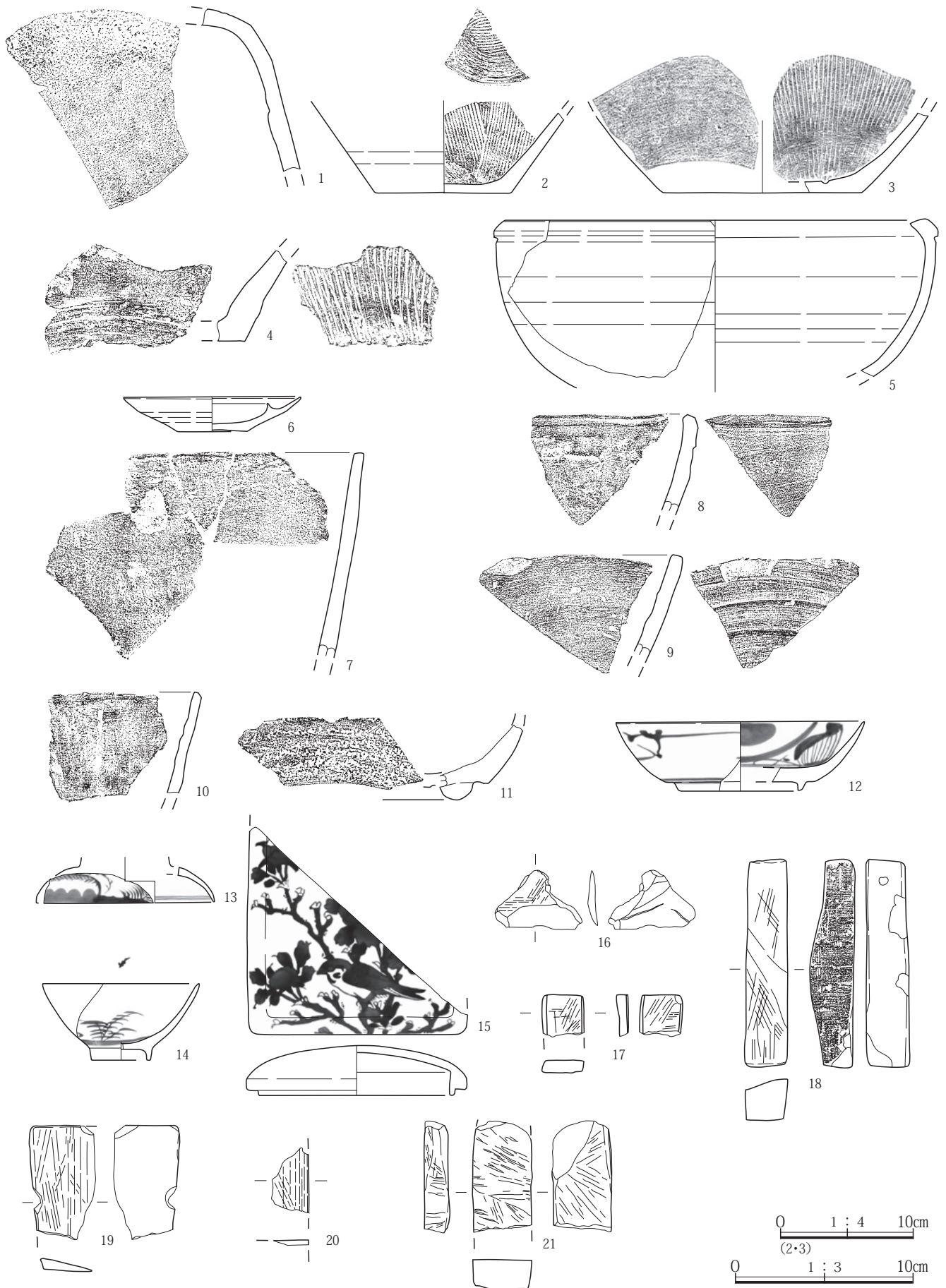
貨銭の出土は多い。中世に比定される「永楽通寶」(46)

及び近世の所産である「古寛永通寶」と「新寛永通寶」が見られる。出土地点の偏りを見ると、51区S-16グリッド出土例が17点(47～62)ある。すべて「古寛永通寶」で何等かの関連性が想定されるが、当該グリッドに相当する遺構は85号焼土で小規模な焼土遺構のみである。あるいは西や東の調査区域外に墓塚などの遺構が存在するのかもしれない。次にL-25グリッドでは7点の「寛通寶」が出土する(64・65-1～6)。「古寛永」と「新寛永」が混在するが、こちらもグリッドに該当する遺構はない。ただ、南東のK・L-24・25グリッドに火鉢や石臼片を出土した大型不整形土坑の150坑や190坑が位置している。さらに、桶付帯土坑とした34～36坑が北西に近接するように、近世～近代遺構が密に分布する地点である。墓域としての位置付けも可能であろう。さらにX-16グリッドでは3点の「新寛永通寶」(66～68)、Y-16グリッドでは2点の「古・新寛永通寶」(69・70)が出土する。該当する遺構は特定できないが、周辺には10号集石や52号焼土、178～180坑などいずれも近世～近代に時期が求められ、墓塚としての性格付けが可能である。周辺を墓域として位置付けられよう。

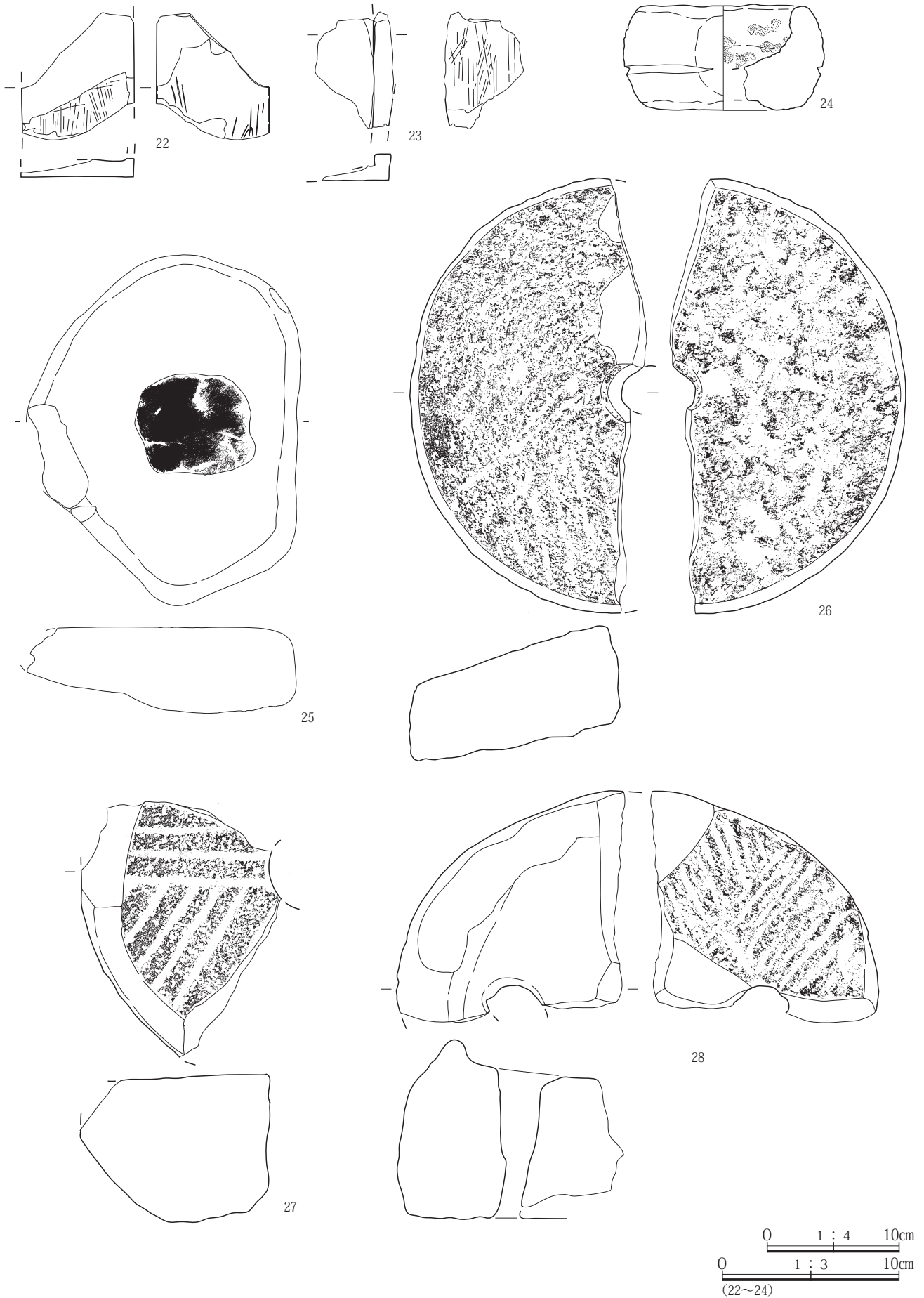
52区(83・84図)：51区と同様に、中世～近世遺構が集まる調査区である。51区と比して、中世遺物は見られず、近世～近代に比定される。在地土器の火鉢破片2点(75・76)は同一個体で、52区B-14グリッドから出土しているが該当する遺構は無い。陶磁器類として、陶器碗(77)や灯火皿(78)を見るが他は磁器類である。肥前系が多く、波佐見系(79～81)が混じる。出土地点ではA-17グリッド出土に81～85が集まる。1・2号石垣や52区1号井戸周辺となる。その他の肥前系では86や87の碗が見られる。88の湯飲み碗は近代～現代の所産である。土製品では泥面子(89)がB-17グリッドで出土する。これも1・2号石垣や52区1号井戸周辺である。

石製品は2点の砥石を図示した(90・91)。2点とも1・2号石垣や52区1号井戸の南側で出土しており、生活具としての位置付けが可能であろう。90が砂岩製、91が砥沢石製である。

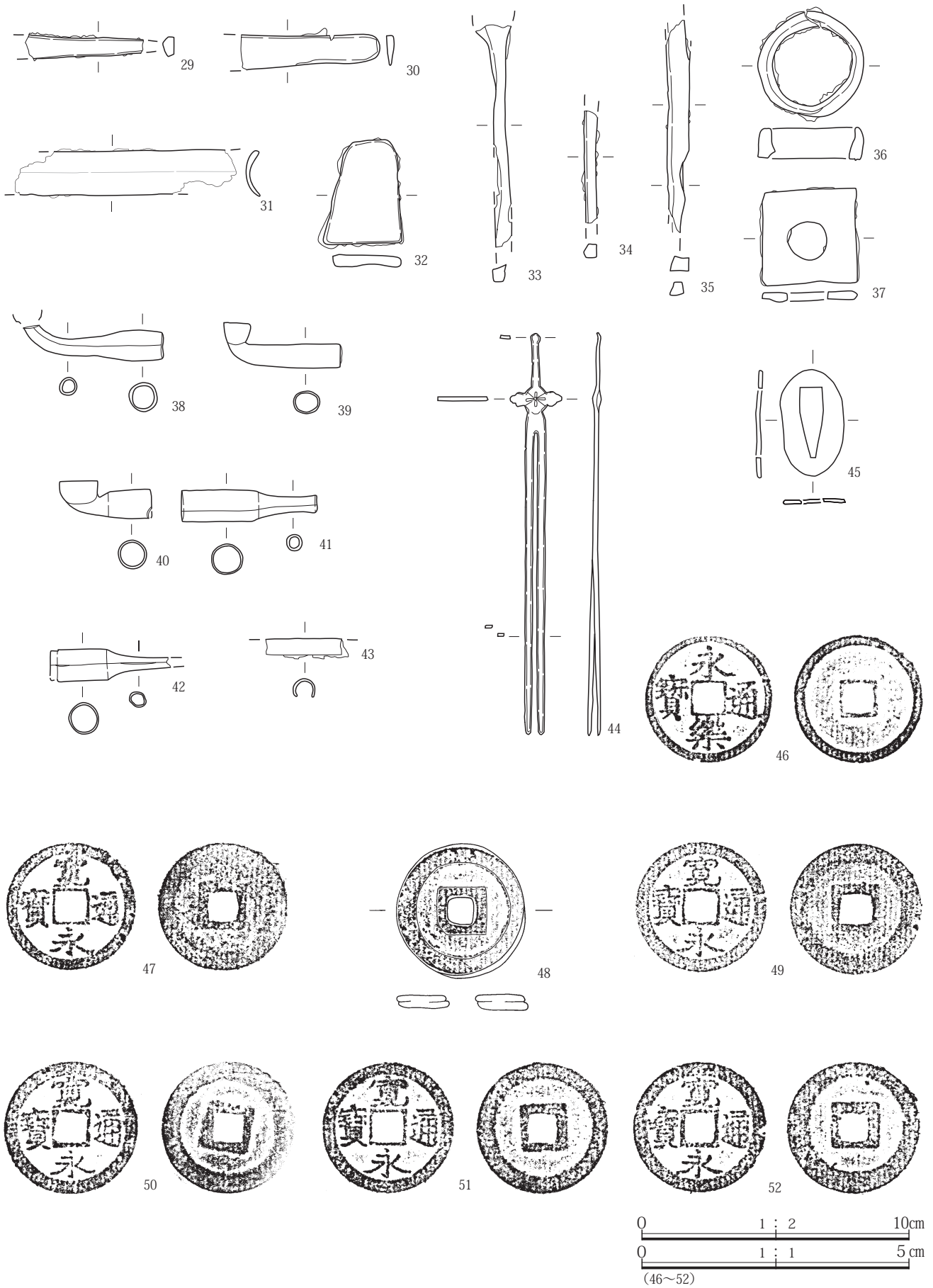
金属製品としては、煙管雁首(92)、吸口(93～95)がある。また小型鎌(96)も併せて1・2号石垣や52区1号井戸の南側の出土である。97は蝶番の一部であろうか。また98も火打金と思われるが、出土地点が不詳である。99



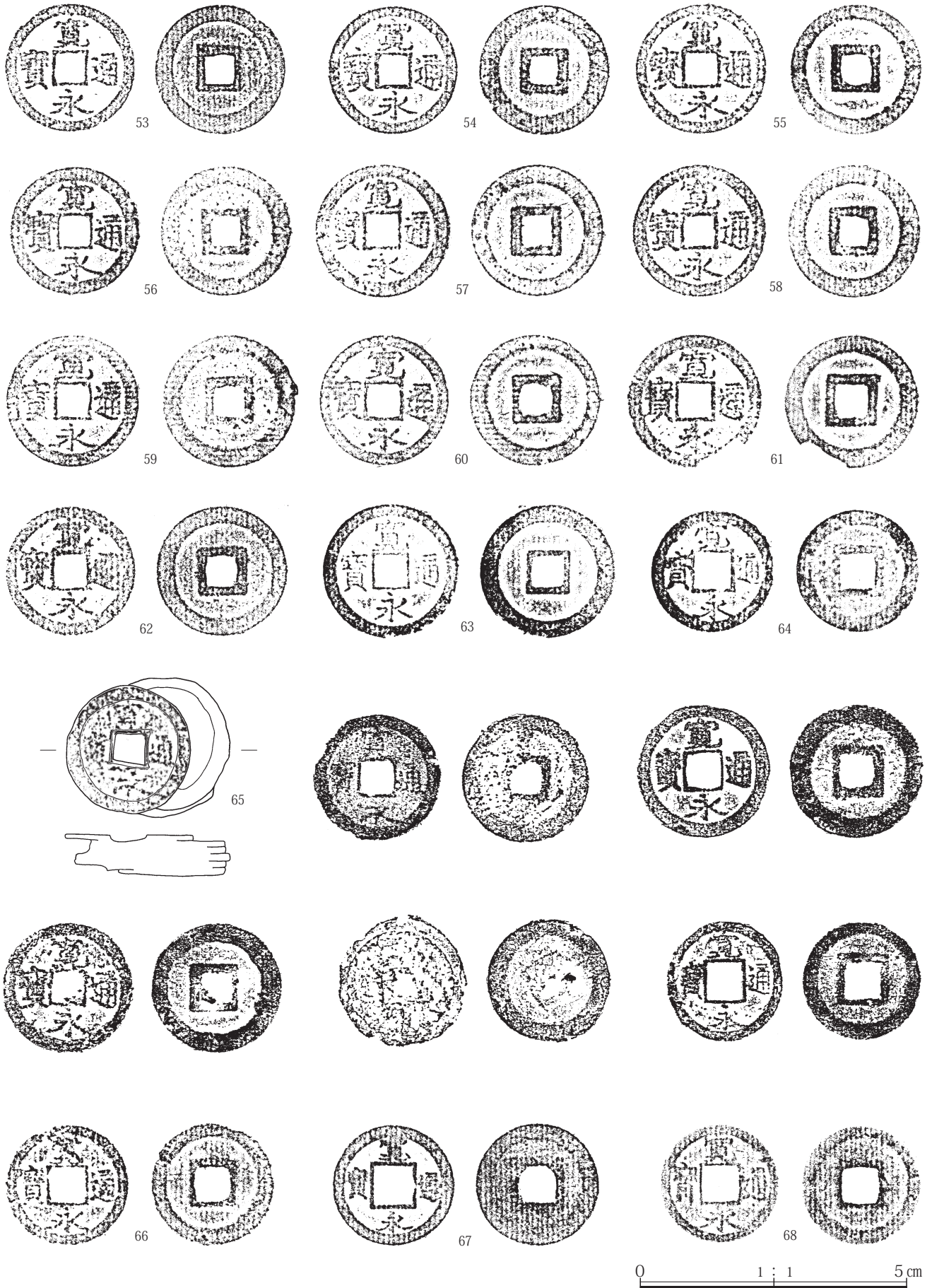
第79図 遺構外出土遺物(1) 51区



第80図 遺構外出土遺物(2) 51区



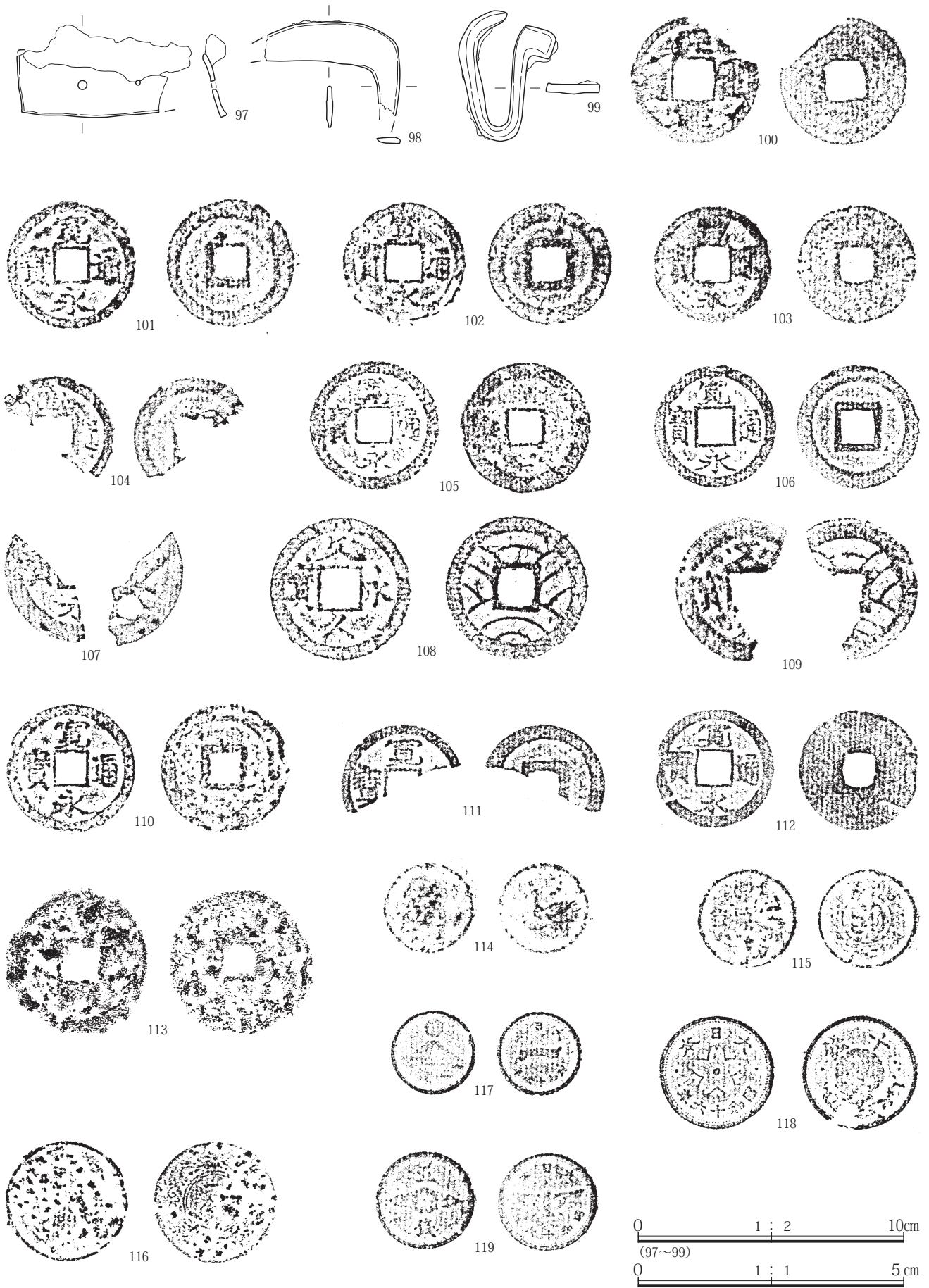
第81図 遺構外出土遺物(3) 51区



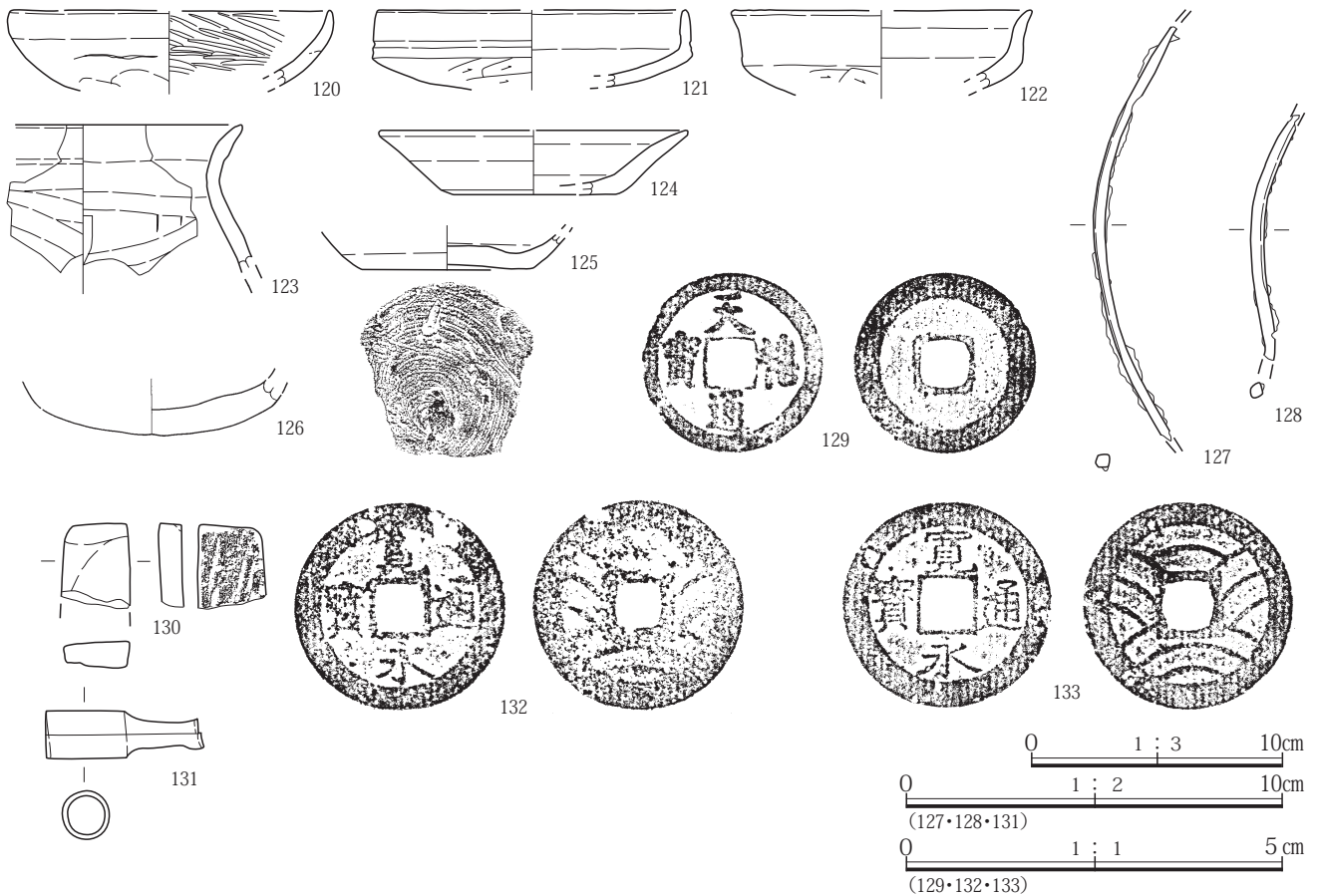
第82図 遺構外出土遺物(4) 51区



第83図 遺構外出土遺物(5) 51区・52区



第84図 遺構外出土遺物(6) 52区



第85図 遺構外出土遺物(7) 61区・62区

は不明鉄製品である。

貨銭は20点を図示したが、6点は近代～現代の所産である。中世に比定される北宋銭の「天聖元寶」(100)を見るが、他は「寛永通寶」と「文久永寶」である。出土地点としては52区C-16グリッドに5点(100～104)が集まる。残念ながら該当する近世遺構が見られないが、調査区域が迫る箇所でもあり、区域外に墓壙などを求めたい。その他では、A・B-15～17グリッドで出土する5点(105～109)は1・2号石垣や52区1号井戸の南側にあたり、陶磁器や石製品など生活具と共に出土しているが、南側や南東には18・19号焼土や178～190坑などが占地することからも、貨銭の出土は墓域からの影響もあるだろう。その他では110、111の「古寛永通寶」や135の「新寛永通寶」がある。さらにE～G-11～16グリッドからは前述の近代～現代銭貨が出土する(114～119)。近世～近代土坑が集まる地点であるが24坑のように「富士1銭アルミ貨」を出土する遺構もあることから、周辺に近世～近・現代にかけての継続的な居住が想定される。

61区・62区(85図)：両調査区とも中世～近世遺構は極めて少なく、特に62区は焼土1基と土坑2基が検出出来た

のみである。出土遺物も少ないため、ここでは一括して報告する。

中世遺物ではないが、土師器・須恵器7点が61区で出土している。U-9及びQ～S-8・9グリッドで該当する遺構はない。本遺跡においても、当該期の遺構は検出されておらず、おそらく北側や東側への調査区域外に存在する該期遺構からの流入と思われる。

石製品は62区B-4グリッドから砥沢石製の砥石(130)が出土している。該当する中世～近世遺構は無い。

金属製品としては、針金と思われる鉄製品(127・128)が61区T-9グリッドから出土する。61区8号焼土が該当する遺構だが、時期・性格不明の焼土であり、確定性に乏しい。煙管吸口が62区で出土している。試掘時の出土で詳細な出土地点は不明である。

貨銭は3点を図示した。北宋銭である「天禧通寶」(129)は61区Y-5グリッド出土である。該当遺構は無い。「新寛永通寶」(132・133)は、2点とも62区I-4グリッド出土ながら、該当する遺構は無い。これらも南の調査区域外に該期遺構を想定しておきたい。

第5節 補遺編(縄文土器)

1. 遺構出土遺物

ここでは、前々冊である当事業団調査報告書第617集『林中原Ⅱ遺跡(1)』において報告済みの遺構出土遺物を新たに追加する。51区と52区で調査された遺構出土遺物及び遺構外出土遺物であるが、61区と62区の出土遺物整理の際に追加されたものである。

1は、中期中葉末の深鉢突起片である。51区28号住出土で、後葉に比定される住居跡として報告されている。本資料は流入と考えられるが、良好な中葉末の資料として掲載する。

2～4は51区1号集石遺構出土の後期前葉の深鉢片である。1号集石は、51区1号列石に付帯する集石遺構で、1号列石Ⅱ群として位置付けられている。出土土器は深鉢片や凹石や石鏃で、中期後葉と後期前葉の資料が混在している。今回3点のみの追加ではあるが、後期前葉資料であり、前報告からさらに、時期特定資料として後期前葉以降として判断できよう。同時に1号列石遺構の追加資料として、5～11を掲載する。堀之内1式として7・9～11が相当するが、堀之内2式(5)、加曾利B1式(6)が新相を示す。8は三十稲場式であろう。前冊では、1号列石の出土遺物は皆無であり、時期は1号集石出土土器を参考にした経緯がある。今回の追加資料で1号列石の時間幅がより明確に提示されることになり、後期前葉～中葉と位置付けられよう。

51区2号列石出土土器として12～17を追加する。報告書では中期後葉の「郷土式」が掲載され、2号列石の時期は確認層位である黒褐色土層に求め、後期としていたが、確定性に乏しい説明だった。今回の追加資料は中期後葉の加曾利EⅢ式(12)があるものの、他は称名寺式(13～16)、堀之内2式(17)が提示できた。後期資料の比重が増え、2号列石の時期幅も後期初頭～後期前葉に求められる。

52区14号住居跡出土資料として不明土製品(18)を追加する。土偶胴部下半～脚部上半であろうか、中空になる兆しを見せる。14号住は中期後葉の所産であり、出土層位は埋土である。要検討資料である。

2. 遺構外出土遺物

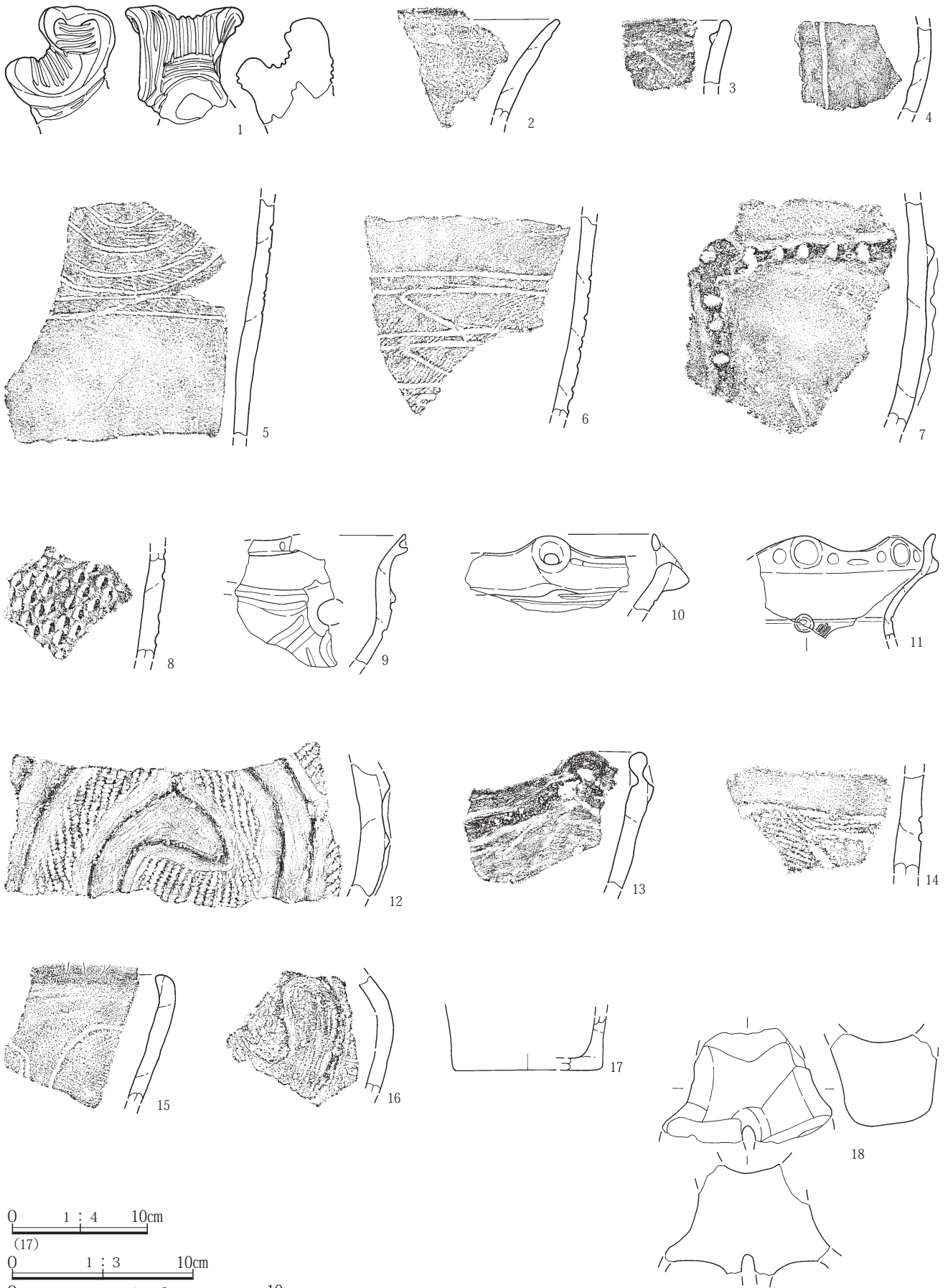
51区遺構外出土資料を追加する。出土遺物は大量であり、前々冊でも個体や大破片を中心に75点の土器資料を網羅している。ここでは、前々冊では詳細な掲載ができなかった時期の土器などを中心に取りあげた。

本遺跡では草創期・早期資料は出土しておらず、前期初頭段階より居住痕跡が認められる。前々冊では、51区24号住、52区5号住、51区220坑を前期初頭の遺構として報告しているように、追加資料としての該期出土土器も多く、1～16を図示した。胎土に繊維を多く含む一群である。当地域の概期土器は、塚田式や中道式といった、長野地域の土器群も組成に加わるとされる。ここでは、花積下層式に相当すると、検討を要しよう。出土位置を概観すると、圧倒的に51区出土例が多く、調査区南側へ偏る傾向が見られる。調査区域外の台地縁辺にかけての分布であろうか。

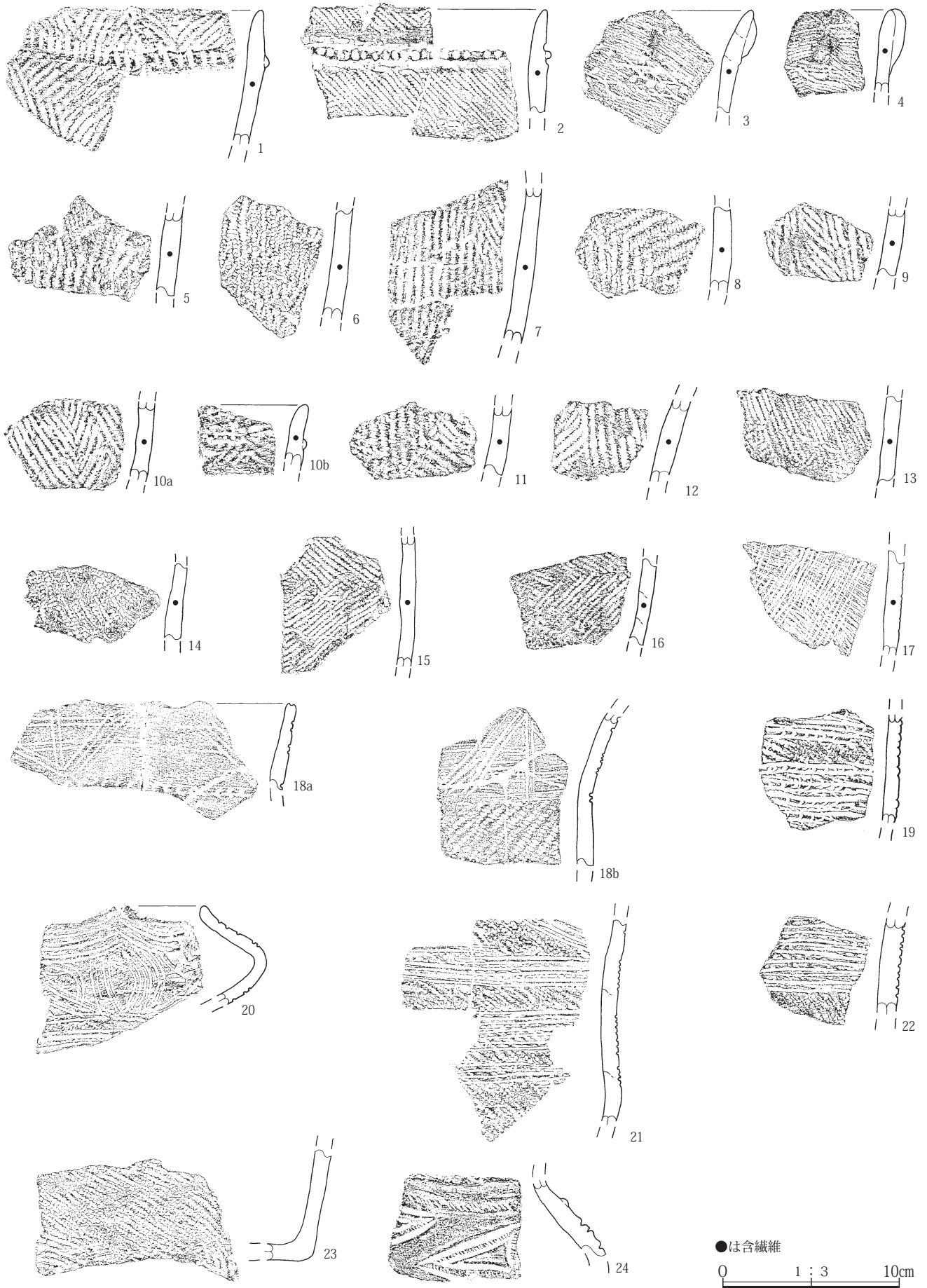
17は前期中葉の黒浜式に並行する土器と思われる。胎土に繊維を含む。量的には少ない段階だが、前葉段階の関山式期の住居跡2軒が西接する林中原Ⅰ遺跡で調査され、中葉段階の土器片も少量ながら前々冊で報告されていることから、調査区域外への延長が予想されよう。

18は諸磯a式、19～62までは諸磯b式土器を集めた。胎土に繊維を含まない前期後葉段階の資料である。この時期の遺構は少なく51区で3基の土坑が報告されて居るのみである。しかしながら、遺構外出土土器量は多く、近接した調査区域外にまとまった集落域の存在が示唆されている。特に諸磯b式の浮線文を施した土器が多く見られた。おそらく、時期的な要因と捉えられるが、当地域の前期後葉の一様相としても位置付けられよう。出土位置の傾向をみると、51区・52区ともに広く出土しているが、前期初頭段階と同様に、調査区南側へ偏る傾向が見られた。特に52区B・C-12～14グリッド周辺は浮線文が集中していた。該当遺構は無いが、やはり調査区域外の台地南側縁辺への集落延長が想定されよう。

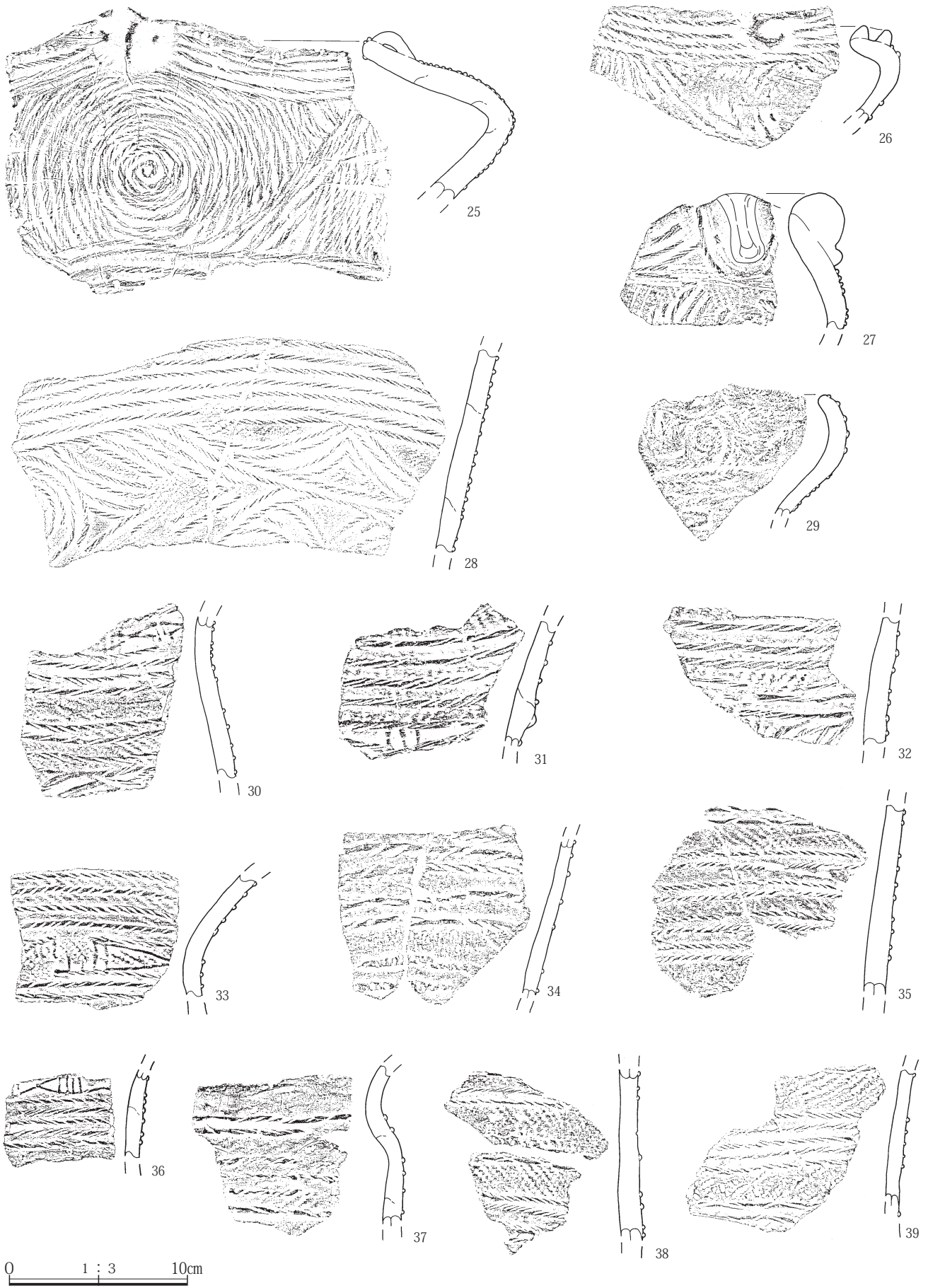
63は前期末葉段階の羽状縄文を施した土器であろう。64は中期初頭の五領ヶ台式土器と判断した。中期初頭段階の遺構は、土坑資料を中心に前々冊でも報告されており、補填資料の一部となろう。65～67は中期中葉段階の資料で、こちらも前々冊で良好な土坑資料が掲載されて



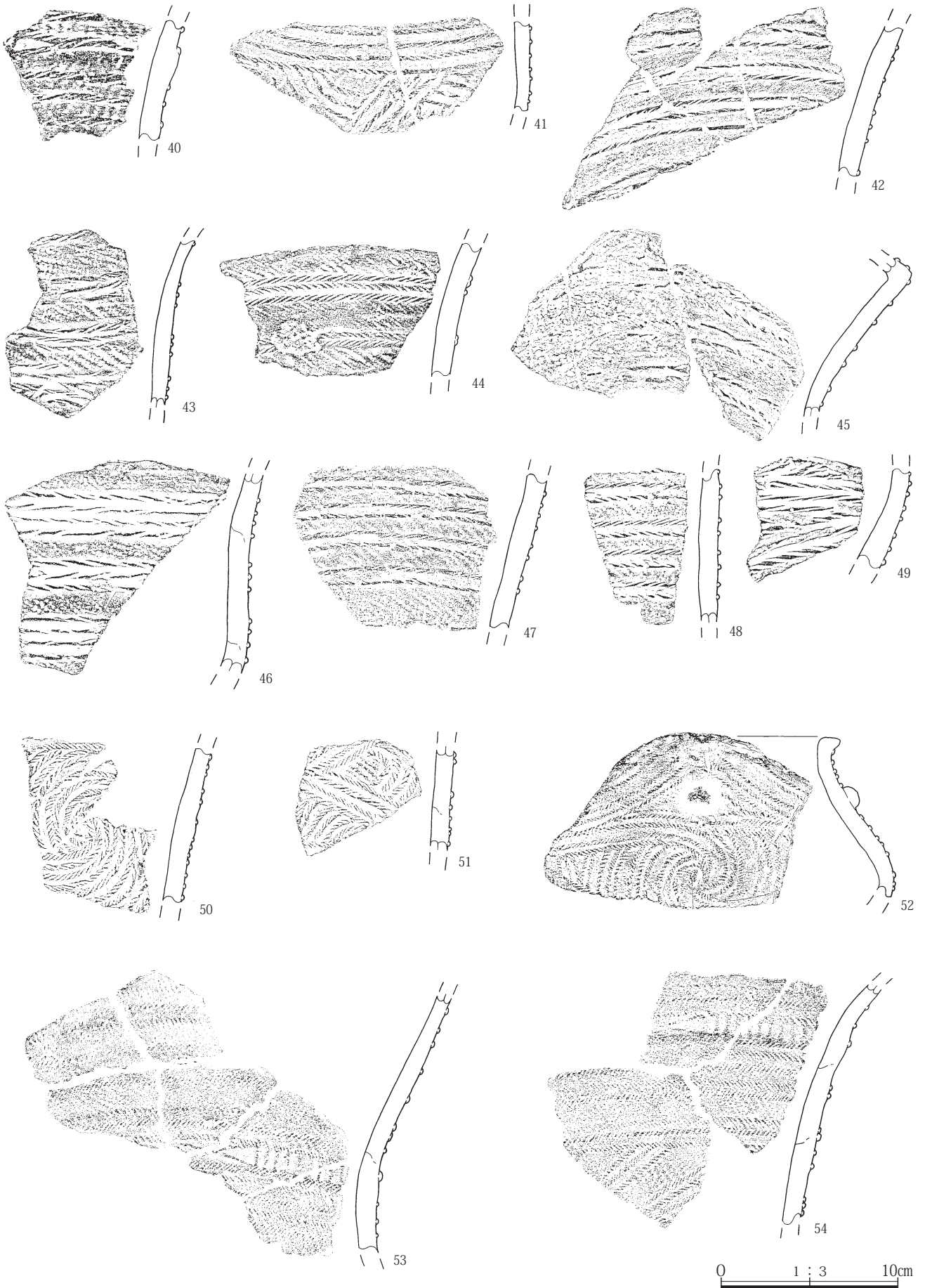
第86図 51区・52区遺構出土遺物追加資料



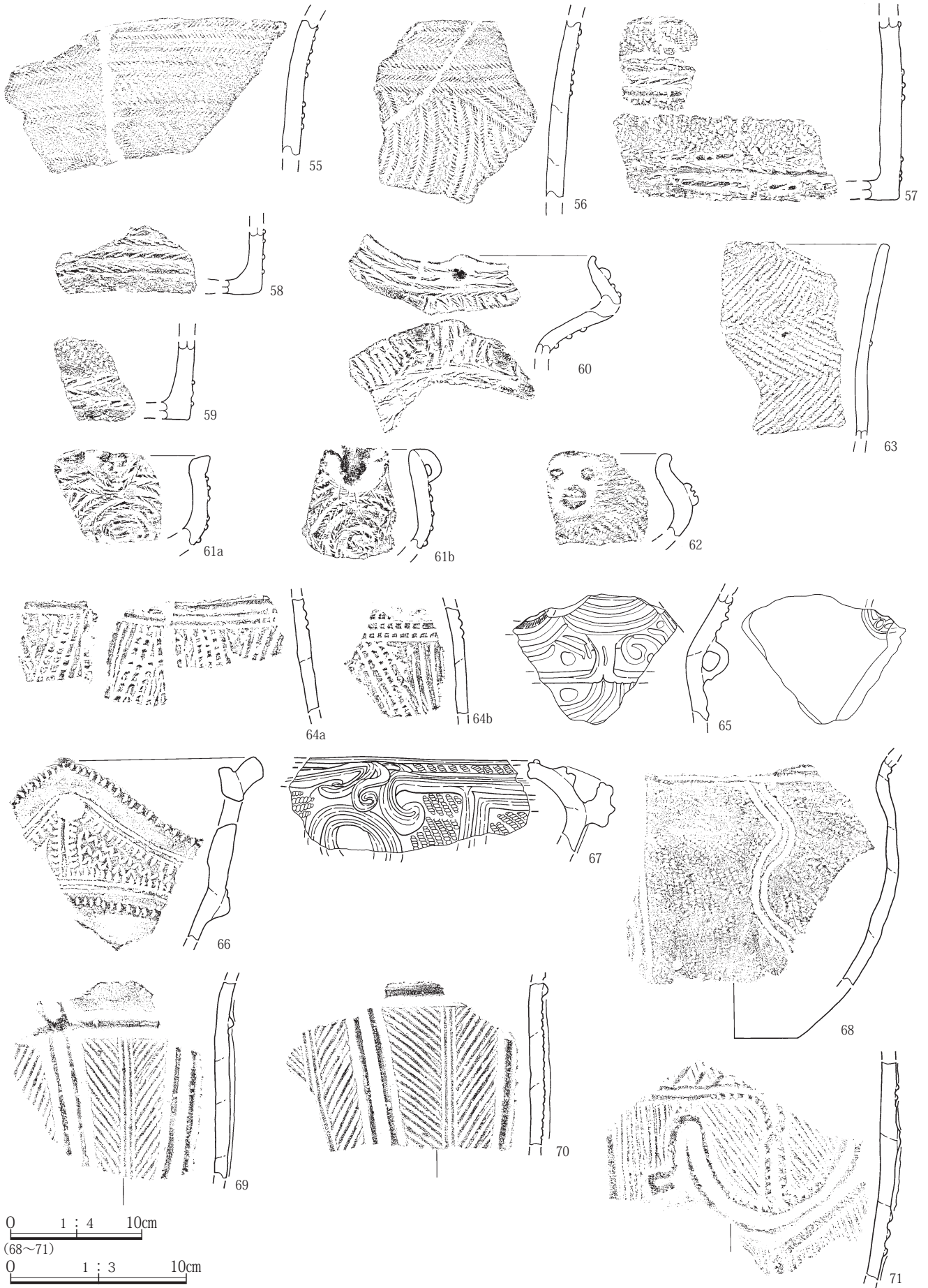
第87図 51区・52区遺構外出土遺物追加資料(1)



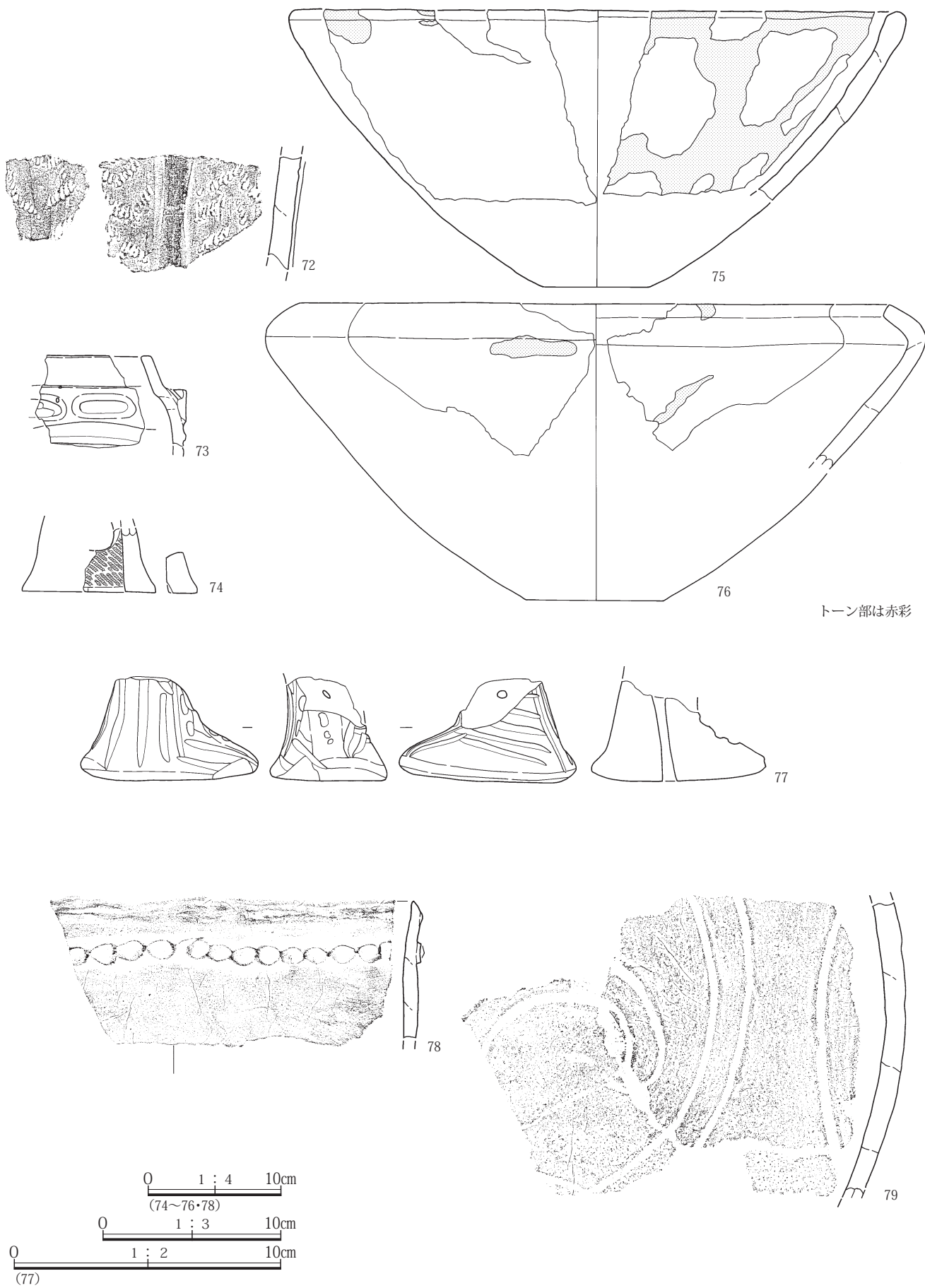
第88図 51区・52区遺構外出土遺物追加資料(2)



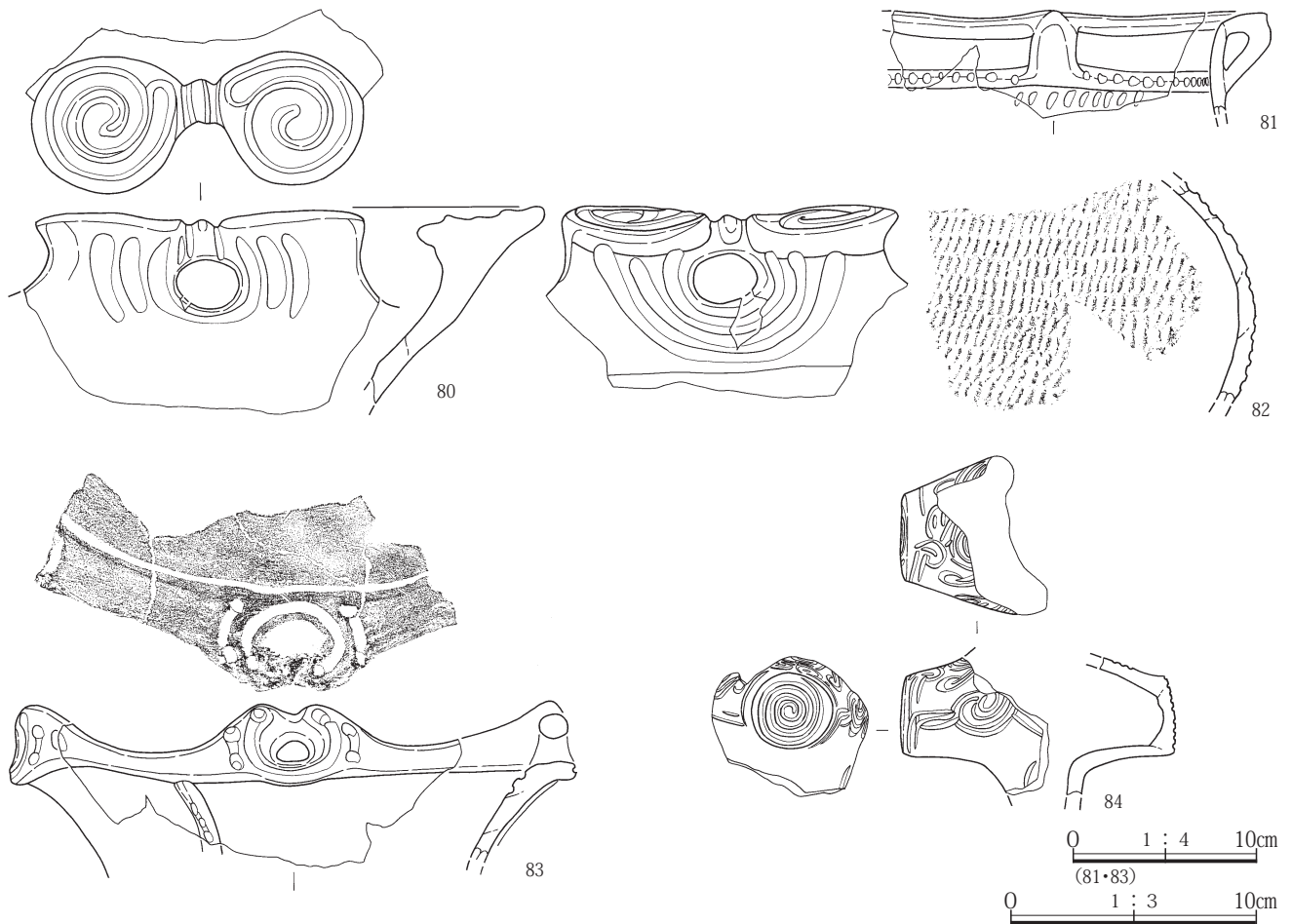
第89図 51区・52区遺構外出土遺物追加資料(3)



第90圖 51区・52区遺構外出土遺物追加資料(4)



第91図 51区・52区遺構外出土遺物追加資料(5)



第92図 51区・52区遺構外出土遺物追加資料(6)

いるが、66は阿玉台Ⅲ式で、当地域では客体的な土器群である。67は大木8b式だが、本遺跡では主体をなさないまでも、数点の出土が見られている。当地域のみならず、大木8b式の広域な伝播が理解されよう。

中期後葉～後期の資料は、51区に偏るが、これは遺跡内容の傾向ではなく、中期～後期の追加資料が51区に限られたためである。ここでは、大型の破片や特徴的な器種を選んで図化・掲載した。このうち、69、70、75が51区Y-13グリッドに集まるが、該当する遺構は270坑と271坑であり、共に中期土器細片の出土を見るのみで、追加資料との関連性は低い。また、中期に比定した土偶脚部片(77)は、51区P-24グリッド出土で、5坑、7坑、131坑、132坑、251坑があるが、いずれも不整形で浅い土坑であり、77との関連性は想定できない。しかしながら、後期前葉の土偶腕部片とした84は、51区R-24グリッドで、237坑や248坑が該当する。このうち、248坑からは堀之内2式の深鉢片が出土しており、土偶片との関連性が窺われよう。

第4章 分析

林中原Ⅱ遺跡では、既報告の『林中原Ⅱ遺跡(1)・(2)』において、縄文時代の遺構より出土した焼骨を中心に、分析・鑑定を行い、その結果を掲載している。

土坑出土の焼骨の一部は人骨で、土坑は葬送儀礼を伴う施設として性格付けられ、あるいは再葬墓としての位置付けも示唆されている。また、獣骨も住居や土坑からの出土が見られ、これらも分析を加え、その位置付けが食用あるいは儀礼に伴う例として諮られてきた。

今回、取り扱う人骨は51区1号土坑墓出土の人骨と51区180号土坑と51区48号焼土から出土した獣骨であり、生物考古学研究所の檜崎修一郎氏に分析・鑑定依頼をした。いずれの遺構も中世～近世に比定され、1号土坑墓人骨は、当地域の葬送を具体化する資料であり、180坑や48号焼土の獣骨鑑定は動物種類の特定とともに調理行為などの痕跡を類推するものである。

その結果、1号土坑墓人骨は、20～30歳代の女性1体と判断された。また、180坑出土獣骨は1歳程のイノシシあるいはブタの右上顎臼歯部で、流入、混入の可能性もあるが、180坑が土坑墓のため、副葬の可能性も含めた。48号焼土出土獣骨はウサギの右下顎臼歯部で被熱しておらず、焼土遺構出土としては、後の流入あるいは儀礼行為が想定できよう。なお、ウサギ骨の出土は県内では3例目とのことである。

第1節 林中原Ⅱ遺跡51区出土の中世～近世人骨と獣骨について

はじめに

林中原Ⅱ遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字林に所在する。(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、2008(平成20)年11月から2009(平成21)年10月まで断続的に行われた。

1 出土人骨について

本遺跡の51区1号土坑墓から中世の人骨が出土したので、以下に報告する。出土歯の計測方法は、藤田の方法を用いた(藤田 1949)。また、出土歯の計測値の比較は、中近世人骨は松村(Matsumura 1995)を引用し、現代人は

権田(権田 1959)を引用した。なお、本遺跡と隣接する林中原Ⅰ遺跡出土中近世人骨が本報告者により報告されているので参照されたい(檜崎 2014)。

(1)人骨の埋葬状態

人骨は、長軸(南北)約100cm・短軸(東西)約65cm・深さ約18cmの規模の隅丸長方形土坑から検出されている。被葬者は成人と推定されているため、伸展位ではなく、恐らく、屈葬で埋葬されたと推定される。人骨の出土位置から、恐らく、顔面を西側に向けて頭位を北にして右側を下にした横臥(側臥)屈葬であると推定される。

(2)副葬品



写真1 51区1号土坑墓全景

副葬品は、錆化した銭貨が1点検出されている。判読は不能である。

(3)人骨の出土部位

人骨の残存状態はあまりよくない。報告できる部位は、出土遊離歯のみである。

(4)被葬者の个体数

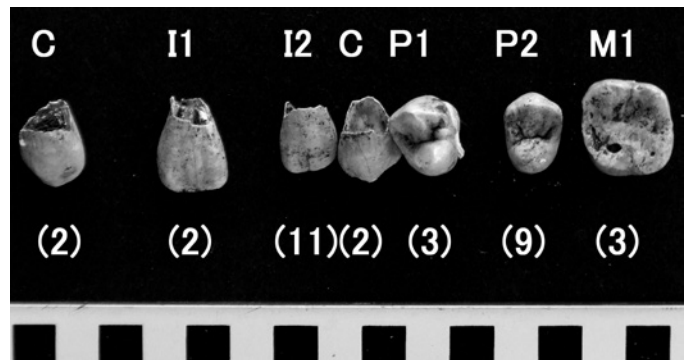


写真2 51区1号土坑墓出土歯〔()は取り上げ番号〕

出土遊離歯には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5)被葬者の性別

出土遊離歯の歯冠計測値は比較的小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

(6)被葬者の死亡年齢

出土遊離歯の内、上顎左M1の咬耗度を観察すると、エナメル質のみのマルティンの1度の状態と象牙質が点状に露出するマルティンの2度の状態が混在している。死亡年齢は約20歳代～30歳代であると推定される。

引用文献

藤田恒太郎 1949 「歯の計測規準について」『人類学雑誌』、61：1-6
 権田和良 1959 「歯の大きさの性差について」『人類学雑誌』、67：151-163
 MATSUMURA, Hirofumi 1995 A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology. National Science Museum Monographs No.9, National Science Museum
 檜崎修一郎 2014 「第6節. 第1項. 林中原Ⅰ遺跡出土人骨」『長野原城跡・林中原Ⅰ遺跡』、(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、pp.282-286

表2. 林中原Ⅱ遺跡 51区 1号土坑墓出土人骨歯冠計測値及び比較表

歯種	計測項目	林中原Ⅱ		中世時代人*		江戸時代人*		現代人**		
		1号墓壙		Matsumura, 1995		Matsumura, 1995		権田, 1959		
		右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀	
上	I1	MD	8.0	—	8.48	8.29	8.78	8.38	8.67	8.55
		BL	6.8	—	7.29	7.00	7.52	7.06	7.35	7.28
	I2	MD	—	6.8	6.98	6.85	7.16	6.97	7.13	7.05
		BL	—	破損	6.55	6.26	6.74	6.33	6.62	6.51
C	MD	7.5	—	7.96	7.43	8.01	7.60	7.94	7.71	
	BL	7.9	—	8.50	7.94	8.66	8.03	8.52	8.13	
顎	P1	MD	—	7.2	7.25	7.02	7.41	7.23	7.38	7.37
		BL	—	9.1	9.46	9.03	9.67	9.33	9.59	9.43
	P2	MD	—	6.8	6.87	6.69	7.00	6.82	7.02	6.94
		BL	—	9.3	9.39	8.88	9.55	9.29	9.41	9.23
M1	MD	—	10.3	10.45	10.09	10.61	10.18	10.68	10.47	
	BL	—	11.0	11.81	11.30	11.87	11.39	11.75	11.40	

註1. 計測値の単位は、すべて、「mm」である。
 註2. 歯種は、I1(第1切歯)・I2(第2切歯)・C(犬歯)・P1(第1小白歯)・P2(第2小白歯)・M1(第1大白歯)を意味する。
 註3. 計測項目は、MD(歯冠近遠心径)・BL(歯冠唇頬舌径)を意味する。
 註4. 「破損」とは、歯冠が破損しており計測不能であることを示す。
 註5. 「*」は、MATSUMURA(1995)より引用。
 註6. 「**」は、権田(1959)より引用。

2 出土獣骨について

本遺跡の51区180号土坑及び同48号焼土から近世の獣骨が出土したので、以下に報告する。

(1)180号土坑出土獣骨

① 獣骨の出土状況

獣骨は、直径約85cm・深さ約52cmの円形土坑の中層から検出されている。土坑上部には、多くの礫が検出されているが、この地域の墓坑にはよく認められる。なお、本土坑からは、煙管及び銭貨の寛永通宝が検出されており、墓坑と推定されるが、人骨は検出されていない。経験則であるが、被葬者が新生児や小児であった可能性が高く、薄い骨は溶解したと推定される。なお、本獣骨には、被熱を受けた痕跡は認められない。墓坑を埋める際の紛れ込みとも推定される。



写真1 51区180号土坑全景



写真2 51区180号土坑獣骨検出状況

② 獣骨の出土部位

獣骨は、イノシシあるいはブタの上顎右臼歯部である。第4小白歯(P4)・第1大白歯(M1)・第2大白歯(M2)・第3大白歯(M3)と顎骨が出土している。イノシシの可能性が高いが、どちらかは判定できない。



写真3 51区180号土坑出土獣骨右側面観

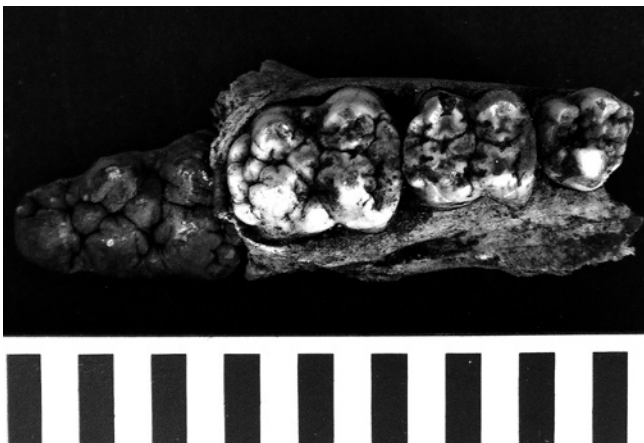
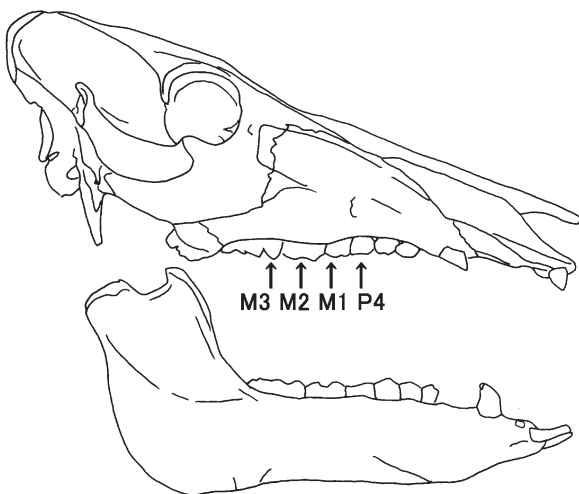


写真4 51区180号土坑出土獣骨咬合面観



第93図 51区180号土坑出土獣骨出土部位図
[松井(2008)を改変して引用]

③ 獣骨の個体数

出土歯には重複部位が認められないため、個体数は1個体であると推定される。

④ 獣骨の性別

性別は、不明である。

⑤ 獣骨の死亡年齢

上顎右第3大白歯(M3)は、歯冠のみが完成し歯根はまだ完成しておらず、萌出過程にあり萌出が完了していない状態であるため、約1歳であると推定される。

(2)51区48号焼土出土獣骨

① 獣骨の出土状況

獣骨は、長軸(東西)約170cm・短軸(南北)約120cm・深さ約30cmの規模の焼土から検出されている。なお、この48号焼土は、180号土坑と近距離に位置する。この焼土からは、砥石・銭貨・染付碗が検出されているが、この焼土の性格は不明である。なお、本獣骨には、被熱を受けた痕跡は認められない。



写真5 51区48号焼土全景

② 獣骨の出土部位

獣骨は、ウサギの左下顎骨臼歯部である。第2小白歯(P2)・第3小白歯(P3)・第1大白歯(M1)・第2大白歯(M2)・第3大白歯(M3)と顎骨が出土している。なお、切歯は破損しているが、顎骨内の切歯は残存している。

③ 獣骨の個体数

出土歯には重複部位が認められないため、個体数は1個体であると推定される。

④ 獣骨の性別

性別は、不明である。

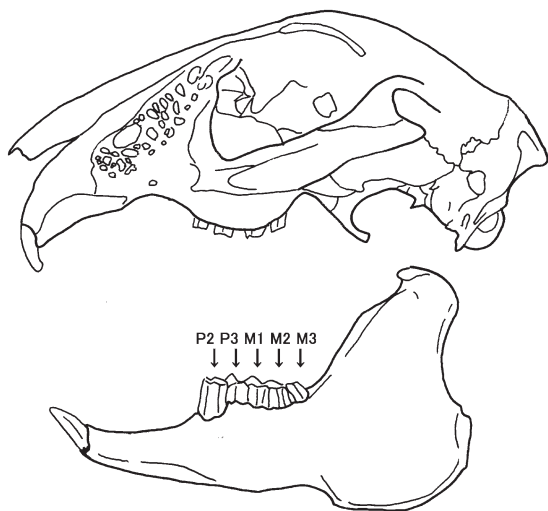
⑤ 獣骨の死亡年齢



写真6 51区48号焼土出土獣骨左側面観



写真6 51区48号焼土出土獣骨内面観



第94図 51区48号焼土出土獣骨出土部位図

[松井(2008)を改変して引用]

歯はすべて萌出しているため、成獣である。

(3) まとめ

群馬県吾妻郡長野原町大字林に所在する、林中原Ⅱ遺跡の180号土坑と48号焼土から、近世の獣骨が出土した。180号土坑は、本来、墓坑と推定されるが人骨は検出されていない。恐らく、被葬者が新生児や小児であるためと推定される。獣骨は、性別不明で約1歳のイノシシかブタの右上顎臼歯部であると推定された。この獣骨は、埋葬の際の紛れ込みとも推定されるが、獣骨の死亡年齢も若いため、若くして亡くなった被葬者への葬送儀礼と関連がある可能性もある。また、48号焼土出土獣骨は、性別不明で成獣のウサギの左下顎骨であると推定された。しかしながら、本獣骨は、被熱を受けていない。この焼土の性格は不明である。これまで、(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査した遺跡で、ウサギが出土した遺跡は上野国分寺尼寺中間地域(大江他 1990)及び白井南中道遺跡(宮崎 1996)の2例のみであり、本遺跡が3例目となる(檜崎 2005)。

なお、本遺跡と隣接する林中原Ⅰ遺跡からは、シカ(鹿)とウマ(馬)が出土している(宮崎 2014)。

引用文献

松井 章 2008 『動物考古学』、京都大学学術出版会
 宮崎重雄 1996 「第2節. 白井南中道遺跡の獣骨」『白井遺跡群・集落編Ⅱ. 白井南中道遺跡』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、pp.411-417
 宮崎重雄 2014 「第6節. 自然科学分析、第2項. 林中原Ⅰ遺跡出土の獣骨」『長野原城跡・林中原Ⅰ遺跡』、(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、pp.287-291
 檜崎修一郎 2005 群馬県出土獣骨データベース：(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編、「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要」、23：110-118
 大江正直・木津博明・桜岡正信・友廣哲也 1990 「付章. 上野国分寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体」『上野国分寺・尼寺中間地域(4)』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、pp.707-938

表3 51区180号土坑出土ブタ・イノシシ上顎歯計測値

	P4	M1	M2	M3
BL	14mm	19mm	24mm	36mm
MD	14mm	15mm	19mm	27mm

註1. BL(近遠心径)・MD(頬舌径)

第5章 総括

林中原Ⅱ遺跡は、縄文時代の集落跡として位置付けられてきた。中期～後期の住居跡(竪穴建物)が多数調査され、豊富な遺物出土量とともに、敷石住居跡に接続する列石遺構や焼骨を出土した土坑、逆位土器を埋設した土坑など当時の生活と儀礼を窺わせる資料が充実する。すでにそれらは前2冊の報告書に詳細を掲載し、本書は、主に弥生時代～中世・近世に比定される遺構・遺物を掲載する3冊目の報告書である。

ここでは、本報告書で掲載された遺構・遺物の中で、弥生時代の資料に関して述べて、総括の変わりとした。

第1節 弥生時代の遺構と遺物について

1 各遺構の様相

本遺跡の弥生時代に比定される遺構は、住居跡2軒、竪穴状遺構2基、土坑3基、土器埋設遺構1基、ベンガラ集中遺構2基、弥生時代遺物集中遺構2箇所などである。このうち竪穴状遺構は住居跡と差は無く、住居として位置付けている。また、土坑1基のうち62区3号土坑は、土坑の様相及び土器の出土状態から土坑墓と捉えられる。ここでは各遺構の出土遺物について、若干の様相を述べて、本遺跡の特徴の一つとしたい(第99図・第100図)。

住居跡2軒より出土した土器は、2軒とも中期前葉に比定されよう。おそらく岩櫃山式併行と捉えられ、浅鉢、甕、壺類など器種も揃う。

61区40号住(第99図)は、楕円形の平面形を呈し、炉跡を見るが、柱穴は確認できなかった。1の浅鉢体部文様は変形工字文の変容様相として位置付けられよう。壺とした3は在地系の突帯文壺として考えておきたい。本節では図示していないが、石鍬(第13図19・20)の出土も当該期の石器組成を裏付ける好資料である。さらに、黒曜石原石・石核のまとまった出土を見る。出土記録が判然とせず、縄文時代の所産とも考え、前冊では遺構外出土として扱い、黒曜石産地同定分析も施している。しかしながら弥生時代の可能性もあるため、今後の検討のために再掲載している¹⁾。

62区1号住(第99図)は不整形の平面形で小型住居である。炉跡が中央部に設けられるが、ピットは柱穴規模

ではない。Ⅱa文様帯に変形工字文を配す甕(4)、筒形土器底部(5)横位沈線群を多段に設ける構成の浅鉢(6)は、器形・文様から南東北系であろうか²⁾。壺体部上半破片(7)はヒトデ文を意匠とする。

61区1号竪穴状遺構と61区2号竪穴状遺構はともに、小規模ながら炉跡を設けている。良好な柱穴は検出されていないが、前述の61区40住と62区2号住と併せて4軒を住居跡とした。周辺の遺跡で弥生時代の住居跡は1・2軒程度の検出で、本遺跡の住居数は屈指の内容といえよう。

61区1号竪穴状遺構(第99図)は北半のみの検出に止まったが、おそらく不整形を呈する小型住居であろう。出土土器も前2軒の住居跡とほぼ同時期で、在地条痕文系壺口縁部(8)や直立する底部を有する浅鉢(9)は62区1住3と器形の共通性を見る。11はヒトデ文を配した東北系の壺であろうか。12は三角連携文を配した沖Ⅱ式³⁾の甕に近い。共伴するその他の土器から、中期前葉段階の甕とするべきであろう。

62区2号竪穴状遺構(第99図)も小規模な炉を設ける住居と判断した。前3軒と同様に良好な柱穴を見ない。出土土器は破片資料が主で、多くが中期前葉に比定されるが、15の壺体部破片は蛇行状意匠が配され、やや新しい様相を示す。石器では、黒曜石製の異形石器(第24図33)が見られるが、遺構範囲外の出土であり縄文時代としての可能性もある。

61区40住、62区1住、62区1・2号竪穴状遺構とも、平面形や柱穴配置に共通性が無く、出土土器も複数系統が共存する様相を示す。このような特徴が当地域の弥生時代中期の様相なのか、今後の課題となるだろう。

なお、本章では図示していないが、61区1・2号埋設土器や2号ベンガラ集中遺構は、40号住と重複して調査されている。何等かの関係性が想起される。埋設土器やベンガラ集中遺構の性格が不明なため、判断は控えるべきだが、住居に付帯する施設の可能性もある。

土坑の中では、土坑墓と性格付けた62区3号土坑(第100図)から正位の大型壺体部上半(1)と石鍬(2)、凹み石、多孔石が出土している。大型壺は文様要素が少なく、詳細な時期判定はできないが、おそらく前期末葉～中期

前葉の所産と考えた。また石鍬は正位壺上端に置かれており、意図的な埋置を想起させた。農耕具、生活利器としての石鍬だが、葬送儀礼の道具としての位置付けも見ることができた。

ベンガラ集中遺構として2基を報告したが、1号ベンガラ集中遺構から2個体の甕破片が出土している(第100図)。いずれも、口縁部に縄文を施すが、3は条痕文、4は縄文を体部に施す例が共伴する。時期としては、中期前葉であろう。

弥生時代遺物集中遺構は、ここでは多くは取り上げていないが、出土土器の一部を遺構外出土土器とともに後述した。

以上のように、林中原Ⅱ遺跡で検出した弥生時代の資料は、遺構量、遺物量とも、縄文時代に比して少ないが、弥生時代中期前葉に比定され、その在り方は当地域の概期集落としては良好な内容と考えられる。次に、周辺遺跡の弥生時代資料を概観し、林中原Ⅱ遺跡の位置付けを再確認しておきたい。

2 周辺遺跡の様相

林地区の弥生時代遺跡については、既に第2章で詳細を述べているように、本遺跡の他に、立馬Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡や上原Ⅰ・Ⅲ遺跡、楡木Ⅲ遺跡、下原遺跡などが知られる。このうち、立馬Ⅰ～Ⅲ遺跡は本遺跡の東側に迫る山地斜面地形に立地しており、立馬Ⅰ遺跡からは、縄文時代晩期末や弥生時代中期末葉から後期に比定される住居跡と中期後葉の土器棺墓が検出されている(第95図・第103図)。また、立馬Ⅱ・Ⅲ遺跡とも遺構外出土として縄文晩期～弥生中期前半の土器が少量ながら報告されている。弥生時代中期後半から後期にかけて、山地斜面に居住地及び墓域を設ける様相は重視しなければならないだろう。林地区の西側の山地斜面に立地する楡木Ⅰ・Ⅱ遺跡では遺構は見られず、小破片の出土にとどまる。また上位段丘面にある楡木Ⅲ遺跡も出土土器のまともには見られたが、遺構の検出にまでは至っていない。いずれも、弥生前期～中期前葉の資料である。隣接する上位段丘の中棚Ⅱ遺跡でも遺構・遺物の検出は果たされていない。このなかで、楡木Ⅲ遺跡の出土状況などは、周辺に該期生活痕跡が予想される在り方であり、小規模な短期居住などの弥生時代集落は周辺に存在するものと考えら

れる。次に、林地区の最上位段丘面にある上原Ⅰ遺跡や上原Ⅲ遺跡、花畑遺跡であるが、上原Ⅰ遺跡で前期に比定される異系統の小型壺を伴う土坑1基が調査されており注意を要する(第98図)。上原Ⅲ遺跡は事業団調査で中期前葉段階の土器を出土した埋設土坑1基が報告されており、上原Ⅳ遺跡は長野原町の調査で土坑1基が見られ、事業団調査と併せて、晩期末葉～弥生時代前期の土器片が遺物包含層や遺構外出土が報告されている。その他の上原Ⅱ遺跡、林花畑遺跡、東原Ⅰ～Ⅲ遺跡、林中原Ⅰ遺跡では出土遺物は皆無あるいは遺構外出土を数点見のみで客体的な存在である。さて、本遺跡も林地区最上位段丘面で南への緩斜面地形に立地しており、遺構数は他の遺跡を圧倒する。後述する、横壁中村遺跡や尾坂遺跡と並び、出土遺物量も充実する。

林地区の中位段丘面には下田遺跡、低位段丘面には下原遺跡があるが、両遺跡とも現在発掘調査及び整理作業が行われており、詳細は控えておきたい。両遺跡とも、かつて前期～中期前半期の土器片が、ある程度まとまって報告されている。

林地区に東接する川原畑地区では、最上位段丘面に位置する上ノ平Ⅰ遺跡で、遺構は見ないが中期前半から後半のまとまった資料が出土している(第101図)。近接する三平Ⅰ遺跡では、中期前葉段階の土坑1基が調査されている(第98図)。段丘面を下り、中位段丘面と思われる二社平遺跡からは、弥生時代後期土器片1点が出土し(第103図)、石畑遺跡では小破片ながら後期土器片を出土した土坑を調査している。さらに同様の中位段丘面に占地する東宮遺跡や西宮遺跡、さらに著名な石畑岩陰遺跡などは現在調査・整理中で詳細は控えるが、縄文時代の遺構を下層で調査していることもあり、弥生時代資料の報告も期待されよう。

川原畑地区と吾妻川を挟んだ対岸にある川原湯地区は、中位段丘面と最上位段丘面、山地斜面からなる。遺跡は中位段丘面に限られ、下湯原遺跡、西ノ上遺跡、石川原遺跡、川原湯勝沼遺跡が調査されている。下湯原遺跡は比較的広い段丘面ながら、弥生時代の資料は見られず、縄文時代と平安時代、近世に限られる。西ノ上遺跡は未報告ながら縄文晩期末から弥生前期の土器が土坑より出土している。石川原遺跡も調査・整理中で詳細は不明であるが、晩期遺構が検出されており、あるいは弥生

時代資料も加わる可能性がある。川原湯勝沼遺跡は、晩期終末に比定される73区1・3号埋甕(95図6・7)を再葬墓(壺棺再葬墓)として位置付けられており注目を集める。その他に、同時期の土器を出土した土坑2基(63区25坑と73区17坑)が報告されている。土坑の形状、出土状態からも土坑墓と位置付けられよう。

林地区の対岸にあたる横壁地区では、殆どが中位段丘面と山地斜面に占められ、多くの遺跡が中位段丘面に集まる。段丘面は広く、広域に調査が行われた横壁中村遺跡は縄文時代の中期～後期集落跡として著名だが、弥生時代の資料も調査・報告されており住居跡や土坑などが検出されている。住居跡としては弥生時代前期に比定されている10区2号住が報告されているが、住居内で同時に検出されている1号焼土、10区1号埋設土器が縄文時代晩期末葉から弥生時代前期に時期が求められている(第96図)。この段階の遺構が多く、例えば10区4号埋設土器(第95図)は晩期末葉の深鉢(9)と浅鉢(10)の共伴例であり、また20区535坑(第95図)は晩期末の千網式に併行する深鉢(8)を出土した土坑である。再葬墓という見解もあるが、土坑墓としておきたい。さらに、弥生時代前期に比定される資料としては10区154坑や9区1号・2号土器溜まりなどが該当すると思われる(第98図)。横壁地区にはその他に、山根1～3遺跡や西久保I～V遺跡があるが、いずれも小規模中位段丘平坦面や山麓斜面に占地する。現状では遺構の検出は果たされず、遺構外や包含層出土土器に止まっている。やはり横壁中村遺跡が、当地区においても中核的な弥生時代集落として位置付けられよう。

横壁地区の対岸である吾妻川左岸上位段丘面にあたる長野原地区は林地区の西隣にあたる。縄文時代中期～後期の大型集落で著名な長野原一本松遺跡があるが、当遺跡では、弥生時代の遺構・遺物は客体的な存在のようだ。小規模な土坑や包含層の土器片出土で終わる。隣接する幸神遺跡でも、弥生時代の資料は確認されておらず、当地区の上位段丘面は弥生時代の生活領域ではなかったのかもしれない。

反面、中位段丘面に占地する尾坂遺跡は弥生時代の資料が充実する。吾妻川に舌状に突出する広く平坦な段丘面である。前期に比定される資料として、342坑や340坑が挙げられる(第97図)。特に340坑は筒形土器と浅鉢の

共伴であり、報告書の記述のように、あるいは中期初頭期にまで下るかもしれない。また、ほぼ同時期の1号再葬墓も多量の礫と伴に大型壺(1)と小型壺(2)など複数個体の共伴が果たされる(第97図)。尾坂遺跡では、住居跡が未検出なのが悔やまれるが、出土土器量、遺構の内容からも拠点的な集落遺跡であろう。

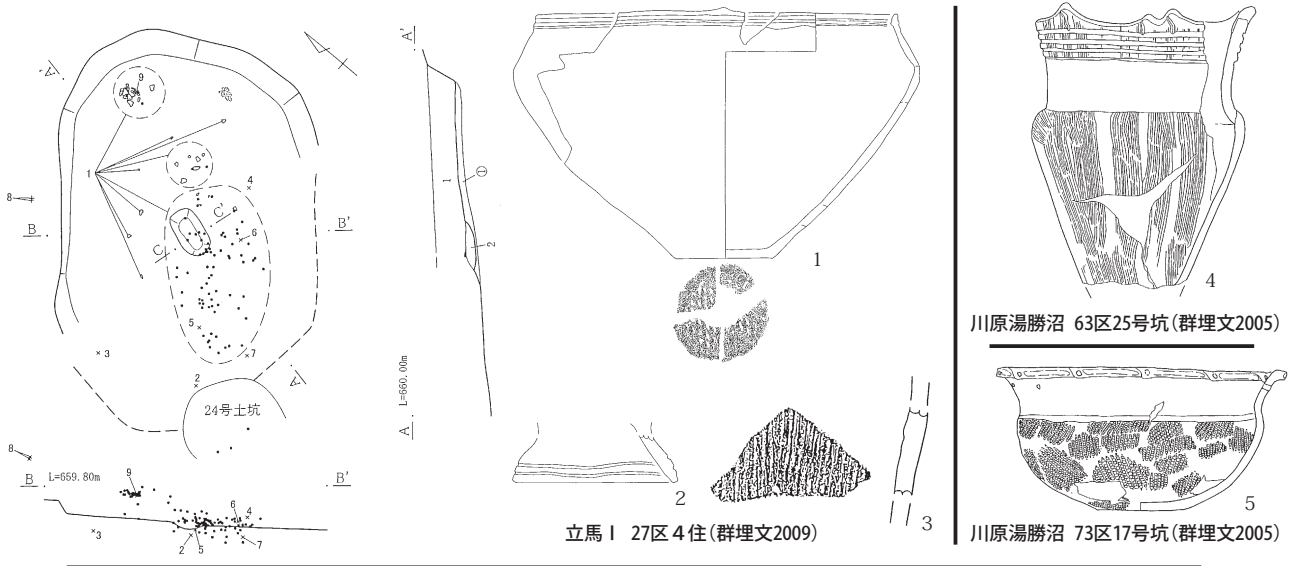
尾坂遺跡の対岸にあたる久々戸遺跡も長野原地区の中位段丘面に位置する。天明泥流下の畑跡を広域に調査した遺跡として著名だが、土坑2基などが弥生時代資料として報告されている。12号坑は大型壺上半と波状口縁を示す壺が出土する(第98図)。器形からおそらく前期と考えたい。16号坑は浅鉢、壺など小型器種が揃うが(100図)、中期前半に位置付けられよう。磨消縄文が安定的な様相を示しており、林中原II遺跡61区40号住などと対比できよう。久々戸遺跡がのる段丘面も平坦面が広がるが、弥生時代遺構は土坑に止まる。あるいは日照などが原因しているのかもしれない。同じ吾妻川右岸長野原地区に占地する向原遺跡は上位段丘に位置し、中期土坑7基や包含層からの出土が見られる。

さらに吾妻川を遡り、本遺跡より5.2kmほど西に位置する坪井遺跡は大津地区に広がる上位段丘面に位置する。平成23年度に長野原町教委が発掘調査し、弥生時代の遺構としては中期前半に比定される住居跡1軒と土坑5基が報告されている(富田2013)。住居跡出土遺物はやや貧弱だが、蓋型土器や短頸壺を出土し、土坑はSK12から筒形土器や壺などがまとまった出土状態を示しており、再葬墓の可能性も示唆されている(第102図)。坪井遺跡が乗る段丘面も広く、居住地としても適していたようだ。集落としても拠点的な位置付けが可能である。

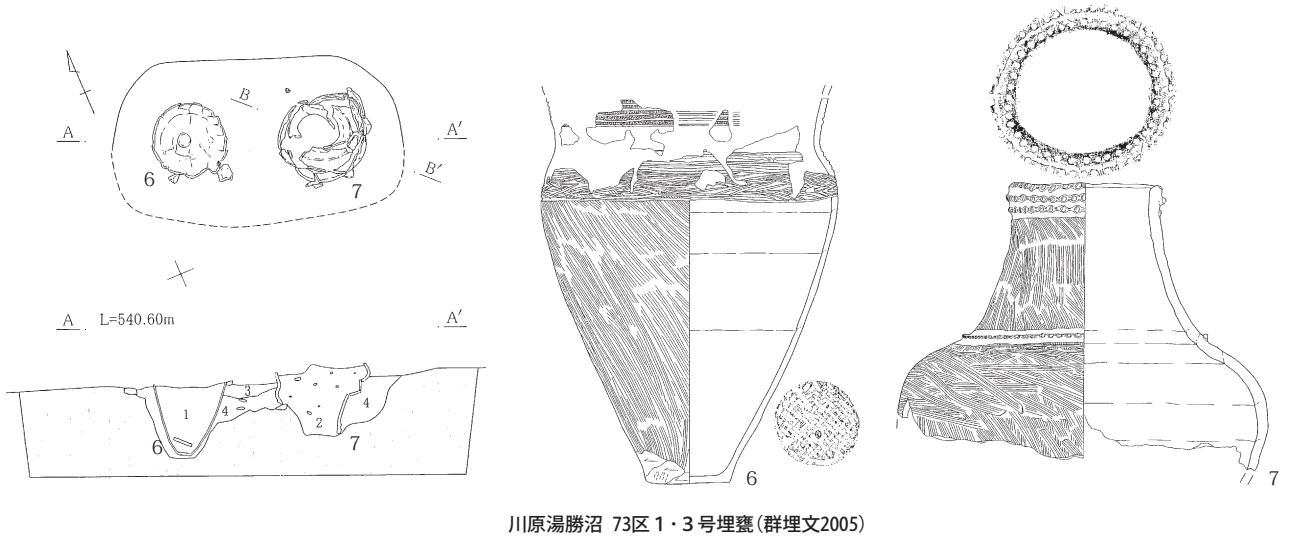
このように、長野原町の八ッ場ダム地域を中心とした弥生時代遺跡を概観してみた⁴⁾。

各地区とも、遺跡数、遺構数、遺物出土量は少なく、他の時代と比して貧弱な様相である。その中で、本遺跡は遺物の出土量も多く、おそらく中期前葉段階において、尾坂遺跡や横壁中村遺跡、坪井遺跡とともに、各地区における拠点的な集落として位置付けられよう。

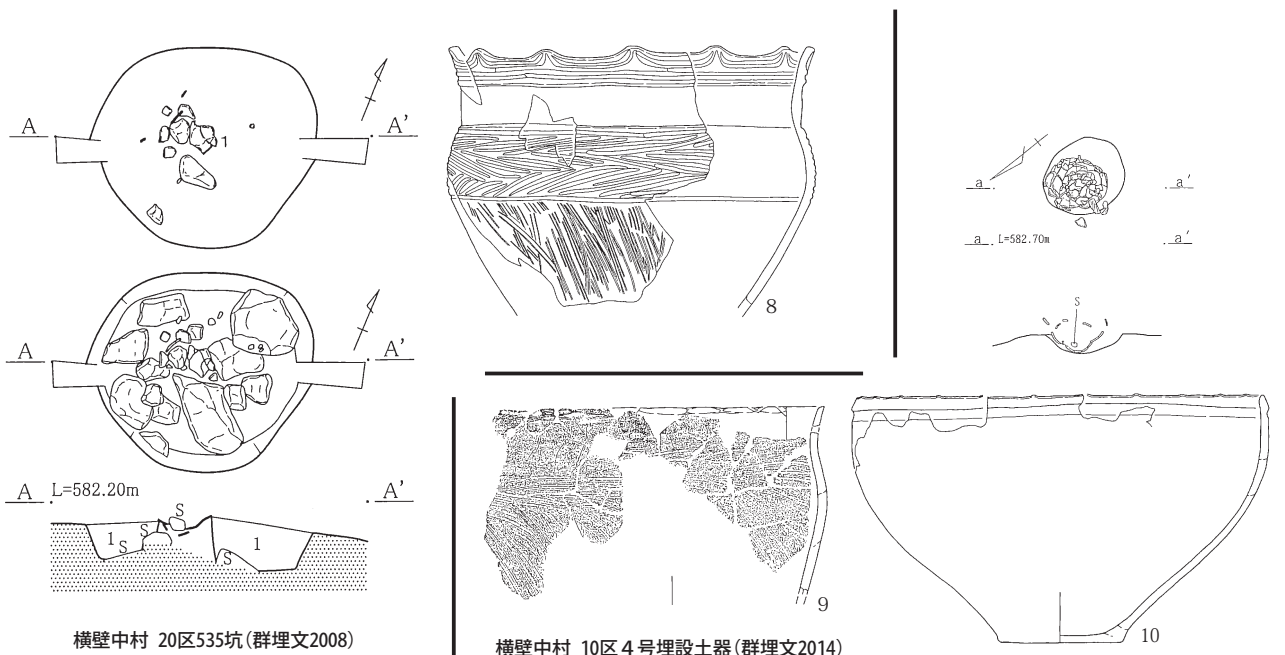
また、極めて類例の少なかった、弥生時代の住居跡であるが、晩期末葉(立馬I 4住)、弥生時代前期(横壁中村10区2住)、中期前葉(林中原II 61区40住など)、中期中葉(坪井SI02)、後期(立馬I 17区3住)などが見られる



立馬 I 27区 4住(群埋文2009)



川原湯勝沼 73区1・3号埋室(群埋文2005)



横壁中村 20区535坑(群埋文2008)

横壁中村 10区4号埋設土器(群埋文2014)

第95図 周辺遺跡の弥生時代資料(1)

ようになった。しかしながら、未だ検出軒数が少ないため、各時期の特徴や共通性などは把握されておらず、今後、類例と研究の蓄積が望まれるところである。

また、再葬墓も各遺跡で報告されている。再葬墓に関しては下流域にある東吾妻町岩櫃山遺跡(鷹の巣洞窟)や同町前畑遺跡が知られる。本節で扱う長野原町域においても、尾坂1号再葬墓や坪井SK12は礫の出土とともに複数個体の土器が出土しているため、再葬墓として位置付けられよう。また、川原湯勝沼1・3号埋甕も上層に人頭大の壺円礫・角礫が集中しており、再葬墓の様相に近似する。報告書でも壺棺再葬墓としての可能性を示唆されている。ただし、いずれも単独の再葬墓設営であり、群在する沖Ⅱ遺跡や鷹の巣洞窟とは様相を異にする。人骨の出土も見られない。またその他の遺跡でも、例えば横壁中村20区535坑や本遺跡62区3号土坑などは礫と弥生土器が伴出しているが、厳密には再葬墓としての位置付けは控えるべきで、墓とすれば土坑墓と考えるべきである。同様に尾坂340坑や久々戸12坑、同16坑なども土坑墓としての位置付けが可能であろう。次の中期後葉に至り、立馬Ⅰ17区58坑のような土器棺墓が設けられる様相は重視したい。中期後葉に比定される遺跡も極めて少なく、確定性に乏しいが、山地斜面地形に墓域を選ぶ様相は、中期から後期の画期における葬送儀礼の変化も想起されよう。

3 土器の様相

次に、各遺構を概観する際に参考にした遺構出土土器を中心に概観したい。縄文時代晩期より弥生時代中期後葉に比定される土器を順次掲載するが、厳密に区分できる積極的な根拠は少なく、あくまでも筆者の類推の域を出ていない。また、単独出土土器や遺構外出土土器も幾つかを加えて、各時期を補填してみたが、共伴資料を持たない土器は、筆者や担当者の見解が大きく作用してしまった。将来的には修正・変更要素が多分にある。なお、図中の遺構図、土器図の縮尺は一定ではない。詳細は各報告書を参考にいただきたい。

(1) 縄文晩期末～前期(第95図)

弥生時代への過渡期としての縄文時代晩期末葉であるが、群馬県の場合この段階の土器群に関しては、様々な土器型式で呼ばれるように、極めて複雑な土器様相であ

る。また、類例資料に乏しく、具体的な型式名を充てて報告する出土量ではない。今後、晩期後半から終末、さらに弥生時代前期の土器群との比較分析で、様相を明らかにしていかなければならないだろう。

当地域の概期土器群に関しても同様で、本図に掲げた各遺構、各土器実測図に対しても、かつては、氷Ⅰ・Ⅱ式や女鳥羽川式、大洞A式、千網式、荒海式など様々な型式名が充てられて報告されている。例えば、立馬Ⅰ27区4住1の大型浅鉢は女鳥羽川式として、川原湯勝沼73区1・3号埋甕はいずれも氷Ⅰ式中～新段階で6が大洞A式、7が檜王式に併行するとされている。同遺跡63区25坑4、73区17坑5は氷Ⅰ式古～中段階と位置付けられている。また横壁中村20区535坑8と10区4号埋設土器9・10は両者とも弥生時代として報告されていた。このように、多くの型式名が充てられているが、未だ当地域の縄文時代晩期末葉の様相は明らかになっていないため、ここでは具体的な型式名は充てず、晩期末葉として位置付けさせていただいた。将来的には具体的な型式名や段階名で論を進めるべきであろう。

甕、深鉢、壺類は体部下半に条痕文あるいは細密条痕を施し、肩部に横位矢羽状条痕文を充填する例が見られる。立馬Ⅰ27区4住1や横壁中村10区4号埋設土器10にあるように大型浅鉢は無文の個体もあるが、やや客体的である。ここでは図示していないが、工字文や変形工字文が充てられ、赤彩を施した小型の浅鉢や鉢が多く見られる。また川原湯勝沼73区17坑5のような体部縄文施文で口唇部形状に特徴が見受けられる個体も少量ながら見られる。

(2) 弥生時代前期～中期初頭(第96～98図)

晩期末葉の伝統を継続する個体や、沖Ⅱ式の文様構成を示す例が見られる。

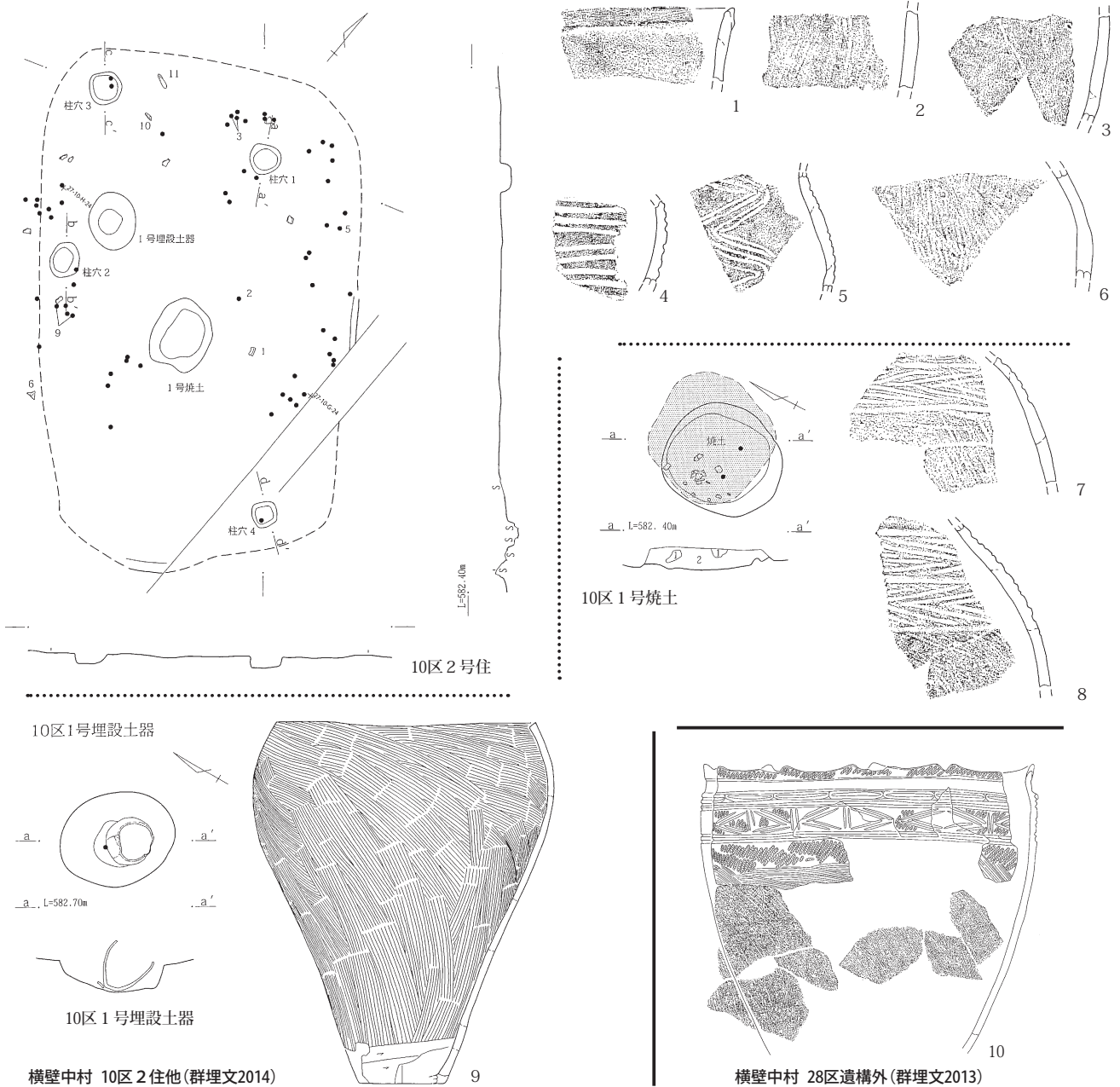
横壁中村10区2号住は住居跡ながら共伴遺物に恵まれていない。筆者が編集した報告書だが、住居内に存在する焼土跡や埋設土器を別遺構として扱っている。調査遺構名を重視した結果だが、同一時期の所産として扱うべきであった。反省を踏まえて第96図にまとめて示してみた。10区1号焼土出土遺物(7・8)は若干ながら遡る様相を示しているが、埋設土器とした9も同様な時期と思われる、住居跡出土土器(1～6)も併せて、弥生時代前期の範囲内に納めておきたい。今後検討を要しよう。また、

先にも述べたが横壁中村28区出土の甕(10)肩部の文様帯は三角連繫文の祖型ともいえる様相を示す。縄文時代晩期末から弥生時代前期に位置付けておきたい。

前期資料としては、尾坂遺跡に好例が集まる(第97図)。1号再葬墓からは、条痕文を施した突帯壺(1)、縄文施文のみの小型壺(2)、縦位条痕文を体部に施した壺(3・4)が共伴する。また、342坑からは肩部に横位沈線3条を設け、体部は斜位条痕を施す甕(5)が出土している。おそらく、前期に比定される例と思われる。340坑は筒形土器(7)と浅鉢(8)が共伴する。7の底部は顕著に張り出す特異な形態で、他に類例を見ない。肩部の変形工

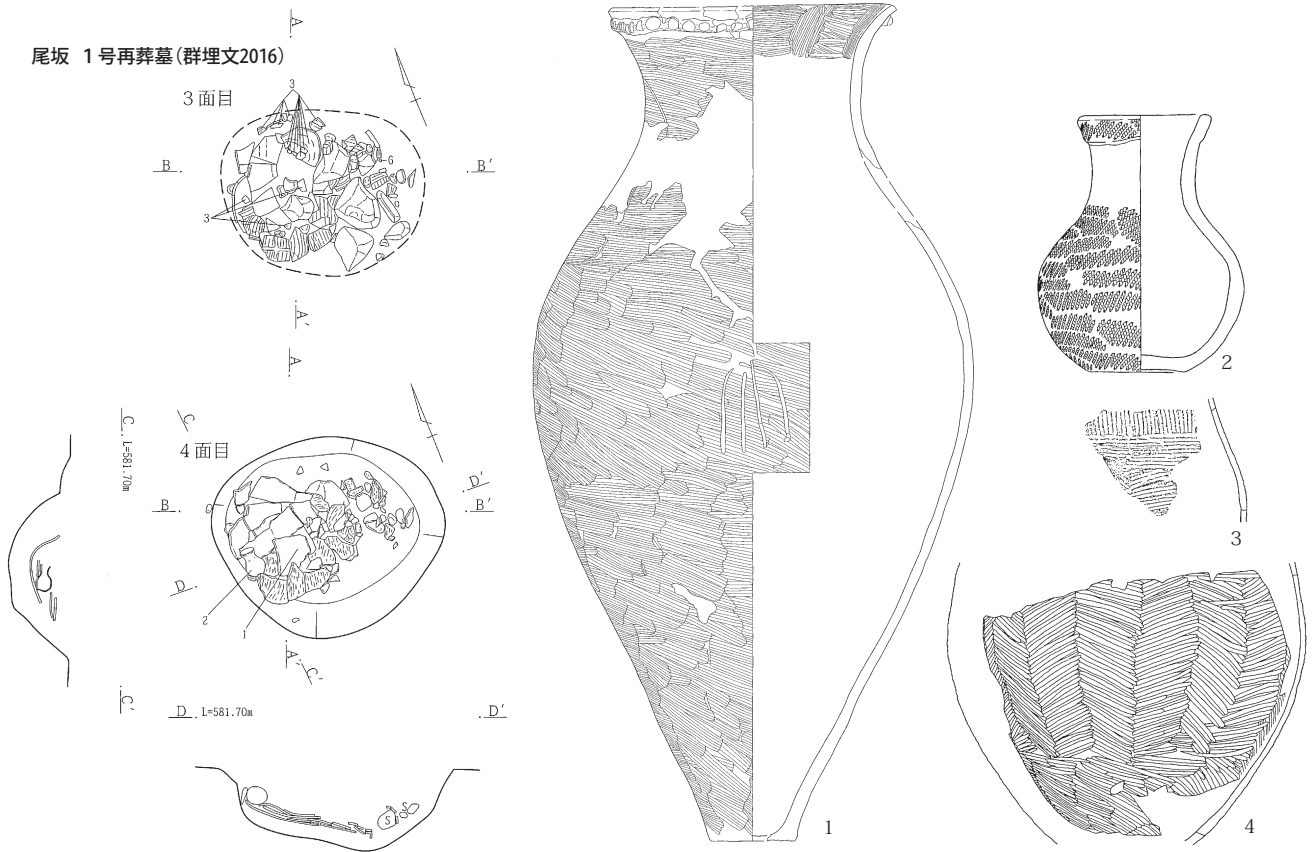
字文が特徴的である。共伴する8の浅鉢体部は磨消文様が配される。中期前葉の様相にも捉えられるが、小型器種への先駆的意匠文の施文とも考えられ、7との共伴例から前期として位置付けたい。なお同様な浅鉢は中之条町有笠山2号洞窟遺跡(中之条町1977)で出土している。

小型壺の出土としては上原 I SK61出土例が知られる(第98図)。体部上半に変形工字文、下半に渦巻文を配す稀少な文様構成を示す。この事例を東北型短頸壺(若狭1992・1996)と位置付け、渦巻文を配す類例を求められた分析(小宮山2013)で、横壁中村20区遺構外出土土器を東北型特殊壺として取り上げられており、同時に東北型

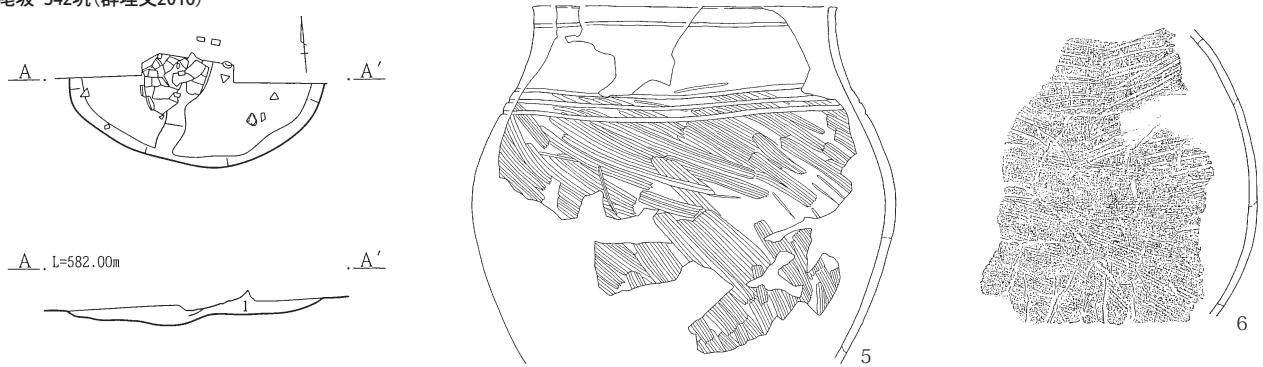


第96図 周辺遺跡の弥生時代資料(2)

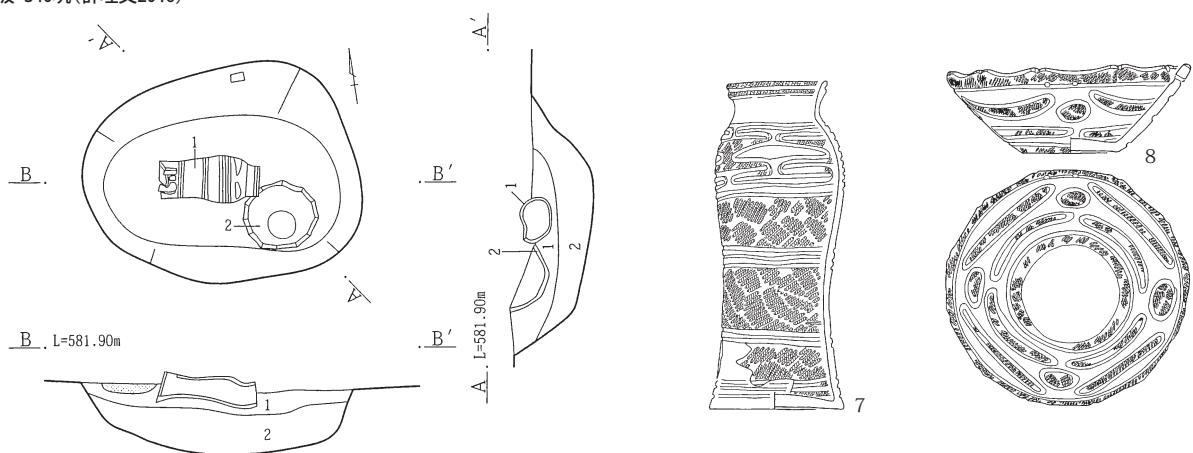
尾坂 1号再葬墓(群埋文2016)



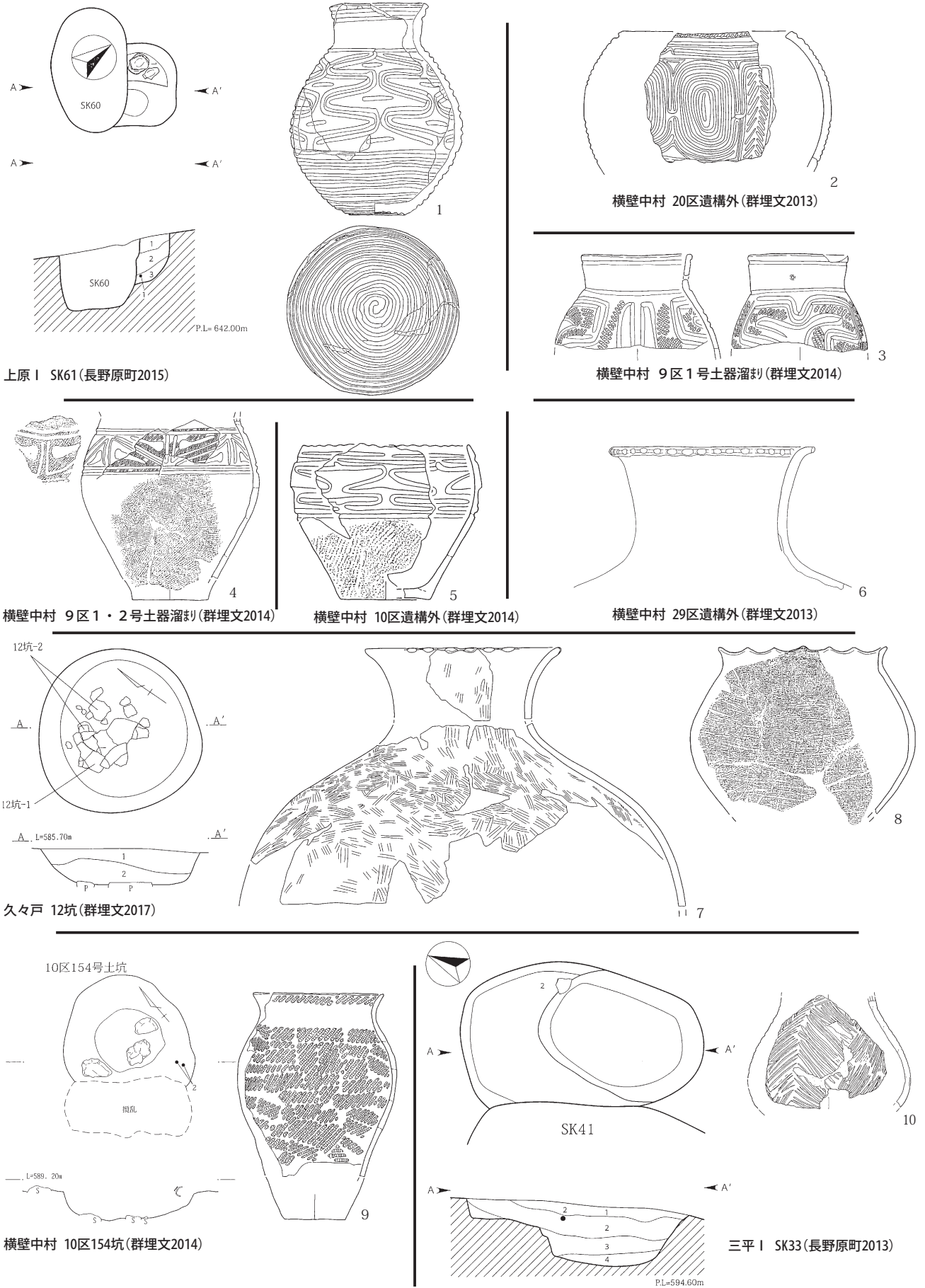
尾坂 342坑(群埋文2016)



尾坂 340坑(群埋文2016)



第97図 周辺遺跡の弥生時代資料(3)



第98図 周辺遺跡の弥生時代資料(4)

特殊壺の特徴の一つとされた頸部穿孔事例として横壁中村9区土器溜まりの小型壺を挙げている。筆者は当資料の報告の際、磨消文の存在から中期に比定したが、あるいは前期にまで遡る可能性もある。

筆者が深鉢とした横壁中村9区1・2号土器溜まり(4)や10区154坑出土例(9)も体部下半に縄文が施される個体で、4は特に三角連繫文の中位に半肉彫文様が充てられる特徴を示す。また、体部上半に変形工字文を配した横壁中村10区遺構外出土の鉢(5)も前期に位置付けられよう。大型の壺(6・7)は口唇部の押圧装飾のみで無文の例が多いが、外器面は研磨や丁寧な撫で調整を施す。7は久々戸12坑で波状口縁を呈し条痕文を施す甕(8)と共伴する。三平I遺跡SK33出土の壺体部破片(10)は縦位矢羽状の条痕文を施し、あるいは水神平式の系譜で尾坂1号再葬墓(4)などとの関係性も想起されよう。

(3) 中期前葉(第99～101図)

本遺跡—林中原II遺跡が最も充実する資料を提示する。林中原II遺跡出土土器に関しては前々項で述べているため、詳細は控えるが、器種毎の特徴も個性が強く、例えば浅鉢は、底部が直立するタイプとして62区1住(第99図6)、61区1号竪穴(同図9)、62区1号弥生集中遺構(第101図8)、62区2号弥生集中遺構(同図9)、61区遺構外(同図10)が好例である。おそらく南東北系と思われる、第101図8は前期に比定され、同図10は磨消文の様相から中期中葉と位置付けられることから、時間幅を持って当地域に浸透した器種と捉えられよう。ただ、10に関してはやや小型品で口縁部に小孔を設けることから、あるいは蓋の可能性もある。102図1の坪井SI02例でも蓋が出土しており、中期土器組成に蓋が加わる様相も把握しておきたい。

また、沖II式の系譜を引く三角連繫文を配す甕も一定量出土しており、例えば61区1号竪穴(第99図12)は中期土器と共伴しており、同様な例として2号弥生集中遺構(第101図17)、52区遺構外(同図18)、61区遺構外(同図19)が充てられよう。時期的には中期初頭～前葉に位置付けられるのであろうか。61区1号ベンガラ集中遺構では条痕文施文と縄文施文の甕破片が共伴している。

大型壺の出土は少なく、62区3坑出土例が挙げられる。条痕文に覆われ、口縁部を逸するため詳細な時期は判断できないが、前期末から中期前葉に比定したい。また、

壺体部上半の破片資料ながら、62区1住(第99図7)や61区1号竪穴(同図11)などに東北系の文様意匠であるヒトデ文が配される。これも本遺跡の特徴の一つといえよう。また壺口縁部の同図8などは在地系の条痕文系壺と捉えられよう。

その他の遺跡では、久々戸16坑で小型器種ながら、中期前葉に比定される土器群が共伴する(第100図5～9)。この中で、5の浅鉢は口縁部資料だが、林中原II遺跡で特徴的に出土した直立する底部を持つ浅鉢に近い様相を示す。文様構成も第99図6のように横位沈線による多段構成である。

第101図1～7には、横壁中村遺跡と上ノ平I遺跡の中期前葉に比定される遺構外出土資料を集めた。横壁中村(1～5)は磨消文が発達した例が主となる。上ノ平I(6・7)は横位波状沈線文を配す浅鉢で、同一個体とも思われる。同図12も類例として位置付けられ、前期にまで遡る可能性もある。また同図20は、横位波状文と横位沈線群が多段に配される壺で南関東系と考えられる。中期後葉段階におきたい。

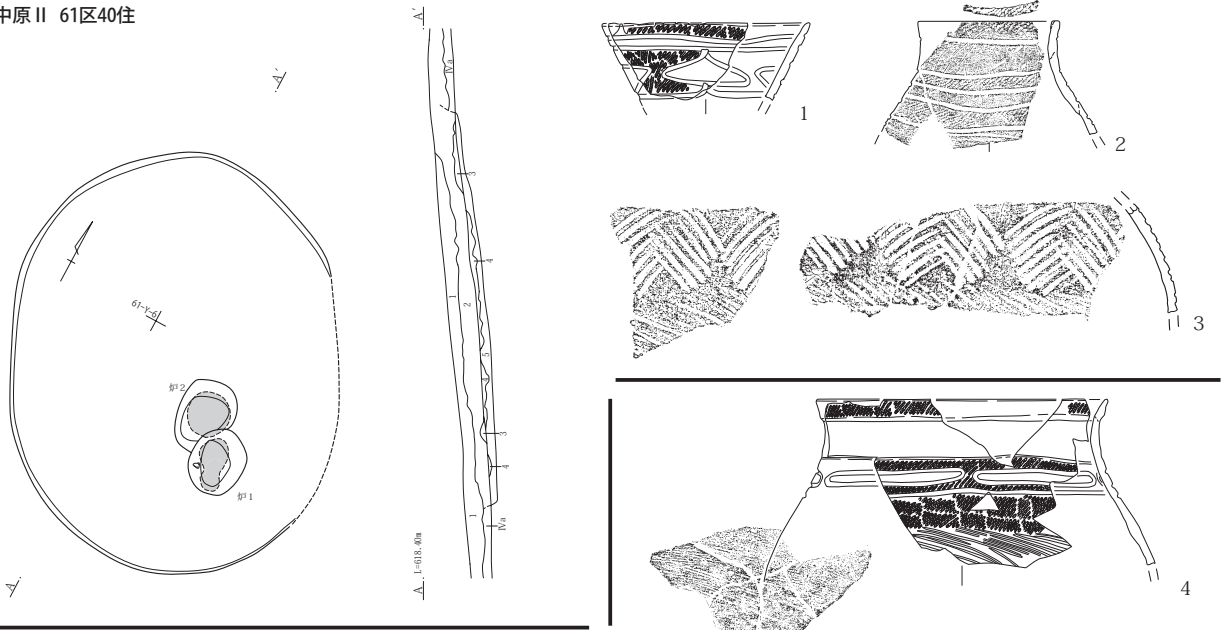
(4) 中期中葉(第102図)

坪井遺跡SI02とSK12出土土器を充てたい。住居跡であるSI02であるが、出土遺物量に乏しく、土器様相の提示までは至らない。しかしながら、蓋形土器(第102図1)や短頸壺(2)の出土があり、希少性を高める。

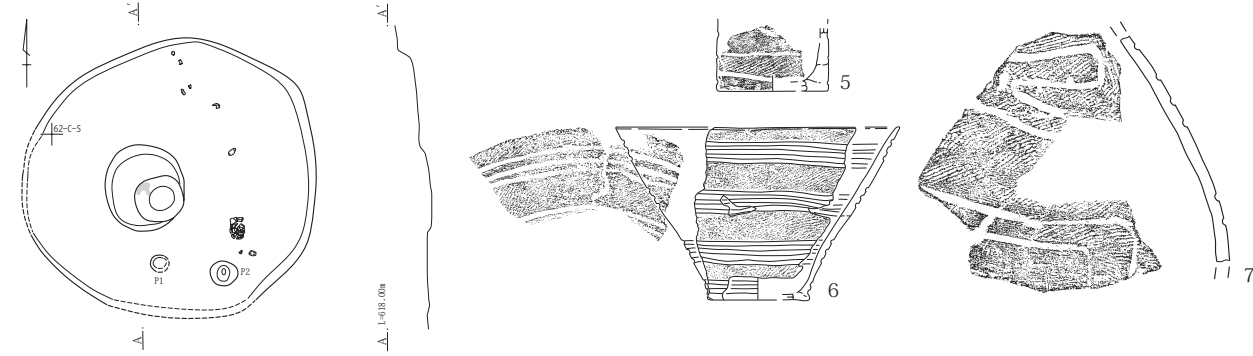
SK12は前々項で再葬墓として位置付けている。複数個体の土器が共伴し、上層と底面に分かれた出土状態を示すが、出土土器の一括性は高い。筒形土器(3・7・8)、壺(4～6・9)が出土している。甕は小破片に止まる。3・7は磨消縄文を施し、3は磨消文による工字状意匠を配しており、施文部には赤彩を加える特徴を示す。4の壺口縁部は、縦位条痕文を口頸部に施し、5は縄文LR上に斜位沈線が重なる。6は縦位波状条痕文が頸部に施される特徴をみせる。報告では、神保富士塚式下限と栗林式上限に関わる資料と位置付けられており(富田2013)、林中原II遺跡と並び、当地域の中期土器様相を具体化した一括資料である。

この他では単独出土資料だが、上原I遺構外出土(第101図10・11)は判断材料に乏しいが、両個体とも中期中葉に比定したい。また、上ノ平I遺跡の遺構外出土土器(同図12・13)も当該段階におきたい。13の小型壺は縦位条

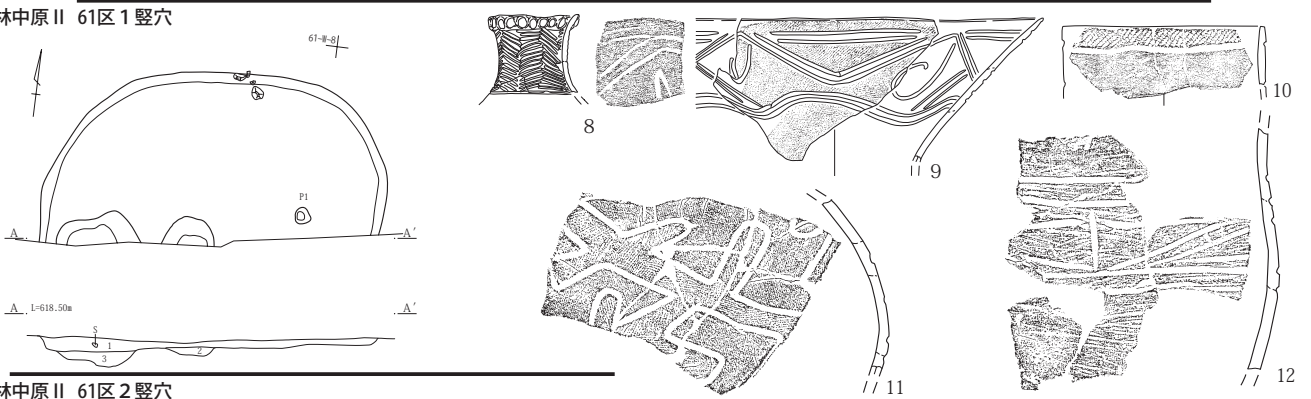
林中原 II 61区40住



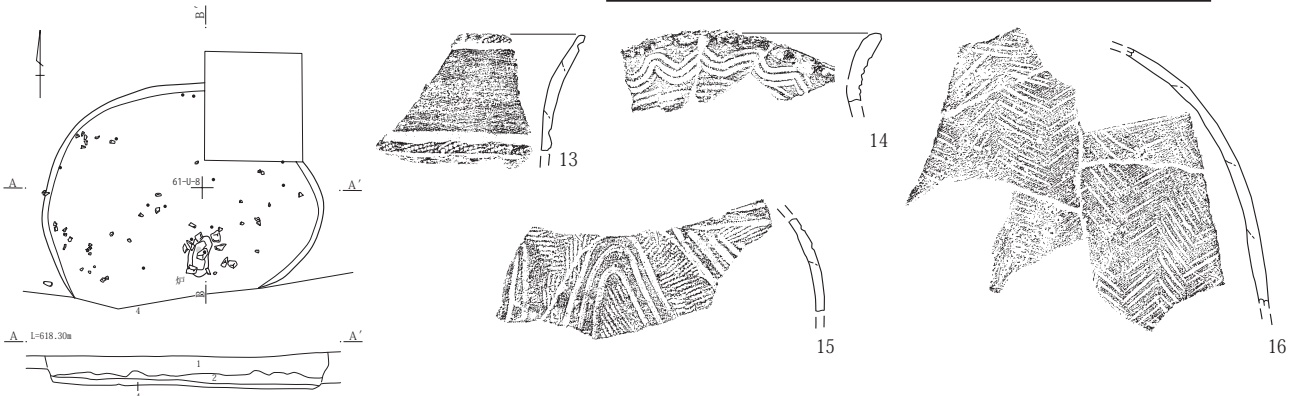
林中原 II 62区1住



林中原 II 61区1 竪穴

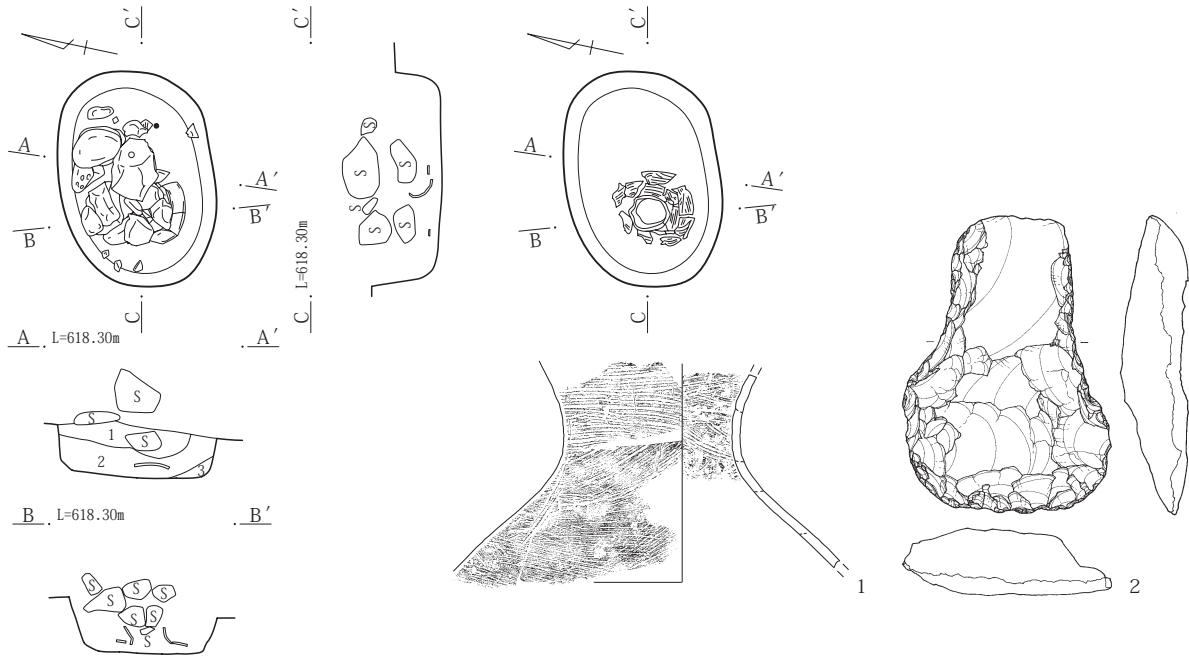


林中原 II 61区2 竪穴

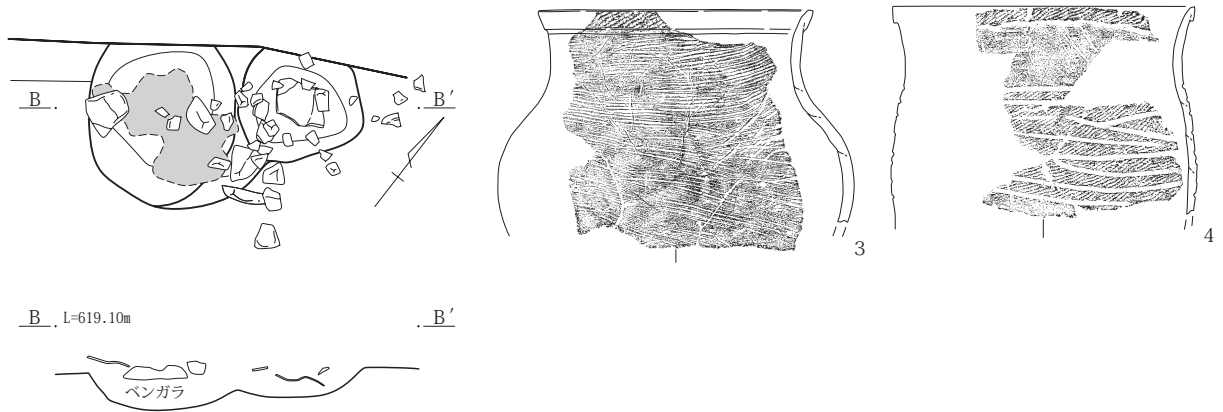


第99図 周辺遺跡の弥生時代資料(5)

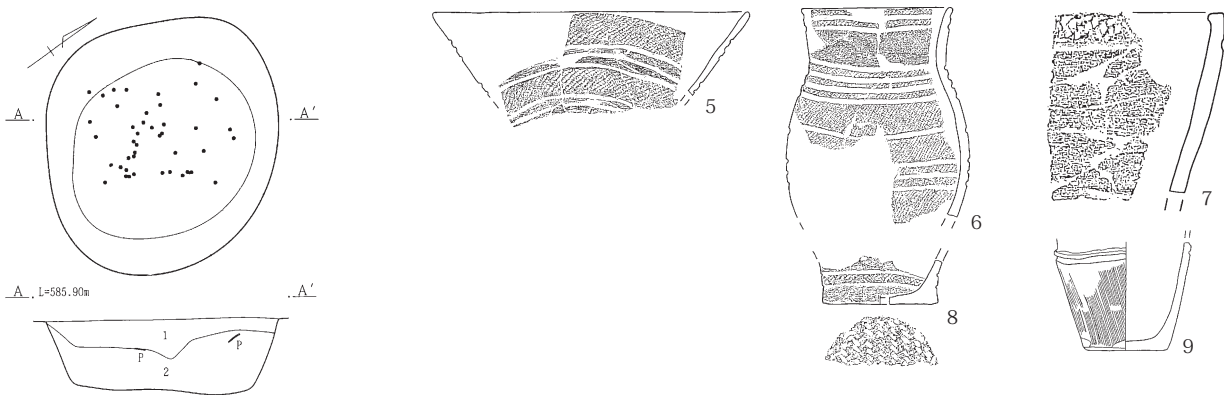
林中原II 62区3坑



林中原II 61区1 ベンガラ集中



久々戸 16坑(群埋文2017)



第100図 周辺遺跡の弥生時代資料(6)

痕文を地文とし、波状条痕文を重ねる。加えて、口縁部に1対の小孔が穿たれており、先に述べた前期小型壺における東北系短頸壺の特徴が見られる。

(5) 中期後葉～後期(第103図)

林中原Ⅱ遺跡の東側にある山地斜面に位置する立馬Ⅰ遺跡に良好な資料が集まる。17区58坑は壺(第103図1)と甕(第103図3)による土器棺墓で土器は栗林式に比定されよう。同様に17区72坑(4・5)や27区1坑(6)も土器棺墓の可能性が唆されており、中期後葉段階のまとまった資料として、遺構外出土の7・8とともに位置付けられよう。

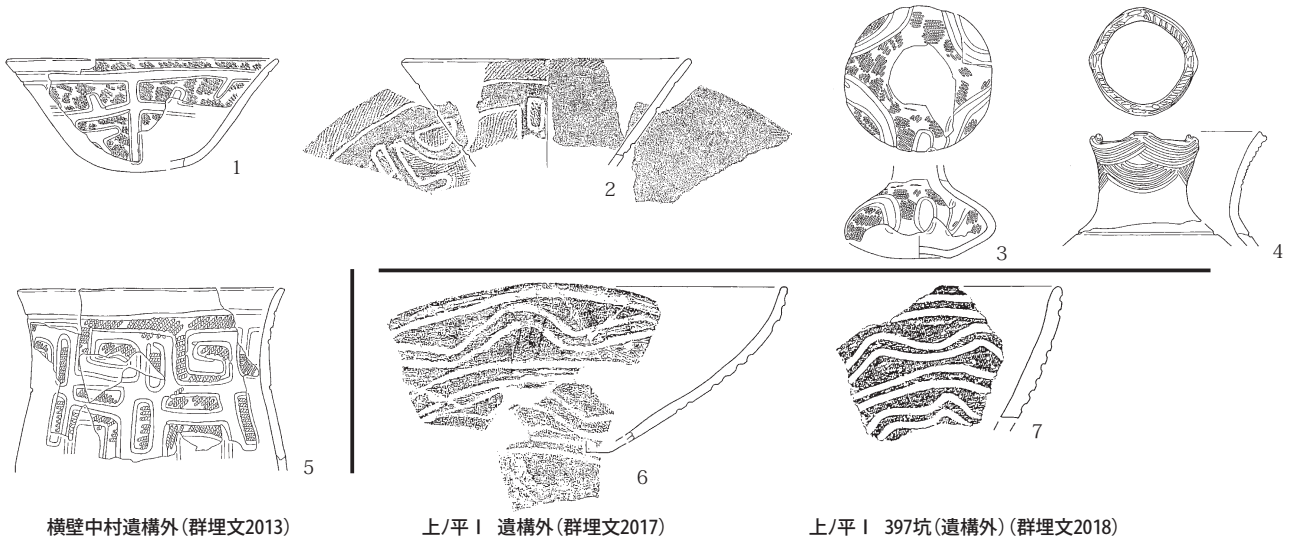
さらに、住居跡として17区3住が中期後半の所産として報告されているが、第103図10や11の様相から後期の

可能性が高まる。しかしながら、土器片の出土に止まり、かつ上層に集中することから、厳密な帰属遺物ではないのかもしれない。慎重に扱いたい。

その他の遺跡からの出土資料として、尾坂遺跡遺構外(第103図18)、二社平遺跡遺構外(同図19)より後期樽式土器の出土が見られる。当地域では弥生時代後期の資料及び後続する古墳時代前期資料は極めて少ないが、上原Ⅰ遺跡で古墳時代前期土器の出土と住居跡が報告されており(長野原町2015)、小規模ながら集落遺跡は点在すると思われる。

4 小結

以上のように、本節では、林中原Ⅱ遺跡における弥生

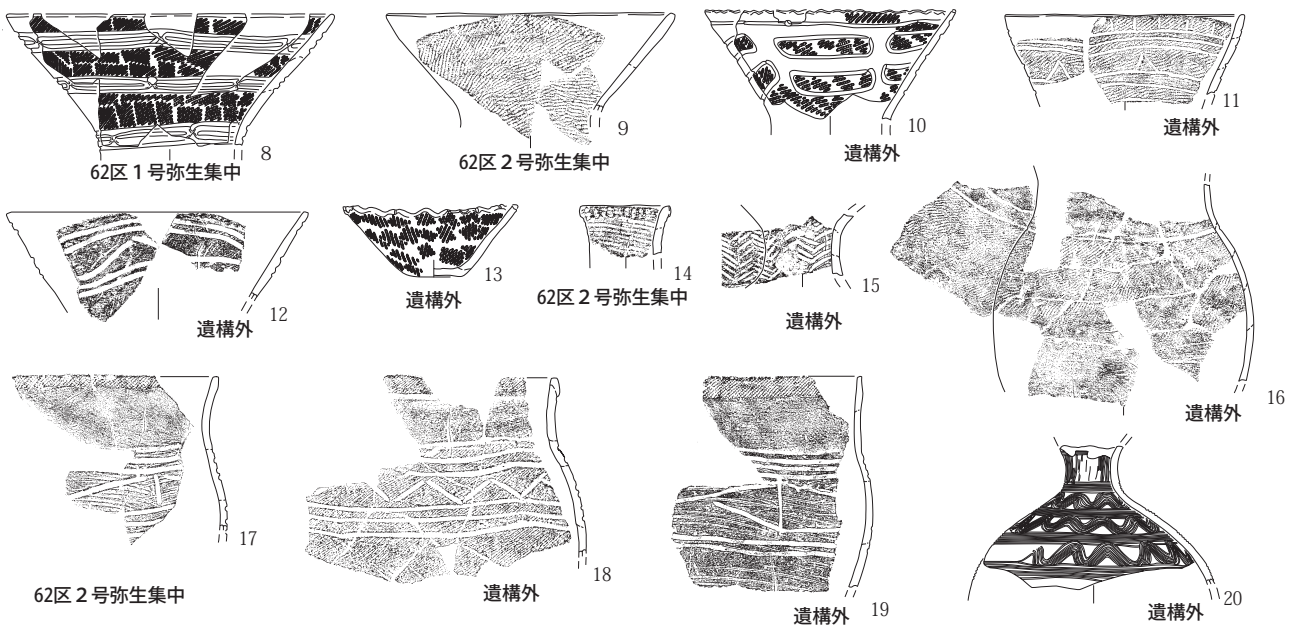


横壁中村遺構外(群埋文2013)

上/平Ⅰ 遺構外(群埋文2017)

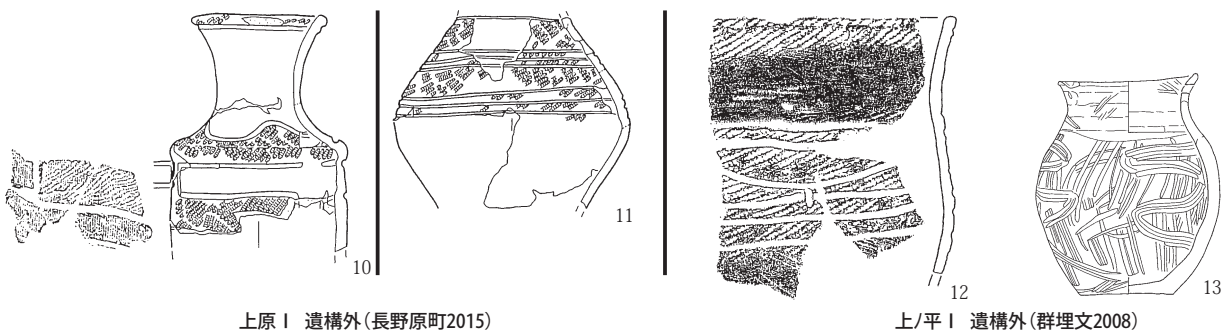
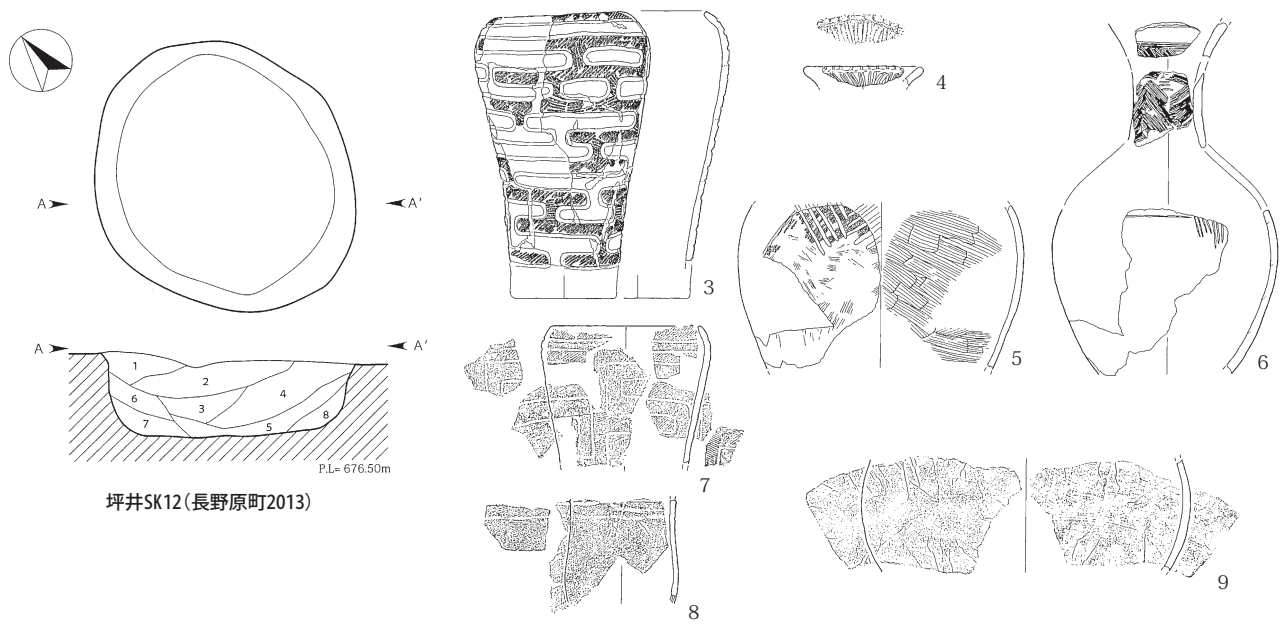
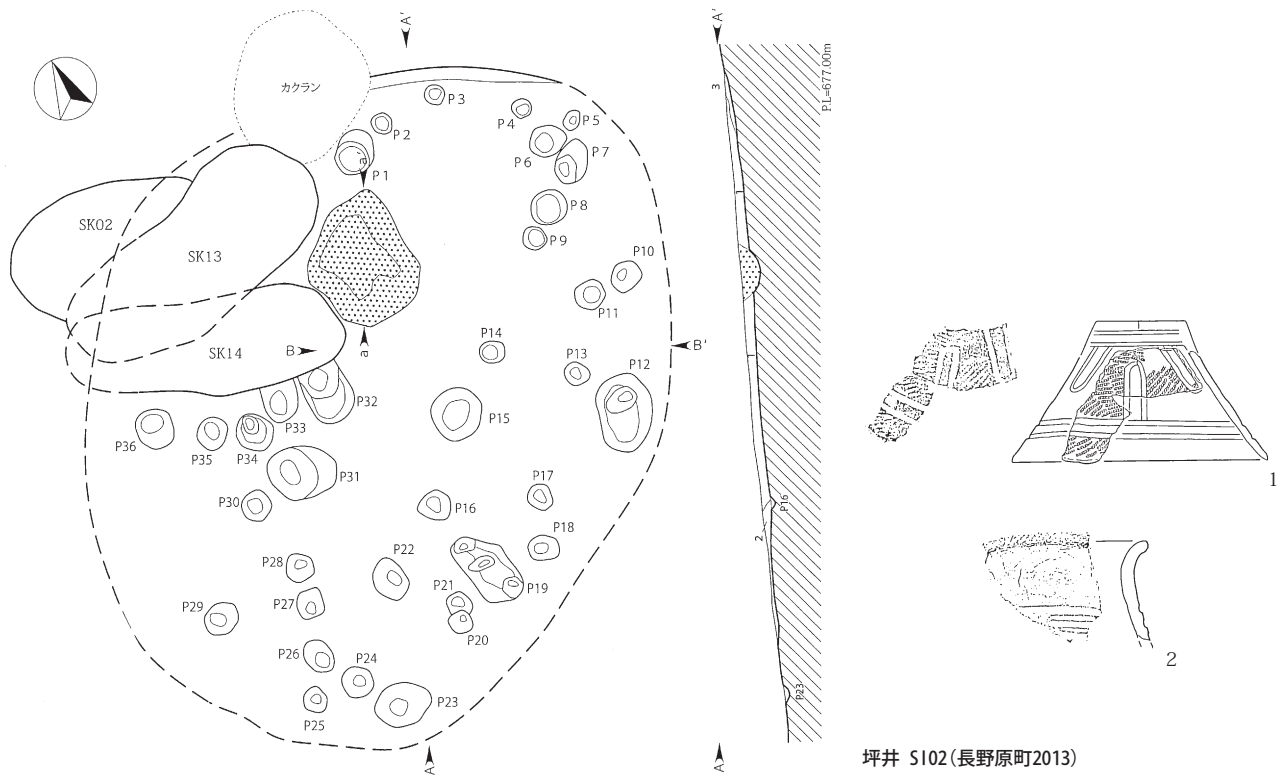
上/平Ⅰ 397坑(遺構外)(群埋文2018)

林中原Ⅱ 遺構外など



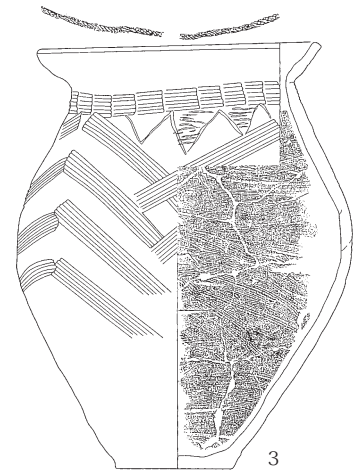
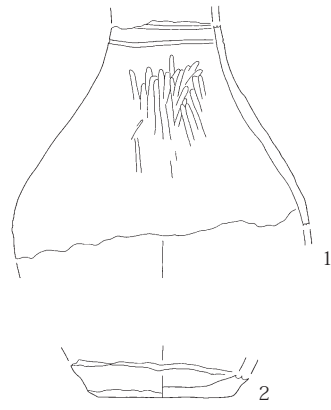
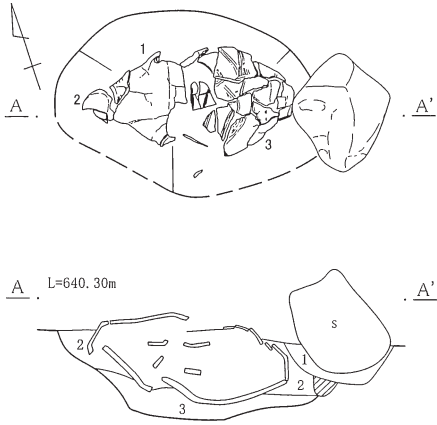
第101図 周辺遺跡の弥生時代資料(7)

弥生時代集中遺構は弥生集中と略した

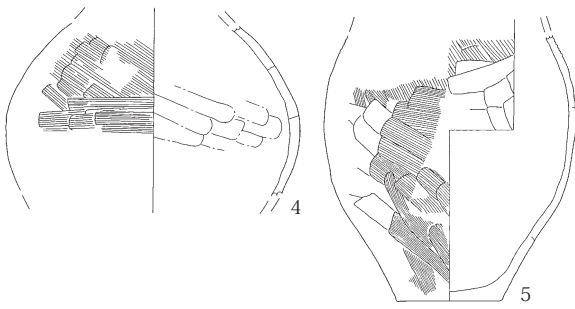


第102図 周辺遺跡の弥生時代資料(8)

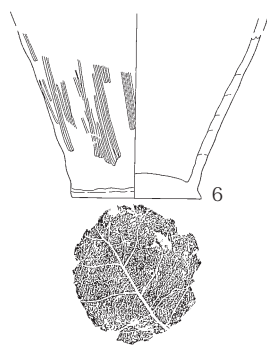
立馬 I 17区58坑(群埋文2006)



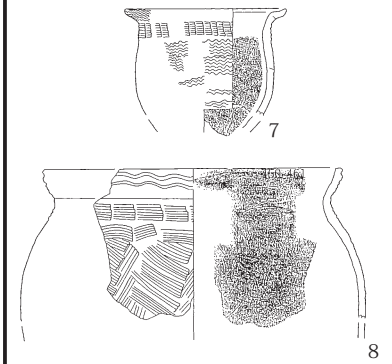
立馬 I 17区72坑(群埋文2006)



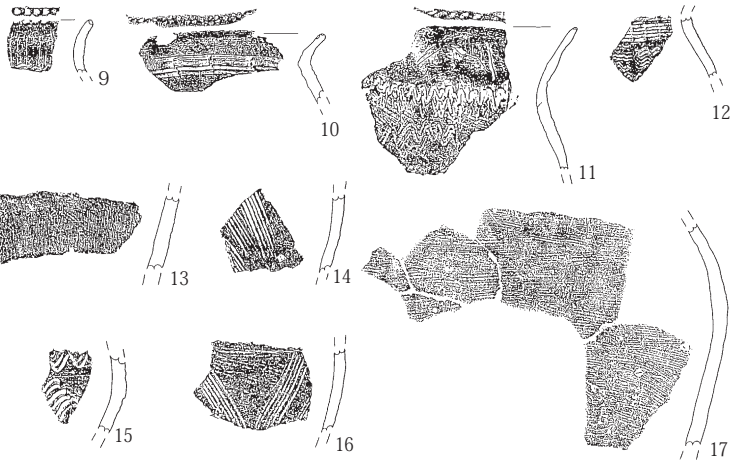
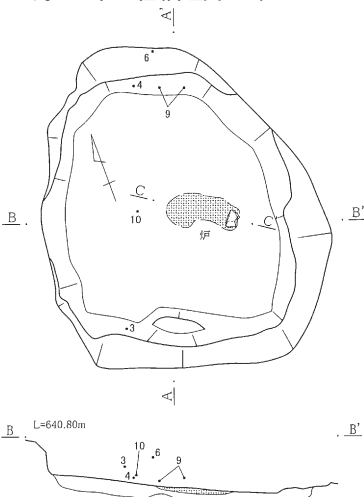
立馬 I 27区1坑(群埋文2006)



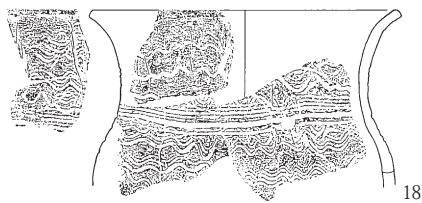
立馬 I 遺構外(群埋文2006)



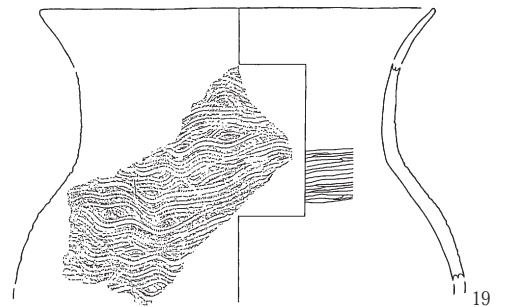
立馬 I 17区3住(群埋文2006)



尾坂 遺構外(群埋文2016)



二社平 遺構外(群埋文2002)



第103図 周辺遺跡の弥生時代資料(9)

時代資料と、周辺遺跡における該期資料と土器様相を概観した。住居跡資料も各段階で見られ、土坑や再埋葬資料と併せて、量的にも増えつつあるといえよう。しかしながら今回、各遺跡出土土器を集成した限りは、長野原町内においては、器種毎の変遷を追えるほど、出土量は多くない。今後は下流域の東吾妻町や中之条町、渋川市の該期資料を検討し、吾妻川流域の弥生時代土器様相をより明確にしていくべきであろう。

ここでは、本節をまとめるにあたり、幾つかの課題も見受けられた。列挙して小結のかわりとした。

(1) 周辺遺跡の様相から

本遺跡のみならず、群馬県内の弥生時代中期遺跡は、殆どが標高の高い山間地に位置しているといえよう。水田耕作には適さず、そのため、弥生時代といえども縄文時代を延長した狩猟採集を生業とした社会を想定しがちである。その一つの要因として、群馬県内の岩陰遺跡の在り方である。本遺跡の近距離にある、東吾妻町にある岩櫃山遺跡(鷹巣山洞窟)、文中でも触れた中之条町有笠山2号洞窟遺跡、みなかみ町八束脛洞窟など、再埋葬などを擁した洞窟遺跡が数多く存在する。そのため、弥生時代前期や中期は、洞窟や岩陰遺跡内あるいはその周辺で生活していた印象を受けるが、上記の洞窟遺跡の多くが、生活に必要な平坦面や安定した動線の確保に難しく、おそらく本来は、本遺跡が立地するような段丘平坦面を生活領域としていたと考える。再埋葬や土器棺墓などの葬送儀礼に伴う施設も、同様な段丘平坦面や山地斜面に設けられ、岩陰に特化した施設ではない。岩陰は日常の葬送儀礼ではなく、非日常の特殊な儀礼空間として利用されていたと思われる。

また、水田耕作に適さない山間地において、生活生業の在り方は、確かに狩猟採集に偏る傾向も理解されよう。しかしながら、本遺跡などの場合、大型石鍬や打製石斧の出土が見られ、農耕具としての位置付けも可能である。また、磨製石斧が横壁中村10区2住で出土しているが、これらも伐採開墾を想起させる道具である。さらに加えて、坪井遺跡SK12出土の筒形土器(第102図3)に対して、レプリカ法による種実圧痕同定を施しており、アワやキビの種子圧痕を得ている(佐々木他2013)。山間地における畑作物として考えられないだろうか。

以上の調査資料から、直接的に当地域における弥生時

代集落で畑作が行われていた物証は得られていないが、石鍬や磨製石斧の出土、アワ・キビの種子の抽出などを併せると、その可能性は高いといえよう。当地域も弥生時代遺構あるいは遺物に集中したあらゆる分析が必要であろう⁵⁾。

山間地弥生時代集落の在り方として、確かに水田耕作には不適な環境ではあるが、段丘平坦面を選び、畑作などの植物性食料へ定着していったのであろう。さらに、岩陰地などの利用は、特殊な儀礼に限られた空間と想定しておきたい。

(2) 出土土器の様相から

次に出土土器を概観した。検出遺構数が少なく、出土土器量は多くはない。そのためか異系統の土器が際立つ存在となっているようだ。例えば、南東北系の浅鉢やヒトデ文を配す壺、さらに東海系の条痕文系土器など様々な地域の土器が混在する様相が看取された。これは、当地域の弥生時代土器群に、主体となる土器群が存在しないということになる。しかしながら、本来は当地域には沖Ⅱ式(沖式)や岩櫃山式、さらに神保富士塚式といった在地型式が知られる。沖Ⅱ式から三角連繫文を系譜する岩櫃山式や磨消文を施す神保富士塚式、条痕文を施す突帯壺など在地色の強い土器群であるが、いずれも他の土器群を凌駕する程の出土量ではない。今回、当地域の該期土器群を概観し、特に前期から中期における土器群の多様性を窺うことができた。今後は、当地域の弥生社会を具体的なイメージを持って理解する上で、土器群を公平な視点で分析する必要がある。

当地域の当該期における在地型式の必要性を声高に訴えるつもりは無く、一部の土器の特徴のみで、在地型式を設定する考えはない。しかしながら、実際の土器群を元に、良好な遺構一括土器を優先して扱い、一定の組み合わせを抽出し、それを周辺地域や周辺土器群との比較分析によって、在地土器群の特徴をより鮮明にし、在地土器群の位置付けに対し、型式として括ることは有効な分析と思われる。

異なった地域の異なった土器群に型式名を付与することは、当地域のみならず周辺地域の該期研究を大きく進めることになるだろう。確かに現在、当地域の弥生時代資料は未だに貧弱な状況である。しかしながら、地道にかつ着実に土器の集成、分析を重ねれば、研究に役立つ地域

土器型式の設定が果たされるだろう。これからの研究の進展が望まれよう。

(3) 調査方法について

当地域の遺跡は、吾妻川流域における河岸段丘上に立地する例が多い。特に弥生時代集落跡は、各段丘面の広い箇所を選んで占拠する傾向が見られた。端的な例が本遺跡であり、坪井遺跡や横壁中村遺跡、尾坂遺跡であろう。各遺跡で住居跡などが調査されているが、殆どの場合、掘り込みの浅い住居跡の検出に終止する。おそらく、弥生時代前期～中期の住居の掘り込み自体が浅く、黒色土中に床面などの生活面が止まっていると思われる。ゆえに調査確認面を下げすぎると、多くの住居跡の確認が果たせなくなる恐れがある。当地域での調査の際には、より深い注意を払う必要がある。

またかつては、弥生面や縄文面の把握に数本のトレンチなどで済ませてしまう調査も見受けられた。弥生時代の遺構は今回扱ったように、広い調査面積の中でも、極めて少数派の存在である。遺物も量的にも少ないため、トレンチなどの狭い面積による下位文化層把握では、確認できないことが多い。様々な工夫が必要であり、より良い調査を進めていただき、当該期の資料が増えることを望みたい。

第2節 まとめにかえて

八ッ場ダム建設に関わる林中原Ⅱ遺跡の報告書刊行を完了する。発掘調査においては、八ッ場ダム事業が大きく揺れ動いた平成21年度にあたり、より円滑な生活再建事業を進める上で、発掘調査も急いだ経緯がある。

本遺跡は縄文時代の遺構・遺物を調査した遺跡として知られる。主に中期後葉から後期前半にかけての集落遺跡で、前期住居跡2軒、中期住居跡94軒、後期住居跡12軒、中期後葉から末葉の掘立柱建物跡4棟、後期初頭から前葉の列石4基、土坑などが調査された。土坑の中には、焼けた人骨片を出土する中期土坑や土器を逆位埋置した後期土坑などがあり、集落内部の墓壙など儀礼空間の在り方も示唆される資料群である。上記の縄文時代遺構・遺物を国道部分と町道部分に分けて2分冊にわたって報告した。

本書は縄文時代遺構・遺物を除いた弥生時代以降の遺構・遺物を扱った第3分冊目である。

掲載した遺構は、

弥生時代(中期前葉を主とする)

住居跡4軒(竪穴状遺構含む)、埋設土器1基、土坑3基、ベンガラ集中遺構2基、弥生時代遺物集中遺構2箇所などである。

詳細は前節で述べたが、当該期の遺跡としては破格の内容を示している。

中世～近世・近・現代

掘立柱建物跡3棟、礎石建物跡3棟(掘立柱建物付帯1棟)、石垣遺構2基、道状遺構1条、井戸遺構2基、溝状遺構2条、土坑墓1基、集石遺構2基、焼土遺構15基、土坑115基などを掲載した。

主に調査区南側にあたる51区と52区に集中する分布傾向を見せ、段丘崖に沿った、近世の村落景観が把握される配置である。その中で、重複する掘立柱建物跡は西接する林中原Ⅰ遺跡で調査された掘立柱建物群との関連性が想定され、今後の検討が必要であろう。

礎石建物3棟を見たが、林地区にあったとされる近世寺院の一つである「大乘院」の存在を示唆する例では無かった。1号礎石建物跡は掘立柱建物と同時に調査され、継続性のある建物として位置付けたい。また、2号礎石建物跡や3号礎石建物跡は南側を調査区域外に延ばすことから、堅牢な建物の存在が想定されよう。

土坑群の中には「桶付帯土坑」とした円形土坑が多く調査されている。水漏れを防ぐ用途なのか、粘土やローム土を土坑外縁や底面に貼る特徴を見せ、底面や側壁には桶の圧痕が残されていた。性格としては、墓壙と便槽の2者が想定されているが、本遺跡で検出した「桶付帯土坑」の多くから銭貨が出土していることから、座棺を付設した墓壙として位置付けておきたい。

近世遺構については、八ッ場ダム地域における水没地区の調査が充実する。天明泥流下の屋敷跡や畑跡、道路や石垣など、当時の村落景観が良好な姿で調査されている。一方、本遺跡の乗る最上位段丘や上位段丘の中世～近世遺跡は、時期の分別などが明瞭に果たせないため、詳細な分析が及ばない現状がある。しかし、天明泥流被害の後、被災住民の多くは上位の段丘に移住したと予想され、それにより最上位・上位段丘面の村落形態は大きく変化したはずである。この動態を把握するためには、1遺跡のデータに止まらず、多くの遺跡の近世資料を巨

第5章 総括

視的に分析するべきである。本遺跡で得られた近世遺構もその一部であり、当地域の近世研究の一助となれば幸いである。

以上のように、林中原Ⅱ遺跡の調査・報告を終わりにしたい。多くの関係者にお世話になりながら、なかなか成果が形にならず、恐縮の至りである。その中で、忙しい発掘調査に携わった発掘作業員の方々、さらに3分冊にわたって、整理作業を進めていただいた整理補助員の皆様に感謝申し上げたい。本報告書がより良く活用されることを望み、まとめとしたい。

なお、前節を進めるにあたり、富田孝彦氏、馬場伸一郎氏、浅間 陽氏に有益なご助言をいただいた。稿末であるが記して感謝したい。

(註)

- 註1 産地同定の結果、すべて星ヶ塔産との結果を得ている。なお、61区2号竪穴状遺構出土の異形石器は小深沢産である。
- 註2 本書ではこのタイプの器形を浅鉢と考えたが、あるいは蓋の可能性もある。今後類例を検証していきたい。
- 註3 「沖Ⅱ式」についての呼称は、「沖式」とするべき意見もあるが、ここでは設定者の鈴木正博氏にならった。いずれは研究者間の統一が望まれよう。
- 註4 ハッ場ダム地域より下流の東吾妻町には、著名な岩櫃山遺跡—鷹ノ巣洞窟や前畑遺跡が知られる。さらに昨年度、当事業団で万木沢B遺跡が調査され大型溝より縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物が大量に出土している。
- 註5 西毛地域では、安中市中野谷原遺跡の弥生中期土器に対して種実圧痕分析を施している(設楽他2014)。アワ、キビの圧痕が抽出され、イネも少量見られている。また、坪井遺跡では炭化材の樹種同定も併せて行い、SI01跡からはクリ、SK12出土の炭化材はクリ、クスノキ、クヌギが得られている。種子圧痕の同定作業と同様に炭化材なども分析し、当時の有用植物の様相を明らかにするべきであろう。

(参考文献)

- 浅間 陽 2017 「沖Ⅱ式・有文甕の成立と展開—沖Ⅱ式土器の型式論的再構成へむけて—」『地域考古学』2号、pp.43-54 地域考古学研究会
- 荒巻 実他 1986 『C11 沖Ⅱ遺跡』 藤岡市教育委員会
- 飯島義雄 1988 「所謂「三角連繫文」の構造とその系譜」『群馬の考古学』、pp.189-198 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下群埋文)
- 飯島義雄 1993 「変形工字文の構造」『研究紀要』11、pp.31-50群埋文
- 飯島義雄・石田真他 1998 「前畑遺跡」吾妻町教育委員会
- 石川日出志 2003 「神保富士塚式土器の提唱と弥生中期土器研究上の意義」『土曜考古』第27号、pp.27-53 土曜考古学研究会
- 井上慎也他 2004 「中野谷原遺跡」『中野谷地区遺跡群2』安中市教育委員会
- 井上慎也他 2014 「上人見遺跡」『西横野東部地区遺跡群〈第2分冊〉』安中市教育委員会
- 梅沢重昭ほか 2015・2017 「安中市上人見遺跡における弥生再葬墓の考察(1)・(2)」『群馬県立歴史博物館紀要』36・38、pp.75-96 群馬県立歴史博物館
- 小宮山達雄 2015 「第9編 第2章 本調査における弥生土器について」『林地区遺跡群』3分冊、pp.49-52 長野原町教育委員会
- 佐々木由香他 2013 「(3)土器の種実圧痕の同定」『町内遺跡Ⅱ』、pp.41-43 長野原町教育委員会

- 設楽博己 1996 「第V章特論I 弥生前期土器とその細別」『天引狐崎遺跡Ⅱ』、pp.256-265 群埋文
- 設楽博己・高橋克範 2014 「西関東地方における穀物栽培の開始」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集、pp.511-530 国立歴史民俗博物館
- 設楽博己他 2017 「特集 弥生文化のはじまり」『季刊考古学』第138号(株)雄山閣
- 篠原正洋 2005 「115、116の埋設土器について」『川原湯勝沼遺跡(2)』、p.70 群埋文
- 杉原莊介 1967 「群馬県岩櫃山における弥生時代の墓址」『考古学集刊』第3巻第4号、pp.37-68 東京考古学会
- 鈴木正博 2003 「脱条痕文縁辺文化」研究序説—弥生式「zigzag文様帯系土器群」と「脱条痕文」に観る相互作用と「共同の母体」観』『婆良岐考古』25、pp.37-68 婆良岐考古同人会
- 徳山寿樹 1989 「北関東西部における弥生前半の有文甕形土器—「縦区画」・「縦区切り」系土器群について」『土曜考古』14、pp.9-19 土曜考古学研究会
- 富田孝彦他 2013 「坪井遺跡 VIまとめ」『町内遺跡Ⅱ』、p.44 長野原町教育委員会
- 外山和夫他 1977 『有笠山2号洞窟遺跡』中之条町教育委員会
- 若狭 徹 1992 「北西関東における弥生土器の成立と展開」『駿台史学』84、pp.16-61 駿台史学会
- 若狭 徹 1996 「編年論 群馬県地域」『Y A Y ! 弥生土器を語る会20 回到達記念論集』、pp.222-234 弥生土器を語る会

(挿図出典の発掘調査報告書)

- 麻生敏隆 2018 『上ノ平Ⅰ遺跡(3)』群埋文
- 飯森康広 2006 『立馬Ⅰ遺跡』群埋文
- 小野和之 2016 『尾坂遺跡(2)』群埋文
- 黒沢輝弘 2008 『横壁中村遺跡(6)土坑編』群馬文
- 篠原正洋他 2005 『川原湯勝沼遺跡(2)』群埋文
- 瀧川仲男 2008 『上ノ平Ⅰ遺跡(1)』群埋文
- 谷藤保彦 2017 「第3章 久々戸遺跡」『上原Ⅲ遺跡(2)・久々戸遺跡(3)』群埋文
- 富田孝彦 2013 『三平Ⅰ遺跡』長野原町教育委員会
- 富田孝彦他 2013 「坪井遺跡Ⅱ」『町内遺跡Ⅱ』長野原町教育委員会
- 富田孝彦他 2015 「上原Ⅰ遺跡」『林地区遺跡群』長野原町教育委員会
- 洞口正史 2017 『上ノ平Ⅰ遺跡(2)』群埋文
- 藤巻幸男 2013 『横壁中村遺跡(13)』群埋文
- 松原孝志他 2002 「二社平遺跡」『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』群埋文
- 山口逸弘 2014 『横壁中村遺跡(14)』群埋文

遺構計測表・遺物観察表

《遺 構》

住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物・礎石建物

計測値：長軸に直交する短軸を併せた数値を記述した。深さは安定した床面から、平均的な確認面までの数値を記した。壁などが残存していない場合は-で表現した。

方 位：主軸方位を真北からの角度で表した。

施 設：炉、貯蔵穴など主な施設を記した。

遺 物：主な出土遺物を記した。

焼土・集石・土坑

平面形：円形、不整円形、楕円状、不整楕円状、長方形、方形、不整方形から選んだ。

計測値：長軸と短軸は直交位置で計測した。深さは底面から確認面までの距離である。

《遺 物》

出土位置：挿図に番号が記された遺物は、平面位置と断面位置を記した。ただし、調査記録が無い場合はこの限りではない。

胎 土：土器の夾雑物を記した。混和材としての砂粒が2mm以上を粗砂粒、2mm以下は細砂粒とした。混和材中の特徴的な鉱物粒として、石英・輝石を基準とし、片岩・雲母などが含まれた場合も明記した。また、繊維や海綿状骨針なども胎土の一つとして記している。

焼 成：良好な例を標準とし、焼成温度が低く土器胎土が弱い順に、やや良好、脆弱あるいは不良と記した。

色 調：土器の表面色調を優先した。また陶磁器は断面色調を記した。名称は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠したが、色調名を優先し、マンセル値は併記していない。

石 材：石器、石製品の石材名を記した。

計測値：土器は口径・底径・高さを基準に残存した部位を計測した。1/2以下の復元値は（）で記した。破片資料の現存値は記していない。石器は長さ・幅・厚さ・重量を計測し、欠損品は現存値を（）で記した。

成形・整形の特徴：器形・形態など出土遺物の特徴を主に記した。弥生土器は器形、文様構成を主とした記載で、文様要素や原体を併記した。陶磁器類は外面意匠を主に記した。石製品、鉄製品は主な特徴を記している。

備 考：弥生土器は時期の目安として、前期、中期、後期と大凡の段階を記した。中世以降の遺物も中世、近世、近・現代とした。

遺構計測表

表4 遺構計測表（土坑は別表）

弥生時代

遺構名	長軸	短軸	深さ	主軸方位	グリッド位置	主な重複遺構	出土遺物など
61区40号住居跡	560.0	(410.0)	15.0	N-25°-W	61-X・Y-5・6	1・2号埋設土器	浅鉢・甕・壺・石鍬など
炉1	88.0	72.0	23.0	N-7°-W	—	2号ベンガラ集中	
炉2	100.0	75.0	24.0	N-7°-W	—		
62区1号住居跡	390.0	370.0	25.0	N-70°-E	62-B・C-4・5		浅鉢・甕・壺など
炉	115.0	105.0	9.0	N-10°-W	—		
	P1=24.0×23.0×27.0			P2=37.0×32.0×24.0			
遺構名	長軸	短軸	深さ	主軸方位	グリッド位置	平面形状	出土遺物など
61区1号竪穴状遺構	450.0	(230.0)	17.0		V・W-7	(円形)	壺・浅鉢・打斧など
61区2号竪穴状遺構	370.0	(280.0)	20.0		T・U-7・8	(楕円形)	甕・壺・異形石器など
61区1・2号埋設土器	76.0	51.0	11.0		X-6	楕円形	甕・壺
61区1号ベンガラ集中	108.0	(65.0)	15.0		X-8	不整形	甕2
61区2号ベンガラ集中	141.0	(103.0)	3.0		X-6	楕円形	なし

中世～近・現代

遺構名	長軸	短軸	深さ	主軸方位	グリッド位置	主な重複遺構	出土遺物など
52区1号掘立柱建物	860.0	470.0		N-86°-E	H~J-15・16	52区2・3号掘立	石臼
P1	50.0	47.0	38.0			不整円形	
P2	61.0	49.0	35.0			不整楕円形	
P3	33.0	32.0	8.0			円形	
P4	51.0	45.0	35.0			楕円形	
P5	48.0	43.0	28.0			楕円形	
P6	48.0	44.0	20.0			楕円形	
P7	39.0	36.0	10.0			楕円形	
P8	34.0	30.0	19.0			楕円形	
P9	52.0	40.0	15.0			楕円形	
P10	43.0	39.0	16.0			楕円形	
P11	34.0	32.0	26.0			円形	
P12	28.0	25.0	23.0			楕円形	
P13	42.0	35.0	16.0			楕円形	
P14	49.0	45.0	39.0			楕円形	
P15	48.0	(40.0)	29.0			(楕円形)	
P16	60.0	52.0	15.0			楕円形	
P17	54.0	50.0	31.0			楕円形	
P18	45.0	41.0	14.0			不整楕円形	
P19	(30.0)	28.0	6.0			(楕円形)	
P20	44.0	39.0	27.0			楕円形	
P21	36.0	32.0	25.0			楕円形	
P22	44.0	43.0	25.0			円形	
P23	41.0	36.0				楕円形	
柱穴間	P1-P2 : 306.0、P2-P3 : 183.0、P3-P4 : 178.0、P4-P5 : 186.0、P5-P6 : 342.0、P6-P7 : 202.0、P7-P8 : 206.0、P8-P9 : 144.0、P9-P10 : 304.0、P10-P11 : 364.0、P11-P12 : 97.0、P12-P13 : 127.0、P17-P18 : 179.0、P18-P19 : 138.0、P19-P20 : 31.0、P20-P21 : 168.0、P21-P22 : 200.0、P22-P23 : 195.0						
52区2号掘立柱建物	730.0	600.0		N-87°-E	I~K-14~16	52区1・3号掘立	
P1	63.0	47.0	27.0			不整楕円形	
P2	58.0	50.0	34.0			不整楕円形	
P3	54.0	50.0	50.0			不整長方形	
P4	41.0	35.0	22.0			楕円形	
P5	52.0	47.0	14.0			楕円形	
P6	44.0	(25.0)	5.0			(楕円形)	
P7	52.0	50.0	15.0			円形	
P8	42.0	39.0	32.0			楕円形	
P9	73.0	64.0	57.0			楕円形	
P10	46.0	40.0	30.0			(不整形)	
P11	34.0	26.0	34.0			不整楕円形	
P12	(45.0)	42.0	14.0			(楕円形)	
P13	25.0	20.0	6.0			楕円形	
P14	22.0	18.0	4.0			楕円形	
P15	29.0	28.0	6.0			円形	
P16	23.0	16.0	12.0			楕円形	
柱穴間	P1-P2 : 178.0、P2-P3 : 236.0、P3-P4 : 227.0、P4-P5 : 76.0、P5-P6 : 448.0、P6-P7 : 167.0、P7-P8 : 257.0、P8-P9 : 123.0、P9-P10 : 190.0、P10-P11 : 451.0、P11-P13 : 160.0、P13-P14 : 179.0、P14-P15 : 242.0、P15-P16 : 138.0						

遺構名	長軸	短軸	深さ	主軸方位	グリッド位置	主な重複遺構	出土遺物など
52区3号掘立柱建物	550.0	460.0		N-84°-E	I・J-15・16	52区1・2号掘立	
P1	64.0	43.0	18.0			(不整形)	
P2	(66.0)	45.0	21.0			(不整楕円形)	
P3	(47.0)	39.0	14.0			(不整形)	
P4	44.0	36.0	14.0			楕円形	
P5	52.0	37.0	14.0			不整形	
P6	40.0	38.0	28.0			不整円形	
P7	47.0	36.0	29.0			楕円形	
P8	49.0	41.0	30.0			楕円形	
P9	39.0	34.0	21.0			不整円形	
P10	36.0	33.0	18.0			楕円形	
柱穴間	P1-P2: 182.0、P2-P3: 180.0、P3-P4: 183.0、P4-P5: 127.0、P5-P6: 340.0、P6-P7: 190.0、P7-P8: 182.0、P8-P9: 183.0、P9-P10: 88.0、P10-P1: 372.0						
51区1号掘立柱建物	480.0	270.0		N-74°-E	Q-20・21	1号礎石建物	
P1	48.0	30.0	31.0			楕円形	
P2	33.0	31.0	35.0			円形	
P3	35.0	29.0	37.0			楕円形	
P4	40.0	35.0	53.0			楕円形	
柱穴間	P1-P2: 178.0、P2-P3: 326.0、P3-P4: 178.0、P4-P1: 245.0						
51区1号礎石建物	A-A'=308.0、B-B'=410.0、 C-C'=310.0、D-D'=575.0			N-15°-W	0・P-19~21	51区1号掘立	染付碗
51区2号礎石建物	A-A'=158.0、B-B'=176.0				Y-13		
51区3号礎石建物	A-A'=(430.0)				N・0-20		火打ち石
52区1号石垣遺構	1100.0			N-84°-E	A~C-18、51区Y-18		染付碗
52区2号石垣遺構	1640.0			N-84°-E	A~C-17、51区X・Y-17・18		染付皿
52区1号道	(2405.0)	43.0~110.0		N-84°-E	A~C-17・18、51区V~Y-18		

遺構名	長軸	短軸	深さ	主軸方位	グリッド位置	形状	出土遺物など
52区1号井戸	—	—	—	計測不可	A-17	不明	
51区1号井戸	245.0	233.0	175.0	N-86°-W	R-17・18	楕円形	
51区1号溝	(778.0)	24.0~31.0	1.0~5.0	N-62°-E	0~Q-23・24	—	
51区2号溝	(693.0)	57.0~73.0	7.0~26.0	N-70°-E	T・U-19・20	—	
51区1号土坑墓	101.0	65.0	16.0	N-11°-W	V・W-16・17	不整長方形	貨銭
51区7号集石	339.0	138.0	6.0	N-26°-W	M-21・22	不整楕円形	鉄釘
51区10号集石	111.0	66.0	18.0	N-15°-W	X-16	不整形	貨銭、片口鉢
51区35号焼土	95.0	66.0	3.0		R-21	不整形	
51区48号焼土	489.0	376.0	17.0		W・X-14・15	不整形	片口鉢、染付皿、砥石、 刀子、貨銭多数
51区49号焼土	96.0	78.0	12.0		X・Y-14	不整形	
51区52号焼土	150.0	107.0	15.0		W・X-16	不整楕円形	内耳土器、染付皿、石臼
51区53号焼土	118.0	68.0	11.0		K-24・25	不整形	
51区67号焼土	61.0	55.0	1.0		S-20	不整形	
51区84号焼土	48.0	34.0	-4.0		Q-17	楕円形	
51区85号焼土	69.0	40.0	-7.0		S-16	不整形	
52区1号焼土	277.0	277.0	277.0		H-14	不整形	
52区18号焼土	231.0	109.0	15.0		A・B-15	不整形	染付碗、瓶、火鉢、貨銭
52区19号焼土	57.0	46.0	10.0		A-15・16	不整形	搦き杵の重り?
61区1号焼土	77.0	62.0	-2.0		U-10	楕円形	
61区2号焼土	50.0	26.0	-1.0		S-7・8	不整形	
61区8号焼土	88.0	73.0	12.0		T-9	不整円形	
62区3号焼土	138.0	90.0	2.0		F-4	不整形	

遺構計測表

51区土坑

遺構名	平面形状	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
3号土坑	不整楕円形	85.0	69.0	20.0	Q-23
9号土坑	不整円形	72.0	62.0	22.0	P-21
12号土坑	(不整形)	(436.0)	154.0	11.0	U・V-23
14号土坑	(楕円形)	96.0	(31.0)	22.0	V-22
15号土坑	(不整形)	163.0	(118.0)	17.0	V-22・23
16号土坑	不整楕円形	219.0	148.0	146.0	O・P-25
17号土坑	(不整形)	163.0	(57.0)	14.0	V-22
19号土坑	不整長方形	198.0	97.0	103.0	O・P-24
20号土坑	不整楕円形	199.0	147.0	169.0	O・P-25
23号土坑	不整円形	161.0	150.0	46.0	N・O-25、 61-N・O-1
24号土坑	(不整円形)	125.0	(102.0)	29.0	61-N・O-1
25号土坑	不整円形	88.0	78.0	24.0	N-25
26号土坑	不整円形	82.0	78.0	19.0	N-25
27号土坑	(不整円形)	103.0	(68.0)	15.0	N-25
28号土坑	(不整円形)	67.0	60.0	24.0	N-25
46号土坑	不整円形	116.0	111.0	27.0	M・N-25
47号土坑	不整円形	109.0	94.0	3.0	N-25
48号土坑	不整長方形	200.0	130.0	125.0	N-24・25
102号土坑	不整長方形	118.0	56.0	17.0	V・W-20
103号土坑	不整長方形	90.0	47.0	60.0	W-20
106号土坑	長方形	149.0	88.0	68.0	P-20
110号土坑	(不整長方形)	117.0	66.0	43.0	W-20
150号土坑	不整形	298.0	216.0	56.0	K・L-24・25
170号土坑	(不整楕円形)	139.0	119.0	22.0	J-24
178号土坑	不整円形	62.0	59.0	28.0	Y-15
179号土坑	円形	80.0	78.0	37.0	Y-15
180号土坑	円形	89.0	83.0	44.0	X-15
183号土坑	不整円形	94.0	87.0	40.0	X-14・15
184号土坑	不整円形	90.0	88.0	36.0	X-15
185号土坑	—	(118.0)	—	73.0	I・J-24・25
186号土坑	(不整楕円形)	118.0	(97.0)	98.0	I-24
187号土坑	—	(63.0)	(23.0)	63.0	I-24
188号土坑	(不整形)	(260.0)	—	75.0	I・J-24
189号土坑	(不整形)	(218.0)	(194.0)	33.0	I・J-24
190号土坑	不整形	312.0	231.0	75.0	J・K-25
253号土坑	不整長方形	221.0	138.0	43.0	V-15
257号土坑	不整円形	110.0	107.0	44.0	L-18
269号土坑	不整円形	113.0	103.0	16.0	M-17・18
313号土坑	(不整長方形)	195.0	(131.0)	34.0	R-19

52区土坑

遺構名	平面形状	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
1号土坑	不整円形	114.0	106.0	21.0	H-15
2号土坑	不整長方形	204.0	150.0	33.0	H-15
3号土坑	不整円形	102.0	86.0	28.0	H-12
4号土坑	不整円形	99.0	91.0	22.0	H-12
6号土坑	不整円形	96.0	91.0	18.0	G-14
7号土坑	不整円形	96.0	93.0	32.0	H-12
9号土坑	不整円形	50.0	47.0	10.0	J-14
10号土坑	(不整円形)	(77.0)	(61.0)	28.0	G-12
11号土坑	(不整円形)	76.0	(45.0)	33.0	H-12
12号土坑	不整楕円形	137.0	117.0	50.0	H-13
13号土坑	不整円形	183.0	147.0	71.0	H-13・14
14号土坑	(不整形)	(145.0)	(41.0)	51.0	H-13
15号土坑	不整円形	103.0	99.0	22.0	H-13
16号土坑	不整形	142.0	101.0	49.0	F-12・13
17号土坑	(不整円形)	91.0	(67.0)	33.0	J-13
18号土坑	不整円形	84.0	81.0	22.0	J-13
19号土坑	不整円形	123.0	107.0	45.0	G-14
20号土坑	(不整円形)	(73.0)	(56.0)	26.0	F・G-14
21号土坑	不整楕円形	215.0	111.0	30.0	F-15
22号土坑	不整円形	98.0	89.0	53.0	E-15
23号土坑	不整円形	70.0	58.0	20.0	D-15
24号土坑	不整楕円形	81.0	73.0	14.0	E-14
25号土坑	不整楕円形	139.0	104.0	116.0	H-11
26号土坑	楕円形	115.0	62.0	21.0	I・J-12
27号土坑	不整長方形	173.0	87.0	35.0	F-13
28号土坑	不整円形	108.0	91.0	26.0	F-13

遺構名	平面形状	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
29号土坑	不整円形	91.0	88.0	34.0	F・G-13
31号土坑	不整楕円形	117.0	85.0	24.0	H-11
32号土坑	不整円形	98.0	95.0	55.0	G-13
33号土坑	不整円形	105.0	90.0	33.0	G-13
34号土坑	(不整楕円形)	213.0	(77.0)	32.0	F・G-13
35号土坑	(不整形)	162.0	(93.0)	25.0	F・G-13
36号土坑	不整楕円形	76.0	23.0	14.0	J-14
37号土坑	不整円形	99.0	97.0	54.0	K-13
38号土坑	(不整円形)	(60.0)	(56.0)	22.0	F-15
40号土坑	(不整長方形)	(207.0)	68.0	15.0	D-12
41号土坑	(不整円形)	103.0	100.0	55.0	H-13・14
42号土坑	(不整楕円形)	(148.0)	(115.0)	40.0	F-13
43号土坑	不整円形	86.0	79.0	31.0	H-13・14
44号土坑	不整楕円形	88.0	57.0	14.0	F・G-12
45号土坑	不整円形	148.0	143.0	70.0	H-13
46号土坑	不整長方形	50.0	38.0	11.0	E-13
47号土坑	(不整円形)	114.0	(109.0)	68.0	E・F-19
51号土坑	不整長方形	196.0	46.0	48.0	C-21
52号土坑	不整長方形	191.0	44.0	51.0	B-20
88号土坑	不整長方形	198.0	79.0	45.0	C-12・13
89号土坑	不整長方形	165.0	75.0	68.0	C-13
91号土坑	不整長方形	130.0	71.0	43.0	B-12

61区土坑

遺構名	平面形状	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
2号土坑	不整楕円形	50.0	37.0	29.0	P-11
5号土坑	(不整形)	38.0	(32.0)	25.0	P-11
8号土坑	不整円形	49.0	44.0	53.0	P-9
9号土坑	不整楕円形	37.0	31.0	20.0	P-11
11号土坑	不整楕円形	109.0	62.0	14.0	P-8・9
12号土坑	不整楕円形	347.0	78.0	11.0	O・P-7
13号土坑	(不整形)	68.0	(42.0)	20.0	P-8・9
14号土坑	不整長方形	213.0	106.0	66.0	U-7
15号土坑	不整長方形	221.0	116.0	67.0	U-6
16号土坑	不整長方形	199.0	86.0	75.0	V-7
22号土坑	不整長方形	190.0	77.0	70.0	V-8
23号土坑	不整形	86.0	71.0	34.0	P-11
26号土坑	不整円形	83.0	73.0	30.0	O-1
27号土坑	不整円形	82.0	75.0	41.0	O-1
28号土坑	(不整円形)	68.0	(41.0)	19.0	N-1・2
29号土坑	不整形	149.0	135.0	62.0	N-1
30号土坑	不整形	127.0	65.0	28.0	M-1
31号土坑	不整円形	77.0	67.0	24.0	M-1・2
32号土坑	不整円形	103.0	101.0	11.0	M-2
34号土坑	不整円形	119.0	109.0	12.0	L-1
35号土坑	不整円形	111.0	104.0	6.0	L-1、51-L-25
36号土坑	不整円形	94.0	90.0	34.0	L-1
67号土坑	不整楕円形	77.0	60.0	48.0	S-6
71号土坑	不整円形	90.0	79.0	62.0	T-7
72号土坑	不整楕円形	84.0	65.0	67.0	S-6・7

62区土坑

遺構名	平面形状	長軸	短軸	深さ	グリッド位置
1号土坑	円形	80.0	78.0	27.0	B-4 (弥生)
3号土坑	楕円形	114.0	82.0	37.0	C-5・6 (弥生)
7号土坑	(不整楕円形)	81.0	(53.0)	22.0	D-7
12号土坑	不整円形	125.0	118.0	107.0	B-5
36号土坑	不整楕円形	87.0	62.0	30.0	E-4 (弥生)

表5 遺物観察表

61区40号住居跡

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口	底	厚				
第12図 PL.27	1	弥生土器 浅鉢?	床直 口縁部1/4残存	口	(16.4)		細砂:石英・輝石/ 良好/黒褐色	口縁部に横位沈線2条を設ける。以下沈線で画された三角 形状の磨消部区画が縦位に配される。縄文は横位LR。内 外面研磨。あるいは蓋か	中期前葉	
第12図 PL.27	2	弥生土器 壺	床直 口縁部1/5残存	口	(11.0)		粗砂:石英・片岩/ 良好/橙色	口唇部に面を持ち縄文LRを施す。口縁部横位沈線を設け、 以下頸部から体部上半に横位沈線を多段に施す。縄文は横 位LR。内面斜位撫で調整	中期前葉	
第12図 PL.27	3	弥生土器 甕?	埋土 底部のみ残存	底	4.1		粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい橙色	底端部張り出し、外反気味に開く体部下半。外面縦位撫で、 内面横位撫で調整。底面網代痕が残る	中期前葉	
第12図 PL.27	4	弥生土器 甕	床直 口縁部破片				粗砂:石英/良好/ にぶい橙色	口縁部に横位LRを施し、横位沈線を加える。内面撫で調 整	中期前葉	
第12図 PL.27	5	弥生土器 浅鉢	埋土 体部破片				細砂:石英・雲母/ 良好/明褐色	横位・斜位沈線で画された磨消部横長三角形区画。細縄文 LRを充填する。内面平滑な撫で調整	中期前葉	
第12図 PL.27	6	弥生土器 甕	床直 体部破片				粗砂:石英/やや軟 /橙色	横位沈線を設け、下位に細縄文LRを施す。器面摩滅	中期前葉	
第12図 PL.27	7	弥生土器 甕	埋土 体部破片				細砂:輝石/良好/ 灰褐色	体部上半に横位沈線を設け以下横位LRを施す縄文帯を配 す。下半は無文。内面横位削り調整	中期前葉	
第12図 PL.27	8	弥生土器 筒形土器	床直 体部破片4点				細砂:石英/良好/ にぶい橙色	体部上半に横位沈線2条に画されたLR施文部を設け以下 沈線で画された方形状意匠を配す。意匠内はLRを充填し 中位には横位・縦位沈線を加える。内面平滑な撫で調整	中期前葉	
第12図 PL.27	9	弥生土器 壺	床直 体部破片				粗砂:石英・雲母/ 良好/にぶい赤褐 色	肩部～体部上半か。相向する斜位短沈線による縦位矢羽状 文を施す。中位は斜位条痕を充てる。内面撫で調整、凹凸 顕著	中期前葉	
第12図 PL.27	10	弥生土器 壺	埋土 体部破片				細砂:石英・片岩/ 良好/にぶい橙色	斜位密接条痕を施し横位矢羽状文を配す。内面横位撫で調 整	中期前葉	
第12図 PL.27	11	弥生土器 壺?	埋土 体部破片2点				細砂:石英/やや軟 /浅黄褐色	頸部外反し肩部内湾する。頸部は横位沈線3条で画され上 位に横位LRを充填する。下位は横位・斜位の条痕を施す。 内面撫で	中期前葉	
第12図 PL.27	12	弥生土器 甕	埋土 体部破片				細砂:石英/良好/ にぶい橙色	体部下半。横位・斜位条痕が器面を覆う。縦位矢羽状の効 果を見せる。内面弱い研磨。下位に被熱痕跡を見る	中期前葉	
第12図 PL.27	13	弥生土器 甕	床直 体部破片				細砂:石英・輝石/ やや軟/橙色	下半に内湾部を設ける。浅い横位・斜位条痕を施す。器面 摩滅。内面撫で	中期前葉	
第12図 PL.27	14	弥生土器 壺?	床直 体部破片4点				粗砂:石英・雲母/ 良好/灰褐色	幅広の条痕が横位弧状に施される。内面撫で調整	中期前葉	
第12図 PL.27	15	弥生土器 甕	埋土 体部破片3点				粗砂:石英・片岩/ やや軟/橙色	4・5条単位の斜位条痕が施される。内面撫で調整。器面 摩滅	中期前葉	
第12図 PL.27	16	弥生土器 甕?	埋土 体部破片				細砂:石英/良好/ にぶい褐色	斜位条痕を施す。内面横位撫で調整	中期前葉	
第12図 PL.27	17	弥生土器 甕	埋土 体部破片				粗砂:石英・片岩/ やや軟/にぶい橙 色	肩部か。横位・斜位条痕を施す。内面撫で調整。器面摩滅	中期前葉	
第13図 PL.27	18	打製石斧	埋土 ほぼ完形	長 幅	14.0 5.7	厚 重	1.5 152.7	細粒輝石安山岩	短冊形。両側縁に細かな調整剥離を加え薄手に仕上げる。 刃部に顕著な使用痕はない。裏面上半に加熱による剥落を 見る	
第13図 PL.27	19	大型石鎌	埋土 完形	長 幅	22.9 9.9	厚 重	3.5 941.6	細粒輝石安山岩	撥形。表面下半に広く礫面を残し、大きく湾曲する。頭部 調整は粗く下半両側縁に調整剥離を加える。刃部使用痕は 僅か	
第13図 PL.27	20	大型石鎌	埋土 完形	長 幅	20.1 9.5	厚 重	4.0 900.6	細粒輝石安山岩	撥形。厚手で大きく湾曲する。側縁からの粗い剥離調整を 加える。側縁に潰れ、刃部に僅かな摩滅痕を見る	
第13図 PL.27	21	打製石斧	床直 下半欠損	長 幅	8.6 6.5	厚 重	2.6 225.9	細粒輝石安山岩	短冊形か。完成状態。比較的細かな剥離で、側縁上位に括 れを設ける。頭部を中心に摩滅痕を見る	
第13図 PL.27	22	磨石	床直上 破片	長 幅	(8.0) (5.8)	厚 重	2.5 128.8	細粒輝石安山岩	楕円状円礫か。表面に平滑な磨面を見る。下端の欠損面が 直線状をなすが意図的な所産ではない	
第13図 PL.27	23	敲石	床直 ほぼ完形	長 幅	11.2 9.0	厚 重	5.2 816.1	細粒輝石安山岩	やや厚手の不整楕円状円礫。敲打痕は上下端部に集中する。 表裏面に平滑面を見る	

62区1号住居跡

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口	底	高				
第17図 PL.28	1	弥生土器 甕	埋土 口縁～体部上半 1/3残存	口	(23.0)		粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい橙色	口縁部僅かに肥厚し横位LRを施す。頸部は撫でによる半 肉彫手法により段を有す。体部上半は沈線で画された横長 楕円状意匠が連続する。横位LRを施す。下半は斜位条痕 を施す。内面弱い撫で	中期前葉	
第17図 PL.28	2	弥生土器 壺?	埋土 体部下～底部 1/3残存	底	(8.6)		粗砂:石英・褐色粒 /やや軟/黄褐色	筒形の壺か。直立する体部下。横位沈線に画された施文 部に横位LRを施す。上位に弧状沈線を配す。内面弱い撫 で	中期前葉	
第17図 PL.28	3	弥生土器 壺?	埋土 体部下～底部 2/3残存	底	5.0		細砂:石英・雲母/ やや軟/にぶい黄 褐色	直線的に強く開く体部下。粗い条痕文を横位に施す。内 外面器面摩滅	中期前葉	
第17図 PL.28	4	弥生土器 浅鉢?	埋土 口縁～底部1/4 残存 口縁部破片	口 底	(22.4) (8.0)	高	13.7	粗砂:石英・片岩/ 良好/橙色	口縁～体部一体化して開く。底部直立する。2・3条単位 の太い横位沈線を多段に配す。無節LRを横位に施す。内面 平滑な撫で調整。あるいは蓋か	中期前葉
第17図 PL.28	5	弥生土器 鉢	埋土 口縁部破片					粗砂:片岩/良好/ 黒褐色	口縁部下を横位沈線3条で画し。無節LRを横位に充填する。 内面研磨	中期前葉

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第17図 PL.28	6	弥生土器 鉢	埋土 体部破片				粗砂:片岩/良好/ 橙色	体部下半か。横位沈線3条を多段に配す。無節Lを横位に 充填する。内面研磨	中期前葉	
第17図 PL.28	7	弥生土器 壺	埋土 体部破片				粗砂:石英/良好/ 黒褐色	体部上半か。頸部は無文で横位沈線で画す。以下横位波状 沈線を施す。横位無節Lを充填する。内面弱い撫で	中期前葉	
第17図 PL.28	8	弥生土器 壺?	埋土 底部1/4残存	底	(8.0)		粗砂:石英・片岩/ 良好/にぶい黄橙 色	斜位条痕を体部下半に施す。内面乱雑な撫で。底面に木葉 痕が残る	中期前葉	
第17図 PL.28	9	弥生土器 壺	埋土 体部破片				粗砂:石英・片岩/ 良好/にぶい橙色	体部上半～中位か。内湾する体部中位。頸部は沈線による 縦位蛇行文、2条沈線による方形意匠が配される。無節L を施す。内面弱い撫で	中期前葉	
第17図 PL.28	10	打製石斧	埋土 上半欠損	長 幅	(7.8) 4.9	厚 重	1.4 62.5	細粒輝石安山岩	短冊形。完成状態。粗い剥離を側縁・刃部に加える。素材 面を広く残す	
第17図 PL.28	11	敲石	埋土 完形	長 幅	11.1 7.1	厚 重	3.6 391.1	変質安山岩	やや扁平な楕円状円礫。敲打痕は側縁と上下端部に顕著。 弱い磨面を表裏面に持つ	

61区1号竪穴状遺構

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第18図 PL.28	1	弥生土器 壺	埋土 口縁～頸部残存	口	7.2			粗砂:石英/良好/ 褐灰色	頸部外反し口径狭い。更新部に押圧を加えた隆線を付す。 頸部は斜位短沈線による縦位矢羽状文が覆う。内面研磨	中期前葉
第18図 PL.28	2	弥生土器 浅鉢?	床直 口縁～体部1/4 残存	口	(11.3)			細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄橙 色	強く開く口縁部～体部。底部は直立か。2条沈線に画され た無文部による三角意匠を上位に配し、下位は同沈線によ る横位波状文を施す。中位には弧線文や斜位沈線を充てる。 細縄文LRを施す。内面平滑な撫で調整	中期前葉
第18図 PL.28	3	弥生土器 甕	埋土 口縁部破片	口	(16.0)			細砂:石英・輝石/ 良好/灰褐色	口縁部直立する。口縁部横位沈線に画された縄文帯。横位 LRを施す。以下無文で内外面とも平滑な撫で調整	中期前葉
第18図 PL.28	4	弥生土器 壺	埋土 口縁部破片					粗砂:石英・褐色粒 /やや軟/にぶい橙 色	口縁部幅狭の肥厚部を設け横位沈線1条を施す。頸部は外 反し横位平行沈線群を充てる	中期前葉
第18図 PL.28	5	弥生土器 壺	埋土 体部破片					細砂:石英/良好/ 灰黄褐色	体部内湾。1条の深い沈線に画されたヒトヅク意匠が配さ れる。細縄文LRを充填する。無文部及び内面平滑な研磨 を施す	中期前葉
第18図 PL.28	6	弥生土器 壺	埋土 体部破片					粗砂:石英・片岩/ 良好/にぶい黄褐 色	肩部か。強く内湾し内面の凹凸が顕著。横位沈線2条を上 位に配し以下沈線で画された弧状意匠を配す。細縄文LR を充填する。内面弱い撫で、外器面摩滅	中期前葉
第18図 PL.28	7	弥生土器 壺	埋土 体部破片					細砂:石英/良好/ にぶい黄褐色	体部上半か。横位沈線で画された縄文帯以下は沈線による 意匠文が配される。施文部はLRを充填する。内面平滑な 撫で	中期前葉
第19図 PL.28	8	弥生土器 深鉢?	埋土 体部破片					粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい褐色	体部下半か。直線的に開く。外面は横位LRが覆う。内面 は斜位削り調整後弱い研磨を加える	中期前葉
第19図 PL.28	9	弥生土器 壺	床直上 頸部破片					細砂:石英・輝石/ 良好/黒褐色	やや直立気味の頸部か。薄手の器厚で内面の凹凸が顕著。 無節Lを横位・斜位施文する	中期前葉
第19図 PL.28	10	弥生土器 甕	床直上 体部破片					細砂:石英・輝石/ 良好/灰褐色	斜位条痕を密接に施す。内面撫で	中期前葉
第19図 PL.28	11	弥生土器 甕	遺構外 頸部～体部破片					粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい褐色	無文頸部下に2条の横位沈線に画された幅狭の文様帯を設 ける。文様帯内は縦位沈線で小区画され斜位沈線を充てる。 体部は横位・斜位条痕を施す。内面撫で	中期前葉
第19図 PL.28	12	弥生土器 甕	床直上 体部破片					粗砂:石英・片岩/ 良好/橙色	体部下半か。薄手の器厚を呈し縦位条痕が覆う。内面撫で 調整	中期前葉
第19図 PL.28	13	弥生土器 甕	埋土 体部下半～底部 残存	底	9.0			粗砂:石英・片岩/ 良好/にぶい褐色	底部端僅かに張出し体部は外反気味に開く。外面は4・5 条単位の条痕を斜位に施す。内面平滑な撫で。底面網代痕 残る	中期前葉
第19図 PL.28	14	弥生土器 甕	床直上 体部下半～底部 残存	底	6.8			粗砂:石英・輝石・ 褐色粒/やや軟/浅 黄褐色	直線的に開く体部下半。器面摩滅のため判然としないが縄 文を施す。底面に網代痕を残る	中期前葉
第19図 PL.28	15	打製石斧	埋土 完形	長 幅	10.5 6.0	厚 重	1.9 129.6	変質安山岩	撥形。表面に礫面を広く残り、周縁からの剥離により整っ た形状を作出する。刃部はやや厚手ながら摩滅痕を見る	
第19図 PL.28	16	打製石斧	埋土 左側縁欠損	長 幅	8.4 (12.2)	厚 重	2.9 307.2	変質安山岩	大型の横長剥片を素材とし、下端部に表裏面からの剥離を 連続的に施し刃部としている	
第19図 PL.28	17	使用痕剥片 石器	埋土 完形	長 幅	4.8 4.8	厚 重	0.8 20.8	細粒輝石安山岩	薄手の横長剥片を素材とし、側縁～下端部に微細剥離を見 る	
第20図 PL.28	18	磨石	埋土 完形	長 幅	13.5 7.1	厚 重	4.1 585.5	ひん岩	厚手の不整楕円状円礫。敲打痕は裏面左側面寄りと上端部 に集中する。節理が斜位に走るが節理に沿った敲打も見ら れる	
第20図 PL.28	19	敲石	埋土 完形	長 幅	17.1 8.3	厚 重	4.4 924.9	変質安山岩	厚手の不整楕円状円礫。下半が広がる平面形態。敲打痕は 全体に広がるが、表裏面中央やや下位に集まる傾向を見せ る	

61区2号竪穴状遺構

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第22図 PL.29	1	弥生土器 壺	床直 口縁部破片					細砂:輝石/良好/ にぶい橙色	口唇部と頸部に横位沈線を設け、横位LRを施す。内外面 とも平滑な撫で調整	中期前葉
第22図 PL.29	2	弥生土器 壺	床直上 体部破片					粗砂:石英・片岩・ 褐色粒/良好/にぶ い橙色	薄手の器厚を呈す。3条の沈線による横位波状意匠。細縄 文LRを充填する。内面横位撫で調整	中期中葉?
第22図 PL.29	3	弥生土器 壺	遺構外 体部破片					粗砂:褐色粒/良好 /にぶい黄褐色	肩部か。薄手の器厚を呈す。2条単位の沈線による弧状意 匠。縄文はLR充填施文。内面弱い撫で調整	中期前葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第22図 PL.29	4	弥生土器 壺	床直上 体部破片				細:輝石/良好/黒褐色	内湾する口縁部下か。沈線による横位長楕円状意匠を多段に配す。縄文は横位LR。内面は撫で調整	中期前葉	
第22図 PL.29	5	弥生土器 壺	床直 体部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/灰褐色	横位・斜位沈線による横長区画意匠。横位沈線を中位に施す。縄文はLR充填施文。内面は弱い撫で調整	中期前葉	
第22図 PL.29	6	弥生土器 鉢?	床直 体部破片				細砂:石英・雲母粒/ 良好/褐色	沈線で画された磨消部と縄文施文部。沈線による波状文か。磨消部は丁寧な研磨。施文部状文はLR。内面撫で調整	中期前葉	
第22図 PL.29	7	弥生土器 甗	床直 口縁部破片				粗砂:石英/良好/ にぶい黄褐色	口唇部は低位鋸歯状を呈す。口縁部に横位沈線2条を設け、上位に横位LRを施す。内面平滑な撫で調整	中期前葉	
第22図 PL.29	8	弥生土器 甗	床直上 体部破片				細砂:石英/良好/ 橙色	頸部無文で外反し体部上半に4条の横位沈線を設ける。地文は無節LR横位施文。内面撫で調整	中期前葉	
第22図 PL.29	9	弥生土器 甗	床直上 体部破片				粗砂:石英・褐色粒/ 良好/灰褐色	上位に横位LR縄文施文。以下横位・斜位条痕が施される。内面横位撫で調整	中期前葉	
第23図 PL.29	10	弥生土器 壺	床直上 口縁部破片				細砂:石英・雲母/ 良好/にぶい赤褐色	口縁部外反し頸部直立する。3条単位による横位波状沈線を配し、頸部は横位沈線を施す。内面器壁剥落	中期前葉	
第23図 PL.29	11	弥生土器 壺	遺構外 口縁部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄褐色	口縁部外反。頸部に横位沈線を設け、口縁部に縦位条痕文を重ねる。内面平滑な撫で調整	中期前葉	
第23図 PL.29	12	弥生土器 壺	床直上 頸部破片				粗砂:石英/良好/ 明赤褐色	頸部外反。上位に浅い横位・斜位条痕を施す。内外面撫で調整	中期前葉	
第23図 PL.29	13	弥生土器 壺	床直 体部破片				粗砂:石英・雲母/ 良好/にぶい黄褐色	体部上半か。太い沈線による重楕円状意匠を配す。内外面とも器面摩滅	中期前葉	
第23図 PL.29	14	弥生土器 壺	床直 底部のみ残存	底	(7.2)		細砂:石英・輝石/ 良好/橙色	直立気味の体部下半。横位LRが覆う。外器面摩滅。内面横位撫で調整。底面網代痕残る	中期前葉	
第23図 PL.29	15	弥生土器 壺	埋土 底部1/3残存	底	(9.6)		細砂:輝石多/良好/ にぶい赤褐色	底端部僅かに張出し、体部下半は外反気味に開く。弧状沈線を施し、横位LRが覆う。内面撫で。底面網代痕が残る	中期前葉	
第23図 PL.29	16	弥生土器 浅鉢?	床直 脚部のみ残存	底	4.0		粗砂:石英・片岩/ やや軟/橙色	直立する小型の高台部。器面が著しく摩滅し、文様・調整など判然としない。あるいは蓋か	中期前葉	
第23図 PL.29	17	弥生土器 甗	埋土 体部破片				粗砂:石英・片岩・ 雲母少/良好/にぶい黄褐色	肩部破片。斜位条痕による縦位矢羽状文が覆う。被熱のためか器面摩滅。内面弱い撫で調整	中期前葉	
第23図 PL.29	18	弥生土器 壺?	床直 体部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄褐色	異方向斜位条痕が交差し、粗い斜格子状となる。内面横位撫で調整を施す	中期前葉	
第23図 PL.29	19	弥生土器 壺?	床直 体部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄褐色	斜位条痕が密接に施される。内面横位撫で調整	中期前葉	
第23図 PL.29	20	弥生土器 甗	床直 体部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい橙色	浅い斜位条痕が密に施される。内面横位撫で調整	中期前葉	
第23図 PL.29	21	弥生土器 甗	床直 体部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/褐色	斜位条痕が密に施される。内面器壁剥落	中期前葉	
第23図 PL.29	22	弥生土器 甗	床直 体部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄褐色	異方向斜位条痕が交差し、粗い斜格子状となる。内面、器壁剥落著しい。横位撫で調整を施す	中期前葉	
第23図 PL.29	23	弥生土器 甗	床直 体部破片				粗砂:石英・褐色粒/ 良好/にぶい橙色	3・4条の斜位条痕が密に施される。内面横位撫で調整	中期前葉	
第23図 PL.29	24	弥生土器 甗	床直上 体部破片				粗砂:石英/やや軟/ 橙色	器面摩滅。浅く細い斜位条痕が密に施される。内面撫で調整	中期前葉	
第23図 PL.29	25	弥生土器 甗	埋土 体部破片				粗砂:石英・輝石/ やや軟/橙色	無文。外面斜位削り調整。内面横位削り調整後弱い撫で	中期前葉	
第23図 PL.29	26	弥生土器 甗	床直上 体部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/黒褐色	異方向斜位条痕が交差し、斜格子状となる。内面横位撫で調整	中期前葉	
第23図 PL.29	27	弥生土器 甗	埋土 体部破片				粗砂:石英・片岩・ 褐色粒/良好/にぶい黄褐色	斜位条痕を施す。内面撫で	中期前葉	
第23図 PL.29	28	弥生土器 甗	床直 体部破片				粗砂:石英・褐色粒/ 良好/灰黄褐色	薄手の器厚を呈す。斜位条痕を密接に施す。内面平滑な撫で調整	中期前葉	
第23図 PL.29	29	弥生土器 甗	床直上 体部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/褐色	4条単位の斜位条痕が疎らに施され、縦位矢羽状構成を示す。内面削り調整後撫で	中期中葉か	
第23図 PL.29	30	弥生土器 甗	床直 体部破片				粗砂:石英・輝石・ 褐色粒/良好/浅黄褐色	浅い斜位条痕を多方向に施し乱雑な斜格子文を配す。内面横位撫で調整	中期中葉か	
第23図 PL.29	31	弥生土器 甗	床直上 体部破片				細砂:石英・輝石/ やや軟/にぶい黄褐色	体部上半か。横位・斜位平行沈線群が設けられ、下位は無文。内面撫で調整	中期中葉か	
第23図 PL.29	32	弥生土器 甗	床直 体部破片				細砂:石英/良好/ にぶい黄褐色	斜位条痕が施される。内面平滑な横位撫で調整を施す	中期前葉	
第24図 PL.29	33	異形石器	遺構外 完形	長幅	4.1 1.8	厚重	0.6 3.0	黒曜石	断面円形で三日月状の平面形状を呈す。完成状態で丁寧な押圧剥離が覆う。整形後の被熱痕跡を見る	
第24図 PL.29	34	加工痕剥片 石器	埋土 一部残存	長幅	(4.2) (6.3)	厚重	1.1 34.7	細粒輝石安山岩	上端及び側縁に粗い剥離による作出を施す。使用痕は見られない	
第24図 PL.29	35	凹石	遺構外 完形	長幅	12.9 6.8	厚重	4.3 593.3	細粒輝石安山岩	やや厚手の不整楕円状凹石。敲打痕が表面中央やや下位に集まり凹みとなす。平滑な磨面が表裏面各所に広がる。一部に被熱による変色を見る	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第24図 PL.29	36	敲石	埋土 完形	長幅	11.3 7.0	厚重 726.5	6.7 2.2	細粒輝石安山岩	厚手の楕円状円礫。敲打痕は全体に密に広がるが上下端部に集まる。被熱による変色を見る
第24図 PL.29	37	敲石	埋土 上端欠損?	長幅	7.3 3.5	厚重 67.2	2.2 67.2	細粒輝石安山岩	棒状の小型円礫。下端部に敲打痕や磨面が集まる。上端もあるいは意図的な欠損か

61区1・2号埋設土器(弥生時代)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第25図 PL.30	1	弥生土器 壺	埋土 体部下半~底部 残存	底	10.4			細砂:石英・輝石/ 良好/橙色	外反気味に開く体部下半。底部はやや上げ底。外面は縦位・斜位密接条痕、底部端部は横位削り調整。内面は撫で調整。底面に網代痕が残る	中期前葉
第25図 PL.30	2	弥生土器 壺	埋土 体部破片					粗砂:石英・雲母・ 片岩/良好/にぶい 橙色	内湾する体部上半~中位。3・4条単位の条痕が横位・斜位に施される。内面斜位削り調整後横位撫で調整	中期前葉

62区土坑(弥生時代)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第27図 PL.30	1	弥生土器 甕?	1坑埋土 体部破片					粗砂:石英/良好/ にぶい橙色	太い横位沈線1条を配し、以下横位LRを施す。内面弱い撫で調整	中期前葉
第27図 PL.30	1	弥生土器 壺	3坑埋土 口頸部~体部上 半残存					粗砂:石英大・輝石/ 良好/橙色	大型の壺。口縁部欠損。頸部は外反し体部上半に最大径か。外面頸部は横位弧状条痕、体部は斜位条痕。内面頸部は斜位条痕、体部は平滑な撫で調整	前期末葉~ 中期前葉
第27図 PL.30	2	使用痕ある 剥片	3坑埋土 左半欠損	長幅	5.8 3.3	厚重 14.6	0.8	黒色頁岩	横長剥片を素材とし、右側縁刃部に微細剥離が連続する	
第27図 PL.30	3	大型石鎌	3坑逆位壺上端 完形	長幅	17.6 11.7	厚重 729.4	2.1	細粒輝石安山岩	撥形。厚手で湾曲する。側縁からの粗い剥離調整を加える。左側縁に潰れ。被熱のため裏面剥離が著しい	
第27図 PL.30	4	多孔石	3坑埋土 完形	長幅	20.3 18.3	厚重 4050	10.9	粗粒輝石安山岩	厚手の不定形亜角礫。表面中央に断面円錐形の大型孔を集中する	
第27図 PL.30	5	凹石	3坑埋土 完形	長幅	14.9 7.4	厚重 654.8	3.4	細粒輝石安山岩	やや扁平な棒状円礫。表裏面及び下端部に敲打痕が広がり、特に裏面中央の集中により凹みとなる	
第27図 PL.30	1	弥生土器 甕?	36坑埋土 体部破片					細砂:石英/良好/ 褐灰色	体部上半か。太い横位沈線3条を設け、上位にも沈線文を施す。内面平滑な撫で調整	中期前葉

61区1号ベンガラ集中遺構

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第28図 PL.31	1	弥生土器 甕	埋土 口縁~体部中位 1/4残存	口	(21.6)			粗砂:輝石/良好/ 浅黄褐色	体部中位が強く内湾する。肥厚口縁部に横位LRを、頸部は横位、体部は斜位条痕を施す。4・5条単位か。内面弱い撫で調整	中期前葉
第28図 PL.31	2	弥生土器 甕	埋土 口縁~体部中位 1/5残存	口	(24.0)			粗砂:石英・輝石/ 良好/浅黄褐色	口縁部肥厚しLRを施す。体部上半は横位沈線と弧状沈線を組合わせた意匠を配す。地文は横位LR。内面横位撫で調整	中期前葉
第28図 PL.31	3	弥生土器 壺	埋土 口縁部破片					粗砂:石英・片岩/ 良好/黒褐色	口縁部下に押圧を加えた鎖状隆線を巡らす。以下斜位条痕を施す。内面は横位条痕を施す	中期前葉
第28図 PL.31	4	打製石斧	埋土 右側縁・下半欠 損	長幅	8.3 5.4	厚重 102.5	1.9	変質安山岩	完成状態の短冊形か。側縁と刃部に細かな調整剥離を施し、作出される	中期前葉

62区1号弥生時代遺物集中遺構

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第29図 PL.30	1	弥生土器 浅鉢?	口縁~体部下 半1/2残存	口	26.0			細砂:石英・輝石/ 良好/黒褐色	口縁~体部は直線的に開く。下半は直立する。多段に配された横位沈線3条と刺突文で変形工字文を描出する。単位は不明。横位LRを充填する。内面弱い研磨を施す	前期末葉~ 中期前葉
第29図 PL.30	2	弥生土器 壺?	底部のみ残存	底	8.0			粗砂:石英・片岩粒/ 良好/明赤褐色	内傾気味に直立する体部下半。底部との剥落箇所が滑らか。内面撫で調整。2次焼成の黒斑状痕跡を見る。底面木炭痕	前期末葉~ 中期前葉
第29図 PL.30	3	弥生土器 壺	口縁部破片					粗砂:石英・雲母/ 良好/浅黄褐色	強く外反する口縁~頸部。口縁部肥厚し強い刻みを連続する。頸部は横位条痕を施す。内面横位撫で調整	前期末葉~ 中期前葉
第29図 PL.30	4	弥生土器 壺?	体部破片2点					粗砂:石英・片岩粒/ 良好/にぶい黄橙 色	異方向の斜位条痕を施す。器面摩滅。内面平滑な撫で調整。器壁剥落	前期末葉~ 中期前葉
第29図 PL.30	5	弥生土器 壺?	体部破片					細砂:石英/良好/ 灰黄褐色	薄手の器厚を呈す。半截竹管状工具による浅い条痕が斜位に施される。内面撫で調整	前期末葉~ 中期前葉
第29図 PL.30	6	打製石斧	完形	長幅	9.6 7.0	厚重 137.8	1.9	細粒輝石安山岩	撥形。表面に礫面を広く残す。周縁の粗い調整により頭部、側縁を作出する。刃部は素材面を強く残す	
第29図 PL.30	7	原石	完形	長幅	3.7 3.1	厚重 31.6	2.1	黒曜石	角礫・漆黒。比較的緻密な石材	
第29図 PL.30	8	原石	完形	長幅	3.1 3.2	厚重 20.5	1.3	黒曜石	角礫・漆黒。小型で不純物を含む	
第29図 PL.30	9	原石	完形	長幅	3.6 2.8	厚重 40.8	2.8	黒曜石	角礫。側面に礫面を残す。不純物を多く含む	
第29図 PL.30	10	剥片	完形	長幅	6.4 4.2	厚重 43.1	1.8	黒曜石	縦長剥片。比較的緻密な石材	

62区2号弥生時代遺物集中遺構

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第30図 PL.31	1	弥生土器 浅鉢?	口縁部破片1/5 残存	口	(23.0)			細砂:石英・輝石/ 良好/灰黄褐色	口縁~体部直線的に開く。下半は直立気味。横位LRが器面を覆う。内面平滑な研磨を加える	前期末葉~ 中期前葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第30図 PL.31	2	弥生土器 壺?	口縁部破片1点 体部破片2点				細砂:石英/良好/ 浅黄褐色	口縁部外反、体部内湾する。口縁部に横位沈線3条からなる変形工字文。頸部は無文で体部は沈線2条に画された磨消部区画意匠が配される。口唇部内面もLRを施す。内面研磨	前期末葉～ 中期前葉	
第30図 PL.31	3	弥生土器 浅鉢?	口縁部破片1点 体部破片1点	口	(19.0)		細砂:石英・輝石/ 良好/灰褐色	横位沈線2・3条による分帯。口縁部は縦位短沈線をスリット状に施し、体部は沈線による小三角意匠を配す。磨消部帯も変化を見る。横位LRを施す。内面平滑な撫で調整	前期末葉～ 中期前葉	
第30図 PL.31	4	弥生土器 壺?	体部破片				粗砂:石英/良好/ 灰褐色	横位沈線以下沈線による連弧状意匠が配される。斜位LRを施す。内面平滑な撫で	前期末葉～ 中期前葉	
第30図 PL.31	5	弥生土器 壺	口縁部1/3残存	口	(7.0)		細砂:石英/やや軟/ にぶい橙色	小型品か。幅狭の肥厚口縁部に円形刺突文を連続する。頸部は横位条痕を施す。内面弱い撫で	前期末葉～ 中期前葉	
第30図 PL.31	6	弥生土器 壺	頸部破片				細砂:石英・片岩/ 良好/にぶい橙色	頸部外反。横位沈線以下短沈線による縦位矢羽状文を施す。内面撫で調整	前期末葉～ 中期前葉	
第30図 PL.31	7	弥生土器 壺	頸部破片				細砂:石英/良好/ にぶい橙色	口縁部下に押圧を鎖状に加えた横位隆線を設ける。頸部は横位条痕を密に施す。内面平滑な撫で調整	前期末葉～ 中期前葉	
第30図 PL.31	8	弥生土器 筒形土器	体部破片2点				細砂:石英・輝石・ 片岩粒/良好/にぶい 橙色	破片2点からなる。沈線に画された横長楕円状意匠を配す。内面撫で調整	前期末葉～ 中期前葉	
第30図 PL.31	9	弥生土器 甕	体部破片				粗砂:石英・片岩/ 良好/にぶい黄橙 色	体部上半か。太い横位沈線を基調にした弧状意匠を配す。LR横位施文。内面は平滑な研磨を加える	前期末葉～ 中期前葉	
第30図 PL.31	10	弥生土器 甕	口縁部破片				粗砂:石英/やや軟/ /橙色	口縁部に横位沈線2条を設け、横位LRを重ねる。頸部は無文で体部に1条の横位沈線を施す。器面摩滅	前期末葉～ 中期前葉	
第31図 PL.31	11	弥生土器 甕	口縁部破片	口底	(11.6) (6.6)		細砂:石英・輝石/ 良好/黒褐色	4点からなる。口縁部に斜位無節L。体部～底部は強い斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	前期末葉～ 中期前葉	
第31図 PL.31	12	弥生土器 甕	口縁～体部破片				細砂:石英/良好/ にぶい橙色	器厚薄手。口縁部に横位LRを施す。頸部は無文で研磨。体部上半に横位沈線3条に画された文様帯を設け、三角連繋文を配す。横位斜位条痕を施す。内面弱い撫で	前期末葉～ 中期前葉	
第31図 PL.31	13	弥生土器 甕	口縁部破片				粗砂:石英・片岩/ 良好/褐色	口縁部外傾。半截竹管状工具による横位弧状の条痕を密接に施す。内面平滑な撫で調整	前期末葉～ 中期前葉	
第31図 PL.31	14	弥生土器 壺?	体部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい橙色	体部下半か。薄手の器厚を呈す。縦位条痕を密接に施す。内面平滑な撫で調整。带状の黒斑を見る	前期末葉～ 中期前葉	
第31図 PL.31	15	弥生土器 壺?	体部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄橙 色	体部下半か。縦位条痕が密接に施される。内面横位撫で調整	前期末葉～ 中期前葉	
第31図 PL.31	16	弥生土器 壺?	体部下半4/5残存	底	(8.0)		細砂:石英/良好/ にぶい黄褐色	直線的に開く体部下半。斜位条痕を密接に施す。内面横位撫で調整	前期末葉～ 中期前葉	
第31図 PL.31	17	打製石斧	完形	長幅	9.7 5.6	厚重	1.7 101.2	粗粒輝石安山岩	撥形。長軸方向に強く湾曲する。両側縁と刃部に剥離を集める。裏面及び側縁に使用摩滅痕を見る	
第31図 PL.31	18	打製石斧	完形	長幅	12.6 7.0	厚重	2.4 269.5	粗粒輝石安山岩	撥型。やや厚手の石材で、両側縁及び刃部より粗い剥離を施す。使用痕は見られない	
第31図 PL.31	19	台石	破片	長幅	(17.3) (12.3)	厚重	10.5 3300	細粒輝石安山岩	大型の不定形亜円礫か。表面に平滑な磨面が認められる	
第31図 PL.31	20	打製石斧	体部のみ残存	長幅	(9.8) 8.0	厚重	3.5 335.6	細粒輝石安山岩	短冊形か。厚手の素材で、入念な剥離を施し直線的な側縁を作出する	
第31図 PL.31	21	敲石	完形	長幅	6.1 4.2	厚重	1.0 45.4	雲母石英片岩	扁平な楕円状円礫。周縁を粗く剥離する	
第31図 PL.31	22	磨石	下半欠損	長幅	(8.1) 7.8	厚重	5.2 501.8	細粒輝石安山岩	やや厚手の楕円状円礫。表裏面とも中央に磨面を持つが表面は滑沢。敲打痕は周縁に僅かに見られる	
第32図 PL.31	23	多孔石	完形	長幅	14.6 10.4	厚重	10.8 1460.0	粗粒輝石安山岩	大型で不定形状を呈する亜角礫。断面円錐状の凹みを各面に設ける	

51区遺構外出土弥生遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第33図 PL.32	1	弥生土器 壺?	T21 底部のみ残存	底	6.0		細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄褐 色	直立気味の体部下半。内底面が強く盛り上がる。内外面とも平滑な撫で調整。底面僅かに網代痕が残る	中期前葉
第33図 PL.32	2	弥生土器 甕	T20 口縁部破片				細砂:石英/良好/ /橙色	口縁部は肥厚し、横位LRを施す。頸部は櫛歯状工具の強い条痕文が施される。内面撫で	中期前葉
第33図 PL.32	3	弥生土器 甕	T20 体部破片				粗砂:石英・片岩/ やや軟/橙色	強く内湾する肩部。肩部は横位条痕、体部は縦位条痕が施される。内面横位へら撫で	中期前葉
第33図 PL.32	4	弥生土器 甕	S23 口縁部破片				細砂:輝石/良好/ 褐色	無文で口縁部下に僅かな屈曲を設ける。内外面とも弱い研磨を施す	中期前葉

52区遺構外出土弥生遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第34図 PL.32	1	弥生土器 浅鉢	G18 口縁部破片				細砂:石英/良好/ 暗赤褐色	口唇部緩やかに波状。強く開く器形。沈線による横長楕円状意匠による変形工字文。横位RLを施す。内外面とも研磨を施し、外面は全面に赤彩を加える	前期末葉か
第34図 PL.32	2	弥生土器 鉢	C区 口縁部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/橙色	口縁部に先端平坦な工具により横位沈線を1条設ける。結節箇所も見られる。地文は横位LR。内面は丁寧な研磨	中期前葉

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第34図 PL.32	3	弥生土器 鉢	A21 口縁部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/浅黄橙色	No.2に極めて近似。口縁部に先端平坦な工具による横位沈線1条。結節箇所も見られる。地文は横位LR。内面は丁寧な研磨	中期前葉
第34図 PL.32	4	弥生土器 台付き土器	A・B14・15 底部のみ残存	底	(10.8)		細砂:石英/良好/ 橙色	底径広く8cm前後。体部下半は内湾気味に強く開く。脚部内外面は丁寧な撫で、体部内面は平滑な研磨を施す	中期前葉
第34図 PL.32	5	弥生土器 壺	D18 口縁部破片				細砂:片岩粒/良好/ にぶい黄橙色	口縁部肥厚し横位結節沈線3条を施す。頸部は外反し横位条痕を施す。内面撫で	中期前葉
第34図 PL.32	6	弥生土器 壺	D18 頸部破片				細砂:片岩粒/良好/ にぶい黄橙色	No.5に極めて近似。外反する頸部に横位条痕が施される。工具静止箇所を見る。内面横位撫で調整	中期前葉
第34図 PL.32	7	弥生土器 壺	D20 体部破片				粗砂:石英・雲母/ 良好/黒褐色	内湾する体部。幅狭の横位文様帯を多段に配し。斜位沈線との接点に刺突文を加える。横位LRを充填する。外面研磨、内面平滑な撫で調整	中期前葉
第34図 PL.32	8	弥生土器 甕	E19 口縁部破片				粗砂:石英/やや軟/ にぶい橙色	口縁部に横位沈線を設け、横位LRを充填する。頸部は無文か。器面摩滅。内面横位撫で調整	中期前葉
第34図 PL.32	9	弥生土器 甕	E19 体部破片				粗砂:石英・片岩/ やや軟/にぶい橙 色	横位沈線2・3条を設け、以下体部下半は斜位条痕を施す。内面横位撫で調整	中期前葉
第34図 PL.32	10	弥生土器 甕	E19 体部破片				粗砂:石英・輝石/ やや軟/橙色	緩やかに内湾する体部下半か。疎らな条痕を斜位に施す。内面撫で調整	中期前葉
第34図 PL.32	11	弥生土器 深鉢	B19 口縁部破片				微細砂:石英/良好/ にぶい赤褐色	粗製土器か。無文で内外面凹凸が顕著。薄手で外面は弱い撫で、内面は横位撫で調整に止まる	中期前葉?
第34図 PL.32	12	弥生土器 甕	E19 口縁～体部上半 破片				細砂:石英・片岩/ 良好/橙色	口縁部肥厚。頸部は無文で体部上半に横位沈線3条で画された幅狭の文様帯を設ける。横位波状文を充てる。地文は横位LR。体部下半は斜位撫でか。内面横位撫で調整	中期前葉
第34図 PL.32	13	弥生土器 壺?	D20 底部のみ残存	底	7.0		細砂:石英/やや軟/ 浅黄橙色	薄手の器厚を呈す。底端部は張り出し、外反気味に開く体部下半。横位LRを施す。底面に木葉痕が残る	中期前葉
第34図 PL.32	14	弥生土器 壺?	C21・D230 底部のみ残存	底	7.4		粗砂:褐色粒・石英・ 輝石/良好/橙色	外反気味に強く開く体部下半。薄手の器厚。横位LRを施す。底面に網代痕が残る	中期前葉
第34図 PL.32	15	弥生土器 支脚?	D19 脚部1/2残存	底	9.0		粗砂:石英・片岩/ 良好/にぶい橙色	中実で接地面は平坦で脚部は強く開く。横位撫で調整が施され、端部は指頭圧痕が残る	中期前葉?

61区遺構外出土弥生遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第35図 PL.32	1	弥生土器 浅鉢?	X8 口縁～体部1/2 残存	口	20.0		細砂:輝石/良好/ 褐色	あるいは蓋か。口唇部鋸歯状、口縁部は横位沈線1条で画された横位LRを充填する。体部は、沈線による横位長楕円状区画文が配される。LRを充填する。口縁部に小孔を穿つ。内面平滑な研磨を施す	中期前葉
第35図 PL.32	2	弥生土器 浅鉢?	R10・T9 口縁部破片	口	(24.0)		粗砂:石英・輝石・ 片岩/良好/にぶい 黄橙色	口縁～体部一体化して開く。口縁部と体部中位の横位沈線2条により画された文様帯に斜位沈線1条による波状文が配される。地文は横位LR。外器面摩滅。内面弱い撫で調整	中期前葉～ 中期中葉
第35図 PL.32	3	弥生土器 浅鉢	R8 口縁～体部一部 欠損	口 底	13.8 高 4.8	5.6	細砂:石英/良好/ 浅黄橙色	小波状突起が連続する。波頂部には更に刻みを加える。体部はLRを不定方向に施す。内面研磨。底面に木葉痕が残る	前期末葉～ 中期前葉
第35図 PL.32	4	弥生土器 鉢	S8 口縁部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/黒褐色	太い沈線で画された施文部と磨消部の交互配列。口縁部に横位沈線とLR施文部。以下区画文が体部に配される。磨消部及び内面は研磨を施す	中期前葉
第35図 PL.32	5	弥生土器 浅鉢	U9 口縁部破片				粗砂:石英・片岩/ 良好/にぶい褐色	口縁部に横位沈線2条を設け、以下弧状沈線を配す。内面平滑な撫で調整	中期前葉
第35図 PL.32	6	弥生土器 浅鉢	Q7 口縁部破片				細砂:石英/良好/ にぶい黄褐色	口縁～体部一体化し強く開く。外面は横位LRが施される。内面は弱い研磨。内面口縁部に煤が付着する	中期前葉
第35図 PL.32	7	弥生土器 浅鉢	U3 口縁部破片				粗砂:石英/やや軟/ にぶい黄橙色	強く開く口縁部。無文で内外面撫で調整を施す。器面やや摩滅する	中期前葉
第35図 PL.32	8	弥生土器 鉢?	Q7 体部破片				粗砂:石英・雲母粒/ 良好/褐色	体部上半。2条の横位沈線以下沈線による波状文が配され、上位はLRを施し、下位は無文。内面器壁剥落。No.9に近似するが、半肉彫手法ではない	中期前葉
第35図 PL.32	9	弥生土器 鉢?	Q6・7 体部破片・底部 破片	底	(8.0)		粗砂:石英・雲母粒/ 良好/にぶい橙色	体部上半。横位沈線以下半肉浮彫手法で波状文が描出される。上位はLRを施し、下位は無文。内面器壁剥落	中期前葉
第35図 PL.32	10	弥生土器? 浅鉢	I11 口縁部破片	口	(18.0)		細砂:輝石/良好/ 黒褐色	碗状の器形。外面は乱雑な削り調整後疎らな研磨。内面は横位撫で調整	中期前葉?
第35図 PL.32	11	弥生土器 壺	X2 口縁部1/4残存	口	(8.0)		細砂:石英/良好/ にぶい黄褐色	口縁部は僅かに肥厚し開く。横位LRが覆う。内面平滑な撫で調整	中期前葉
第35図 PL.32	12	弥生土器 壺	Q・R6 底部3/4残存	底	6.6		粗砂:石英・片岩/ 良好/にぶい褐色	内湾気味に開く体部下半。底部端部に横位沈線を設け、上位も沈線文が配される。内面削り調整後弱い撫で	中期前葉
第35図 PL.32	13	弥生土器 壺	Q・R6 頸部1/2残存				粗砂:石英/良好/ 褐色	頸部外反し口縁部強く開く。縦位矢羽状短沈線が覆う。内面撫で調整	中期前葉
第35図 PL.32	14	弥生土器 壺	X7 口縁部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/明黄褐色	口唇部に刻み、頸部境に隆線を付し上位に横位沈線、隆線上に円形刺突文を施す。体部は不定方向のLRが覆う。内面横位撫で	中期前葉
第35図 PL.32	15	弥生土器 壺	X7 口縁部破片				粗砂:石英/良好/ にぶい赤褐色	肥厚口縁部に横位矢羽状短沈線を施す。以下頸部は5条単位の条痕が横位に施される。内外面赤彩	中期前葉
第35図 PL.32	16	弥生土器 甕	G9 口縁部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/黒褐色	緩やかに外反する口縁部。横位条痕後2条の横位沈線を設ける。内面強い横位削り調整後撫で	前期末葉か
第35図 PL.32	17	弥生土器 壺	Q7・R8 体部破片2点				粗砂:石英・雲母/ 良好/褐色	体部上半か。1本描きの太い沈線による横位楕円状蛇行文か。外面は丁寧な撫で調整、内面は弱い撫で調整	前期末葉か

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第35図 PL.33	18	弥生土器 壺	S8・9 頸部～体部破片 3点				細砂:石英/やや難 /明黄褐色 /灰黄褐色	頸部外反し無文。体部上半は頸部の横位沈線2条と中位の 3条の横位沈線で画され横位矢羽状短沈線を充填する。内 面弱い撫で調整を施す	中期前葉	
第35図 PL.33	19	弥生土器 壺	U9 体部破片				粗砂:石英/良好/ にぶい橙色	肩部か。横位沈線3条で分帯され、短沈線による縦位矢羽 状文が充てられる。内面弱い撫で調整	中期前葉	
第35図 PL.33	20	弥生土器 壺	Y7・U9 体部破片2点				粗砂:石英・雲母/ 良好/にぶい黄橙 色	体部内湾。沈線で画された縄文施文部によるヒトデ状意匠。 施文部は細縄文LR、磨消部は弱い研磨。内面は丁寧な研 磨	中期前葉	
第35図 PL.33	21	弥生土器 壺	Y7・U9 体部破片2点				粗砂:石英・雲母/ 良好/にぶい黄橙 色	体部内湾。沈線で画された縄文施文部によるヒトデ状意匠。 施文部は細縄文LR、磨消部は弱い研磨。内面は丁寧な研 磨	中期前葉	
第35図 PL.33	22	弥生土器 壺	9住 体部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄橙 色	小型品か。内湾する体部。細縄文LRを斜位・縦位に施す。 内面弱い研磨	中期前葉	
第35図 PL.33	23	弥生土器 壺	R8 頸部～体部上半 残存				細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄橙 色	頸部小径。楯描文。横位条痕で多段に分帯され、頸部は縦 位、以下横位波状文を充てる。内面は撫で、輪積み痕残る	中期前葉～ 中期前葉	
第35図 PL.33	24	弥生土器 壺	Q6 体部破片				細砂:石英/良好/ 灰黄褐色	頸部～体部上半。横位沈線群により多段に分帯され、頸部 は縦位矢羽状短沈線、体部は縦位短沈線が施される。内面 弱い撫で	中期後葉か 弱い撫で	
第35図 PL.33	25	弥生土器 甕	S9 体部破片				細砂:石英・片岩/ 良好/灰褐色	体部下半か。器厚薄手。横位条痕を施す。内面撫で調整	中期前葉	
第36図 PL.33	26	弥生土器 甕	R7 口縁部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい褐色	波状緑か。横位沈線に画された幅狭の口唇部に横位LRを 施す。頸部は無文で強く外反する。内面平滑な撫で調整	中期前葉	
第36図 PL.33	27	弥生土器 甕	Q・R7 体部～底部破片				細砂:石英/良好/ にぶい黄褐色	体部破片3点と底部片1点。沈線で画された横位磨消帯で 中位を分帯する。文様帯内は棘状の意匠文が配される。縄 文は横位LR充填施文。内外面とも研磨を加える	中期前葉	
第36図 PL.33	28	弥生土器 甕	S4 体部1/2残存				粗砂:石英/良好/ にぶい黄褐色	頸部は無文。体部上半に横位沈線1条を設け、横位LRを 施す。体部下半は無文。内面横位削り調整後横位撫で	中期前葉	
第36図 PL.33	29	弥生土器 甕	Y8 口縁～体部上半 破片				細砂:石英・輝石/ 良好/明褐色	口縁部に横位LRを施す。頸部は無文で研磨。体部上半に 横位沈線2・3条に画された文様帯を設け、三角連繫文を 配す。横位斜位条痕を施す。内面研磨	中期前葉	
第36図 PL.33	30	弥生土器 甕	Q7・R8 体部破片				細砂:輝石/良好/ 褐色	体部上半。斜位条痕を地文とし、横位沈線で画された文様 帯に三角連繫文を施す。内面撫で調整	前期末葉	
第36図 PL.33	31	弥生土器 甕	S10 体部破片				細砂:輝石/良好/ 暗褐色	体部上半。横位条痕を地文とし、横位沈線2・3条に画さ れた文様帯に三角連繫文を施す。外面煤付着。内面平滑な 撫で	前期末葉	
第36図 PL.33	32	弥生土器 甕	U9 体部破片				粗砂:石英・片岩/ 良好/褐色	体部上半か。横位沈線2条を設け、上位に斜位沈線を施す。 地文に条痕。内面弱い撫で調整	前期末葉	
第36図 PL.33	33	弥生土器 甕	R7 口縁部破片				細砂:石英/良好/ 明黄褐色	口唇部角頭状をなす。横位・斜位LRを施す。内面平滑な 撫で調整	中期前葉	
第36図 PL.33	34	弥生土器 壺?	I10 底部のみ残存	底	7.0		粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい橙色	体部下半は外反気味に開く。内外面とも撫で調整。底面に 網代痕が残る	中期前葉	
第36図 PL.33	35	弥生土器 壺?	X6 底部1/3残存	底	7.6		粗砂:石英少/やや 軟/にぶい赤褐色	外反気味に開く体部下半。横位・斜位条痕を施す。内面撫で。 底面に網代痕残る。器面摩滅	中期前葉	
第36図 PL.33	36	弥生土器 壺?	R7 底部のみ残存	底	7.0		粗砂:輝石/良好/ にぶい黄褐色	外反気味に開く体部下半。内外面とも強い横位削り調整を 施す。底面に網代痕が残る	中期前葉	
第36図 PL.33	37	大型石鎌	L・N1・2 完形	長 幅	20.6 11.0	厚 重	3.0 707.1	黒色頁岩	撥形。湾曲は少なく、両側縁に強い剝離を加え直線的に仕 上げる。側縁上位に僅かな潰れ、刃部には摩滅痕を見る	
第36図 PL.33	38	石鎌?	L1・2 左脚残存	長 幅	(1.3) (1.6)	厚 重	0.4 0.7	黒曜石	平基無茎鎌。完成状態か。あるいは未製品。押し剝離で覆 われるが裏面中央に素材面が広く残る	
第36図 PL.33	39	磨製石斧	61区R8 ほぼ完形	長 幅	10.8 2.2	厚 重	0.8 43.0	デイサイト	細身で丁寧な研磨により刃部及び体部を作出する。刃部及 び体部に微細な剝離を施す	

62区遺構外出土弥生遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第37図 PL.34	1	弥生土器 鉢	B4 体部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄橙 色	小型品か。薄手の器厚を呈す。沈線と浮彫手法による区画 文描出。下半はLRを施す	前期か
第37図 PL.34	2	弥生土器 鉢	B・C5・6 口縁部破片				細砂:石英・輝石/ やや軟/にぶい黄 橙色	口縁部縄文帯は横位LR。以下沈線による変形工字文を配 す。内面平滑な撫で調整	前期末葉
第37図 PL.34	3	弥生土器 浅鉢	E・F5・6 口縁部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/明赤褐色	口縁～体部は一体化し強く開く。外面は横位LR、内面は 平滑な撫で調整。内外面とも煤が付着する	中期前葉
第37図 PL.34	4	弥生土器 鉢?	E・F4・5 口縁部破片				細砂:輝石/良好/ にぶい橙色	無文で内外面が摩滅する。少量の煤が付着する	中期前葉
第37図 PL.34	5	弥生土器 浅鉢	E・F4・5 口縁部破片				細砂:輝石/良好/ 黒褐色	口縁～体部は一体化し強く開く。外面は横位LR、内面は 平滑な撫で調整。外面に煤が付着する	中期前葉
第37図 PL.34	6	弥生土器 鉢	E・F4・5 口縁部破片				細砂:輝石/良好/ 黒褐色	器厚薄手。直線的に開く口縁部。横位LRが覆う。内面撫 で調整。外面煤付着	中期前葉
第37図 PL.34	7	弥生土器 浅鉢	A7 口縁部破片				細砂:石英/良好/ にぶい褐色	口唇部先端部尖る。口縁部は無文で平滑な撫でを施す	中期前葉
第37図 PL.34	8	弥生土器 壺	E・F4・5 口縁部破片				細砂:石英/良好/ にぶい橙色	口縁部肥厚し3条の連続刺突文を横位に施す。頸部に横位 条痕。内面横位撫で	中期前葉

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第37図 PL.34	9	弥生土器 壺	D5 口縁部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい橙色	小径の小型品。口縁部直立し頸部外反。口縁部に小孔を穿つ。横位LRを施す。頸部及び内面は研磨を施す	中期前葉
第37図 PL.34	10	弥生土器 壺	E・F4・5 頸部破片				粗砂:石英/良好/ にぶい褐色	頸部は横位沈線群を施し、上位に三角陰刻状の痕跡を見る。体部は斜位短沈線による縦位矢羽状構成。内面弱い撫で	中期前葉
第37図 PL.34	11	弥生土器 壺	F4 体部破片				粗砂:輝石・褐色粒/ 良好/にぶい黄褐色	体部上半か。沈線で画された磨消部による区画文構成か。区画内は横位LRを施す。内面研磨	中期前葉
第37図 PL.34	12	弥生土器? 壺?	C・D4 体部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/橙色	器厚薄手。内湾する体部。横位・斜位LRを施す。内面平滑な撫で	中期前葉?
第37図 PL.34	13	弥生土器 壺?	A6・7 体部破片				粗砂:片岩/やや軟/ 明黄褐色	内湾する体部中位か。横位沈線を施す。内外面とも器面摩滅	中期前葉
第37図 PL.34	14	弥生土器? 壺	D6 体部破片				細砂:石英・雲母/ 良好/にぶい赤褐色	肩部破片か。横位沈線を主とした方形状区画文。中位に横位沈線2条を埋める。縄文は横位LR。内面弱い撫で調整	中期前葉
第37図 PL.34	15	弥生土器 壺?	D・E5・6 体部破片				粗砂:片岩/良好/ にぶい黄褐色	器厚薄手。内湾する体部中位。上位は半截竹管状工具による縦位矢羽状条痕、下位は横位条痕を密に施す。内面撫で	中期前葉
第37図 PL.34	16	弥生土器 壺?	E・F5・6 体部破片				細砂:石英/良好/ にぶい褐色	体部下半か。やや幅広の半截竹管状工具による斜位条痕が施される。内面弱い研磨	中期前葉
第37図 PL.34	17	弥生土器 壺?	D・E5・6 体部破片				細砂:石英/良好/ にぶい褐色	半截竹管状工具による斜位条痕を密に施す。内面は平滑な撫で調整	中期前葉
第37図 PL.34	18	弥生土器 壺?	C7 体部破片				細砂:輝石/良好/ 黒褐色	内湾する体部中位。上位は5・6条単位の斜位条痕を矢羽状に配す。下位は横位密接条痕を施す。内面平滑な撫で調整	中期前葉
第37図 PL.34	19	弥生土器 壺	B4 体部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい褐色	体部上半か。5・6条単位の条痕による縦位矢羽状文に縦位条痕がスリット状に加わる。内面撫で、輪積み痕残る	中期前葉
第37図 PL.34	20	弥生土器 甕	C5 口縁部破片				細砂:石英/良好/ 橙色	肥厚口縁部に横位LRを施す。以下頸部は外反し無文。内面平滑な撫で調整	中期前葉
第37図 PL.34	21	弥生土器 甕	C5 口縁部破片				粗砂:石英・片岩/ やや軟/褐灰色	口縁部は横位無節Lを施す。以下太い横位沈線3条を設ける。外器面摩滅。内面平滑な撫で調整	中期前葉
第37図 PL.34	22	弥生土器 甕	D4 口縁部破片				粗砂:石英/やや軟/ 橙色	口縁部下に横位沈線で画された文様帯を設け、縦位沈線や斜位沈線を充てる。外器面摩滅。内面平滑な撫で調整	中期前葉
第37図 PL.34	23	弥生土器 甕	62区 体部破片				細砂:石英/良好/ 灰黄褐色	横位沈線に画された幅狭の磨消部帯を設ける。施文部縄文は細縄文LR。磨消部及び内面は平滑な撫で調整	中期前葉
第37図 PL.34	24	弥生土器 甕	C4 体部破片				細砂:輝石/良好/ にぶい黄褐色	体部上半か。薄手の器厚。内皮平行沈線で画された幅狭の文様帯に沈線による三角連繫文を配す。LRを充填する	中期前葉
第37図 PL.34	25	弥生土器 甕	D5 体部破片				細砂:石英/良好/ にぶい褐色	内皮沈線で画された幅狭の横位磨消部以下、LRを地文とする文様帯に三角連繫文を施す。内面撫で煤付着。No24と同一	中期前葉
第37図 PL.34	26	弥生土器 甕?	E・F5・6 口縁部破片				粗砂:石英・片岩/ 良好/褐灰色	半截竹管状工具による横位条痕が施される。内面平滑な撫で調整	中期前葉
第37図 PL.34	27	弥生土器 甕?	E・F5・6 口縁部破片				細砂:石英・片岩/ 良好/灰褐色	直立気味で小径の口縁部。半截竹管状工具による斜位条痕が施される。内面平滑な撫で調整	中期前葉
第37図 PL.34	28	弥生土器 甕	E6 口縁部破片				細砂:輝石/良好/ にぶい褐色	無文の口縁部。外面は縦位撫で調整。内面は平滑な横位撫で、煤付着	中期前葉
第37図 PL.34	29	弥生土器 甕	A6・7 体部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄褐色	肥厚部により僅かな段を有する。斜位LRを施す。内面撫で	中期前葉
第37図 PL.34	30	弥生土器 甕	D4 口縁部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/橙色	肥厚口縁部に横位LRを施す。以下横位沈線と横位波状沈線を多段に配す。内面研磨	中期中葉?
第37図 PL.34	31	弥生土器 壺?	D5 底部のみ残存	底	9.0		粗砂:石英/やや軟/ にぶい橙色	大型品。厚手の底面。内外面器面摩滅	中期前葉
第37図 PL.34	32	弥生土器 甕	C4 底部1/3残存	底	(5.0)		細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄褐色	薄手の器厚。外反気味に開く体部下半。横位・斜位LRが覆う。内面平滑な撫で調整。底面に木葉痕残る	中期前葉
第37図 PL.34	33	弥生土器 浅鉢?	F5 台部のみ残存	底	4.6		細砂:輝石/良好/ にぶい褐色	小型品。短脚で開きも弱い。外面は縦位研磨、内面は横位撫で調整。あるいは蓋か	中期前葉
第37図 PL.34	34	弥生土器 壺?	D・E5・6 底部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい褐色	体部下半は強く開く。横位条痕を施し、内面は撫で調整。底面に木葉痕	中期前葉
第37図 PL.34	35	弥生土器 土偶形容器	E6・7 脚部	底	8.8× 5.8		粗砂:石英・輝石/ 良好/灰褐色	おそらく脚端部。楕円状を呈する。外面は太い沈線による横位楕円状意匠を連ねる。縄文は横位・斜位LR。内面は撫で調整。底面に網代痕残る	中期前葉

52区1号掘立柱建物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第40図 PL.35	1	石製品 石臼 下臼	1掘立P22内 1/2残存	径	27.6	厚重 11.0 9400	粗粒安山岩	粉ひき形。6分割で径2.5cm程の軸穴を設ける。周縁を欠損するが目は良好に残り、大きな偏減りは見られない	中世～近世

51区1号礎石建物・1号掘立柱建物／2号礎石建物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第43図 PL.35	1	染付 碗	1礎石 口縁～底部1/4 残存	口底	(7.6) (4.0)	高 5.3	灰白色	圏線を設けず、外面体部中位に草花文?を配す。肥前系	近世

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図 PL.35	1	石製品 火打石	2礎石 完形	長幅	3.6 2.7	厚 重	1.4 12.5	玉髄	小型で乳白色の石材。図左側縁に使用痕が見られる	近世か

51区・52区1・2号石垣

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第47図 PL.35	1	染付 碗	1石垣 口縁～底部1/3 残存	口 底	(7.0) (4.0)	高	4.8	灰白色	口縁部外面1条、内面2条及び高台部に圏線を設ける、体部外面は草花文か。肥前系	近世～近代
第47図 PL.35	2	染付 碗	1石垣 口縁～底部1/4 残存	口 底	(7.0) (4.0)	高	5.5	灰白色	口縁部外面1条、内面2条及び高台部に2条の圏線を設ける、体部外面は草花文か。肥前系	近世～近代
第47図 PL.35	3	染付 碗	1石垣 口縁部破片	口	(7.0)			灰白色	口縁部内外面に1条、腰部内外面に1条の圏線を設け、外面に縦位矢羽文を配す。肥前系	18世紀後半
第47図 PL.35	4	染付 皿	2石垣 口縁～底部1/2 残存	口 底	14.0 8.4	高	3.4	灰白色	蛇ノ目凹形高台。内外面とも草花文が広がる。肥前	18世紀後半
第47図 PL.35	5	染付 碗	2石垣 口縁～底部2/3 残存	口 底	11.0 6.3	高	4.6	灰白色	外面口唇部、高台部に圏線。体部に東屋山水文を配す。内面口唇部に2条、腰部に1条の懸垂。見込み部には「寿」か。肥前	18世紀後半

51区1号土坑墓

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第50図 PL.35	1	銭貨 銭種不明 (鉄銭)	1墓坑埋土 一部欠損	縦 横	2.693 2.749	厚 重	0.642 2.4		全体が錆に覆われ劣化が激しい。内部が空洞化している	中世～近世

集石遺構

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第51図 PL.35	1	鉄製品 釘	7集石 頭部欠損	長 幅	2.8 1.3	厚 重	0.55 1.1		体部から脚部にかけて残存。くの字に曲がる。脚部の一部も欠損している	近世か
第51図 PL.35	1	陶器 片口鉢	10集石埋土 体部下半～底部 残存	底	8.8			灰黄色	内面見込み部に目痕2箇所。外面体部下半に煤附着。美濃	連房8小期
第51図 PL.35	2	銭貨 新寛永11波	10集石 完形	縦 横	2.846 2.859	厚 重	0.147 4.3		面の彫が深く、字、輪、郭が明瞭、背は彫が浅く、一部肉眼では見えずらい。背の左上の輪に凹みがある	近世

焼土遺構 (51区48号焼土)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第54図 PL.35	1	陶器 片口鉢	48焼土底面 口縁部破片	口	16.0			明黄褐色	小径ながら片口部はやや大型。美濃	連房8小期
第54図 PL.35	2	陶器 鉢	48焼土底面 口縁～体部破片	口	(28.0)			灰色	練鉢。瀬戸か	連房8小期
第54図 PL.35	3	染付 猪口	48焼土底面 口縁～底部1/2 残存	口 底	7.8 5.6	高	3.2	灰白色	端反碗。草花文を配す。波佐見か	18世紀後半
第54図 PL.35	4	染付 皿	48焼土底面 口縁～底部破片	口 底	(16.0) (5.0)	高	4.5	灰白色	輪花皿。見込み部に五弁花。高台内に一重方形枠に禍福。体部内外面は草花文。肥前	18世紀後半
第54図 PL.35	5	陶器 すり鉢	48焼土底面 口縁部片					赤褐色	口縁部厚手で2段。すり目単位は不明。瀬戸・美濃系	18世紀後半
第54図 PL.35	6	在土器 火鉢	48焼土底面 破片					にぶい黄橙色	150坑例と同様の獣面突起。突起部分に片岩粒を集めることから別種胎土を使用する	中世～近世
第54図 PL.35	7	石製品 砥石	48焼土底面 ほぼ完形	長 幅	15.8 3.3	厚 重	2.7 261.7	砥沢石	表裏2面の使用。主に表面の使用が顕著で強く凹む。両側面に被熱による剥落が見られる。上下端部及び両側面に調整時の櫛歯状削り痕跡を見る	近世
第54図 PL.35	8	銅製品 煙管(吸口)	48焼土底面 一部欠損	長 幅	3.7 1.2	厚 重	1.2 3.5		端部を持つ羅字が残存する。つなぎ目から破損している	近世
第54図 PL.35	9	銅製品 煙管(吸口)	48焼土埋土 一部欠損	長 幅	2.5 1.0	厚 重	1.1 3.9		体部が六角形。肩から断面が丸くなる。六角形の部分には煙管に対して垂直に約0.5mm間隔で装飾の線が引かれる。つなぎ目が確認できる	近世
第54図 PL.35	10	銅製品 煙管(吸口)	48焼土埋土 ほぼ欠損	長 幅	1.65 1.0	厚 重	0.85 0.9		中心に直径1mmの空洞が空いており、羅字の痕跡か。不明瞭だがつなぎ目が確認できる	近世
第54図 PL.35	11	鉄製品 刀子	48焼土埋土 ほぼ完形	長 幅	11.8 1.85	厚 重	0.5 15.7		腐食が激しく、全体が劣化している。剥離によって破損する	近世
第54図 PL.35	12	鉄製品 釘	48焼土埋土 一部欠損	長 幅	3.75 0.4	厚 重	0.45 1.6		体部のみ残存	近世
第54図 PL.35	13	鉄製品 釘	48焼土埋土 一部欠損	長 幅	3.45 0.5	厚 重	0.5 2.1		体部から脚部にかけて残存	近世
第54図 PL.35	14	鉄製品 釘	48焼土埋土 一部欠損	長 幅	5.2 0.5	厚 重	0.4 3.2		体部のみ残存。錆の塊があり、全体にひび割れが見られる	近世
第54図 PL.35	15	鉄製品 鍋か	48焼土埋土 破片	長 幅	6.1 3.45	厚 重	0.8 18.9		口縁にも見える部分が残存するが、劣化により破損しており判断が難しい。一部に有機物が付着するが、遺物に伴うものかは不明	近世
第54図 PL.35	16	鉄製品 不明遺物	48焼土埋土 破片	長 幅	2.80 1.95	厚 重	0.1 4.0		断面は上下が薄くなり、1面のみ中心はやや膨らむ。しかし、全体に劣化が激しいため、元の形状は不明	近世

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				縦横	厚	重			
第55図 PL.35	17	銭貨 新寛永	48焼土埋土 完形	縦横	2.134 2.141	厚 重	0.111 1.5	面、背ともに字、輪、郭は明瞭。穿が大きい。背の輪が左下が広く、右上が狭い	近世
第55図 PL.35	18	銭貨 新寛永	48焼土埋土 完形	縦横	2.228 2.236	厚 重	0.124 1.5	背元。面の字、輪、郭は明瞭。背の字は彫が浅く、見えづらい。輪、郭は明瞭	近世
第55図 PL.35	19	銭貨 新寛永	48焼土埋土 完形	縦横	2.325 2.321	厚 重	0.102 2.1	面、背ともに字、輪、郭は明瞭。背の輪の一部が凹む	近世
第55図 PL.35	20	銭貨 古寛永	48焼土埋土 完形	縦横	2.384 2.367	厚 重	0.900 1.9	面、背ともに字、輪、郭が明瞭。背の輪は上から右にかけて広く、下は狭い。郭は左と下が太く、上と右は狭い	近世
第55図 PL.35	21	銭貨 新寛永	48焼土埋土 完形	縦横	2.370 2.360	厚 重	0.119 2.3	面の彫が深く、輪、郭は明瞭。背の彫は浅いが、輪、郭の判別は可能。「通」の字の下に傷が入る。背の郭部分に右上から右下にかけて傷が見られる	近世
第55図 PL.35	22	銭貨 新寛永	48焼土埋土 完形	縦横	2.333 2.337	厚 重	0.189 2.4	面はやや彫が浅いが字、輪、郭は明瞭。背は劣化の影響も有り、不明瞭。光沢のある付着物が見られる	近世
第55図 PL.35	23	銭貨 新寛永	48焼土埋土 完形	縦横	2.294 2.295	厚 重	0.117 1.8	背元。面の字、輪、郭は明瞭。背の元が一部見えづらい。輪、郭は明瞭。背の輪がやや右上が細くなる	近世
第55図 PL.35	24	銭貨 新寛永	48焼土埋土 完形	縦横	2.322 2.316	厚 重	0.111 2.1	背小。面の輪の一部が剥離。面の彫は深く、輪、郭が明瞭。背の彫は浅いが、判別は可能	近世
第55図 PL.36	25	銭貨 新寛永	48焼土埋土 一部欠損	縦横	2.294 2.300	厚 重	0.124 1.9	全体が劣化する。一部欠損。面の字、輪、郭は明瞭。背の彫は浅く、若干見えづらい	近世
第55図 PL.36	26	銭貨 新寛永	48焼土埋土 完形か	縦横	2.508 2.508	厚 重	0.714 2.7	半分ほどが、付着物により覆われている。面、背ともに字、輪、郭は明瞭	近世か
第55図 PL.36	27	銭貨 洪武通寶	48焼土埋土 完形	縦横	2.296 2.272	厚 重	0.154 2.2	面の彫は深いが、「寶」の字が潰れて読みづらい。輪、郭は明瞭。背の輪、郭はゆがみ、右側が輪と郭がつながってしまっている	近世
第55図 PL.36	28	銭貨 新寛永11波	48焼土埋土 完形	縦横	2.846 2.862	厚 重	0.148 3.8	面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭	近世
第55図 PL.36	29	銭貨 新寛永11波	48焼土埋土 完形	縦横	2.859 2.873	厚 重	0.153 3.3	2片に分かれる。輪の一部が欠ける。面、背ともに字、輪、郭は明瞭	近世
第55図 PL.36	30	銭貨	48焼土埋土 完形					8枚がずれて重なって出土している。全て四文銭	8枚癒着 近世

焼土遺構 (51区52号焼土)

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口底	高	厚				
第56図 PL.36	1	在地土器 内耳土器	52焼土底面 口縁～底部破片	口底	(36.6) (28.0)	高	5.0	粗砂粒：石英・輝石黒褐/にぶい褐	鍋形。口縁～体部は強く開く。底部薄い。外面弱い撫で、内面平滑な横位撫で	中世か
第56図 PL.36	2	染付皿	52焼土埋土 口縁～体部1/3 残存	口	(14.0)			灰白色	輪花皿。内外面とも草花文を配す。肥前	18世紀後半
第56図 PL.36	3	石製品 石臼 上臼	52焼土埋土 1/2残存	径	32.0	厚 重	13.3 9600	安山岩	粉ひき形。分割は不明。側縁は幅広で高く、供給孔及び軸穴の一部が確認できる。偏減りは見られない	中世～近世

焼土遺構 (52区18号焼土・19号焼土)

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				縦横	厚	重				
第57図 PL.36	1	染付碗	18焼土底面 口縁部破片					灰白色	筒形碗。文様は山を配した風景。肥前系	18世紀後半
第57図 PL.36	2	染付瓶	18焼土底面 口縁～頸部残存	口	1.5			灰白色	小型品。口縁～体部上半に蛸唐草文を配す。肥前系	18世紀後半
第57図 PL.36	3	在地土器 火鉢	18焼土底面 体部破片					にぶい黄褐色	内湾する体部。不整形の刻印が覆う	18世紀後半
第57図 PL.36	4	銭貨 古寛永	18焼土 完形	縦横	2.435 2.445	厚 重	0.131 2.6		面、背ともに彫が深く、字、輪、郭は明瞭。上部で輪の一部が盛り上がる	近世
第57図 PL.36	5	銭貨 龍一銭銅貨	18焼土 完形	縦横	2.809 2.802	厚 重	0.172 6.6		明治8年	近代
第57図 PL.36	1	石製品 重りか	19焼土埋土 1/2残存	長幅	15.5 14.4	厚 重	11.6 3100	粗粒安山岩	搦ぎ杵の重りか。平面形・断面形とも方形を呈し中位に方形の孔を穿つ。底面は平滑に仕上げ、その他の面は強い敲打痕が覆う	近世か

土坑 (51区)

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				縦横	厚	重				
第75図 PL.37	1	銭貨 新寛永	3坑埋土 完形	縦横	2.247 2.250	厚 重	0.126 2.1		面の輪部分から剥離。郭、輪は明瞭。背は郭、輪の彫は深く明瞭。郭、輪が若干右にずれる	近世
第75図 PL.37	2	銭貨 新寛永	3坑埋土 完形	縦横	2.553 2.568	厚 重	0.165 3.8		新寛永。背文。全体に錆が生じ劣化が激しいが、字、郭、輪は明瞭。背の郭の一部がへこむ	近世
第75図 PL.37	3	銭貨 銭種不明 (鉄銭)	3坑埋土 完形か	長幅	3.003 3.052	厚 重	1.208 12.0		全体が錆で覆われている。3枚がずれて重なって出土する	近世か
第75図 PL.37	1	陶器 灯火受皿	150坑埋土 体部～底部破片	底	(4.0)			灰色	内面褐色釉。瀬戸・美濃系か	近世
第75図 PL.37	2	鉄製品 口金か	150坑埋土 完形?	長幅	3.596 3.293	厚 重	0.626 14.8		円状の金属製品。鉋や鎌を柄に固定する金具が想定できる。表、裏に製作時の様子が残存している	近世か
第75図 PL.37	3	在地土器 火鉢	150坑底面 ほぼ完形	口底	30.0 20.3	高	21.0	橙色	獣面(獅子)把手を2単位配す。高台部は直径でしっかりした作り。外面は型押し整形と横線を多段に配す。内面口唇部に強い被熱痕跡を見る	中世～近世

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				径	厚	重			
第75図 PL.37	4	石製品 石臼 下臼	150坑埋土 破片		(28.0)	12.5 4600	安山岩	粉ひき形か。溝はやや太いが分割不明。径2.5cm程の軸穴を設ける	中世～近世
第75図 PL.37	1	陶器 すり鉢	179坑底面 体部破片				灰黄色	轆轤整形。すり目単位は17条を数える。瀬戸・美濃系か	連房8小期?
第75図 PL.37	1	銭貨 銭種不明	180坑埋土 完形	縦横	2.500 2.550	厚重 0.100 2.0		銭種不明。劣化が激しく、面、背の判別もできない。多数破片に割れる	近世か
第75図 PL.37	2	銭貨 太平通寶	180坑埋土 完形	縦横	2.412 2.402	厚重 0.159 2.7		面の彫が深く、輪、郭は明瞭。背の彫は浅く、輪、郭不明瞭	北宋銭 中世か
第75図 PL.37	3	銅製品 煙管	180坑埋土 完形	長幅	13.618 1.040	厚重 1.688 24.2		延べ煙管と呼ばれる雁首、吸管、吸口が一体となった煙管。吸口が断面が正円だが、吸管で楕円になる。また、雁首部分になると正円に近くなる。目視ではつなぎ目は見られない	近世か
第75図 PL.37	4	鉄製品	180坑埋土 一部欠損	長幅	8.262 0.767	厚重 0.790 6.5		剥離するような割れが生じる。釘状の遺物だが、断面は円形のため、詳細不明	近世か
第75図 PL.37	5	鉄製品	180坑埋土 破片	長幅	5.761 4.288	厚重 0.965 34.6		劣化により、剥離が生じる。板状の鉄製品だが、詳細は不明	近世か
第75図 PL.37	6	鉄製品	180坑埋土 完形	長幅	2.827 0.249	厚重 0.183 0.4		非常に細く、短い製品。両端が尖る。断面はやや角が取れた四角形	近世か
第75図 PL.37	7	鉄製品 釘	180坑埋土 一部欠損	長幅	4.289 0.468	厚重 0.502 2.2		体部と脚部が残存。やや劣化により、錆が付着しやせる	近世か
第75図 PL.37	8	鉄製品 釘	180坑埋土 一部欠損	長幅	2.802 0.764	厚重 0.511 2.6		体部が残存。くの字に曲がりほとんどが錆に覆われている	近世か
第76図 PL.37	9	鉄製品 鏝	180坑埋土 一部欠損	長幅	21.400 5.781	厚重 1.689 140.3		脚部の一つが欠損。一部劣化により剥離が生じている	近世か
第76図 PL.37	10	鉄製品 鏝	180坑埋土 一部欠損	長幅	17.953 5.748	厚重 1.327 153.5		脚部の一つが欠損。欠損部がねじれの関係に脚部がある可能性から手違鏝か	近世か
第76図 PL.37	1	陶器 すり鉢	184坑底面 体部破片				灰黄色	比較的軟質。内面摩滅著しい。瀬戸・美濃系か	近世か
第76図 PL.37	2	銭貨 新寛永	184坑埋土 完形	縦横	2.395 2.402	厚重 0.116 2.1		面の彫は深く、字、輪、郭は明瞭。背はやや彫が浅いが、輪、郭は明瞭。一部に右上から左下に向けて細かな傷が入る	近世
第76図 PL.38	1	陶器 碗	190坑埋土 口縁～体部1/3 残存	口底	(11.6)	高	明オリープ灰色	丸碗。瀬戸・美濃系	近世
第76図 PL.38	2	石製品 石臼	190坑埋土 破片	径	30.0	厚重 12.1 5810	安山岩	粉ひき形、上白か。縁辺を大きく欠損する。分割不明。供給孔と思われる孔を設ける。偏減りは顕著ではない	中世～近世
第76図 PL.38	3	石製品 石臼(下臼)	190坑埋土 1/3残存	径	30.0	厚重 11.3 5900	安山岩	粉ひき形。おそらく6分割。軸穴を設ける。溝は深く、摺り面は比較的平滑。偏減りは顕著ではない	中世～近世

土坑 (52区)

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				縦横	厚	重			
第77図 PL.38	1	銭貨 古寛永	2坑埋土 完形	縦横	2.240 2.248	厚重 0.110 1.8		全体に劣化が見られる。面の字、輪、郭は明瞭。背は輪、郭が不明瞭	近世
第77図 PL.38	1	鉄製品 包丁	6坑埋土 1/2	長幅	8.7 2.3	厚重 0.55 9.1		先端と柄の部分が欠損している。2片に割れる。柄近くで膨らみを持ち、先端に細くなっていく	近世
第77図 PL.38	2	銭貨 古寛永	6坑埋土 完形	縦横	2.341 2.344	厚重 0.118 2.2		背元。面、背ともに字、輪、郭は明瞭。面の輪の一部に右上から左下に向かう傷がみられる	近世
第77図 PL.38	1	銭貨 新寛永11波	11坑埋土 完形	縦横	2.826 2.829	厚重 0.131 3.9		全体に劣化が激しい。面、背ともに彫は深く、明瞭だが一部劣化	近世
第77図 PL.38	1	石製品 砥石	13坑埋土 中央部のみ残存	長幅	(4.3) 2.1	厚重 1.6 25.8	砥沢石	1面を使用。使用頻度は高く、薄手になる。他の3面は調整時櫛歯状削り痕跡を見る	近世か
第77図 PL.38	2	陶器 すり鉢	13坑埋土 口縁～底部1/2 残存	口底	26.8 9.8	高 10.1	浅黄色	口縁部2段。18条単位のすり目を内面体部と底面に施す。轆轤整形で底部に回転糸切り痕を残す。内面煤付着。瀬戸	連房8小期
第77図 PL.38	1	石製品 石鉢	14坑埋土 破片	口底		高 572.0	粗粒安山岩	正円ではなく歪な形状。口縁部は平坦面を築くが不均質な厚さを呈す。外面器壁剥落多い	近世か
第77図 PL.38	1	硝子製品 凸レンズか	18坑埋土 2/3残存	長幅	5.6 5.3	厚重 1.5 80.6	ガラス	周縁が薄手で断面形状から凸レンズと判断した。周縁部に剥離が及ぶが意図的な剥離かは不明である	近・現代
第77図 PL.38	1	染付 碗	21坑埋土 口縁～底部破片	口底	(10.0) (5.5)	高 5.5	灰白色	外面竹笹などの草花文。内面見込み部に「化」あるいは「花」か。肥前系	近代か
第77図 PL.38	2	染付 碗	21坑埋土 口縁～底部1/3 残存	口底	(8.0) (3.2)	高 4.0	灰白色	端反小碗。文様は松を配した風景か。肥前系	近代か
第77図 PL.38	1	銭貨 富士1銭アルミ貨	24坑埋土 完形	縦横	1.586 1.590	厚重 0.176 0.6		昭和16年。上部が劣化している	現代
第77図 PL.38	1	石製品 砥石	25坑埋土 中央部のみ残存	長幅	(5.2) 2.0	厚重 1.3 23.8	砥沢石	小型品。裏面を大きく欠損。3面に使用による平滑面を見るが、頻度は低い	近世か
第77図 PL.38	1	銅製品 煙管(雁首)	33坑埋土 完形	長幅	5.4 1.2	厚重 1.45 16.1		真鍮製。下面に「東京」と彫られている。上面につなぎ目が見られる。火皿の下に補強体がつく	近代
第77図 PL.38	2	銭貨 新寛永	33坑埋土 完形	縦横	2.561 2.549	厚重 0.142 2.9		背文。面、背ともに彫が深く、字、輪、郭は明瞭。一部に錆が付着し、輪の一部が欠ける	近世
第77図 PL.38	3	鉄製品 釘	33坑埋土 一部残存	長幅	7.1 3.85	厚重 2.2 33.4		明治以降の釘。断面形状が丸い。全体が錆に覆われ、劣化による剥離も見られる	近・現代

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長幅	厚	1.2 4.9			
第77図 PL.38	1	鉄製品 釘	34坑埋土 一部欠損	長幅 1.1	厚 1.1	1.2 4.9		体部のみ残存する。全体に多くの錆が付着し、詳細は不明	近世
第77図 PL.38	1	陶器 すり鉢	41坑埋土 口縁部片	口	(31.0)		浅黄色	口縁部は受け口状を呈す。16条単位のすり目を内面体部に施す。轆轤整形。瀬戸	連房8小期?
第77図 PL.38	2	陶器 碗	41坑埋土 底部のみ残存	底	6.0		灰白色	尾呂茶碗。外面に煤付着。美濃か	連房7小期?
第77図 PL.38	1	鉄製品 不明	42坑埋土 一部欠損	長幅 1.25	厚 8.7	1.35		幅が広く、薄いがもう一方に向かうにつれて幅が狭くなり、厚くなっていく。全体は錆に覆われており、詳細は不明	近世か
第77図 PL.38	2	鉄製品 不明	42坑埋土 一部欠損	長幅 1.35	厚 13.8	1.15		火箸などの棒状の遺物。断面形状のみ判明。全体が錆に覆われていて、詳細不明	近世か
PL.38	3	磁器 碗	42坑埋土 口縁～底部1/2 残存				浅黄色	型作り。軍配給品か。外底面に「676」刻印有り	現代

土坑 (61区)

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長幅	厚	0.75 80.0			
第78図 PL.39	1	中世軟質土 器 焙烙?	23坑埋土 底部破片				細砂:輝石/良好/ 暗褐色	砂底底部。平坦面を維持する	中世
第78図 PL.39	1	土師器 甕	27坑埋土 口縁部破片				細砂:石英/良好/ にぶい橙色	強く屈曲する頸部。口縁部内外面横位撫で、頸部外面縦位撫で	6世紀末?
第78図 PL.39	2	銅製品 おろし金	27坑埋土 完形	長幅 8.8	厚 8.8	0.75 80.0		表面の突起は錆に覆われ、残存。上部に穴が開く。一部細かな有機質が付着しているが、使用時に伴うものであるかは不明	近世
第78図 PL.39	1	染付 碗	29坑埋土 口縁～底部2/3 残存	口 底	11.0 6.0	高 6.4	灰白色	小広東碗。外面に算木文、内面口唇部と腰部に圏線。見込み部に?文。肥前	18世紀後半
第78図 PL.39	2	染付 碗	29坑埋土 底部のみ残存	底	3.6		灰白色	外面に2重網目文を配す。波佐見系	18世紀後半
第78図 PL.39	3	鉄製品 不明	29坑埋土 一部	長幅 2.4	厚 46.2	1.75		劣化が激しく、詳細は不明。見方によっては鎌や鋤の風呂に接続するくの字に折れる部分とも考えられる	近世
第78図 PL.39	1	染付 碗	30坑埋土 口縁～底部3/4 残存	口 底	9.6 5.0	高 3.8	灰白色	外面に雪草草花文。腰部に1条、高台部に2条の圏線。高台部に崩れた梵字か。波佐見系	18世紀後半
第78図 PL.39	2	鉄製品 不明	26坑埋土 一部	長幅 1.9	厚 23.6	0.22		全体が錆に覆われ詳細は不明。端部近くで反っている板状の金属	近世

遺構外 (51区)

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長幅	厚	2.0			
第79図 PL.39	1	陶器 甕?	S15 肩部～体部破片				灰色	大甕肩部破片。外面自然釉付着。内面弱い撫で。常滑	中世
第79図 PL.39	2	陶器 すり鉢	019 体部下～底部 破片	底	(10.0)		にぶい黄橙色	10条のすり目単位を数える。瀬戸・美濃	連房8小期
第79図 PL.39	3	陶器 すり鉢	51区 体部下～底部 破片	底	(15.0)		粗砂粒:石英/酸化 焰/褐色	轆轤整形。すり目単位は不明。内面使用のため滑沢面が広がる。胎土は縞状を呈す。瀬戸・美濃系	中世～近世
第79図 PL.39	4	陶器 すり鉢	X22 底部破片				粗砂粒:石英/還元 焰/灰色	外面腰部横位削り調整。すり目単位、使用痕など不明。瀬戸・美濃	中世
第79図 PL.39	5	陶器 練鉢	X16、Y15 口縁部破片	口	(25.0)		灰色	口縁部肥厚し、内面に突出する。灰釉。瀬戸	連房8小期
第79図 PL.39	6	陶器 灯火受皿	J21 口縁部一部残存	口 底	(10.0) 4.0	高 2.0	灰白色	内面灰釉。瀬戸・美濃	連房8小期
第79図 PL.39	7	在土土器 内耳土器	S23 口縁部破片				粗砂:石英・輝石/ 酸化焰/暗褐色	身深の鍋形。直立気味の口縁～体部。外面弱い撫で、内面平滑な横位撫で	中世
第79図 PL.39	8	在土土器 内耳土器	015 口縁部破片				細砂:輝石/酸化焰/ 黒褐色	鍋形。直立気味に内湾する口縁部。外面弱い撫で、輪積み痕残る。内面平滑な横位撫で	中世
第79図 PL.39	9	在土土器 鉢	021 口縁部破片				細砂:海綿状骨針/ 還元焰/灰色	比較的薄手で、口縁～体部は一体化し開く。轆轤整形。回転方向不詳	中世
第79図 PL.39	10	在土土器 手握ね	W・X19・20 口縁部破片				粗砂:還元焰/にぶ い黄橙色	薄手で無文の手握ね土器。内外面とも弱い撫で調整で器面の凹凸著しい。輪積み痕を残す	古代～中世か
第79図 PL.39	11	在土土器 火鉢	X・Y14・15 底部破片				細砂:輝石/酸化焰/ 黒褐/灰褐色	内湾気味に開く体部下。底面に半球状の短脚を付帯する。内面器壁剥落	近世～近代
第79図 PL.39	12	染付 碗	018 口縁～底部破片	口 底	(14.0) (7.0)	高 3.9	灰白色	内外面とも草花文。肥前系	18世紀後半
第79図 PL.39	13	染付 蓋	口縁部破片	口	(10.0)		灰白色	外面シダ状の草花文。内面口縁部と底面に横線。肥前系	18世紀後半
第79図 PL.39	14	染付 碗	J24 口縁～底部1/3 残存	口 底	(8.8) (3.2)	高 4.3	灰白色	内外面とも圏線を設けず、外面に草花文を配す。肥前系	近世
第79図 PL.39	15	染付 蓋	M19 約1/2残存	幅	12.4	高 2.8	灰白色	段重の蓋か。外面に雀と桜を描く。肥前系	近代か
第79図 PL.39	16	石製品 砥石	M25 破片	長幅 (4.8)	厚 6.7	0.5	珪質粘板岩	硯などの転用品か。薄く板状に剥離した素材の一部を使用する	近世か

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚			
第79図 PL.39	17	石製品 砥石	O18 端部残存	長幅 (2.4)	厚 2.4	0.7 6.3	砥沢石	小型の手持ち砥か。表裏2面の使用。頻繁な使用で薄くなる。側面と端部に調整時櫛歯状削り痕跡が残る	近世か
第79図 PL.39	18	石製品 砥石	Y15 完形	長幅 11.7	厚 2.4	2.3 104.6	砥沢石	表裏2面の使用。主に表面の使用が顕著で強く、両端部が凹む。端部及び側面に調整時の櫛歯状削り痕跡を見る	近世か
第79図 PL.39	19	石製品 砥石	J・K23・24 破片	長幅 (6.4)	厚 3.6	0.6 27.8	珪質準片岩	一面を使用。使用頻度は低く、側面と端部に調整時櫛歯状削り痕跡を見る。仕上げ砥か	近世か
第79図 PL.39	20	石製品 砥石	51区 破片	長幅 (3.7)	厚 (2.1)	0.25 3.8	珪質準片岩	裏面を大きく欠損。1面のみ使用が確認できる。使用頻度は低い	近世か
第79図 PL.39	21	石製品 砥石	X・Y14・15 中央部のみ残存	長幅 (6.0)	厚 3.3	1.6 58.9	流紋岩	3面を使用。表面の使用頻度が高く、著しく凹む。調整時櫛歯状削り痕跡は希薄	近世か
第80図 PL.39	22	石製品 硯	P18 中央部破片	長幅 (7.1)	厚 5.3	1.0 41.6	頁岩	陸部の一部が残存。使用頻度は高いが、破片のため判然としない	近世か
第80図 PL.39	23	石製品 硯	51区東端 破片	長幅 (6.4)	厚 (3.9)	1.5 32.4	頁岩	海・陸部を欠損。外縁部と裏面のみ残存。裏面は平滑に仕上げられている	近世か
第80図 PL.40	24	石製品 石鉢?	X15 1/2?残存	口底 (8.7)	高 (8.1)	5.8 197.2	角閃石安山岩	多孔質な石材。小径のヒデ鉢か。正円ではなく、磨り面が数箇所ある。体部の横位沈線は金属刃の刃均しか。再利用品の可能性は高い	近世か
第80図 PL.40	25	石製品 不明石製品	S16 ほぼ完形	長幅 26.4	厚 20.4	6.4 5000	安山岩	大型で扁平な円礫の中央部に黒色付着物を付着する石製品。台石か	近世か
第80図 PL.40	26	石製品 石臼 下臼	K23 1/2残存	径	33.2	厚 7.6	安山岩	粉ひき形。溝の摩耗が著しく分割は不明。径2.5cm程の軸穴を設ける。摺り面は比較的平滑	中世～近世
第80図 PL.40	27	石製品 石臼 下臼	P・Q19・20 破片	径 (30.0)	厚 11.0	4000	安山岩	粉ひき形。小型品で6分割か。縁部の破損著しく全容も把握できない。摺り面は平坦で光沢を見る	中世～近世
第80図 PL.40	28	石製品 石臼 上臼	表採 破片	径 (32.0)	厚 13.5	4650	安山岩	粉ひき形。分割は不明。側縁は幅広く径3.5cm程の供給孔を穿つ。偏減りは見られない	中世～近世
第81図 PL.40	29	鉄製品 刀子か	M18 破片	長幅 4.4	厚 0.9	0.35 2.8		茎からやや刀身部分が含まれるか。劣化が激しく、変形の可能性もある。刀身部分にも見える箇所は断面三角形。	近世
第81図 PL.40	30	鉄製品 刀子か	W15 1/2以下	長幅 5.10	厚 1.40	0.35 5.6		劣化による破損が激しく、2片にわかれる。断面形状から刀子と思われる	近世
第81図 PL.40	31	鉄製品	W・X14-16 一部欠損	長幅 8.3	厚 1.75	0.5 8.5		板状の金属。長辺でくの字に曲げられる。劣化による剥離が見られる	近世
第81図 PL.40	32	鉄製品	Y16 完形	長幅 4.10	厚 3.10	0.60 13.2		板状の鉄製品。詳細は不明。一部錆による劣化が激しい	近世
第81図 PL.40	33	鉄製品 釘	K23 一部欠損	長幅 8.5	厚 1.2	0.7 8.5		頭部から体部が残存する。劣化が激しく、多数剥離する	近世
第81図 PL.40	34	鉄製品 釘	X14 1/2	長幅 4.25	厚 1.60	0.5 2.7		体部のみ残存。錆が多く、詳細不明	近世
第81図 PL.40	35	鉄製品 釘	Y15 一部欠損	長幅 8.05	厚 0.9	0.67 13.9		体部から脚部にかけて残存。劣化が激しく、詳細は不明	近世
第81図 PL.40	36	鉄製品 口金か	Y16 一部欠損	長幅 4.20	厚 3.90	1.15 15.3		劣化により状態がよくない。斜めに亀裂が入っているところが、制作時の痕跡か	近世
第81図 PL.40	37	鉄製品 座金	N22 完形	長幅 3.55	厚 3.60	0.3 19.6		中心に直径1.5cmの穴があいている。全体は錆に覆われている	近世
第81図 PL.40	38	銅製品 煙管(雁首)	N1 一部欠損	長幅 5.2	厚 1.05	1.4 5.0		側面につなぎ目が残存。碑皿が欠損している。表面は劣化し、もろくなっている	近世
第81図 PL.40	39	銅製品 煙管(雁首)	Y15 完形	長幅 4.45	厚 1.0	1.5 5.4		上部につなぎ目、火皿の下に補強体が見られる。オリジナルの表面は劣化している。羅宇の一部が残存	近世
第81図 PL.40	40	銅製品 煙管(雁首)	ほぼ完形	長幅 3.30	厚 1.35	1.25 5.3		他の雁首と比較して短い。つなぎ目が右側面上側にある。上面にやや深い傷が見られる	近世
第81図 PL.40	41	銅製品 煙管(吸口)	完形	長幅 5.0	厚 1.10	1.10 6.7		つなぎ目が見られる。端部に向かって細くなっていき、口付け部分が膨らむ	近世
第81図 PL.40	42	銅製品 煙管(吸口)	Y14 ほぼ完形	長幅 4.40	厚 1.2	1.1 6.1		内部に羅宇が残存する。つなぎ目明瞭。口付が少し欠ける	近世
第81図 PL.40	43	鉄製品 煙管か	S19 破片	長幅 3.1	厚 0.8	0.6 2.1		煙管状の鉄製品。両端部破損し、外形も1/2ないことから、詳細不明。現状ではつなぎ目などは見られない	近世
第81図 PL.40	44	銅製品 かんざし	U17 完形	長幅 15.10	厚 1.90	0.40 10.4		かんざしの上の部分か耳かきになっている。木瓜紋に似た図形が装飾される	近世
第81図 PL.40	45	銅製品 切羽	Y16 完形	長幅 3.95	厚 2.15	0.15 7.7		圧力による変形がある。表面は1面は上下方向の細かな傷が見られ、もう1面は斜め方向の細かな傷が見られる	近世
第81図 PL.40	46	銭貨 永楽通寶	S15 完形	縦横 2.403	厚 2.380	0.128 2.0		面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭。面の輪は上から右にかけてやや狭くなる	中世
第81図 PL.40	47	銭貨 古寛永	W14 完形	縦横 2.467	厚 2.455	0.141 3.8		面の彫が深く、字、輪、郭が明瞭。背の彫は浅く、一部、輪、郭が不明瞭	近世
第81図 PL.40	48	銭貨 古寛永	W14 完形					面同士が癒着して出土している。2枚のずれは少ない。癒着していた面に白色の針状析出物が見られる	2枚癒着 近世
第81図 PL.40	49	銭貨 古寛永	W14 完形	縦横 2.478	厚 2.480	0.120 3.0		面の彫が深く、字、輪、郭が明瞭。背の彫は浅いが、輪、郭は明瞭	近世
第81図 PL.40	50	銭貨 古寛永	W14 完形	縦横 2.542	厚 2.546	0.146 3.8		穿と郭の向きが合わず、やや左に傾く。面、背ともに彫は深く、字、輪、郭は明瞭	近世
第81図 PL.40	51	銭貨 古寛永	W14 完形	縦横 2.504	厚 2.488	0.132 3.1		面、背ともに彫が深く、字、輪、郭は明瞭。背の郭が上と右が広い	近世

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第81図 PL.40	52	銭貨 古寛永	W14 完形	縦横 2.519 2.505	厚重 0.138 3.7		面、背ともに彫が深く、字、輪、郭は明瞭。背の輪、郭が右上方向にずれる	近世	
第82図 PL.40	53	銭貨 古寛永	W14 完形	縦横 2.459 2.467	厚重 0.146 3.6		面の彫が深く、字、輪、郭が明瞭。背は彫がやや浅い。背はやや上の郭が広い。彫は浅いが明瞭	近世	
第82図 PL.40	54	銭貨 古寛永	W14 完形	縦横 2.455 2.462	厚重 0.150 3.6		面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭	近世	
第82図 PL.40	55	銭貨 古寛永	W14 完形	縦横 2.489 2.489	厚重 0.145 3.3		面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭	近世	
第82図 PL.40	56	銭貨 古寛永	W14 完形	縦横 2.455 2.447	厚重 0.129 3.4		面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭	近世	
第82図 PL.40	57	銭貨 古寛永	W14 完形	縦横 2.622 2.594	厚重 0.347 7.1		2枚癒着	近世か	
第82図 PL.40	58	銭貨 古寛永	W14 完形	縦横 2.518 2.549	厚重 0.109 2.9		面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭。一部、穴が開いている	近世	
第82図 PL.40	59	銭貨 古寛永	W14 完形	縦横 2.156 2.531	厚重 0.165 4.2		面の彫が深く、字、輪、郭が明瞭。背はやや浅いが、輪、郭は明瞭	近世	
第82図 PL.40	60	銭貨 古寛永	W14 完形	縦横 2.495 2.471	厚重 0.145 3.5		面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭。「寛」の字が一部欠損している	近世	
第82図 PL.41	61	銭貨 古寛永	W14 一部欠損	縦横 2.533 2.551	厚重 0.132 2.9		面、背ともに字、輪、郭が明瞭。輪の一部が欠損	近世	
第82図 PL.41	62	銭貨 古寛永	W14 完形	縦横 2.486 2.476	厚重 0.154 4.1		面、背ともに字、輪、郭が明瞭。面の彫の方が深い	近世	
第82図 PL.41	63	銭貨 新寛永	U-W15-17	縦横 2.554 2.558	厚重 0.131 2.8		面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭	近世	
第82図 PL.41	64	銭貨 新寛永	L25 完形	縦横 2.329 2.330	厚重 0.134 2.2		面の彫は深く、字、輪、郭が明瞭。背の輪、郭は浅いが、明瞭。一部に右上から左下方向の傷が見られる	近世	
第82図 PL.41	65	銭貨	L25 完形				1枚はずれて出土し、5枚はほぼ重なって出土する。穿に一部有機物が見られる	6枚癒着 近世	
第82図 PL.41	66	銭貨 新寛永	X16 完形	縦横 2.317 2.328	厚重 0.120 2.4		面、背ともに字、輪、郭が明瞭。「寛」の字の一部がつぶれており、見えづらい	近世	
第82図 PL.41	67	銭貨 新寛永	X16 完形	縦横 2.312 2.319	厚重 0.146 3.0		穿が大きい。面は字、輪、郭が明瞭。背は彫が浅いが、判別は可能	近世	
第82図 PL.41	68	銭貨 新寛永	X16 完形	縦横 2.254 2.251	厚重 0.082 1.3		面、背ともに字、輪、郭が明瞭。面の郭が狭い。「寛」の字に小さな穴が開いている	近世	
第83図 PL.41	69	銭貨 新寛永	Y16 完形	縦横 2.322 2.321	厚重 0.170 2.1		やや面側に反る。面は字、輪、郭が明瞭。背は彫が浅く、輪、郭は不明瞭	近世	
第83図 PL.41	70	銭貨 古寛永	Y16 一部欠損	縦横 2.033 2.397	厚重 0.127 2.0		上部が欠損。面、背ともに彫が深く、字、輪、郭は明瞭	近世	
第83図 PL.41	71	銭貨 新寛永	W14 完形	縦横 2.458 2.441	厚重 0.223 2.5		背側にやや反っている。面、背の彫はやや浅いが、字、輪、郭は明瞭。一部劣化による剥離が見られる	近世	
第83図 PL.41	72	銭貨 新寛永	R17 完形	縦横 2.532 2.531	厚重 0.174 2.5		背文。面側に若干反る。面、背ともに彫が深く、字、輪、郭は明瞭	近世	
第83図 PL.41	73	銭貨 新寛永	Y13 完形	縦横 2.320 2.307	厚重 0.098 2.0		背足。面は彫が深く、字、輪、郭は明瞭。背は若干面よりも彫が浅いが明瞭。面、背ともに輪、文字に上下方向の傷が見える	近世	
第83図 PL.41	74	銭貨 新寛永11波	X17 完形	縦横 2.845 2.856	厚重 0.107 3.5		面、背ともに字、輪、郭が明瞭。面は様々な方向の傷がついている。背は上下方向の傷がついている	近世	

遺構外(52区)

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第83図 PL.41	75	在土土器 火鉢	B4 口縁部片				にぶい黄褐色	体部上半2段に内湾し斜線を施す。下半は六角形の押印が覆う。体部中位に貼付の剥落痕跡を見る	近世
第83図 PL.41	76	在土土器 火鉢	B4 胴部片				にぶい黄褐色	No.75と同一個体とみられる	近世
第83図 PL.41	77	陶器 碗	B・C15・16 口縁～底部1/3 残存	口底 (10.8) (4.4)	高	7.2	灰白色	丸碗。美濃	連房8小期
第83図 PL.41	78	陶器 灯火皿	C16 口縁～底部破片	口底 (9.2) (4.0)	高	1.7	灰黄色	褐色釉。瀬戸・美濃	連房7小期?
第83図 PL.41	79	染付 碗	B13 体部～底部1/4 残存	底	4.0		灰白色	外面に雪輪梅樹文。高台に梵字。波佐見系	18世紀後半
第83図 PL.41	80	染付 碗	I13 口縁～底部1/3 残存	口底 (9.4) (4.0)	高	5.1	灰白色	外面に雪輪梅樹文。腰部に圈線。波佐見系	18世紀後半
第83図 PL.41	81	染付 皿	A17 口縁～底部1/2 残存	口底 (13.2) (6.2)	高	3.2	灰白色	外面体部下半は段皿状の稜を持つ。内面に草花文を配す。波佐見系か	18世紀後半
第83図 PL.41	82	染付 蓋(杯)	A・B17・18 口縁～底部1/2 残存	口底 (9.0) (2.8)	高	2.5	灰白色	外面に蝶と草花文を配す。肥前	18世紀後半
第83図 PL.41	83	磁器 小坏	A17 口縁～底部1/2 残存	口底 (6.4) (3.2)	高	4.0	灰白色	端反碗。肥前系	近世～近代

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第83図 PL.41	84	磁器 湯呑碗	A17 口縁～底部1/2 残存	口底 (7.2) (3.2)	高	5.8	灰白色	肥前系	近世～近代
第83図 PL.41	85	染付 碗	A17 口縁～底部1/2 残存	口底 6.5 2.4	高	4.1	灰白色	外面口唇部、高台部に圈線。体部に竹笹など草花文を配す。内面口唇部に2条、腰部に1条の懸垂。見込み部に五弁花か。肥前	18世紀後半
第83図 PL.41	86	染付 小碗	C18 ほぼ完形	口底 6.0 3.0	高	3.8	灰白色	端反碗。外面に草花文を配す。肥前系	近世～近代
第83図 PL.41	87	染付 碗	H14 口縁部破片	口 (8.6)			灰白色	内外面とも口唇部と腰部に圈線を設け外面には草花文を配す。肥前系	18世紀後半
第83図 PL.41	88	磁器 湯呑	C20 口縁～底部1/2 残存	口底 (7.0) (3.0)	高	6.3	明緑灰色	外面に吾妻郡伊勢町竹和健次郎商店の銘あり	近代～現代
第83図 PL.41	89	泥メンコ	B17 ほぼ完形	長幅 2.4 2.4	厚	0.8	橙色	力士の意匠か。裏面は僅かに凹む	近世～近代
第83図 PL.41	90	石製品 砥石	A16 中央部のみ残存	長幅 (5.1) 2.0	厚重	1.8 38.7	砂岩	小型品。4面に使用痕。表面の使用頻度が高く中央が大きく凹む。石材から荒砥であろうか	近世か
第83図 PL.41	91	石製品 砥石	A17 1/2残存	長幅 (9.5) 3.0	厚重	2.8 141.1	砥沢石	表裏2面を使用。表面の使用頻度が高く僅かに凹み滑沢面を持つ。側面は未使用ながら調整時櫛歯状削り痕を見ない	近世か
第83図 PL.41	92	銅製品 煙管(雁首)	A17 一部欠損	長幅 5.1 0.9	厚重	1.4 6.3		火皿が欠損する。つなぎ目が側面にある	近世か
第83図 PL.41	93	銅製品 煙管(吸口)	52区 ほぼ完形	長幅 5.15 0.90	厚重	1.10 3.5		口付がつぶれ、変形している。つなぎ目は明瞭。一部、つなぎ目部分から破損	近世か
第83図 PL.41	94	銅製品 煙管(吸口)	A14 一部欠損	長幅 3.25 0.9	厚重	1.05 2.7		口付が欠損している。つなぎ目は明瞭。端部に一部真鍮のようなものが見られる	近世か
第83図 PL.41	95	銅製品 煙管(吸口)	B16 完形	長幅 5.1 1.35	厚重	1.35 9.5		つなぎ目が明瞭。肩を一周する筋状の装飾が見られる。肩中央付近に太めの筋が2本入る。他の煙管よりも厚みがある	近世
第83図 PL.41	96	鉄製品 小型鎌	A14 1/2程度残存	長幅 7.0 3.1	厚重	0.6 13.5		先端部が欠損している。小型の鎌。持ち手にあたる端部は折り返し、丸めている	近世か
第84図 PL.41	97	鉄製品 蝶番の一部か	D12 完形	長幅 6.4 3.35	厚重	0.11 29.5		穴が2箇所にあいており、一部に錆が多く付着している。ほぼ長方形の鉄板を加工したもの。変形により、鉄板がやや波打つ	近世か
第84図 PL.41	98	鉄製品 火打金か	52区 1/2	長幅 5.0 3.5	厚重	0.5 7.0		火打金の一部か。上部がやや厚く、下部がやや薄くなっている	近世
第84図 PL.41	99	鉄製品 不明	I12 完形	長幅 4.8 3.6	厚重	2.0 38.9		両端部を一方に折り曲げ、中心から2つに折り曲げた板状の金属。使用用途等は不明	近世
第84図 PL.42	100	銭貨 天聖元寶	C16 一部欠損	縦横 2.416 2.439	厚重	0.113 2.1		面の彫は深く、輪、郭は明瞭だが、字は摩滅している。背は彫が見えず、輪、郭が不明瞭。「元」の左上に小さな穴が空く。左上が欠損	北宋銭 中世か
第84図 PL.42	101	銭貨 古寛永	C16 完形	縦横 2.466 2.461	厚重	0.135 2.5		面の彫が深く、字、輪、郭が明瞭。背の郭の上、右が細く上の郭に接する部分に凸部がある	近世
第84図 PL.42	102	銭貨 新寛永	C16 完形	縦横 2.380 2.344	厚重	0.140 2.2		全体に劣化が見られ、やや剥離が見られる。面の字、輪、郭は明瞭。背はやや彫が浅いが、輪、郭は明瞭。輪の一部が欠損している	近世
第84図 PL.42	103	銭貨 新寛永	C16 完形	縦横 2.259 2.263	厚重	0.136 2.1		面の彫は深い、字が摩滅して見えづらい。輪、郭は明瞭。背は彫は浅いが、明瞭	近世
第84図 PL.42	104	銭貨 新寛永	C16 1/2	縦横 1.959 2.138	厚重	0.157 0.8		面の字、輪は明瞭。郭は欠損している部分が多く不明。折れ曲がり壊れ、欠損。背に右上から左下にかけて細かな傷が見られる	近世
第84図 PL.42	105	銭貨 新寛永	52区 完形	縦横 2.483 2.473	厚重	0.133 2.6		全体に劣化が激しい。面、背ともに彫は深く、字、輪、郭が明瞭	近世か
第84図 PL.42	106	銭貨 新寛永	A16 完形	縦横 2.341 2.321	厚重	0.117 2.0		面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭。「寛」の字のウ冠の下に凹みが見られる。背の輪の右上の部分やや狭い	近世
第84図 PL.42	107	銭貨 新寛永11波	A15 1/3	縦横 2.283 1.400	厚重	0.171 1.4		面の字が摩滅し、一部不明瞭。背に一部丸い凹みが見られ、郭の一部が消えている	近世
第84図 PL.42	108	銭貨 文久永寶	A17 完形	縦横 2.708 2.710	厚重	0.135 3.8		面、背ともに彫が深く明瞭。面に上下方向の傷、背は右上から左下にかけての傷が見られる	近世
第84図 PL.42	109	銭貨 文久永寶	B16 1/2	縦横 2.696 2.123	厚重	0.131 1.9		全体に若干劣化が見られる。面、背の字、輪、郭は明瞭	近世
第84図 PL.42	110	銭貨 古寛永	E12 完形	縦横 2.444 2.434	厚重	0.142 1.9		面の彫が深く、字、輪、郭は明瞭。背も輪、郭は明瞭。やや郭と上と左が太い	近世
第84図 PL.42	111	銭貨 古寛永	F15 1/2	縦横 1.433 2.335	厚重	0.117 0.9		面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭	近世
第84図 PL.42	112	銭貨 新寛永	I13 完形	縦横 2.283 2.258	厚重	0.118 1.9		面は彫が深く、字、輪、郭が明瞭。背は彫が浅いが、輪、郭は明瞭。ひびが入っており、輪の一部が欠損	近世
第84図 PL.42	113	銭貨 銭種不明 (鉄銭)	D12 完形か	縦横 2.691 2.675	厚重	0.392 3.8		全体が錆に覆われている。詳細不明	近世か
第84図 PL.42	114	銭貨 五銭錫貨	E14 完形	縦横 1.740 1.747	厚重	0.324 1.9		全体が膨らみ、錆で覆われている。5の文字が見える	近・現代
第84図 PL.42	115	銭貨 五十銭黄銅貨	E12 完形	縦横 1.878 1.874	厚重	0.171 2.1		全体が錆に覆われている。昭和10年代	現代

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第84図 PL.42	115	銭貨 一銭青銅貨	F15 完形	縦 横	2.315 2.322	厚 重	0.216 3.4	発行年不明。全体に錆に覆われ、詳細は不明	近・現代
第84図 PL.42	117	銭貨 一銭アルミ 貨	F15 完形	縦 横	1.623 1.606	厚 重	0.135 0.5	昭和18年発行	現代
第84図 PL.42	118	銭貨 十銭アルミ 貨	G16 完形	縦 横	2.203 2.223	厚 重	0.187 1.5	昭和16年発行。下部がえぐれるように破損する	現代
第84図 PL.42	119	銭貨 五銭アルミ 貨	F11 完形	縦 横	1.905 1.925	厚 重	0.189 1.2	昭和16年発行	現代

遺構外 (61区・62区)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第85図 PL.42	120	土師器 環	U9 口縁部破片	口	(12.8)			細砂:輝石/酸化焰/ 赤褐色	外:口縁部横位撫で、体部斜位撫で調整。内:横位・斜位研 磨を施す	8世紀?
第85図 PL.42	121	土師器 環	S9 口縁部破片	口	(12.2)			細砂:石英・輝石/ 酸化焰/にぶい橙 色	口縁部直立し、体部浅い。外:口縁部横位撫で、体部ヘラ 削り。内:口縁～体部丁寧な横位撫で	8世紀?
第85図 PL.42	122	土師器 環	S9 口縁部破片	口	(12.0)			細砂:輝石/酸化焰/ にぶい赤褐色	口縁部外反し体部はやや身深。外:口縁部横位撫で、体部 横位ヘラ削り。内:口縁～体部横位研磨を施す	8世紀?
第85図 PL.42	123	土師器 甕	Q8 口縁部1/6残存	口	(17.0)			細砂:石英少・輝石 少/酸化焰/にぶい 黄橙色	口縁～頸部緩やかな外反。肩部の張りは弱い。外:口縁部 横位撫で、体部斜位ヘラ撫で。内:口縁部横位撫で、体部 横位ヘラ撫で	6世紀後半
第85図 PL.42	124	須恵器 環	R8 口縁～底部破片	口 底	(12.2) (6.4)	高	2.6	微細砂:輝石/還元 焰/黒褐色	黒色土器。右回転轆轤整形後底部静止ヘラ切り。内外面研 磨を加える	9世紀後 半?
第85図 PL.42	125	須恵器 環	R8 底部のみ残存	底	6.6			粗砂:石英/酸化焰 気味/明赤褐色	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整	9世紀
第85図 PL.42	126	土師器? 甕?	S8 底部破片					粗砂:輝石/良好/ にぶい褐色	丸底。大型器種であろう。内外面撫で調整。外面黒斑あり	
第85図 PL.42	127	鉄製品 不明	T9 一部	長 幅	11.1 0.3	厚 重	0.4 7.3		針金か。断面形状は丸く、弧を描き全体が錆付いている	近世
第85図 PL.42	128	鉄製品 不明	T9 一部	長 幅	6.4 0.3	厚 重	0.4 3.8		短い針金か。127と同一個体とみられる。全体が錆付く	近世
第85図 PL.42	129	銭貨 天禮通寶	Y5 完形	縦 横	2.455 2.446	厚 重	0.151 3.4		面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭。面の輪の下方 に小さな穴があく	中世
第85図 PL.42	130	石製品 砥石	62区 一部残存	長 幅	(3.4) 2.8	厚 重	1.0 15.7	砥沢石	小型品。1面を主に使用し薄くなる。裏面に調整時の櫛歯 状削り痕跡を残す	近世
第85図 PL.42	131	銅製品 煙管(吸口)	トレンチ ほぼ完形	長 幅	4.0 1.2	厚 重	1.2 6.8		つなぎ目は明瞭。内部に有機質が残存。表面に細い紐状の 金属片が付着。小口に細い溝が1周切れ、装飾される	近世
第85図 PL.42	132	銭貨 新寛永11波	I4 完形	縦 横	2.837 2.848	厚 重	0.149 4.4		全体が劣化し、剥離している。面は字、輪、郭が明瞭。背 は彫が浅く、劣化により、一部波が不明瞭	近世
第85図 PL.42	133	銭貨 新寛永11波	I4 完形	縦 横	2.801 2.798	厚 重	0.141 4.6		面の彫は深く、字、輪、郭が明瞭。背は面より彫が浅く、 一部不明瞭	近世

補遺編 遺構出土縄文土器等

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第86図 PL.43	1	縄文土器 深鉢	51区28住 口縁部突起片					粗砂:石英・雲母・ 白色粒/やや軟/に ぶい黄橙色	側面形が耳状の立体的な波状突起。幅狭の平行沈線文が全 面を覆う	中期中葉末
第86図 PL.43	2	縄文土器 深鉢	51区1集石 口縁部破片					細砂:石英/良好/ にぶい褐色	強く外反する口縁部。無文で内外面とも撫で調整	後期前葉
第86図 PL.43	3	縄文土器 深鉢	51区1集石 口縁部破片					細砂:石英/良好/ 褐色	口縁部外反。無文で内面に横位隆線を設ける。内外面撫で 調整	後期前葉
第86図 PL.43	4	縄文土器 深鉢	51区1集石 体部破片					細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい褐色	内湾する体部中位。垂下沈線2条を施す。内外面研磨を加 える	後期前葉
第86図 PL.43	5	縄文土器 深鉢	51区1列石 体部破片					細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄橙 色	バケツ状の器形。体部中位。横位沈線2条で画された縄文 施文部で画す上位は同施文部による弧状以上が配される。 無節L充填施文。内面平滑な撫で調整	後期前葉
第86図 PL.43	6	縄文土器 深鉢	51区1列石 体部破片					細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄橙 色	横位沈線で画された施文部多段構成。斜位区切り文を加 える。地文は細縄文LR横位施文。内面平滑な撫で調整	後期中葉か
第86図 PL.43	7	縄文土器 深鉢	51区1列石 体部破片					粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄橙 色	口縁部下の横位隆線に円形貼付を付し、垂下隆線が派生す る隆線に押圧文を加える。内外面とも撫で。内外面とも 器面摩擦	後期前葉
第86図 PL.43	8	縄文土器 深鉢	51区1列石 体部破片					粗砂:石英・輝石/ 良好/黒褐色	深い刺突文が横位密接に連続するが、やや乱雑な施文。内 面平滑な撫で調整	後期前葉 異系統
第86図 PL.43	9	縄文土器 注口土器	51区1列石 口縁部破片					粗砂:輝石/良好/ 灰褐色	幅狭の口縁部に円文を施す。頸部は外反し体部上半に横位 隆線を設け注口部と繋ぐ。体部は太い沈線を斜位・弧状に 施す。内外面弱い研磨	後期前葉
第86図 PL.43	10	縄文土器 深鉢	51区1列石 口縁部破片					細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄橙 色	円孔を設ける突起を付す。口縁部は面を持ち、刺突文と横 位沈線を施す。内外面とも丁寧な研磨	後期前葉
第86図 PL.43	11	縄文土器 深鉢	51区1列石 口縁部1/5残存	口	(19.0)			細砂:輝石/良好/ にぶい黄橙色	波状緑。円文を配す口縁部。頸部は無文で、体部は横位沈 線と円文以下LRを施す。内外面とも丁寧な研磨	後期前葉

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第86図 PL.43	12	縄文土器 深鉢	51区2列石 体部破片		細砂:石英・輝石/ 良好/褐色	内湾する体部中位。2条隆線による大柄な渦巻文が配される。LRを充填する。側線は撫で。内面平滑な撫で調整	中期後葉
第86図 PL.43	13	縄文土器 深鉢	51区2列石 口縁部破片		粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい橙色	小型の環状突起を付し口縁部隆線が派生する。外面撫で、内面横位削り調整後撫で	後期初頭
第86図 PL.43	14	縄文土器 深鉢	51区2列石 体部破片		粗砂:石英・輝石/ 良好/灰黄褐色	体部上半か。沈線で画された施文部J字状意匠。LR充填施文。内面弱い撫で調整	後期初頭
第86図 PL.43	15	縄文土器 深鉢	51区2列石 口縁部破片		細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄褐色	口唇部内屈。浅い沈線で画された施文部逆U字状意匠か。無節LRを充填施文する。器面摩滅	後期初頭
第86図 PL.43	16	縄文土器 深鉢	51区2列石 体部破片		粗砂:石英/良好/ 灰黄褐色	体部内湾。細隆線による弧状・半渦巻状意匠か。乱雑な施文。内面器壁剥落	後期初頭
第86図 PL.43	17	縄文土器 深鉢	51区2列石 底部破片		粗砂:輝石/良好/ にぶい褐色	直立気味の体部下。底面は平坦で中央部に僅かに網代痕が残る。内面研磨	後期前葉
第86図 PL.43	18	土製品 土偶?	14埋土 胴部破片?		粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい橙色	胴部のみが残存で判然としない。脚部および胴部は中空か。無文で撫で調整で仕上げる	中期後葉か

補遺編 遺構外出土縄文土器等

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第87図 PL.43	1	縄文土器 深鉢	51区S14 口縁部破片		粗砂:石英・繊維/ 良好/灰黄褐色	口縁部に横位隆線を設け円形竹管による縦位短沈線群を重ねる。口唇部及び体部はLRとRLによる羽状縄文構成。内面弱い撫で調整	前期初頭
第87図 PL.43	2	縄文土器 深鉢	51区R14 口縁部破片		粗砂:石英少・繊維/ 良好/にぶい橙色	小波状突起を付す。口縁部下に横位隆線を設け、細かな押圧を加える。隆線両脇に横位原体端部圧痕を見る。LRを施す。内面弱い撫で調整	前期初頭
第87図 PL.43	3	縄文土器 深鉢	51区O15 口縁部破片		粗砂:石英・繊維/ 良好/褐色	波頂部に縦位突起を付し横位・斜位撚糸圧痕文を施す。以下に網目状撚糸文を横位に配す。器厚薄手で内面弱い撫で調整	前期初頭
第87図 PL.43	4	縄文土器 深鉢	51区O15 口縁部破片		粗砂:石英・繊維/ 良好/橙色	波頂部に縦位突起を付し横位・斜位撚糸圧痕文を施す。撚糸は2条一組のLとR。器厚薄手で内面弱い撫で調整	前期初頭
第87図 PL.43	5	縄文土器 深鉢	51区G16 体部破片		粗砂:石英少・繊維/ 良好/橙色	斜位RLを施し、縦位条を描出する。追加整形施文の痕跡を見る。内面平滑な撫で調整	前期初頭
第87図 PL.43	6	縄文土器 深鉢	51区R16 体部破片		粗砂:石英・繊維/ 良好/にぶい橙色	体部下。RL斜位施文により、縦位の条を描出する。内面平滑な撫で調整	前期初頭
第87図 PL.43	7	縄文土器 深鉢	51区S14 体部破片		粗砂:石英・繊維/ 良好/にぶい褐色	体部中位～下半か。縦位RLとLR施文による縦位羽状縄文構成。内面弱い撫で調整	前期初頭
第87図 PL.43	8	縄文土器 深鉢	51区N20 体部破片		粗砂:石英・繊維/ 良好/にぶい橙色	横位LRとRLによる横位羽状状文構成。内面凹凸が顕著で弱い撫で調整を施す	前期初頭
第87図 PL.43	9	縄文土器 深鉢	51区S21 体部破片		細砂:石英・繊維/ 良好/にぶい褐色	体部下。RL斜位施文と縦位LR施文による縦位羽状縄文構成。内面撫で調整	前期初頭
第87図 PL.43	10	縄文土器 深鉢	51区S14 口縁部破片 体部破片		粗砂:石英・繊維/ 良好/にぶい黄褐色	口縁部下に横位隆線を設ける。口縁部は横位、体部は縦位RLとLR施文による羽状縄文構成。内面弱い撫で調整	前期初頭
第87図 PL.43	11	縄文土器 深鉢	51区S14 体部破片		粗砂:石英・繊維/ 良好/にぶい褐色	横位LRとRLによる横位羽状縄文構成。内面平滑な撫で調整を施す	前期初頭
第87図 PL.43	12	縄文土器 深鉢	51区S15 体部破片		粗砂:石英・繊維/ 良好/にぶい黄褐色	体部下。0段多条のLRとRLによる縦位羽状縄文構成。内面弱い撫で調整	前期初頭
第87図 PL.43	13	縄文土器 深鉢	51区S18 体部破片		細砂:石英・繊維/ 良好/褐色	横位LRが覆う。内面横位撫で調整を施す	前期初頭
第87図 PL.43	14	縄文土器 深鉢	51区M17 体部破片		粗砂:石英・繊維少/ 良好/にぶい褐色	器厚薄手。横位RLが覆う。内面平滑な撫で調整	前期初頭
第87図 PL.43	15	縄文土器 深鉢	51区 体部破片		粗砂:石英・繊維/ 良好/褐色	横位LRとRLによる横位羽状縄文構成。内面凹凸が顕著で縦位撫で調整を施す	前期初頭
第87図 PL.43	16	縄文土器 深鉢	51区S14 体部破片		細砂:石英・繊維/ 良好/褐色	横位LRとRLによる横位羽状状文構成。内面凹凸が顕著で弱い横位撫で調整を施す	前期初頭
第87図 PL.44	17	縄文土器 深鉢	51区R16 体部破片		細砂:繊維/良好/ にぶい赤褐色	相向する斜位沈線による細かな斜格子文を施す。内面撫で	前期中葉
第87図 PL.44	18	縄文土器 深鉢	51区Q14 口縁部破片 体部破片		細砂:石英少/やや 軟/明褐色 黒褐色	平行沈線。小波状口縁を呈し、頂部に刻みを付す。口縁部は横位平行沈線に縦位・斜位平行沈線による米字状意匠を重ねる。中にC字状刺突文を横位に施す。体部は横位LRを施す。器面摩滅する	前期後葉
第87図 PL.44	19	縄文土器 深鉢	51区O16 体部破片		細砂:輝石/良好/ にぶい黄褐色	爪形文。内皮使用の平行沈線にC字状の爪形文が加わる。地文は横位RL。内面は丁寧な横位撫で調整	前期後葉
第87図 PL.44	20	縄文土器 深鉢	51区N19 口縁部破片		細砂:石英・輝石/ 良好/褐色	平行沈線。内湾する小波状口縁。口縁部と頸部に横位平行沈線を設け、内湾部に対弧状意匠や斜位平行沈線を配す。地文は横位RL。内面弱い撫で調整	前期後葉
第87図 PL.44	21	縄文土器 深鉢	51区R14 体部破片		細砂:輝石/良好/ 褐色	平行沈線。体部中位か。横位平行沈線群を多段に設け、上半に斜位沈線を施す。地文は横位RL。内面は弱い撫で調整	前期後葉
第87図 PL.44	22	縄文土器 深鉢	51区N23 体部破片		粗砂:石英・輝石/ 良好/褐色	平行沈線文。体部下。横位平行沈線群を設ける。地文は無節R横位施文。内面は平滑な撫で調整。少量の煤付着	前期後葉
第87図 PL.44	23	縄文土器 深鉢	51区P16 底部破片		細砂:石英少/良好/ にぶい褐色	直線的に開く体部下。横位RLが覆う。内面撫で調整	前期後葉

遺物観察表

挿 図 PL.No.	No.	種 類 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第87図 PL.44	24	縄文土器 浅鉢	51区X17 体部破片				細砂:石英・雲母/ 良好/明褐色	爪形文。体部上半か。頸部に横位隆線を付し以下幅狭の平行沈線による小三角形区画意匠を配す。沈線間は刻みを加える。内面弱い撫で調整	前期後葉
第88図 PL.44	25	縄文土器 深鉢	51区B18 口縁部破片				粗砂:褐色粒・輝石/ 良好/にぶい褐色	浮線文。口縁部内湾し、波頂部に小型の貼付文による顔状の表現。直下に浮線による大柄の渦巻文、頸部は横位浮線文を配す。浮線上刻みは単方向。地文は横位R L。口縁部内面は横位削り調整。頸部は撫で調整	前期後葉
第88図 PL.44	26	縄文土器 深鉢	51区S13 口縁部破片				粗砂:石英/良好/ 灰褐色	浮線文。内湾する口縁部に口唇部隆線より派生した小渦巻状突起を付す。浮線上刻みは単方向。地文は横位R L。内面横位削り調整	前期後葉
第88図 PL.44	27	縄文土器 深鉢	51区P15 口縁部破片				粗砂:石英/良好/ にぶい褐色	浮線文。口縁部内湾。波頂部に縦位棒状の背骨の貼付文を配し、口縁部は弧状・渦巻状の浮線文を付す。浮線上は一部矢羽状。地文は横位L R。内面横位削り調整	前期後葉
第88図 PL.44	28	縄文土器 深鉢	51区P15 体部破片				粗砂:輝石/良好/ にぶい黄褐色	浮線文。横位浮線群以下斜位浮線により小区画され、弧状意匠が配される。浮線上刻みは矢羽状。地文は横位L R。内面横位削り調整	前期後葉
第88図 PL.44	29	縄文土器 深鉢	51区N16 口縁部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄褐色	浮線文。内湾する口縁部。近接した2条単位による浮線文で渦巻状意匠を配し、横位浮線文を多段に設ける。浮線上刻みは矢羽状。内面撫で調整	前期後葉
第88図 PL.44	30	縄文土器 深鉢	51区P18 体部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄褐色	浮線文。上端及び下端に浮線文による幅狭の文様帯を配す。横位多段の浮線文を設ける。浮線上刻みは矢羽状。内面弱い研磨を加える	前期後葉
第88図 PL.44	31	縄文土器 深鉢	52区F11 体部破片				細砂:石英少/良好/ にぶい褐色	浮線文。肥厚部を設け、幅狭の文様帯を配す。横位浮線文を多段に設け、浮線上刻みは単方向に施す。地文は横位L R。内面平滑な撫で調整	前期後葉
第88図 PL.44	32	縄文土器 深鉢	52区F11 体部破片				粗砂:褐色粒・石英/ 良好/にぶい褐色	浮線文。体部上半か。やや太い横位浮線を多段に設ける。下位に斜位浮線を見る。浮線上刻みは単方向。地文は横位L R。内面平滑な撫で	前期後葉
第88図 PL.44	33	縄文土器 深鉢	51区P18 体部破片				細砂:輝石/良好/ 灰黄褐色	浮線文。外反する体部中位に幅狭の文様帯を配す。丁寧な貼付による横位浮線文が多段に設けられ、矢羽状の刻みを加える。地文は横位R L。内面平滑な研磨	前期後葉
第88図 PL.44	34	縄文土器 深鉢	52区C14 体部破片				細砂:輝石/良好/ 褐灰色	浮線文。横位浮線群を多段に配す。浮線上刻みは矢羽状。地文は横位L R。硬質原体か。内面平滑な研磨を施す	前期後葉
第88図 PL.44	35	縄文土器 深鉢	51区C14 体部破片				粗砂:輝石/良好/ にぶい褐色	浮線文。2条単位による浮線文を横位多段に設ける。浮線上刻みは矢羽状。地文は横位R L。内面は弱い研磨を加える	前期後葉
第88図 PL.44	36	縄文土器 深鉢	52区D12 体部破片				細砂:輝石少/良好/ にぶい黄褐色	浮線文。上位に浮線による幅狭の文様帯を配し以下矢羽状刻みを加えた横位浮線文を多段に設ける。地文は横位L R。内面は平滑な撫で調整	前期後葉
第88図 PL.44	37	縄文土器 深鉢	51区S13 体部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/褐灰色	浮線文。体部上半か。2条単位による浮線文を横位多段に設ける。地文は無節L横位施文。内面横位撫で調整	前期後葉
第88図 PL.44	38	縄文土器 深鉢	52区C13 体部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい褐色	浮線文。2条単位による浮線文を横位多段に設ける。浮線上刻みは矢羽状。地文は横位R L。内面は平滑な撫で調整	前期後葉
第88図 PL.44	39	縄文土器 深鉢	52区D12・13 体部破片				細砂:輝石/良好/ にぶい褐色	浮線文。薄手の器厚を呈す。横位浮線群を多段に設ける。浮線上刻みは矢羽状。地文は横位R L。内面は弱い研磨を施す	前期後葉
第89図 PL.44	40	縄文土器 深鉢	52区B19 体部破片				粗砂:褐色粒/良好/ にぶい黄褐色	浮線文。体部中位が僅かに肥厚する。横位浮線を多段に設ける。浮線上刻みは単方向。地文は横位L R。内面平滑な撫で	前期後葉
第89図 PL.44	41	縄文土器 深鉢	52区A13 体部破片				粗砂:輝石/良好/ にぶい黄褐色	浮線文。横位浮線群以下に斜位、弧状浮線文を配す。浮線上刻みは矢羽状。地文は横位R L。内面横位撫で調整	前期後葉
第89図 PL.44	42	縄文土器 深鉢	51区C14 体部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄褐色	浮線文。体部上半か。2・3条単位による横位浮線文を多段に設ける。浮線上の刻みは矢羽状。内面は平滑な撫で調整	前期後葉
第89図 PL.45	43	縄文土器 深鉢	51区P17 体部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄褐色	浮線文。3条単位による横位浮線文を多段に設ける。浮線上刻みは矢羽状。地文は横位R L。内面は撫で調整	前期後葉
第89図 PL.45	44	縄文土器 深鉢	51区L20 体部破片				細砂:片岩粒・石英/ 良好/褐色	浮線文。丁寧に貼付された横位浮線文を多段に配し、矢羽状刻みを加える。地文は横位L R。内面は丁寧な研磨	前期後葉
第89図 PL.45	45	縄文土器 深鉢	51区P18 頸部破片				粗砂:石英/良好/ にぶい褐色	浮線文。口縁部屈曲。異種粘土による横位浮線文を多段に設ける。浮線上刻みは粗い矢羽状。地文は横位L R。内面横位削り調整	前期後葉
第89図 PL.45	46	縄文土器 深鉢	51区L16 体部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい褐色	浮線文。2・3条単位による横位浮線文を設ける。浮線上は矢羽状刻みを重ねる。地文は横位R L。内面は弱い横位研磨	前期後葉
第89図 PL.45	47	縄文土器 深鉢	52区C14 体部破片				粗砂:石英/良好/ 褐色	浮線文。2条単位による横位浮線文を多段に設ける。浮線は異種粘土を使用か。浮線上刻みは矢羽状。地文は横位R L。内面は平滑な撫で調整	前期後葉
第89図 PL.45	48	縄文土器 深鉢	52区C14 体部破片				粗砂:石英/良好/ 褐色	浮線文。2条単位による横位浮線文を多段に設ける。丁寧に貼付。浮線上刻みは矢羽状。地文は横位R L。内面は平滑な撫で調整	前期後葉
第89図 PL.45	49	縄文土器 深鉢	51区P15 体部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄褐色	浮線文。横位浮線と斜位浮線が設けられる。浮線上の刻みは矢羽状。地文は横位R Lか。内面横位研磨	前期後葉
第89図 PL.45	50	縄文土器 深鉢	52区O12 体部破片				細砂:石英/良好/ にぶい褐色	浮線文。横位浮線文を設け以下2条単位による浮線による渦巻状意匠を配す。浮線上刻みは矢羽状。内面横位削り調整	前期後葉

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第89図 PL.45	51	縄文土器 深鉢	52区D11 体部破片				細砂:輝石/良好/ にぶい橙色	浮線文。数条単位の斜位浮線による小区画内に弧状意匠を配す。浮線上刻みは矢羽状。地文は横位R L。内面横位削り調整	前期後葉
第89図 PL.45	52	縄文土器 深鉢	52区B12 口縁部破片				粗砂:石英・輝石/ やや軟/橙色	浮線文。靴先状の波状突起。口唇部外反し頂部下に円形貼付文を付す。2条単位の浮線により渦巻文や弧状意匠を描く。浮線上刻みは矢羽状。内面撫で調整。器面摩滅	前期後葉
第89図 PL.45	53	縄文土器 深鉢	52区B12 体部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/橙色	浮線文。外反する体部中位。横位浮線文を多段に設け幅狭の文様帯を配す。浮線上刻みは矢羽状。内面は平滑な撫で調整	前期後葉
第89図 PL.45	54	縄文土器 深鉢	52区B12 体部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/橙色	No53と同一個体か	前期後葉
第90図 PL.45	55	縄文土器 深鉢	52区B12 体部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/橙色	No53と同一個体か。地文横位R Lを看取できる	前期後葉
第90図 PL.45	56	縄文土器 深鉢	52区C14 体部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/橙色	浮線文。3条単位の横位浮線文を多段に設け、以下弧状意匠を配す。浮線上刻みは矢羽状。地文は横位R L。内面は横位撫で調整を施す	前期後葉
第90図 PL.45	57	縄文土器 深鉢	51区X17 底部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/橙色	浮線文。内傾気味に立ち上がる体部下半。3条単位の横位浮線文を多段に設ける。浮線上刻みは矢羽状。地文は横位R L。内面は横位撫で調整	前期後葉
第90図 PL.45	58	縄文土器 深鉢	51区M16 底部破片				細砂:石英/良好/ にぶい橙色	浮線文。直線的に開く体部下半。浮線上刻みは矢羽状。内面弱い撫で調整	前期後葉
第90図 PL.45	59	縄文土器 深鉢	51区X17 底部破片				粗砂:石英・輝石/ 良好/橙色	浮線文。直立気味に開く体部下半。3条の横位浮線文を下端に設ける。浮線上刻みは矢羽状。地文は横位R L。内面は横位撫で調整	前期後葉
第90図 PL.45	60	縄文土器 深鉢	51区R14 口縁部破片 1点 頸部破片 1点				粗砂:石英・片岩/ 良好/にぶい赤褐色	浮線文。強く内湾する口縁部。小波状縁で波頂部に円形貼付文を付す。口縁部と頸部に横位浮線、口頸部は縦位浮線を設ける。浮線上刻みは矢羽状で円形刺突文も加わる。内面弱い撫で調整	前期後葉
第90図 PL.45	61	縄文土器 深鉢	51区P15 51区Q14 口縁部破片 2点				粗砂:輝石/良好/ にぶい橙色・にぶい褐色	浮線文。小型品か。小型の橋状把手を付し直下に渦巻文を配す。浮線上は矢羽状の刻みと刺突文を重ねる。内面撫で調整	前期後葉
第90図 PL.45	62	縄文土器 深鉢	51区L16 口縁部破片				粗砂:石英/良好/ 橙色	円形貼付による獣面意匠。波状縁頂部は外反し口縁部は内湾する。横位R Lを施す。内面横位撫で調整	前期後葉
第90図 PL.45	63	縄文土器 深鉢	51区S13 口縁部破片				細砂:石英少/良好/ 灰褐色	口唇部角頭状で小波状突起を付す。体部は横位L RとR Lによる羽状縄文構成。内面平滑な研磨を施す	前期末葉か
第90図 PL.45	64	縄文土器 深鉢	51区P18 体部破片 2点				粗砂:石英・片岩/ 良好/にぶい赤褐色	内皮平行沈線を描線・区画線とする。連続爪形文も加え、横位沈線群以下小三角区画文を配す。小陰刻文も施す	中期初頭
第90図 PL.45	65	縄文土器 深鉢	51区U17 口縁部破片				細砂:石英/良好/ 明赤褐色	波状縁。口唇部に刻みを施す。頸部横位隆線に小型の橋状把手を付す。口縁部体部とも弧状沈線群と円文や渦巻文を配す。内面口唇部にも施文。内面研磨、煤付着	中期中葉
第90図 PL.45	66	縄文土器 深鉢	51区K18 口縁部破片				粗砂:石英・片岩/ 良好/にぶい赤褐色	波状縁。波頂部下に円孔を設け。横位隆線で口縁部を画す。平行沈線による区画文構成で爪形文や波状沈線文を施す。内面研磨	中期中葉
第90図 PL.46	67	縄文土器 深鉢	51区P16 口縁部破片				細砂:石英・輝石/ 良好/褐灰色	2条隆線による半渦巻状意匠を配した突起を付し、横位隆線と縦位隆線が派生する。地文は縦位L R。内面平滑な研磨	中期中葉末 異系統
第90図 PL.46	68	縄文土器 深鉢	51区U15 体部1/5残存				粗砂:石英・輝石/ 良好/明赤褐色	体部上半に横位沈線2条を設け以下垂下沈線と波状沈線の懸垂文構成。斜位R Lを地文とする。内面撫で。内外面に煤付着	中期後葉
第90図 PL.46	69	縄文土器 深鉢	51区Y13 体部1/4残存				細砂:輝石/良好/ にぶい赤褐色	No70と同一個体。頸部無文部の垂下隆線が横位隆線に渦巻状小突起で接続する	中期後葉
第90図 PL.46	70	縄文土器 深鉢	51区Y13 体部1/4残存				細砂:輝石/良好/ 明赤褐色	横位隆線以下2条の垂下隆線による懸垂文構成。区画内を内皮沈線で細区画し斜位短沈線を充填する。内面撫で調整	中期後葉
第90図 PL.46	71	縄文土器 深鉢	51区N16 体部1/6残存				粗砂:輝石/良好/ にぶい赤褐色	体部上半に斜位沈線と斜位隆線による斜格子文と横位2条隆線を設け、以下2・3条隆線による弧状意匠が配される。空白部は斜位沈線群を充填する	中期後葉
第91図 PL.46	72	縄文土器 深鉢	51区Y22 体部破片				細砂・石英・輝石/ 良好/にぶい橙色	低位隆帯による懸垂文構成か。櫛歯状工具による刺突文を縦位羽状に施す。内面弱い撫で調整。煤付着	中期後葉
第91図 PL.46	73	縄文土器 鉢	51区U18 口縁部破片				細砂:輝石/良好/ 暗赤褐色	無文口縁部下に隆線による小型の横位楕円状意匠を連続する。横位の小孔を穿つ。位隆線には体部は太い沈線文を施す。内外面丁寧な研磨を施し赤彩を加える	中期後葉
第91図 PL.46	74	縄文土器 器台	51区W14 底部破片	底	(10.0)		粗砂:輝石/良好/ 橙色	接地面極めて平坦。脚部中位に円孔を設ける。横位R Lを施す。内面横位撫で	中期後葉
第91図 PL.46	75	縄文土器 浅鉢	51区Y13 口縁～体部1/5 残存	口	(43.0)		粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい橙色	口縁～体部一体化して緩やかに内湾する。無文で内外面研磨、赤彩痕残る	中期後葉
第91図 PL.46	76	縄文土器 浅鉢	51区R15 口縁～体部1/6 残存	口	(44.0)		細砂:石英・雲母/ 良好/にぶい赤褐色	口縁部屈曲気味に内湾する。無文で口縁部内外面及び体部内面研磨。赤彩痕残る	中期後葉
第91図 PL.46	77	土製品 土偶	51区P24 脚部破片				粗砂:雲母/良好/ 暗褐色	右足部か。接地面は平坦で、周縁を縦位・横位沈線群が施される。中実だが中位に小孔が貫通する	中期か
第91図 PL.46	78	縄文土器 深鉢	51区M22 口縁部1/6残存				細砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄褐色	口縁部隆線は太く、強い押圧を加え鎖状となす。外面撫で、内面横位・斜位撫で調整。器厚薄手	後期初頭

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第91図 PL.46	79	縄文土器 深鉢	51区W22 体部破片				粗砂:石英大・輝石/ 良好/にぶい褐色	内湾する体部下半。2条の深い沈線による大柄な渦巻文が配される。内面撫で調整	後期初頭
第92図 PL.46	80	縄文土器 浅鉢	51区N18 口縁部突起片				粗砂:石英・輝石/ 良好/にぶい黄橙色	中位に円孔を設けた双環状突起。上端に渦巻文。円孔両脇に弧状短沈線を施す。内面も同様の意匠。内外面とも弱い研磨	後期前葉
第92図 PL.46	81	縄文土器 深鉢	51区R20 口縁部1/5残存	口	(23.0)		細砂:石英/良好/ にぶい赤褐色	口縁部に小型で低位の橋状把手を付し、頸部に刺突を加えた横位隆線を設ける。体部は爪形状の横位刻み目を連続する。内面撫で調整、煤を付着する	後期前葉 異系統
第92図 PL.46	82	縄文土器 深鉢	51区G20 体部破片				粗砂:石英/良好/ 黒褐色	強く内湾する体部。強い爪形状刻みが器面を覆う。横位密接施文。内面弱い研磨	後期前葉 異系統
第92図 PL.46	83	縄文土器 深鉢	51区R21 口縁部1/5残存	口	(28.6)		粗砂:石英・雲母/ 良好/褐灰色	波状縁。頂部は双波状を呈し円孔を設け沈線と刺突文が縁取る。内面も同意匠。頸部は縦位隆線が垂下する。内外面研磨	後期前葉
第92図 PL.46	84	縄文土器 土偶片	51区R24 腕部破片?				細砂:石英・輝石/ 良好/灰黄褐色	中空で薄手に仕上げられる。おそらく右腕端部と思われる。端部に沈線による渦巻文を配し、周縁は石神様の文様を施す。無文部は平滑な研磨	後期中葉か